

日本美術年鑑

昭和十六年版

美術研究所

序

吾が國は東亞共榮圈の確立と世界新秩序建設の大理想のもとに支那事變を遂行すること茲に六年、更にこの主旨を徹底せしむる爲に大東亞戰爭の完勝を期して國家の總力を擧げて戦ひ、而も、武力戦と同時に文化建設にも邁進しつつある。此の際吾が文化、美術の昂揚、發展の爲の努力を益々痛感するのである。

美術研究所は昭和十一年以來美術諸般の調査研究の一部として日本美術年鑑を編纂發行し來つたが、茲にその第六冊として昭和十六年版を刊行する。本年鑑は昭和十五年に於ける美術界全般の活動を如實に記録することを期した。昭和十五年は恰も皇紀二千六百年に該當し、國家を擧げて慶祝し奉り、美術界に於ても諸種の慶祝事業をはじめ、諸行事、展覽會等例年に増して數多く行はれ、記すべき内容又豊富であつた。依て、戦時止むを得ず紙面を縮小さざるを得なかつたが、能ふ限り洩れなく掲ぐることに努めた。

本年鑑の編纂に當り、原稿、寫眞等を寄せて懇篤なる協力を與へられた文部省宗教局保存課をはじめ、諸資料、寫眞等を與へられた同省専門學務局學藝課その他の諸官廳、帝室博物館、諸博物館及び美術館、學校、研究諸機關の公私諸施設、團體、雜誌社等或は個人として普く美術家學者諸家の厚意ある援助に對し深甚なる謝意を表する次第である。

尙本年鑑の編纂執筆に就いては、主として所員隈元謙次郎及び助手倉田平吉をしてこれに當らしめ、現代建築の部分に就ては囑託山田智三郎にその分擔を委囑した。

最後に本書中の不備、誤謬等に就ては江湖の示教を切望し、次年度以下に一層の改善を期する次第である。

昭和十七年三月

美術研究所長 矢代幸雄

凡例

一、本年鑑はその内容を「本欄」「挿圖」及び「附録」の三部に大別する。本欄は我が國美術界の全般につき、昭和十五年度即ち同年一月から十二月に至る一年間に現はれた主なる出来事、製作又は發表された注意すべき作品、發表された文獻等を記録し、挿圖は右に添ふ作品の寫眞を主として掲げ、附録は便覽として例年掲載するもののうち美術家團體一覽、定期刊行物一覽、美術家及美術關係者名簿のほかは本年度はこれを省略して、たゞ行政、教育、觀覽等に關する官公施設の重要なもののみを便宜上輯録した。記事中「本年」とあるは昭和十五年を指すもの、月日のみを擧げて年を記さぬ場合亦同様である。

一、美術として本年鑑が取扱ふ範圍は、従來一般に行はれる狹義の解釋に従ひ、繪畫、彫刻、工藝及び建築に限ることとした。繪畫のうちで「日本畫」及び「洋畫」の區別は、嚴密には困難の場合もあり、又その稱呼も字義として好ましいものとは言へないが、便宜のため姑く一般の慣習に倣ふこととした。建築は用途に従つて種類も多く、殊に近年の傾向に在つては之を美術として取扱ふことに問題も多いが、茲では吾人の見地から注意をひくものの範圍に止めた。

一、人名を記す場合には敬稱は一切之を省いた。

一、本欄、現代美術の中美術展覽會の項には、明治、大正以後活動した作家の遺作展觀、回顧的展覽會、及び外國美術展覽會等に關しても、便宜上此に含めて取扱ふこ

ととした。

一、同、展覽會以外の作品については、その範圍を擴げるならば際限なきため、茲には多少とも公共的性質を有するもの、或は記念碑的意義を有するものに限ることとし、主なる作品少數のみを選んだ。

一、同、美術教育の欄に於ては、之に關する彙報的な記事若干を輯録するに止めた。普通教育における圖畫教育は、美術とは關係が深く、屢々美術教育とも呼ばれて混同されてゐるが、本年鑑では特殊な場合の外は之を取扱はず、専門の美術教育の範圍に止めることとした。

一、挿圖として掲載した作品の寫眞は、年度内に製作、若くは新作として發表されたものに限つた。その選擇は、大體各分野における製作活動を代表せしむるを旨とし、必しも傑作のみを選出した譯ではない。古美術に關しては、年度内における修理、新發見の資料等に限る、その注意すべきものを輯めた。

一、附録は、昭和十五年十二月末日現在の記録たることを原則とするが、使用の便を圖り、その後の消息をも例外的に記載、若くは之によつて訂正した部分もある。

一、本欄中、美術文獻目錄、並に附録中、美術家及美術關係者名簿については、夫々その項の初に凡例を記した。

目次

序 一
凡例 二
目次 三
挿圖目次 五
本欄 五

昭和十五年美術界概観 八
美術展覽會(月日順) 一四

一月 一四
一水會大阪展 新制作派大阪展 島崎雞二 高岡徳太郎新作展 實在工藝同人展 圖案展 示會 十河巖從軍展 春藝展 白日會展 關西女流畫家展 鬼頭彌二郎個展 山本鼎個展 青杉會展 熊岡美彥個展 春陽會日本畫展 等

二月 一五
朱弦會展 朱玄會展 董寶展 安中洞展 眞美會展 高橋惟一 瀧佛展 三輪集勢個展 花岡萬舟個展 春芳堂展 尚美堂展 三味會展 岡田三郎助遺作展 光風會展 青甲社展 吉田博 佐々貴義雄從軍展 日本彫塑家聯盟合同展 林鶴雄個展 菊池梨月藝展 高橋貞一郎瀧佛展 白御會展 大野隆徳從軍展 コンラッド・メイリ個展 旺玄社展 東丘社展 緑々會展 等

三月 二〇
牧野虎雄日本畫展 日本陶藝研究會展 大阪美術展 岡田三郎助遺作大阪展 新美術家協會展 明美會展 塊入社展 白御會京都展 九室會展 三春會日本畫展 梶宗樹從軍展 橋本關雪スケッチ展 太平洋展 單陶會展 上社會展 獨立展 熊谷守一個展 池田逸都上村松篁支那スケッチ展 西人社展 日本彫刻家協會武井直也遺作展 形象工藝美術會展 關外社展 綜合會展 京都工藝院展 角浩瀧歐展 春虹會展 向井潤吉 高井貞二 支那スケッチ展 童林社展 名古屋工藝展 西崎雲支那風物展 長谷川昇個展 高岡惣七個展 新挿繪展 獨立小品展 兒玉畫藝展 全關西洋畫展 郷倉千毅個展 西村五雲遺作展 連袖會展 關外社東京展 東光會展 新興美術院展 水田春水個展 春の青龍社展 鍛金協會展 鬼面社展 青木繁遺作展 高島屋東西大家展 シンドニー出品展示會 函畫會展 讀畫會展 九品處展 等

四月 二九
目次

五月 三六
細音博展示會 昭和工藝美術展 横山大觀獻畫展 朱葉會展 日本木彫會展 阿以田治信個展 獨立京都展 日本畫院展 川島理一郎個展 春陽會展 三宅克己水彩展 二科春季展 美術文化協會展 柳瀬正夢北支風物展 庫田發個展 松方萬集畫展 須田國太郎個展 日本美術協會展 小山敬三個展 構造社展 小杉放庵個展 造形美術會資料展 日本水彩畫會展 東郷青兒個展 春陽會名古屋展 院友展 第一美術協會展 春の青龍社大阪展 大毎日本畫展 武井直也遺作展 佐藤敬個展 直土會展 昭華會展 六潮會展 山村耕花個展 佐々木一郎瀧歐展 東海美術展 丸木位里個展 等

六月 四一
加治屋隆二個展 J.A.N.展 宮永東山個展 東丘社展 大須賀 黒田彫刻展 鮮展 現代美術社展 兵庫縣美術聯盟展 和田英作個展 珊々會展 南畫聯盟展 造型版畫協會展 綠若會展 經緯工藝展 松平康南瀧歐展 八木岡春山個展 武藤夜舟大陸風物畫展 松坂屋日本畫展 河合志宏佛書展 岩田藤七碑子展 美術在來社展 アンドレ・メル展 昭和工藝協會展 大阪工藝振興展 華敵會展 清流會展 三越日本畫小品展 自由美術家關西展 大衆向工藝展 河井寛次郎個展 吉田白嶺個展 清光會展 青丘會展 四元莊展 山下新太郎個展 貿易局工藝品輸出振興展 瀧野川彫影展 小池俊雄戰地スケッチ展 南湖社展 催青會展 原精一陣中作品展 東北民藝展 多聞堂展 新制作派春季展 春取正彦個展 蒼穹會展 上水井正瀧歐展 島野重之個展 兵庫縣美術協會展 中村大三郎畫展 等

七月 四六
燦木社展 青杉會展 高島屋新作展 世界ボスター展 歷程展 聖戰美術京城展 山南會展 尚美堂展 大阪女流畫家展 クラタム線展 養正館繪展 山岳畫協會展 松岡映丘遺作展 九元社展 三春會展 榮田是真遺作展 田谷吐師野戰展 パステル畫會展 窪田榮個展 巴會展 手塚一夫遺作展 工藝指導所展 石河光哉支那行脚展 駁山南風個展 等

目次

目次

八 月 四八
入江波光外二人展 | 菅櫛彦個展 | 古城江製個展 | 等

八 月 四八
大倉集古館現代畫陳列 | 池田實人南支風景展 | 安宅義則北支風景展 | 二六〇〇年會展 | 山南會東京展 | 警家美術展 | 牧俊高遺作展 | 倉垣辰夫軍馬展 | 青龍社展 | 二科展 | 等

九 月 五三
第三部會展 | 新制作派展 | 池田遙都、小野竹喬新作展 | 新派漫派展 | 石川縣美術展 | 院展 | 瀨野覺藏遺作展 | 塚本茂個展 | 太田天橋從軍展 | 朗朗展 | 東京みつる會展 | 山岸主計興亞展 | 白日莊展 | 大輪展 | 青龍社名古屋展 | 海軍從軍展 | 高野三三男滯歐展 | 乾坤社展 | 影管奉公會展 | 院展名古屋展 | 等

十 月 五七
松本俊介個展 | 貿易局輸出圖案展 | 新燈社展 | 玉村方久斗個展 | 旺社展 | 奉祝展(前期) | 木島櫻谷遺作展 | 人形藝術院展 | 木下五郎從軍展 | 獨立秋季展 | 荒井龍男個展 | 日本美術協會展 | 國畫會神戶展 | 新制作派大阪展 | 田中寅三個展 | 青龍社大阪展 | 二科名古屋展 | 服部亮英遺作展 | 美術創作秋季展 | 太田耕士大陸風物展 | 竹谷富士雄個展 | 松島順南支展 | 全日本漫畫展 | 劉生遺作日本畫展 | 竹久夢二遺作展 | 棟方志功日本畫展 | 河井寬次郎個展 | 柏舟社展 | 磯野雲山遺作展 | 京都市圖案展 | 河合志宏佛畫展 | 荒井寬方佛畫展 | 森村宜稻遺作展 | 井上良齋個展 | 牧野虎雄個展 | 二科大阪展(小出裕重遺作展) | 新世紀展 | 挿繪俱樂部展 | 中村真個展 | 中村大三郎染織畫展 | 等

十一 月 七一
雷林會展 | 繪繪展 | 琉球工藝展 | 大河内信秀滯歐展 | 日本美術協會展 | 奉祝展京都陳列(前期) | 奉祝展(後期) | 兵庫縣美術家聯盟展 | 全國商業美術展 | 近藤浩一路個展 | パステル作家展 | 津田青楓個展 | 井手則雄個展 | 琉球風物展 | 澤田宗山個展 | 石井拍亭水彩展 | 犀彩會展 | 山下新太郎個展 | 漆繪協會展 | 太田鸞雨個展 | 大阪新美術家同盟展 | 中村岳陵個展 | 研究會展 | 奥瀬英三個展 | 真野紀太郎個展 | 鬼頭鸞二郎個展 | コンラッド・メイリ個展 | 物故者油繪回顧展 | 加藤支頭夫滯佛展 | 築織總藝術協會展 | 新版畫會展 | 名古屋市綜合展 | 正統木彫家協會展 | 東京會展 | 新興美術協會展 | 創造美術協會展 | 七絃會展 | 福田惠一個展 | 碓伊之助個展 | 挿繪文化展 | 三宅、石川水彩展 | 日本入形社展 | 三角泰遺作展 | 美術文化秋季展 | 川端龍子個展 | 福岡縣美術展 | 名取明徳個展 | 橋本關雪個展 | サンチラン個展 | 大潮會展 | 現代工藝展 | 一水會展 | 美術新協展 | 等

十二 月 七七
佐伯米子個展 | 草光信成個展 | 水彩聯盟展 | 鑄金會展 | 大阪市奉祝展 | 世紀美術展 | 彫金會展 | 關川富士郎個展 | 鈴木信太郎個展 | 池上秀敏個展 | 奉祝展京都陳列(後期) | 旭谷左右遺作展 | 益田玉城個展 | 支那畫家展 | 荻青社展 | 兒島善三郎個展 | 岡田謙三個展 | 古家新進支那生展 | 報道美術協會展 | 新自然派展 | 青甲社展 | 園外社展 | 修禪軍人展 | 黒門會展 | 笠原翠個展 | 日本エツチング協會展 | 奥村厚一個展 | 瀧田庄司個展 | 和光會展 | 新橋造社展 | 石川磯治個展 | 水谷清個展 | 松本正子滯歐展 | 純粹圖案家展 | 新古典派展 | 日本版畫協會展 | 佐藤功茂滯歐展 | 鹿子木孟郎南京人城國展 | 泉々洞展 | 漆實雄滿鮮展 | 南薰造個展 | 經緯工藝展 | 等

造個展 | 經緯工藝展 | 等

展覽會以外の作品 八一
日本畫 | 洋畫 | 彫刻 | 工藝 | 挿繪

美術界彙報(月日順) 八四

美術教育 九四

美術講演・講義 九六

講演 | 各大學美學美術史講座 九八

古美術展覽會・展觀(月日順) 一〇一

一月 一〇一
名作茶道具展 | 等

二月 一〇一
帝國圖書館奉祝展 | オランダ展 | 等

三月 一〇一
四天王寺展 | 二六百年史展 | 東美校春季展觀 | 等

四月 一〇一
徳川美術館記念展 | 醍醐寺靈寶館春季展 | 園城寺名寶展 | 東寺名寶展 | 平家納經特別陳列 | 等

五月 一〇三
日本文化史展 | 池長美術館開館記念展 | 徳川美術館春季展 | 考古學會展觀 | 高野山特別展 | 史學會展觀 | 白鶴美術館記念陳列 | 玉井大閣堂日本古美術展 | 等

七月 一〇五
美術懇話會總會 | 等

九月 一〇五
古蹟名陶展 | 渡邊華山記念展 | 等

十月 一〇五
大谷尊由遺品及南本願寺所藏展 | 日本文化と京都展 | 第五回名寶展 | 水樂陶器展觀 | 日本近世名畫展 | 神道美術展 | 等

十一月 一〇八

白鶴美術館秋季展—詩繪特別陳列—正倉院御物陳列—陽明文庫所藏春日繪記原本陳列—支那歷代名筆展—東美秋季陳列—古瀬戸展—等

大藏會展覧—等

十二月……………一一〇

古美術關係彙報(月日順)……………一一一

博物館・美術館新收品……………一一三

古美術保存……………一一五

保存關係彙報……………一一五

昭和十五年度國寶指定 附同所在變更 同所有者變更……………一一六

同 國寶修理補助金交付額……………一二五

同 國寶建造物維持修理實施狀況……………一二六

同 重要美術品認定 附同資格消滅……………一三〇

同 朝鮮寶物維持修理實施狀況……………一四一

美術市場……………一四三

東京、名古屋、京都、大阪各美術俱樂部賣立……………一四五

昭和十五年度美術文獻目錄……………一四五

凡例・目次……………一四五

現代美術關係文獻……………一四七

定期刊行物……………一四七

單行圖書……………一五九

古美術關係文獻……………一六二

定期刊行物……………一六二

單行圖書……………一七四

日本畫……………一

洋畫……………二四

版畫・その他……………四八

彫刻……………五〇

目次

工 藝……………六一

建 築……………六七

古美術資料……………七一

物故作家及美術關係者……………七二

附 錄

國寶保存會—重要美術品等調査委員會—帝室技藝員—帝國藝術院—文部省美術展覽會—紀元二千六百年奉祝美術展覽會—貿易局工藝品輸出振興展覽會—貿易局輸出工藝圖案展覽會—美術研究所—東京美術學校—東京高等工藝學校—京都高等工藝學校—京都市立繪畫專門學校—京都市立美術工藝學校—工藝指導所—陶磁器試驗所—附瀬戸試驗場—帝室博物館—恩賜京都博物館—大禮記念京都美術館—大阪市立美術館—奈良帝室博物館—朝鮮總督府博物館—李王家美術館……………一

美術家團體一覽(五十音順)—定期刊行物一覽……………一八

美術家及美術關係者名簿(五十音順)……………五六

挿圖目次

日 本 畫

大毎東日日本畫展(二九—三七)……………五

珊々會展(三八—四一)……………七

一 八木岡春山個展(四二)……………八

一 清光會展(四三、四四)……………八

一 古城江觀個展(四五)……………八

一 山南會展(四六)……………八

二 青龍社展(四七—五七)……………九

三 院展(五八—七一)……………一

三 紐育萬博展示會(二五—二七)……………一

三 讀畫會展(一四)……………一

四 橫山大觀個展(一八、一九)……………一四

四 日本畫院展(二〇—二二)……………一四

四 奉祝展(七六—一一五)……………一五

四 荒井寛方個展(一一六)……………二二

五 六潮會展(二三、二四)……………二二

五 新美術人協會展(二五—二八)……………二二

五 津田青楓個展(二七)……………二二

七絃會展(一一八—一二二)……………二二
 川端龍子個展(一二二)……………二三
 展覽會以外の作品(一二三—一二四)……………二三

洋 畫

山本鼎個展(二)……………二四
 光風會展(二、三)……………二四
 旺玄社展(四)……………二四
 新美術家協會展(五—七)……………二四
 太平洋畫會展(八—一〇)……………二五
 獨立展(一一—二三)……………二五
 熊谷守一個展(二四)……………二八
 東光會展(二五、二六)……………二八
 長谷川昇個展(二七)……………二八
 國畫會展(二八—三四)……………二八
 春陽會展(三五—四九)……………二九
 美術文化展(五〇、五一)……………三二
 小林徳三郎個展(五二)……………三二
 日本水彩畫會展(五三)……………三二
 自由美術家展(五四—五六)……………三三
 海洋美術展(五七)……………三三
 綠巷會展(五八)……………三三
 清光會展(五九—六一)……………三三
 新制作派展(六二—六九)……………三四
 二科會展(七〇—八五)……………三五
 高野三三男個展(八六)……………三八
 奉祝展(八七—一三〇)……………三八
 霜林會展(一三一—一三三)……………四六
 一水會展(一三四—一四〇)……………四六
 新古典派展(一四一)……………四七

展覽會以外の作品(一四二)……………四七

版 畫 其 他

國畫會展(一—四)……………四八
 春陽會展(五)……………四八
 自由美術家展(六)……………四八
 奉祝展(七)……………四九
 報道美術協會展(八)……………四九
 日本版畫協會展(九—一二)……………四九

彫 刻

塊人社展(一一—三)……………五〇
 日本彫刻家協會展(四—九)……………五〇
 日本木彫會展(一〇、一一)……………五一
 構造社展(一二—一六)……………五一
 自由美術家展(一七、一八)……………五二
 東邦彫塑院(一九—二二)……………五三
 第三部會展(二二—二七)……………五三
 新制作派展(二八—三二)……………五四
 二科會展(三三—三七)……………五五
 院展(三八—四五)……………五六
 大阪市奉祝展(四六)……………五七
 奉祝展(四七—六一)……………五七
 展覽會以外の作品(六二、六三)……………六〇

工 藝

清水正太郎個展(一)……………六一
 奉祝展(二—三六)……………六一

建 築

滿蒙开拓幹部訓練所(一一—三)……………六七

新橋驛新高架線(四)……………六七
 樞原神宮驛綜合停車場(五、六)……………六七
 畝傍御陵前停車場(七)……………六七
 大阪驛大廣間(八)……………六八
 K氏邸内茶室(九、一〇)……………六八
 山口邸(一一—一三)……………六八
 奉祝式典場(一四、一五)……………六九
 忠靈塔懸賞設計(一六—二〇)……………六九
 四天王寺五重塔(二二)……………七〇
 新田丸内部(二二、二三)……………七〇

古 美 術 資 料

修理竣工國寶建造物……………七一
 彙報關係資料……………七一

物 故 美 術 家 及 美 術 關 係 者

(一一—一九)……………七二
 久保田鼎、邨田丹陵、武井直也、田中頼
 璋、正木直彦、明珍恆男、岡不崩、坂井
 犀水、小村雪岱

昭和十五年度美術界概観

總記

日本のみならず世界の歴史的轉換期に當り、吾が國は光輝ある皇紀二千六百年を迎へた。支那事變の發展と共に、東亞共榮圈建設の理想は支那大陸に逐次實現し、七月には日支國交調整の條約が開始され、十一月には日華基本條約が締結されるに至つた。而も曩に勃發した第二次歐洲大戰は、本年に入つて急速に進展し獨逸の和蘭、白耳義、佛蘭西の制覇となり、伊太利亞參戰して歐洲大陸又戰雲に閉さるるに至つた。かくて、吾が國は國際情勢の變化と共に盟邦獨伊との提携を益々堅固にし、九月には日獨伊三國同盟を結んだ。

此の間、吾が國に於ては一月阿部内閣に代つて米内内閣成立し、更に七月にはこれに代つて第二次近衛内閣が成立した。而して、國內體制の強化と共に十月には大政翼賛會發會式が行はれた。

此の内外多事にして大いなる革新期に當り、美術界又多事であつた。皇紀二千六百年を迎へたことは、内面的に吾が國民の崇高なる歴史と傳統とを回顧せしめその重大にして尊き使命を改めて自覺せしめたが、その國家的祝典と共に、美術界又擧つて祝意を表した。その主なるものは、政府が企畫した紀元二千六百年記念奉祝美術展覽會と、宮内省に依て企てられた正倉院御物の帝室博物館に於ける一般人民への公開であつた。前年來奉祝

美術展覽會が計畫されるや、文部省は特に本年度の文展を中止し、紀元二千六百年奉祝會との共同主催、東京府の協賛のもとに二三の團體を除き、現在の日本畫洋風畫、彫刻及び美術工藝の全分野に互る凡ゆる團體と部門を綜合した美術展覽會を開催し、現今吾が國美術を廣く展覽して貢獻するところあつた。又正倉院御物の東京に於ける展覧は、未曾有のことに屬し、假令其の一部ではあつたが、初めて親しく吾が偉大なる古代文化の遺品に接した國民は、啻に啓發されしのみでなく、その優秀さに感銘を深くしたのであつた。これ等のほか、大小の美術團體の奉祝展覽會、諸行事は枚擧に遑がない又十一月十日奉祝式典に際し國家功勞者に對し叙勳の御沙汰あらせられ、文化各部門の功勞者に對しては曩に制定された文化勳章が授けられ、美術部門に於ては日本畫家川合玉堂がこの光榮を擔つた。斯くして、此の佳き年を契機として國民意識は頓に昂揚し、古典藝術への反省と吾が民族様式への自覺が深められ、又一方美術の健康性が屢々問題となり、主題及び、手法に於ても頹廢的なもの、奇矯なるものは自ら影をひそめつつある。

次多きを加へつつある。國內に於ては美術家の作品獻納に依て國家に奉仕せんとする者、又前線勇士、傷病兵慰問等に役立たんとする氣風が著しい。又戰時體制の強化は、前年に引き続き行はれ、材料の統制は益々嚴重となり、七月七日には奢侈品に就き製造販賣の制限が加へらるるに至つた。依て大建築の構築、銅像の建設は勿論、染織品、金屬工藝品等の製作も著しく制限を受けるに至つた。此のことは此の戰時狀態に於て當然であるが一方吾が傳統的な特殊技術の廢絶が憂慮された結果、文部、商工兩省の考慮に依り特別の配慮が加へらるることとなつた。かくして美術工藝品の如きは特に外貨獲得の爲海外輸出の作品の製作が獎勵指導された。

日本畫及び洋風畫は未だ此の制限に影響を受けること尠く、殊に日本畫は前年來經濟的現象として著しき需要を惹起した結果、從來の官設展覽會或は團體展覽會のほかに中央、或は地方に個人展、同人展或は畫商展覽會の開催さるるもの枚擧に遑なく、其の盛況の反面、憂慮すべき點も多々生じた。依て識者は美術の眞の向上と、正しき鑑賞を説いてこれを批判し、又東京府の如きは美術俱樂部に於ける賣上金額の一部に對し強制的に國債購入を命じたのであつた。

戰時體制の強化は大政翼賛會の創立等政治方面に於ける新體制を實現せしめたが、美術各分野に於ても前述の材料統制に對する對策も伴ひ、各團體間自發的に統合連絡の氣運が著しく生じ、その實現を見たものも多々あつた。

一方政府に於ける美術行政も本年は活潑であつた。文部省はその例年の文展を特に中止して綜合的な奉祝展を企畫し、帝國藝術院會員を中心として各部委員を選出、その出陳作品選擇をはじめ、その實行方法に就て各部自由なる討議を行はしめて、多くの問題を提出せしめた。又同省が先年來計畫せる美術振興調査會は四月に至つて勅令を以て官制が公布され正式に成立した。斯くて文教行政家及び美術界の識者を委員に任命し、更に小委員會を設けて諸重要事項に就て討議せしめた。同會は十月に至り政府諸委員會の整理に際し一時中止されたが、その最終總會に於て文部大臣は將來より強力なる機關の設置を言明し、同會又同様の機關の設置を望む決議を文部大臣宛上申しした。而して、同會に於ける討議事項は未だ實現を見ずして終つたが、その答申の要項は、美術行政の統合、美術教育の刷新、美術施設の擴充であつた。

又十二月には美術評論家等に依て美術問題研究會が創立された。

吾が美術の海外紹介は、歐洲動亂の爲極めて消極的たらざるを得なかつた。即ち再開せる紐育及び桑港萬國博覽會に現代日本畫の二十餘點が新しく送られたほか、濠洲及び中南米へ實用工藝品が送られ、伯林に於て手工藝展が開かれた程度であつた。

本年物故した人々には久保田鼎、正木直彦の美術行政の長老をはじめ、日本畫家には郷田丹陵、田中頼璋、岡不崩、川北霞峰、小村雪舟の諸氏、洋風畫家には長谷川利行、瀬野覺藏があり、彫刻には

明珍恆男、牧俊高、武井直也があり、工藝家には大島如雲、宮川香山等があり、その他坂井岸水、今井貫一、佐藤慶太郎等夫々の意味に於て美術界に貢献せる人々があつた。

日本畫

本年の日本畫壇は政府主催の奉祝展を中心に例年になく活氣を呈した。奉祝展へは青龍社を例外とし、日本美術院をはじめ主なる團體が参加し、内容的にも略々綜合的なものとなつた。又日本美術院青龍社をはじめ日本畫院、讀畫會、新美術人協會、明朗美術聯盟、日本美術協會等何れも例年の如く展覽會を行つた。又東日、大毎社は特に奉祝日本畫展を開催した。

作品の全體的傾向としては、近年國民意識の昂揚に依る古典研究、傳統藝術に對する反省が著しく、特に本年は歴史畫或は佛畫の製作が多く、又秀れた作品が生れた。又一方中堅作家に依る新様式の研究も行はれ、見るべき作品があるが、又これ等への無反省な追隨も近來益々多し。殊に花鳥畫に於ける作家の個性の喪失は、喜ぶべき現象ではない。

次に主な作家に就て言へば、老大家が奉祝の意をこめて夫々力作を發表したことは意義あることであつた。竹内栖鳳の「雄風」(奉祝展)、川合玉堂の「彩雨」(同)は、共にその練達の技をふるつたものであつた。殊に「彩雨」の枯淡にして而も情趣あふるる畫趣は、この作者にしてはじめて到達し得るものであり、近來の傑作であつた。又特に本年の横山大觀の努

力は注目すべく、大作「日出處日本」(奉祝展)をはじめ、その個人の奉祝記念展に出品した「海」「山」に主題せる二十點の聯作は、量の上に於てのみならず、その技に從來の蘊蓄を傾倒し、氣魄に於て年齢を超越したものであつた。古典的な作風に尤作を爲したのは安田靉彦である。その「義經參著」(奉祝展)は秀れたものであり、現代日本畫の最高峰を示し本年に於ける一大收獲であつた。又菊池契月の「少年家康」(珊々會)、鏑木清方の「一葉」(奉祝展)、「たけくらべの美登利」(七絃會)等共に記録すべきものである。小林古徑は専ら佛畫に新境地を開かんと努め、觀音(院展)と不動(奉祝展)は共に傳統美術の研究を示しつつ何れも極めて創造的である。佛畫の流行は今日多く宗教的立場を離れて、その様式を藉りての美的創造に在るが、契月の「孔雀明王」(大毎、東日日本畫展)、「吹奏」(七絃會)、前田青邨の「阿修羅」荒井寛方の個展に於ける諸作、野田九浦の「軍荼利明王」(日本畫院展)等を挙げ得る。

右のほか、主なる展覽會出品作を舉ぐれば、奉祝展に於ては、西山翠嶂の「洛北の秋」、川村曼舟の「微雨」、結城素明の「國史圖と花卉畫」、小室翠雲の「林鳥浴仁」、松林桂月の「秋樹林」等の大家の作品があり、中堅新人の作品としては福田平八郎の「竹」、山口蓬春の「南島薄暮」、中村大三郎の「鸚鵡小町」、伊東深水の「朝」、中村貞以の「秋之色種」、兒玉希望の「十六夜」等があつた。院展は奉祝展への参加に依り、會員の出品が揃はなかつたが前記のほか、大觀の「首夏」、青邨の

「鶴」、太田聰雨の「大雅」、新井勝利の「山伏攝待」、郷倉千靉の「湖」、酒井三良の「江南春色」等が主なるものであつた。

青龍社は政府の奉祝展に参加せず、独自の奉祝記念展を催し、別に櫻に因む畫題をも課した。川端龍子が大陸策四部作の最後の「花摘雲」の大作を出品した外坂口一草の「櫻彩圖」、加納三樂の「雨情」市野亨の「蒼空」等があつた。新美術人協會に據る福田豐四郎の「鶴」、吉岡堅二の「氷原」には、むしろ古典への復歸が認められた。大毎、東日社主催の奉祝展は、一般には裝飾的な又陰影の描寫にふけた所謂新傾向の作品があふれてゐたが、審査員の作品として、橋本關雪の「柳蔭馬を洗ふ」、西山翠嶂の「煙雨」、竹内栖鳳の「艶陽」、荒木十畝の「煙雨」、竹内栖鳳の「艶陽」、荒木十畝の「煙雨」等があり、又東京の會場に於ては、委員の代表作若干が特別出陳された。

藝展、個展或は畫商展は枚舉に遑がない。個展の主なるものに前述の大觀の「海」「山」に因む記念展があり、龍子の朝鮮金剛山に主題せる個展、荒井寛方の佛畫展、津田青楓、近藤浩一路の個展等夫々特色のあるものであつた。百貨店或は畫商の展覽會は例年をしごく盛況であり日本畫壇の弊の一つをかもし出してゐる點もある。併し、珊々會、六潮會、清光會或は七絃會等に於ける清方、契月、靉彦、古徑、平八郎、蓬春等の作品は相應に評價さるべきものである。

日本畫に於ける團體の統合的氣運は他の分野に比すれば緩慢であり、從來の團體にも亦大きな變化はなかつた。只新しく小室翠雲により心印畫塾が起され、鏑木清方の門井掬水等により清流會が、西山翠嶂の今尾景春等により世紀美術創作協會が、園部香峰により日東美術院が、又西洋畫を含む新日本美術聯盟が創立さる等のことがあつた。

又本年は皇紀二千六百年を壽ぎ奉る意圖、或は明治神宮鎮座二十年記念として獻上、奉納のことがあり、又事變下陸海軍將士慰問の爲の獻納、或は軍備擴充の爲の作品賣上による獻金等も多かつた。獻上の著しきものは、大觀の奉祝展出品作「日出處日本」其他があり、明治神宮鎮座祭に奉仕せる人々に依り磯田長秋の描いた「明治神宮鎮座繪詞」が、又東京日日新聞社により故松岡映丘の「明治神宮舞樂之圖」が、又跡見玉枝によりその作品が夫々明治神宮に奉納された。陸海軍將士慰問としては川合玉堂の長流畫塾の作家等の獻納があり、軍備擴充のための獻金では、大觀のその記念展出品畫二十點の賣上金五十萬圓の陸海軍飛行機整備費として、竹内栖鳳の喜壽記念の獻金等が著しいものである。

戰爭記録として、又銃後士氣の昂揚のため、前年來戰爭畫が頻りに製作されたが、本年も作家の従軍或は渡支も相當の數に上つた。その主なものに橋本關雪、川端龍子、川崎小虎、吉村忠夫、池上秀畝、山村耕花、飛田周山、大智勝觀、野口謙次郎、小早川秋聲、安田半圃等があつた。

又日本畫家の遺作展として行はれたものには松岡映丘及び西村五雲があり、いづれもその特色ある畫風を系統的に陳列されたものであつた。又柴田是眞の五十年忌、今尾景年の十七回忌が行はれ、その他幸野煤嶺の胸像が京都繪畫專門學校内に建てられ、木島櫻谷の遺作、蒐集品を保存する櫻谷文庫が京都の舊邸に開設された。

西洋畫

從來とかく歐洲に於ける新様式の研究攝取に鋭敏過ぎた洋風畫も、事變以後起り來つた民族意識に加へ、紀元二千六百年なる劃期的な年を迎へ、あまつさへ歐洲動亂に依り、泰西文化、殊に近來最も繁く紹介され或は傳へられた現代佛蘭西文化の歸趨が云々さるるに至り、必然的に吾が國民独自の様式樹立が考へらるるに至つた。具體的にかかる反省をうながしたものは、吾が洋畫壇の殆んど全作家の参加に依り示された奉祝展に於ける第二部の洋風畫の現状であつた。奇矯、頽廢、不健康なる傾向は近來既に拂拭され概して言へば各々その畫風の相違を自任してゐる各團體の傾向が、むしろ極めて近似してゐることは争はれない事實であつた。此の機會に於て明治以降の代表的油彩畫の若干が、系統的に陳列されたならば、更に明確に今日の油彩畫の位置を反省せしむるに役立つたであらうと思はれる。

奉祝展に於ける主要作家の作品に就て言へば、長老松岡壽が久し振りに「海老名彈正氏肖像」を出品し、その肖像畫に

於ける堅實な手法を示した。藤島武二は病を押して「蒙古高原」を出品した。中澤弘光の「鶴の森」、齋藤里の「利根川」、藤田嗣治の「犬」、山本鼎の「時化の朝」、金山平三の「信濃路」は各々その特色を發揮し、又小杉放庵の「樂人」、梅原龍三郎の「紫禁城」、安井會太郎の「黒扇」、石井柏亭の「農村初秋」は夫々の近來の代表作として得る力作であつた。又中堅作家新人のものとしては、中村研一の「北京官話」、木下孝則の「丁令嬢像」、小藤源太郎の「早春」、小磯良平の「踊り子」等が主なものであつた。

光風會、太平洋畫會、獨立美術協會、東光會、國畫會、春陽會、新制作派協會二科會、一水會等の在野團體は奉祝展に参加したほか、各々恒例の展覧會を開催した。獨立美術協會は前衛派の退會に依り次第に落ちつきを見せ、川口軌外、須田國太郎、清水登之、中山巖、松島一郎、鈴木保徳、鈴木亞夫等の作品、或は兒島善三郎、小島善太郎、小村和作等の日本風の作品或は田中佐一郎の戦争畫等いづれも努力を見せた作品であつた。國畫會に於ては梅原龍三郎の「雲中天境」、「薔薇」が秀で、青山義雄、庫田毅の諸作又注目された。春陽會は足立源一郎、中川一政、石井鶴三、島海青兒、横堀角次郎等の會員のほか、新歸朝の會員阿鹿之助高田力藏が各々個性ある滯歐作を示した。

新制作派協會展は、内田巖、小磯良平、伊勢正義、佐藤敬、鈴木誠、脇田利等のほか、荻須高德、猪熊弦一郎の滯歐作の出品があり、又参考品として藤島武二及

びマネ、ドガ、マチス、ユトリヨ等の作品を陳列し、興味を唆つた。二科會展は鍋井克之、正宗得三郎、中川紀元、向井潤吉、野間仁根等の作品のほか、熊谷守一の還暦記念の特別陳列があり、又藤田嗣治、宮本三郎の滯歐作の出展があつた。藤田の「争鬪」「人魚」或は幾つかの少女像、佛蘭西風景等いづれもその個性を發揮したものであつた。尙同會に於ける著しい傾向の一は前衛派の作品の凋落であつた。一水會は奉祝展参加後、更に恒例の展覧會を開き、會員揃つて出品したが安井會太郎の「菊」、石井柏亭の「吉林」有鳥生馬の「詩宗青厓先生」のほか、中村善策、池邊鈞の作品等が擧ぐべきものであつた。

以上のほか、旺玄社の牧野虎雄、美術文化協會第一回展に於ける福澤一郎、自由美術家協會展に於ける長谷川三郎、村井正誠の作品も夫々個性的な仕事であつた。又同人展、個展或は畫商展は無數に行はれたが、これ等の中清光會に於ける梅原龍三郎の「櫻鳥」、安井會太郎の「犬と女」、坂本繁二郎の「柿」はそれぞれ秀れ、又霜林會展の里見勝藏、曾宮一念、伊藤廉の作品も記録すべきものである。個展中主なものには、山本鼎、熊岡美彦、佐藤武造、青山義雄、熊谷守一、長谷川昇、高間惣七、阿以田治修、川島理一郎、庫田毅、須田國太郎、小山敬三、野間仁根、小林徳三郎、和田英作、山下新太郎、高野三三男、牧野虎雄、曾宮一念、石井柏亭、鈴木信太郎、兒島善三郎、南薰造等があつた。

又遺作展の中、記録的なものとしては

岡田三郎助のそれが催され、規模も大であり、内容も充實してゐて、巨匠の作品の経過のみならず、明治中期以後の洋風畫の變遷をも知るに足りた。

主要在野團體の異動は特に記す程のこともなかつたが、洋風畫界に於ても相互連絡の必要が認められ、一水會、二科會、東光會、獨立美術協會、旺玄社、太平洋畫會、光風會、春陽會、新制作派協會の九團體を役員團體として美術團體聯盟が創立された。又新しく七洋美術會、海軍從軍畫家俱樂部、創元會、水彩聯盟、日本バステル作家協會、華畝會等が創立され、又自由美術家協會はその名稱を美術創作家協會と改めた。又近來洋風畫家の邦畫の制作が行はれてゐるが、藤田嗣治、石井柏亭、小杉放庵等に依り邦畫一如會が創立された。

本年洋風畫家で陸海軍の依頼或はその他の招聘により大陸へ旅行した者は多數にのぼつた。藤田嗣治はノモンハンに戦況を描く爲遠く滿蒙國境に赴き、中村研一、田村孝之介、小磯良平、田中佐一郎、清水良雄、碓伊之介、伊原宇三郎、橋本八百二、宮本三郎、又陸軍の依頼に依り支那へ旅行した。その他小杉放庵、石井鶴三或は光風會の朝井閉右衛門、南政善、鈴木榮次郎、山口猛彦、井手坊也、黒田頼綱、石川滋彦等の新人も渡支した。又丸山晚霞は南洋委任統治の諸島へ旅行した。これ等の作家の作品の一部は既に本年の奉祝展に出品された。

又歐洲動亂の結果、滯歐作家の歸朝する者相亞ぎ、これ等の中には滯在長期に亙り歐洲畫境にその名を知られた人々も

あつた。その主なるものに藤田嗣治、荻須高德、岡鹿之助、宮本三郎、猪熊敏一郎、高野三三男、高田力蔵、岡本太郎、高橋惟一、角浩、土橋醇一、上永井正、佐藤功茂等があり、これ等は本年夫々所属團體の展覧會、或は個展に於てその帶歐作品を發表した。

近來、木版畫をはじめ石版畫、銅版畫の製作が漸次行はれ、諸展覧會への出品も増加しつつあるが、本年新版畫會及び日本エッチング作家協會が創立された。又挿繪畫家の團體として、新しく日本挿畫家協會が生れたことを附記する。

彫刻

戦時下彫刻家にも幾つかの使命が與へられ、その主題も擴げられた。建築的な大記念碑の建設が公に企てられ、又作家も歴史人物を肖像的に製作し、或は象徴的に古代武人像を扱ひ、或は戦争や銃後生活を主題としたもの等が増加した。これ等の主題に限らず、數年來吾が彫刻界の本質的な傾向として、モニユメンタルな造型性の追究が著しく、今日尙ほ繼續して見られるが、一方彫刻に新しい感覺を盛らんとする傾向も見出される。併しこれ等は睿智ある新人等の傾向であつて諸展覧會場には、一般的に尙ほ安易な自然主義になる習作程度の作品が瀟漫してゐる。

又前年來の金屬使用統制に加へ、本年七月の所謂七・七禁令の彫刻及び工藝に與へた影響は大である。國家的性質の企畫を除き自由なる銅像の建設は許されず

當局の認めたる團體に對する若干の配給以外に、個人に對する銅の配給も停止され、事實上鑄銅作品は極めて少くなつた。従つて從來の木材、石膏等に加へ諸種の石材或はテラコッタの使用が増加した。

本年の彫刻團體の活動に就て言へば塊人社、日本彫刻家協會、日本木彫會、構造社、東邦彫塑院、第三部會の各團體及び、日本美術院、新制作派協會、二科會自由美術家協會の彫刻部は、例年の如く展覧會を開催したが、後の三者を除き、むしろその主力を政府主催の奉祝展に注いだ。

奉祝展の彫刻は、よかれ悪しかれ、吾が彫刻界の現状を如實に示したものであつた。奉祝の意を表せるもの或は時局的なものには齋藤素巖の「日は昇る」、山崎朝雲の「倭乙女」、内藤伸の「順天我往」、朝倉文夫の「清麻呂公像」、小倉右一郎の「山田長政」、清水多嘉示の「千人針記念碑」等があつた。その他舉ぐべきものに北村西望の「一哮風發」、建昌大夢の「頰杖」、平楠田中の「原翁閑日」、石井鶴三の「相撲」、安藤照の「二つの對象に求めて」等があつた。

彫刻團體の春季展覧會の中、日本彫刻家協會に於ては、加藤顯清、畝村直久の作品が擧げられる。尙同展に於ては武井直也の遺作が特別陳列された。構造社に於ては齋藤素巖、及び新人進藤武松、安永良徳等があつた。秋季に於ける第三部會は、日本民族彫塑の復興と創造を宣言したが、日名子實三の「八紘之基柱」、「航空表忠碑」、「上海海軍陸戰隊表忠塔」の

外、濱田三郎、早乙女龜次、向山映路等の記念碑的な作品があつた。新制作派協會には本郷新、佐藤忠良、明田川孝等のほか、新歸朝の菊池一雄の新鮮にして滋味豊かな帶歐作が陳列された。二科會には泉二勝齋、渡邊義知があり、院展彫刻部に於ては、平楠田中の「弘法大師試作」中村直人の「鷹」、石井鶴三の「閑坐」、「休息」、山本豐市の「女の顔」等があつた。展覧會外の作品としては、佐藤清藏の「和氣清磨像」が宮城外に建てられ、又日名子實三の「八紘之基柱」が日向の聖地に建設された。

彫刻團體の動向としては、正統木彫家協會、京都彫刻家聯盟、日本陶磁彫刻作家協會等が創立され、第三部會が國風彫塑會と改稱した。

工藝

工藝は全體的傾向として、傳統技法を忠實に守る傾向と新様式を創造せんとする傾向が絶へず併行してゐる。金屬材料其他素材の統制及び奢侈品製造販賣禁止令は、美術工藝に最も大きな影響を與へ傳統技法の衰滅が眞剣に憂慮されたが、當局の配慮に依り充分とまで行かなくとも材料の配給機構も整へられた。又國策として輸出工藝品の製作が益々助長され商工省の輸出工藝振興委員會の活躍と俟つて、貿易局工藝品輸出振興展覧會及び輸出工藝圖案展覧會が前年に繼續して開催された。又工藝指導所は東京移轉に際し、同所の紹介の爲展覧會を開催し、新材料の研究等を示した。

併し、本年最も大きな記録は、奉祝展

への工藝各分野の参加であつた。その出品は全國にわたつたが、概して金工及び漆器に秀れたものがあつた。その主なるものに金工には香取秀眞、清水龜藏、津田信夫をはじめ高村豐周、豊田勝秋、山本安曇、北原千鹿、香取正彦、寺田龍雄等の中堅及び新人の作品があり、漆器には六角紫水をはじめ梅澤隆眞、磯井如眞、山崎覺太郎、本間舜華、吉田源十郎等があつた。陶器は殊に東京、京都のみならず地方出品が多かつた。主なものには清水六兵衛、板谷波山、富本憲吉があり、その他の若き作家には清水正太郎、岡本爲治、新開邦太郎、徳力孫三郎、福田力三郎、宮之原謙等があつた。染織では鹿島英二、山形駒太郎、山鹿清華、長安右衛門、渡邊春男等が擧ぐべきものであつた。その他のものには飯塚環珪齋の竹器各務鏝三の硝子器等があつた。

その他團體の展覧會は、實在に工藝展が奉祝展参加の爲休會したほか例年の如く開催した。即ち日本美術協會、鑄金會、日本彫金會、日本漆藝院、日本陶藝研究會、阜陶會、京都工藝院、國畫會の工藝部等があり、第一回展を開いたものに現代工藝作家協會、京都の染織繡藝術協會及び大阪の形象美術會等があつた。又民藝館の主催に依り琉球の工藝美術が紹介された。個人展の主なものには、濱田庄司、河井寛次郎、清水正太郎、香取正彦等があつた。

相互の連絡及び材料配給の都合により、工藝團體の創立されたもの非常に多く、綜合的なものとしては現代工藝作家協會、工藝美術作家協會、東京府工藝協會、三

都工美術、京都工藝家聯盟、越後工藝美術會等があり、その他京都染織藝協、日本刺繍院、蕨和會、庚辰會等があつた。又解散せるものに工人社がある。

又活躍しつつあつた商工省輸出振興調査會が、諸種の委員會の整理に際し廢されたことは遺憾であつた。高村豊周が視察の爲米國に派遣され、又室内工藝啓發の爲佛蘭西よりシャルロット・ペリアンが招聘された。

建築

合理主義の侵潤は、此處數年來の我國建築界の著しき現象であつた。初めは、それも歐米の流行に押されて、所謂「國際主義」と同一の傾向さへ存して、國民性、氣候風土の特殊性を無視して劃一的「合理主義」を遵奉せんとしたのもあつたが、次第にそれも反省されて、眞の合理主義は、世界共通の「合理形式」に従ふ事ではなく、各々の土地の氣候風土に適合せるものであることは勿論、其の生活狀態、其の土地産出の材料にも合理的でなければならぬことが一般に明らかになつて來たことが近頃の作品に看取されるのは喜ばしいことである。更に此の合理主義を精神的に深め——元來合理主義こそ日本古來の建築の眞精神なのであるが——又傳統的形式と調和を計り、眞に日本の合理主義建築を創造しやうと云ふ努力が見られ、而もそれが相當成功したものが本年度建築界に現はれたのは同慶に堪へぬ。

大軌の畝傍御陵前停車場、樞原神宮驛綜合停車場（共に大阪電氣軌道株式會社

改良課設計）が共に其の好例として擧ぐべきものである。兩者共に、傳統的形式と停車場の要求する近代の機能とを巧みに調和して居る。

斯かる傳統的形式の近代化としての非常な傑作は、茨木縣鯉淵の滿蒙開拓幹部訓練所の大講堂（清田文永設計）である。前面に廣いボーチを配し、左右兩側にも多くの出入口を有つ此の大講堂は明層の取り方も巧みに、内部にギャレリーさへ有して、其の空間形式は講堂としての近代的欲求に好く合致せるものであるが、其の外形には天地根元造りの「神ながら」の姿を與へんと意識的に努力して居る。

そして其を成功せしめて居るのは、優れた構造計算の成果たる三角形の木材トラスなのである。かかる三角形の木材トラスを講堂に使用する事は獨逸でも行はれて居て、例へば、カー・デー・エフ自動車の大工場建築の爲の労働者集合收容所なりモニメンタルな効果を得て居るがこれ程に民族精神の表現には成功して居らぬのである。

木材建築は燃焼する缺點こそあるが、施工及保存如何によつては相當の耐久力を有するもので、其の眞價を改めて見直すべき現在、上述の如き傑作の生れたのは喜ばしい。本年度は、資材使用上の種々なる法規による制限の爲、前年度迄はまだ小規模なものに見られた鐵筋コンクリート建築は、特殊なものを除いては全く影を絶ち、普通建築は總て木造である。木造の官廳、諸會社の事務所建築も多く建てられたが、何れも、間に合せも

のとしての木造建築が多く、外見上可なり美しい意匠も見られはしたが、積極的に木造建築を生かさうとしたものは、残念乍ら殆ど見當らぬ。

特殊なもので傑作として擧ぐべきは有樂町驛新橋驛間の新高架線である。土木技術上合理的に、裝飾は勿論、何の街ひも無く、簡素に造型して居るが、而も各部の比例宜しきを得て非常に美しい。之こそ古來の日本建築の神髓を現代の科學的技術に生かしたものと云へる。其の外特筆すべきものには日本郵船の豪華客船新田丸（三菱長崎造船所建造）の船客收容部分の室内裝飾がある。前年度のアルゼンチナ丸に引續いて、専門建築家の手になるものであるが、多くの著名建築家に各一室を委して居るので成功せるものも然らざるものもある。斯く依頼された以上は、建築家の方も、船舶の構造の特殊性を好く理解して、それを生かした裝飾をなすやうより努力せねばなるまい。

復古建築ではあるが、四天王寺の五重塔の再建も茲に擧ぐべきものであらう。此の新塔は天沼俊一博士の設計に成り、奈良時代建築の様式を主とし、鎌倉時代頃迄の建築の細部を適當に取入れたもので、天沼博士のこれに拂はれた努力には深甚なる敬意を表する。

前年度忠靈顯彰會の主催で、第一種大陸に建設するもの、第二種内地に建設するもの、忠靈塔の設計案が募集され、本年度その発表があつた。兩種目の一等を初め、何れの當選案も案外に平凡であつた。只、第二種二等は日本個々の城郭建築の石垣を應用した點で、其の意圖

を賞さるべきものである。

十四年末に公布せられた木材建築制限令により、家族六人以下の新築住宅は三十坪二合以下、六人以上の場合も三十九坪以下と制限せられた結果、同令公布以前に施工を初めたもの以外は、本年度竣工せる住宅はこの制限内のものである。此の制限は積極的に生かされるならば、將來空間の利用に、プランの有機化、緊密化に、我國住宅設計の進歩を齎すであらう。既に本年度に於て、眞に機能化された美しい小住宅の出現が期待されたのであるが、公表せられたものの中には残念乍ら見當らぬ。僅に吉田五十八設計のK邸、山口邸の如き壯大贅澤なる住宅が優秀作品として光つて居るのは、戦時下の建築界にとつては、決して喜ぶべき現象ではない。

古美術その他

古美術保存としては、昭和十五年年度に於ける國寶指定は、繪畫二十八、彫刻二十八、文書典籍書蹟三十五、工藝十、刀劍十四、建築三件、合計百十八點、重要美術品に認定されたものは、繪畫五十七、彫刻十一、文書典籍二百六十七、工藝品及考古學資料八十一、刀劍八十五、建築十一件、合計五十二點であつた。又本年修理の完成せる國寶建造物には法隆寺の南門及び四脚門、姫路城渡櫓、唐招提寺禮堂、白山社奥殿、金剛寺の多寶塔及び經堂等があつた。

法隆寺保存事業は、本年文部省或は法隆寺に法隆寺國寶保存協議會を屢々開催建造物の修理事業に就て協議し、更に前

年文部省内に設置せる法隆寺壁畫保存調査會は同金堂の建物、壁體に關する建築化學、歴史及び藝術の各方面よりする具體的な研究調査に就き協議した。又壁畫摸寫も前年荒井寛方、中村岳陵、入江波光、橋本明治に決定したが、本年その助手三名づつを決定し、各壁の分擔をも定め著手した。尙和田英作は個人の資格に於て油彩による摸寫を出願中であつたが、特に許されて摸寫に著手した。

又法隆寺夢殿は曩に修理完成し、これを機として、同堂本尊救世觀音の厨子が佐伯定胤、正木直彦の發願に依り企圖されてゐるが、四月完成し落慶供養が營まれた。又先年大風火災に倒壞した四天王寺五重塔が天沼俊一博士の設計に依り復興した。

古美術に於ても紀元二千六百年を奉祝する諸種の企ては夥しく又盛大に行はれた。諸展觀中特記すべきは、前記正倉院御物の帝室博物館に於ける公開展觀であり、又奈良帝室博物館の平家納經特別展恩賜京都博物館に於ける日本近世名畫展京都大禮記念美術館の日本文化と京都展大阪市立美術館の名寶展、東京朝日新聞社主催の日本文化史展、大阪朝日新聞社の主催の二千六百年史展の如き大規模のものをはじめ、大倉集古館の神道美術展、徳川美術館、白鶴美術館或は東寺、園城寺等の特別展觀、東京美術倶樂部の渡邊華山百年記念展等があつた。又本年開館せる私設美術館に神戸池長美術館及び東京の三井コレクションがあり、共に閉館記念展を催し、又創立を決定せるものに根津美術館、寧樂美術館があつた。

又本年東洋美術の海外紹介を目的とする東洋美術國際研究會が細川侯を會長として創立された。

發掘、調査事業に就て言へば、今日大規模のものは寧ろ國內より大陸諸地に於て行はれつつある。本年度朝鮮に於ける發掘事業には、朝鮮古蹟研究會の行つた樂浪古蹟の一部の發掘があり、その出土品は總督府博物館に於て特別展觀された。滿洲に於ては、池内宏博士等に依る撫順古蹟の調査や、奉天博物館に依る熱河省葉相壽古墳等の發掘があり、支那に於ては東亞文化協議會の企畫で原田淑人博士等の河北省邯鄲城址の發掘等が擧ぐべきものである。

美術展覽會

一月

高橋幸雄歌舞伎スケッチ展 一月中日
歌舞伎座
フアシスト伊太利大展覽會 一月四日
—十四日 京都・大丸 伊太利大使館、
京都日伊協會主催。

六獎會洋畫展 一月五日—十日 大阪
阪急百貨店
林司馬、奥村厚一、麻田辨次近作展
(日) 一月五日—十二日 京都・大丸

篠原部隊野戦スケッチ展 一月七日—
十四日 大阪・阪神パークホール
湊弘夫個展(洋) 一月九日—十日 神
戸・三越

愛知縣出身十四年度二科入選者展(洋
彫) 一月九日—十三日 名古屋・丸善
京都昭和工藝協會工藝品展 一月九日
—十四日 大阪・三越

京都美好會工藝品展 一月九日—十四
日 大阪・三越
京都工藝院陶藝部新作床飾展 一月九
日—十四日 京都・大丸

久本弘一蘭印バリ島洋畫作品展 一
月十一日—十七日 大阪・阪急百貨店
一至會第一同洋畫展 一月十二日—十
四日 銀座・三味堂

明榮光三郎個展(洋) 一月十二日—十
六日 大阪・美術新論社畫廊

一水會第三回展(洋) 一月十二日—二
十一日 大阪・朝日會館
同會最初の關西進出展で、入選作を併
せ百三十四點を陳列した。
ウ・イ・スリコフ油繪展觀 一月十三
日 丸ビル日魯漁業株式會社
新制作派協會第四回展(洋、彫) 一月
十三日—二十八日 大阪市立美術館
後援大阪朝日新聞社。陳列數洋畫百七
彫十七、別に故野田英夫遺作二十一點。
梅原龍三郎作品觀覽會(洋) 一月十五
日—二十日 神戸・畫廊
昭和十四年度愛知縣出身文展入選者展
(洋) 一月十六日—二十日 名古屋・丸
善

創造美術協會第一同洋畫小品展 一月
十六日—二十五日 大阪・松坂屋
棚橋慶心堂名畫展(日) 一月十八日—
十九日 名古屋美術俱樂部
工藝品圖案展 一月十八日—十九日
丸ノ内・東京商工獎勵館講堂 東京府工
業獎勵館主催。
川崎克堂第三回作陶描畫展 一月十八
日—十九日 大阪美術俱樂部
中村善策洋畫展 一月十八日—二十二
日 大阪・三角堂
十河巖從軍スケッチ展(洋) 一月十八
日—二十三日 大阪・美術新論社畫廊
作者は大阪朝日新聞社の記者として中
支の黃坡に八箇月從軍した。
武者小路實篤日本畫展 一月十八日—
二十四日 大阪・阪急百貨店
阿部金剛個展(洋) 一月十八日—二十
四日 大阪・阪急百貨店

島崎鷗二、高岡徳太郎新作油繪展 一
月十六日—二十日 日本橋・高島屋
滿洲、北支の旅行に於て描いた油繪を
各自二十餘點づつ陳べた。
羊和會彫金展 一月十六日—二十一日
日本橋・三越
實在工藝第一回同人展 一月十六日—
二十三日 日本橋・三越

實在工藝美術會の最初の同人展であり
十二名の會友の作品を主とし十一名の會
員が之に贊助して七十餘點が出品された
磯矢阿伎良、吉田源十郎、渡邊春男等に
見るべきものがあつたが、同人の作品は
いづれも小品であつた。

本郷研究所の藝展で、伊原宇三郎、辻
永、中村研一等先輩の出品があり、洋畫
計二百十九點、工藝三十九點のほか故岡
田三郎助の遺作十二點を陳列した。
〔春臺特賞〕伊藤悌三、田村一男〔春臺
賞〕柳瀬彌生、武良俊明、景山榮次、松
原南海
蒼生會第一回展 一月二十日—二十二
日 銀座・紀伊國屋
石塚善哉作品展(日) 一月二十日—二
十二日 日本橋・泰文社

春日美術第十五回展(洋、工) 一月十
九日—三十日 東京府美術館
本郷研究所の藝展で、伊原宇三郎、辻
永、中村研一等先輩の出品があり、洋畫
計二百十九點、工藝三十九點のほか故岡
田三郎助の遺作十二點を陳列した。
〔春臺特賞〕伊藤悌三、田村一男〔春臺
賞〕柳瀬彌生、武良俊明、景山榮次、松
原南海
蒼生會第一回展 一月二十日—二十二
日 銀座・紀伊國屋
石塚善哉作品展(日) 一月二十日—二
十二日 日本橋・泰文社

春日美術第十五回展(洋、工) 一月十
九日—三十日 東京府美術館
本郷研究所の藝展で、伊原宇三郎、辻
永、中村研一等先輩の出品があり、洋畫
計二百十九點、工藝三十九點のほか故岡
田三郎助の遺作十二點を陳列した。
〔春臺特賞〕伊藤悌三、田村一男〔春臺
賞〕柳瀬彌生、武良俊明、景山榮次、松
原南海
蒼生會第一回展 一月二十日—二十二
日 銀座・紀伊國屋
石塚善哉作品展(日) 一月二十日—二
十二日 日本橋・泰文社

春日美術第十五回展(洋、工) 一月十
九日—三十日 東京府美術館
本郷研究所の藝展で、伊原宇三郎、辻
永、中村研一等先輩の出品があり、洋畫
計二百十九點、工藝三十九點のほか故岡
田三郎助の遺作十二點を陳列した。
〔春臺特賞〕伊藤悌三、田村一男〔春臺
賞〕柳瀬彌生、武良俊明、景山榮次、松
原南海
蒼生會第一回展 一月二十日—二十二
日 銀座・紀伊國屋
石塚善哉作品展(日) 一月二十日—二
十二日 日本橋・泰文社

春日美術第十五回展(洋、工) 一月十
九日—三十日 東京府美術館
本郷研究所の藝展で、伊原宇三郎、辻
永、中村研一等先輩の出品があり、洋畫
計二百十九點、工藝三十九點のほか故岡
田三郎助の遺作十二點を陳列した。
〔春臺特賞〕伊藤悌三、田村一男〔春臺
賞〕柳瀬彌生、武良俊明、景山榮次、松
原南海
蒼生會第一回展 一月二十日—二十二
日 銀座・紀伊國屋
石塚善哉作品展(日) 一月二十日—二
十二日 日本橋・泰文社

春日美術第十五回展(洋、工) 一月十
九日—三十日 東京府美術館
本郷研究所の藝展で、伊原宇三郎、辻
永、中村研一等先輩の出品があり、洋畫
計二百十九點、工藝三十九點のほか故岡
田三郎助の遺作十二點を陳列した。
〔春臺特賞〕伊藤悌三、田村一男〔春臺
賞〕柳瀬彌生、武良俊明、景山榮次、松
原南海
蒼生會第一回展 一月二十日—二十二
日 銀座・紀伊國屋
石塚善哉作品展(日) 一月二十日—二
十二日 日本橋・泰文社

春日美術第十五回展(洋、工) 一月十
九日—三十日 東京府美術館
本郷研究所の藝展で、伊原宇三郎、辻
永、中村研一等先輩の出品があり、洋畫
計二百十九點、工藝三十九點のほか故岡
田三郎助の遺作十二點を陳列した。
〔春臺特賞〕伊藤悌三、田村一男〔春臺
賞〕柳瀬彌生、武良俊明、景山榮次、松
原南海
蒼生會第一回展 一月二十日—二十二
日 銀座・紀伊國屋
石塚善哉作品展(日) 一月二十日—二
十二日 日本橋・泰文社

白日會第十七回展(洋、彫) 一月二十
日—二十八日 東京府美術館
同會恒例の公募展で、陳列數は洋畫四
百二、彫刻三十九點。會員の作では中澤
弘光の「海」、富田温一郎、香田勝太の
諸作が主で、其他荻野康兒、小堀進、渡
部菊二等の水彩が擧げられる。彫刻は不
振を免れぬ。
〔撤入〕繪畫一八二八點、彫刻一二五點
〔入選〕繪畫二二五點、彫刻一二點〔新
會員〕島村三七雄、刑部人、廣本了、關
口誠、古川弘、山道榮助、島田四郎、兒
島正典、富田匠美〔新會友〕市原義夫、
高橋隆比古、長澤昇、山岸富五郎、小島
眞佐吉、古田芳雄、宮崎精一、草刈二郎
鹽澤洋悟、丸樹長三郎、藤江志津、江口
賢一、畔上眞雄、阿部七郎、西山閣二、
金子富藏、竹内貞次郎、坂手讓、荒卷茂
〔白日賞〕宮崎精一、山岸富五郎、岡本
隆、荒卷茂、獎勵賞、新客員以下略
とよさか人形展 一月二十三日—二十
八日 日本橋・三越
京都諸大家新作畫展(日) 一月二十三
日—二十八日 京都・丸物
樹人社新春小品展(日) 一月二十三日
—二十八日 京都・大丸
葱青社、丹丘社、竹立會合同水郷潮來
風景展(日) 一月二十三日—二十八日
京都・大丸

關西女流畫家第十五回作品展(日) 一
月二十三日—二十八日 京都・大丸
阪毎日京都支局主催。

關西女流畫家第十五回作品展(日) 一
月二十三日—二十八日 京都・大丸
阪毎日京都支局主催。

關西女流畫家第十五回作品展(日) 一
月二十三日—二十八日 京都・大丸
阪毎日京都支局主催。

關西女流畫家第十五回作品展(日) 一
月二十三日—二十八日 京都・大丸
阪毎日京都支局主催。

關西女流畫家第十五回作品展(日) 一
月二十三日—二十八日 京都・大丸
阪毎日京都支局主催。

關西女流畫家第十五回作品展(日) 一
月二十三日—二十八日 京都・大丸
阪毎日京都支局主催。

關西女流畫家第十五回作品展(日) 一
月二十三日—二十八日 京都・大丸
阪毎日京都支局主催。

關西女流畫家第十五回作品展(日) 一
月二十三日—二十八日 京都・大丸
阪毎日京都支局主催。

關西女流畫家第十五回作品展(日) 一
月二十三日—二十八日 京都・大丸
阪毎日京都支局主催。

關西女流畫家第十五回作品展(日) 一
月二十三日—二十八日 京都・大丸
阪毎日京都支局主催。

關西女流畫家第十五回作品展(日) 一
月二十三日—二十八日 京都・大丸
阪毎日京都支局主催。

庭山耕園近作書展(日) 一月二十四日

—二十五日 大阪美術俱樂部

鬼頭鑣二郎第五回油繪展 一月二十四日

—二十七日 名古屋・丸善

玉之浦風景をはじめ近作油繪二十九點を陳列。

生田花朝塾櫻會第三回小品畫展(日)

一月二十四日—二十八日 大阪・三越

久保飛路史日本畫個展 一月二十五日

—二十八日 大阪・高島屋

山本鼎新作油繪展 一月二十五日—三十日 日本橋・三越

改組後の官展に參與しつつ、藝術的には無所屬の立場にある作者が、今回の個展において近業を一括し世に問ふたもの油繪二十七點、技法に於ける老練さと品格を注目すべく、「温室のカトレヤ」「箱から出した果物」「或る朝の富士」等の佳作が見られた。

青衿會第一回日本畫展 一月二十五日—三十日 日本橋・三越

人物畫を研究すべく伊東深水及び山川秀峰を中心に組織された新人の團體、陳列數六十點。

晨潮會第二回展(洋) 一月二十五日—三十日 新宿・三越

滿谷國四郎遺作日本畫展 一月二十五日—三十日 神戸・畫廊

熊岡美彦油繪展 一月二十五日—三十日 大阪・三越

昨年二回に及ぶ大陸從軍の作品の一部を發表した。

そごう現代大家名品展(日) 一月二十五日—三十日 大阪・同店

佐藤武造作品展(洋) 一月二十五日—三十日 日本橋・高島屋

作者は滯英二十年に及び昨秋歸國した高村眞夫洋畫展 一月二十五日—三十日 大阪・阪急百貨店

一日 大阪・阪急百貨店

青山義雄個展(洋) 一月二十六日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

長流畫塾第二回軍人慰問畫展(日) 一月二十七日 神戸・如水會館

春陽會第二回日本畫展 一月三十日—二月四日 銀座・三越

春陽會の會員六名の日本畫展で、小杉放庵の扇面はりませ「本朝道釋」、石井鶴三の「獅子舞の前」、木村莊八の「三番叟」其他中川一政、今關啓司、横堀角次郎の新作を陳列した。

京都名匠作陶展 一月三十一日—二月四日 大阪・三越

二月

菅橋彦(日)、大西清右衛門(釜) 作品展 二月一日 大阪美術俱樂部

朱弦會第二回日本畫展 二月一日—四日 日本橋・三越

安田叔彦、川崎小虎を中心に革丙會の有志が組織する大和繪系の會。安田は「布都御靈之太刀」を出品、川崎小虎の「沼三題」は新傾向を注目せられる作。

舞臺美術展 二月一日—四日 銀座・資生堂

白御會小品畫展(日) 二月一日—四日 名古屋・松坂屋

朱玄會第三回洋畫展 二月一日—四日 日本橋・三越

二科會員栗原信、田村孝之介、宮本三郎三名の會で、各人約十點づつを陳列、宮本は外遊中の作品「白壁の家」「エトルタ風景」等を見せた。

川口吳川歴史畫展 二月一日—四日 京都・丸物

坂本益夫洋畫個展 二月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

山川秀峰個展(日) 二月一日—六日 大阪・松坂屋

久保貞次郎蒐集世界兒童畫展 二月一日—七日 神戸・そごう

童寶美術院第十回展 附第七回大東京女學生製作人形展 二月一日—七日 日本橋・三越

西澤笛吹御所人形十二題展觀(日) 二月一日—八日 京都・芸艸堂畫廊

春耀會第一回展(日) 二月二日—四日 大阪・大丸

堂本印象塾の會、出品者三十餘名。日本人形社新作人形展 二月二日—七日 銀座・松屋

安中洞第一回新作日本畫展 二月三日—五日 芝・東京美術俱樂部

平林襄二主催、大家三十餘名の作を陳列。

眞美會第一回現代日本畫新作展 二月六日—八日 芝・東京美術俱樂部 小山

常次郎、泉藤吉共同主催。三浦竹軒名作品展(日) 二月六日—八日 芝・東京美術俱樂部

高橋惟一滯佛作品展(洋) 二月六日—八日 日本橋・三越

滯佛十年、最近歸朝した作家。油繪二十餘點を陳列。

三輪晃勢個展(日) 二月六日—八日 日本橋・三越

堂本印象門下の新人、花鳥畫十點を陳列した。

第二回全九州産業美術聯盟ボスター展 二月六日—十一日 福岡・玉屋

更路社第一回展(日) 二月六日—十一日 大阪・大丸

花岡萬舟戰線報告丹心畫展(洋) 二月六日—二十五日 大阪市立美術館

双葉會第一回展(日) 二月七日—八日 丸ノ内・日本工業俱樂部

彌生會第九回人形美術展 二月七日—十一日 上野・松坂屋

高須操個展(洋) 二月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

高橋卯八個展(洋) 二月七日—十一日 名古屋・後藤版書店

朝鮮總督府主催紀元二千六百年奉讚展 二月七日—十六日 京城・丁子屋

同人會東都大家近作日本畫幅展 二月八日—十一日 大阪・高島屋

彩交會第三回繪畫展(日) 二月八日—十三日 名古屋・松坂屋

井上幸洋畫小品展 二月八日—十四日

大阪・阪急百貨店

佐伯祐三遺作展 (洋) 二月九日—十一日

小倉・井筒屋

人形展 二月九日—十一日 銀座・松坂屋

主催女性人形同人、人形玉藻會、人形文化研究所。

三溪原富太郎遺作畫幅展 二月十日

銀座・松風陳列所

吉武彦山聖蹟畫展 二月十日—十二日

岡山・金剛莊

高麗陶兵衛作陶展 二月十日—十五日

大阪・三越

夢僊、溪仙、五雲遺作展 (日) 二月十一日—十二日

京都美術俱樂部 都市と藝術社主新田章童主催。

伏原春芳堂東西大家新作展 (日) 二月十一日—十三日

芝・東京美術俱樂部

關尚美堂展 (日) 二月十一日—十三日

銀座・資生堂

關長次郎主催の新畫展で、小林古徑の「紅梅」、前田青邨の「木瓜」など十餘名の出品があつた。

三味會日本畫展 二月十一日—十五日

銀座・三味堂

三味堂主催。賛助川端龍子、會員は坂口一草、加納三樂、山崎豊の三名。

尺蠖堂文景道人作畫展 (日) 二月十三日—十六日

日本橋・高島屋

下瀬貞和個展 (洋) 二月十三日—十七日

大阪・美術新論社畫廊

泉月吟社第三回日本畫展 二月十三日—十七日

日本橋・白木屋

横尾龍芳個展 (日) 二月十三日—十七日

日 福岡・岩田屋

三茗社第一回展 (日) 二月十三日—十八日

大阪・大丸

矢野陶々百盃會 二月十三日—十八日

大阪・三越

新浪漫派第一回展 (洋) 二月十四日—十六日

銀座・資生堂

大木豐平日本畫展 二月十四日—十八日

日本橋・白木屋

岡田三郎助遺作展 二月十四日—二十日

日 東京府美術館

明治、大正、昭和に互り吾が洋風畫の發展に貢獻するところ大であり、昨年九月二十三日惜まれつつ逝去した岡田三郎助の遺作展が遺友門弟諸氏の主催に依て表記に開かれた。その陳列は初期より晩年に互り、油彩畫約四百五十點、素描、日本畫七十六點、工藝作品三十九點であつて、凡そ其制作品の全貌を窺ひ得るものであつた。

油彩畫に就て言へば、明治二十年より同二十五年に互る曾山塾或は大幸館時代の莨色調のむしろアカデミックな畫風の「長崎にて」「晩暉」「矢調べ」があり、次に黒田清輝、久米桂一郎の感化に依る印象派風の作品即ち「初冬晩暉」(第四回内國勸業博覽會出品)、「本牧風景」「農家の娘」があつた。明治三十年より三十五年の滯佛中のもとしては「讀書」(佛國サロン、第五回内國博覽會出品)をはじめ「薔薇の少女」「セーヌ河畔の上流」「ムードンの夕暮」「女の肖像」等があり、ラファエル・コランの感化を見逃せないが

又次第に彼自身の畫風が決定されて行つた徑路が見られる。明治三十五年歸朝以後はその習得した技術を以て「舞子」(聖路易博覽會出品)、「某婦人像」(東京府勸業博覽會出品)、「大隈伯夫人」(第三回文展)、「萩」(第二回文展)、「ひなた」(くもり) (第四回文展)の如き、金屏風或は草原を背景とした人物畫に日本的なる繊細な感情を盛つてゐる。此の人物畫は更に發展して大正期の力作にして豪華な裂地を配した「支那絹の前」(第二回帝展)或は「掛を着たる婦人」(大正十五年)等となつてゐる。又一方大正期に入り、次第に裸體婦人にその畫境を見出し、これは昭和時代に續いてゐる。而もこれには室内或は屋外のものがあるが、最もその特徴を示すのは、その工藝作品に對する愛著から裸婦に裂地を配せるもの或は半裸の作品である。而もこれ等には屢々背景に金或は銀泥が用ひられた。其の早期の作に「海邊裸婦」(大正三年)、「水浴の前」(第十一回文展)の如きがあり、最高潮期のものに「古き昔を偲びて」(第七回帝展)、「銀の階調」(昭和元年燕巢會第一回展)、「あやめの衣」(昭和二年第二回本郷展)、「來信」(第三回本郷展)等があり、晩期のものに「少女」(昭和九年)、「裸婦」(昭和十年)、「支那服の女」(昭和十一年)等があつた。又風景畫には、大正初年に於ける北國の風景就中「よね桃の林」の如き、又昭和初年に於ける再渡歐の際の小品佳作があり、又晩年の「金時山」(昭和八年)、「磯子より根岸」(昭和十三年)或は河口湖を中心とする多くの作品があつた。而して、これ等の油彩畫には既に大正初年より岩繪具がしきりに用ひられてゐる。

素描はその木炭、鉛筆、ペンによる習練時代のものより折々の寫生が含まれ、日本畫はむしろ餘技的な水墨畫である。工藝作品はメダル類の小彫刻より、金銀木工、或は革細工等に互り、その繪畫のみならず小工藝品に至る愛著の程を窺はしむるものがあつた。

短時日の間に斯く蒐集展覽されたことはその作品の略々全貌を窺ふに充分であつたが、猶ほ「元祿の面影」「五葉鷲」「偶成」「榕樹の森」「ねむの花」等の主要作品が或は焼失し或は止むを得ざる事情により出陳されなかつたことは遺憾であつた。

陳列目録

明治時代 (所感者)

- 老人 岡田家
- 川邊の雪和田 清
- 夕陽 岡田家
- 初冬晩暉 東京美術學校
- 秋景 松井 春生
- 婦人像 岡田家
- 倚る女 丸山止才夫
- 風景 某 家
- 老人像 岡田家
- 水邊風景 古野 喬一
- 日本髪の少女 岡田家
- 三之橋の家 長尾 一千

本牧風景 吉田 忍	模寫 僧侶(ホルバイン筆)	少女 田中 遜	櫻狩圖 三越呉服店	森 松井 信子	あみもの辻 永	手(習作) 和田 清	池ノ平 岡本 純一
郊外の夕月 岡一 郎	ルバイン筆 東京美術學校	巴里近郊 森 蕙莉	紅葉狩 同	山縣公(習作) 岡田 家	海邊裸婦 中村 研一	柳(岩繪具) 中野 禎子	庭 服部 玄三
冬の日 岡田 家	模寫 行像(レンプラント筆)	巴里公園 渡邊 直達	エスキース 長谷川時雨	天井畫の一部 同	靜物 長谷川時雨	池畔 中里 研三	躑躅 牛島久治郎
農家の娘 同	同	憩ひ 岸本 産衛	子供 山崎 坤象	天井畫の少女 同	花(飛燕草) 衛立 長尾 一平	裸婦 鈴木里一郎	大宮公園 宮崎善喜子
椅子に倚る女 長尾 一平	月夜 同	上海にて 岡田 家	ひなた 某 家	横向きの少女 同	髮梳き 石橋正二郎	横顔 同	基隆港 庄司 乙吉
冬の朝 林 二郎	女の肖像 同	裸婦 中上 錦子	くもり 野間左衛子	芍薬 同	阿賀川風景 土屋 康二	立てる女 右近權左衛門	眞野氏肖像 眞野 文二
解剖圖 岡田 家	隊裸婦 某 家	吉島辰寧氏肖像 吉島六一郎	雪 テームス風景 某 家	婦人像(バステル) 同	ヨネ桃の林 大里 太郎	海邊の娘 同	秋(西芳寺) 神谷 正治
矢調べ 石尾 佐與	樹間の池(巴里) 同	舞子 野間左衛子	背を向けたる女 同	草原(岩繪具) 同	山邊丈夫氏肖像 大里 太郎	臺灣神社(臺灣總督府壁畫下圖) 岡田 家	黃菊 同
海(大磯) 鈴木里一郎	自畫像 岡田 家	子供(バステル) 長尾 一平	母と子 岡田 家	臥せる裸婦 同	水浴の前 石橋正二郎	殿下御上陸の圖(同) 同	舞妓の顔 三井 高精
矢口村の朝 鈴木里一郎	千九百年巴里萬國博覽會 渡邊 直達	風景 長原 坦	庭の一隅 澤田 晴彦	舞妓 同	越後の雲 神谷 正治	井畫(下圖) コスチューム 天	芍薬 土屋 康二
濱の夕暮 東京美術學校	田中伯爵像 田中 遜	風景 同	琵琶湖の夕(バステル) 大里 太郎	山縣公(習作) 某 家	泰(清水より富士) 同	水邊の柳 古屋徳兵衛	野菊 村上 慶三郎
春さき(矢口に) 薄田 晴彦	池畔の秋 鈴木里一郎	風景 同	收穫 服部 玄三	花園(一) 高松宮家	桃の林(大石田横山村) 高木 陰郎	花(矢車草) 大岡 爲三	寒菊 服部 邦行
小磯の濱 長尾 一平	セレス上流 同	同(二)(習作) 同	風景 田村 顯三	ねれん(岩繪具) 同	寺内元帥肖像 寺内 文庫	富士 土屋 康二	加茂川夜景 菅原 榮藏
風景(本牧) 菊池壽太郎	室内 辻 永	同(習作) 柳瀬 俊雄	老人肖像 岩田 藤七	信州杵掛にて 同	湯の山 田中 遜	化粧 伊東 榮	裸婦 平尾 贊平
寺院の内部 内藤 求	凝視 同	京都にて 野崎 俊英	村の道 鈴木里一郎	沼邊(壁畫下圖) 鈴木里一郎	髮を梳く 右近權左衛門	緑の丘 朝川 順	畫室の庭 北澤敬次郎
冬 鈴木里一郎	逍遙(エスキース) 中澤 弘光	小原女 木代 陽三	江戸菊畑 同	沼邊(壁畫下圖) 鈴木里一郎	伊香保 宮地民之助	エスキース 田村 一男	裸婦 巖野吉兵衛
夕暮 長尾 一平	老人像 小林 萬吾	八瀬の里 福島 行信	丘の木立 同	薔薇 侯爵池田伸博	後向の裸婦 同	雪景 某 家	シヨールの女 古野 喬一
風景 同	讀書(下圖) 和田 英作	薔薇(習作) 小川 智	河邊 長尾 一平	薔薇 侯爵池田伸博	朝鮮婦人 六角宇太郎	風景 某 家	住吉ノ入江 神谷 正治
巴里郊外 中野 智正	肖像 織田 萬	グロキシニヤ 山澄 亨一	蓮華草 江藤 純平	裸婦立像 司 忠	人物 渡邊 千冬	風景 竹村 信一	婦人像 關口 隆嗣
セレス河畔の上 廣田 正雄	薔薇の少女 廣田 正雄	某夫人の像 長谷川清次	佛蘭西風景 波多野秀雄	大瀬崎 大岡 爲三	女の顔 笹鹿 彪	窓際 薄田 晴彦	掛を着たる婦人 古屋徳兵衛
流 東京美術學校	西洋婦人 福島 行信	紅衣夫人 澤田 晴彦	模寫 御物聖母 戴冠圖(フアラソチエリコ) 宮内 省	池畔風景 安宅 修二	婦人像 木下 太郎	雪景 同	紅衣の少女 武藤 松次
ムーンドンの夕暮 同	シナイ山 岡田 家	雜草 大里 太郎	大正時代 新渡戸博士(下繪) 緒方 亮平	元四條の橋 金澤 末吉	西芳寺の庭 岡本 純一	化粧 同	ひとみ 池田 古代
西洋婦人 某 家	裸婦 池田 伸博	萩 右近權左衛門	裸體(習作) 瀨野 覺藏	花 山梨梅之進	朝鮮婦人 關口 隆嗣	臥裸婦 同	湖畔 有澤 潤
外國風景 同	伊太利の少女 (バステル) 三井 高精	井野条吉氏肖像 井野 英一	片山津風景 中野 智正	狩野享吉氏肖像 第一高等學校	女の顔 金澤 末吉	夏(高雄附近) 神谷 正治	風景 宇津權右衛門
フアルゴエール 中村 研一	讀書 住友吉左衛門	アザミ 澤田 晴彦	丸鬚の女 小川 智	王子の夕暮 大里 太郎	朝鮮婦人 富澤有爲男	高雄風景 門脇義一郎	銀の階調 中村 英吉
風景 岡野 榮	ホーマ(下繪) 三井 高精	大隈侯夫人像 早稻田大學	裸體(習作) 瀨野 覺藏	若き娘の顔 辻 永	井の頭風景 中野安治郎	風景 河合忠次郎	天女(壁畫) 松屋吳服店
フランスの公園 合田 弘一	白衣 澤田 晴彦	顔(習作) 八代 尚二	片山津風景 中野 智正	肖像 神谷 正治	湖畔 川村 伴三	裸婦 澤田 晴彦	新渡戸稻造氏肖像
老人像 長尾 一平	佛國風景(巴里) 中村 研一			穂積八東博士肖像 穂積 重威	女の顔 中上 錦子	支那絹の前 岡田 家	

- 像 第一高等學校
- 舞子 和田久左右衛門
- 裸婦 宮本直一
- 舞妓 菅原榮齋
- 沼のほとり 某 家
- 浴衣の少女 澤田晴彦
- (湖畔) 郷原 準
- 夏(山) 中里 研三
- 白きペール 佐々木嘉太郎
- 昭利時代 三井 高精
- 波 三井 高精
- 子持山(版畫下) 樋口 正樹
- (圖) 樋口 正樹
- 清水寺 公爵岩倉具榮
- 肖像(習作) 菅原 榮齋
- 木蔭 村上 文策
- 裸婦 原 邦造
- 李郷 岡田 靜子
- 乙女 鬼頭鶴三郎
- 婦人裸像 横山 助成
- (薔薇) 石尾 佐興
- 少女(習作) 森田 元子
- 朝鮮風景 酒井相之助
- むらさき 鈴木里一郎
- 緑衣裸婦(岩繪具) 同
- 裸婦 岸本 彦衛
- 天平の面影 大里一太郎
- 古き昔を偲びて (岩繪具) 岡田 家
- 靜視(下繪) 同
- 裸婦 伯爵藤堂高紹
- 三保より朝の富士(岩繪具) 大里一太郎
- 水邊の柳(岩繪具) 丸善株式會社
- あやめの衣 中村 英吉
- 別府風景(岩繪具) 古屋徳兵衛
- 水邊並木(岩繪具) 同
- 満洲にて 小林泰次郎
- 乙女 岡本 純一
- 薔薇 相馬 愛藏
- 來信 大里一太郎
- 薔薇 土屋 康二
- 朝鮮風景 日比谷平吉
- 肖像 山下 太郎
- 薔薇 東久世秀雄
- 同 門脇義一郎
- 麻の着物 横田 浩
- 薔薇 松本 丞治
- 深緑 服部 玄三
- 佐賀菊 伯爵藤堂高紹
- 水邊裸婦(岩繪具) 古屋徳兵衛
- 風景(岩繪具) 錢高 靜子
- 水邊の婦人 同
- ムードン風景 古屋徳兵衛
- ピラミットの曙 山澄 力藏
- ロンドンの晝 同
- コンスタンチノールブルの夕 同
- ベニス風景 岡田 家
- イスタンブールの夕 同
- 薔薇 古屋徳兵衛
- 富田鐵之助氏肖像 丸善株式會社
- セイロン櫻(パステル) 某 家
- 熱帯風景 竹村 信一
- コロ一の池 侯爵 鍋島直映
- 裸婦 東久世秀雄
- フロレンス風 平岡權八郎
- 景 ベルサイユの庭 加藤 正名
- 門司港 伯爵藤堂高紹
- コロ一の池 大里一太郎
- モオコの一部(カガン、スム) 松本 與一
- アデンの城門 伊藤 豊明
- コロ一の池 阿久津 勉
- アデンの城門 小川桃太郎
- ロオマの郊外 川村真次郎
- ハンガリーの乙女 歌橋 憲一
- ロオマのバラチノ丘 神谷 正治
- ハンガリーの門 平尾 兼平
- 半裸像 松田 義雄
- 裸婦(水邊に立てる) 田中 運
- 大鳥のアンコ(元村にて) 古屋徳兵衛
- 水浴 青柳 隆治
- 薔薇 阿久津 勉
- 裸婦 村松善次郎
- 浴後 池田富次郎
- 裸婦 平尾 兼平
- 座裸婦 岡見 護郎
- 櫻下の裸婦 中村 英吉
- 少女 同
- 森 山澄 力藏
- 薔薇 大里一太郎
- 鳥羽濱島辻 永
- 仙石原 小川桃太郎
- 阿蘇 山一證券株式會社
- 麥(岩繪具) 荒川 實
- 房州千倉海岸 佐野 直吉
- 高原の森 中見川三郎治
- 金時山 古屋徳兵衛
- 裸婦立像 飯田直次郎
- 朝鮮景福宮後庭 小河清太郎
- 菊 伯爵藤堂高紹
- 木蔭 中島 俊郎
- 薔薇 佐藤正次郎
- 綠蔭裸婦 石橋正二郎
- 滿洲紀念京都美術館 高森山より見たる阿蘇 國立公園協會
- 丹霞郷 三國庄二郎
- 金時山 侯爵伊達宗彰
- 慶州佛國寺 侯爵細川護立
- 明治神宮壁畫下 岡田 家
- 同(一) 同
- 同(二) 同
- 秋田風景辻 永
- 裸婦 木代 陽三
- 箱根強羅の紅葉 安宅 修二
- オリブ園より 威神山 右近權左衛門
- 薔薇 土屋 康二
- オリブの樹 長谷川周重
- 下山田秋景 本田啓次郎
- 初春の丘木代 陽三
- 子持山 明治生命保險會社
- 信州安茂里村 藤原銀次郎
- 桃の咲きたる風 跡部 操
- 小豆島 宇佐美完衛
- 李郷 李 王家
- 裸婦 李王家美術館
- 座裸婦 東伏見伯爵家
- 裸婦 伯爵津經義孝
- 伊豆山風景 侯爵徳川義親
- 戸隠高原 大里一太郎
- 裸婦 内田 誠
- 輕井澤 西村重郎兵衛
- 千ヶ瀧 高島屋美術部
- 紀伊湯崎にて 鹽野吉兵衛
- 紀伊白濱 永田 真雄
- 室戸崎風景 伯爵南利英
- 戸隠山 服部 玄三
- 深々園にて 岩田 希芳
- 伊豆の海 鹽野吉兵衛
- 阿茂里 佐治 博
- 伊豆の春室 清次郎
- 長野水源地 久保田靜一
- 櫛梳れる女 黒川福三郎
- 戸隠牧場 小河清太郎
- 裸婦 川村 伴三
- 輕井澤鬼押出 岩田 藤七
- 裸婦 木村 宗一
- 海邊 服部 玄三
- 長野郊外 中村 英吉
- 信州飯綱山下水源地 古屋徳兵衛
- 新那須の初秋 中部 謙吉
- 薔薇 深々 園
- 富士 杉山佐兵衛
- 芦の湖富士 中杉徳兵衛
- 高知城遠望 沖本 政夫
- 肖像 岡本 純一
- 籠坂峠よりの眺め 祖父江重兵衛
- 大涌谷の富士 右近權左衛門
- 支那服の女(岩繪具) 文部 省
- 森の一部 近藤 茂吉
- 熱海の朝 本田啓次郎
- 裸婦 村上 濱吉
- 杏咲く村 青木都之輔
- 山中湖畔 中島 俊郎
- 水邊 塚本 清三
- 海 右近權左衛門
- 那須の火口 森 高子
- 婦人像 毛利 元
- 山中湖 衛藤達三郎
- 高原の池 片野 義治
- 志賀高原 藤田 謙
- 南紀湯崎山上 岸本 彦衛
- 風景 秋 庭
- 福井南城河野にて(一) 右近權左衛門
- 同(二) 同
- 野尻湖より妙高 大川 義雄
- 裸婦 淺田 長平
- 山中湖 渡邊 濟
- 肖像 八代 則彦
- 散策 木代 陽三
- 伊豆山風景 渡邊 隆藏
- うらなる光をうけて樹木は春をまつ(河口湖) 窪谷 藤七
- 伊豆山風景 前田熊太郎
- 河口湖畔敷島の松 右近權左衛門
- 楊柳 大里一太郎
- 磯子より根岸 同
- 河口湖風景 井上 治一
- 裸婦 荒井 一郎
- 新月(河口湖) 前田熊太郎
- 光風會第二十七回展(洋、土) 二月十四日―三月三日 東京府美術館
- 光風會は既に二十七回の展覽會を迎へた。七十名に近い會員の大半も出品して居るが、全般的な安易な制作態度には著しい變化を示して居ない。會員の作品では中澤弘光の「雪國スケッチ」、南薫造の「みのり」、辻永の「湖畔の秋」等があつ
- 水邊の夏 吉田卯三郎
- 伊豆山 八代 武次
- 内海風景(岩繪具) 吉田卯三郎
- 河口湖畔 某 家
- 冬の河口湖 西原 貞一
- 河口湖(富士) 近藤壽一郎
- 岩越國境 服部 玄三
- 河口富士ビューホテルにて 同
- 夕月 同
- 河口湖の富士 同
- 河口湖ノ鳥 岩井 豊治
- 伊豆より大鳥を望む 中土善之進
- 伊豆風景 同
- 伊豆山にて 住友 寛一
- アザミ 田村 顯三
- 編物 黒川福三郎
- 素描、版畫、日本畫七十六點
- 工藝作品三十九點

たが、就中中村研一の「立春」「綠室」の二點は、近來の好調を示すものであつた。新人の作品としては石川滋彦、和田清、森田元子、伊藤悌三、南政善、高宮一榮等の諸作があつた。尙繪畫の外に約五十點の工藝品があつた。

〔搬入〕二八六八點〔入選〕二三七點

〔陳列數〕繪畫三四四點、工藝五二點

〔光風特賞〕池田快造〔光風賞〕渡邊武夫〔新會員〕伊藤四郎、星野正三、土佐

林豊夫、大河内信敬、田村一男、山口猛彦、藤岡俊一郎、市木慶治、須田剋太

〔新會友〕西村愿定、西山信一、岡田又三郎、小田忠、渡邊武夫、高木春太郎、

中尾達、黒田くみ、白石隆一

渡洋一洋畫展 二月十五日―二十一日

大阪・阪急百貨店

阪急日本畫大家展 二月十五日―二十

二日 大阪・阪急百貨店

福井游神堂第二回新作畫展(日)二月

十六日―十七日 名古屋美術俱樂部

伏原春芳堂第二回新作日本畫展 二月

十六日―十八日 京都美術俱樂部

柏舟社第三回展(日)二月十六日―十

八日 京都・朝日會館

大阪繪畫會第四回展(洋)二月十六日

―二十日 大阪・天賞堂畫廊

西山翠嶂塾青甲社小品展(日)二月十

七日―十九日 銀座・資生堂 關尙美堂

主催。

東京高師圖畫研究科發表展 二月十七

日―二十日 小石川・同校

美術展覽會(二月)

吉田博、佐々貴義雄聖戰從軍畫展(洋)

二月十七日―二十二日 日本橋・高島屋

陸軍省囑託として昨年漢口攻略戰に從

軍、又最近岳州の前線に赴いた兩名の寫

生畫を陳列。

日本彫塑家聯盟合同展 二月十七日―

二十五日 東京府美術館

昭和十三年九月當局の銅使用制限に對

處すべく彫塑十四團體を以て組織された

會。會員七十八名が出品した。

青榕社新作日本畫展 二月十八日―二

十三日 大阪・大丸

林鶴雄第三回洋畫個展 二月十九日―

二十一日 丸の内・日本工業俱樂部

蒙張方面における寫生畫を主とし油繪

二十五點を陳列した。

菊池契月塾展(日)二月二十日―二十

二日 銀座・資生堂 關尙美堂主催。

丹阿彌岩吉日本畫展 二月二十日―二

十二日 名古屋・丸善

日本美術學校紫星會展(日、洋) 二月

二十日―二十五日 新宿・伊勢丹

松方蒐集歐洲諸大家版畫展 二月二十

日―二十五日 銀座・青樹社

松方幸次郎蒐集の西歐版畫の一部二百

餘點を青樹社主催で陳列、ブランキン、

ムンク、スタンラン等の銅版、石版が主

なるものであつた。

水野喜作新作陶器展 二月二十日―二

十九日 銀座・松屋

辰美會東西諸大家名作展(日)二月二

十一日―二十五日 日本橋・白木屋

武蔵夜舟蒐集支那現代版畫展 二月二

十一日―二十五日 日本橋・白木屋

日本畫代表大家展 二月二十一日―二

十五日 名古屋・松坂屋 同店美術部主

催。

加藤小林人半島風物展(日)二月二十

二日―二十四日 徳島・教育會館

高橋貞一郎滯佛油繪展 二月二十三日

―二十五日 銀座・資生堂

作者は昭和十二年に渡佛、オットトンフ

リーエツに學び最近歸國した。フオンテ

スプロウ風景」をはじめ十數點を陳列。

東都名家日本畫展 二月二十三日―二

十五日 芝・東京美術俱樂部

白御會第四回展(日)二月二十三日―

二十七日 東京府美術館

關西在住の院展系作家を以て組織する

同會の第二回の東京進出展で、中島采刀

の水墨淡彩「吉野」、佐野光穂の「桃」、

「櫻」、山本大慈の「雪後」等をはじめ會

員の作二十餘點があり、又院友の小島一

谿、横田仙草、上田畦草、石本光太郎等

の贊助出品があつた。

〔白御賞〕「瑞祥四神」細田謹之助、「妓

女圖」北澤映月、「雪後」山本大慈

大野隆徳油繪展 二月二十三日―二十

七日 大阪・三越

陸軍省囑託として一昨年春北支に、秋

中支に從軍、その折の作品に近作を加へ

て陳列した。

高間惣七油繪展 二月二十三日―二十

七日 大阪・美術新論社畫廊

香川縣立工藝學校生徒作品展 二月二

十三日―二十七日 大阪・三越

本田蔭軒南宗畫展 二月二十三日―二

十八日 日本橋・高島屋

羅星會第一回展(日)二月二十三日―

二十九日 大阪・阪急百貨店

角谷二葉堂東都名家新作畫展(日)二

月二十四日―二十六日 芝・東京美術俱

樂部

高須芝山第二回個展(日)二月二十四

日―二十六日 銀座・鳩居堂

桃源會第二回日本畫展 二月二十五日

―二十七日 日本橋・東美俱樂部

東北地方民藝展 二月二十五日―二十

九日 仙臺・藤崎百貨店

コンラツド・メイリ作品展(洋)二月

二十五日―二十九日 數寄屋橋・日動畫

廊

觀光局後援。瑞西の畫家で、昨秋國際

文化振興會、國際觀光局の招聘で來朝し

た。油繪、デッサン等約五十點を陳列。

小野竹齋近作個展(日)二月二十五日

―二十九日 大阪・高島屋

旺玄社第八回展(洋)二月二十五日―

三月五日 東京府美術館

牧野虎雄を指導者とする同會の公募展

で、繪畫三百三十四點を陳列した。牧野

の「枇杷」「けし」「芍薬」は獨自の東洋

調を注意せられ、その他橋作次郎の中支

那に於ける從軍畫三十餘點、新歸朝の佐

藤文雄の滯歐作十點等が擧げられる。

〔入選〕九六人、一五六點〔新會員〕皆

一九

見鶴三、野村豊子、村尾榮〔新會友〕五

十嵐麗雄、梅野醇三、田中田鶴子、黒瀬

雅子、齋藤英太郎〔旺玄社賞〕清水章司

〔M氏賞〕皆見鶴三、以下略

望月玉成作畫展觀(日)二月二十六日

二月十七日 大阪美術俱樂部

東丘社小品展(日)二月二十六日―二

十八日 銀座・資生堂 關尚美堂主催。

會宮一念素描淡彩展(洋)二月二十六

日―二十八日 神戸・畫廊

檜崎鐵香新作畫展(日)二月二十七日

―三月三日 大阪・大丸

東西大家新作畫展(日)二月二十七日

―三月三日 京都・大丸

綵々會第一回展(日)二月二十七日―

三月三日 大阪・大丸

菊池契月門下の松元道夫、磯田又一郎

等二十餘名が新に組織した會。

歐洲名畫模寫展 二月二十八日―三月

三日 日本橋・白木屋

反響社廣瀬操吉主催。有島生馬筆「レ

ンブランド屠殺場の牛」、正宗得三郎筆

「マチス室内」等の賛助出品があり、陳

列數二十餘點。

堀忠義風景畫、岡田行一人物畫展(洋)

二月二十九日―三月三日 新宿・伊勢丹

三月

七星會洋畫展 三月一日―三日 數寄

屋橋・中央畫廊

早春社第三回日本畫展 三月一日―三

日 京都・大丸

涼々會第三回日本畫展 三月一日―三

日 日本橋・東美俱樂部

牧野虎雄日本畫展 三月一日―四日

銀座・資生堂 兜屋西川武郎主催。

日本陶藝研究會展 三月一日―五日

日本橋・三越

舊東陶會系の作家有志を以て成る會で

大森光彦、小川雄平等會員十五名に、地

方出品者八十五名の作を合せ、陳列數二

百五十點であつた。

登内微笑繪畫展(日)三月一日―五日

名古屋・松坂屋

第二十六回大阪美術展(日)三月一日―

六日 大阪・三越

大阪三越が主催する恒例の日本畫公募

展で、成績は左の通り。

〔審査員〕西村翠嶂、堂本印象、中村大

三郎、宇田荻郎、山口華楊、矢野橋村、

川村曼舟、福田平八郎、菊池契月、北野

恆富、水田竹圃、菅橋彦〔搬入〕約三〇

〇點〔入選〕第一入選七點、第二入選六

六點〔推賞並市長賞〕板津謙六、津田芳

子、水野繁

白潮會第一回人形展 三月一日―六日

日本橋・高島屋

岡田三郎助遺作展(洋)三月一日―六

日 大阪市立美術館

東京展の出品物より百三十點を選択陳

列した。

墨和會第一回展(日)三月一日―六日

日本橋・白木屋

奥瀬英三、鶴田吾郎、三上知治三名の

水墨畫展。

忠靈塔設計圖案展 三月一日―六日

大阪・松坂屋

新美術家協會第十二回展(洋)三月一

日―七日 東京府美術館

二科會の會友級を中心に、一水會其の

他の作家を以て組織する。鋭さもしくは

深さを持つ作に乏しいが、一應實質な態

度と明快な畫面効果に感興を誘はれる。

松本弘二、古家新、寺田竹雄、田邊三重

松、近藤光紀等の諸作及び高田力藏の西

歐畫の模寫小品が目をひいた。出品者二

十五名、陳列數百十三點。

半弓會洋畫展 三月一日―七日 大阪

・阪急百貨店

明美會記念展(洋)三月二日―十日

日本美術協會

寺崎武男、五姓田芳柳、高橋卯八等の

同人展。

端館九臯個展(日)三月三日―五日

銀座・鳩居堂

塊人社第九回展(彫)三月三日―十日

東京府美術館

塊人社は昭和十一年以降主線美術協會

の彫塑部となつてゐたが、昨年、協會繪

畫部の解散により舊稱に復し、既往の塊

人社展五回、主線展三回を通算して今回

第九回展を開いた。陳列數六十五點、會

員の作には立體の扱ひにつとに共通した

觀念が認められ、彫塑界における同會の

作品そのものとしては既に類型に陥り、

もしくは追隨に過ぎぬものが少くない。

主要な作品として安藤照の「座像」、三澤

寛の「腰かけた像」、小室達の「習作」、泉

谷喜一郎の「裸像」、小笠原貞弘の「試作

A」、清水禮四郎の「胸像」等が擧げられ

る。

〔搬入〕二七點〔入選〕六點

當代畫蹟木刻竹器作品展 三月五日―

七日 芝・東京美術俱樂部 本山陶堂堂

主催。

白御會第四回展(日)三月五日―七日

大禮記念京都美術館

北島淺一個展(洋)三月五日―九日

銀座・青樹社

九室會第二回展(洋)三月五日―十日

銀座・三越

二科展九室の出品者を以て組織する

會で、繪畫、立體、寫眞、コラーージュ等

四十餘名の作百八點を陳列した。繪畫で

は伊藤久三郎、山口長男、吉原治良、藤

田金之助、橋本徹郎の諸作、東郷青兒の

賛助出品「漁夫」等が主な作で、ほかに

歐風のダダ、アブストラクション等を模

倣したものが見られた。

三春會第一回展(日)三月六日―十日

日本橋・三越

三越の主催で伊東深水、奥村土牛、堅

山南風、中村岳陵、山口蓬泰、山川秀峰

兒玉希望、郷倉千毅、廣島晃甫、森白甫

等十名の新作を集めた。

柏舟社第二回繪畫展(日)三月七日―

十日 名古屋・松坂屋

働く男 ○高島達四郎
富士山上空 松尾 一郎
花籠 阪口 茂雄
室内 若林 和夫
静物(一) △今西 中通
同(三) 同
同(二) 同
波切風景(A) 諏訪 邦一
島 木村 武男
石のある風景 守屋 清邦
三叉橋附近 戸塚 正夫
寺院 △中尾 彰
壺 同
黄昏 原田 潤
石膏と手袋 渡邊 保
南支風物(一) 福島 勝三
同(二) 同
學窓 横山 精一
行人 齋田 武夫
土に遊ぶ 同
夕景 中津瀬忠彦
庭 庭田 定男
風景 島田 徳美
風景 新見棋一郎
若ノ湖 長島 常吉
にはとり 竹花 忍
土 梅原 茂
凍池 ○松島 一郎
男と紫陽花 同
カンナ 同
潮岬 同

ユリ 矢田 千秋
池 織田 彰子
池の中 同
少女の像 洪 逸約
山上展望 小川 文雄
胡同 北京外城 三枝 毅
静浦 金 海
白い建物のある風景 井黒 四郎
湿地帯 今井 憲一
秋晴れ 同
雪景(B) 遠藤 正三
女 長島菊次郎
新高へ行く道 瀧地 憲
月と人物 岡部 繁夫
銀座八丁 安戸 章
發掘する娘 行本 正義
枯木と雪 宗像 逸郎
男 △富樫 寅平
水浴 同
水郷 同
奥入瀬 松田 春雄
二人の男(A) 氏原 忠男
動物標本 齋藤 準兒
湖水風景 森竹 五郎
海 市村 力
蓮の實 三村 行夫
つゝじ 郡山 三郎
五月 △浦久保義信
月白 同
樂人 西山三武郎
北京 高橋 忠彌
夕映 中野 京
小女と犬 永井 宏

海龜 ○須田國太郎
黄比叡 同
卓上静物 同
峰 赤堀 佐兵
高原 同
食指ある花 吉川 鶴平
藻花 田村 一二
森 鬼木 成人
裸婦立像 奈知安太郎
女三人 同
野と女 同
花飾の女 同
裸婦三人 同
重慶の人々 木村 忠
風 小栗 美二
斷層 井上 絵
黄昏 高木 四郎
木の實 河村はる子
繩手風景 調天淨成
受天祿 山下 武夫
伊豆風景 菅野 圭介
北都 同
山脈 同
水邊 熊代 駿一
鳩舎 藤井 正俊
廢趾サン ドミニヨ 飯田 實雄
噴煙 岡 周未
温室A 龜山 倫
貝類 不破 正彦
風景 米田 弘
池(藤) 荒瀬 榮悦
(遺作)花店 故中村長明

(遺作)童女
洗濯 小川マヤ子
人物 同
草の上 秋山 ミチ
扇を持てる女 中野繁次郎
大阪 小島三郎一
土俵入 佐野 健治
熱海冬 間間 久
雪の山 太田 芳朗
大山 田中 太
用水池B 牧野 靜夫
南國の山路 山田 榮二
クロトンの葉か 同
由布遠望 山村 猛猪
白ウエールの少女 人江 一子
少女 境田 繁
スケート場 古田 茂正
コンボジン 通秀
庭 佐々木 毅
山村の雪 石井 國義
母子 金 晩燭
工場と部落 石原 眞一
苦力飯店 小林 明
海近き丘 時任 千秋
蒙疆(三) △中間册夫
同(一) 同
同(二) 同
房總の岩 廣田 縣夫
會議 長江 貞一

巖 小堺 克巳
山村風景 村田 東作
椿のある風景 宮下 廣吉
静沼 近藤 二
平泉風景 齋藤 春樹
森 谷口五二郎
花 村上 益子
丘上の女達 清水 鍊徳
ノートルダム寺 院 同
雪の梅花映 矢澤 義龍
お日様と娘達 安基 豊
樹林 大内のぶ子
緑園 同
石灰窯跡 今井三七男
庭 伊藤 彪
岩 金乗 達郎
平壤ノ女武門 洪俊 明
山手あたり 所 輝夫
帯江廢鏡(A) 木村 初男
會陽(備前) 高原 政孝
鳥山 妹尾 正雄
眺望 同
風景(A) 平田 初郎
黄昏 結田 信
新緑 島 良一
旅人 △水野 佳一
曠原 同
熊谷守一近作油繪展 三月十一日―十四日 數寄屋橋・日動畫廊
近作二十五點、八號の「北牧村」の外

民族の挿話 △水野 佳一
憩ふ男 遠川 二郎
家 久保 吉文
石屋川風景 西條 茂
訪づれ 加藤 文生
林道 岩間 貞美
鳩 井上 妙子
生産(牛乳殺菌) 葛見安治郎
落婦 加藤 陽
洗濯 同
雪景 大島 正
風景 山田房之介
裸婦 新羅 篤介
雪ノ山 服部 木齋
柿の木の風 山本 衛
朝 鐵指 公藏
居留地の丘と 同
荒廢 長 秀彦
月の暈 △熊谷登久平
砂 同
旅愁 同
驢馬と人 福士幸二郎
静物 市岡 正彦
工場内 小泉 伯夫
静 服部 勳
けしの花など 鳩川 誠一
芭蕉 菅野 大乗
静物 派 東 勺

はいづれも六號以下の小品である。作者独自の内観的要素が顕著で、「安良里港」「海」及び裸婦を描いた一聯の小品等が注意された。
仲田菊代第四回個展(洋) 三月十一日―十四日 銀座・養生堂
物故諸大家油繪展 三月十一日―十五日 銀座・青樹社
日 銀座・青樹社
平野長彦個展(日) 三月十二日―十四日 銀座・鳩居堂
日 銀座・鳩居堂
萩谷巖、林倭衛、木下孝則洋畫展 三月十二日―十五日 日本橋・三越
近藤浩一路繪畫展(日) 三月十二日―十六日 名古屋・松坂屋
池田遙邨、上村松篁中支那スケッチ展 三月十二日―十九日 大阪・大丸
眞道黎明新作日本畫展 三月十三日―十五日 名古屋・丸善
關戸伊三郎個展(洋) 三月十三日―十六日 大阪・天賞堂畫廊
立型會第一回同人展(洋) 三月十三日―十七日 銀座・三味堂
西人社第六回展(洋、彫) 三月十三日―十七日 福岡・縣公會堂
吉田博一日本畫展 三月十三日―十八日 大阪・美術新論社畫廊
日 大阪・美術新論社畫廊
日本彫刻家協會第四回展 附武井直也遺作展 三月十三日―二十二日 東京府美術館
會員十四名、會友十名を以て組織する同會の公募第四回展で、入選作を加へた七十一點及び本年急逝した武井直也の遺

作三十五點を陳列した。同會の制作には一面、文化人的教養が注意されながら彫塑の技巧においていまだ末梢的な脆弱さを免れぬものが多い。主要な作として、加藤顯清の「青年」、野々村一男の「支那服の女」、畝村直久の「思索」、雨田光平の「樂手」及び菅沼五郎、林是の諸作があり、早川巍一郎の「春の作」は感興がやや表面的となつた。

武井の遺作は大別するに滯佛時代、歸國後の院展時代及び近年の三期となる。滯佛作は概ね師ブルデルの影響を受けた嚴しい研究的作品である。歸朝後院展時代の終りに及んで次第に歐風を離脱するが、主題に浪漫的な傾向を帯び、作者としては過渡期にあるを思はしめる。近年に入り、専ら大理石像を製作するに及び一轉して新な量感の把握を示し、故人の本領を生かしはじめたかのやうである。昭和七年の「立女」、同十一年の「男」、同十四年の「髮」「瞑想」等代表作に挙げられるであらう。

武井直也遺作陳列目録

- 滯歐期 (自大正一二年至昭和二年)
- 首(男) 女立像
- 首(女) 女立像
- 首(女) 岩波寛藏
- 首(女) 大正一五年院展
- 男立像 昭和二年院展
- 男立像 女座像
- 男立像 女座像
- 男座像 女座像

昭和期

- 勝利 三年院展 ブールデル 八年院展
- 座像 三、四年頃 失題 八九年頃
- 「みのり」年代未詳 合奏 九年院展
- 風 六年院展 男 一二年文展
- 水浴 外山卯三郎繪 女立像 一四年日本彫刻家協會展
- 二人女 七年院展 同
- 青年 同 同
- 立女 七年院展 同 一四年文展
- 女 八年院展 髮 一四年作
- 音樂家 同 瞑想 一五年作
- 外。油畫二點、版畫一三點、年代未詳
- 松坂屋日本畫大家展 三月十四日—十日 大阪・同店
- 形式工藝美術會第一回展 三月十四日—十八日 大阪市立美術館
- 昨年大阪に於て結成された會で、金工、漆、竹工、染色等會員の作を陳列した。
- 園外社第一回日本畫展 三月十四日—十八日 大阪市立美術館
- 昨秋、瀧秋方を責任者とし、流派に拘泥せず組織された同會の公募第一回展で宇田萩郎、小野竹喬、上村松篁、津田青楓、矢澤弦月等十二名が審査に當つた。陳列數十餘點、渡邊大虚の「山村にて」、立松玉泉の「朝霧」、吉村忠夫の「大伴の靱」、吉田秋光の「鴨」、瀧秋方の「鶴」、小杉放庵の「銀鷄」等が主なる作であつた〔搬入〕一三二點〔入選〕二五點〔Y氏賞〕高木富三
- 京都工藝院第四回展 三月十四日—十日

大禮記念京都美術館

- 八日 大禮記念京都美術館 同人の作品の外に入選作百三十餘點が陳列された。
- 〔知事賞〕國領素夫〔京長賞〕八田泰造〔工藝院賞〕奥村究果〔獎勵賞〕加納白子、新開邦太郎、永峯秀作、中條昇、松室重信
- 日本人形社第四回展 三月十四日—十九日 大阪・三越
- 坂正臣遺墨展 三月十四日—十九日 大阪・三越
- 綵尚會第二回展(日) 三月十五日—十七日 日本橋・東美俱樂部
- 關尚美堂主催。橋本明治、西村卓三、山本丘人、新井勝利ほか八名の新作を集めた。
- 角浩滯歐作品展(洋) 三月十五日—十九日 數寄屋橋・日動畫廊
- 作者は昭和十二年より二箇年佛國に滞在し、サロン・チュイレリーの會員である。五十號の「ノートルダム寺院」をはじめ二十餘點を發表した。
- 寫生派コペル第一回展(洋) 三月十六日—十八日 數寄屋橋・中央ギャラリー
- 京都繪畫專門學校、同美術工藝學校々々友會展 三月十六日—十八日 大禮記念京都美術館
- 春虹會第六回展(日) 三月十六日—二十日 日本橋・三越
- 京都畫壇の代表的作家を集めて毎春三越が開催する展覧である。今年は例年に比べて力の籠つた佳作が見られず、他の

畫商展と大差のない成績である。大さは二尺五寸巾横物、或は二尺巾堅物の程度で、主だつた出品は竹内栖鳳の「城外霞色」、川村曼舟の「閑庭」、西山翠嶂の「幽春」、上村松園の「橋」、宇田萩郎の「鴨」、石崎光瑤の「寒江」、榊原紫峰の「老梅」、福田平八郎の「春水」、中村大三郎の「菊慈童」等、陳列總數十五點。

- 三上知治、三國久、濱地清松三人展(洋) 三月十六日—二十日 大阪・美交社
- 玉舎春輝個展(日) 三月十七日—十八日 名古屋美術俱樂部
- 日向井潤吉、高井貞二、吉田謙吉支那風物スケッチ展 三月十七日—二十一日 銀座・青樹社
- 童林社第八回展(洋、影) 三月十七日—二十三日 東京府美術館
- 龍發介富士洋畫展 三月十八日—二十日 丸之内・日本俱樂部
- 第四回名古屋工藝展 三月十八日—二十二日 名古屋・商工會議所
- 名古屋市、名古屋商工會議所、名古屋工藝協會の共催。今回は輸出工藝獎勵の趣旨を以て第一部創作工藝、第二部輸出工藝とし、審査を飯野逸平、板谷波山、津田信夫の三名に依頼した。
- 〔搬入〕二二一點〔入選〕第一部九八點 第二部四七點〔陳列數〕第一部一四九點 第二部六〇點〔市長賞〕横山安吉〔會頭賞〕多和田勝之〔賞〕一〇名〔佳作〕一五名
- 中野安治郎個展(洋) 三月十八日—二十日

十二日 名古屋・丸善

長谷川昇近作展(洋) 三月十八日—二十三日 銀座・三昧堂

三昧堂所蔵の油繪十一點を陳列、二十號の「裸體(A)」、「上高地」、「とらんぶを弄ぶ女」、「鳥語」等色彩効果にすぐれ充實した展観であつた。

詩と美術社第一回展(日) 三月十九日—二十一日 新宿・伊勢丹

登内微笑近作個展(日) 三月十九日—二十一日 京都・大丸

西晴雲南北支那風物畫展(日) 三月十九日—二十三日 日本橋・高島屋

高間惣七油繪個展 三月十九日—二十三日 銀座・資生堂

近作油繪二十點を展観。一時の立體派的な試みをやめて、寫生に基く作者みづからの自由詩を描いてゐる。「孔雀」、「室内」等を主な作とし、例の如くいんこなどの小鳥や、花では蘭花を好んで題材とした。

山川永雅、石川竹邨繪畫展(日) 三月十九日—二十三日 名古屋・松坂屋

長屋勇洋畫展 三月十九日—二十三日 大阪・美術新論社畫廊

中村貞以塾青桃會第一回展(日) 三月十九日—二十四日 大阪・松坂屋

新挿繪第三回展 三月十九日—二十四日 銀座・三越

佐藤梅軒東大作家新作展(日) 三月二十日—二十一日 京城・美術俱樂部

多摩美術學校第五回卒業生成績展 三月二十日—二十一日 世田ヶ谷・同校

柚木玉邨南畫展 三月二十日—二十四日 岡山・金剛莊

獨立美術協會々員小品展(洋) 三月二十日—二十三日 數寄屋橋・日動畫廊

須田霞亭近作展(日) 三月二十日—二十三日 銀座・鳩居堂

前田竹房齋花籠展 三月二十日—二十四日 日本橋・三越

兒玉畫塾第四回展(日) 三月二十日—二十四日 日本橋・三越

兒玉希望門下の作品展で、陳列數四十點。若々しさが漲ると共に流行の様式化を行ふものが多い。裝飾的な奥田元宋の「柳鶯をとるべく、希望の賛助出品」春雪」は、艶麗な徳川時代風俗を描いたものであつた。

京都美術工藝品展 三月二十日—二十四日 京城・丁子屋 京都市主催。

全關西洋畫協會第十四回展 三月二十日—二十七日 大阪市立美術館

二科會系に屬する同會の公募展で、鍋井克之の「梅溪」、國枝金三の「嵐山春雪」をはじめ福島金一郎の「鹽山海濱」、伊谷賢藏の「張家口物資交易場」、田村孝之介の「裸婦」等の作が挙げられる。

〔搬入〕三二一八點〔入選〕二四一點〔陳列數〕三一六點〔新會員〕西阪修、石井元、玉澤潤一、津田周平〔新會友〕下高原龍巳、高橋進、高須操、兒玉幸雄、別車博資〔全關西朝日賞〕河野通紀、福井勇、戸島宇雄〔朝日洋畫會賞〕西阪修

以下略

鈴木壽雄個展(洋) 三月二十一日—二十四日 日本橋・白木屋

郷倉千靱個展(日) 三月二十一日—二十四日 日本橋・三越

近作十點、裝飾的な様式化を行つた双幅の「雷鳥」「泰山木」等が挙げられる。

佐野蘆水新作展(日) 三月二十一日—二十四日 大阪・三越

西村五雲遺作展(日) 三月二十一日—二十五日 大禮記念京都美術館

昭和十三年物故した西村五雲の遺作展が大禮記念京都美術館の主催で開かれた御物「秋茄子」及び久邇宮家御所蔵「老松二鶴」の御貸下を賜はつたほか、蒐むる所六十一點、大家の遺作展に屢々例を見る生涯の全作品を網羅するものと類を異にし、數においては寂しさを感じさせたが、作品の選擇には相當に意が用ひられ、作者の最も優れた部分を代表させる上にはほゞ遺憾のない陳列であつた。

化粧の閑 一五 京都 伏原 利造

昭和時代 御物 秋茄子 七

久邇宮御貸下 老松ニ鶴(双幅) 八

觀世音 一二 京都 飯田 新七

山の幸川の幸 一三 大阪 靱 仲次郎

枇杷 同 神戸 小曾根貞松

冬光 一〇 東京 安藤 兵部

寒渚 一三 同 山崎 種二

梅雨霽れ 同 兵庫 伊藤竹之助

布袋 一 京都 廣田茂市郎

園裡即興(大額) 一三 同 本 館

葡萄栗鼠 同 岐阜 岩田芳之助

砂丘 一〇 東京 渡邊 實

清湍 一三 同 杉山金太郎

麗春 同 同 奥山 畑司

後庭初夏 一二 兵庫 中村作次郎

虎 同 東京 小西長次郎

麥秋 同 大阪 柴 清一郎

明けやすき頃 同 東京 某 家

麥秋 同 同 文 部 省

新菜鮮魚 同 東京 成瀬 省一

秋霽 一三 同 川崎八右衛門

風蕪る 同 京都 山口 三郎

日照雨 六 東京 東京美術學校

咆哮 四〇 東京 増田 義一

まきばの夕 四四 同 黒木 三次

秋興(六曲一雙) 二 京都 松居豊三郎

老猿 一一 同 林 新助

港(額一面) 一四 同 粕淵幸太郎

大安日 一五 同 土田 ソノ

觀劇所感 同 同 植村與一郎

春寒 一一 東京 横澤 清造

狗兒 一三 京都 某 家

冬暖 九 東京 平尾 賛平

午閑 一二 京都 榎 樺太郎

山果秋味 一一 東京 山中吉郎兵衛

林泉鶯鶯 一二 大阪 山中吉郎兵衛

日照雨 六 東京 東京美術學校

泉 六 東京 東京美術學校

義一 六 東京 東京美術學校

三次 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

三郎 六 東京 東京美術學校

美術展覽會(三月)

- 飛泉 七 東京 塚本定右衛門
- 雨 一一 島根 大井 修一
- 寒江 七 東京 塚本定右衛門
- 午閑 八 滋賀 岡崎芳太郎
- 今朝の花 一一 兵庫 某 家
- 梅日和 同 東京 某 家
- 春宵 同 京都 某 家
- 閑日 六 東京 平尾 賛平
- 秋酣欣禽 一一 三重 森 喜兵衛
- 助六由縁江戸櫻 三 東京 市村羽左衛門
- 白菊(扇面型) 一一 京都 岩井 武俊
- 笹百合(扇面型) 一一 大阪 岡島 眞藏
- 文樂所感 五 高松 細溪宗次郎
- 野外春興 三 京都 土井 久吉
- 淀小景 一一 大阪 橋本藤次郎
- 紅蜀葵 一一 同 靱 仲次郎
- 白川女 一一 京都 村瀬末次郎
- 薰風清爽 一一 島根 大井 修一
- 春の海 一一 兵庫 前田蕉太郎
- 夜櫻 六 京都 大橋 理祐
- 猛虎 一一 同 杉浦治郎右衛門
- 集 九 東京 岩岡新次郎
- 素描(五點) 一一 大阪朝日新聞社
- 素描(二點) 同 大阪 某 家
- 素描(七點) 同 京都 某 家
- 綵尚會第二回展(日) 三月二十二日—
- 二十四日 京都・大丸
- 關尚美堂主催翠嶂、契月、印象三畫塾

連鎖展(日) 三月二十二日—三十一日
京都・大丸

榎木久太油畫展 三月二十三日—二十
六日 岡山・金剛莊

六日 岡山・金剛莊
粟業研究所試作品展 三月二十三日—
二十七日 福岡・岩田屋

連袖會第三回展(洋) 三月二十三日—
二十七日 銀座・青樹社

安井會太郎門下の同人油繪展。
姉崎魏洋畫小品展 三月二十三日—二
十九日 大阪・白愼堂

十九日 大阪・白愼堂
關外社結成第一回展(日) 三月二十三
日—二十九日 日本美術協會

日—二十九日 日本美術協會
東光會第八回展(洋) 三月二十三日—
四月三日 東京府美術館

四月三日 東京府美術館
例年の如く公募による展覽會で、今回
はセザンヌ、アンリ・ルツソー、アマン
ヂャン等を特別陳列した。會員の諸作で
は熊岡美彦の「森の放牧」、齋藤與里の
「阿蘇の噴煙」、野口謙藏の「白梅」、佐藤
一章の「信州の山」、渡邊浩三、山下大五
郎等の諸作が主だったものである。

郎等の諸作が主だったものである。
〔新會員〕松岡正直、辻利平、家永驥三
郎(新會友)安達良雄、福井芳郎、河井
達海、西寺鐵舟(無鑑査)鹽津誠一、廣
本森雄、福本かつる、八藤勲人、筒井茂
雄(東光賞)野澤寛(M氏獎勵賞)熊岡
正夫、後藤愛彦 Y氏獎勵賞以下略

正夫、後藤愛彦 Y氏獎勵賞以下略
棚橋慶心堂諸大家名畫展(日) 三月二
十四日—二十五日 名古屋美術俱樂部

棚橋慶心堂諸大家名畫展(日) 三月二
十四日—二十五日 名古屋美術俱樂部
新興美術院第三回展(日) 三月二十四
日—三十一日 東京府美術館

日本美術院を離脱した元院友有志を以
て組織する同會の公募展で、同人の作九
點、準同人三點、入選四十五點を陳列し
た。この會の作風は院展風のおさまりと
新日本畫流行の様式化と青龍社風等が混
在し、やや雜然とした印象を免れぬ。同
人では田中案山子の「海邊七題」が感興
に富み、茨木杉風の「湖山の巻」は長卷
紙本、細部的に粗放を免れぬが力作とし
て擧ぐるに足る。其他、小林三季の「み
な姫物語」及び小林菓居、吉田澄舟、保
尊良朝等の諸作が注意をひく。

尊良朝等の諸作が注意をひく。
〔搬入〕二〇六點(入選)四五點(新興
美術院第二賞)福島秀行(同第三賞)吉
田欽之助(平野賞)重松謙吉(新同友推
舉)福島秀行、吉田欽之助、重松謙吉、
眞島元枝

眞島元枝
奧瀨英三洋畫展 三月二十四日—三十
一日 大阪・阪急百貨店

奧瀨英三洋畫展 三月二十四日—三十
一日 大阪・阪急百貨店
日本美術學校卒業生制作展 三月二十
五日 淀橋・同校

日本美術學校卒業生制作展 三月二十
五日 淀橋・同校
双美社主催榊原紫峰扇面畫展 三月二
十五日—二十七日 銀座・資生堂

双美社主催榊原紫峰扇面畫展 三月二
十五日—二十七日 銀座・資生堂
東京美術學校卒業成績展 三月二十五
日—二十七日 上野・同校

東京美術學校卒業成績展 三月二十五
日—二十七日 上野・同校
木村義男個展(洋) 三月二十五日—二
十九日 大阪・美術新論社畫廊

木村義男個展(洋) 三月二十五日—二
十九日 大阪・美術新論社畫廊
鍛金協會金屬美術工藝品展 三月二十
五日—三十一日 日本橋・三越

鍛金協會金屬美術工藝品展 三月二十
五日—三十一日 日本橋・三越
内藤伸新作木彫展 三月二十六日—二
十八日 大阪・高島屋

内藤伸新作木彫展 三月二十六日—二
十八日 大阪・高島屋
德力富吉郎富士三十六景版畫展 三月

二十六日—三十日 上野・松坂屋
永田春水個展(日) 三月二十六日—三
十日 上野・松坂屋

永田春水個展(日) 三月二十六日—三
十日 上野・松坂屋
鬼面社第二回展(洋) 三月二十六日—
三十日 銀座・三越

鬼面社第二回展(洋) 三月二十六日—
三十日 銀座・三越
青木繁遺作展(洋) 三月二十六日—三
十日 大阪・青樹社

青木繁遺作展(洋) 三月二十六日—三
十日 大阪・青樹社
東西名家新作邦畫展 三月二十六日—
三十日 日本橋・高島屋

東西名家新作邦畫展 三月二十六日—
三十日 日本橋・高島屋
高島屋主催で東京及び京都の中堅、新
進級の作品約三十點を集めた。

高島屋主催で東京及び京都の中堅、新
進級の作品約三十點を集めた。
東京鐵道局美術部展 三月二十六日—
三十日 萬世橋・鐵道博物館

東京鐵道局美術部展 三月二十六日—
三十日 萬世橋・鐵道博物館
松尾巽陶磁展 三月二十六日—三十一
日 大阪・三越

松尾巽陶磁展 三月二十六日—三十一
日 大阪・三越
岸田劉生、小出橋重遺作對照觀賞展
(洋) 三月二十六日—三十一日 神戸・
畫廊

岸田劉生、小出橋重遺作對照觀賞展
(洋) 三月二十六日—三十一日 神戸・
畫廊
八木岡春山個展(日) 三月二十六日—
三十一日 大阪・大丸

八木岡春山個展(日) 三月二十六日—
三十一日 大阪・大丸
シドニー日本工藝品展國內展示會 三
月二十七日 日本橋・高島屋 國際文化
振興會主催。

シドニー日本工藝品展國內展示會 三
月二十七日 日本橋・高島屋 國際文化
振興會主催。
本欄八十五頁參照。

本欄八十五頁參照。
春の青龍社第八回展(日) 三月二十七
日—三十一日 日本橋・三越

春の青龍社第八回展(日) 三月二十七
日—三十一日 日本橋・三越
近來益々商品化の傾向が多く見える日
本畫展のうち、春季における目覺しい活
動を示すものとして、春の青龍社展は注
目すべきものである。清新の氣を漲らせ
内容も充實して、好ましい成績をあげて
ゐる。

川端龍子の牡丹を寫した「猷華」は諸格の畫面で、花に水々しさをよく捉へた。

「前庭訪春圖」は獨特の色彩のつけたてで、一氣に仕上げたが、草體が少し崩れすぎた憾みがある。社人では坂口一草が「月二題」に頗る潑刺清新の作を見せた。細部に難もあり技巧的に完成したものといへぬが、畫興は平凡でない。近代的な取材とこの會らしい作風となり、表現の上に最も効果ある成績を示したのは依田季夫の「撮影小憩」であつた。結城正雄の「横」は氣どりなく、平凡な自然に正面からとりついて堂々たる表現を示す。この態度と力量とは十分認めらるべきである。時田直善の「甘睡」、市野亨の「秋興」、木村鹿之介の「雪鱗」など夫々個性的な特質が見られる。利谷双樹の「風」も面白く、鈴木茂子の「君ヶ代蘭」はこの作者に發展の可能性を思はせるものがあつた。

「青雲賞」「撮影小憩」依田季夫、「横」結城正雄、「秋彩々」内池良男、「高麗雄」銀治貫一

興亞女性手藝第二回展 三月二十七日
—三十一日 新宿・三越

現代水彩畫會第二回展 三月二十七日
—三十一日 日本橋・三越

國畫會第十五回展(洋、販、工、寫) 三月二十七日—四月五日 東京府美術館

國畫會展は既に今日在野洋風畫展中の極めて特色ある存在となつてゐる。思想的混濁や野性がなく比較的小畫面に藝術

的感興を盛りんとする全體的な傾向は、この會をして統一あり調利ある感を抱かしめる。梅原龍三郎の「雲中天壇」、北京「長安街」は共に支那旅行の所産であり、前者は意欲的な又動的な表現であり、後者は輕快な筆致に成れるもの。又「薔薇圖」は赤繪の壺に單純化せる花を豊かな色調と輕快な筆觸によつて描き、作者の好調を思はせる。青山義雄の「櫻鳥」と「靜物」はその賦彩に漸く落ち付きを示して來た。宮田重雄が戰塵の餘暇寫した雲崗石佛の三點は、畫筆に遠ざかつてゐた作者の作品として無難である。その他大森啓助の「鯉」、馬越榊太郎の庭園風景、土田文雄、椿貞雄の諸作がある。又新人中注目される庫田菱の「竹林」、柿並木久保守の「庭」「梅」は共にその獨自の様式化を進め、中村鐵、山崎隆夫、三崎六郎、養田つや子、喜多村知、辻愛造等夫々注目された。又此の會には林俊衛が招待出品として二點を出陳したことを附記する。版畫に於ては平塚運一、棟方志功が夫々尤作を示し、畦地梅太郎、橋本興家、前田政雄等又個性ある作品を示した。

彫刻は前年解散して今年見ることが出来なかつた。工藝は富本憲吉がその氣品に於て獨自であり、高岡徳太郎の諸作又見るべきものであつた。

〔搬入〕繪畫一五七三點、版畫二六六點
工藝二九七點、寫真一九四點〔入選〕繪畫一〇五點、版畫二八點、工藝九〇點、

寫真四六點〔陳列數〕繪畫一六九點、版畫三八點、工藝一四四點、寫真四九點、

〔新同人〕〔繪畫〕中村鐵、香月泰男、山崎隆夫〔工藝〕徳力孫三郎、矢部連光

〔寫真〕木村伊兵衛、中山岩太〔國畫獎學賞〕〔繪畫〕三崎六郎、養田つや子、上田清一、石原宏策、久本弘一、國松登、小林邦報〔版畫〕畦地梅太郎、前田政雄

〔工藝〕稻垣稔次郎〔寫真〕北角玄三

〔以下略〕

出品目録 (〇同人)

繪畫

はげいとう 田中 仲男

柵と壺 香月 泰男

枯カシナ 同

朝顔 松本文一郎

外人墓地と家 長谷川正波

水車 小村 邦報

千日紅 山崎 隆夫

花と布 同

ハツ手花 同

猫 木内 廣

女 同

山湖晴曇内本 寛一

柿の木(杏ノ咲ク) 同

ベルンヤ猫 三崎 六郎

ポインセチヤと 菜花 同

猫とサボテン 同

遊ぶ踊子 久本 弘一

三人の踊子 同

祭日の女 同

鶏頭 上田 清一

靜物 同

裸婦花模様 伊藤 彌太

芽ばへ 内堀 勉

ボナベ小景 同

コブラ獲る女 同

花 海川 博一

紅葉谷 〇大橋 孝吉

白磁大鉢と果物 同

山麓 田中 信之

風景B 濱田 直記

北京長安街 同

雲中天壇 〇梅原龍三郎

薔薇圖 同

松林 土井 六郎

箱の生る頃 黒木 貞雄

魚群 旭 五良

雲崗石佛頭 〇宮田 重雄

雲崗石佛頭 同

演の丘 東 晴司

夕映 小牧 盛行

夕映えの櫻鳥 〇別府賢一郎

暮る、櫻鳥 同

山中淺春兒玉 勝次

芭蕉 〇山田 正

溪流 同

蒙氈 同

梅 高瀬 捷三

聖 〇立石 鐵臣

青綠 同

夕やけ富士 〇椿 貞雄

春の山 同

仁王門 〇杉本 健吉

羅漢 同

石切場 〇河野 通勢

風景 同

牡丹 田 規

眞鶴風景 福留 義介

濁流(河北省井陘) 〇眞垣 武勝

南窓 同

風景1 〇宮坂 勝

同 2 同

町工場 鈴木 正二

春雪 鹽野 博

窓 尾田 龍

春光 〇林 樞

海邊小丘 同

針しごと橋本 橘	静日 濑川 駿三	静物 中路 忠重	大野ヶ原遠望(伊豫)	新生 前原 松緒	宇宙への幻想 平井 康雄	型染帶地一 廣本 長子	漆畫落葉二枚折 森 夜蘭
池邊紅葉 〇益田義信	海邊の枇杷樹 同	網乾場 大江 正美	黄道十二宮 川上 澄生	T君像 吉川 富三	チュウリップ 〇野島 康三	同 二同	漆畫袖の芽丸盆 同
芥子 同	温室 同	五月の寫生 内田 國三	士官一人兵士十人 同	海面の静物 田頭 良助	ぎんれい花 同	八ツ手兩切貫入 濱 達也	漆畫枯蓮二枚折 同
白上衣 上河邊美知子	耶馬溪一〇村上 巖	遺作八點 故同人佐藤豊吾	「呵呖譜」・二菩薩釋迦十大弟子 坂方 志功	ほゝえむカマキリ 同	花 齊木 幸子	田舎圖葉書箱 同	緋文赤繪花生 繁
白牡丹 鈴木 青	同 二同	曇日 〇辻 愛造	あそび女達 小野 忠明	野外人物長瀬 慶三	花 同	銘八起花籠 飯塚 薰石	金消黄銅し、うどごぜんたちばな紋箱(未完) 増田 三男
秋の山(月輪) 同	安乗 同	山莊 〇大谷 房吉	夏終る(瀨名湖) 關野幸一郎	紅蜀葵 同	花 同	ていぶるかけ 井上 秀雄	金消銀し、うどごの花紋眞宮 同
櫻島 〇青山 義雄	暮る海(小豆島) 同	二の丸附近 橋本 興家	裸婦 關野幸一郎	萬歳!! ハナヤ勘兵衛 同	花 同	綴織帶(佛手柑と百合根) 河合 隆三	おんばこ模様丸テンプル掛 増田邦太郎
同B 同	静物 同	酒場 金子 三藏	瀨戸) 大城 貞雄	少女 木村伊兵衛	花模様ハンドバツク 安藤富美子	緋帶(名古屋) 同	静物(額) 同
アネモネと果物 同	朝 〇土田 文雄	踊子 上西 力	新秋 同	雪中印象 錦古里孝治	花模様の花帶留 古山 英司	白磁壺 小城久次郎	机上筆箱 松山 祐利
風景 山内 顯吾	演 同	故郷村落北澤 收治	血の静物 上野 長雄	女と煙草 井深 徹	ツク 同	花籠 木村 武雄	むくげ文染附食籠 並木十四郎
静物 木城 明雄	静物 八里 茂子	ユーハイム菓子 春村たゞを	肖像2 〇ブノワ 同	メカニスト 同	巻苜蓿 同	銀茶匙 河野 健美	枇杷紋茶壺 野上 秀三
花 同	枯れ蓮 龍沼 青	港 黒木 貞雄	同 3 同	數理 米田太三郎	花火 中居 正男	夾紗乾漆彩漆若葉文丸盆 木村 天紅	更紗紋小皿(五客) 同
南粵小姑 〇長谷川春子	農婦 〇佐藤 哲三	上げ潮の放水路 蓬田兵衛門	同 1 同	水邊 山村 一平	砂紋 中島長一郎	夾紗乾漆彩漆花菱文四方盆 同	染付朝顔鉢 新妻 晴夫
花 〇長谷川春子	針仕事 同	六瓣集より 谷中 安規	修君像 下澤木鉢郎	紙と木との交流 松原 重三	盛鉢 同	練上平角鉢 木村 一郎	染付アシ鉢 同
風景 尹 仲 植	夜の静物 島内 キミ	地下室 稲垣 清松	鳥遊ぶ 中川雄太郎	アダム 中山 崑太	葉の圖喫煙具 同	柿軸面取筆筒 同	木製ハンドバツク 丹羽 一郎
風景 伊 仲 植	ぶん〜 青山 寒	鏡見る女 同	南豆の海笹島 喜平	早春 同	草の繪變り六角 同	盛花器 唐杉 榮四	指環 ABCDE 〇奥村 博史
風景 伊 仲 植	大連風景 〇石ヤ	早春 〇柏木 俊一	雪の山莊 島山 佛成	イープ 同	草の繪變り六角 同	花挿 同	帯止 大月投網子
風景 伊 仲 植	墓地 永原 綾治	椅子に寄る 廣田 旺子	雨後落陽 諸江 一郎	NOCTURNE 中島 幸次	草の繪變り六角 同	草花帶止 金田 正芳	指輪 同
風景 伊 仲 植	休める二人の女 〇仰木ゲルトリード	酒場の見える風 堀内 唯一	神域 山田 佐吉	DUETTO 同	草の繪變り六角 同	風と浪 松竹 正也	指輪 同
風景 伊 仲 植	奥多摩風景 同	景 〇山村 誠	蕨 〇福原 信三	秋 吉川 喜作	草の繪變り六角 同	草花繪變り銘々皿(五枚) 森 正	指輪 同
風景 伊 仲 植	國府臺秋色 同	棒 〇山村 誠	静 吉川 喜作	初夏 大島熊太郎	草の繪變り六角 同	草花繪變り銘々皿(五枚) 森 正	指輪 同
風景 伊 仲 植	杭州 〇平塚 運一	立秋 同	静 安藤不二夫	北海道晩秋 今井 卯八	草の繪變り六角 同	草花繪變り銘々皿(五枚) 森 正	指輪 同
風景 伊 仲 植	連雲港 〇大淵 武夫	少女 中村 茂好	静 安藤不二夫	眼 村林 忠	草の繪變り六角 同	草花繪變り銘々皿(五枚) 森 正	指輪 同
風景 伊 仲 植	朝顔 辻 文雄	静物 同	静 安藤不二夫	寂 同	草の繪變り六角 同	草花繪變り銘々皿(五枚) 森 正	指輪 同
風景 伊 仲 植	緑の静物 山田 千秋	花 〇山下 晶彦	静 安藤不二夫	寂 同	草の繪變り六角 同	草花繪變り銘々皿(五枚) 森 正	指輪 同
風景 伊 仲 植	朝園 〇馬越外太郎	子供 〇山下 晶彦	静 安藤不二夫	寂 同	草の繪變り六角 同	草花繪變り銘々皿(五枚) 森 正	指輪 同
風景 伊 仲 植	樹間 同	大同石佛 同	静 安藤不二夫	寂 同	草の繪變り六角 同	草花繪變り銘々皿(五枚) 森 正	指輪 同
風景 伊 仲 植	椎樹 同	同 二同	静 安藤不二夫	寂 同	草の繪變り六角 同	草花繪變り銘々皿(五枚) 森 正	指輪 同

初夏の花輪帶止

漆器手箱空襲

綴織九帶

綴織片側帶

獅子岡コタツ掛

自由岡テール

泰山木の花岡變

雲梅竹岡ハンド

花蝶文方形壺

鐵釉刻花文壺

木枯の趾陶額

木の葉帶止

色繪箱

白磁水滴

色繪(B)壽字箸

同(A)壽字箸

青貝柏繪手箱

青貝竹繪手箱

菖蒲帶止

海老之圖喫煙具

くろも會第七回展

一三十日 銀座・資生堂

百日草之岡大皿

海老之岡角瓶

燕膏之岡角皿

白菜之岡大皿

華文面取壺

草文面取瓶

蟹之岡大皿

陶板染附黍

色繪蘭花白磁瓶

色繪獨活の實

堅牢染角形クツ

堅牢染丸形クツ

草花文の四曲屏

手糸ハンドバツ

柿袖抜文壺

白覆輪鉢

草花文薄器

同

薄莫入

柳莫入

乾漆盛器

乾漆鉢

同

同

同

同

佐藤武造個展

丸之内・美術俱樂部

RYB第一回洋畫展

三十一日 銀座・紀伊國屋

讀畫會第三十三回展

日一四月八日 東京府美術館

荒木十畝一門の藝展

傳統的技術を尊重する態度が見受け

られ、十畝の「鶯」、森白甫の「春陰」を

はじめ木本大果、竹原啞風、松久休光等

の勉強振りが注目された。

〔讀畫賞〕中島晁華〔獎勵賞〕岡世紀、

中田草春

太平洋美術學校卒業生制作展

三月三十日 下谷・同校

九品庵東西大家新作展

日一四月一日 芝・東京美術俱樂部

小川千壺個展

日一四月四日 銀座・三越

中川郷一郎テツサン個展

三月三十一日 四月四日 大阪・天賞堂畫廊

四月

原田直康洋畫小品展

四月一日一五日 大阪・白慎堂

三木俊二洋畫個展

四月一日一五日 大阪・青樹社

池田朋昌個展

すべき日本畫を商工省及び紐育桑港萬國博覽會協會の主催で展覧した。出品豫定作家は、伊東深水、堂本印象、大智勝親、川村曼舟、川崎小虎、堅山南風、上村松園、金島桂華、宇田荻郎、野田九浦、山口蓬春、前田青邨、福田平八郎、兒玉希望、荒木十畝、郷倉千靱であるが、十畝蓬春、荻郎の作品は、此の内示展に示されなかつた。

陳列目錄

伊東 深水 宿雁 宇田 荻郎

雨後の曉堂本 印象 虹 野田 九浦

南島春色 大智 勝親 秋影 山口 蓬春

朝の巖島川村 曼舟 日本武士 前田 青邨

沼の生活 川崎 小虎 雪 福田平八郎

雨間 堅山 南風 雨晴 兒玉 希望

鼓の音 上村 松園 玄明 荒木 十畝

烏骨鷄 金島 桂華 月映 郷倉 千靱

「紀元二千六百年パノラマ」四分一模型

阿部清定洋畫個展

四月二日一四日 日本夜光塗料製造所

藤井芳子洋畫個展

四月二日一五日 京城・三越

昭和美術美術第七回展

四月二日一六日 日本橋・高島屋

文展第四部の作家有志を以て組織する

會で、香取秀眞の「結びも文様花瓶」、板

谷波山の「青瓷花瓶」、北原千鹿の「水指」

等の賛助出品をはじめ會員十二名の作を

陳列した。

神津港人油繪展

四月二日一七日 大 阪・三越

横山大觀紀元二千六百年奉祝記念展

四月二日一七日 日本橋・三越、高島屋

明治、大正、昭和の三聖代に亘り、五

十年の間繪事に専念し來れる横山大觀は

皇恩の深きに感じ、又皇紀二千六百年を

奉祝する熱意から、山と海各十題併せて

二十點を完成し、前者を高島屋に、後者

を三越に於て展覧した。いづれも三尺幅

の横幅で、此の兩つの主題に於て、彼は

永年の研究を基とし、壯大にして極めて

變化に富む構圖と水墨或は著彩の練達せ

る技巧を示した。即ち海十題に於ては、大

海の冬の巨濤、巖に打ちよする月夜の濤

或は磯の岩間に寄せて戯るる水泡を描き

山十題に於ては富士を中心とし、旭日の

下に輝ける、雲間に隱見する或は櫻花の

彼方に聳ゆる等の靈峰の姿態をあらゆる

角度と四季の變化より描いてゐる。全畫

面にはその独自の意欲が一貫して居るが

その裡に深き寫實的研究の在ることが窺

はれた。とに角その熱意と努力は此の一

聯の作品にあふれ、觀者をして改めて此

の巨匠に對し敬意を表せしめるに充分で

あつた。

因に此の全作品の賣上金は陸海軍へ獻納されるものである。

目錄

海に囚む十題 曙色

黒潮 浦溪

松韻濤聲 濱海

波騒ぐ 黎明

海潮四題 朝暉

山に因む十題 (春、夏、秋、冬) 雨霽る

乾坤輝く 龍躍る

雲峰四題 (春、夏、秋、冬) 砂丘に聳ゆ

朝見香城個展 (日) 四月三日—五日

名古屋・丸善

朱葉會第二十二回展 (洋) 四月三日—

七日 日本橋・白木屋

尙彫會第一回展 (彫) 四月四日—八日

銀座・紀伊國屋

三雲祥之助油繪展 四月四日—八日

銀座・青樹社

日本木彫會第九回展 四月四日—十三日

東京府美術館

陳列四十六點。情力的に製作をつゞけ

てゐるといふ風なものが多く、彫刻精神

の稀薄さと共に木彫の特色を示す技術的

練磨も次第に失はれつゝある。内藤伸は

十點を出品して勉強ぶりを見せたが、未

完成や石膏型をまじへ、特記する程の作

を示さなかつた。小品人形の類が多く、

相撲をとり扱つたものも數點あつたが、

中では山口伊之助の「龍撰」(石膏)が面

白く、比較的大作では西田明史の「少女」

山脇敏男の「靜淨」が注意をひいた。

新構造社第一回小品展 (洋) 四月五日

—七日 新橋・藏前工業會館

阿以田治修近作展 (洋) 四月五日—九日

銀座・鳩居堂

作者の東京に於ける最初の個展で、油

繪二十餘點を陳列した。

宮原様溪南畫展 四月五日—十五日

岡山・金剛莊

綠彩社圖案展 四月六日—七日 京都

朝日會館

鈴木清作陶展 四月六日—十日 銀座

天賞堂

一成會第一回展 (日、工) 四月六日—

十日 銀座・三味堂

白倉二峰個展 (日) 四月六日—十一日

新宿・伊勢丹

獨立美術協會第十回展 (洋) 四月七日

—十四日 大禮記念京都美術館

同會主催。會員並京都出品者の作品百

點を陳列した。

日本畫院第二回展 四月七日—十七日

東京府美術館

一昨年文展系の日本畫家を以て組織し

た同會の第二回展で、前年より一般に充

實すると、もに畫風に新局面を示した。

即ち、ぬり繪の手法を以て形式美を追求

する新日本畫が、主流を占めてゐる。川

崎小虎の「磯風」、東山魁夷の四部作「季

節と高原」、穴山勝堂の「白い幹」、望月春

江の「つばき」等をはじめ吉田秋光の「待

春」、松本委水の「雲晴」、岡世紀の「松林

のある風景」等がその主なるものである。

其他野田九浦の「軍茶利明王」、矢澤弦月

の「畫舫にて」、大矢大響の「椿」、大和繪

風の吉村忠夫の「後徳大寺」、岩田正巳の

「忠犬獅子」などが擧げられ、授賞の宮

部沙久彌の「鶏頭花」は眞面目な勉強を

示した。

〔搬入〕三四一點 (入選) 一〇七點 (陳

列數) 一一六點 (日本畫院賞) (第一席)

東山魁夷 (第二席) 宮部沙久彌 (第三席)

三河義太郎 (N.A.W氏賞) 稻垣虎之助

川村憲邦 (S氏獎勵賞) 湯田眞砂緒、關

主税、藤原芳春、久連石雨董、川合清

川島理一郎第五回個展 (洋) 四月八日

—十三日 銀座・資生堂

作者は軍の囑託として最近渡支するこ

と三回に及んだが、今回の個展には北京

の寫生及び蘭の靜物等油繪十二點及び素

描を陳列した。

春陽會第十八回展 (洋) 四月八日—十

七日 東京府美術館

春陽會は逐年嚴選主義を以てその充實

を計りつつあり、本年の入選率には昨年

より一層の嚴しさが認められた。嚴選獎

勵の結果、一般入選畫の質は逐次向上し

他の洋畫團體を凌ぐ状態であるが、一方

に於て春陽會風の技術偏重の弊が著しき

を加へつつあるのを見逃し難い。一樣な

中間の色調、粗い筆觸、畫面効果の太味

な強調等ははやもすれば先入主的な畫因

を追ふ類型的な技巧であり、或る空虚さ

を免れ難い。會友に擧げられた高木勇次

二見利節、田中壽太郎、柴田恕夫、授賞

の本莊赴、土屋實等は達筆であると共に

技巧に共通の趣味性が顯著である。

本年佛國から歸朝した岡鹿之助及び高

田力藏が會員に推された。岡の緻密な點

描風の構成、高田の堅實な畫風は會にお

ける新鋭な存在たるを失はない。一般會

員の制作では、小穴隆一の「靜物」、今關

啓司の「富士を見る」、足立源一郎の「春

の五龍」、小林徳三郎の小品、中川一政の

「安良里」、石井鶴三の「相撲」、横堀角次

郎の「池畔」等が主要なるもの、中堅で

は水谷清の大作「松雪」及び朝鮮の寫生

鳥海青兒の沖繩の諸作、伊藤慶之助の

「姑娘」、倉田三郎の「球戯」、加山四郎の

「風景」等が力作として注目をひいた。

會友級では眞田久吉の小品、戦線から歸

還した原精一のスケッチ、鬼塚金華、上

野春香、遠藤典太、岩田榮之助、吉田達

磨の諸作、會員に推擧された前田藤四郎

の版畫等が擧げられ、津田正周の「シシリ

の空」は洗練された感覺を示す。外に

新會友の南城一夫の畫風に特色があり、

入選では佐藤昌胤、藤野龍、加賀孝一郎、

大嶺政寛、高橋貞一郎等を擧げ得る。

〔搬入〕二一〇二點 (入選) 一九八點

〔陳列總數〕三二四點 (會員推擧) (四

月) 岡鹿之助、高田力藏 (十一月) 前田

藤四郎 (會友推擧) 柴田恕夫、田川勤次

木下公男、高木勇次、二見利節、田中壽

太郎、南城一夫 (春陽會賞) 本莊赴、大

嶺政寛、土屋實、野崎新右衛門

出品目錄 (氏名ABC順)

(○會員、△會友)

北京風景 (北海 婦人洋裝品店

公園) ○足立源一郎 荒木 氏夫

北京好日同 新緑 淺木勝之助

春の五龍嶽 花 青木 達彌

同 白濱風景同

山で働く秋口 保波	畫集をみる少女 本莊起	風景 今竹七郎	靜浦小景 ○國盛 義篤	麻浦の村 ○水谷 清	春庭夕景 △新沼 杏一	魚 同 鹿之助	花四天と娘 △齋藤清二郎
鶏を呼ぶ同	うさぎ箱 同	ひとり 井手すさの	江ノ浦の山 同	河ぞいの街 同	樹間春光 同	花 同	寺小屋 同
琉球 ○鳥海 晋兒	秋日 林 淳夫	居留地の家 井上 重生	櫻 ○栗田 雄	朝鮮童女 同	窓 南城 一夫	堀割(サン・ドニ) 同	靜物 佐藤 篤郎
沖繩風景 同	菊 同	宇治川 石井彌一郎	靜物A ○加山 四郎	うたふ女 同	風景 一同	積雪(オ・ヴェルニユ) 同	鴨と鳥 同
琉球の墳墓 同	壇輪 同	森 石川 武彦	靜物B 同	紅葉の森 同	花と少女 野村 千春	波止場(ブルターニユ) 同	畫室 同
修理のある屋根 同	靜物 蛸千枝子	靜物 同	風景A 同	花芭蕉 △前田藤四郎	お友達 同	廢墟(ミデイ) 同	少年 同
同 二 同	城外の平利 同	秋果など 石黒平三郎	同 B 同	藍型 同	若い人達 同	無題 中村 伸	蹴球 同
那覇小景 同	磯 堀内 唯生	庭の一隅 同	カーネーション 同	琉球の魚市場 同	窓邊 西川 勝彦	靜物 △鬼塚 金華	菜園 同
教會の裏張 萬傳	庭 原田平治郎	芭蕉と猫飯田 衛	窓の花 同	橋上家族 同	窓邊 西川 勝彦	入江 同	Zロ(裸婦) 同
河 一 △遠藤 典太	庭 原田平治郎	カンナ 伊川 廣治	池畔 同	風船露店 同	少女坐像 同	花を持 △大澤鉦一郎	Organism du dynamis humain 同
同 二 同	樹間 同	すゞき 同	小徑 同	剝製靜物 森 松治	風景 野崎新右衛門	紅葉 同	林檎など 佐藤 春夫
松原 同	みしん 同	たらと赤かぶ 同	靜物 北野 萬平	室内 宮下貞之介	盲人 同	紅葉 同	果物籠 同
新島 同	婦人座像 早川 芳彦	花 岩崎又二郎	ニコライ逆光 同	麥畑 宮田清之助	少年 丸茂 孝	寝椅子 同	アマリス 同
サイネリヤ 同	機械靜物 同	晩秋 同	静物 同	花 松本ふみ江	少女 同	首里風景 大嶺 政寛	果物籠 同
夢佳之卷 二見 利節	飯店 原田 武男	龍門の雪 同	レイの姉妹 兒玉 彦三	濱の枯草 松村 頼夫	工場 長田 三郎	琉球風景 同	庭 同
靜物 舟木 茂子	女 同	鷄舎のある風景 伊藤 敏博	奏でる女達 同	竹 森田 博	笠岡の海中田 政夫	琉球壺屋風景 同	晩秋 鈴木 光基
鷄の靜物 古淵 暉草	早春風景 廣津 長貞	人物 稻熊 賢一	土人親子 同	御社 三原 繁	雨の後に長岡 一敏	赤寺の壁小川 緑	庭 須藤千穂子
教會 舟木 章	相撲 ○石井 鶴三	憩へる少年 ○小林徳三郎	午後 小林 邦二	死面を持てる女 同	曇りのポーチ 信清 誠一	教會の横手 同	石膏と野菜 同
梅林 逼迫 徹郎	苦力と娘 ○伊藤慶之助	江の浦金櫻山 同	窓 小泉倫之助	サーカス綱渡り 三井 永一	神戶麗日能戸 幸	舟のある風景 小野 忠弘	庭 須藤千穂子
本など 伏見 洋子	唱太鼓 同	江の浦の残照 同	ランプのある靜物 神山 實夫	支那兵遺児 三島 富丸	靜物 ○小穴 隆一	人夫頭と人夫達 尾崎 利夫	庭 須藤千穂子
新緑 古館 午郎	姑娘 同	花と小みかん 同	花 賀茂牛之輔	シクラメン 三木朋太郎	町役場(モレエ) ○岡 鹿之助	同 同	同 同
磯 藤野 龍	北京天安門 同	みかんの枝 同	入江 同	朝食の後 同	禮拜堂(モルクラジス) 同	同 同	同 同
海女 同	北京の夏 同	窓 ○倉田 三郎	海邊靜物 加賀孝一郎	唐屏の前村田三千子 同	聖堂(ラオン) 同	同 同	同 同
出漁 同	薄暮 同	港 同	競馬 同	安良里一 ○中川一政	小學校(シヤンジス) 同	同 同	同 同
戦地にて 同	高根山 △岩田榮之助	庭 同	ジャズ 同	群像 △中谷 泰	村役場(ノルマండిイ) 同	同 同	同 同
鶴沼小景 同	人物A 同	壺 同	春の海 笠松 春彦	群像 △中谷 泰	南方街道(バイヨン) 同	同 同	同 同
グラジオラス 同	人物B 同	球戲 同	けしの花 同	群像 △中谷 泰	同 同	同 同	同 同
江の島の道 同	牡丹 ○今關 啓司	静浦風景 ○國盛義篤	踊 木下 公男	群像 △中谷 泰	同 同	同 同	同 同
草履 本莊 起	富士を見る 同	同 二 同	馬 同	群像 △中谷 泰	同 同	同 同	同 同
裏口 同	廻廊と鼓樓 同	同 三 同	松雪 ○水谷 清	群像 △中谷 泰	同 同	同 同	同 同
草家 同	家 今竹 七郎	同 三 同	朝鮮風物 同	群像 △中谷 泰	同 同	同 同	同 同

アルカイック彫刻のある風景 ○高田 力藏
 エレクテイオンの人像柱同
 アテネの裏附同
 ノルマンデーの老婆同
 静物 △藤室全三郎
 琉球布のある静物同
 琉球布の前の海芋花同
 牡丹 ○田中善之助
 柘榴同
 シンリーの空 △津田 正周
 マダム・ツグの肖像同
 梅ヶ丘風景 高橋貞一郎
 同 同
 洞候所のある丘 田邊 謙輔
 曇り日の伊豆 同
 樹間初秋同
 もろこし土屋 實
 立つ女 同
 横はる女同
 池畔 同
 夏の岩手山 手塚文四郎
 枯木立 田家 秀雄
 百合 同
 サークラス 田中壽太郎
 鶏の静物同
 唱ふ女 同

海の見える窓 高木 勇次
 窓 同
 車窓 同
 少年工 同
 水車 豊泉 惠三
 生田 同
 木立 田川 勳次
 樹間 同
 冬 同
 人形の有る静物 寺澤 正敏
 ヒマラヤ△上野春香
 静物 同
 花 同
 讀書する人 牛田 喬彦
 樹 鶴岡 毅
 猫を抱く女 ○若山 爲三
 花 同
 廟と馬車△和田蔵一
 潤れた池 同
 秋 ○横堀角次郎
 初夏 同
 沼邊 同
 山麓の春 同
 池畔(井之頭に) 同
 静物 △吉田 達磨
 瀧 一 同
 同 二 同
 赤い壁△楊 佐三郎
 教會堂の道 同
 食卓 吉澤 正之
 切制道の見ゆる風景 山田隆三郎

三人の女 山田 伸吉 海岸 吉村 眞喜
 静物 同 野 由比種三郎
 水邊の女達 同 ポートハウス 同
 コーヒー店 矢田 桂一 琉球 山川 清
 孔雀明王 吉川 清 琉球墳墓 同
 不動明王 同 車輪 山田 義夫
 開北風景柳 水二郎 俯瞰 同
 アマリリス 同 群童 同
 山崎利津子 内海冬景矢野 眞胤
 徳永観林、鈴木朱雀合同個展(日) 四月九日—十一日 日本橋・東美俱樂部
 塊藝會第八回彫刻展 四月九日—十三日
 日 名古屋・丸善
 塗師淡齋作陶展 四月九日—十三日
 日本橋・三越
 三宅克己水彩畫展 四月九日—十三日
 銀座・青樹社
 高橋卯八、大島龍雄近作油繪展 四月九日—十三日 大阪・美術新論社畫廊
 詩と美術社主催東西名家新作日本畫展 四月九日—十四日 日本橋・高島屋
 粟田九品庵東西大家新作日本畫展 四月九日—十四日 神戸・大丸
 小柴錦侍洋畫展 四月九日—十四日 大阪・松坂屋
 神庭白黎繪畫展(日) 四月九日—十四日 大阪・三越
 八炫社同人陶藝新作展 四月九日—十四日 京都・大丸
 黒田重太郎洋畫個展 四月九日—十四日 大阪・阪急百貨店
 平田郷陽第三回人形展 四月九日—十

四月 大阪・松坂屋
 折柴會東西大家新作畫展(日) 四月十日—十二日 芝・東京美術俱樂部
 今中素友個展(日) 四月十日—十二日 福岡・玉屋
 造型新現實第二回展(洋) 四月十日—十二日 銀座・紀伊國屋
 矢部友衛個展(洋) 四月十日—十三日 數寄屋橋・日動畫廊
 京都新銳作家繪畫展(日) 四月十日—十四日 名古屋・松坂屋
 二科春季美術展(洋、彫) 四月十日—十四日 日本橋・高島屋
 會員及び會友の作約百點を陳列した。鍋井克之の「蘆の湖」、正宗得三郎の「杏」、野間仁根の「春耕」等は小品ながら美しく、黒田重太郎、北川民次、田村孝之介、田邊三重松、伊藤久三郎等の諸作も目をひく。彫刻は二點であつた。
 廣本季與丸個展(洋) 四月十日—十七日 新宿・東陽畫廊
 茱利會第一回展(洋) 四月十一日—十五日 銀座・菊屋畫廊
 美術文化協會第一回展(綜合) 四月十一日—十九日 東京府美術館
 昨春獨立美術協會を離れた福澤一郎及び彼に隨ふ作家が結成した會で、公募による第一回展を開催した。前衛派の團體では、同會以外に美術創作家協會(舊自由美術家協會)及び二科系の九室會がある譯である。出品種目は洋畫、日本畫、彫塑、寫眞、産業美術(ポスター、圖案)

等で、陳列數二百二十七點。大部分は超現實派或は抽象派の影響を蒙つてをり、模倣の域を出ないが、會場には一應若々しい雰圍氣が認められた。福澤の大作「山西圖」(對幅)は必ずしもイズムに捉はれず、主題繪畫として感覺の新鮮さと逞しい筆力を認むべく個性豊かな作であつた。其の他北脇昇、巖光、麻布三郎、阿部芳文、土井俊夫、三崎孝雄、小川原脩、糸園和三郎、土屋幸夫、寺田政明等の諸作はいまだ試作の域を出ない。むしろポスター圖案等の應用美術方面における會員の活動が注意された。
 (入選) 九六點(六三名)(美術文化賞)
 金子英雄、吉川三伸、早瀬龍江
 狩野晃行第二回日本畫個展 四月十二日—十四日 銀座・鳩居堂 明朗美術聯盟後援。
 福田翠光新作畫個展(日) 四月十二日—十四日 大阪・高島屋
 柳瀬正夢北支風物油繪展 四月十二日—十五日 銀座・龜屋
 皐月鶴翁、中野晚香二人展(日) 四月十二日—十五日 大阪・天賞堂畫廊
 庫田琴近作油繪展 四月十二日—十六日 銀座・三味堂
 最近獨自の裝飾的畫風を認められてゐる作者が近作十點を求龍堂並兒屋の主催で陳列した。主なる作は三十號の「竹林」「麥」、二十五號の「藤」「柿」等。
 茨城美術第八回展 四月十二日—十八日 水戸・茨城會館 しばらく新聞社主催

石山貞勝第二回洋畫個展 四月十三日
—十五日 銀座・紀伊國屋

樋口一郎戦線スケツ子展 四月十三日
—十五日 岡山・金剛莊

松方蒐集歐洲繪畫展 四月十三日—十
七日 大阪・朝日會館 大阪山中商會東
京青樹社共同主催。

古屋正壽個展(日) 四月十三日—十九
日 新宿・伊勢丹

須田國太郎油繪小品展 四月十四日—
十七日 銀座・資生堂

獨立美術協會の會員で、油畫技巧の日
本化に一つの役割を擔ふ作家として注目
されてゐる。六十號「坂」、二十號「雨」、
其他鳥を描いた一聯の小品等十二點を陳
列した。

綾朋會彫金第九回展 四月十四日—十
九日 日本橋・三越

日本美術協會第一百回展(工、彫、寫
版) 四月十四日—二十九日 日本美術協
會

同協會の第一百回展は彫刻、工藝品
の外に寫眞及び版畫を陳列。應募出品總
數は三百三十三點(百八十八名)、鑑査の
結果入選せるもの二百三十點(百五十一
名)で外に無鑑査二十七點(二十五名)
合計二百五十七點を陳列した。尙參考品
として帝室博物館及び毛利公爵家所藏の
時代衣裳を展覧した。

〔授賞〕(二等賞)「彫刻」「茶姥」翁朝
盛、「若草」福井庸賢(工藝)「彫金象嵌
飾皿」三井義夫、「竹雀文田口釜」加藤

忠三郎、「青銅双鶴文花瓶」山本能民、
「鑄銅花器」和泉湧清、「蠶繭線彫文花
瓶」安原喜明、「彫漆盆」増田敬象、「乾
漆花瓶」森三樹(寫眞)「仲よし」村田
半七(三等賞)「彫刻」「紅い花」錦引弘
一、「鶉」居崎青峰、「溪流を望む」吉川
不二雄(工藝)「歡呼」菊地五道、「牡丹」
神山寛暢、「花琳机」小笠原梅茶、「銀大
皿」飯田喜代鏡、老松「鶴飼康次、「鍛金
黄銅十二面花瓶」河内宗明、「鑄銅蝶文
花瓶」林萬壽人、「青銅總文花瓶」會田
富康、「銀瓶」原直樹、「青銅廣口花器」
堀如眞、「青銅花瓶」堀晴伸、「鑄銅透筆
筒」市橋雅堂、「青銅魚文花瓶」木村庄太
郎、「錦欄手海老花瓶」岡本爲治、「天目
釉珍果文花瓶」加賀月華、「爽朝文庫」泉
篤彦、「櫻喫煙具」岡田貢陽、「蔓草丸盆」
森夜潮(寫眞)「雨後の湖畔」近藤白鹿、
「冬」山根天眞、「湖上獨走」錦古里孝
治、「山村の秋」馬越謹參

同人會第十五回表裝美術展 四月十五
日—二十日 東京府美術館

戸田觀美堂第十回新作畫展(日) 四月
十六日—十八日 日本橋・東美俱樂部

高田浩近作小品展(洋) 四月十六日—
十八日 銀座・紀伊國屋

平田松堂新作畫展(日) 四月十六日—
十九日 日本橋・三越

小山敬三近作油繪展 四月十六日—二
十日 銀座・青樹社

風景畫二十點、「松籟」、「駒ヶ嶽遠望」

「桂河畔」など調へられた硬い色彩感、
鳥瞰的な構圖等に最近の特色ある畫風を
見せた。

宮原明長近作畫展(日) 四月十六日—
二十日 日本橋・高島屋

新興美術院第三回展(日) 四月十六日
—二十一日 大阪・阪急百貨店

木谷畫塾八千草會第七回展(日) 四月
十六日—二十一日 大阪・大丸

市婢會展(洋) 四月十六日—二十三日
新宿・伊勢丹

構造社第十三回展(彫) 四月十六日—
二十八日 東京府美術館

同會恒例の公募展で、入選作四十四點
を併せ總數九十八點を陳列、別に和田垣
良雄の番外作二點があつた。齋藤素巖は
習作八點及び「安藤先生像(レリーフ)」、
「白石先生像」、「故高橋是清子爵像」等
を出品、習作の中には奉祝展出陳の「日
は昇る」のコンポジションがあつた。安
永良徳の「凝集せる群像」、宮地寅彦の
「愛兒」(「ボルゾイ」は夫々の様式化によ
る作。其他野村公雄のレリーフ「ヴィナ
スの出帆」、柚月芳のアルトメント使用の
「波」、後藤清一の「髮」、河村龍興の「寫
眞」、寫實的手法の進藤武松の「女」等が
主だつた出品である。外に山畑阿利一の
「音信」、新に會友に擧げられた井手則雄
の「録されたる歌」、瀬戸團治の「女の
顔」等が注意をひく。

〔搬入〕二三三點(入選)四四點(會友
推薦)瀬戸團治、井手則雄(研究賞)井

手則雄

清水樂山作陶展 四月十七日—二十一
日 名古屋・松坂屋

長谷川昇洋畫展 四月十七日—二十一
日 大阪・松坂屋

東都十大家新作展(日) 四月十七日—
二十一日 神戸・三越

月明會主催「季節、春」の展覧(日)
四月十八日—二十日 名古屋・丸善

院展俱樂部第一回作品發表展(日) 四
月十八日—二十日 名古屋・丸善

小杉放庵日本畫鑑賞會 四月十八日—
二十一日 大阪・松坂屋

「紅羅雲」「新柳」等紙本畫十點を陳列
した。

栗原忠二遺作展(洋) 四月十八日—二
十二日 大阪・美交社 同店主催。

日本畫研究資料展示會 四月十八日—
二十二日 銀座・三味堂

横川毅一郎の造形美術學會では鑑賞資
料として現存作家及び文晁、玉堂等の素
描、畫稿の類を陳列した。

石川誠個展 四月十九日—二十一日
銀座・資生堂

素顏社第十回洋畫展 四月十九日—二
十一日 銀座・紀伊國屋

吉田和三郎主催八絃會第一回新作日本
畫展 四月十九日—二十一日 芝・東京
美術俱樂部

九室會第二回展(洋) 四月十九日—二
十三日 大阪・朝日會館

紀元二千六百年奉祝日本水彩畫會第二

十七回展 四月十九日—三十日 東京府美術館

同會恒例の水彩畫公募展で、石井柏亭中澤弘光の小品をはじめ、中堅では春日部たすくの「網場」、早川國彦の「林檎園」中西利雄、荻野康兒、小山良修等の諸作が注意をひくが、全體として不振の感を免れない。陳列數三百八十二點。

〔搬入〕九四五點〔入選〕一九四點〔第一賞〕山崎政太郎〔三星賞〕石川新一、齋藤求〔みづる賞〕野村英雄〔王様賞〕松原茂右衛門〔ベルネ賞〕飯島八郎〔ホルバイン賞〕加藤孝一〔東亞賞〕小泉政孝〔MO賞〕飯島幹〔紀元二千六百年記念賞〕荒谷直之介

東郷青兒個展(洋) 四月二十日—二十四日 日本橋・三越
花と少女を主題とする油繪二十六點を陳列した。

和田和一齋花籠展 四月二十日—二十四日 日本橋・三越
八星三代子洋畫展 四月二十日—二十四日 大阪・三角堂

春陽會名古屋展(洋) 四月二十日—二十五日 名古屋・鶴舞公園美術館 名古屋新聞社後援。

院友第五回展(日、彫) 四月二十日—二十五日 銀座・松坂屋

日本美術院に屬する院友俱樂部の作品展で、繪畫部三十三名、彫塑部十三名の作を陳列した。

現代創作版畫大展覽會 四月二十日—

三十日 名古屋・後藤版畫店

奉祝皇紀二千六百年第一美術協會第十二回展(洋) 四月二十日—三十日 東京府美術館

陳列數は油繪、水彩を併せ三百八十八點。御厨純一の「庭の菊」、三國久の「外金剛」、河邊梅村の「原野に立つ」、高橋亮の「援將臨檢」等が主なる作であつた。尙一室に會員會友の舊作を一點づつ回顧陳列した。

〔搬入〕一二六四點〔入選〕一八一一點〔第一美術賞〕荒木菊次〔栗原獎勵賞〕田口堅太郎〔第一獎勵賞〕横山群(以下略)

橋本三郎中支風景畫展(洋) 四月二十一日—二十三日 銀座・菊屋畫廊
歷程美術協會新人展(日) 四月二十一日—二十四日 大阪・阪急百貨店

四行會第一回關西展(洋) 四月二十一日—二十五日 大阪・美術新論社畫廊
朝鮮宣傳美術協會聖戰美術展 四月二十一日—二十六日 京城・丁子屋

會員の作品及び里見宗治の歸朝作を陳列した。
春の青龍社大阪展(日) 四月二十一日—二十七日 大阪・三越

翠紅會第十五回日本畫展 四月二十一日—二十八日 新宿・伊勢丹
日本畫大展覽會 四月二十一日—十五日 大禮記念京都美術館

大阪毎日新聞社は皇紀二千六百年の奉祝事業として日本畫公募展を京都及び東

京において開催した。文部省及び京都市が後援し、恒例の京都市美術展は特に本展に協力して日本畫部を譲り、他の三部を以て略期を同じうして開催、綜合展の形をとつた。審査員は左記の二十名で、陳列畫には舊帝展系諸大家の力作が相當に見受けられた。竹内栖鳳の「艶陽」、橋本關雪の「柳蔭馬を洗ふ」、菊池契月の「孔雀明王」等をはじめ西山翠嶂、荒木十畝、川端龍子、小室翠雲等の諸作、其他水田硯山、福田平八郎、川崎小虎、宇田萩邨、磯部草丘、飛田周山、三輪晁勢、川口春波等の招待出品が注意をひいた。

入選では大臣賞の利高節二の「牝牛」、賞もしくは佳作に入つた江崎孝坪、澤宏毅、中島清、村雲大樸子、船田玉樹、岩橋英遠等の諸作に新鮮味が認められた。

〔審査員〕橋本關雪、西山翠嶂、堂本印象、小野竹喬、川合玉堂、川村曼舟、川端龍子、錦木清方、横山大觀、竹内栖鳳、中村岳陵、宇田萩邨、安田毅彦、山口蓬春、前田青邨、福田平八郎、小林古徑、荒木十畝、菊池契月、結城素明〔搬入〕一三三二點〔入選〕二一〇點〔文部大臣獎勵賞〕利高節二〔大毎・東日賞〕江崎孝坪、濱田親、秋野不矩、川邊華堂、澤宏毅〔佳作〕東山魁夷、北澤映月、向井久萬、熊坂東夷、中澤一僑、廣田多津、立石春美

出品目録 (○審査員)

水語 佐藤金一郎 發芽 宮内 英子

凍風	西山 英雄	白夜	中澤 一僑
水光	村山 兩平	漂布に魚遊ぶ	山田 廣吉
雲と防人	江崎 孝坪	朝	△安田 半圓
麗日	有元 一雄	熱河	△三宅 風白
南紀梅林	濱田 觀	早春	今野 可啓
飛翔	井上 恒也	水温む	岡田 重雄
山・海	東山 魁夷	微風	岩淵 芳華
霜の朝	大高 爲山	歴史	岩橋 永遠
牝牛	和高 節二	晨朝	德葉 長生
明裳	北澤 映月	老公孫樹	大山 魯牛
月	大幸 清祐	日本刀	△小早川秋聲
凍谿	川崎 雅生	和光	服部孝太郎
祈春	向井 久萬	廣澤の雪	△野添 千米
花影	△西澤 笛歌	春丘を往く	長谷川優作
陽	秋野 不矩	朝顔と盲人	入江百一郎
早春	猪原 大華	林泉	下川 苔地
待春	鄭 末朝	鮎	○福田平八郎
春暉	△上村 松壘	瀑布	△小室 翠雲
煙雨	○荒木 十畝	牡丹雪	○小野 竹喬
薰苑	△福田 翠光	櫻鳥	△中野 草雲
菅公	△島田 墨仙	春風	△小川 翠村
木蓮	○竹内 栖鳳	夕ぐれ	岡本 淡雅
神鹿	△川崎 小虎	草炎	船場 世紀
鶴と紅鶴	△山口 華樹	春	竹内 一起
道臣命	△織田 觀潮	春郊	村雲大樸子
秋林禪院	△水田 硯山	清香	△松元 道夫
有馬山	△三輪 梶勢	瑞雪	○字田 荻邨
明玉試作	○川端 龍子	朧夜	○西山 翠嶂
寶相獅子	△眞道 黎明	孔雀明王	○菊池契月
東海春曉	△磯部 草丘	柳蔭馬を洗ふ	○橋本 關雪
山中越風景	岩本 周照	春野	森谷南人子
		髮	廣田 多津
		清薰	川邊 華堂

斜影	澤 宏朝	東雲	小野塚幹雄
吹雪	高田 文也	墳輪	森田 秀一
耕土	立石 春美	春光賦曲	△川口 春波
風	田中 針水	冠鶴	△青木 大乗
焚火	雲本 武雄	日輪	船田 玉樹
晚秋清潭	磯田又一郎	野梅	川上 鶴山
歸路	太田 正弘	閑日	松浦 滿
暖日	中村 徳二	燐苑	平岡 且陵
紅梅	幸田 春耕	篋入レ	河内 舟人
點前	△川上 拙以	南國の歌妓	樋口 富廣
颯颯	岸野 海雪	靜日	竹内 津擊
おぼぞら	北野 以悦	残秋	衣裳 木爽
春曉	日下 八光	早春の湖北	谷口 英雄
若葉に薫る	天晶 芳登	朝	玉城 木一
春たつ頃	多田 敬一	雪村	大貫 鎮心
凍雪	中川 正次	樹光	笹室 傳治
五島の印象	池田 恒象	綿	三石 紅樹
家鴨	林 正廣	凍紋	藪谷 雅春
春啓く	阿部 能人	朝	清水 久代
東北の娘達	井上 通世	芽生へ	松山 廣壽
臘	川島 浩	近づく春	水野 深脚
父娘	冬木 清	狼友	池上 恒春
夜梅	△大木 豊平	鷹	柳田佐加恵
興亞	奥村 紅稀	黎明	寺田 蘆秋
宵夏	奈良 東明	神苑の朝中堂	山本 一夫
立春	川村 憲邦	雪原ノ樺太	戸田 北道
閑庭待春	武藤 章	朝晴れ	蓮尾 辰雄
晴日	後藤貞之介	略駝	福井 源三
深瀬の谿	海老名正夫	鏡	小松 華影
薄雪	中島卯一郎	淨物	太田 歳夫
收獲	齋藤猪三夫	宮中後七日御修	松阪 永之
爽秋	石崎 明	法	安谷 茂彦
春苑	山下 薫		
	都司倉群青		

霞網	陳 永森	春晝	木下 香陽
春の粧ひ	關 暉明	冬暖	戸田 英二
明けのくに紀元二		晨	大藏 春堂
千六百年山元	櫻月	畫の圓山	宮瀨 泉城
淺春	長澤 鳩哥	砂防林	中島 萬木
殘照	伊藤斗久三	南薰(琉球)	戸島 光雄
鷹ヶ峰風景	上田 晴也	慰問	安孫子真也
白春	庄田 吉興	みのり	山下日出子
柑橋實る頃	須原 忠雄	翠蕉	山口 蒼輪
秋晴れ	齋藤 紫山	下崩	安島 雨晶
初夏温室小池平四郎		樹林	今村 豊信
神苑ノ遺族	淺香金四郎	早春	宮坂 一義
鴨	貴道 草衣	小閑	茨城 上枝
母娘姿	岩崎 巴人	處子	大野 重幸
丘	中田 晃陽	山村の驛	橋口淺三郎
椿と丘	加藤 利男	冬暖	下川 千秋
吹き飛ばし	高橋 萬年	芽生えの頃	鈴木 竹柏
尖春	平塚 榮三	黃春	橋本 綏可
天橋の樂人	中島 清	芽出し頃	井上 流光
富嶽	△橋原 苔山	松	吉本 尚二
鶯尾經春	△小山 榮達	季節の客金子	孝信
花のうたげ	△保間 素堂	きさらぎの頃	高木 富三
カシミ綢丸山	春霞	早春	田代 正子
港	細木 成實	秋日和	大竹保之助
放牧	久連石雨董	雨情歡喜	藤田 隆
雪村	赤井 龍民	禪寺茶話	野村 松鈞
舊家(恵我の莊)	加藤 重壽	竹の秋	神坂 寛
衣かへ	鈴木 康之	南天	黒光 茂樹
北國の街水田	康雄	春霞	木村 政夫
早春	古川 雅司	赤松	鷹尾 兵衛
山	河合 健二	待春	中野 芳樹
		素麵乾ス大谷	忠夫
		玄武	細田伍良夫

晴日	村松 乙彦	春	中川 亨
傷兵の朝中	白衣	春宵	渡邊阿以湖
雲雀	平野 長彦	雜木林秋ノ圖	仙田雪山子
飛越	久間 光一	妙心寺風景	勝谷 木俣
林の月	高井 誠	淨心	高木 勇
溪谷	村田 一徑	慈光遠照	西山 盛朗
彩秋	中田 草春	眞畫	竹村 正信
敦室	山本富之助	綠芝	田代 放生
粟	木村 武夫	晨苑	加畑 橘樹
閑日	川合 白流	春雪	河村 光彰
寒泉	鈴木 石鳴	和春	中村 白玲
晚秋	荒井 綠荷	髮	石川 信子
大和路の夏	齊内 一秀	慶典	野間 碩堂
愛	石田 重子	早春譜	池邊 安民
梅	猪田 青以	水温む	藤田 威
斜陽	渡邊 學	あけぼの山下	巖
まきば	河原 勇夫	春待つ本阿彌庵	高橋 史光
獵犬	池田 榮廣	春近し	山本 朝光
空也上人	加藤 恒久	春暖	中谷 紀山
噴水	花村 晃歌	釣り人	武藤 嘉門
龍舌蘭の丘	小林 紀春		

(左記東京會場のみ陳列)

近江路の頼朝 和平再來 柳生 燕千

神谷 道緒 陶房 大宮 英孝

皇紀二千六百年 普澤 幸司 漁村 深尾 徹哉

南總の海女 佐藤 正衛

瀧澤邦行櫻花水彩畫展 四月二十二日

二十四日 丸之内・日本工業俱樂部

栗田九品庵第二次日本畫展 四月二十三日

三十一日 芝・東京美術俱樂部

東西大家近作畫展 四月二十三日

十五日 名古屋・三星

服部正一郎、伊藤繼郎二人展(洋) 四月二十三日

月二十三日

遠山陽子第三個個展(洋) 四月二十三日

日二十七日 銀座・青樹社

森田茂文樂人形、飛騨祭油繪展 四月二十三日

武井直也遺作彫塑展 四月二十三日

二十八日 神戸・大丸

戰時下の世界を知るポスター展 四月二十三日

市觀光課主催。 關西二十六巨匠日本畫展 四月二十三日

日二十八日 大阪・阪急百貨店 詩琴堂主催。

野添平米日本畫展 四月二十四日

十五日 名古屋美術俱樂部

中堅作家新作第三回展(日) 四月二十四日

四日 名古屋十一屋 同店主催。

京都工藝莊第一回展 四月二十四日

二十六日 大阪・慶明莊

伊東陶山、番浦省吾、山鹿清華、清水六兵衛等同人十八名の作を陳列した。

佐藤敬近作展(洋) 四月二十四日

十七日 銀座・三味堂

兜屋西川武郎主催。「裸婦を描いた作品中注目すべきものは『座せる裸婦』及び『横はる裸婦』であるが、どちらかといへば後者が緊密な畫面である。風景は横濱あたりを描いた小品に見るべきものがあるが『犬吠岬』及び『熱海』における海の處理はあまりにデコラティブで感

銘うすい。(東日)

直土會第一回彫刻展 四月二十四日—
二十七日 銀座・紀伊國屋

新自然派協同試作展(洋) 四月二十四
日—二十八日 銀座・菊屋畫廊

堀柳女人形塾第三回展 四月二十四日
—二十八日 日本橋・高島屋

昭華會第二回新作日本畫展 四月二十
四日—二十八日 日本橋・高島屋

高島屋主催。日本畫家のほかに、牧野
虎雄、木村莊八、中川一政等の出品を加
へ三十餘點を陳列した。

横山大觀筆山海十題巧藝畫展 四月二
十四日—二十八日 日本橋・高島屋 大
塚巧藝社主催。

吉村松坪日本畫個展 四月二十四日—
二十八日 大阪・松坂屋

新水彩協會小品展 四月二十四日—二
十九日 大阪・天賞堂畫廊

湊弘夫琉球壺屋窯作陶展 四月二十四
日—二十九日 神戸・畫廊

朝日洋畫會第三回展 四月二十四日—
三十日 大阪・朝日會館

第十八回表裝展 四月二十四日—三十
日 東京府美術館

三岸節子洋畫個展 四月二十五日—二
十八日 京城・丁字屋

石田玉英、宮本忠平染織繡作品展 四
月二十五日—二十八日 大阪・高島屋

六潮會十周年展(日、洋) 四月二十五
日—三十日 日本橋・三越

六潮會も既に十週年を迎へた。今回は

同人六人が揃つて出品した。即ち日本畫

家では中村岳陵が「双樹」を、山口蓬春
が「五月」及び「舞妓寫生」二點を、福

田平八郎が「桃の花」、「青柿」を出品し
た。洋風畫家では中川紀元が「觀音」三

點の外日本畫數點を、牧野虎雄が「春」
「秋」等四點の油彩畫を、木村莊八が「吉

三三題」外三點を出品した。又これ等の
外特別陳列として同人合作の「賞心餘事

冊」とその合刷刷(鈴木金平作)が陳列
された。

紅騎會染色皮革工藝展 四月二十五日
—三十日 日本橋・三越

現代名家素描展 四月二十五日—三
十日 京都・芸艸堂 同店主催。

福田仙近作展(日) 四月二十五日—
三十日 大阪・阪急百貨店

島田忠夫第二回日本畫展 四月二十六
日—二十八日 銀座・鳩居堂

中尾彰第二回大阪個展(洋) 四月二十
六日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

千葉縣綜合美術展 四月二十六日—三
十日 千葉縣立圖書館

山村耕花個展(日) 四月二十六日—三
十日 京城・三越

佐々木一郎滞歐作品展(洋) 四月二十
七日—二十九日 銀座・資生堂

創元美術協會第一回展(洋) 四月二十
七日—二十九日 臺北・教育會館

片岡銀藏洋畫展 四月二十七日—三十
日 岡山・金剛莊

台陽美術協會第六回展(日、洋) 四月
二十七日—三十日 臺北市公會堂

東海美術展(日、洋、工) 四月二十七日
—五月六日 名古屋・鶴舞公園美術館、
愛知縣商工館

東西大家新作日本畫展 四月二十八日
—二十九日 福岡・玉屋

丸木位里第二回個展(日) 四月二十八
日—五月二日 銀座・紀伊國屋

和田三造昭和職業繪畫版畫展 四月二
十八日—五月三日 京城・三越

紀元二千六百年紀念美術展(綜合) 四
月二十八日—五月七日 廣島縣產業獎勵
館、日本赤十字社支部講堂 廣島縣美術
協會主催。

増田正宗日本畫展 四月二十九日—五
月一日 日本橋・東美俱樂部

辻鑿造第三回個展(洋) 四月三十日—
五月五日 大阪・美交社

第二回大阪南畫展 四月三十日—五月
五日 大阪・阪急百貨店

水田竹圃、赤松雲嶺等が主となつて組
織する竹外南畫院の公募展で、五十餘點
を陳列した。

汎美術第六回展(日) 四月三十日—五
月五日 新宿・伊勢丹

五月
高橋幸雄歌舞伎スケッチ第二回展(日)
五月中 木挽町・歌舞伎座

結城素明「吉祥二十題」新作展 五月
一日—三日 大阪・高島屋

泉紀二千六百年の吉祥に因む新作二十
點を陳列した。

坪内節太郎第二回洋畫展 五月一日—
三日 名古屋・いとや百貨店

日本漆藝院第四回展 五月一日—四日
日本橋・三越

公募による第四回展で、今回は創作工
藝に併せて輸出向の試作品を陳列した。

本間葵華の「丸盆」、都筑幸哉の「丸形香
盆」、三田村自芳、莊司芳眞、松田權六等
の出品が目についた。

〔同人出品〕二八名(公募出品)二六名
〔日本漆藝院賞〕「机」室瀬春二(正木
賞)「屏風」阿田章人(推賞) 音丸耕堂
藤岡春嶺、森下弘堂、山下楊哉、高橋靜
堂、増田敬象

井川洗匠繪畫展(日) 五月一日—四日
名古屋・松坂屋

西山眞一第一回個展(洋) 五月一日—
五日 日本橋・白木屋

柴田正重彫刻展 五月一日—五日 大
阪・三越

現代大家日本畫新作展 五月一日—五
日 日本橋・高島屋

寶雲舎主催。東西の大家三十餘名の新
作を集めた。

山中菊代個展(洋) 五月一日—五日
大阪・阪急百貨店

第一美術協會小品展(洋) 五月一日—
六日 新宿・月光莊

有岡一郎洋畫個展 五月一日—六日
大阪・美術新論社畫廊

香川縣第七回工藝美術綜合展 五月一

日一十日 香川縣商工獎勵館

第五回京都市美術展(洋、彫、工) 五月一日—十五日 大禮記念京都美術館

今回は四月下旬開會の大阪毎日新聞社主催日本畫大展覽會に協力して日本畫を譲り、洋畫、彫塑、工藝の三部を以て開催した。尙本年に限り大家の招待作品を陳列した。審査委員名及び鑑査の成績は左の通りである。

〔審査委員〕(洋畫) 大橋孝吉、太田喜二郎、鹿子木孟郎、田中善之助、黒田重太郎、須田國太郎(彫塑) 大西三四郎、矢野判三、松田尙之(工藝) 伊東陶山、番浦省吾、戸島光阿彌、河合卯之助、山鹿清華、小合友之助、岸本景春、清水正太郎、平館尙

搬入數 入選數 陳列數
洋畫 三七六 一五九 二七一
彫塑 四二 二七 六二
工藝 一七五 八六 一二七
合計 五九三 二七二 四六〇
右の内招待出品は洋畫八四、彫塑二八、工藝二一、合計一三三點で、審査委員、委員の出品は洋畫二八、彫塑七、工藝二〇、合計五五點であつた。

〔授賞〕(洋畫) 「早春の嵐山(渡月橋)」 芥川弘吉、「村」 戸島孚雄、「紅い着物」 正木順子、「火山湖」 池田金之助、「風景」 高木四郎、「鶏舍」 古城戸優、「丘の桃」 水清公子、「田の虫送り」 伴庄兵衛、「花と少女」 津田周平、「庭」 外村忠子(彫塑) 「女」 田中源三、「胸像」 清水禮四郎、「女

美術展覽會(五月)

子立像」 山本節郎(工藝) 「果蠱文香爐

盆」 堂本漆軒、「染屏風大休止」 田中初雄、「いかたご文花瓶」 米澤蘇峯、練上象嵌鳥形盛器」 辻普六、「乾漆手長猿置物」 奥村究果、「青瓷水盤」 清水祥次、「手織錦結昌文屏風」 中村鵬生、「京ノ四季」 野呂天潤

中日尾白仲第五回個展(日) 五月二日—四日 神田・東京堂
五彩會第四回展(綜合) 五月二日—四日 新橋・藏前工業會館
永瀨義郎北支蒙疆風物個展(洋) 五月二日—六日 銀座・菊屋畫廊
足立源一郎山嶽畫展(洋) 五月二日—六日 銀座・青樹社
青樹社主催、「上高地綠雨」「八岳新雪」「春の槍ヶ岳」「かたづみ尾根」「五月の常念」等山を主題とした油繪二十四點を陳列、洗練された技術が注目をひいた。
朱北樵子作品展(日、工) 五月二日—六日 神戸・畫廊

平野長彦小品展(日) 五月三日—五日 大阪・朝日會館
九阜會第六回展(日) 五月三日—五日 日本橋・東美俱樂部
關尚美堂の肝入りに成る會で、徳岡神泉の「箱」、森白甫の「小春」、吉岡堅二の「雉」等の作が見られたが、東京展は出品不揃ひであつた。

麥陽會第五回展(洋) 五月三日—五日 銀座・紀伊國屋
小山敬三近作油繪展 五月三日—五日

大阪・朝日會館

朝日洋畫會第三回展 五月三日—五日 京都・大丸
日本生動美術聯盟第一回試作展 五月四日—五日 京都・朝日會館
大河内夜江作品展(日) 五月四日—六日 銀座・交詢社
六萌會第三回展(洋) 五月四日—八日 銀座・三味堂
河村崎山陶藝品展 五月五日—九日 日本橋・三越
クロツキ研究所所員第十回作品展 五月六日—十日 銀座・紀伊國屋
東京會日本畫新作展(日) 五月七日—九日 芝・東京美術俱樂部
「全部で百人からの東西作家を動員して居るが、既着披陳したのは約半數、その中で宿老級としては秀畝、桂月、清方、玉堂、翠雲、靱彦等がそれぞれに氣持を投げ込んだ處を見せてゐる。秀畝の山せみの圖の如き、清方の美人遊船の圖の如き、翠雲の芙蓉に雁の如き、頼に明るさと強さを加へ來つて、共に幾分か野心的でない事はないが、兎も角も元氣な處を見せて居る。玉堂の『風』の一圖、韻趣の益々高く澄めるものがあり、靱彦の『傳教大師』に施された歌贊の字勢まことに渾樸、一進歩を加へたその畫境の程を窺ふに十分である。

此等に續いて第一線級では川端龍子のつゝじに鯉の圖が達筆の裡にも次第に畫情的に含蓄を増して來て居るのが特に眼に入る。その他の新進級のもので、待た

る程のものは、畫題のみが届けられてゐて、その實物は多くはこれを見る事が出来ない。(S・T生 中商)
古屋蒼軒個展(日) 五月七日—九日 銀座・鳩居堂
岡田石嶽個展(日) 五月七日—九日 名古屋・十一屋
小松益喜洋畫展 五月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊
香田勝太油繪展 五月七日—十一日 大阪・三越
油繪約五十點を陳列した。
大阪朝日社會事業團主催京都畫壇展(日) 五月七日—十二日 名古屋・三星百貨店
七洋美術第一回展(洋) 五月七日—十二日 新宿・三越
文部省航海練習所後援。文部省の練習船日本丸及び海王丸兩船に便乗、遠洋航海をした北川民次、三木辰夫、松下義晴等七名は七洋美術會を結成、同人展を開いた。

美術と趣味社主催春季名作展(日) 五月七日—十二日 日本橋・白木屋
常盤會第二回女流日本畫展 五月七日—十二日 銀座・三越
阪神彫塑家協會小品展 五月七日—十二日 神戸・大丸
杉本哲郎印度風物畫展(日) 五月七日—十二日 大阪・大丸
七耀會第三回展(日) 五月七日—十二

三七

日 大阪・松坂屋

岡本大更個展(日) 五月七日—十二日

大阪・阪急百貨店

春陽會大阪展(洋) 五月七日—十三日

大阪・朝日會館 大阪朝日新聞社主催

洛美莊主催關西新人日本畫展 五月八

日—十日 上野・松坂屋

松坂屋日本畫展 五月八日—十二日

名古屋・松坂屋

清水正太郎第三回新作陶磁展 五月八

日—十二日 日本橋・高島屋

昨年の文展に新に審査員に推された作者

が近作を世に問ふた。「草花文扇壺」「繪

刷毛目花瓶」等六十餘點を陳列。

新挿畫家集團第一回展 五月八日—十

二日 新宿・月光莊

一水會會員作品春季展(洋) 五月八日

—十二日 銀座・青樹社

安井曾太郎の七號「日傘の女」、山下新

太郎の十五號人物畫「密柑」、石井柏亭、

有島生馬の風景畫等會員九名の近作を陳

列した。

京都草芽會同人展(工) 五月八日—十

二日 銀座・資生堂

朝日洋畫會第三回展 五月九日—十二

日 神戸・そごう

新興美術家協會小品展 五月九日—十

三日 大阪・天賞堂畫廊

ル・ブルブル第四回展(洋) 五月九日

—十三日 大阪・丹平ハウス

土橋醇一滯歐作品展(洋) 五月十日—

十三日 數寄屋橋・日動畫廊

細木原青起近作日本畫展 五月十日—

十三日 岡山・金剛莊

京都日出新聞第三回商業美術ボスタ

展 五月十日—十五日 京都・寶塚劇場

杉芽會第三回展(洋) 五月十一日—十

三日 銀座・紀伊國屋

清水元長油繪個展 五月十一日—十三

日 銀座・菊屋畫廊

安井曾太郎肖像畫觀賞會(洋) 五月

十一日—十五日 銀座・三味堂

三味堂主催。安井曾太郎の油繪肖像畫

十點を各所藏家の出陳を得て展觀した。

いづれも二科、一水會等に發表され評判

となつたものである。尙「造形藝術」誌

五月號は右作品を特輯紹介した。

陳列目錄

昭和 所藏者

F嬢像 二五號 公爵細川護立

T夫人像 八號 同

金蓉 三〇號 同

玉蟲一郎一先生肖像 三〇號 第二高等學校

本多光太郎博士肖像 三〇號 東北帝國大學

仕事の中の本多博士像 一〇號 本多光太郎

深井英五氏肖像 三〇號 深井 英五

N嬢像 二二號 中部 謙吉

長與又郎博士肖像 二五號 長與 又郎

福島夫人肖像 二五號 福島繁太郎

五作家新作展(日) 五月十一日—十五

日 日本橋・三越

三越の主催で橋本關雪、川端龍子、瀧

木清方、山口蓬春、小杉放庵の小品を二

點づゝ陳列した。

練社第一回日本畫展 五月十一日—十

五日 上野・松坂屋

兒玉希望社中の會。

造型美術研究會第七回展(工) 五月十

一日—十五日 京城・丁子屋

松屋庚辰會第一回工藝美術展 五月十

一日—十九日 銀座・松屋

雅友堂主催東西大家名畫展(日) 五月

十二日—十四日 名古屋美術俱樂部

加藤靜兒近作油繪展 五月十二日—十

六日 大阪・三越

池上秀畝繪畫展(日) 五月十二日—十

六日 大阪・三越

九阜會第六回展(日) 五月十三日—十

五五 京都市公會堂

基督教美術家協會展 五月十三日—十

六日 神田・YMCA

石川滋彦個展(洋) 五月十三日—十七

日 大阪・美交社

律動第四回展(洋) 五月十四日—十六

日 銀座・紀伊國屋

野間仁根個展(洋) 五月十四日—十七

日 數寄屋橋・日動畫廊

近作の小品を主とし、二科出品の「水

邊の小鳥」其他を併せ三十餘點を陳列し

た。「魚介」「春耕」「春丘」等の異色ある

作品が擧げられる。

四行會第十回展(洋) 五月十四日—十

七日 銀座・資生堂

一獨立美術協會の中尾彰、竹中三郎、高

樞寅平、佐藤英男四名の油繪及び二科會

の泉二勝磨の彫塑小品を陳列した。

大鐵美術部新設記念東西大家新作展

(日) 五月十四日—十七日 大阪・大鐵

百貨店

川瀨巴水版畫展 五月十四日—十七日

京城・三越

岡田三郎助蒐集工藝品展 五月十四日

—十八日 日本橋・高島屋

工藝美術の愛好家、蒐集家として知ら

れた洋畫家故岡田三郎助の遺愛品千餘點

が高島屋に於て展觀された。これ等は古

くはスキタイの金工品より波斯十四、五

世紀の陶板、秘露インカ王朝の壺、十五

六世紀伊太利亞の染織品、近世各國の陶

器があり、又アルメニヤ、西班牙、波斯、

南洋、蒙古、支那、朝鮮に亘る各種の小

刀があり、更に夥しきものとしては李朝

の木工品があり、珍らしきものとしては

臺灣の籠製品等があつて、この蒐集家の

極めて廣範圍にして、而もすぐれた趣味

を示すものであつた。

白鳳會第一回展(洋) 五月十四日—十

八日 銀座・青樹社

伊藤清永愛知中學講堂壁畫完成記念洋

畫個展 五月十四日—十八日 名古屋・

丸善

柏影會日本畫新作展 五月十四日—十

九日 日本橋・白木屋

京洛畫壇巨匠作品京美展(日) 五月十

四日—十九日 京都・丸物

日華美術協會主催第一回展(日) 五月

十四日—十九日 大阪・高島屋

大橋廉堂新作展(日) 五月十四日—十

九日 大阪・大丸

早芹社第一回展(洋) 五月十五日—十

七日 銀座・鳩居堂

菊池契月畫塾繪畫展(日) 五月十五日

—十八日 名古屋・松坂屋

青田會第一回日本畫展 五月十五日—

十九日 日本橋・高島屋

岩淵芳華、近藤乾年、鈴木大麻等十一

名の同人展。

白御會々員近作日本畫展 五月十五日

—十九日 大阪・天賞堂畫廊

六色會第四回工藝展 五月十五日—十

九日 日本橋・三越

板谷梅樹外十名の漆、金、陶、硝子の

作品七十餘點を陳列した。

重松岩吉個展(洋) 五月十五日—十九

日 新宿・月光莊

古川北華日本畫個展 五月十六日—十

八日 芝・東京美術俱樂部

銃後ボスター展 五月十六日—十九日

銀座・松坂屋

大輪畫院第二回春季展(日) 五月十六

日—十九日 上野・松坂屋

赤堀信平彫刻展 五月十六日—十九日

日本橋・三越

森守明個展(日) 五月十六日—十九日

日本橋・三越

花鳥畫十點を陳列した。

美術展覽會(五月)

現代名家素描、版畫內示展 五月十七

日—十九日 銀座・菊屋畫廊

鳥第三回同人展(洋) 五月十七日—十

九日 銀座・紀伊國屋

名古屋新聞社主催奉祝日本畫展 五月

十七日—十九日 名古屋・十一屋

東臺會第八回展(綜合) 五月十七日—

十九日 奈良・奈良會館

波多野華涯南畫展 五月十七日—十九

日 岡山・金剛莊

龍駿介富士百態第十五回展(洋) 五月

十七日—二十日 丸ノ内・生命保險協會

蒼原會第五回展(日) 五月十七日—二

十日 名古屋・愛知縣立圖書館

小林德三近作油繪展 五月十七日—

二十一日 銀座・三味堂

三味堂主催。十號「江の浦金櫻山」を

はじめ六號の「湯殿」「窓」「二階の窓」、

五號の「郊外の家」等十六點を陳列。小

品製作に慎重さを示す独自の態度が注意

された。

獨立美術協會第十回展(洋) 五月十七

日—二十六日 大阪市立美術館

柏舟社同人三人展(日) 五月十八日—

十九日 京都・朝日會館

中村桂花堂主催表裝展(日) 五月十八

日—十九日 名古屋美術俱樂部

院展俱樂部同人第一回作品發表展 五

月十八日—二十日 名古屋・丸善

野口彌太郎個展(洋) 五月十八日—二

十一日 銀座・資生堂

石原求龍堂並兜屋主催。「藤ねすみの

女」「南方の町」「巴里祭」等十餘點を陳

列した。

靜岡縣美術協會第六回展(綜合) 五月

十八日—二十二日 靜岡教育會館

二千六百年奉祝、靜岡大火罹災者、白

衣勇士の慰安等を兼ねて、會員及び招待

作品を陳列した。

東西大家新作繪畫展(日) 五月十八日

—二十三日 大阪・三越

井上良齋作陶展 五月十八日—二十三

日 大阪・三越

京都木日會同人作畫展(日、洋) 五月

十八日—二十四日 京城・丁子屋

村川彌五郎、今井一雄二人展(洋) 五

月十九日—二十一日 銀座・交詢社

九草會第六回展(日) 五月十九日—二

十二日 大阪・そごう

國畫會大阪展 五月十九日—二十五日

大阪・朝日會館

現代大家新作展(日) 五月二十日—二

十二日 芝・東京美術俱樂部

川路柳虹の藝苑社主催、日本畫家十五

名の小品を陳列した。

日本壁畫會第四回展(洋) 五月二十日

—二十四日 銀座・青樹社

會員は布施信太郎、鶴田吾郎、島村三

七雄等で、畫稿の類を陳列した。

上野山清賞個展(洋) 五月二十日—二

十四日 大阪・天賞堂畫廊

双葉會第二回展(日) 五月二十一日—

二十二日 丸ノ内・日本工業俱樂部

大稻會第一回展(日) 五月二十一日—

二十三日 名古屋・松坂屋

故森村宜稻門の同人展。

濱田庄司琉球窯新作展 五月二十一日

—二十四日 銀座・鳩居堂

小川マリ洋畫個展 五月二十一日—二

十四日 京城・三越

新潮會第一回展(日) 五月二十一日—

二十五日 日本橋・白木屋 同店美術部

主催。

塑人會第一回展(影) 五月二十一日—

二十五日 銀座・紀伊國屋

辻永洋畫展 五月二十一日—二十五日

名古屋・丸善

大森光彦作陶展 五月二十一日—二十

五日 日本橋・三越

鈴木信太郎個展(洋) 五月二十一日—

二十五日 大阪・美交社

岡本玉水人形展 五月二十一日—二十

五日 大阪・三越

白日莊主催東都大家新作展(日) 五月

二十一日—二十六日 銀座・三越

堂本畫塾東丘社第三回展(日) 五月二

十一日—二十六日 大阪・大丸

三輪晁勢の「暖梢」以下五十點、堂本

印象の贊助出品「爽籟高清」六曲一双を

陳列した。

〔東丘賞〕下村正一、堤利彦、安藤寛

〔東丘次賞〕戸島光雄、阪本晋彦、妹春

平三、岩田登司雄、伊圭田洛中、井關雅

夫、松尾冬青、無憂樹

琉球民藝品展 五月二十一日—二十六

日 名古屋・三星百貨店 那覇市、名古

屋新聞社後援。

松野太郎個展(洋) 五月二十一日—二十六日 大阪・阪急百貨店

早通武男個展(洋) 五月二十一日—十七日 大阪・高島屋

久保貞次郎蒐集世界兒童名作展 五月二十一日—二十八日 日本橋・高島屋

日高昌克第三回個展(日) 五月二十二日—二十四日 銀座・資生堂 美術工藝學院主催。

鳩交會第十回記念展(洋) 五月二十二日—二十六日 新宿・月光莊

高岡富也霰彩硝子新作展 五月二十二日—二十六日 日本橋・高島屋

京都工藝院第一回染織美術作家同人展 五月二十二日—二十八日 博多・松井樓

自由美術家協會紀元二千六百年記念展(綜合) 五月二十二日—三十一日 日本美術協會

會員十三名、會友十五名を以て組織する同會の公募第四回展で、例年の如く繪畫の外にコラージュ、オブジェ、フォトプラスチック、版畫等を陳列した。會員の作品では、村井正誠のプラン的色價の構想による「Village」[Cite No. 2] 森芳雄の新鮮な感覺を示す「庭」「床上靜物」、定型的な趣味性がや、顯著ではあるが山口薫の大作「風景」等が主なるもので、其他矢橋六郎、小野里利信等が挙げられる。數多い抽象繪畫は畢竟メカニスムに止るか、もしくは工藝的内容を帯びるもの等で、概ね創意に乏しい。其他

フォトプラスチックで、疊上に新聞紙の塊を配した長谷川三郎の「構成」、馬場穎三の諸作等があり、又長谷川三郎の立體の構成「柱」、劉永國、植木茂等の抽象的な意匠が注意をひいた。

〔搬入〕九六〇點〔入選〕一三四點〔陳列數〕二六〇點〔協會賞〕田島二男、李仲燮、橋上菁兒〔獎勵賞〕登崎三三郎、鈴木重太郎、菊地稔、黑崎博〔會友推薦〕朝妻金治郎、谷澤秀晃、坂田稔、山口正城、下郷羊雄、瑛九〔會員推薦〕小野里利信、山田光泰、清野恆

禰原始更個展(日) 五月二十三日—二十四日 京都・朝日會館

松島畫舫春季展(日) 五月二十三日—二十五日 日本橋・東美俱樂部

松島勝之助主催、東西の作家約三十名の作を集めた。

高田美一日本畫個展 五月二十三日—二十五日 銀座・交詢社

三峨會第一回展(版、洋) 五月二十三日—二十五日 銀座・三味堂

棟方志功ほか二名の同人展。

遠藤教三、狩野光雅、長谷川路可第三回聯合個展(日) 五月二十三日—二十六日 銀座・松坂屋

福陽美術會第十一回展(日) 五月二十三日—二十六日 銀座・松坂屋

青松會第五回日本畫展 五月二十三日—二十六日 上野・松坂屋 同店主催。

小早川清個展(日) 五月二十三日—二十六日 銀座・松坂屋

疎約會第三回日本畫展 五月二十三日—二十七日 大阪・そごう

紀元二千六百年記念海戰美術展 五月二十三日—三十一日 上野・松坂屋

主催東京日日新聞社、海防義會、海軍協會、後援海軍省。帝室博物館、東京美術學校、帝大史料編纂所、海軍省、水交社、海軍兵學校、其他諸名家より出品の往古より現代に至る我國海戰の日本畫、洋畫、版畫等を陳列した。

大阪松坂屋東西大家日本畫展 五月二十四日—二十六日 大阪・同店

第七回近畿聯合工藝展 五月二十四日—二十八日 京都市商品陳列館

第七回九州沖繩各縣聯合工藝試作品展 五月二十四日—二十八日 鹿兒島・商工獎勵館

海洋美術第四回展(日、洋) 五月二十四日—三十日 日本橋・三越

海事思想の鼓吹、海國精神の昂揚を目的とし、例年海軍記念日に開催する同會の公募第四回展で、海洋美術會、海軍協會、朝日新聞社共同主催、海軍省後援である。審査員は石井柏亭、長谷川昇、楠木清方等海洋美術會員三十一名で、成績は左の通りであつた。

〔搬入〕日本畫一三五點、洋畫三二三點〔陳列數〕日本畫三〇三點〔內招待六〇點〕洋畫一一九點〔內招待五二點〕〔海軍大臣賞〕「曉丸」笠松紫浪、「入港準備」石川滋彦〔海軍協會賞〕久連石雨童、高橋賢一郎〔朝日新聞賞〕村松乙彦、藤本

東一良〔海軍省買上〕「下田ノ春」高木背水、「海ノ風景」田中寅三、「海ノ護リ」吉田喜藏、「北太平洋ノ或日」中西次郎、「群漁」岸浪百輝居、「曉丸」笠松紫浪〔海軍協會買上〕「怒濤」岩田豐磨

熊谷九壽個展(洋) 五月二十五日—二十八日 銀座・資生堂

田中冬心畫塾展(日、洋、工) 五月二十五日—二十九日 福岡・岩田屋

白御會三人展(日) 五月二十五日—二十九日 大阪・大毎美術社

出品者は持田卓二、山田唐徳、中島啓朝の三名。

新自然派協會第三回春季展(洋) 五月二十五日—二十九日 銀座・菊屋畫廊

西山翠嶂塾青甲社第二回小品畫試作品展(日) 五月二十五日—二十九日 名古屋松坂屋

三銘會小品展(洋) 五月二十五日—二十九日 大阪・天賞堂畫廊

村尾絢子第二回作品展(洋) 五月二十五日—二十九日 神戸・畫廊

富本憲吉、河合寛次郎、濱田庄司工藝作品展 五月二十五日—三十一日 銀座鳩居堂 日本民藝館主催。

新美術人協會第三回展(日) 五月二十五日—六月四日 東京府美術館

新日本畫研究會は第三回の公募展を開催、會員及び入選者の作を陳列した。福田豐四郎、吉岡堅二の兩名が中心となり新傾向日本畫の一つの型を見せる會である。出品畫の中には、洋畫風の効果を淺

薄に攝取した作例が少なからず見受けられる。吉岡の大作「氷原」は澁く温い色調で裝飾性を帯びたもの、福田の十二曲の大作「鶉」は銀箔の地に墨で描いたがや、粗放である。その他、海老原南爽の「瀧水」、米田莞爾の「佛像」、柴田安子の「瀧衣」等を挙げ得る。

〔搬入〕一五六點〔入選〕五三點〔陳列數〕五一點〔研究會賞〕（研究會員作品）
 「瀧衣」柴田安子、「佛像」米田莞爾、「瀧水」海老原南爽〔推賞作品〕（公募作品）「カンナ」堀文子、「ベニガタ」柴田光臺

東日大毎日日本畫大展覽會 五月二十五日—六月十六日 東京府美術館

主催東京日日新聞社、後援文部省。過般京都に於て開催された同展の東京陳列で、尙會期中左記目錄の如く審査員の作を特別展観した。（本欄頁三十四参照）

目錄

生々流轉 大正十二年臨展 横山大觀
 細川伏爾家藏
 供燈 明治四十三年文展 菊池契月
 文部省藏
 清水 昭和十二年 京都某家藏
 寂光 同 七年帝展 荒木十敬
 東京美術學校藏
 夜櫻 同 五年羅馬展 横山大觀
 大倉男爵家藏
 炭窯 同 九年帝展 結城素明
 文部省藏
 蜜柑實る 同 十四年 福田平八郎
 平尾贊平藏
 雨月物語 同 七年京都市展 福田平八郎
 大正十年金鈴社
 作者 鑄木清藏

美術展覽會（六月）

古都の春 同 七年文展 川村曼舟
 井田榮造藏

半買ひ 昭和九年文展 西山翠嶽
 文部省藏

髪 同 六年院展 小林古愷
 細川侯爵家藏

梅花 同 十三年 平尾贊平藏
 前田青郎藏

大同石佛 同 十四年院展 日本美術院藏
 中村岳藏

流紋 同 十四年院展 成瀬省一藏
 橋本關雪藏

玄猿 同 八年帝展 東京美術學校藏
 安田毅藏

鴨川夜情 同 七年 平尾贊平藏
 安田毅藏

日食 大正十四年院展 鈴木新吉藏
 鈴木新吉藏

宿雪 昭和九年帝展 川合玉堂藏
 文部省藏

錦鱗 同 十三年 竹内栖鳳藏
 東京某家藏

竊冥 同 九年帝展 文部省藏
 荒木十敬藏

伐木 同 十四年大日展 結城素明藏
 岡野繁藏

白馬の苑 同 九年青龍社 川端龍藏
 作 者 龍藏

陣中の月 同 十年 堂本印象藏
 平尾贊平藏

冬日帖 同 三年國展 小野竹喬藏
 上河原石衛門藏

道成寺 同 五年羅馬展 大倉男爵家藏
 堂本印象藏

驚娘 同 七年帝展 京都某家藏
 山口蓬春藏

冬朝 同 七年帝展 東京美術學校藏
 中村岳藏

市場 同 十四年 渡邊善十郎藏
 渡邊善十郎藏

鯉 同 十四年 大倉男爵家藏
 大倉男爵家藏

淀の水車 大正十五年帝展 中村岳藏
 渡邊善十郎藏

三十一日 大阪・三角堂 日本美術院々友展（日）五月二十八日—二十九日 大阪・松坂屋

東西中京大家新作畫展（日）五月二十八日—三十日 名古屋美術俱樂部 棚橋慶心堂主催。

井上安男第四回個展（洋）五月二十八日—三十日 名古屋・十一屋

中村眉山遺墨並門下作品展（日）五月二十八日—三十日 大阪・高島屋

物故作家洋畫展 五月二十八日—三十一日 大阪・松坂屋 同店主催。

五月會第二回洋畫小品展 五月二十八日—六月二日 大阪・大丸

留加會第十回展（洋）五月二十八日—六月二日 上野・松坂屋

富田溪仙遺作展（日）五月二十八日—六月二日 大阪・阪急百貨店

東邦彫塑院第四回展 五月二十八日—六月五日 東京府美術館

昭和十年の帝院改組に際し帝展審査員級の九名により結成された會で、二千六百年奉祝に寄せ公募による第四回展を開いた。新人の作に熱意の籠つたものが見當らず、團體展として積極的な意欲の乏しさが惜しまれる。北村西望の贊助出品「原風蒼茫」、關野聖雲の「村田清風翁」羽下修三の「摩天嶺の逆襲」、長谷川榮作の「春庭華」、北村正信の「浴後」、梁川剛一の「坑道」等を主要な作に數へ得る。

〔搬入〕一五八點〔入選〕三九點〔陳列數〕一〇〇點〔東邦彫塑院賞〕「座せる少年」有地滋迪、「早蕨」畫間弘

鈴木雲哉作畫展（日）五月二十九日—三十一日 銀座・養生堂

從軍畫家支那風物展（洋）五月二十九日—六月二日 新宿・三越

恩地孝四郎、清水多嘉示、永瀬義郎、邊牟木東洋四名の作を陳列。

六月 撰美堂東西大家新作展（日）六月一日—二日 京都美術俱樂部

二六會第一回展（洋）六月一日—三日 銀座・紀伊國屋

加治屋隆二琉球作品展（洋）六月一日—三日 數寄屋橋・日動畫廊

JAN第十二回展（洋）六月一日—四日 銀座・菊屋畫廊

物故會員酒井正の遺作が特別陳列された。谷口富美枝第二回個展（日）六月一日—五日 銀座・養生堂

宮永東山作陶展 六月一日—五日 本橋・三越

東丘社第二回展（日）六月一日—五日 大禮記念京都美術館

朔日會洋畫展 六月一日—五日 銀座三味堂

大光會第一回展（洋）六月一日—五日 大阪市立美術館

大輪畫院第二回展（日）六月一日—六日 神戶・三越

丹青會日本畫展 六月一日—六日 大

阪・阪急百貨店

橋本八百二夫妻洋畫展 六月一日—七日

大阪・美術新論社畫廊

中井敬之助蒐集琉球紅型と時代裂展 六月一日—七日

日本橋・高島屋

すみれ人形展 六月一日—十日

伊東屋

山田双年個展 (日) 六月二日—三日

名古屋美術俱樂部

矢崎千代ニバステル展 六月二日—五日

京城・三越

八木博第四回個展 (日) 六月二日—五日

銀座・鳩居堂

PAS 同人展 (洋) 六月二日—五日

京城・和信ギヤラー

大須實力、黒田嘉治彫刻展 六月二日

銀座・青樹社

銀友會展 (工) 六月二日—十二日

座・服部時計店

第十九回朝鮮美術展 (綜合) 六月二日

—二十三日 總督府美術館

朝鮮總督府主催の第十九回朝鮮展の審査員は矢澤弦月、伊原宇三郎、高村豊周、建昌大夢の四名で、鑑査の成績は左の通りであつた。

搬入 入選

第一部東洋畫 一五八點 八三點

一〇〇名 七六名

第二部西洋畫 八三八點 二二八點

四三七名 一九五名

第三部 工藝 一七八點 六四點

彫塑 一四四點 一四二名

(陳列數) 東洋畫九一點 (八四名)、西洋畫二三〇點 (一九七名)、工藝六五點 (五七名)、彫塑一七點 (一五名) (昌徳宮賜賞) (第一部) 崔根培 (第二部) 大平敬次郎 (第三部) 姜昌奎 (總督賞) (第一部)

今田慶一郎、鄭末朝 (第二部) 藤澤俊一

趙炳憲 (第三部) 金復鎮、鄭寅琬 (精勤總裁賞) 曹圭奉 (推薦) (第一部) 江口敬四郎、金基利 (第二部) 大塚與志、金仁承、沈亨求、星野二彦 (第三部) 金復鎮

戸張幸男 (第三部) 姜昌奎

明治、大正、昭和物故作家遺作回顧展 (洋) 六月三日—七日 數寄屋橋・中央畫廊 同畫廊主催。

日本木彫會關西展 六月三日—十日

大阪・朝日會館

現代美術社主催第一回日本畫展 六月四日—六日 芝・東京美術俱樂部

大家新進併せて約六十名の作を陳列した。

同調會第三回展 (日) 六月四日—六日

銀座・紀伊國屋

兵庫縣美術聯盟第十九回展 (日、洋) 六月四日—六日 神戸・大丸

會員の日本畫及び洋畫百三十五點を陳列した。

林益堂日本畫個展 六月四日—六日

大阪・高島屋

和田英作近作油繪展 六月四日—八日

大阪・青樹社

青樹社の主催で、「カーネーション」「雲雀啼くころ」「早春」「蘭花」等油繪

十三點を陳列した。

島常武第二回油繪個展 六月四日—八日

大阪・天賞堂畫廊

互々會洋畫小品展 六月四日—九日

大阪・松坂屋

花岡萬舟戰跡美術日本畫油繪個展 六月四日—九日

新宿・伊勢丹

佐野光種日本畫展 六月五日—七日

京城・三越

創造美術協會洋畫小品展 六月五日—九日

神戸・鐘紡サービス元町支店

珊々會第六回日本畫展 六月五日—九日

日本橋・高島屋

高島屋主催。西山翠嶂の「薄暮」は狸に大根を配し熟達した技術を示すもの。楠木清方の「明治時世粧」双幅は家藝であるが快心の出来とは見難く、上村松園の「わか葉」は常の如き独自の境地を見せた。菊池契月の「少年家康」見るべく、結城素明の「八幡鳩」は細筆が繁縷に傾く。小杉放庵は豫定されたが出品なく、都合五點の陳列で聊か物足らぬ成績であつた。

新更社日本畫展 六月六日—十日

古屋・後藤版畫店

南畫聯盟主催南畫展 六月六日—十一日

東京府美術館

小室翠雲を顧問とする南畫聯盟の第三回展である。翠雲の波上を渡る海鳥を描いた「信湖」をはじめ、戸田浩堂の「晴雨兩雨」、福田浩湖「涌雲滴翠」、馬木田愛岳「春爛」、村岡應東「通天煙雨」等があり、花岡萬舟の「支那所見」又見るべきものであつた。新人の中に水墨に依る明暗の効果を求める傾向があり、これ等の幾つか、授賞作品となつたことは、南畫の近時の方向を示すものであらう。

〔獎勵賞〕青木虹橋、戸田浩堂、加藤松溪、矢野青霽

清溪會第三回展 (日) 六月七日—八日

銀座・交詢社 長崎英造主催。

繪畫第四回展 (洋) 六月七日—九日

銀座・紀伊國屋

小原勝守第六回個展 (洋) 六月七日—九日

銀座・三味堂

田中南日庵工藝展 六月七日—九日

岡山・金剛莊

昭和日本畫大鑑發行記念日本畫展 六月七日—十日

芝・東京美術俱樂部 今福武雄主催。

春泥會第六回展 (日) 六月七日—十日

大阪・そごう

白朝會第二回展 (洋) 六月七日—十一日

日 大阪・美交社

皇月會第五回工藝展 六月七日—十二日

日 日本橋・白木屋

造型版畫協會第四回展 六月七日—十日

三日 東京府美術館

公募による新人の版畫展で、木版、石版、エッチング等約七十五點を陳列した〔搬入〕二—五點〔入選〕七五點〔造型版畫協會賞〕東一雄

日 東京府美術館

綠巷會第二回展(洋) 六月七日—十九日

日 東京府美術館

神津港人、鳥羽宗雄及び小林剛等を主な出品者とし、小林の泰國に於ける寫生二十八點が異色あるものであつた。

〔搬入〕五—三點〔入選〕六八點〔會員推舉〕小林剛、本間勘次〔準員推舉〕中森放子〔綠巷會賞〕古田義一、江波戸一郎

日 江藤純平個展(洋) 六月八日—九日

大分・臼杵圖書館

昭和美づゑ會第三回展 六月八日—十日

日 數寄屋橋・中央畫廊

小堀進水彩畫個展 六月八日—十日

水戸・川又書店

第五回經緯工藝展 六月八日—十一日

銀座・養生堂

宅野田夫日本畫展 六月八日—十二日

日本橋・東美俱樂部

早苗會第三回小品畫展(日) 六月八日—十二日 名古屋・松坂屋

東郷青兒個展(洋) 六月八日—十二日 京城・三越

松平康南滯歐作品展(洋) 六月八日—十二日

銀座・青樹社

齋田順洋畫個展 六月八日—十二日

福岡・縣公會堂

風羅會第六回展(日、工) 六月九日—十日

長岡・常盤樓

八木岡春山個展(日) 六月九日—十三日

日本橋・三越

近作八點、作者が得意とする水墨畫の外に「巢立」「薰風」等着彩の花鳥畫を陳列した。

武藤夜舟大陸風物畫展(日) 六月九日—十三日

日本橋・三越

軍人畫家として名ある作者の近作二十點を陳列した。

寺田竹雄個展(洋) 六月九日—十三日

福岡・千代田ビル

岩城硝子作品展 六月九日—十三日

日本橋・三越

芬會第二回展(洋) 六月十日—十一日

銀座・紀伊國屋

國枝金三新作展(洋) 六月十日—十三日

大阪・天賞堂畫廊

五明會第三回展(洋、彫、版、工) 六月十一日—十三日

銀座・三味堂

現代名家新作日本畫鑑賞の會 六月十一日—十三日

京城・三中井

大畑桑丘人宗教畫展(日) 六月十一日—十六日

大阪・高島屋

松坂屋主催東西大家日本畫展 六月十一日—十六日

上野・同店

大家四十餘名の作を陳列。

關口隆嗣油繪展 六月十一日—十六日

大阪・三越

大野麥風日本魚類版畫集展 六月十一日—十六日

大阪・三越

白御會小品畫展(日) 六月十一日—十六日

神戸・大丸

駿草會第二部展 六月十一日—十六日

伊勢丹

海洋美術展(日、洋) 六月十一日—十六日

名古屋・三星

佐々木祖山漆繪展 六月十一日—十六日

大阪・三越

現代名家新作展(日) 六月十二日—十五日

銀座・鳩居堂

河合志宏佛畫展(日) 六月十二日—十六日

日本橋・白木屋

岩田藤七新作硝子器展 六月十二日—十六日

日本橋・高島屋

裝潢試作展(日) 六月十三日—十四日

名古屋美術俱樂部

大橋了介夫妻訪伯記念個展(洋) 六月十三日—十四日

銀座・紀伊國屋

東西大家新作日本畫展 六月十三日—十五日

芝・東京美術俱樂部

東西新人新作競技展(日) 六月十三日—十五日

日本橋・東美俱樂部

時的美術社主催

宮城三喜子油繪展 六月十三日—十六日

銀座・養生堂

高羽敏エツチング展 六月十三日—十八日

大阪・阪急百貨店

石黒平三郎近作油繪展 六月十四日—十六日

神戸・畫廊

第二十四回兵庫縣學生繪畫展 六月十四日—十六日

岡山・金剛莊

伊太利畫家アンドレ・メル繪畫展(洋) 六月十四日—十八日

日本畫新作展 六月十四日—十八日

名古屋・松坂屋

澤田宗山作陶展 六月十四日—十九日

京城・三越

昭和工藝協會第十二回展 六月十四日—二十一日

日本橋・高島屋

大阪工藝振興展 六月十四日—二十三日

大阪市立美術館

例年の如く大阪府、大阪市、大阪商工會議所、堺市、大阪府工業懇話會、大阪府工藝協會聯合會主催の下に開催された。一般出品の外に課題出品として華國

意匠になる作品の出陳があり、又郷土名工遺作の陳列並に故片岡長信の遺作展等を行った。

(一等賞) 高見九藏(二等賞) 坂口宗雲

齋、翁チトセ、芳武茂助(三等賞) 須藤

雅路、山田二三子、中島義夫、向島文一

日比野近三、山本立軒、會田裕宣、中條義男、平松宏春、中條繁雄(褒狀) 一九名(華國工藝賞) 角谷一圭、以下略

美術展覽會(六月)

華敵會第一回洋畫展 六月十五日—十七日 大禮記念京都美術館

赤松麟作、太田喜二郎、角野治治郎等

關西の文展系作家が組織した會で、會員及び會友の作百五十餘點を陳列した。

巴人社第七回作品展(洋) 六月十五日—十七日 銀座・紀伊國屋

第七回筑前美術展(綜合) 六月十五日—十九日 銀座・松坂屋

清流會第一回展(日、工) 六月十五日—十九日 銀座・松坂屋

會員は鎗木清方門下の門井掬水、寺島紫明、榎本千花俊、櫻井霞洞の四名。

鬼面社油繪小品展 六月十五日—十九日 數寄屋橋・中央畫廊

淺井不見富士寫生油繪展 六月十五日—二十日 名古屋・後藤版畫店

三越日本畫小品展 六月十五日—二十日 日本橋・同店

第四回自由美術家協會關西展 六月十五日—二十一日 大阪市立美術館

大衆向工藝品展 六月十五日—二十三日 京都市商品陳列館 京都市主催。

河井寛次郎作陶二十年記念展 六月十日 日本橋・高島屋

河井寛次郎の作陶二十年を記念し、蒐集者川勝堅一が、所藏の舊作約三百點を陳列、觀賞に供した。

安田傘契日本畫展 六月十六日—十七日 芝・東京美術俱樂部

近藤浩一路第三回新作展(日) 六月十六日—十九日 大阪・高島屋

吉田白嶺第五回新作木彫展 六月十六日—十九日 大阪・高島屋

前衛作家新作洋畫展 六月十六日—三十日 青山・玳瑁畫廊

裝美社新進作家展(日) 六月十七日—十九日 日本橋・東美俱樂部 今井登主 催。

清光會第七回展(日、洋) 六月十七日—二十一日 銀座・資生堂

後藤眞太郎主催の展觀で、例年五名の大家が出品する。安田毅彦の「飄筆の花」は巾一尺九寸、堅三尺二寸の紙本で、淡い綠青と金泥を生かし、小林古徑の「犬」は巾一尺九寸、堅四尺七寸の紙本、やはり淡彩で、薄墨を以て前景に犬を描く。いづれも琳派に通ふ、繊細な裝飾効果をもつもの。洋畫は梅原龍三郎の二十五號「櫻鳥」、八號「薔薇」、坂本繁二郎の八號及び六號の「柿」二點、安井曾太郎の二十五號「女と犬」等五點で、坂本の湛寂な作品が注目された。

菅原眞南畫展 六月十八日—十九日 銀座・紀伊國屋

珊々會第六回展(日) 六月十八日—二十日 大阪・高島屋

小島可仙繼色紙展 六月十八日—二十日 銀座・鳩居堂

小寺健吉洋畫展 六月十八日—二十二日 名古屋・丸善

神原始更個展(日) 六月十八日—二十二日 銀座・三味堂

小點會第一回彫塑展 六月十八日—二十二日 上野・松坂屋

北川金鱗國立公園繪卷展 六月十八日—二十二日 富山・大丸百貨店

沼田一郎第六回洋畫個展 六月十八日—二十二日 日本橋・白木屋

柳瀨正夢北支作品展(洋) 六月十八日—二十三日 大阪・朝日會館 大阪朝日新聞社會事業團、滿鐵大阪鮮滿支案内所主催。

改井德寬近代油繪展 六月十八日—二十三日 新宿・伊勢丹

岡田勝油繪個展 六月十八日—二十三日 大阪・三越

北耀工藝苑第一回新作展 六月十八日—二十三日 大阪・大丸

堂本印象畫藝總會展(日) 六月十八日—二十三日 神戸・大丸

冬木大丙日本畫個展 六月十八日—二十三日 大阪・松坂屋

土屋華紅バステル個展 六月十九日—二十日 日本橋・日本橋俱樂部

青丘會第五回新作日本畫展 六月十九日—二十三日 日本橋・高島屋

高島屋主催の展觀で、從來の會員徳岡神泉、山口華楊、太田聽雨、奥村土牛、小倉遊龜等五名に新に上村松篁、山本丘人、吉岡堅二、福田豊四郎の四名を加へて開いた。

南畫鑑賞會第七回展 六月十九日—二十三日 日本美術協會

小室孝雄個展(洋) 六月十九日—二十三日 京城・和信ギャラリー

朝陽社第二回日本畫展 六月十九日—二十三日 新宿・三越

堅山坦朝鮮風景個展(日) 六月十九日—二十三日 新宿・三越

小松多喜尾油繪展 六月十九日—二十三日 大阪・三越

安藤靜也洋畫展 六月十九日—二十三日 大阪・阪急百貨店

日本漆藝院第五回作品展 六月十九日—二十三日 大阪・三越

四元莊第四回展(洋) 六月十九日—二十三日 銀座・三越

能美會第三回作品展(日、洋、彫) 六月十九日—二十三日 日本橋・白木屋

馬鈴社第一回展(日) 六月二十日—二十二日 神田・東京堂

同棧第一回同人展(洋) 六月二十日—二十二日 銀座・紀伊國屋

東郷青兒色紙展 六月二十日—二十三日 釜山・三井

印象會日本畫展 六月二十日—二十三日 大阪・三角堂

山下新太郎新作展(洋) 六月二十日—二十四日 銀座・青樹社

京都の若葉、奈良の新緑を主題とする近作油繪「木立」「春日山」「高窗山」等約二十點を陳列した。

白巧會第二回洋畫展 六月二十日—二十四日 大阪・天賞堂畫廊

池田朋昌油繪展 六月二十日—二十五日 新宿・東陽畫廊

水野富三洋畫個展 六月二十日—二十三日

五日 名古屋・後藤版畫店

關西工藝綜合展 六月二十日—二十五日

大阪・阪急百貨店 美術と趣味社主催

催。

第二回貿易局工藝品輸出振興展 六月二十日—二十七日 日本橋・高島屋

商工省では従來の工藝展覽會と輸出工藝展覽會とを合併し、新しく昨秋第一回貿易局工藝品輸出振興展覽會を開催したが、今年度は會期を繰上げ、又會場も東京府商工獎勵館より日本橋高島屋に移した。又陳列方法も品種別を廢し、地方別とし、各地方の特色と各出品物の傾向を知るに便した。總搬入數四千七百七十三點、内陳列總數千四百六十九點、授賞は左の如く合計百九十五點が選定發表された。又本出品物中七百七十三點が南米智利國に於て開催される陳列會出陳物として選定された。同展は東京開催後順次大阪、京都、名古屋に於て展示された。

〔商工大臣賞〕「デイナーショットセット」(陶) 日本陶器株式會社

「ベツトカバー」(染) 自由學園工藝研究所

「碧桃壽鳥ノ圖」(染) 武部祐五郎

〔二等賞〕「鉢」(陶) 高木務

「飾箱」(漆) 山崎立山

「組箱」(漆) 石川縣輸出工藝振興會

「果實盆」(漆) 岡田章人

「器物盛器」(漆) 谷澤不二松

「盛鉢」(漆) 米次源吉

「銀切嵌象嵌盆」(金屬) 三井義夫

「盛器」(金屬) 朝倉祥景

「果物盛」(竹) 和田瑣齋

「花筵」 岡山縣花

美術展覽會 (六月)

延輸出工業組合 (以下略)

京都日々新聞社主催繪畫維新展 (日) 六月二十一日—二十三日 大阪・高島屋

岡澤康夫水彩畫個展 六月二十一日—二十三日 銀座・菊屋畫廊

彩睡會第一回日本畫展 六月二十一日—二十三日 日本橋・東美俱樂部 鈴木東光主催

燦東會第二回日本畫展 六月二十一日—二十三日 日本橋・東美俱樂部 鈴木東光主催

泰西名畫展 六月二十一日—二十五日 數寄屋橋・日動畫廊 同畫廊主催

瀧野川彫塑研究所第三回試作展 六月二十一日—三十日 東京府美術館

松田杏亭日本畫展 六月二十二日—二十三日 名古屋美術俱樂部

小池俊雄戰地スケッチ展 六月二十二日—二十四日 新宿・月光莊

南潮社第二回展 (日) 六月二十二日—二十四日 大禮記念京都美術館

水田硯山、矢野香蘭等同志の南畫約三十點を陳列した。

堀越震六菟集油繪展 六月二十二日—二十四日 芝・東京美術俱樂部 石原龍一、西川武郎主催

僅青會彫塑繪畫展 六月二十二日—二十五日 銀座・資生堂

池田遙邨近作個展 (日) 六月二十二日—二十六日 神戸・三越

丹辰社第二回展 (洋) 六月二十二日—二十七日 大森・白木屋

原精一陣中作品展 (洋) 六月二十三日—二十五日 銀座・三味堂

中文に轉載すること二年半、本年二月凱旋した作者はその後直に従軍畫家として渡支し、最近歸還した。戦線スケッチ二十餘點を陳列した。

安宅安五郎日本畫展 六月二十三日—二十五日 銀座・鳩居堂

土田麥德遺作展 (日) 六月二十三日—二十七日 京城・三越 同店主催

東北民藝品展 六月二十三日—二十九日 日本橋・三越 日本民藝協會、雪國協會主催

工工藝第三回展 六月二十四日—二十七日 銀座・紀伊國屋

一水會會員春季展 (洋) 六月二十四日—二十八日 大阪・美交社

三坤會洋畫展 六月二十四日—二十八日 大阪・三角堂

東西名家新作畫展 (日) 六月二十五日—二十七日 日本橋・東美俱樂部 橋本多聞堂主催

築本一洋新作畫幅展 (日) 六月二十五日—二十七日 大阪・高島屋

北大路魯山人新作畫展 (日) 六月二十五日—二十七日 大阪・阪急百貨店 兒島米山居主催

椿貞雄油繪個展 六月二十五日—二十八日 京城・三越

横尾芳月日本畫個展 六月二十五日—二十八日 福岡・玉屋

山田眞山南蠻鑿作陶展 六月二十五日—二十九日 大阪・三越

春陽會日本畫展 六月二十五日—二十九日 大阪・阪急百貨店

齊白石第二回水墨畫展 六月二十五日—三十日 神戸・畫廊 同畫廊主催

東西諸大家新作日本畫展 六月二十五日—三十日 大阪・大丸 宮崎井南居主催

吉田喜藏新作バステル畫展 六月二十五日—三十日 大阪・松坂屋

庭山耕園塾展 (日) 六月二十五日—三十日 大阪・三越

松垣鶴夫日本畫展 六月二十五日—三十日 大阪・三越

新制作派會員春季展 (洋、彫) 六月二十六日—三十日 銀座・三味堂

芸艸堂主催東西大家日本畫素描展 六月二十六日—三十日 新宿・三越

香取正彦鑄金個展 六月二十六日—三十日 日本橋・高島屋

新作の花入、花瓶、水盤、置物、香爐鐵瓶等四十餘點を陳列した。

鈴木至朗染色工藝品展 六月二十六日—三十日 新宿・三越

現代彫塑展 六月二十六日—三十日 横濱・商工獎勵館 帝國美術彫塑普及會主催

高須芝山個展 (日) 六月二十六日—三十日 札幌・丸井百貨店

黃述祚遺作展 (洋) 六月二十六日—三十日

十日 京城・和信ギャラリー

羅星會第五回展(日) 六月二十六日—

三十日 大阪・阪急百貨店

蒼穹會第二回日本畫展 六月二十七日

—二十九日 上野・松坂屋 同店主催。

廣本秋子遺作展(洋) 六月二十七日—

二十九日 敦寄屋橋・中央畫廊

上永井正濤歐作品展(洋) 六月二十七

日—二十九日 銀座・交詢社

佛國に十餘年滞在し最近歸朝した作家

で油繪約三十點を陳列した。

愛知社同人近作展(綜合) 六月二十七

日—二十九日 名古屋・丸善

島野重之第二回個展(洋) 六月二十七

日—三十日 敦寄屋橋・日動畫廊

榊原紫峰扇面展 六月二十七日—三十

日 京城・三中井

中村舜、岸田劉生遺作素描展 六月二

十七日—七月四日 新宿・東陽畫廊 同

畫廊主催。

富田溪仙遺作展(日) 六月二十八日—

二十九日 日本橋・東美俱樂部 都市と

藝術社主催。

兵庫縣美術協會第三十三回展(日、洋、

彫) 六月二十八日—三十日 神戸・三越

同人作品及び應募入選の日本畫、洋畫

彫刻を陳列した。

倉品廣作、松下氏紀、西田藤次郎洋畫

展 六月二十八日—三十日 銀座・菊屋

畫廊

六紀會第一回展(洋) 六月二十八日—

七月二日 銀座・紀伊國屋

都市と藝術社東西作家新作展(日) 六

月二十九日—三十日 日本橋・東美俱樂

部

富本憲吉、河井寬次郎、濱田庄司作品

鑑賞會(工) 六月二十九日—七月一日

京都・大毎會館 日本民藝館主催。

中村大三郎畫展(日) 六月二十九日

—七月三日 大禮記念京都美術館

塾主中村の「鸚鵡小町」外塾生の作を

陳列、別に紀元二千六百年奉祝會に獻納

の作品十餘點を出品した。

七月

櫻木社第十六回日本畫展 七月一日—

四日 銀座・資生堂

現代一流大家水彩素描展 七月一日—

八日 敦寄屋橋・中央畫廊

青衿會信濃路旅行記念並陸海軍傷病兵

慰問獻畫展(日) 七月二日—四日 銀座

三越

繪畫維新展(日) 七月二日—四日 銀

座・松坂屋 京都日々新聞社主催。

東都大家新作日本畫展 七月二日—五

日 京城・三越

青樹社主催内外油繪展 七月二日—六

日 大阪・朝日會館

東西名家新作日本畫展 七月二日—六

日 日本橋・高島屋 同店主催。

朱玄會第一回名古屋展(洋) 七月二日

—七日 名古屋・三星

武藤夜舟大陸風物畫展(日) 七月二日

—七日 大阪・三越

金澤芳美會第二回工藝品展 七月二日

—七日 大阪・三越

麗人社第四回洋畫展 七月三日—七日

銀座・紀伊國屋

瑞穗社彫刻小品展 七月三日—七日

銀座・青樹社

世界ボスター美術展 七月三日—十日

東京府美術館 日本廣告俱樂部主催、商

工省、東京商工會議所後援。

歷程美術協會第三回展(日) 七月三日

—十四日 東京府美術館

新傾向の日本畫團體であるが、船田玉

樹、岩橋英遠等が會を去つたので寂寥を

免れず、山岡良文の「大空の合歡」「山靈

の合歡」、村山東吳の諸作を擧げ得るに止

る。

〔搬入〕一三一點〔入選〕二七點〔陳列

數〕五四點〔新會員〕松本一穂

聖戰美術展(綜合) 七月四日—十八日

京城・總督府美術館。

昨夏、陸軍美術協會、朝日新聞社の共

同主催で開かれた第一回聖戰美術展の巡

回展で、尙十五年中、大連、奉天、新京、

ハルビン、札幌、函館、仙臺、鹿兒島、

廣島、熊本、長崎の各都市に開催された。

山南會第一回展(日) 七月五日—七日

大禮記念京都美術館

根本從之助作品展(洋) 七月五日—七

日 神戸・畫廊

閃人社第二回展(日) 七月五日—九日

銀座・菊屋畫廊

現代大家油繪小品展 七月五日—十日

新宿・東陽畫廊

關向美堂展(日) 七月六日—八日 日

本橋・東美俱樂部

東西の中堅作家四十餘名の新作を集め

た。

クータム線第二回水彩展 七月六日—

十日 銀座・三味堂

大阪女流畫家第七回展(日) 七月六日

—十日 大阪市立美術館 大阪女人社主

催。

岡本玉水、平田郷陽人形作品展 七月

六日—十一日 京城・三越

堀田清治洋畫展 七月七日—十一日

大阪・美術新論社畫廊

高森捷三洋畫展 七月七日—十一日

名古屋・松坂屋

佐藤紫光日本畫展 七月七日—十二日

大阪・阪急百貨店

新作日本畫展 七月八日 京都・梅軒

舊宅 佐藤梅軒畫廊主催。

國史錦繪展 七月八日—十五日 麻

布・東京府養正館

明治維新前後の錦繪約二百枚、その他

畫工系圖、刷り方標本等を陳列した。

東洋美術木版畫展 七月九日—十一日

銀座・青樹社 審美書院主催。

岩佐古香祇園會展(日) 七月九日—十

一日 京都・大丸

日本山岳畫協會第五回展(洋) 七月九

日—十三日 日本橋・高島屋

三雲祥之助油繪展 七月九日—十三日

大阪・三角堂

山川秀峰繪畫展(日) 七月九日—十三日

大阪・三越

澤田宗山作陶展 七月九日—十四日

大阪・大丸

京都工藝院陶藝部第四回展 七月九日—十四日

京都・大丸

松岡映丘遺作展(日) 七月九日—十六日

東京府美術館

昭和十三年病歿せる帝國藝術院會員故松岡映丘の遺作七十三點を集めて七月九日より十六日まで東京府美術館に於て開催せられた。明治年間の作品は東京美術學校卒業制作なる「浦の嶋子」一點のみで、御物「住吉詣」同「春秋」同「富嶽茶園之圖」、皇太后宮職御藏「卯の花車」、秩父宮家御藏「野分」、竹田宮家御藏「山莊」、高松宮家御藏「大三島」、政府藏「御堂關白」、同「伊香保の沼」、同「右大臣實朝」、東京女子高等師範學校藏「明治天皇御尊影」を始め、他は凡て大正昭和期に於ける制作で、「春光春衣」、「室君」、「道成寺」、「山科の宿」、「紅玻璃」、「千草の丘」、「さつまつ濱村」、「今昔ものかたりの伊勢」、「矢表」等、著名なる優作多數の出品を見、新興大和繪派の巨匠として活躍した其の藝術を知る上に於て、極めて有意義なる企畫であつた。

陳列目錄
明治時代 (所藏者)
浦の嶋子 三七年 東京美術學校
大正時代
帝室御物

住吉詣(二曲一雙) 二年

紅葉の秋 同 柳田國男

御堂關白(三幅對) 四年 政 府

春光春衣 五年 某 氏

室君(六曲一雙) 同 侯爵細川護立

春光 同 鎬木清方

道成寺(六曲一雙) 六年 野村市夫

皇太后宮職御貸下 同

卯の花車 同

帝室御物 同

秋(二曲一雙) 七年

山科の宿(繪卷一巻) 同 鈴木新吉

紅玻璃 八年 侯爵細川護立

稚兒觀音 同 眞盛 寺

山居 同 黒部正雄

嚴島詣 同 高木保之助

春の海 同 長谷川唯一郎

池田の宿 十年 野間佐衛子

高雄灌頂 同 延曆 寺

春の山 一年 赤星 陸 治

蓮池 同 網野 善右衛門

青海波(三幅對) 二年 鈴木新吉

野州の河原 一三年 大川 綠 郎

詩僧西行(三幅對) 一四年 平尾 贊 平

伊香保の沼 同 東京美術學校

住吉(三幅對) 同 野崎久兵衛

播磨がた 同 大川 常 世

みぐしあげ 一五年 別府哲二郎

寢ざめ 同 同

千草の丘 同 松屋

松竹梅(三幅對) 同 神野三郎

昭和時代

生(一) 二年 片岡孫忠

磯のなみ 同 横山守雄

西行詣白峰 同 片岡孫忠

氣比の海 同 鈴木新吉

明治神宮舞樂の圖 同 大阪毎日新聞社

歌神 三年 大川 綠 郎

蘆刈 同 別府哲二郎

帝室御物 同

富嶽茶園之圖 同

秩父宮家御貸下 同

野分 同

さつまつ濱村(六曲半雙) 同 松岡 道 男

八島の義經 同 男爵大倉喜七郎

今昔ものかたり 同

伊勢 同

太平樂 同 荻生 天 泉

竹田宮家御貸下 同

山莊 同

草枕(湯煙) 同 目黒 四 郎

後少將義孝 四年 眞盛 寺

志賀の浦波(繪卷一段) 同 小御門神社

遅櫻 同 清水 榮 藏

さみだれ 五年 同

和泉式部 同 吉村春枝丸

河内通ひ 同 横山守雄

鎌倉の右大臣 同 鈴木新吉

聖尼クララの寺 六年 清水 榮 藏

日蓮 同 森山 茂

右大臣實朝 同 政 府

忠 度 七年 田村文之助

高松宮家御貸下 七年

大三島 同 田實 涉

鐘 尅 八年 津村重舍

業平 同 南 藏 院

地藏緣起(繪卷一段) 同 細川力藏

花のあした 同 高橋 練 逸

大塔宮 同 東京女子高等師範學校

明治天皇御尊影 九年 岩田爲三郎

鎬矢 同 清水 榮 藏

櫻の花かめ 同 玉置源一郎

朝日將軍 同 鈴木忠治

春日の祭使 同 細川力藏

八島の月 一年 瀨木博信

小楠公 同 瀨木博信

矢表(六曲一雙) 二年 岡野繁藏

神崎の遊女達 同 鈴木新吉

中谷ミユキ第二回個展(洋) 七月十日—十二日 銀座・養生堂

第二回貿易局工藝品輸出振興展 七月十日—十六日 大阪・中央公會堂

上永井正滯歐油繪個展 七月十一日—十五日 大阪・美交社

寶雲舍主催現代大家日本畫新作展 七月十二日—十四日 大阪・高島屋

九元社第六回展(彫) 七月十二日—十六日 東京府美術館

東京美術學校卒業生有志の會で、會員の作三十點を陳列、觀賞者の投票を參考にして授賞を行つた。

(九元社賞) 中野四郎(白根賞) 長沼孝三(努力賞) 石塚貞男

三春會第七回展(洋) 七月十二日—十

美術展覽會 (八月)

七日 東京府美術館

柴田是真五十年追善會遺作展觀 (日)

七月十三日 築地・八百善

柴田是真の五十年忌日に際し追善會が

梅澤隆眞を催主とし、石野力藏外十六名

協賛の下に行はれ、梅澤家をはじめ諸家

蒐藏にかゝる繪畫約六十點、蒔繪十餘點

が陳列された。

田谷吐野野戰彩管個展 (洋) 七月十三

日—十五日 大阪・そごう

東原徹第一回日本畫小品展 七月十三

日—十七日 新宿・東陽畫廊

大藪春篁個展 (日) 七月十三日—十七

日 大阪・阪急百貨店

墨洋會日本畫展 七月十三日—十八日

日本橋・白木屋

今村俊夫 (洋) 大藪茂樹二人展 (彫)

七月十三日—十八日 名古屋・松坂屋

新紅會第三回展 (日) 七月十六日—十

八日 銀座・紀伊國屋

双弦會第一回展 (日) 七月十六日—十

八日 名古屋・丸善

二代宮川香山作陶展 七月十六日—二

十日 大阪・松坂屋

日本バステル畫會展 七月十六日—二

十一日 銀座・三越

塚田清秀バステル畫展 七月十六日—

二十一日 京都・大丸

窪田榮洋畫展 七月十七日—十九日

銀座・資生堂

九日 福岡・岩田屋

更踏社同人展 (日) 七月十七日—十九

日 京都・朝日會館

巴會第四回日本畫展 七月十七日—二

十日 銀座・松坂屋

故寺崎廣業の門下野田九浦、矢澤弦月、

飛田周山等を會員とする同人展。

手塚一夫遺作展 (洋) 七月二十日—二

十二日 銀座・資生堂

中村茂雄洋畫展 七月二十日—二十五

日 大阪・阪急百貨店

商工省工藝指導所展 七月二十日—二

十八日 日本橋・三越

工藝指導所はその本所の東京開設を前

にしてその事業の概要を紹介する爲、そ

の展覽會を開催した。かねて同所の研究

に成る合成樹脂、ファイバー、水産皮革

等の代用材に依る作品或は綜合合板、特

殊合板の作品を中心とし、又同所の指導

に依る各地方の工藝物産が陳列され、又

寫眞に依つて海外工藝事情を紹介した。

同展は東京開催後、横濱、京都、神戸に

於て展示された。

石河光哉北支畫行脚記念展 (洋) 七

月二十一日—二十三日 神田・如水會館

群青會洋畫展 七月二十二日—二十六

日 大阪・三角堂

祇園會展 (日) 七月二十三日—京都・

土井撰美堂

堅山南風個展 (日) 七月二十三日—二

(日) 七月二十三日—二十四日 京都・

佐藤梅軒宅

佐藤梅軒主催。入江波光の二尺横幅

「釣舟」、小野竹喬の二尺五寸横幅「春曉」、

榊原紫峰の三尺横幅「池畔」等十餘點を

陳列した。

濱倉清光個展 (日) 七月二十三日—二

十五日 日本橋・泰文社

蒼穹會第二回日本畫展 七月二十三日

—二十六日 大阪・松坂屋 美術と趣味

社主催。

農鳥社同人新作畫展 (日) 七月二十三

日—二十八日 神戸・大丸

東西諸大家第三十回新作畫展 (日)

七月二十三日—二十八日 大阪・大丸

特異兒童繪畫展 七月二十三日—二十

八日 京都・大丸 主催關西保護兒童研

究會、後授みづる春鳥會其他。

石川欽一郎水彩畫展 七月二十三日—

二十九日 大阪・美交社

磁元社第二回工藝展 七月二十四日—

二十六日 銀座・資生堂

多摩帝國美術學校圖案科會第五回展

七月二十四日—二十八日 銀座・三越

菅橋彦個展 (日) 七月二十五日—二十

七日 大阪・高島屋

佳辰會日本畫展 七月二十六日—二十

八日 銀座・菊屋畫廊

石井柏亭、山下新太郎素描小品展 七

月二十六日—三十一日 新宿・東陽畫廊

直原放青個展 (日) 七月二十六日—三

十一日 大阪・阪急百貨店

第二回貿易局工藝品輸出振興展 七月

二十六日—八月一日 大禮記念京都美術

館

土肥原三千喜個展 (洋) 七月二十七日

—三十日 京城・丁子屋

古城江觀蘭印緬甸スケツチ展 (日) 七

月二十八日—三十一日 銀座・資生堂

扶桑會第三回展 (日、洋) 七月二十九

日—三十一日 銀座・菊屋畫廊

八月

越後工藝美術展 八月一日—五日 新

潟・小村百貨店

須賀卯夫魚類バステル展 八月一日—

六日 大阪・阪急百貨店

阪急工業會作品展 (工) 八月一日—三

十一日 大阪・阪急百貨店

大倉集古館現代繪畫展觀 (日) 八月一

日—九月二十二日 赤坂・同館

大倉集古館に於ては、其の蒐藏する現

代日本畫家の作品總數六十三點を數回に

互り陳列替を行つて展觀した。その主な

るものは川合玉堂「高根の雪」、寺崎廣業

「白馬八景」、竹内栖鳳「城外壁蕪」、荒木

十畝「晚秋」、速水御舟「鯉魚」、鍋木清方

「道成寺」、「鶯娘」、上村松園「伊勢大輔」

「菊池契月」、聖徳太子影、前田青郎「洞窟

の頼朝」、横山大觀「夜櫻」、安田靉彦「風

神雷神」等であつた。

足立源一郎山嶽畫展 (洋) 八月五日—

九日 大阪・青樹社

池田實人南支新風景畫展(洋) 八月六日—十一日 銀座・三越

東西諸大家新作日本畫展 八月六日—十一日 大阪・阪急百貨店

商工省工藝指導所展 八月六日—十一日 横濱・商工獎勵館

仲田菊代洋畫展 八月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

東原徹日本畫小品展 八月七日—十二日 新宿・東陽畫廊

安宅義則北支蒙古風景洋畫展 八月七日—十三日 大阪・阪急百貨店

荒井草雨日本畫展 八月十日—十二日 札幌・今井百貨店

二六〇〇年會第二回油繪展 八月十二日—十八日 東京府美術館

東京美術學校昭和十五年卒業生の會で、各自の作品の外に共同制作の陸海軍獻納畫「初夏の子供」及び「怒濤」を陳列した。

清々會第一回展(洋) 八月十三日—十五日 新宿・東陽畫廊

南紀美術協會展(綜合) 八月十三日—十八日 輕井澤・南紀美術俱樂部

池田瑞月蘭花小品展(日) 八月十三日—十八日 京都・大丸

第二回貿易局工藝品輸出振興展 八月十三日—十九日 名古屋・愛知縣商工館

山南會第一回展(日) 八月十四日—十八日 東京府美術館

昨秋、故土田麥僊の門下十六名によつて

結成された山南會は先月の京都旗學展に續いて東京に進出し、會員の作七十六點を陳列した。各自二曲半双程度の作を數點づつ、出品、小松均の「杉の雪」外十二點、徳力富吉郎、川勝一止、丸岡比呂史、稻田麥楓の諸作、福田豊四郎の滿支從軍スケッチ十二點等が勉強を見せた。

〔大原獎學賞〕稲田麥楓(永昌堂獎學賞) 川勝一止、木村揚照

大藪春篁近代作個展(日) 八月十五日—十七日 神戸・オリエンタルホテル

松田黎光日本畫展 八月十五日—十八日 京城・三越

矢野鐵山畫塾展(日) 八月十六日—二十三日 大阪・阪急百貨店

バステル日耀畫會展 八月二十日—二十四日 大阪・美術新論社畫廊

日本醫家美術協會第二回展(洋) 八月二十日—二十五日 銀座・三越

會員の作品の外に本年逝去した吳建博士の遺作油繪九點を陳列した。

守本柁個展(洋) 八月二十一日—二十五日 大阪・阪急百貨店

林春樹第一回日本畫展 八月二十二日—二十四日 銀座・資生堂

岡山大潮會第一回洋畫展 八月二十二日—二十五日 岡山・天滿屋

金晚畑洋畫個展 八月二十四日—二十八日 京城・丁子屋

牧俊高遺作展(彫) 八月二十五日—三十日 日本橋・三越

關野聖雲、北村正信、赤堀信平の發起により先頃物故した牧俊高の遺作展が開催された。能姿を題材とする木彫を主とし、額面、硯屏等併せて五十點を陳列した。

從軍畫家倉垣辰夫聖戰軍馬洋畫展 八月二十五日—三十日 日本橋・三越

東一會展(日) 八月二十五日—三十一日 京都・丸物

高見澤版木版藝術展 八月二十六日—二十九日 銀座・資生堂

美術工藝學院公開作品展 八月二十七日—三十日 銀座・三越

村の生活美術展(日) 八月二十七日—三十一日 銀座・松坂屋

石川勉、笹川藍田、平川東府の組織する東方畫會主催。滿洲移住協會後援。

澤入會第二回展(綜合) 八月二十七日—三十一日 大阪・松坂屋

坂内宏觀風景展(日) 八月二十七日—三十一日 銀座・松坂屋

石井元洋畫小品展 八月二十七日—三十一日 大阪・阪急百貨店

早苗會富士五湖旅行作品展(日) 八月二十七日—九月一日 京都・大丸

商工省工藝指導所展 八月二十七日—九月一日 神戸・大丸

青龍社第十二回展(日) 八月二十七日—九月七日 日本橋・三越

青龍社は政府主催の奉祝展への参加を中止し、独自の立場に於て奉祝の意を表すべくその第十二回展を開いた。而も此の度からその會場を日本橋三越に移した。

龍子は「朝陽來」「源義經」「香爐峯」に續いてその大陸四部作の最終作「花摘雲」を完成出品した。これは滿洲建國の理想たる王道樂土を寓意した六曲一雙の大畫面であるが、芍藥、燕子花、鈴蘭の咲き亂れた平原の空に浮遊する羊雲を天女に象つたものである。その構想の奇抜と花の描寫に此の作者の特性が見られたが、天女に象つた雲の表現に不徹底のものがあつて造型性を缺き、成功した作品とは言ひ難かつた。加納三樂の「雨情」は稲田に白鷺を配せるもの、市野亭の「蒼空」は大空に亂舞する鷹、鳶の群を表はし、共に注目すべき作品であつた。

その他坂口一草の「日午」、濱出青松の「蠶二題」、福岡青嵐の「明惠傳」、時田直善の「十二神將」、龜井藤兵衛の「柿若葉」が擧げられ、中川喜舞、丸山岐の作品も將來を期待せしめるものである。

此の展覽會では紀元二千六百年を奉祝する意味で「櫻に因む」命題について製作し、その十點を陳列した。龍子は達意の筆で吉野の櫻を畫き、坂口一草は落花の浮ぶ紅鱗の群れる池を表はす力作を示し、山崎豊は京の名所御室の櫻に舞妓を配した。此の課題作品中擧ぐべきは渡邊龍三の「麗」であり、老樹の幹や花の描寫も堅實で成功したものであつた。その他上條靜光、佐藤本草等の作品が擧げられる。

〔搬入〕一一三點(八五名)〔入選〕三七

點 (三五名) (獎勵賞、青雲賞) 「麗」渡邊龍三 (獎勵賞) 「梨白」 「向日葵」 丸山皎 (Y氏賞) 「芥子」中川喜舞 (社友推舉) 濱出青松 (社子推舉) 森省三、小川茂麻呂、龜井藤兵衛、沼野匡志、林茶太郎

出品目録

花下行人 川端 龍子 蠶二題 濱出 青松

櫻彩譜 坂口 一草 鶴 岡部建一郎

御室 山崎 豊 青山園 渡邊 龍三

春牧 佐藤 木草 山湖清明 佐藤 正一

鳥櫻 結城 正雄 神鹿 里見 公起

參道の春 大塚 榮治 山に咲く内池 良男

麗 渡邊 龍三 マネキン工房 森省 三

仰春 上條 靜光 姫路城 林 榮太郎

讚春 直江 義治 街頭 沼野 匡志

爛漫 鍛冶 貫一 寫眞班 小川茂麻呂

(以上奉祝課題) 柿若葉 龜井藤兵衛

「大策第四作」 記錄 依田 季夫

花摘雲 川端 龍子 荒天 中川佐風路

日午 坂口 一草 梅ひらく 佐々木邦彦

雨情 加納 三樂 梨白 丸山 皎

明惠傳續成道の巻 日向葵 同

日觀 (右) 花桐 高山 晴雄

荊靡鳥 (中) 枇杷 櫻井 清三

月觀 (左) 白藤 松井 庄次

游緬 福岡 青嵐 渡船場 横山 操

白猫 安西 啓明 冬暖 水野 繁

蓮月 小島 照子 南京皿 伊東 顯

蒼空 市野 亨 水邊餘情 川田 恒之

十二神將時田 直善 雪林 西條 正一

芥子 中川 喜舞

第九回商業美術展 八月二十七日—九月七日 上野・松坂屋 報知新聞社主催

銀邦會第一回展 (洋) 八月三十一日—九月四日 大阪・天賞堂畫廊

二科會第二十七回展 (洋、彫) 八月二十八日—九月二十日 東京府美術館

本年の二科は時局下の國民意識を反映した感がある。それは藝術活動においていまだ新しい形となつては現はれず、又近年情勢となつてゐた會の空氣が俄かに一新した譯でもないが、一般の作品に作家の正直な反省の氣運が示されたことが注目され、同會が一つの轉換期に到達したことを思はしめる。今回はフランスより歸朝した會員藤田嗣治、宮本三郎及び還曆を迎へた熊谷守一の特別陳列を行つた。藤田は主に滯佛小品に蕭灑な感興を見せると共に「争鬪」「人魚」等の制作に目醒しい技術を見せた。一般の會員では鍋井克之、正宗得三郎等の大家が持味を見せ、黒田重太郎、中川紀元、東郷青兒等は格別變らず、向井潤吉の二點の事變畫が、感興と技術において特記すべきものであつた。其他、國枝金三、野間仁根、鈴木信太郎、田村孝之介、高岡徳太郎、栗原信、鳥崎鶴二、岡田謙三の諸作が挙げられるが、田村は大作的「祇園」に勉強を見せ、岡田の「小屋」も兎も角異色ある畫境が注意をひく。會友では福

烏金一郎、伊藤繼郎、田中忠雄、伊谷賢藏、錦義一郎、入選では寺田竹雄、大澤昌助等が注意された。其の他所謂前衛派

の第九室の諸作は稍々頹勢が甚だしく、浪江勘次郎が少数の作家が挙げられるに過ぎない。彫塑部では渡邊義知が連作「國土を護る」の一部分として出陣した大作「紀元二千六百年頌」、松村外次郎の石彫「利唐内」、會員に推舉された泉二勝磨のレリーフ「拜雲童兒」等をはじめ土田實、水野欣三郎、後藤一彦の諸作が主なるものであつたが、入選作の新たな傾向として、記念碑彫塑の流行型を追はず、技術的に未熟ではあるが、新しい立體を求めようとす態度が認められ出したことは喜ばしかつた。

〔搬入〕繪畫三〇八五點 (一一五〇名)、彫塑一五三點 (九八名) (入選) 繪畫三四〇點 (三一四名)、彫塑三五點 (三四名)

〔會員推舉〕吉井淳二、泉二勝磨、水野欣三郎 (推獎) 錦義一郎、伊藤久三郎、峰岸義一、古家新、藤井二郎、酒井亮吉、松本弘二 (會友推薦) 松下義晴、竹谷富士雄、加藤敏子、松村綾子、寺田竹雄、山尾薫明、加治屋隆二、大澤昌助、桂ユキ子 (特待) 雜賀文子、村田實史雄、伊藤研之、野村守夫、山田順治、鶴田宏、篠原泰介、山本不二夫、松本俊介、津田周平、旭亮弘、原勝四郎、佐藤吉五郎、高井貞二 (岡田賞) 原勝四郎

出品目録 (會員、會友)

繪畫

お祭りA 買出し 同

△橋本 徹郎 佛像と姑娘 伊東市太郎

同 B 同

地下道 寺田 竹雄 浴女 八重垣逸郎

坂道 加治屋隆二

井戸 同 大澤 昌助

岩と人 同

岩と花 同

富強の大和國 試作 傳單

仁愛的日本兵 傳單

○向井 潤吉

豆滿江畔 同

鐵砲傳來の中の 日高 健泰

若狹譚 寺田 榮枝

船造り 川合喜二郎

ブルマ 山田 等

雪降の街道 山田 等

黄昏 森島 包光

山 山本 隼司

新緑 金宗 燦

祇園會 ○田村孝之介

三人 玉澤 潤一

職場 三保 義一

離郷 同

大陸の建設 野村 守夫

教會のある村 同

釣り 飯島 八郎

漁夫 △松井 正

風景 同

慰問小劇 石川 新一

北京 △榎倉 省吾

新年門 同

赤い縞のキモノ △藤川 榮子

裸女 同

あねもね 田中 太郎

窓邊 森 行雄

山村 前林 章司

小鳥屋の店 小島眞佐吉

採果 △藤井 二郎

雨中採取 同

秋たつ 市原 義夫

小川の子供 市野長之介

知 熊野 俊市

自轉車 桑原 實

雨季之草 ○國枝 金三

囹 同

小屋 ○岡田 謙三

ぶらんこ 同

二人 船越かつ美

卓 同

獨樂 古川 弘

未完成 織田 廣喜

黒衣少女 寺門 弘

高瀬川 野村百合子

蒙古の旅 ○栗原 信

秋 (ハルビン) 同

朝 (同) 同

姉妹 西坂 修

温室 渡邊 一男

たなばた内海 九郎

桂川情景 小川 末吉

風景 新木正之介

花屋 高須 操

二人 △吉井 淳二

座像 同

食卓 川北 信三

池畔 十龜廣太郎

畫室 劉 啓祥

子供と壺 田中 修

ゲンゴロウ 井上 安男

壺と少女 長谷川初女

宮本三郎
特別陳列

雪の鴛鴦
○横井 禮市

五合庵
○正宗得三郎

南國の花
○北川 民次

青い電車のある風景
細田 浩

開花
沼田 一郎

野尻湖の夏
△早川 國彦

都會
同

露店の女
ワーリヤアバザ像

梅
同

湯檜曾ノ朝
○熊谷 守一

琉球首里城外の森
同

新聞賣娘佐藤眞一
齋藤 清

山西省風景
山口 操助

桃園の春
同

旅愁
同

畫室

雨の神戸 瀧畑 ミツ

漁港
△古家 新

七月の山見玉 勝次
同

窓邊
同

記念撮影 齋田 喬

二人の女 澤田 哲郎

雪イ
△吉原 治良

郊外の町

五月の頃 井原 元正

温室
同

牛尾の瀧 藤井 義晴

馬と少年 安倍治郎吉

アトサヌプリ(硫黄山)
高山 憲雄

聲もなき夜
新井ふみ子

雪
同

マント風景

時雨る、琵琶湖畔
○鍋井 克之

朝卓
海老名文雄

花の静物
同

静物
同

庫院
黒瀧 大休

白暮行
△峰岸 義

花
青木 壽

手提の女

箱根冬の富士
同

牡丹(茶の背景)
○黒田重太郎

椅子のある部屋
同

K夫人像 遠山 陽子

樹蔭
宮川 仁

秘曲
同

花
同

緑衣

朝の海
同

牡丹(黒の背景)
同

居留地のバン屋
今村 春吉

七夕
谷出 孝子

伯嗜大山
△伊庭傳治郎

月夜
阿部 金剛

湖
伊藤 研之

特別陳列

夏夜の中之島公園
同

花、實と白鷺
○野間 仁根

浅草公園 小谷 良徳

水
佐々木宗一郎

朝の大山
同

窓
同

朝
同

人魚

パレット等のあ
る静物 前川 尚子

花叢
同

朱い鏡 黒田壽美子

海邊
大野 宏

夏
宮城三喜子

朝
同

朝
同

最後の平和

白い道
○東郷 青兒

松原湖ヨリ八ツ岳ヲ望ム
同

夏
同

カジメ
野々口 重

日傘と樂器
鳥取 敏

朝
同

朝
同

家

ポートのある風景
同

松原湖ヨリ八ツ岳ヲ望ム
同

夏
同

壺作りの女
竹谷富士雄

紙すき場
同

座敷
同

座敷
同

争闘

葡萄棚(夕)
伊藤 泰造

庭
○濱田 葆光

花
同

梅の庭
塚口 正一

紙すき場
同

座敷
同

座敷
同

オペラ通の男の

漢口江岸 清水 茂郎

庭
同

室内
同

白橋風景 鶴岡 義雄

紙すき場
同

座敷
同

座敷
同

ねまきの小供

湖邊風景
同

庭
同

立秋
杉浦嘉太郎

うちわ
酒井 久子

紙すき場
同

座敷
同

座敷
同

雨の巴里

枇杷
○鈴木信太郎

庭
同

カス
同

青い椅子 大澤あい子

紙すき場
同

座敷
同

座敷
同

戦時下の町

海
同

庭
同

舞臺裏
同

「三光」のオヤツ
篠原 来介

紙すき場
同

座敷
同

座敷
同

サクレキユール

紫陽花
同

庭
同

部屋の一隅
同

高麗
同

同(鳥海山)
同

座敷
同

座敷
同

古き街

溪流(鹽原初夏)
同

庭
同

部屋の一隅
同

高麗
同

同(鳥海山)
同

座敷
同

座敷
同

蛋市の床屋

室内
伊川 寛

庭
同

部屋の一隅
同

高麗
同

同(鳥海山)
同

座敷
同

座敷
同

仕立屋の娘コレ

漁夫
山田 順治

庭
同

部屋の一隅
同

高麗
同

同(鳥海山)
同

座敷
同

座敷
同

男の兄

漁村の人々
同

庭
同

部屋の一隅
同

高麗
同

同(鳥海山)
同

座敷
同

座敷
同

初夏風景 伊勢雄次郎

山を背景にしたる木と池のある晴日風景

山を背景にしたる木と池のある晴日風景

山を背景にしたる木と池のある晴日風景

山を背景にしたる木と池のある晴日風景

山を背景にしたる木と池のある晴日風景

山を背景にしたる木と池のある晴日風景

二人 小田 正春

良寛堂

出雲崎風景

玉淀白雨 會田 進彦

アバイと鳥民

大正年間

横の裸

弓 ○島崎 鶴二

流れ

マイクロナン

踊の前

丸磨長三郎

裸婦半身田村 謹壽

裸立像

笛 同

木立

難波架空像

窯

時計のある棚

虹

とうもろこし

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同</

人物

裸 (九年) 同

新緑の港

ボタ山風景

農繁期

温室

鞆鞆圖

鳴丸組

人物

陽 (三年) 大河 邦樹

入江夏景 (北海道有珠湾)

ミミツク金 詔河

月明

樂園

門前

少年

日向葵

日向葵 (三年) 田村 謙壽

白石像 (二〇年) 同

枇杷と山羊

朝鮮の風物

傘を張る人

紙芝居

こほろぎ橋

裸

裸 (五年) 大江 邦樹

切石のある風景

隣の家

半島の人々

二人

海姥

漁夫

海

海 (五年) 田村 謙壽

紫陽花と朱服の少女

後庭未春多木透哉

三人

池の釣場

滯船

風景

有島氏像

有島氏像 (六年) 有島 生馬

鯉戦のある風景

歸る人々

白系の子供達

池の釣場

五月の庭

少女と植物

裸

裸 (六年) 同

満洲二題のうち

街

花園

所

海洋の月

店

夜

夜 (六年) 山本發次郎

四家房大日向村

川祭

建設

信州にて

象

南の漁村

百合

百合 (六年) 田村 謙壽

同熱河風景

雪國のいで湯

桐咲く頃

子供と馬

少女

窓

顔

顔 (七年) 川俣浩太郎

赤い帽子

雪解け

魚取りに行く子

遊放時

母と子

少年と鳥籠

裸

裸 (八年) 庄司 乙吉

空

牌樓と攤子

白い前かけの主

景色の隅坂

装ひ

林檎もぎ

後向の裸

後向の裸 (八年) 田村 謙壽

家族

繩飛び

三人

古利と若竹

樹間

湖畔

子供達

子供達 森本 秀雄

夜店

噴水

白い曲馬

少年と水

漁村

春

けし

けし 佐藤直紗子

噴水

靴屋

水

廊下

丘

熱海風景

濱木綿の花と海

濱木綿の花と海 加藤 敏子

漁村

春

靴屋

水

廊下

丘

鳥の早春

鳥の早春 同

漁村

春

靴屋

水

廊下

丘

外堀線

外堀線 山本不二夫

漁村

春

靴屋

水

廊下

丘

美しき佐原河港

美しき佐原河港 同

漁村

春

靴屋

水

廊下

丘

帽子店

帽子店 財 保

漁村

春

靴屋

水

廊下

丘

庭園

庭園 後藤 敏子

漁村

春

靴屋

水

廊下

丘

綾取り

綾取り 渡邊道三

漁村

春

靴屋

水

廊下

丘

岬と巖

岬と巖 岡野智榮子

漁村

春

靴屋

水

廊下

丘

アンコール

アンコール △相原景太郎

漁村

春

靴屋

水

廊下

丘

手風琴

手風琴 同

漁村

春

靴屋

水

廊下

丘

閑日

閑日 伊藤 勇

漁村

春

靴屋

水

廊下

丘

山の子ども

山の子ども 亮弘

漁村

春

靴屋

水

廊下

丘

雪の日

雪の日 同

漁村

春

靴屋

水

廊下

丘

山村雪景

山村雪景 中西 欽三

漁村

春

靴屋

水

廊下

丘

鳴丸組 水澤 正一

少年 辻 好子

こほろぎ橋 園谷 敏樹

漁夫 安波 新吉

風景 荒木 道夫

少女と植物 吉田 稔彦

美人 指田 由米

みぎは △飯田 清毅

店 同

聖堂 樋野 松恵

南の漁村 仲野 俊正

窓 横田 之子

風景 平野 弘

幻相ノバリ 明石 哲三

少年と鳥籠 小川 勝藏

林檎もぎ 葛西 康

けし 天野家榮子

湖畔 森 繁

犬と藤 飯島 貞子

作品 1 北島 達夫

同 3 同

同 3 同

同 3 同

仁王像 武田 二郎

渡邊 信正

彫塑

紀元二千六百年 頌一國土を護る

(部分) ○渡邊 義知

女の首 野水 信吉

工人 八柳 恭次

首 同

横臥 ○笠置 季男

片山氏像 赤塚 秀雄

雨 △土田 實
 女的首 大西金次郎
 新しき道 △水野欣三郎
 立像 △後藤 一彦
 坐像 ○上田 曉
 和唐内 ○松村久次郎
 背黒鷗 同
 翔雲童兒 △泉二勝廣
 女立像 柳田 昌
 憩ひ 植木 力
 裸女 乗松 巖
 テラコッタの顔 淺野 孟府

首 中堀 正孝
 習作 千葉 輝彦
 トキの像 織田久馬一
 習作 今 ヤヨ子
 青年 大橋 孝吉
 争ひ 廣瀬不可止
 無題(東洋的なモニューマンへの思索) 平松 豊彦
 やすんだ女 渡邊小五郎
 トルン 木内 克
 澄嬢像 中村 暉
 裸婦 妹尾健太郎

女的首 小田 定一
 境の浦 松下 隆治
 ねこ 大津 正江
 うごき(狼群) 唐木 政一
 習作 山本 博一
 立像 村田 虎次
 少年座像 道下 長七
 女的首 安藤 菊男
 玉をもつ 木下 正彦
 習作首 水野 英夫
 海南島にて 有松 保

裸婦 鷲 泰次郎
 荷ふ男 長野 隆業
 女的首 上野 三郎
 淺子の像 高須賀 桂
 地(天地人三部作の内) 木村 敏一
 女的首 竹内 貞太
 女児S 辻合喜代太郎
 女立像 習作 淺井 行雄
 少年(顔) 加藤 隆
 つちをと△河合芳男
 制空(戦地モニウマン作品第三) △長谷川八十

第三部會は第六回展の開催に當つて「日本民族彫塑の復興と創造」の提唱を宣言すると共に、應募作の鑑査にも同會として例のない嚴選を以て臨み、再生の意氣を見せた。會員の作では日名子實三が「八紘之基柱」(縮尺三十三分の一)をはじめ「航空表忠碑」「上海陸戰隊表忠塔」等モニュメントの原型を出品、この方面への彫塑家の新しい活動を示して注意をひいた。外に主題の扱ひが通俗性を帯びるが早乙女龜次の「皇紀二千六百年を象徴す(試作)」、向山峽路の「民族交流(二千六百年に寄す)」等、記念碑的群像の製作が本年の同會の特色を成してゐた。其他石川確治の「吉野」、池田勇八の「御樂毛の景」、畑正吉の「望月」等はいづれも趣味的な板彫給であつた。陳列數八十點。

〔搬入〕二三四點(入選)二九點(三部會賞)無シ(研究賞)田村辰治、瀧川藤一郎、水野徳二、森榮四郎(會友推薦)川城良、名久井十九三(本年度無鑑査)石塚裕康、小森田春雄

新作作派協會第五回展(洋、彫) 九月一日—十七日 東京府美術館

本年は新歸朝の會員猪熊弦一郎と新歸朝で會員となつた荻須高德の滯歐作、彫刻家菊池一雄の滯歐作及び佛國名家並に藤島武二の諸作を特別陳列した。猪熊は技巧に獨特の進展を見せ、黄色い葉」其他は裝飾的な面白い作品である。荻須の諸作は強靱な筆力をみとめられ、「ブルターニュ」、「ポントワーズ」等は繪畫的な

感興に富む佳作であつた。會員の作では脇田和の「海濱」は歐風の感覺と技術に成るもの、内田巖の大作「止水」は心境的な作品であつたが、畫調は重い。其他佐藤敬の「曉」、三田康の「鐵棒」、小磯良平の寫實的な「肖像」、伊勢正義の「ラグビー」、中西利男の水繪等が擧げられ、應募作では小松益喜、合田小三郎、會員に推された坂井範一、新作家賞の工藤正義、藤尾龍四郎等が勉強を見せた。彫刻部の作品では、本郷新の藤島武二の記念碑的肖像はモニュメンタルな企劃は認められるが、技術的に難を免れぬ。明田川孝、吉田芳夫の諸作は彫塑的な態度に佳いものを示したが技術足らず、外に山内壯夫、船越保武、入選で三宅常夫等を擧げ得る。特別陳列された菊池一雄の四點は歐洲的な教養を備へ、將來を期待せしめるものがあつた。

〔搬入〕繪畫六三七點、彫塑三九點(入選)繪畫七四點、彫塑三點(無鑑査)繪畫部三名(新會員)荻須高德、坂井範一(岡田賞)合田小三郎(新作家賞)工藤正義、古茂田公雄、藤尾龍四郎

出品目録 (○會員)
 見る 土居 淳夫 裸婦 原田 實
 風景 青峰 重倫 風景 椿堂芳三郎
 裸 松尾 絹子 花賣少女 矢津 綱紀
 少年 萩 太郎 街角 三澤 弘
 神津牧場 小關 利雄 樂興の時 ○中西利雄
 百合 大住 閑子 青衣 同
 曉 ○佐藤 敬 部屋ニテ秋岡 元二
 夏 高島 千代 朝顔 大嶺 和子

第三部會第六回彫塑展 九月一日—十五日 東京府美術館
 阪・阪急百貨店
 日 青山・玳瑁畫廊
 田川勤次洋畫展 九月一日—六日 大阪・阪急百貨店

娘たち 村尾 絢子
 白い洋服 同
 雨降る日 合田小三郎
 捨猫 同
 草林 里川 芳江
 階段と私 鈴木 新夫
 裸婦(彫) ○佐藤 忠良
 藤島武二先生ノ像(彫) ○本郷 新
 神戸山本通風景 小松 益喜
 神戸居留地東町風景 同
 神戶山手風景 同
 女と花 小田 晴子
 肖像 ○小磯 良平
 二人 小田 晴子
 アトリエ 若松光一郎
 巨木のある風景 太田 忠
 汽車の走る風景 同
 ラグビー ○伊勢 正義
 諸物 小山 良修
 映像 同
 群猿 小菅 徳二
 家 崔 載徳
 海濱 ○脇田 和
 みなと 天野 三郎
 野薔薇 清原 昭
 二人 古茂田公雄
 裸婦 同
 小使さん 同
 三人 同
 明夜 相澤 光朗

隕石(彫) ○舟越 保武
 座像(彫) ○明田 川孝
 立像(彫) ○柳原 義達
 首(彫) 伊勢 典賢
 窓 岡田 正二
 朝鮮取材(習作) ○三岸 節子
 花と少女 岡田 正二
 横濱風景 杉田 理夫
 少女 瀧島 好正
 二人 川上 榮子
 鐵棒 ○三田 康
 五月 東海林 廣
 風景 増田 雅子
 夏 藤澤 典明
 歴史 東本 恒子
 雨後 井上 幸
 驟雨前 富田 一夫
 金魚 深見善恵男
 民俗誌(俗信) 小野 忠重
 民俗誌(民話) 同
 道 工藤 正義
 朝 同
 縦の風景 坂井 範一
 或小さな街の風景 神保 壘
 景 佐藤 誠子
 農婦 佐藤 誠子
 スタンドのある風景 小川 義二
 風景 古茂田守介
 裸婦 臥せるトルン 曉吉
 (彫) 向井 曉吉
 生(四つの門の内) ○吉田 芳夫

九月
 日本新作表装研究會展 九月一日—五日
 日 青山・玳瑁畫廊
 田川勤次洋畫展 九月一日—六日 大阪・阪急百貨店
 第三部會第六回彫塑展 九月一日—十五日 東京府美術館

美術展覽會 (九月)
 五三

婦人像 丸山東美男

止水 (内田 巖)

橋 十河 眞一

理髮室の一隅 榎井 一夫

港 榎井 一夫

家 塚井 一夫

繪を見る女 伊吹 英次

街(蒙古) 関谷 陽

鰐 内田 武夫

編物 齊藤 正夫

室内 石川 菊壽

働く人々 藤尾記四郎

風景 氏家 次郎

女三人 伊川 藤義

N君の像 日高 大三

樹 林 佐門

午後(仕事) 田村 風堂

近所の人々 今村 俊夫

初夏 曾我 英吉

水上生活者 原 安佑

ギリシヤ彫刻ト人(ノスタルジヤ) 田淵 巖

朝鮮大博覽會 九月一日—十月二十日

京城・馬場町 京城日報社主催、後援朝

鮮總督府その他。

津田正周近作個展(洋) 九月二日—四

日 京城・三中井

池田遙村、小野竹喬山水畫新作展(日)

九月二日—四日 銀座・資生堂 都市と

美術社主催。

新浪漫派繪畫彫刻第二回展 九月二日

—五日 銀座・菊屋畫廊

益田菅江個展(日) 九月二日—七日

大阪・阪急百貨店

紀元二千六百年奉祝石川縣美術展(綜

合) 九月二日—九日 金澤市公會堂

昨年結成された石川縣美術協會は、皇紀

二千六百年を奉祝して日本畫、洋畫、彫

塑、工藝の綜合展を開催した。

〔審査員〕川合玉堂、吉田秋光、和田三

造、北村西望、板谷波山等九名〔搬入〕

四七三點〔入選〕一六七點〔陳列數〕一

九四點〔授賞〕略

日本美術院再興第二十七回展(日、彫)

九月二日—十八日 東京府美術館

日本美術院は、紀元二千六百年奉祝展

への参加を決すると共に、その恒例の展

覽會をも開催した。

横山大観の著彩畫「首夏」は高山の岩

上にとまると一羽の吠々鳥を描き、その構

想に於て大観らしいものであつたが、そ

の躑躅花の描寫の巧緻を除いては畫面生

硬に陥つて成功した作品とは言ひ難かつ

た。前田青邨の「鶴」は水墨淡彩畫であ

り、小品ではあつたが畫趣躍動するもの

であつた。小林古徑の「觀音」は古徑と

しては珍らしき題材であり、部分的には

破綻を示してゐるが、その制作意慾には

將來の作品を期待せしめるものがあつ

た。太田聽雨の「大雅」は、制作の後の悠

々たる境地にある壯年の大雅に若き玉瀾

を配した二曲半双の作品であり、巧みに

性格を表現すると同時に、その賦彩、線

描共に優れ、場中の佳作とされた。中村

貞以の「帯」は、兩膝ついて後向に鏡に

見入る若き女性を描きその暗黄綠色の毛

織の衣裳の表現にも神經の行きとゞいた

ものであつた。堅山南風の「秋の海原」

は碧海の上を飛躍する群魚を表はし、郷

倉千靱は湖、山の雪景に新工夫を見せ、

酒井三良は中支に取題せる風景三點に牧

歌的な表現を見せた。大智勝観は竹林を

描いて繊細な情趣を表はし、新井勝利は

「山伏攝待」に堅實な手法を見せた。こ

れ等のほか佐野光穂の「日午」、我妻碧宇

の「靜韻」、中島清の「初夏の花」等が舉

げられる。併し、奉祝展出品その他の事

情で同人の十餘人が不出品であつたこと

は會場に寂寥を感じしめた。

彫塑では平櫛田中が「弘法大師試作」

「杉田氏像」に練達せる木彫の技法を示

し、石井鶴三は「閑坐」「休息」に纏りの

良い作品を見せた。中村直人の二點の中

「鷹」はその意圖せる強さと鋭さを表現

し得た佳作であつた。山本豊市の「女の

顔」、村田徳次郎の「座婦」共に好ましき

小品であり、その他辻晋堂の「黒田氏像」

關谷充の「森氏像」、松森一三の「學童の

首」等が擧げられる。

〔搬入〕繪畫五九五點、彫塑一五三點〔入

選〕繪畫七三點(七〇名)、彫塑四二點(三

八名)〔陳列數〕繪畫八七點、彫塑五九點

〔日本美術院賞〕(繪畫)第二賞「山伏攝

待」新井勝利、第三賞「日午」佐野光穂

〔院友推舉〕(繪畫)後藤芳仙、館岡栗

山、北澤映月、眞野滿(彫塑)櫻井祐一、

山口眞一郎

出品目錄 (〇同人)

繪畫

カナメ垣 飯島柳三郎

綠翳 加藤 彰華

養蠶家 齊藤 達雄

垣根の桃 後藤 芳仙

工女圖 鈴木 大藤

閑寂 岡田 雄燈

木の間の秋 常盤 大空

扶桑花 堤 徳次郎

待春の大菩薩 中島 萬木

桐 島田 訥郎

朝 長谷川俊策

春林 土生 勝宣

春愁 木下 春

日午 佐野 光穂

南總風景 石本 光朗

倭建命と后 眞野 滿

谷間の花 關 暉明

朝鮮三題(四温、霜晨、鶴ノ巢) 長谷川朝風

盆踊 館岡 栗山

さわやか 宮部沙久彌

夏日游鯉 荒木 天立

山伏攝待 新井 勝利

やまつ、じ 郷倉 和子

婦女 北澤 映月

花苑 柳多佐加恵

朝顔 清原 齊

涼韻 安孫子真也

林 上垣 候島

缺ノ音(遊行風 越ノ内) 中島 菜刀

葉刈(同) 同

大雅 〇太田 聽雨

花たば 相原萬里子

早春 錦 光輝

早春葡萄酒 横田 仙草

樹蔭 村田 泥牛

大原の春 南藤 朱鳥

豌豆 相馬 千里

中支所見三題 〇酒井 三良

帶 〇中村 貞以

首夏 〇横山 大觀

秋ノ海原 〇堅山 南風

齋春 〇兼谷 等觀

雪二題(山・湖) 〇郷倉 千鶴

到春 田代 放生

卯の花 酒井 とし

靜韻 我妻 碧子

初夏の花(菖蒲、芍薬、牡丹) 中島 清

鶉 〇前田 青邨

供花 片岡 球子
 三味 同
 散花 同
 かはら 三石 紅衛
 山櫻 ○小山 大月
 藤 同
 朝霧 中澤 一徳
 柿の秋 瀬戸 水明
 赤澤の新緑 柿沼 宗居
 秋の客 小谷津狂牛
 初冬の池 鈴木 三朝
 茶岡冬日 島田 良祐
 菜園 今野 忠一
 熱帯植物 宮内 雪江
 まの取り 佐藤 耕寛
 斑牛 鈴木麻古等
 春苑 鶴岡 節夫
 嵐風過 百瀬徳三郎
 曉の雄阿寒獄 ○眞道 黎明
 愛染明王 ○橋本 静水
 竹秋 鹽澤 天龍
 漆の春 八島 光允
 冬暖 吉川 朝衣
 郷愁 羽川 伸二
 梨棚 三村 石邦
 皐月頃 ○大智 勝觀
 田鶴 中庭 燦華
 雪の朝 番場 春雄
 盛夏 加藤 勝重
 久米寺大塔縁起 安谷 茂彦
 かばちや 狗卷南名雄
 浴後(節句ノ日) 津田 榮子
 久地の梅 船田 玉樹

豪徳寺の櫻 殿田 玉樹
 古き沼 織田 一造
 秋 林生 光
 珊瑚樹 鈴木 竹柏
 彫塑
 伯道仙人 柏木 康兵
 女性像 ○宮本 重良
 婦人像 小林 三郎
 ○氏像 關 長造
 舞妓 ○中村 直人
 鷹 同
 休息 ○石井 鶴三
 閑坐 同
 蛭御前 山口眞一郎
 座婦 ○村田徳次郎
 裸婦習作 同
 森氏像 ○關谷 允
 小倉氏像 同
 肥後氏像 同
 黒田氏像 辻 晋堂
 こども 同
 黒田氏像 同
 童女立像 小柳津三郎
 ひざまづける女 森 眞一
 少年像 小林 眞吾
 裸婦 古藤 正雄
 北支之悟入者 菊 池淡翁 矢崎 虎夫
 支那服の女 櫻井 祐一
 女の顔 ○山本 豊市
 蘆本氏像 寺淵 默山
 葵ノ上 廣野悦之輔
 幼女習作 長濱 虎雄

習作 河野 正藏
 女習作 市川 二男
 弘法大師試作 ○平柳 田中
 杉田氏像 同
 飛行天女 ○大内 青圃
 女子立像 廣野 忠一
 犬 吉田 龍藏
 細田氏像 ○松原 松造
 裸婦 林 是
 老人像 同
 立像習作 ○喜多武四郎
 少年首 同
 支那服ノ女 大野 隆一
 お神樂(スケツチ) 宮本理三郎
 駱駝 同
 瀨野覺藏遺作展(洋) 九月三日―七日
 上野・松坂屋
 今春逝去した瀨野覺藏の遺作展が陸軍美術協會主催、陸軍恤兵部後援の下に開催された。遺作は約百六十點で、今次支那事變における中南支軍畫が主であつた。

彩人会洋畫展 九月三日―八日 大阪・大丸
 太田天橋從軍ペン畫展 九月三日―十日 日本橋・高島屋 陸軍美術協會後援。
 明期美術聯盟第七回展(日) 九月三日―十四日 東京府美術館
 紀元二千六百年奉祝に寄せて公募による第七回展を開催、同人の狩野晃行は「旭日彩龍」「櫻樹白鳳」の二點を出品、其の他東條光高の「正覺斷臂」、木利村創爾郎の「郷土遊踪五題」「八ッ鹿蹄」、渡邊日向の「土」等が會の特色を見せてゐた。陳列數小品室を除き二十九點。
 「搬入」一六〇點(入選)二七點(同人推舉)木利村創爾郎、渡邊日向(盟友推舉)廣橋環齊、青柳定義、藤井小穂子(明期賞)渡邊日向(調花賞)東條光高、山下昌風(研究賞)小野竹牛、廣橋環齊、青柳定義
 山下大五郎個展(洋) 九月五日―八日 銀座・資生堂
 國際都市・神戸風物展(洋、彫) 九月六日―八日 銀座・三越
 赤松俊子南洋の個展(洋) 九月六日―十日 銀座・紀伊國屋
 日本美術學校講師展(綜合) 九月七日―十一日 銀座・菊屋畫廊
 三浦俊輔、小野末、片多三吉三人展(洋) 九月七日―十一日 大阪・美術新論社畫廊
 京都諸大家新作畫展(日) 九月七日―十一日 京城・丁子屋
 東京みつゑ會第十一回展(洋) 九月七日―十二日 新宿・三越
 柳瀨正夢油繪展 九月九日―十一日 福岡・岩田屋 九州文學社主催。
 佐藤長生油繪展 九月九日―十二日 銀座・資生堂
 小川信霞日本畫展 九月十日―十四日 日本橋・高島屋
 山岸至計興亞風物畫展 九月十日―十五日 大阪・大丸
 中南支各地の從軍作品八十餘點を陳列した。
 商工省工藝指導所展 九月十日―十七日 福岡・岩田屋
 日本劇畫協會第七回展(日) 九月十一日―十五日 銀座・松坂屋
 白日莊現代大家日本畫展 九月十一日―十七日 日本橋・三越
 下田範次個展(洋) 九月十三日―十五日 銀座・菊屋畫廊
 長谷川路可朝鮮風景展(日) 九月十三日―十五日 京城・丁子屋
 高瀬五畝、根岸香齋、佐川百敏日本畫展 九月十三日―十六日 銀座・資生堂
 三村英一個展(洋) 九月十四日―十八日 銀座・三味堂
 造型新現實協會第三回展(洋) 九月十四日―十八日 銀座・紀伊國屋
 和田三造版畫展 九月十四日―二十三日 大阪・阪急百貨店

大輪畫院第三回展 (日) 九月十四日—二十四日 日本美術協會

小林彦三郎を主宰とする同會の第三回展、小林の六曲一雙「跳翔」、谷良治の「日乃出」、樋口英雄の「盛夏想雪」其他、合計三十四點を陳列した。

〔搬入〕一五一點〔入選〕二九點〔準院友推舉〕大野皓司、小田原利夫、篠田忠康、西之坊水聲、鷹賞以下略

青龍社第十二回展 (日) 九月十五日—二十四日 名古屋市公會堂

内外油繪彫刻展 九月十六日—十八日 芝・東京美術俱樂部 青樹社主催。

惟軌會第三回展 (洋) 九月十六日—十九日 數寄屋橋・日動畫廊

青驥社第一回邦畫展 九月十七日—十九日 銀座・菊屋畫廊

内海加壽子個展 (日) 九月十七日—十九日 銀座・資生堂

印天會日本畫展 九月十七日—二十日 大阪・天賞堂畫廊

東海美術協會洋畫部會員展 九月十七日—二十二日 名古屋・十一屋

エウダルド・セラ・グエル彫塑展 九月十七日—二十二日 神戸・大丸

海軍從軍美術展 九月十七日—二十二日 日本橋・白木屋

海軍協會、東京日日新聞社主催、海軍省後援。支那事變に従軍せる作家の洋畫日本畫、彫塑、寫眞、舞臺裝置等、計七十五點及び石井柏亭、中村研一、熊岡美

彦、藤田嗣治の特別出品を陳列した。

〔海軍省買上〕「北海附近ノ敵前上陸」小早川篤四郎、施療「高橋亮」、「射手」田中稻三、樂會攻略「古城江靚

小西謙三油繪展 九月十七日—二十四日 大阪・高島屋

東都大家新作日本畫展 九月十八日—二十二日 上野・松坂屋

原鐵山及在留外人日本畫展 九月十九日—二十一日 神戸・オリエンタルホテル

石井彌一郎洋畫展 九月十九日—二十二日 日本橋・白木屋

香田勝太洋畫個展 九月十九日—二十三日 大阪・美術新論社畫廊

園部晋生洋畫展 九月十九日—二十四日 大阪・阪急百貨店

現代大家日本畫展 九月二十日—二十二日 日本橋・東美俱樂部 澤百和堂主催。

高野三三男滯歐作品展 (洋) 九月二十日—二十四日 數寄屋橋・日動畫廊

フランスに十七年滯在した作者が歐洲戰亂のためこのほど歸國、携行した少數の滯歐作を發表した。小品の「花と娘」「手鏡」等得意とする女の肖像畫の外に二三の靜物畫を見せた。

國洋美術會第一回展 (洋) 九月二十日—二十四日 銀座・三味堂

大塚金吾第七回洋畫展 九月二十一日—二十四日 銀座・資生堂

春臺美術小品展 (洋) 九月二十四日—

二十八日 銀座・青樹社

一星會展 (洋) 九月二十四日—二十八日 大阪・美交社 同社主催。

竹久夢二七周忌回顧遺作小品展 九月二十四日—二十八日 銀座・吾八

深交會繪畫裝裝研究展 (日) 九月二十四日—二十八日 日本橋・高島屋

乾坤社第二回展 (日) 九月二十四日—二十九日 上野・松坂屋

「さしたる作品でもないのに數千圓もの狂ひ相場を生じ、特權階級にのみを以てにした昨今の状態は是正すべきであり、同時に賣らんがためならざる一般の精神的昂揚をはかるを意圖する展覧は必要である。その意味に於てはこの乾坤社の企ては目的にかなつてはるようが、内容は未だしの感深い。矢野知道人の水墨による「三嶽道者」は畫囊を肥やすべく立山、白山に登つた大雅堂に取材したもので、この作家久振りの佳作であり、直

原放青の『頌和譜』は南京郊外風景の寫生ではあるが、佳品としてこの會に於ては注目に價する。もちろん細かい技法の點には多難もあらうが、この作畫態度は取上げるに足るものであり、それにつづくものとしては河口樂土の『赤目溪谷』がある。たゞこの作は色調はよいとしても岩皺の簡略をはかるに急にして岩石の持つ性格を忘却した憾み多く、ために畫面に自然觀を失してゐる。その他小松嵐々人の『岬』はその觀照と色調に苦心の跡を示すが、『層雲峽』の水墨は粗雑であ

る (東朝)

〔搬入〕一八點〔入選〕四三點〔社友推舉〕上野正之助、清水洵平、鈴木樂浪、森本三木、菅江白樺 (紀元二千六百年記念賞)「赤目溪谷」河口樂土、頌和譜」直

原放青、「石清水」福田青藤、「碧沼々」村上景雲、「雲湧く」清水石溪 (高山賞) 直

原放青、河口樂土 松坂俱樂部賞、獎勵賞省略

日本南宗畫會同人展 九月二十四日—二十九日 大阪・大丸

北上聖牛作品展 (日) 九月二十四日—二十九日 大阪・三越

瀨野覺藏遺作展 (洋) 九月二十四日—二十九日 京都・大丸 陸軍美術協會主催、陸軍恤兵部後援。

今村俊夫、大嶽茂樹油繪彫刻小品展 九月二十四日—二十九日 大阪・松坂屋

煙雲會日本畫展 九月二十五日—二十九日 銀座・菊屋畫廊

水田硯山個展 (日) 九月二十五日—二十九日 日本橋・白木屋

淀橋區彩管奉公會即賣展 (日、洋) 九月二十五日—二十九日 新宿・三越

梅津秋穂日本畫展 九月二十五日—二十九日 上野・松坂屋

明治美術研究所主催明治、大正、昭和物故作家油繪展 九月二十六日—三十日 大阪・朝日會館

日本美術院名古屋展 九月二十七日—十月六日 名古屋市公會堂

棚橋慶心堂新作日本畫展 九月二十八

日二十九日 名古屋美術俱樂部
安藤義茂油繪展 九月二十八日—十月
三日 京城・三越

十月

赤松雲嶺個展(日) 十月一日—三日
大阪・高島屋

松本俊介個展(洋) 十月一日—三日
數寄屋橋・日動畫廊

雜賀文字洋畫展 十月一日—四日 銀座・養生堂

川有智長三個展(洋) 十月一日—五日
大阪・美術新論社畫廊

古賀忠雄第二回彫塑小品展 十月一日—五日 銀座・鳩居堂

第二回貿易局輸出工藝圖案展 十月一日—六日 日本橋・高島屋

商工省貿易局は昨年輸出工藝圖案展を
設置したが、その第二回展を開催した。
搬入總數一、〇二七點(五三一人)、鑑査
合格數一二九點(九六人)。今回は會場を
東京府商工獎勵館より日本橋高島屋に移
し、輸出工藝に對する認識を普及するに
努めた。尙東京に次で、大阪、京都、名
古屋に於て開催した。

〔授賞〕二等賞(千圓)「婦人服地」上坂
正雄、「テールブルウェア」「タバコセツ
ト」「花瓶」金子徳次郎、「盛鉢」日根野
作三、「玩具」劍持仁 三等賞(三百圓)
須藤雅路、清水正、山川貞路、釣本庄逸

新燈社第十八回展(日、洋) 十月一日—
六日 大阪市立美術館

同會では作品公募の上奉祝紀元二千六
百年展を開催、同人青木大乗の「壽」を
はじめ幹部の作及び入選作を陳列した。
〔授賞〕(新燈賞)東條隆光、岡田得之助
(特賞)小山修、寺田六華、湯川直春、喜
多暉月(同人推舉) 菖蒲大悅(幹部推舉)
志賀且山、西雅司、木曾英太郎

玉村方久斗新作日本畫展 十月一日—
六日 上野・松坂屋

田川勤次洋畫展 十月一日—六日 大
阪・阪急百貨店

高橋惟一洋畫展 十月一日—六日 大
阪・阪急百貨店

中川一政邦畫扇面繪新作展 十月一日—
六日 大阪・松坂屋

旺玄社展(洋) 十月一日—九日 新
宿・三越

紀元二千六百年奉祝美術展覽會(綜合)
前期十月一日—二十二日(第一部、第三
部)後期十一月三日—二十四日(第一部、
第三部) 東京府美術館

皇紀二千六百年を奉祝する文部省及紀
元二千六百年奉祝會共同主催の綜合美術
展覽會は、特に本年度文展を中止し、各
美術團體を綜合して、前期、後期に分つ
て開催された。各部に依つて小異はあつ
たが、凡て此の曠古の祝典を慶祝する美
術家の心構へにより、近來に無き綜合展
の實を擧げ、略々現代日本の美術界を俯
瞰することが出来、内容的にも見るべき
ものがあつた。

前期に於ては第二部(油繪、水彩畫、
バステル畫、素描、創作版畫等)と第三
部(彫塑)が展観された。先づ第二部に
就て記せば、旺玄社等の如く獨自に展覽
會を開いた二三の團體を別とし、太平洋
畫會、一水會、春陽會、新制作派協會、
東光會、二科會、國畫會、獨立美術協會
光風會の現在の主要洋風畫團體の殆んど
全部と、文展系其の他の無所屬の作家が
含まれた。而して、其の作品の選出方法
も他の部門と異り、その無所屬の一部に
審査が加へられた外、各團體は夫々責任
を以て作品を選出して割當てられた室に
團體別に陳列し、所謂聯立展の形式がと
られた。従つて茲に陳列された七百餘點
によつて現代の吾が洋風畫が略々總括し
て鳥瞰的に觀られた。概して言へば、洋
風技法の研究の復活以來七十年を經過
し、泰西近代様式の追究に急であつた吾
が洋風畫は一貫せる傳統を持たず、未だ
全面的に吾が國独自の様式を樹立するに
至らず、技法又共通的に未熟であり、新
興藝術の域を脱し得てゐないことが認め
られる。

次に出品作品の主なるものに就て記載
する。第一室、第二室は太平洋畫會の作
品である。歴史的に今日最も古い同會
は、その反面に微穩的な官學風を墨守す
るに止まり、新鮮味を持たず、又創造的
な活力をも缺いてゐる。石川寅治は郷土
的な温泉場を、吉田博は穩和な作風によ
つて「河原」を、三上知治は「朝」と題

して馬の調練を描いてゐる。その他、中
村不折の「湖畔」、奥瀨英三の「山村初
夏」があつた。第三室及び第四室には一
水會の作品がある。此の會の會員達が、
何れも印象派に出發して二科會に據つて
吾が洋風畫に啓蒙的な役割を果したこと
は既に過去に屬し、今日に於てはその智
的な傾向と技術の尊重に依つて、吾が洋
畫境の一主流をなしてゐる。山下新太郎
の「白樺の若木」、有島生馬の「朝」はい
づれも印象派風の作品であり、石井柏亭
の瓜棚に人物を配した「農村秋景」は練
達せる技巧に依り郷土風景を描いたもの
である。又安井曾太郎の黒き扇を持てる
和服の婦人像は、人物の濃刺たる表現と
色調の階利に於て優れ、此の展覽會に於
ける人物畫として重きをなすものであ
る。木下孝則、碓伊之助或は中村琢二の
婦人像或は小山敬三、中村善策の風景畫
等も擧ぐべき作品であつた。次に第五、
六、七室は春陽會である。小杉放庵は油
彩に依る「樂人」に東洋的な効果を求
め、足立源一郎は白雪の富士山を忠實に
寫し、木村莊八は「三番夏」に歌舞伎の
舞臺を表はし、水谷清は「御神樂」に日
本の郷土的な舞踊を描いてゐる。その他
石井鶴三、中川一政、岡鹿之助の夫々獨
特の作品がある。第八室には舊帝展出品
の無所屬の作家達の作品がある。藤島武
二は病を推して奉祝の意を表せる「蒙古
高原」に單純化された力強い構圖にその
力倆の片鱗を示し、金山平三、山本鼎は

前期

前期

前期

前期

前期

前期

前期

前期

前期

前期

前期

前期

山と海の風景に練達せる技巧を示してゐる。その他田邊至の「綠蔭」、會宮一念の「姫子の雪」、林重義の「少女」等があつた。第九、十室は新制作派協會である。同會は今日の若き世代を負ひ、漸く洋風畫界の中軸の一員たらんとする人々である。一般的には九月の此の會の展覧會の方が見る可き作品があつた。併し、小磯良平の窓邊に少女を描ける「踊り子」や内田巖、脇田和、猪熊弦一郎、伊勢正義、萩須高德、中西利雄等夫々内容的な作品であつた。第十一、十二室は東光會であるが、齋藤與里の「利根川」が獨り傑出し、他は著しく技法の粗放さが目立つた。「利根川」は黄昏の森閑たる河邊の情景を紫灰色を主調とした色彩と極めて自由な筆觸を以て表はせるもので、吾が油彩畫の一方を示すものである。第十三室より第十七室は無所屬作家の室である。官展系の作家を主としてゐるが、洋風畫界の長老松岡壽が堅實なる手法を以て「海老名禪正氏肖像」を示したほか、高間惣七、長谷川昇、伊原宇三郎、里見勝藏、阿以田治修、伊藤廉、倉員辰雄等があつた。第十八室より二十室は、二科會である。同會は歴史的にその啓蒙的使命を終つたかに思はれるが、今日猶多くの會員を擁してゐる。同會の藤田嗣治の存在は、その独自の畫風に依つて同會を特色付けてゐる。向井潤吉、野間仁根はそれぞれ眞摯な作品を示したが、その他熊谷守一、正宗得三郎、鍋井克之、黒田重

太郎等會員の作品があつた。第二十一、二十二室は國畫會である。梅原龍三郎は北京の古都に材を得て「紫禁城」を出品した。綠樹の間に聳ゆる朱と瑠璃色の甍の連なる古宮は、色彩、内容共に豊かな作品となつて注目された。青山義雄、庫田聚、椿貞雄の作品、又平塚運一、棟方志功の木版畫も記すべきものであつた。第二十三室より二十五室は、獨立美術協會である。清水登之、鈴木保徳、川口軌外、海老原喜之助等いづれも努力を見せ、須田國太郎の「歩む鷺」、中山巍の「田園に育つ」共に成功した作品であつた。又日本の傾向を示すものには、小島善太郎の「湖畔朝陽の富士」、兒島善三郎の「松櫻圖」の如きがあつた。最後の第二十六室から三十室は光風會である。同會は長く官展の主體をなして來れるものであるが、今日日本の官學風を確立したのも、又新傾向を示す著しきものも尠い。併し、中村研一は「北京官話」にその健筆を示し、中澤弘光の「鶴の森」、辻永の「秋映ゆ」、南薫造の「甘藍畑」や小糸源太郎、寺内萬治郎等の諸作、又記すべきものであつた。同會には又朝井閑右衛門、石川滋彦、伊藤悌三、南政善等の支那各地に取題せる作品が陳された。

なかつた。出品作品は總て鑑査の上二百五十二點の陳列を決定したが、彫塑室のみを以てしては陳列し切れず、工藝室の數室を利用した爲、一部に於て採光等にも不満足の結果を來した。吾が現代彫塑に於ける制作意欲の不足、主題の貧困は屢々指摘されるところであるが、茲にも著しき飛躍や發展は見られず、研究作品程度の裸體像の汎濫は徒に觀者を倦ましめた。木彫としては、練達せる刀法を示し極彩色を施した平櫛田中の坐像「原翁閑日」古代女性を扱つた山崎朝雲の「倭乙女」武將を扱つた内藤伸の「順天我往」の如きが擧ぐべきものであつた。彫塑の中、齋藤素巖の群像浮彫「日は昇る」、朝倉文夫の「清麻呂公像」は何れも記念的な大作であるが、内容の表現に不足があり、小倉右一郎の「山田長政」又普通の出來であつた。石井鶴三の「相撲」、北村西望の獅子を扱へる「一哮風發」は共に動的瞬間を巧みに捉へた佳作であつた。裸體像の中、藤井浩祐の「裸女」及び建島大夢の「頰杖」は、一は柔軟に過ぎ、一は生硬の憾みがあつた。安藤照の「二つの對稱を求めて」は二人の裸女を組合せ、その細部の手法に細い關心の注がれた佳作であつた。その他中村直人の「鶯」、清水多嘉示の「千人針記念碑の一部」、寺瀬默山「象山先生像」、水舟六洲の「若き農夫の像」、森野圓象の「神火」、中村七十、木村章平、大嶽茂樹の女性像の如き擧ぐ

べき作品であつた。後期 後期に於ては、第一部（日本畫）及び第四部が展觀された。第一部は團體として青龍社が不参加であつたが、文展系、院展系を併せ略し現代日本畫界を網羅し、藝術院會員より選出された委員が出品全作品に就て鑑査を行つた。又作品の大ききの制限も第一部に於ては除かれた爲に、相當の大作が現はれた。斯くて、文字通り綜合展といふわけには行かなかつたが、老大家をはじめ注目すべき中堅作家が出品したことは、此の展覧會を意義あるものとした。先づ擧ぐべきは竹内栖鳳、横山大觀、川合玉堂の作品である。栖鳳は「雄風」と題し、二曲一雙の屏風に虎を表はし、これに蘇鐵を配した。構圖の弛緩、筆線の滯滞共に栖鳳の面目を充分發揮したものではないが、老齡此の大作を成した意氣は稱すべきである。大觀は大畫面に「日出處日本」と題し、神洲の靈峰を墨一色によつて表はし、これに眞紅の旭日を配した。これは筆技を越へた大觀の雄作であつて、その奉祝の誠意を吐露した作品である。玉堂の「彩雨」は秋雨に煙る山里の情景を表はした情趣あふる佳作であつた。次の時代の注目すべき人々には、鍋木清方、安田靉彦、小林古徑、前田青邨があつた。清方の「一葉」は明治の閨秀作家樋口一葉の肖像畫である。清方はその隨筆「雨の夜」の一節により、秋の夜寝られぬままに裂地を

取り出し、縫物をしようとしてゐる女性らしい場面をとらへて描いた。座像の姿態、顔面の慎重な描寫共に秀れ、彼の嘗ての「圓朝像」に比肩するものであつた。靱彦の「義經參著」は、兄頼朝の舉兵を聞き、駿州黃瀬川の陣に馳せ参じた義經が、頼朝の帷幕の間に片膝をつき笠の紐を解くのも氣忙しく、將に挨拶を交さうとする瞬間を捉へ、六曲半雙に描いたものである。その半雙は未完成で將來に期待せねばならなかつたが、靱彦はその構圖に形に色彩にその蘊蓄を傾倒し、稀有の古典的作品を示し、高く評價された。古徑の「不動」は、古畫を充分研究しつつ而も極度に簡略化された半跏童子形の不動を藉りて新しき象徴美を創造せんとするもので、院展に出品された「觀音」を更に數歩進めたものである。青邨の「阿修羅」も亦古來の三面六臂の形式を破り、金泥の火焰を背景として三人の武人を背中合せに組合せ、強い鐵線描を以て表徴的に表現した佳作であつた。文展系の作家橋本關雪、菊池契月、荒木十畝、上村松岡の出品のなかつたことは寂しかつたが、結城素明は「國史圖と花卉畫」二曲二雙を出品し、川村曼舟は「微雨」に木曾寢覺床の秋景を描いた。西山翠嶂の「洛北の秋」は頭上又梯と牀几を戴いて都大路を賣り歩く洛北の傳統的な風俗を描いた佳作であつた。南畫系の小室翠雲は梅花に群雀を配せる「林鳥浴仁」を、松林桂月は白樺の立竝んだ深山の溪

流を表はした「秋樹林」八曲一雙の力作を出品した。矢野橋村の「瑞雪」は雪に蔽はれた奥山の野生の鹿を描き、田中咄哉州は「豊潤」に葡萄樹下の猫を描いて新しい工夫を見せた。更に石崎光瑤は「隆冬」に雪雲を背景に大空に飛び立つ群鳥を描き、福田平八郎は「竹」に新工夫を凝らし、山口蓬春は「南島薄暮」に臺灣の風物を示した。又郷倉千靱、宇田萩邨は「白樺林」及び「新秋」の六曲一雙の屏風に夫々樹林を裝飾風に表はし、大智勝親は「霧」に新しき觀照を示した。中村貞以の「秋之色種」は慶長風俗をかゝりた風俗畫で、感覺鋭く技巧繊細な佳作であつた。伊東深水も「朝」に母娘の朝顔に興ずる風俗畫を描き、兒玉希望は「十六夜」に春章風の女性群を示した。又中村大三郎は「鸚鵡小町」の能畫に、新井勝利は「舞樂陵王」に共に古典的な手法を見せた。山川秀峰の「信濃路の女」、不二木阿古の「朝霧」は共に地方風俗の描寫に新しい手法を試み、酒井三良は「雪の會津にて」に牧歌的な情趣を水墨畫にて表はし、小島一谿は「洛外三趣」に独自の様式を示した。江崎孝坪の「出發」は日本畫に依る戰爭畫の成功せるものであつた。その他福田惠一の「雄圖」、福田翠光の「鵲」をはじめ、西澤笛畝、勝田蕉琴、池田遙邨、小林柯白、永田春水、白倉嘉入、小堀安雄、樋口富磨、東山魁夷、西山英雄、安堵三樹等の諸作が擧ぐべきものであつた。

第四部(美術工藝)は第一部と同時に展觀された。帝展及び文展の一回以上の審査員の作品を別として、應募作品に就て鑑査査が加へられた。その結果、合計六百一點が出陳された。その陳列も工藝室のみを以ては足りず、臨時に彫刻室に數寄屋造りの陳列場を設けた。

その題材、意匠に於て奉祝の意を象徴したものが數多く出品された。又東京、京都のみならず地方の各領域の作家が擧つて出品したことは意義あることであつた。概して言へば金工、漆器に見るべきもの多く、工藝美術界の現状を示したものと云へる。金工に就て言へば、香取秀眞の「鑄銅鳴禽置物」、清水龜藏の「鐵板衝立」、津田信夫の「鑄銅飛躍」いづれもその専門の技術を發揮し、より若き作家のものとしては高村豊周の「青銅花壺」、香取正彦の「鑄金卓と香爐」、山本安曇の「蠟型鑄銀山葵」、内藤春治の「曉雞置物」、村越道守の「葉文銅花瓶」、北原千鹿の「山壁掛」、内藤四郎の「柳文平脱文筥」等が佳作であつた。漆器も、金工と同様傳統的な意圖、技法に對し、新しき造型意識を盛らんとするものがあり、更に新しき材料を驅使せんとするものがある。六角紫水のアルマイトを應用せる「漆畫爆擊行」或は山崎覺太郎の色漆を用ひた「漆鬼屏風」の如きその代表的なものである。梅澤隆眞の「神泉石清水時繪硯箱」は傳統的技法に成功し、その他吉田源十郎の「漆器菊模様之棚」、多畑宗哉の「紫

漆棚」、磯井如眞の「漆器敷鳥棚」、本間舜華の「大瓢蒔繪筥」、高橋松山の「栗鼠模様木地蒔繪手箱」等が擧ぐべき作品であつた。陶器に於ては板谷波山の「彩磁山草文水差」、富本憲吉の「陶板」を先づ擧ぐべく、いづれも品格を備へ、清水正太郎の「陶花文大皿」、岡本爲治の「染付色彩蝶丸紋花瓶」、米澤蘇峯の「草文陶箱」、福田力三郎の「陶器瓜ノ圖角大皿」、加藤菁山の「天目釉木實文花瓶」、安原喜明の「盛花器」等又注目すべきものであつた。染色には鹿島英二の「天鷲絨六曲屏風半雙」をはじめ、山鹿清華の「手織錦樂土圖敷物」、山形駒太郎の「大陸に日は輝く」があり、長安右衛門の「漆色國難屏風」或は渡邊春男の「鵲瀨サボテン屏風」は共に新人の注目すべき作品であつた。その他の領域に於ては飯塚環珩齋、同小圩齋の竹器、各務鐵三の「硝子鉢」、稻木春千里の「火鉢」、堀柳女の人形等が見るべき作品であつた。

第一節	第二節	第三節	第四節
撤入	入選	無鑑査	陳列數
第一節	一六三	二六九	〇
第二節	〇	〇	七七
第三節	四三三	三三三	〇
第四節	一〇〇六	五三三	三六〇
(宮内省買上)(第一部)	芥子	山口玲	
熙(第二節)	奥入瀬	佐竹徳次郎	信濃路
金山平三	山村	野間仁根	(第三節)
相撲	石井鶴三	(第四節)	瑞穂花瓶
河合榮之助	雲人形	綿貫萌春	畫
林俊郎	露草硯箱	古山英司	

「神泉石清水時繪箱」梅澤隆眞、「彫金象嵌盛器」三井義夫

「李王職買上」(第一部)「洛北の秋」西山翠璋(第四部)「雙嶺染鳥と實」木村雨山、「山壁掛」北原千鹿

〔文部省買上〕(第一部)「出發」江崎孝坪、「阿修羅」前田青郎、「不動」小林古徑、「一葉」鋪木清方(第二部)「モンマルトル裏」萩須高德、「歩む鷺」須田國太郎(第三部)「象山先生像」寺瀬默山(第四部)「鐵板衝立」清水龜藏、「硝子鉢」各務鑽三、「ホロ／＼鳥置物」磯崎美亞、「栗鼠模様木地時繪手箱」高野松山

〔奉祝會買上〕(第一部)「微雨」川村曼舟、「肇國之宮居」池田遙邨、「鶴」湯原柳畝(第二部)「農村初秋」石井柏亭、「聖峯試練」足立源一郎、「時化の朝」山本鼎(第三部)「倭乙女」山崎朝雲(第四部)「柳文平脱文宮」内藤四郎、「青銅千鳥文水盤」林萬壽人、「紅彩梅樹文方形花瓶」加藤土師萌、「銀莖菜花瓶」海野建夫

「トンボ清遊二枚折」佐藤尙珉、「鑄銅花瓶」北原三作、「山海の幸泰と和紙の衝立」高瀬直、「天目釉面取花瓶」長谷川白峰

〔東京府買上〕(第一部)「秋之色種」中村貞以、「新秋」宇田荻郎(第二部)「山村初夏」奥瀬英三、「利根川」齋藤里里、「鶴の森」中澤弘光、「岩屋寺經藏」平塚運一(第四部)「蠟型鑄銀山葵」山本安曇、銀と鉛草蟲文花瓶」寺田龍雄

出品目錄(會帝國藝術院會員) 委員

前期(第二、三部)

第二期

綠蔭遊鯉江崎寛友
北洋漁業の生命線 安田 顯
少女像 玉井力三
赤松 本郷 惇
花と女 海洲正太郎
河原 吉田 博
東亞の樂土(試作) 高村 眞夫
森の初冬 伊藤 成一
無心 光安 浩行
出湯の宿 石川 寅治
聽放送 渡部 審也
朝 三上 知治
卓上 田原 輝夫
みのり 戸津 文雄
奉祝二千六百年 池田水一治
夏日 都島 英喜
湖畔會委中村 不折
奔流 鹿子木孟郎
母の像 能見 三次
椅子に寄る女 早川 芳彦
日盛り 藤坂 太郎
英靈に感謝 吉原 甲藏
山村初夏 奥瀬 英三
江南の春 佐々貴義雄
無題 荻藤 三郎
ふたり 澁谷榮太郎
眞夏の池井口 勇
秋草 木原 二郎
製鹽 小宮宗太郎
風景 風景 潔

夏休み 大沼 靜巖
聖峰 金子 保
群長さん 武照
東伊豆の山々 平尾 良秀
小牛 齋藤 徳雄
御宿風景 多々羅義雄
山の牧場 清水敦次郎
古事記笠沙崎 平澤 定治
山陽 内田 象水
奧多摩溪谷 石井 明
國境の勇士 笹ヶ力巳吉
老婆 菅谷元三郎
湖畔の朝 野田 半三
奉祝大會出場 (水泳) 星野 二彦
横濱風景 布施徳次郎
樺太の蟹 石橋美三郎
朋の像 前田 眞一
深林の宮 (水影) 吉田ふじを
雲表(水影丸山 晚霞
水郷(水影 中田 暁霞
到處無心便是山 (素描) 鶴田 吾郎
秋 水戸敬之助
高千穂峰 高橋虎之助
靜物 飯田 實
南洋サイパン島 布施信太郎
熱川風景 久保 進
ふたご 小野田元興
八月 小倉 一雄
初夏 桑重 儀一
林家の庭 北嶋晋次平

女 淺井 眞
婦人像 中村 琢二
落葉松の道 中村 善策
詩人K氏の像 仲田 菊代
池畔 能勢 眞美
雪の最上川 眞下 慶治
白樺の若木 會委山下新太郎
農村初秋 會委石井 柏亭
朝 會委有島 生馬
黑扇會委 安井會太郎
紀州の漁村 矢野 雄藏
靜物 近藤 光紀
T令嬢像 木下 幸則
桂河畔夕映 小山 敬三
F嬢像 碓 伊之助
五月の金州 木下 義謙
ブルターニユ風景 大兼 實
竹林靜閑(水影) 山口 敏男
鯉 池部 鈞
曇り日のモンマルトル・サンピエール 高野三三男
金魚 鈴木 良三
千物(水影) 金澤 信夫
うどの花咲く(日野春) 山川勇一郎
紅衣 大石 俊彦
羞羞 矢崎 重信
ナポリ俯瞰 澁川 太郎

糸車と婦人 田坂 乾
岩山 高田 誠
壺造りの村 松田 忠一
夏山 小平 鼎
女と壺 安宅 虎雄
少年立像(水影) 荒谷直之介
梅雨時の街 二宮 雪夫
美根子 末松 勇
大沼 石川眞五郎
砂場 林 鶴雄
初夏の志賀高原 鍋谷傳一郎
松林初秋 田崎 廣助
淺間山 田中 清澄
春 高橋 庸男
農婦 近岡善次郎
樹下の靜物 寺島 貞志
カザツクの娘 福田 新生
園の春 北尾 修一
ガードのある村 納富 進
初秋 大久保一郎
紙芝居 加賀季一郎
冬の朝 楊 佐三郎
牡丹 吉田 達磨
高千穂 上野 春香
朝の訓練 田中壽太郎
ガリヤ 新沼 杏一
沖繩風景 大嶺 政寛
岩の湯 石井 鶴三
風景 南城 一夫
琉球ヤンバル船 川端彌之助

庭の靜物 田川 勳次
陶土 山田 伸吉
御神樂(郡上八幡) 水谷 清
秋畑 中谷 泰
聖峯試練 足立源一郎
少女像 若山 爲三
琉球風景 島海 青兒
眞晝のバルテューン 高田 力藏
琉球布と海芋花 藤堂全三郎
カラヂューム 柴田 恕夫
初秋 角南 松生
横たはる女 土屋 實
靜物 野村 千春
樹の上の少年 委中川 一政
綠衣 原 精一
風景 小穴 隆一
北窓遠望 高木 勇次
麥秋小閣本莊 越 紅型(木版) 前田藤四郎
樂人會委 小杉 放庵
客席(石版) 野崎新右衛門
三番叟 委木村 莊八
河口湖斜陽 小林徳三郎
南伊豆の海 栗田 雄
桃 國盛 義篤
雪(ルルド) 岡 鹿之助
南伊豆の町 横堀角次郎

波切 岩田榮之助
ペランダにて 佐藤 昌胤
不二樹海 倉田 三郎
劍舞 和田 蔵一
鞍馬 遠藤 典太
機關庫 田邊 謙輔
ソロボンヌ大學のある街 高橋貞一郎
柘榴 土屋 義郎
上總風景 鬼塚 金華
花と少女 大澤鉦一郎
ストラバヤ風景 兒玉 彦三
薄 加山 四郎
支那娘 秋口 保波
L'ARCANTO 津田 正周
寺院 今關 啓司
牡丹 岩崎又二郎
雪溪 二見 利節
集ひ 藤野 龍
北京の夏 伊藤慶之助
網干 宮脇 晴
繕ひ 原田 武男
海村 わらさとさば 伊川 廣治
モデル女 佐藤 篤郎
山池 小栗 哲郎
達磨 吉川 清
九州島原風景 木下 公男
文樂夏祭の團七 齋藤清二郎
猫 中村 善種
良寛堂 柚木 久太
少女 委林 重義
山と部落 落井田 昭彦

さるびやの活けて
ある室内飯島 一次
二千六百年
委川島理郎
姥子の雪 會宮 一念
奥入瀬 佐竹徳次郎
蒙古高原
會委 藤島 武二
綠蔭 委田 邊 至
晩秋の庭 平川 要
信濃路 金山 平三
青い服 廣木 幸與丸
山間春色 山下 品藏
早春 委 太田 善二 郎
時化の朝
委 山本 鼎
初夏の夕林 倭 衛
經木の帽子 關口 孝次
葡萄みもの
有馬 さとえ
花
鈴木 千久馬
水泳
安宅 五郎
いでゆ
宮地 一夫
紅白芙蓉圖
五味 清吉
ジャバ更紗
伊藤 清水
影
林 佐門
前線ニ送る
今村 俊夫
綠蔭
小田 晴子
野羊と葉 小菅 徳二
部落(蒙古)
關谷 陽
伊豆仁科 小關 利雄
白線
三田 康
夕景
富田 一夫
三人の家族
佐藤 敬

庭前(水彩)
小山 良修
夫婦と犬 脇田 和
三人
村尾 納子
鴛
内田 武夫
横濱風景 杉田 理夫
花
堺井 職一
室内
三岸 節子
小さき仲間
合田 小三郎
家族
原安 祐
バラソル 瀧島 好正
船の製作場
坂井 範一
ぬいとり 鈴木 誠
鳥
工藤 正義
草原
鈴木 新夫
部屋ニテ 秋岡 元二
海邊立像 萩 太郎
牧場
太田 忠
女と木の葉
猪熊 盛一郎
民俗誌(葬禮)
小野 忠重
秋
高島 千代
大室海岸にて
十河 眞一
踊り子
委 小鏡 良平
モンマルトル裏
萩須 高德
暗室
若松 光一郎
林の道(水彩)
丸山 東美男
腕輪の女 榎井 一夫
岩角生秋 内田 巖
白い服の姉妹(水彩)
中西 利雄
英三番館(第六作)
小松 益喜

少女(素描)
古茂田 公雄
裸婦
原田 實
肖像
伊勢 正義
港の見える窓邊
(水彩)
岡田 正二
父と子
日高 大三
冬の天草田代 順七
子供のお水船 三洋
赤い下駄 齋藤 久子
池畔
家永 三郎
緑側
三田村 繁
秋
西寺 鐵舟
まどべ
橋詰 英一郎
號合山と吉力
福田 昭太郎
二人
江藤 哲
仁王像
河井 達海
庭
小早川 篤四郎
O先生
野澤 寛
青い服
井手 裕子
市の人々 石本 秀雄
刺繡
大和田 富子
群鳥
福井 芳郎
辻の夜
河原 修平
静物
渡邊 浩三
雨
松居 均
漁夫閑日 安達 良雄
絵り
橋尾 整八
静物
吉川 正巳
淡路人形 竹内 三郎
迎春
佐藤 一草
婦人座像 平通 武男
利根川 委 齋藤 與里
水禽
胡橋 澤源人
夏日
岩下 三四
犬と子供 井上 脩

静物
鈴木 泰子
夏の庭
能岡 正夫
向日葵
八藤 勲人
小閣
向井 加壽枝
祈るアイヌ
大禮 半良樹
室内
辻 利平
室内静物 山本 貞子
白衣
西川 高次
麗春譜
徳水 富士子
老農夫
桑原 徳徳
春到る
松本 富太郎
兄弟
後藤 愛彦
大邱 郊外
大平 敬次郎
曉
藤津 誠一
韮
廣木 森雄
葉かけ
小貫 綾子
神津嶋の女
大寄 丹治郎
静物
長根 翠
静物
柳田 久
ともだち
山本 日子士良
あめふり 山下 大五郎
農家
正田 二郎
自畫像
故岸 田淑子
落日珠江 熊岡 美彦
椅子による
園部 晋生
朝
野口 謙藏
向日葵のある静物
瑞 忠
夏草
高橋 雅子
薩南風景 清原 武則
座像
松岡 正
赤い上衣 石田 勝重
人形をつくる男
森田 茂

静物
佐野 猛
海の女 遠藤 頼治
花ト女
李 梅樹
磐梯山
三角 嘉壽男
萬里ノ長城
井上 幸
白い花(八重く
ちなし)
島津 冬樹
裏庭
刑部 人
洞爺湖畔 齋藤 廣胖
めぐみ
中川 藤次郎
道場の青年達
若井 宣雄
綠庭
玉置 弘三
安乗の漁村
小川 博史
叢上
川村 精一郎
校庭の一隅
吉野 公倍
祝建國記念畫像
吉村 芳松
八ツ岳
倉員 辰雄
南島餘韻 名渡 山愛順
西宮戒神社の景色
龜井 貞雄
某某地の某餐
徳鹿 彪
バーゴラにて
柳瀬 彌生
幽谷
渡邊 信正
紫陽花
片岡 銀藏
夕餉まへ 青地 秀太郎
晩夏
宮地 亨
波
堀田 清治
朝顔と子供
西村 喜久子
早春
細井 繁誠
北支ニテ 橋本 はな子
或る日の数寄屋橋
(ハステル) 矢崎 千代二

ぼら(水彩) 眞野 紀太郎
風景(水彩) 谷井 善三郎
駱駝(水彩) 相田 直彦
山湖一望(水彩)
望月 善三
彈丸剔出(水彩)
石川 新一
芝生に憩ふ少女
(水彩)
三橋 兄弟治
光明は東方より
(テンペラ) 平澤 大輝
新緑の那智の御山
(水彩)
恩田 孝徳
男鹿風景(水彩)
五井 開一
かひこ(水彩)
川名 博
溪(水彩)
富田 通雄
南國の夜(水彩)
藍陰 鼎
孟宗竹林(銅版)
田中 進
竹藪(銅版) 高羽 敏
蘇州風景(銅版)
武藤 完一
都會風景(木版)
松尾 啓一郎
初秋(木版)
琴塚 英一
夏の夜(石版)
織田 一磨
苦力(木版)
前川 千帆
畝傍風景(木版)
渡邊 省三
夕映(木版)
山口 進
送り盆(横手町所
見)(木版) 勝平 得之
暖日(木版)
武田 由平
潮岬の黒潮
濱地 清松
藁
關口 隆嗣

御宿風景 安藤 信哉
婦人像
岡岡 一郎
山中人
山崎 省三
徳壽宮後庭ノ五
月
權藤 種男
天鷲絨の服
田中 繁吉
子供と牛 倉澤 義男
熱風
上野山 清貴
青葉風景 伊藤 廉
女性
里見 勝藏
白鷺
加藤 精一
樹木
山田 隆憲
重慶夜間爆撃行
ル(作戦室ニ於ケ
ル奥田司令)
清水 多嘉示
青柿
阿以田 治修
六甲山
宗俣 逸郎
歸還歸農 中野 和高
行進
赤松 麟作
素衣
伊原 宇三郎
吾が村と軍鶏
山下 繁雄
花園彩譜 油谷 達
雷鳴去
矢島 堅土
静物
末長 護
山へ
大久保 作次郎
漁港
香田 勝太
春
大久保 百合子
畫室にて 長屋 勇
ある日の朝
北島 淺一
太平洋
橋本 邦助
海老名 彈正 氏肖像
松岡 壽
富士
白瀧 幾之助
林間春景 富田 温一郎
M嬢
木村 義男

陽光
高間 惣七
にはさき 深谷 徹
美人小憩 窪田 照三
お稽古
長谷川 昇
神嶺
深山 鎮男
山百合
松部 巽
汾城南關にて
笹岡 了一
もろこしと子供
廣木 了
室内
坪井 一男
山上の松 金澤 重治
澎湃嶼遠望
森脇 忠
原野の人 不破 與吉
花賣の子 門松 茂夫
波止場
金田 新治郎
西門の警備
加藤 一豊
女人座像 金 仁 承
揚子江
草光 信成
サン・ステイエ
ンス・ド・モン
教會
松平 齊光
月明
塚本 茂
歩む
大貫 松三
舞臺横
櫻井 悦
上海戰蹟 溝江 勲二
遊ぶ子供等
中安 五郎
風景
圓城寺 昇
温室
李 石 樵
朝の森
佐伯 久
長榜の女 谷澤 一郎
御手洗の邊
小林 易夫
鶯(空の勇士に
捧ぐ)
大垣 泰治
雲と牛
鈴木 清一

庭に憩ふ 山田 新一	海 飯田 清毅	畫鏡(木版)棟方 志功	久保 守	庭と同 齋藤 紅一	女人像 櫻井 濱江	夏花 樋口 加六
海邊の葱伊藤 翁一	海と岩 佐藤吉五郎	中禪寺湖(木版) 前田 政雄	琵琶湖遠望 辻 愛造	岩、室戸岬 竹中 三郎	尚古 今井 憲一	榎 菅能由爲子
藁の床 高光 一也	少女とランブ 清水 刀根	山塊(石版)畦地梅太郎	静物 養田つや子	南風 齊田 武夫	秋 菊池 精二	冷泉流観月歌會 熊谷登久平
陶土の丘中條 茂	「獅子」のある壁 加治屋隆二	みのり(石版) 佐藤 哲三	静物 中村 博	森(水彩) 池島勲治郎	森にて 鳥居 敏文	甲州路 清水 鎌徳
肖像 北 運藏	人物 吉井 淳二	花咲く湖(石版) ブノッ	逆光瑠璃寶塔 委 青山 義雄	北都 菅野 圭介	熱河の旅より (日除) 宮腰 寅平	三人 長島 常吉
新晴 鈴木 淳	秋の草 園枝 金三	機と糸線 酒井 亮吉	祭壇 内堀 勉	弓 水野 佳一	五月の林 赤星 孝夫	山のいでゆ 高宮 一榮
青空 鈴木 透	蓮華 藤井 二郎	虹(構道河子) 野村 守夫	閑庭 山田 正	古幹 池田金之助	南強重鎮 田中佐一郎	霧社の家族 山田 榮二
慈悲 橋本八百二	村 伊藤久三郎	白翠羣州所見 (木版) 恩地孝四郎	牡丹 庫田 菱	崖 妹尾 正雄	傳信 宇根元 馨	北海道の印象 狭間 二郎
小釣人 篠原 來介	菅 委 東郷 青兒	白翠羣州所見 (木版) 恩地孝四郎	風景 馬越外太郎	松櫻岡 兒島善三郎	哈爾濱の街 松島 正人	綠の静物今西 忠通
田園 福島金一郎	山村 野間 仁根	火口壁(木版) 下澤木鉢郎	野菜と果物 南風原朝光	富士春色 鈴木 亞夫	日本號出發 清水 登之	二婦 成瀬嘉興子
蘭印の女山尾 薫明	入江のほとり 大澤 昌助	猫と少年(木版) 關野準一郎	檳榔樹 澁川 駿二	水邊 岡村 芳男	冬日 海老原喜之助	風景 佐藤 英男
夏の日 山本 直治	廢屋 青木 壽	たこのき 立石 鐵臣	夏の静物 上田 清一	水邊 岡村 芳男	室内 委 野口彌太郎	アイヌの家族 委 野口彌太郎
人形 椎塚猪知雄	母子像 服部正一郎	静物 村上 巖	庭の一角 大森 啓助	冬日 海老原喜之助	室内 委 野口彌太郎	室内 委 野口彌太郎
街にて 松本 俊介	梅薫る 安部治郎吉	爽朝(杏花) 土田 文雄	夕陽 池邊 貞喜	丘上の岩 青柳 鶴夫	栽培 加藤 陽	室内 委 野口彌太郎
戦線風景 兒玉 幸雄	畫家(働く女連作) 田口 省吾	龍舌蘭と人 福井 敬一	踊子 久木 弘一	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
診察 丹下富士男	あ、萬世一心 中川 紀元	工場風景 金子 三藏	少女 小館善四郎	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
畫室 佐野繁次郎	瀨田の唐橋 委 正宗得三郎	探集 松本 滿史	石と壺 益田 義信	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
岩山に茂る 北川 民次	黃昏 向井 潤吉	印度支那河内風趣 長谷川春子	蓮 益田 義信	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
一人像 津田 周平	精選湖の富士 委 鍋井 克之	風景 小林 邦報	土佐室津山 脇 信徳	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
グリア・飯百合 松村 綾子	子供 寺田 竹雄	雲崗石佛 宮田 重雄	溪流 委 椿 貞雄	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
河畔少年群 桑原 實	花 新井ふみ子	船越風景 細谷 重雄	海邊 中村 鐵	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
雨後の海邊 宮城三喜子	花賣 宮川 仁	瑞垣 藤田 太郎	林 山崎 隆夫	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
姉妹 遠山 陽子	初夏の水邊 山本 秀臣	紫禁城 委 梅原龍三郎	海濱にて 齋藤 求	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
作品 井上 豊造	犬 藤田 嗣治	憩ひ 宮坂 勝	蓮 志村 計介	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
雪山 吉原 治良	初夏の鹽原 鈴木信太郎	憩ひ 宮坂 勝	蓮 志村 計介	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
双輪 山口 長男	露臺 吉田 一雄	憩ひ 宮坂 勝	蓮 志村 計介	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
月明 藤田金之助	市場 高井 貞二	憩ひ 宮坂 勝	蓮 志村 計介	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
賀象 桂 ユキ子	畝傍山 熊谷 守一	憩ひ 宮坂 勝	蓮 志村 計介	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
夏 鶴田 宏	霧せまる山湖 古家 新	憩ひ 宮坂 勝	蓮 志村 計介	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
鯉 錦 義一郎	古城清秋(木版) 橋本 興家	憩ひ 宮坂 勝	蓮 志村 計介	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
鳥影 十龜廣太郎	古航寺縁起・雨月 橋本 興家	憩ひ 宮坂 勝	蓮 志村 計介	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
店先 劉 啓祥	北京 大瀧 武夫	憩ひ 宮坂 勝	蓮 志村 計介	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人
大和の朝 濱田 傑光	海濱 喜多村 知	憩ひ 宮坂 勝	蓮 志村 計介	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人	室内 常安 靜人

陶丸紋十果花瓶

ぼかし繪染深山
着衣 森山 治雄

羅張平卓三木 表悅

艸花文染錦大鉢
松本 儀山

西瓜衣裝人形
一噌 久江

綠袖みよしが紋陶
安藤 知山

寢室用壁面照明具
渡邊 泰造

枝豆四分一色繪
有田 利章

彫刻硝子黎明模

火鉢 稻木春千里

減び行く奢侈手
織錦屏風田中 貞造

鐵打出双獅子置物
黒瀬 宗世

紙糊の調子手末の調子
神助人形 鹿兒島壽藏

鐵梅文線口釜
加藤 三郎

荒鶯の背繪額
水野 嬌夫

銅銀雉菊香合
前田 龍作

藤和染四曲屏風

神代杉照明具
佐分 鐵

鑄銅水盤木田 鳩秀

陶器色繪藤模様
花瓶 伊東 陶山

阿修羅戀人形
久保勝太郎

富貴草繪花瓶
新妻 蛙

白時繪白鳥額
越田 尾山

雉子金具 鈴木 春盛

陶器草花文様花瓶

鑄銅水盤 和泉 湧清

染草二曲河合 研二

青磁袖廣口龍耳遊
環付花瓶 宮川 眞葛

武人與談人形
関本 輝子

敬神硯箱塚田 秀英

銅金剛山額
桂 光春

黄銅打出シ袖香合
船越 春珉

瑞穂花瓶 河合榮之助

染色二曲 荷立 高久 空木

二彩袖花瓶 桶谷 定一

聖争二枚折屏風
中川 正雄

八咫鳥童子御所
野口 光彦

四分一地板快込
敬神硯箱塚田 秀英

子供のものを綴
る壁掛 江籠 白岑

薬草文金具
土用 義雄

漆器芍薬圖二枚

草花之圖書 福書 奉哉

糝漆棚 多畑 宗哉

魚群額面 森 涓三

虎視耽々人形
河島 茂人

瑞祥手管 濱 達也

鑄鐵富嶽圖釜
高木治良兵衛

波帶止 山内 俊也

折屏風 奥村 俊郎

葡萄文花瓶 鶴岡 康次

彩果文交鉢 松本 佐吉

萌ゆる力 鑄銅置物
山室 百世

漆器玉蜀黍丸盆
竹中 微風

同胎(はらから) 繁子
人形 関本 玉水

河畔陶額 徳田 魁星

素銅鹿金具
鈴木 美彦

陶器粟繪花瓶

百合文壺 土肥 刀泉

漆器玉蜀黍丸盆
竹中 微風

黒髪人形 今村 繁子

焚火木目込人形
野河 春陽

白銅製靈鳥香爐
細谷 好徳

磁器鐵染つる草
文花瓶 寺池 旬彦

秋三曲屏風
小原 豊三

六角松文花瓶

形漆瀑布ノ圖 飾箱
富樫 光成

鑄黃銅花挿し 正雄

爽農紙鞆人形
関とよ

黒潮木彫人形
野田 天潤

古瀬戸釉陶置物
瀧 一夫

露草硯箱 古山 英司

双魚金具 大關 藤盛

海幸染色二枚屏風

菱形蔬果紋花瓶
瓶谷 竹昭

青銅千鳥模様花器
中村 義一

鳥人形 平田 郷陽

鍛錬木彫人形
近藤 紫水

鑄銅水瓶 山本 自雄

玉した風呂呂先
根來 實三

飛躍帶止
飯田 民歌

四方角形銀浴付

巧藝文和染着衣
小巻 英一

野草文三曲暖爐
大坪 重周

雪日和染色壁掛
西出六吉夫

發掘土器と冠染
色屏風 四田 州宏

鑄銅兩耳花瓶
池田 逸堂

彩花紋陶額
松本 松雲

蜻蛉金具 山下 春興

象嵌花瓶 井尾 敏雄

七寶燒竹文花瓶
太田良吉郎

磁窯飛行機文花瓶
手塚 玉堂

雲人形 綿貫 萌春

漆器稻實衝立
山田 豊

銀赤銅兩ハギ合
七花瓶 関谷 四郎

黒豹圖ローケツ
屏風 龜山 竹司

銅群蛙飾金具
府川 一信

瑞松二枚折

陶器練込手盛鉢
宮永 友雄

前立 大坪 重周

村童繪更紗壁掛
西谷 愛

鑄銅水彫人形
野田 天潤

鑄銀みづく置物
瀧 一夫

八枚練口釜
根來 實三

さくら金具
清水 利良

鑄銅花瓶 津田 如洋

七寶燒竹文花瓶
太田良吉郎

磁窯飛行機文花瓶
手塚 玉堂

雲人形 綿貫 萌春

漆器稻實衝立
山田 豊

銀赤銅兩ハギ合
七花瓶 関谷 四郎

黒豹圖ローケツ
屏風 龜山 竹司

銅群蛙飾金具
府川 一信

鉄文鑄銅花器

白銅寄置物 八井 孝二

漆器朝色映松小
屏風 久保 金平

青銅脚張銀線水盤
總領 政周

遊鞠人形 佐久間 秀市

八咫鳥人形 太田 春義

隣組人形 椎名 靜枝

久佐阿波世人形
川上 南市

刺繡泰山木二曲

漆器朝色映松小
屏風 久保 金平

青銅脚張銀線水盤
總領 政周

遊鞠人形 佐久間 秀市

八咫鳥人形 太田 春義

隣組人形 椎名 靜枝

久佐阿波世人形
川上 南市

爽朝張紙裝人形
金井 庸昭

小松原紙鞆人形 鶴巻 三郎
山と雲染色屏風 熊谷重太郎

沈金彫雕頭紋乾 漆丸盆 眞保 由齋
眞鍮打出若鶴置物 渡邊 萬里

草花文時繪菓子 銅筒 藤岡 研齋

香盆 森 象堂
 陶製草虫文花瓶 中島 清
 銀萩文様壺 後藤 年彦
 青萃商染紋花入 河本 傑亭
 層文乾漆花瓶 渡邊 無涯
 梅花時繪手箱 板倉 未刊
 松之圖大皿 徳力孫三郎
 陶器畫角花瓶 中谷小太郎
 秋園手箱 木下 佳叔
 陶器藍華花瓶 叶 松谷
 鐵平手箱 里村 義國
 黑味銅水盤 佐藤善雄
 時代銅金地祥瑞模 小田原小三郎
 様平棗 小田原小三郎
 輝蒔繪硯箱 三田村自芳
 陶器葡萄文四方鉢 鈴木 善々
 海洋飛躍金屬皿 定塚 岩男
 漆器たそがれ角 長井秀吉郎
 切文庫 森 三樹
 ボカシ塗乾漆壺 森 三樹
 蜻蛉洲木彫硯箱 三宅 廣周
 君子模様小衝立 大久保秀哲
 銀金彩夏草文果 織田 慎一
 物盛 板倉 梅樹
 モザイク飾箱 板倉 梅樹
 彫漆花瓶 高見 九藏
 陽ざかり盛器 吉田 隆二

盛花器 安原 喜明
 木目金皿 丸尾 綱義
 鐵布目象嵌飾箱 寺本 義茂
 雪文六角香合 田中 永光
 黒釉山草文飾箱 栗木俊栄夫
 寶舟時繪香合 三木 玉眞
 鐵布目梅花紋様 白井 陽谷
 銅下銀皿 福田 三郎
 染付陶盤之圖飾 井上 憲吾
 漆器富貴花香爐盆 堂本 漆軒
 鐵赫釉變壺 鈴木 則司
 曉雜置物 内藤 春治
 銀杏紋電氣スタ 宮代 健三
 眞鍮菊花透彫文笥 水谷育太郎
 白銅若松透香爐 中谷 喜男
 天目釉木實文花瓶 加藤 善山
 陶器枇杷文花瓶 井上 良齋
 花文様彫漆盛器 鹽田 宏
 青銅線文花瓶 山本 能長
 銀手筥 大須賀 喬
 龍門瓶 大久保開湖
 硝子彫刻歌人ノ 圖衝立 大庭一見
 八角形曉菊時繪 戸島善阿彌
 文庫 大西 基平
 銀打出目鏡蛇置物 漆器壽壽瑞祥小

屏風 岡田 章人
 唐草文様牛 都賀田勇馬
 漆器集葉ノ圖手箱 山川 一哲
 海濱腰下げ莫入れ 鷲田 詮
 漆器風呂先屏風 小森 克己
 硝子彫刻高貴品 入し飾臺平澤 壽晃
 漆器雅細 福澤 健一
 大陸に日は輝く 二曲屏風 山形駒太郎
 漆器菊模様之棚 吉田源十郎
 山壁掛 北原 千鹿
 陶板會委 宮本 憲吉
 鑄銀花瓶 豊田 勝秋
 銀銅若雜香爐 石田 英一
 鑄銅鳴禽置物 會委 香取 秀眞
 彩磁山草文水差 會委 板谷 波山
 鑄銅盤 杉田 禾堂
 蠟型鑄銀山葵 山本 安曇
 葉文銅花瓶 村越 道守
 竹花皿 飯塚貞軒齋
 陶花文大皿 清水正太郎
 鑄銅花瓶 北原 三佳
 栗鼠模様本地時 繪手箱 高野 松山
 八方形染付着々 萬古花瓶 河村 蜻川
 陶器草花文壺 宮之原 謙
 手織錦樂土圖敷物 山鹿 清華

鐵板衝立 會委 清水 龜藏
 漆畫爆撃行(ア 丸マイト應用研 究作) 六角 紫水
 染烏ト實雙額 佐々木達三
 漆兎屏風 山崎聖太郎
 鑄銅色繪鴛鴦置物 佐々木象堂
 陶瑞菊花瓶 澤田 宗山
 聖紀嘉徴花瓶 楠部 彌次
 漆器芍薬圖手箱 平館 西
 青銅花瓶 高村 豊周
 春日龍彫漆飾箱 堆朱 樹成
 天平八枝華文錦 龍村 平藏
 硝子玻璃興抓文壺 岩田 藤七
 鑄金卓ト香爐 香取 正彦
 銀鍍花瓶 海野 清
 ホロノ鳥置物 磯崎 美亞
 陶秋草手爐 會委 清水六兵衛
 神泉石清水時繪 梅澤 隆眞
 硝子鉢 各務 鐵三
 染色鷹爐屏風 廣川松五郎
 鑄銅飛躍 會委 津田 信夫
 天鷲絨六曲屏風 半雙 鹿島 英二
 かんなん染四曲 屏風 中村 妙子
 無花果染色二曲 屏風 村田 興一

蕨縷サボテン屏風 渡邊 春男
 掛聖圖繪更紗壁掛 内海 正三
 莖草文上下自在ノ 口ワースト 佐々木達三
 黒味銅布目芥子 文花瓶 鹿島 一谷
 向日葵時繪手箱 歌川 黎明
 青銅千鳥文水盤 林 萬壽人
 鐵籠置物 平松 宏春
 麥花生 深瀬 嘉臣
 打出し魚文置物 吉住 景雲
 窯變四方竹花瓶 森野 嘉光
 綾文透鏡彩銅壺 信田 洋
 鑄銅花瓶 中島 義夫
 竹圖眞塗水指 那筑 幸哉
 竹編四方盆 飯塚小軒齋
 銀鍍野草紋箱 増田 三男
 竹盛籃 飯塚 薰石
 角鉢 山野井勝風
 秋色種眞鍮水盤 小林 親光
 孔雀紋花瓶 吉田 哲彌
 彫金蓬萊文平宮 黒川 正弘
 一品當朝眞鶴置物 川和 曉雲
 とはの日の本祝 ぎ奉りて有根 松置物 大野 光典
 山牛蒡漆宮 莊司 芳眞

漆器雪手筥 野澤 幸雨
 烏賊文銅花瓶 長谷川 昇
 黃瀬戸釉鈍豆文 花瓶 加藤 高雄
 硝子花瓶 小柴 外一
 眞鍮雙葉柴田 武次
 秋綾織壁掛 高木 敏
 銀飛天香鼎 大谷 春彦
 手筥 鳴 幸太郎
 彫漆茄子圖金籠 内田 荷芳
 漆器海底圖隅屏風 水内平一郎
 乾漆盛器 多田 津
 銀蘭花花花瓶 岡部 遠男
 銀犬置物 井上 長俊
 紫陽花手筥 上原 清
 草文陶箱 米澤 蘇森
 銀蓬萊花瓶 海野 建夫
 八稜櫛目編盛籃 生野 祥齋齋
 青銅花瓶 松本 昌三
 瑞兆圓筒狀香爐 廣瀬 英五郎
 鐵鉢 河合 壽成
 牡丹時繪屏風 小倉 絳梧
 打出し銀花瓶 細溝 芳夫
 乾漆ボンボ入 市川 健三
 素銅花瓶 渡邊 義廣
 實漆器小屏風 合田 平吉
 眞鍮菱文皿 北原 士

秋草時繪手箱 西塚 誠一
 七面鳥紋八角形盛 鉢 山内 勝芳
 銀地草花文切嵌飾 小川 友衛
 柳文平脱文宮 内藤 四郎
 銀地秋色文嵌込瓶 大曾根茂樹
 彫金おんばこ模様 原田 芳枝
 水牛置物 高橋 勇
 寶珠唐草文漆香爐 片岡 春壽
 銀打出し鳥香爐 鈴木 昇一
 鑄銅線文花瓶 高木 義望
 鑄銅飛魚文花瓶 清水 辰雄
 銀四分一柘榴形 鈴木 孝次
 漆器仙禽呈祥 新村 撰吉
 黃銅製打出花瓶 宮野 大照
 木彫二曲屏風 稻垣 豊秋
 哺育圖二曲屏風 小合友之助
 漁書棚 小松 芳光
 結晶釉瑞鳥唐草 紋花瓶 柄本 曉舟
 おはぐろとんぼ 手箱 二本 靜光
 大瓢時繪宮 本岡 壽華
 飯銀南風微嵌置物 加藤 宗巖
 トンボ清遊二枚折 佐藤 尙珉

彫漆時繪春秋花 文手箱 辻 北陽齋
 箭竹花籠 飯口宗雲齋
 漆器南瓜沈金小 屏風 森下 弘堂
 黃銅鍍金花瓶 河内 宗明
 乾漆喰籠 中川 哲哉
 花籃 伊藤乃武方
 臘銀木兎置物 八田辰之助
 銀下鉛草虫文花瓶 寺田 龍雄
 鍛鐵軍鶏置物 品田 松壽
 乾漆角丸甲盛夕 顔文庫 河面 冬山
 銀蒔紋飾箱 小瀧 美治
 梅花文鐵香爐 竹内元之助
 銀壺 鴨 政雄
 菱形豐實文花瓶 中村 秋雄
 魚文木工小箱 吉原 良雄
 白葉紋銀赤銅嵌 人銅皿 海老澤三二
 彫漆花鳥文様手箱 吉田 一睦
 漆沈丁華文長手箱 田島耕太郎
 漆器鐵線ニ鑄六 花形重菓子器 大下 雪香
 白晶釉木花瓶 宮下 善壽
 はぜの實時繪長 方形手箱 島田 春光
 鑄銅兎置物 森村 百三
 彫金花盛大谷 鈴木 鈴石

玉蜀黍漆器文庫

春の意箱小川 英鳳

漆器野ノ花文庫

彩七寶草虫銀瓶

文庫

漆仙果文飾宮

葡萄棚模樣螺銀

胡桃木六角盛器

銅飾小箱羽野 讀三

曙の光り刺繡壁掛

草花圖形漆色紙笥

漆器さくら飾箱

瀧銀筆洗手箱

牛蒡給行立

渡洋乾漆地手箱

蔬菜綴織壁掛

陶製鐵畫草花紋

銀短冊宮山脇

銀金雜香爐置物

春波硯

自然子草文花瓶

掛時計

銀竹文香爐

蓼漆器文庫

甲盛大角丸蓋附

商栄ノ玉芽蒔繪

樂草蒔繪文庫

手篋

陶伊羅保壺

晚秋彫漆色紙笥

漆器菖蒲手篋

朝顔の圖彫漆手篋

硝子花置物

漆器和紙應用あ

漆器麥之圖手篋

吹墨野草文局壺

眞鍮春の流れ文

鐵勇猛日本野立

花瓶

紹刺牡丹唐獅子

盛鐵花瓶

和染屏風野中保

彫金飛鶴文篋

繪草獸饌之圖壁掛

乾漆梅華文手篋

漆色國難屏風

果文盒

漆器兜虫の菓子鉢

鑄銅慶祥双鶴

唐茄文彫漆整奩箱

鐵南趣ノ香爐

色金霞打猫置物

黃銅柿筆筒

驚置物

つはもの置物

八角形西瓜文飾皿

漆器悠久富嶽手箱

葉牡丹花器

砂鐵製罌口

五角魚貝象嵌鐵宮

彫金鹿行立

彩漆富士山壁飾

陶器色繪綿花文

扁壺

河畔蒔繪手箱

秋の意蒔繪箱

磁製紅葉文花瓶

漆器白鹿圖手箱

麥四方鐵花生

銅風紋華瓶

染附草文八角花瓶

刺繡枇杷模様ハン

ドバック上村 百代

兜釜

雨端雲龍硯

乾漆八花燈

芝山象嵌蒔秋ノ

圖手篋

メロン皮張行立

鐵葡萄模樣行立

手文庫

銀九形葡萄紋彫

刻飾皿

つもの草文様象嵌

銀花瓶

竹網代壽文編出

手篋

鏡起雲文花瓶

松梅地紋行笥

漆荒鷲文庫

木製ハンドバック

籠地櫻花茶ノ湯釜

鐵萩文飾皿

鐵啖口霰釜

奇見城鐵釜

初茄子手篋

月ニ竹銀裝箱

陶製雲之圖花瓶

銅蠟型捻瑞氣置物

彫金象嵌盛器

銀挿頭ノ花香爐

銀秋草香爐

煉上「落」花瓶

漆器草花模樣飾宮

鑄銅兩耳花鉢

木島櫻谷三周忌遺作展

京都・櫻谷文庫

三宅克己風景水彩畫展

大阪・青樹社

立型會第二回展

銀座・三味堂

人形藝術院展

木下五郎從軍畫展

日本橋・白木屋

瀨野藏遺作展

大阪・三越

石山貞勝第三回洋畫小品個展

日一六日

大野隆徳個展

京城・朝鮮通信事業會館

獨立美術協會秋季展

七日

白御會小品展

名古屋・鶴々亭

泥谷文景南畫展

阪・高島屋

白山春邦個展

數寄屋橋・中央畫廊

胡蝶蘭蒔繪文庫

墨粟蒔繪行立

漆器秋天行立

「征」木象嵌行立

鑄銅兩耳花鉢

木島櫻谷三周忌遺作展

京都・櫻谷文庫

三宅克己風景水彩畫展

大阪・青樹社

立型會第二回展

銀座・三味堂

人形藝術院展

木下五郎從軍畫展

日本橋・白木屋

瀨野藏遺作展

大阪・三越

石山貞勝第三回洋畫小品個展

日一六日

大野隆徳個展

京城・朝鮮通信事業會館

獨立美術協會秋季展

七日

白御會小品展

名古屋・鶴々亭

泥谷文景南畫展

阪・高島屋

白山春邦個展

數寄屋橋・中央畫廊

荒井龍男個展

銀座・養生堂

整址會油繪展

菊屋畫廊

内藤鐵策、藤原竹江二人展

十月六日

日本美術協會第百十一回展

六日

同協會の第百十一回展

の上陳列した

(百八十三名)の中入選は

六名)で無鑑査出品

を加へ、合計九十二點

考品として、御物を初め

下品、帝室博物館、東京

名家の所藏品を展觀した

照)

(役員) (幹事長) 八木岡春山

坪正義、今井爽邦、五島耕

山本文英「授賞」(銀賞)

峰(銅賞)「敵地行」五十嵐

秋「樋田五峰、あじ桐」

大柴丹溪、虫の音「森田菁

西丸小園、荒湖「稻川光風

梶村正義個展

十一日

東西諸大家新作日本畫展

十三日

高須芝山南畫展

新宿・伊勢丹

國畫會神戶展

三日

神戶・大丸

赤松麟作油繪展 十月八日—十三日
大阪・阪急百貨店

金澤三匠會新作工藝品展 十月八日—十三日
大阪・大丸

長瀧阿貴羅染色工藝展 十月八日—十三日
神戸・大丸

新制作派協會展(洋、彫) 十月八日—十三日
大阪市立美術館

東風會日本畫展 十月九日—十三日
日本橋・白木屋

山内一彦第二回油繪展 十月九日—十三日
銀座・三味堂

石川眞五郎個展(洋) 十月九日—十三日
新宿・東陽畫廊

田中寛三「海と船」油繪展 十月九日—十三日
銀座・青樹社

青樹社第四十二回大阪展(日) 十月九日—十三日
大阪・阪急百貨店

現代彫塑家名作展 十月十日—十三日
京城・丁子屋

北川金鱗國立公園繪卷展(日) 十月十日—十三日
芝・東京美術俱樂部

荒木芳男日本畫スケツチ展 十月十一日—十三日
銀座・資生堂

堀忠義個展(洋) 十月十一日—十五日
大阪・天堂畫廊

二科會名古屋展(洋、彫) 十月十一日—二十日
名古屋市公會堂

服部亮英滯支作品展(洋) 十月十二日—十四日
銀座・菊屋畫廊

美術創作家協會展 十月十二日—十六日
京城府民館

秦テルヲ新日本畫作品發表 十月十二日—十七日
大阪・そごう

PK人形クラブ第九回人形工藝展 十月十四日—十六日
銀座・資生堂

岡野予一油繪展 十月十四日—十八日
有樂町・蠶糸會館

武者小路實篤個展(日) 十月十五日—十七日
銀座・鳩居堂

美術創作秋季展 十月十五日—十八日
銀座・三越

自由美術家協會は本年七月改稱して美術創作家協會となつた。會員及び會友の作七十點を陳列。

太田耕士大陸風物エツチング展 十月十五日—十八日
日本橋・白木屋

竹谷富士雄第一回個展(洋) 十月十五日—十九日
銀座・青樹社

作者は二科會の新會友、琉球の寫生を陳列した。

吉岡憲洋畫個展 十月十五日—十九日
銀座・菊屋畫廊

桑重儀一近作油繪展 十月十五日—十九日
大阪・阪急百貨店

軍醫畫家松島順南支風景畫展(洋) 十月十五日—二十日
日本橋・三越

現代名家新作日本畫展 十月十五日—二十日
上野・松坂屋

高松工光會第一回工藝作品展 十月十五日—二十日
大阪・三越

全日本漫畫展 十月十五日—二十日
日本橋・三越

國民精神總動員本部主催

桂庭社第一回展(日) 十月十六日—二十日
大阪・阪急百貨店

岸田劉生日本畫展 十月十六日—二十日
銀座・三味堂

石原龍一主催、南畫風の遺作十餘點を集めた。

竹久夢二遺作展(日) 十月十六日—二十日
上野・松坂屋

棟方志功新作日本畫展 十月十六日—二十日
日本橋・高島屋

新挿畫家集團第二回展 十月十六日—二十日
新宿・月光莊

第二回貿易局輸出工藝圖案展 十月十六日—二十日
大阪府立貿易館

河井寛次郎作陶二十年記念新作展 十月十六日—二十七日
日本橋・高島屋

大正十年高島屋に第一回の個展を開いてより二十年に當るのを記念して、新作五百餘點を陳列、琉球訪問の收穫を見せた。

柏舟社第二回展(日) 十月十七日—十九日
銀座・資生堂

磯野靈山遺作展 十月十七日—十九日
日本橋・東美俱樂部

俳畫堂島田勇吉の主催。南畫、筆蹟等約六十點を陳列した。

吉川秀山日本畫展 十月十七日—二十日
京城・三越

秋香會第八回展(洋) 十月十九日—二十日
銀座・紀伊國屋

渡邊大虛第五回新作發表展(日) 十月十九日—二十日
日比谷・三信ビル

大

虛會主催。
山中政五郎海洋展(洋) 十月十九日—二十三日
日本橋・白木屋

井上綱萬葉畫展(日) 十月十九日—二十四日
日本橋・白木屋

すがた會人形展 十月十九日—二十四日
日本橋・三越

小宮宗太郎洋畫展 十月二十日—二十五日
大阪・阪急百貨店

沼部鑿工藝展 十月二十一日—二十四日
銀座・資生堂

京都市主催第四回圖案展 十月二十一日—二十四日
京都市勸業館

京都市主催。圖案を平面、立體、商業、輸出工藝の四種の部門に分ち、公募の上陳列した。陳列數百五十九點。

搬入 入選

第一部(平面) 二〇三 一〇二

第二部(立體) 一九 一〇

第三部(商業) 二五 一三

第四部(輸出工藝) 四八 二二

指導機關ノ參考品 二八 二八

計 三二三 一七五

五味清吉洋畫個展 十月二十一日—二十五日
銀座・青樹社

沈享求、李仁星、金仁承油繪三人展 十月二十一日—二十五日
京城・三越

月明清瀟觀會(日) 十月二十二日—二十四日
銀座・資生堂

小早川清日本畫個展 十月二十二日—二十四日
京城・三中井

荒井草雨第二回個展(日) 十月二十二日—二十四日

美術展覧會 (十月)

日—二十四日 大阪・阪急百貨店
 井上良齋作陶展 十月二十二日—二十五日 日本橋・三越
 森田光達漆繪展 十月二十二日—二十五日 神戸・三越
 牧野虎雄洋畫近作展 十月二十二日—二十六日 銀座・三味堂
 西川武郎主催。主として葛薔薇や手馴れた罌粟の花を例のごとく淡々とした筆觸で描いたものだが、ひところの滯滯から脱け出て、若々しい生氣をとりもどした感があるのは注目し價する。特に十五號の「一重罌粟」、十號の「崖の藤」は場中の佳作であり、また「木蓮と牡丹」「武藏野夕映」は、それぞれに美しい雲を配して独自の境地を示してゐる(頌)(東日)

山田喆作陶展 十月二十二日—二十六日 大阪・天賞堂畫廊
 山岸圭計興亞風物畫展(版、日) 十月二十二日—二十六日 名古屋・丸善
 河合志宏印度佛畫展(日) 十月二十二日—二十七日 大阪・大丸
 昭和七年文部省、日印協會の委嘱により渡印し、十一年迄サルナートに滞在した作者が、新作の佛傳畫十六點を陳列した。

若松維新能畫發表會(日) 十月二十二日—二十七日 大阪・三越
 乾坤社第二回展(日) 十月二十二日—二十九日 大阪・松坂屋
 荒井寛方佛畫展 十月二十三日—二十

七日 日本橋・高島屋
 近年佛畫に精進する作者が、その近作十三點を展覧した。線描を主とする諸觀音、菩薩像、不動明王等の外「源頼朝」の如き純然たる肖像畫、或は「妙音」の如き古代婦人像もあつた。

佐藤華岳個展(日) 十月二十三日—二十七日 銀座・松坂屋
 獨立美術協會展 十月二十三日—二十七日 札幌・三越
 第二回森村宜稻遺作並三門下生作品展(日) 十月二十四日—二十六日 名古屋美術俱樂部 稻香畫塾主催。
 神庭白黎近作日本畫展 十月二十五日—二十七日 福岡・岩田屋
 中原龜塘近作展(日) 十月二十五日—二十七日 岡山・金剛莊
 六藝會第二回展(洋) 十月二十五日—二十八日 銀座・資生堂
 笹川藍田日本畫展 十月二十五日—三十日 日本橋・白木屋
 青山熊治遺作展 十月二十五日—三十日 新宿・東陽畫廊
 鳩交會展(洋) 十月二十五日—三十日 新宿・月光莊
 平田郷陽、岡本玉水人形展 十月二十五日—三十一日 日本橋・三越
 安部次郎吉油繪展 十月二十六日—二十八日 銀座・菊屋畫廊
 會宮一念洋畫個展 十月二十六日—三十日 大阪・美術新論社畫廊
 宇野三吾新作陶藝展 十月二十六日—

三十日 日本橋・三越
 東都中堅作家新作小品展 十月二十六日—三十日 京城・三越
 第二回貿易局輸出工藝圖案展 十月二十六日—三十日 京都・勸業館
 福岡美術會展(綜合) 十月二十六日—三十一日 福岡・玉屋
 現代洋畫諸大家油繪展 十月二十六日—三十一日 大阪・阪急百貨店
 二科會第二十七回展 附小出檜重遺作展(洋、彫) 十月二十六日—十一月十日 大阪市立美術館
 大阪市主催。陳列數は洋畫百九十八、彫塑二十一點で、なほ故小出檜重の遺作油繪、硝子畫、素描淡彩、日本畫等、計七十五點を陳列した。遺作目錄は左の通り。

油彩之部
 大正時代
 Nの家族 八年 大阪 (所藏者) 津田勝五郎
 少女お梅の像 九年 同 同
 窓 一年 兵庫 藤井卯兵衛
 帽子などある 二年 同 同
 靜物 二年 同 同
 喇叭を持てる 一三年 同 同
 小供立像 同 同 同
 帽子を冠れる 同 大阪 津田勝五郎
 肖像 同 同 同
 卓上蔬菜 一四年 兵庫 某
 地球儀のある 同 同 阿部 藤造
 靜物 同 同 同
 夏 同 同 某
 鏡と裸女 一五年 豊中 笹川 昭雄

早春風景 一五年 兵庫 某
 毛糸の束 同 同 藤井卯兵衛

昭和時代
 雪 二年 兵庫 某
 裸女結髮 同 同 小出 泰弘
 罌粟 三年 大阪 辻本 敬三
 卓上の蔬菜 同 兵庫 山口吉郎兵衛
 裸女 四年 同 某
 立つ裸女 同 大阪 辻本 敬三
 裸女の1 同 兵庫 小河清太郎
 卓上菜果 同 布施 伊賀駒吉郎
 八月の郊外風景 同 兵庫 小出 泰弘
 裸女の2 同 西宮 某
 卓上蔬菜 同 豊中 笹川 昭雄
 薔薇 同 兵庫 山口吉郎兵衛
 支那寢臺之裸身 五年 大阪 辻本 幸治
 佛蘭西人形之顔 五年 兵庫 小出 泰弘
 人形の顔 同 同 藤木 正一
 ソファの裸體 同 同 右近權左衛門
 枯木のある風景 同 大阪 津田勝五郎
 景 同 同 同
 裸婦 同 同 石丸 一
 草花靜物 同 兵庫 藤木 正一
 靜物 同 大阪 小池 善夫

硝子畫之部
 昭和時代
 臥せる裸女 二年 兵庫 小出 泰弘
 裸女 三年 大阪 石丸 一
 裸女 同 布施 岡田得之助
 ソファの裸女 四年 大阪 辻本 幸治
 佛蘭西人形 同 兵庫 藤木 正一
 フランス人形 同 大阪 津田勝五郎

支那寢臺の裸女 五年 兵庫 小出 泰弘

寢た裸女 同 西宮 某

フランス人形 同 兵庫 小出 泰弘

裸女 同 同 田邊 五郎

裸女 同 大阪 辻本 敬三

裸女 同 西宮 某

ソファによる裸體 同 大阪 山本 直治

人形(帶止) 同 豊中 笹川 昭雄

裸婦 同 大阪 松井 正

卓上の桃 同 京都 粕淵 順正

ソファの裸女 五年 大阪 前川 豊子

室内裸女 三年 兵庫 妹尾健太郎

人形(帶止) 五年 同 同

素描 淡彩 グワシユ之部

白布を持つ裸女(グワシユ) 大正十四年 兵庫 藤井卯兵衛

花(グワシユ) 同 兵庫 小出 泰弘

裸婦(同) 昭和五年 同 長谷部鋭吉

蔬菜(素描淡彩) 同 四年 大阪 井上 覺造

裸女(素描) 同 五年 兵庫 小出 泰弘

裸女(同) 同 同 同

裸女(同) 同 同 同

日本畫 其他之部

松竹梅圖(着色) 六曲 兵庫 藤木 正一

松竹梅圖(墨畫) 一雙 大阪 心 光 寺

以下十五點目錄省略ス

永田精二個展 十月二十九日—三十一日

九ノ内・東京會館 挿繪第二回展 十月二十九日—十一月一日 銀座・三越

挿繪俱部を本月初旬改組の上結成した日本挿繪畫家協會の作品展展

日本山岳畫協會新作展(洋) 十月二十九日—十一月三日 大阪・大丸

麗松會第五回漆藝展 十月二十九日—十一月三日 大阪・松坂屋

中村眞花と風景油繪展 十月二十九日—十一月三日 大阪・三越

大野麥風「大日本魚類」版畫展 十月三十日—十一月三日 上野・松坂屋

山梨美術協會第四回展(綜合) 十月三十日—十一月三日 甲府・松林軒

神武天皇聖蹟及傳説地繪畫展 十月三十日—十一月三日 日本橋・高島屋

元二千六百年奉祝會主催。中村大三郎畫塾献納畫展(日) 十月三十日—十一月三日 日本橋・高島屋

十一月 東本春水献納畫展(日) 十一月一日—二日 名古屋・松坂屋

美萌社第二回展(洋) 十一月一日—三日 銀座・紀伊國屋

多摩帝國美術學校奉祝展 十一月一日—三日 世田谷・同校

石原義武洋畫個展 十一月一日—三日 岡山・金剛莊

大竹久一油繪第一回個展 十一月一日—三日 大阪・天堂堂畫廊

池田淑人個展(洋) 十一月一日—四日 杉並・同氏畫室

島田忠夫日本畫展 十一月一日—四日 銀座・鳩居堂

霧林會第二回展(洋) 十一月一日—五日 銀座・資生堂

石原求龍堂主催。里見勝藏の「婦人像」及び裏磐梯の景を描いた「錦山碧湖」、伊藤廉の「山の湖」、會宮一念の「麥秋」、林重義の「牡丹」等、會員四名の新作を陳列した。

瑠派亞土社第九回洋畫展 十一月一日—五日 敦寄屋橋・中央ギャラリー

田村公子洋畫個展 十一月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

第一回新興工藝展 十一月一日—六日 名古屋・松坂屋

東京、京都、大阪、名古屋、横濱、神戸の六大都市主催。その出品内容は美術工藝と輸出向工藝の二様に分けられ、凡そ二百五十點が陳列された。審査員は海野清、杉田禾堂、山崎覺太郎、霜島之彦、和田三造、野村正俊であつて、六大都市市長賞(賞金各五百圓)六人が選ばれた。

若山爲三日本畫展 十一月一日—六日 大阪・阪急百貨店

櫻扇會第一回日本畫展 十一月一日—七日 神戸・三越

名勝天然紀念物保存協會東京支部の主催で開催された。

琉球工藝文化展 十一月一日—三十日 駒場・日本民藝館

日本民藝館では紀元二千六百年を記念し、琉球の着物、陶器、漆器、繪畫等合計四百六十點を陳列した。出品物は同館をはじめ尙裕侯爵、尙順男爵、尙且、水谷良一、山村耕花、原田貞吉、山里永吉、山口全則、護得久朝章、喜久山おもと、山田有登等諸家所藏のものであつた。

山下肇耶個展(日) 十一月二日—四日 大阪・朝日會館

佐藤一章洋畫展 十一月二日—六日 銀座・三昧堂

横濱美術協會第九回展(日、洋) 十一月二日—八日 横濱・野澤屋

美術院、青龍社作家展(日) 十一月三日—六日 京城・丁子屋 同店主催。

大河内信秀滯歐作品展(洋) 十一月三日—七日 銀座・青樹社。

日本美術協會百十二回美術展(書、篆刻) 十一月三日—十日 日本美術協會

紀元二千六百年奉祝美術展京都陳列(前期) 十一月三日—十七日 大禮記念京都美術館

紀元二千六百年奉祝美術展 後期(日、工) 十一月三日—二十四日 東京府美術館

本欄五十七頁参照

二六會第二回洋畫展 十一月四日—六日 銀座・紀伊國屋

明治神宮鎮座二十年祭を記念し、史蹟

錦繪による明治文化展 十一月一日—十日 上野・松坂屋

明治神宮鎮座二十年祭を記念し、史蹟

明治神宮鎮座二十年祭を記念し、史蹟

明治神宮鎮座二十年祭を記念し、史蹟

明治神宮鎮座二十年祭を記念し、史蹟

明治神宮鎮座二十年祭を記念し、史蹟

明治神宮鎮座二十年祭を記念し、史蹟

明治神宮鎮座二十年祭を記念し、史蹟

明治神宮鎮座二十年祭を記念し、史蹟

明治神宮鎮座二十年祭を記念し、史蹟

明治神宮鎮座二十年祭を記念し、史蹟

池上浩近作展(洋) 十一月四日―六日
大阪・三角堂

甲斐巳八郎日本畫個展 十一月四日―
七日 銀座・菊屋畫廊

天賞堂畫廊開設記念展(洋) 十一月四
日―八日 大阪・天賞堂畫廊

兵庫縣美術家聯盟第二十回展(日、洋)
十一月五日―七日 神戸・大丸

同會の公募展で陳列數百四十四點、搬
入百八十五點、入選五十七點であつた。

高見香猷日本畫展 十一月五日―七日
大阪・大丸

第七回全國商業美術展 十一月五日―
七日 京橋・明治製菓株式會社

全國商業美術教育協會主催の公募展
で、種目は第一部創作ポスター、第二部

新聞廣告圖案、第三部手拭意匠圖案と
し、審査員は伊東亮次、和田三造、上野

陽一、宮下孝雄、杉浦非水、杉山豊桔の
六名であつた。

鈴木清第二回洋畫展 十一月五日―九
日 名古屋・丸善

中島勇近作小品展(洋) 十一月五日―
十日 神戸・畫廊

西國三十三ヶ所觀音繪巡禮展(日) 十
一月五日―十日 上野・松坂屋

前田竹房齋花籠陳列 十一月五日―十
日 大阪・三越

近藤浩一路第六回新作畫展 十一月六
日―十日 日本橋・高島屋

「富士三題」をはじめ水墨畫十點を陳列
した。

日本バステル作家協會展 十一月七日
―十日 銀座・松坂屋

曾我英吉作品展(洋) 十一月七日―十
日 青山・玳軌畫廊

津田青楓個展(日) 十一月七日―十二
日 日本橋・三越

近來洋風畫より日本畫を描いてゐる作
者が、文人畫風の風景畫に蔬菜畫を加へ、
近作十餘點を展覧した。

早川國彦水彩展 十一月七日―十二日
大阪・阪急百貨店

涼々會第四回新作日本畫展 十一月八
日―十日 日本橋・東美俱樂部

一曜會第四回展 十一月八日―十日
神田・東京堂

井手則雄第一回個展(彫) 十一月八日
―十日 銀座・紀伊國屋

宮崎青湖個展(日) 十一月八日―十日
大阪・大丸

旭谷左右遺作古事記畫展 十一月八日
―十日 京都・朝日會館

伊賀山雄鳳近作畫展(日) 十一月八日
―十一日 大阪・中之島會館

岡田行人物畫展(洋) 十一月八日―
十一日 銀座・菊屋畫廊

吉田眞里、富岡東四郎大陸風物展 十
一月八日―十二日 新宿・三越

日本民藝館主催琉球風物寫眞展並日本
生活工藝展 十一月八日―十二日 銀座
三越

澤田宗山作陶展 十一月八日―十三日
日本橋・三越

丹阿彌岩吉第五回個展(日) 十一月八
日―十三日 日本橋・白木屋

帝國美術學校奉祝展 十一月九日―十
日 吉祥寺・同校

文化學院繪畫工藝展 十一月九日―十
日 お茶の水・同學院

東西大家日本畫展 十一月九日―十三
日 日本橋・白木屋

石井柏亭近作水彩畫展 十一月九日―
十三日 銀座・三味堂

「農村秋雨」「最上川雨季」等水彩十點
を三味堂主催で陳列した。

第二回貿易局輸出工藝圖案展 十一
月九日―十三日 名古屋・愛知縣商工館

丹光會日本畫展 十一月十日―十七日
新宿・伊勢丹

日本美術學校教職員生徒作品展 十一
月十一日 板橋・同校

重松岩吉個展 十一月十一日―十二日
銀座・紀伊國屋

原精一陳中作品展(洋) 十一月十一日
―十三日 仙臺・藤崎ホール

荒木芳男芝居スケッチ展 十一月十一
日―十三日 銀座・資生堂

第十周年獨立美術秋季展(洋) 十一月
十二日―十四日 京都・大丸

犀彩會第一回美術展(洋) 十一月十二
日―十六日 上野・松坂屋

山下新太郎近作展(洋) 十一月十二日
―十六日 大阪美交社

今春東京に於て個展を開いたが、今回
更に美交社の主催で「朝の中禪寺湖」「奈

良新綠」等二十一點を發表した。
日本漆繪協會第二回展 十一月十二日
―十六日 上野・松坂屋

會員の制作に係る漆繪、漆工品等の外
に日本郵船の春日丸のサロンを飾る漆繪
の大作を陳列した。

新日本洋畫協會第七回展 十一月十二
日―十七日 京都・大丸

神光會第一回展(日、洋) 十一月十二
日―十七日 神戸・畫廊 同畫廊主催。

太田聽雨第二回作品鑑賞會(日) 十一
月十二日―十七日 大阪・松坂屋

富田温一郎油繪展 十一月十二日―十
七日 大阪・三越

辻蒼石近作畫展(日) 十一月十二日―
十七日 大阪・そごう

奈良名匠謹模天平美術展 十一月十二
日―十七日 上野・松坂屋

今澤工藝六耀會新作工藝品展 十一月
十二日―十七日 大阪・大丸

濱田庄司第十回近作陶器展 十一月十
二日―十七日 大阪・三越

高橋樂齋信樂窯作陶展 十一月十二日
―十七日 大阪・三越

大阪新美術家同盟第七回展(洋、彫)
十一月十二日―十八日 大阪市立美術館

現在、大阪彫塑會をはじめ、ロボット
洋畫協會、關西水彩畫協會、六月會、新

畫人集團、大阪繪畫會の六團體が聯合し
て開く洋畫、彫刻の展覽會である。本年

は皇紀二千六百年を奉祝して、會員の神
武帝聖蹟風景畫及び之に關する彫塑の特

別出陳した。

中村岳陵近作鑑賞會(日)十一月十三日
日本橋・東京株式取引所

坂本浩三主催であるが、中村岳陵の最近六七年間の個展或は市井展に出品された作品を集め展覧した。岳陵近年の傾向、筆致の變化を知り得るものであつた。

新水彩畫協會第一回展 十一月十三日
―十五日 銀座・菊屋畫廊

田中繁吉油繪展 十一月十三日―十六日
大阪・三角堂

研究會第一回展(日)十一月十三日―十七日 銀座・紀伊國屋

船田玉樹、岩橋英遠外十二名が新に結成した同人展。

六裏會第五回洋畫展 十一月十三日―十七日 大阪市立美術館

奥瀬英三油繪個展 十一月十三日―十七日 日本橋・高島屋

油繪の近作三十餘點を陳列した。

荒井陸男個展(洋)十一月十三日―十七日 大阪・朝日ビル

眞野紀太郎ばら百花水彩展 十一月十三日―十七日 日本橋・高島屋

玉澤潤一第二回洋畫個展 十一月十三日―十七日 大阪・阪急百貨店

鈴木旭松齋花籠展 十一月十三日―十七日 日本橋・三越

新興美術院同人第二回日本畫展 十一月十三日―十九日 大阪・阪急百貨店

月明掌點清觀會(日、工)十一月十四日―十六日 名古屋・丸善

美術展覽會(十一月)

鬼頭璽二郎第六回個展(洋)十一月十四日―十六日 名古屋・丸善

十號の「柿」をはじめ油繪三十點を陳列した。

小早川清獻納畫展(日)十一月十四日―十七日 福岡・岩田屋

神谷飛佐至個展(日)十一月十四日―十七日 日本橋・白木屋

沖繩紅房展(工)十一月十四日―十八日 銀座・養生堂

縁巷會洋畫小品展 十一月十四日―十九日 新宿・三越

白井烟巖個展(日)十一月十四日―十九日 銀座・三越

河井寛次郎新作陶器展 十一月十四日―十九日 大阪・高島屋

院展同人彫刻小品展 十一月十五日―十七日 大阪・高島屋

有道佐一個展(日、洋)十一月十五日―十八日 丸ノ内・工業俱樂部

近藤悠三作陶展 十一月十五日―十八日 銀座・鐘紡美術部

菁々會第二回繪畫展(洋)十一月十五日―十九日 銀座・三味堂

牛島貢洋畫展 十一月十五日―十九日 銀座・青樹社

コンラッド・メリイ第二回作品展(洋)十一月十五日―十九日 數寄屋橋・日動畫廊

瑞西公使後援、本年第二回目的個展で油繪四十餘點及びデッサン、モノタイプ等を陳列。鳥取、輕井澤等の寫生をはじめ人物、静物畫等である。

明治、大正、昭和物故名家油繪回顧展 十一月十五日―二十日 日本橋・白木屋

明治以降の油彩作家の作品凡そ九十點を陳列した。目錄掲載のもので不出陳のものもあり、出陳作品も玉石混淆であつた。明治美術研究所主催であるが何れも賣品である。

め人物、静物畫等である。

明治、大正、昭和物故名家油繪回顧展 十一月十五日―二十日 日本橋・白木屋

明治以降の油彩作家の作品凡そ九十點を陳列した。目錄掲載のもので不出陳のものもあり、出陳作品も玉石混淆であつた。明治美術研究所主催であるが何れも賣品である。

加藤支頭夫滯佛作品展 十一月十五日―二十一日 新宿・月光莊

染織繡藝術協會第一回展 十一月十六日―十七日 京都・岡崎公會堂

京都染織、刺繡工藝家に依つて本年結成された染織繡藝術協會はその第一回展を開催した。出品總數九十三點、此の中央軍病院への献納作品三十三點があつた。

長澤昇第一回洋畫展 十一月十六日―二十一日 銀座・菊屋畫廊

關晴風水彩畫展 十一月十八日―十九日 銀座・紀伊國屋

新版畫會創立第一回展 十一月十八日―二十日 數寄屋橋・中央ギャラリー

會員は旭泰宏、森田路一、大宮昇の三名。

双弦會第二回展(洋)十一月十八日―二十日 名古屋・丸善

名古屋市綜合美術展 十一月十八日―三十日 名古屋市公會堂

名古屋市の主催にかゝる本年度綜合美術展は日本畫、西洋畫、彫塑、工藝、書道の五部を以て開催、成績は左の通りであつた。

〔審査員〕(日本畫)菊池契月、前田青邨、川崎小虎、服部有恒(洋畫)藤島武二、和田三造、安井會太郎、太田三郎、横井禮市(彫塑)山崎朝雲、建畠大夢、加藤顯清(工藝)香取秀眞、板谷波山、六角紫水、長野埜志(書道)尾上柴舟、田代秋鶴、石橋犀水

日本畫 一四一 入選 陳列
洋畫 五六八 九六 一二七
彫塑 七五 三七 四三
工藝 二九九 五四 六一
書道 二六六 九五 一一〇
合計 一一七九 三三一 三九〇

〔授賞〕市長賞 庄田吉興(日)、瀬尾運洋、石田清(彫)、佐分藏(工)、渡邊鈺三(書)

正統木彫家協會第一回展 十一月十九日―二十三日 大阪・三越

澤田晴廣、三木宗策等會員十二名の作約七十點を陳列した。

池上秀欽塾以心社第一回展(日)十一月十九日―二十一日 日本橋・高島屋

北斗會第二回展(日)十一月十九日―二十四日 大阪・大丸 同店主催。

中安四郎個展 十一月十九日―二十四日 大阪 阪急百貨店

榎谷徹藏バステル畫小品展 十一月十九日―二十四日 大阪・三越

無涯社第一回展(日、洋)十一月十九日―二十四日 大阪・そごう 美術と趣

七三

味社主催。

井高歸山作陶展 十一月十九日—二十

四日 日本橋・三越

現代歐洲繪畫展 十一月十九日—二十

四日 大阪・松坂屋

第一回試作並國策漆器展 十一月十九

日—二十七日 銀座・松屋 東京漆器工

業組合主催。

東京會新作日本畫展 十一月二十日—

二十二日 芝・東京美術俱樂部

小林古徑の「秋」、川端龍子の「仔犬」、

堂本印象の「昇る日」、中村岳陵の「季秋」

等日本畫境の現役及び新人の作品六十餘

點が陳列された。

岡常次第十回個展(洋) 十一月二十日

—二十三日 銀座・紀伊國屋

創造美術協會第七回展 十一月二十日

—二十四日 大阪市立美術館

舊稱セクションダール、會員十四名の

作を陳列した。

七絃會第十一回展(日) 十一月二十日

—二十四日 日本橋・三越

五名の會員中前田青邨、小林古徑は東

京會期中間に合はず、大阪に於て陳列さ

れた。錦木清方の「たけくらべの美登利」

は一葉の作品に取材せるもので奉祝展の

出品作との連關を思はせ、安田靉彦は柿

に錦木を配して朱の階調を求め、菊池契

月の「吹奏」は笛吹く天女を殆んど白描

に近き謹格な線描を以てせる佳作であつ

た。尙前田青邨は「菊」を、小林古徑は

卓布の上に果物を表した「菓子」を出品

した。

海外古美術工藝品展 十一月二十日—

二十四日 日本橋・高島屋

福田惠一第二回個展(日) 十一月二十

日—二十四日 日本橋・高島屋

同店主催、歴史人物畫十數點を發表し

た。

小川芋錢遺作小品畫展(日) 十一月二

十日—二十四日 日本橋・高島屋

同店主催、小幅、扉面、短冊等六十餘

點を陳列した。

裕伊之助近作油繪展 十一月二十日—

二十四日 銀座・資生堂

「水仙」「鱒釣り」等十點を陳列した。

河越虎之進洋畫個展 十一月二十日—

二十四日 日本橋・高島屋

新興美術協會第九回展(洋) 十一月二

十日—二十五日 大阪市立美術館

恒例の公募展で、大阪毎日新聞社後援

搬入千八百、入選百十四點、協會賞を大

嶺政寛に授け、石黒平三郎、入江令一、

兒玉彦三、朝井清を會員に、外に四名を

會友に推舉した。

明治大正昭和挿繪文化展 十一月二十

日—二十九日 日本橋・三越

日本電報通信社が皇紀二千六百年記念

として開催せるもの。明治初期より現代

に至る新聞、雜誌、單行圖書の挿繪及び

その畫稿等を陳列した。その作家として

も古くは芳年、芳宗、年方等の浮世繪系

作家をはじめ、久保田米僊、横山大観、

下村觀山、寺崎廣業、梶田半湖、武内桂

舟等の日本畫家、黒田清輝、淺井忠、中

村不折等の西洋畫家の作品があり、又近

代及び現代の作家としては錦木清方、平

福百穂、森田恒友、石井鶴三、中村岳陵、

小村雪岱、木村莊八等があつて、明治以

降の文化風俗の變遷を端的に知り得る興

味ある展覧であつた。尙これに附隨して

名作に因む現代諸作家の新作挿繪と聖職

スケッチが展覧された。

新篋會第二回小品展(日) 十一月二十

一日—二十三日 大阪・高島屋

東本春水上高知風景鑑賞畫展(洋) 十

一月二十一日—二十三日 名古屋・丸善

一至會第一回展(洋) 十一月二十一日

—二十三日 銀座・菊屋畫廊

銀朱會第一回展 十一月二十一日—二

十四日 大塚・白木屋

鹿子木孟郎洋畫個展 十一月二十一日

—二十四日 岡山・金剛莊

東京美術學校圖案部第二回成績展示會

十一月二十一日—二十四日 銀座・三越

三宅克己、石川欽一郎水彩畫展 十一

月二十一日—二十五日 數寄屋橋・日動

畫廊

大亦觀風萬葉集畫撰展(日) 十一月二

十日—二十六日 日本橋・白木屋

日本人形社第五回展 十一月二十一日

—三十日 上野・日本美術協會

人形の公募展で、會員及び入選者の作

を併せ六十一點を陳列した。

〔會員推薦〕岡本輝子、宏きよ子

歷程美術協會第四回秋季展(日) 十一

月二十二日—二十五日 神田・東京堂

牧野蒼風日本畫個展 十一月二十二日

—二十六日 名古屋・後藤版畫店

八藤勲人第一回個展(洋) 十一月二十

二日—二十六日 銀座・青樹社

太田聽雨第二回作品鑑賞會 十一月二

十三日—二十四日 京都・丸物百貨店

—二十五日 京都・朝日會館

岩佐新「出雲」と「菊」の水墨畫展

十一月二十三日—二十五日 銀座・鳩居

堂

甲斐青萍「盡忠菊池家歴史畫展」(日)

十一月二十四日—二十六日 銀座・電通

ビル

磁元社工藝小品展 十一月二十四日—

二十七日 銀座・鐘紡美術部

三角泰遺作展(洋、彫) 十一月二十五

日—二十六日 銀座・三味堂

本年五月四日に逝去した彫刻家三角泰

の彫刻、油繪其他を展覧した。

某家蒐集油繪展觀 十一月二十五日—

二十七日 芝・東京美術俱樂部

石原龍一、西川武郎主催。

近藤紫水木彫個展 十一月二十五日—

二十七日 芝・東京美術俱樂部

渡邊大虛個展(日) 十一月二十五日—

二十七日 大阪・清交社

春泥社小品展(日) 十一月二十五日—

三十日 大阪・そごう

藝苑社第一回清鑿會(日) 十一月二十

六日 日比谷・山水樓

高橋保、瀧川洗風第二回能畫、能彫刻展 十一月二十六日—二十八日 大阪・大丸

美術文化協會秋季展 十一月二十六日—二十九日 銀座・三越

會員の製作八十二點を陳列、勅使河原若風の瓶華で會場を飾つた。

霖林會第二回展(洋) 十一月二十六日—二十九日 神戸・畫廊

龍子個人展「筆金剛」(日) 十一月二十六日—三十日 日本橋・三越

陸軍省報導部の委嘱に依り北支八達嶺に戰跡を探り、又大陸策四部作の畫材蒐集の爲北京、青島等に旅行せる龍子は、その途朝鮮金剛山に遊び、其處に取材せる山水、花鳥畫を製作その十點を陳列した。水墨、着色共に此の作者獨特のものであるが、就中「眞珠漂」「九龍淵」「晴

鳶圖」「海金剛」の如き、その技を見るべきものであつた。因に龍子は此の第十回個展を以て一時これを中絶することを聲明した。

牧野虎雄油繪個展 十一月二十六日—三十日 大阪・阪急百貨店

新進作家油繪展 十一月二十六日—三十日 上野・松坂屋

上野山清貢新作小品展(洋) 十一月二十六日—三十日 大阪・天賞堂

新潮會第一回新作日本畫展 十一月二十六日—十二月一日 大阪・大丸

土井撰美堂外四名の畫商の蒐集した新作品を展覽した。

東西日本畫展 十一月二十六日—十二月一日 大阪・阪急百貨店

福岡縣美術協會第一回展 十一月二十六日—二十五日 福岡・岩田屋

創立された同會は第一回展を開催、招待出品により日本畫十七點、洋畫八十六點、彫塑二十八點、工藝十二點を陳列した。中央の作家が多數出品し、地方展として盛大であつた。

藤原芳春、小林澄心日本畫展 十一月二十七日—二十九日 銀座・紀伊國屋

原鼎油繪水墨展 十一月二十七日—二十九日 銀座・鳩居堂

厚生派挿繪漫畫試作展 十一月二十七日—二十九日 銀座・菊屋畫廊

名取明德個展(洋) 十一月二十七日—三十日 日本橋・高島屋

橋本關雪新作展(日) 十一月二十七日—三十日 京城・三中井

本方秀麟遺作展(日) 十一月二十七日—三十日 日本橋・白木屋

ニタ・マリ・サンチラン油畫個展 十一月二十七日—三十日 銀座・青樹社

東西大家春掛畫幅展 十一月二十七日—十二月一日 日本橋・白木屋

岩田秀暉日本畫展 十一月二十七日—十二月四日 福岡・松屋

大潮會第五回繪畫展(日、洋) 十一月二十七日—十二月八日 東京府美術館

初中等學校の圖畫教育者を出品者とする同會は文部省後援の下に公募による第

五回展を開催した。審査員名其他は左の通りである。

(審査員) (日本畫) 荒木十畝、石崎光瑤、宇田萩郎、小野竹喬、堅山南風、常岡文龜、山川秀峰、吉村忠夫(洋畫) 石川寅治、伊原宇三郎、熊岡美彦、齋藤與里、田邊至、辻永、寺内萬治郎、鍋井克之、中野和高、長谷川昇(搬入)(日本畫) 六五點(洋畫) 一一三八點(入選)(日本畫) 三三點(洋畫) 三三六點(大潮會賞) 鈴木三五郎、特選以下略

現代工藝美術第一回展 十一月二十七日—十二月八日 日本橋・高島屋

新に結成された現代工藝作家協會の主催、文部省後援で第一回展を開いた。會長、名譽會員及び會員推薦作家の作品の外公募による一般出品を集めた。出品はあらゆる部門に亘りほゞ現代工藝の全般を示すと共に文展の場合と異り實用に適し得る小工藝品の類が多く、その點は興味ある展覽會であつた。川崎克の「銘柘榴伊賀花生」、河井寛次郎「辰砂吳洲六方壺」その他中々良く、香取秀眞「鏤鋼線文花入」又品位備つてさすがに美しい。これ等のほか新人に面白いものが多かつた。

美術新協第六回展 附小村雪岱舞臺裝置遺作展(綜合) 十一月二十七日—十二月十日 東京府美術館

恒例の公募展で、種目は日本畫、洋畫彫刻、工藝、圖案、版畫、舞臺美術等。搬入五百八十、入選百五十、陳列數二百

十點で、故小村雪岱の舞臺裝置を特別陳列した。

一水會第四回展(洋) 十一月二十七日—十二月十日 東京府美術館

一水會は奉祝展に参加後更にその展覽會を開催した。會員も揃つて出品し、合計二二三點であつた。有馬生馬の「詩宗青崖先生」は肖像品として氏の近來の佳作である。石井柏亭の風景畫「武藏野」

「吉林」共に要を得たる作品であり、池邊鈞の「宵祭」は例の如く動的瞬間を捉へたものであり、その特色を示してゐる。

木下孝則は「上海記念」に長椅子上の婦人を、「F嬢像」に半身少女を描いてゐるが、觀者に迫るものがない。木下義謙の五點はどれも支那に取題せるもの、就中風景をとる。小山敬三は「風景」にその特色を示してゐる。高野三三男は益々工藝的な手法の婦人像を示し、新會員田崎廣助は風景三點を出品してゐるが、松林の五月」は大作であつた。中村善策はその明るい色調の風景に進歩を示してゐるが、未だ畫面の緊密さを缺いてゐる。

安井曾太郎は菊を描き、その色調の階和と線描的筆觸によつてその様式を益々明瞭にしてゐる。山下新太郎は婦人像「白樺」と「奈良公園新緑」を出品した。その他の新人の作品には安宅虎雄の「女と龍舌蘭」、中村琢二の「母と子」、近藤光紀の「秋果」、金子博信の「屋上戲童」、大館健三の「新聞」等があつた。

出品目録(會員)

詩宗青崖先生 ○看鳥 生馬	高原の白樺 同	町の女 同	龍舌蘭と女 同	柿 同	女と小鳥 同	雪の或日朝倉 力男 婦人像 荒谷直之介	武藏野 ○石井 柏亭	松花江 同	吉林 同	宵祭 ○池部 鈞	鯉 同	姉の像 石井 三冬	水蓮の池 同	駒ヶ岳 石川眞五郎	樺 同	ツンドラ地帯の 大雷鳥 石橋美三郎	トナカイの群 同	M嬢 石山 富彦	庭 伊藤 立巳	秋晴 板倉 國臣	樹水 池谷 寅一	草上の静物 泉 治作	岬の部落 上田 徹雄	風景 大津 嶺雄	初秋の池 同	新聞 大館 健三	クリニーの庭 大倉 實	上海記念 ○木下 孝則	F嬢像 同	北海 ○木下 義謙	北京の春 同	韓家潭 同	午門 同	大廟 同	人物 木下壽々子	高原の六月 同	Kの像 木村 辰彦	北信の一部落 同	湖畔 菊地 秀一	芝草の上 黒田外喜男	赤衣 同	青い服 久野 昌康	茶縞の服 同	少年像 國枝 芳夫	木曾風景 同	河口 ○小山 敬三	風景 同	青衣 近藤 光紀	黒衣 同	秋果 同	後向き 同	富士山 同	少年 小竹 義夫	ボンネ師と丘 同	早春の朝小平 同	晩秋 同	古北口風景 小椋 繁治	鹿島槍見の 齋藤 大	イルド・フラン スノ秋 佐藤 功茂	エトルタ 同	エルブレイの春 同	巖 佐藤 克三	高原の初夏(二) 坂本 正春	同(一)同	外出 酒見 恒平	吹上にて 繁野 三郎	支度部屋 島あふひ	ミモザ 同	薄 島 常武	藁なう農夫 同	静物 同	獵銃を持てる男 菅沼 金六	兵士 同	フィンランドの 農婦 同	梅 鈴木 良三	友の像 同	早春 同	湖畔 木松 勇	晩秋 角江 重一	黄衣座像 關戸得三郎	防空壕の中で 同	○高野三三男	頭巾の女 同	少女 同	みどりご 同	松林の五月 ○田崎 廣助	山村初夏 同	武藏野早春 同	秋の静物 高田 誠	野尻湖と妙高 同	秋の妙高山 同	窓ぎわの女 高橋 庸男	描く女 同	畫室の女 同	假裝舞踏會 澁川 太郎	チュキルリーの 雪 同	祝意 田坂 乾	白毫寺村 同	阿武隈川 田中 佛六	早春の室戸港 高橋 正人	少女と紅小菊 高見取太郎	高原秋意 瀧澤 清	湖畔 竹内梅治郎	蓮 谷内 俊夫	N氏の像 近岡善次郎	羅さんの竹像 同	海内 千葉 明	小土肥 千頭 清策	眞秋の廟 常岡三郎	稽古場 出間美千子	野尻湖 同	水邊 寺島 貞志	峰近し 筆々力巳吉	○中村 善策	高瀬河原 同	緑衣 中村 琢二	黄衣 同	母と子 同	秋の庭 中畑 幸夫	土合村 同	静物 中村三樹男	くづれた花 仲田 菊代	戸外の静物 同	朝の湖 同	水郷の秋 中田 恭一	窓 中川郷一郎	編物する女 中澤竹太郎	緑蔭 鍋谷傳一郎	婦人立像 同	木戸池の初夏 同	ミンと女 名取 明德	スキー小屋の女 同	唐見山 二宮 雪夫	孔子廟(湖南全州) 西原比呂志	野尻湖 額田 朋子	ピアノの前 同	尼寺(南佛ニース にて) 野崎利喜男	カーニユの古城 (南佛にて) 同	たちあはひ(南 佛ニースにて) 同	曲り道 納富 進	青梅街道 同	春待つ校庭 能勢 眞美	ヤチダモの池 同	西班牙風野口 道方	黒い帽子 ○森 伊之助	ガーベラ 同	お裁縫の静物 林 たい子	雲崗農家林 鶴雄	貸與馬二頭 花野 五環	装ひ 原 俊一	曇る朝 平井 武雄	坑内に働く女 同	カザツク・ダン スの人々 福田 新生	サモワールのそ ば 同	蒙古服 深澤 紅子	紅衣縁扇 不破 章	琵琶湖東風景 別車 博資	秋川橋附近(五 日市町) 堀 忠義	皂莢坂 同	牡丹 本郷 惇	最上川風景 眞下 慶治	F村の秋 同	山はるる松田 晃八	びろう樹の林 同	山湖 松田 康一	糸満の漁婦 松田 忠一	縁側 源川 雪	木々 同	秋果一枝三浦 俊輔	岩と波 三角喜壽男	中川秋景 村上鐵太郎	雪上製材諸橋 政範	窓際の一瞬 森 寅雄	菊 ○安井曾太郎	白樺 ○山下新太郎	奈良公園新緑 同	木登り 矢崎 重信	木遣唄 同	桑もぎ 同	漁村夕景 矢野 雄藏	上總の濱 同	雪後 同	高原初秋(輕井 澤) 山口 敏男	秩父路 同	二重橋 山口 潔	初秋山湖 山中仁太郎	濱木綿の丘 山崎 楠英	森の樹 安井 隆	桃 渡邊 宗一	農村小徑 渡邊正太郎	老父 渡邊 正市	秋の女 渡部 千鶴
------------------	------------	----------	------------	--------	-----------	------------------------	---------------	----------	---------	-------------	--------	--------------	-----------	--------------	--------	----------------------	-------------	-------------	------------	-------------	-------------	---------------	---------------	-------------	-----------	-------------	----------------	----------------	----------	--------------	-----------	----------	---------	---------	-------------	------------	--------------	-------------	-------------	---------------	---------	--------------	-----------	--------------	-----------	--------------	---------	-------------	---------	---------	----------	----------	-------------	-------------	-------------	---------	----------------	---------------	----------------------	-----------	--------------	------------	-------------------	-------	-------------	---------------	--------------	----------	-----------	------------	---------	------------------	---------	--------------------	------------	----------	---------	------------	-------------	---------------	-------------	--------	-----------	---------	-----------	-----------------	-----------	------------	--------------	-------------	------------	----------------	----------	-----------	----------------	-------------------	------------	-----------	---------------	-----------------	-----------------	--------------	-------------	------------	---------------	-------------	------------	--------------	--------------	--------------	----------	-------------	--------------	--------	-----------	-------------	---------	----------	--------------	----------	-------------	----------------	------------	----------	---------------	------------	----------------	-------------	-----------	-------------	---------------	--------------	--------------	--------------------	--------------	------------	--------------------------	------------------------	-------------------------	-------------	-----------	----------------	-------------	--------------	----------------	-----------	-----------------	-------------	----------------	------------	--------------	-------------	--------------------------	-------------------	--------------	--------------	-----------------	-------------------------	----------	------------	----------------	-----------	--------------	-------------	-------------	----------------	------------	---------	-----------	-----------	---------------	-----------	---------------	-------------	--------------	-------------	--------------	----------	----------	---------------	-----------	---------	------------------------	----------	-------------	---------------	----------------	-------------	------------	---------------	-------------	--------------

坪井甚喜第一回個展(洋)十一月二十
八日―三十日 名古屋・丸善
棚橋慶心堂日本畫展 十一月二十八日
―三十日 名古屋美術俱樂部
内野碧山油彩展 十一月二十八日―十
二月二日 銀座・三味堂
森月城第一回個展(日)十一月二十八

日十二月二日 神戸・東言社

並木哲男第二回洋畫個展 十一月二十

八日十二月二日 新宿・月光荘

無涯社第一回展(日、洋) 十一月二十

八日十二月三日 上野・松坂屋 美術

と趣味社主催。

藤田重夫洋風畫展(洋) 十一月二十八

日十二月三日 大阪・關西畫廊

第二回現代彫塑名匠展 十一月二十九

日十二月一日 大阪・大丸 東京帝國

美術彫塑普及會主催。

十一月

高間惣七水墨展 十二月一日―三日

銀座・菊屋畫廊

第十二回福陽美術展(日) 十二月一日

―三日 平市・公會堂

佐伯米子洋畫個展 十二月一日―四日

銀座・資生堂

笈洛會第一回日本畫展 十二月一日―

四日 神戸・三越

草光信成近作展(洋) 十二月一日―四

日 數寄屋橋・日動畫廊

原夕起個展(日) 十二月一日―四日

新宿・東陽畫廊

水彩聯盟第一回展 十二月一日―五日

銀座・三越

會員は春日部たすく、小堀進、荻野康

兒等八名。

木芽會第五回展(日) 十二月一日―五

日 大阪・モこう

鑄金會工藝展 十二月一日―六日 日

本橋・三越

石井彌一郎個展(洋) 十二月一日―六

日 大阪・阪急百貨店

清水正太郎、伊東翠壺、森野嘉光、米

澤蘇峰新作陶藝展 十二月一日―八日

京都・大丸

矢野橋村繪付北出塔次郎作陶展 十二

月一日―八日 大阪・松坂屋

大阪市主催紀元二千六百年奉祝綜合美

術展 十二月一日―十五日 大阪市立美

術館

大阪市では紀元二千六百年を奉祝記念

して公募による綜合展を開催した。審査

員及び鑑審査の成績は左の通りである。

〔審査員〕第一部(日本畫)北野恒富、

菅橋彦、矢野橋村、第二部(西洋畫)赤

松麟作、國枝金三、齋藤與里、第三部

(彫塑)上田曉、保田龍門、第四部(美

術工藝)入江來布、大國壽郎、黒岩淡哉、

久須來郎、越田尾山、島野三秋、杉田禾

堂、中島豊次、根箭忠敏、山本笙園、安

原祥窓

原祥窓

搬入 入選 審査員 陳列

第一部 二八二 六〇 三 六三

第二部 八三七 一八 三一 二一

第三部 一六五 五三 四 五七

第四部 三四一 六〇 一一 七二

計 一六二五 二九 一一 三三

〔推舉〕(第一部)大森富平(第二部)

胡桃澤源人、園部晋生、古家新、藤井二

郎(第三部)辻晋堂、宮島久七(第四部)

平松宏春、吉田一閑(獎勵賞)(第一)(第

一部)岡茂以(第二部)徳永富士子(第

三部)淀井敏夫(第四部)小澤裕(第二

(第一部)住千代敷(第二部)雜賀文子

(第三部)岡田康利(第四部)山本立軒(第

三)(第一部)津田芳子(第二部)大平敬

次郎(第三部)日高正法(第四部)芳武

茂介

青潮社第一回洋畫展 十二月二日―四

日 京城・三中井

柏舟社京都展(日) 十二月二日―四日

京都・朝日會館

龜割隆志近作日本畫展 十二月二日―

五日 京城・三越

高田浩個展(洋) 十二月二日―五日

銀座・紀伊國屋

世紀美術創作協會第一回展(日) 十二

月三日―五日 京都・岡崎公會堂

去る九月西山翠嶂門下の寺田蘆秋、大

高爲山、今尾景春等七名が結成した會で、

同人の作を陳列した。

東西大家新作日本畫展 十二月三日―

六日 大阪・高島屋

七絃會第十一回展(日) 十二月三日―

六日 大阪・三越

鈴木清一油繪展 十二月三日―六日

神戸・畫廊

新作日本畫展 十二月三日―七日 日

本橋・三越

日本彫金會展 十二月三日―七日 日

本橋・三越

關川富士郎近作展(洋) 十二月三日―

七日 銀座・青樹社

熊谷守一新毛筆畫展 十二月三日―七

日 名古屋・丸善

山田皓齋油繪展 十二月三日―七日

大阪・三越

浦久保義信個展(洋) 十二月三日―七

日 京城・鐘紡

長谷川白峯新作陶磁器展 十二月三日

―七日 日本橋・三越

鈴木信太郎第二回油繪展 十二月三日

―八日 日本橋・高島屋

花卉靜物、風景等近作二十數點を陳列

池上秀畝個展(日) 十二月三日―八日

神戸・三越

澤田宗山新作陶藝展 十二月三日―八

日 大阪・大丸

太田古朴木彫展 十二月三日―八日

大阪・大丸

神戸市奉祝工藝展 十二月三日―八日

神戸・三越

紀元二千六百年奉祝美術展京都陳列

(後期) 十二月三日―十七日 大禮記念

京都美術館

旭谷左右遺作「古事記」連作洋畫展

十二月四日―六日 銀座・菊屋畫廊

美術乃日本社現代名家日本畫新作展

十二月四日―七日 銀座・鳩居堂

H蒐集日本畫油繪鑑賞展 十二月四日

―七日 丸ノ内・工業俱樂部

益田玉城個展(日) 十二月四日―八日

上野・松坂屋

今夏、中支方面に従軍して得たスケッ

チに基く作品二十點を陳列した。

支那南北現代畫家近作名品展 十二月四日—八日 日本橋・白木屋 上海星期畫社主催。

上田巳之助畫展(洋) 十二月五日—九日 大阪・天賞堂畫廊

一路會第二回油繪小品展 十二月五日—九日 大阪・關西畫廊

鳩交會第十三回展(洋) 十二月五日—十日 新宿・月光莊

清溪會第四回鑑賞會(日) 十二月六日—七日 銀座・交詢社

七鳳會第四回展(洋) 十二月六日—八日 銀座・三味堂

菟青社第七回展(日) 十二月六日—八日 京都・大丸

岡本春草日本畫展 十二月六日—八日 大阪・大丸

齋藤勇個展(洋) 十二月六日—八日 大阪・高島屋

鈴木千久馬洋畫展 十二月六日—八日 大阪・阪急百貨店

帝國美術學校圖案科發表展示會 十二月六日—八日 銀座・三壺堂

兒島善三郎近作展(洋) 十二月六日—九日 銀座・資生堂

「グリュヤ」「虞美人草」「芦の湖」等近作を陳列。

亞瑠社第二回油繪展 十二月六日—十日 銀座・紀伊國屋

岡田謙三第五回新作展(洋) 十二月六日—十日 數寄屋橋・日動畫廊

油繪二十六點、常の如く少女を主題とする叙情的な作品であつた。

古家新滿洲北支寫生小品展 十二月六日—十日 大阪・朝日ビル

植木華城南畫展 十二月六日—十一日 大阪・そごう

報道美術協會新東亞建設國家總力戰ボスター展 十二月六日—十一日 銀座・三越

報道美術協會では内閣情報部後援の下に大政翼賛の國民運動展開の一助たらしむべく會員の創作によるボスターを陳列した。展示内容を思想戰、經濟戰、武力戰、體力戰、建設戰の五項目に別け、點數は約八十點であつた。

辻蒼石南洋支那寫生展 十二月六日—十二日 大阪・第二野村ビル

國彩會第一回試作展(日) 十二月七日—八日 京都・朝日會館

朝見香城畫展(日) 十二月七日—八日 名古屋美術俱樂部

辻愛造水墨畫展 十二月七日—十日 神戸・畫廊

朝日ビル美術部開設記念日本畫展 十二月七日—十一日 大阪・朝日ビル

新自然派協會聖紀奉祝並陸軍省献納畫展(洋) 十二月七日—十一日 銀座・菊屋畫廊

詩琴堂、井南居共催東西大家日本畫展 十二月八日—十日 日本橋・東美俱樂部

西山翠巖塾青甲社第二回小品畫展(日) 十二月八日—十一日 大阪・高島屋

河合卯之助作陶展 十二月八日—十三日 大阪・三越

大阪・三越 國外社試作展(日) 十二月九日—十一日 大阪・そごう

同社では作品公募の上秋季展を開催、七十七點の應募作中二十五點を入選とし、同人の出品を併せ三十二點を陳列した。

傷痍軍人美術作品展(綜合) 十二月九日—十一日 牛込・第一陸軍病院

黒門會第二回洋畫展 十二月九日—十日 銀座・青樹社

有島生馬を中心とする親睦の會で、有島の新作「女畫家」をはじめ會員の新舊作二十數點を陳列した。

竹内竹杖會内丹丘會竹立會菟青社同人富士六十景展(日) 十二月十日—十二日 京都・大丸

朱苑會第一回繪畫展(洋) 十二月十日—十二日 銀座・中央畫廊

笠原軻油繪展 十二月十日—十二日 銀座・三味堂

三稜會第二回洋畫展 十二月十日—十三日 日本橋・白木屋

日本エツチング協會第一回展 十二月十日—十三日 銀座・資生堂

新に西田武雄を中心に結成された會で會員の作及び本邦の古銅版畫其他の參考品を陳列した。

荒木陸男新作展(洋) 十二月十日—十四日 大阪・天賞堂畫廊

古歌に因む日本畫展 十二月十日—十四日 上野・松坂屋 菊地芳一郎主催。

愛知縣出身十五年度二科入選者展 十二月十日—十四日 名古屋・丸善

奥村厚一作品觀覽展(日) 十二月十日—十五日 京都・大丸

濱田庄司作陶展 十二月十日—十五日 日本橋・三越

近作の陶器數百點を陳列、最近の目醒しい活躍を見せた。

和光會第七回工藝展 十二月十日—十六日 銀座・服部時計店

新構造社第十四回展(綜合) 十二月十日—二十三日 東京府美術館

公募作品に會員會友の作を併せ繪畫百四十四、工藝十八、彫刻二十七點を陳列、彫塑部は會員會友の合作になる「二千六百年奉祝壁面裝飾」を出陳した。

〔新會員〕中田博三、山本好信、田代一郎、高野直一、岡登けい、添田賢郎(新會友)赤澤かほる、村岡清、本目勇市、中川安一、羽石渡

日本美術新報社第九回新作日本畫展 十二月十一日—十三日 日本橋・東美俱樂部

現代名家新作畫展(日) 十二月十一日—十五日 日本橋・高島屋

現代大家新作洋畫展 十二月十一日—十五日 麹町・日佛畫堂

石川權治第三回個展(綜合) 十二月十一日—十五日 日本橋・高島屋

水谷清洋畫個展 十二月十一日—十六日 京城・丁子屋

第二回現代彫塑名作展 十二月十二日

十四日 丸ノ内・日本工業俱樂部 聖
豐社主催。

吉原義彦從軍畫展 十二月十二日—十

五日 名古屋・松坂屋

十五日 新宿・東陽畫廊
録田朝二郎油繪個展 十二月十二日—

松本正子滯歐作品展(洋) 十二月十二

日—十五日 數寄屋橋・日動畫廊

作者は滯歐十八年に及び最近歸朝し
た。モンマルトルの風景三十餘點を陳列。

龍駿介第十九回富士油繪展 十二月十

二日—十五日 新宿・伊勢丹

三角堂開店三十周年記念謝恩展(洋)

附歐洲繪畫特別陳列 十二月十二日—十

七日 大阪・三角堂

京都大家日本畫展 十二月十三日—十

五日 京都・大丸

八炫社同人陶藝新作品發表 十二月十

三日—十五日 京都・大丸

純粹圖案家協會第一回展 十二月十三

日—十五日 數寄屋橋・中央畫廊

中原英彦個展 十二月十三日—十七日

銀座・三壺堂

坂田虎一近作油繪展 十二月十三日—

十八日 大阪・阪急百貨店

新古典派協會第五回展(洋、彫、工) 十

二月十三日—二十日 東京府美術館

油繪、彫刻、工藝の公募展で、高橋貞

一郎の滯歐作、岡崎桃乞の日本畫、金子

九平次の彫塑等が主なるものであつた。

陳列數百六十三點。

〔會友推薦〕兩角克夫、岸田麗子

日本版畫協會第九回展 十二月十三日

—二十日 東京府美術館

現在會員六十一名を擁する同會の公募

展で、今回の特別陳列は數年來行つてゐ

る版畫史的陳列の第三回として「版畫興

隆期作品」三十二點を陳列した。これは

大正初年結成された東京版畫俱樂部の長

谷川潔、永瀬義郎、廣島新太郎、月映社

の恩地孝四郎、田中恭吉、藤森靜雄、假

面」誌を中心とする萬鐵五郎、岡本歸一

等の諸舊作を集めたものである。外に學

童版畫九十七點を陳列した。會員の新作

では木版畫で平塚運一の色刷「瞻星臺夕

月」、前川千帆の色刷「農婦」「村の娘」、

リノリウム版の前田藤四郎の色刷「ヤッ

プ鳥の人形」等のほか、畦地梅太郎、恩

地孝四郎、ブノワの諸作が面白いもの

であつた。

〔搬入〕一五二點(入選)九一點(陳列

總數)三一五點(會員推薦)黒木貞雄、

岩田覺太郎、山本文子(授賞)黒木貞雄

東西大家新作繪畫展(日) 十二月十四

日—十五日 大阪・三越

大坪重周、般若侑弘、長安右衛門染色

工藝展示會 十二月十四日—十六日 銀

座・鐘紡美術部

甲斐仁代新作小品展(洋) 十二月十四

日—十六日 新宿・東陽畫廊

第三回「失明勇士に感謝する美術展」

十二月十四日—十六日 銀座・三味堂

近きより社主催。

朔日會第五回展(洋) 十二月十四日—

十七日 銀座・資生堂

佐藤功茂滯歐作品展(洋) 十二月十四

日—十八日 銀座・青樹社

一水會所屬の作家で、滯佛三ヶ年で最

近歸國した。

關尚美堂日本畫新作展 十二月十五日

—十七日 日本橋・東美俱樂部

桑重清日本畫展 十二月十五日—十七

日 大阪・天賞堂畫廊

林倭衛、江田誠郎近作油繪展 十二月

十五日—十八日 神戸・畫廊

三艸社第四回繪畫展(日) 十二月十五

日—二十日 大阪・三越

鹿兒島美術聯盟綜合美術展 十二月十

五日—二十五日 鹿兒島・山形屋

有道佐一個展(洋) 十二月十六日—十

八日 大阪・大阪俱樂部

中村盛芳水彩畫展 十二月十六日—十

八日 數寄屋橋・中央畫廊

船木道忠陶器展 十二月十六日—二十

日 銀座・たくみ工藝店

日本美術社第百號記念日本畫展 十二

月十七日—十八日 名古屋美術俱樂部

國井應祥日本畫展 十二月十七日—十

九日 神戸・三越

名古屋新聞社主催第六回同情作品展

(日) 十二月十七日—二十一日 名古屋・

丸善

新靈會第二回小品展(日) 十二月十七

日—二十二日 神戸・大丸

鹿子木孟郎南京入城圖スケッチ展(洋)

十二月十七日—二十五日 銀座・松風陳

列所

池田朋昭第四回油繪展 十二月十八日

—二十二日 新宿・東陽畫廊

梶原緋佐子繪畫展(日) 十二月十八日

—二十二日 大阪・松坂屋

ムネ・サトミ個展 十二月十八日—二

十二日 大阪・松坂屋

泉々洞第一回工藝展 十二月十八日—

二十二日 日本橋・高島屋

芹澤銈介第二回工藝展 十二月十八日

—二十二日 大阪・阪急百貨店

日本電報通信社主催明治、大正、昭和

挿繪文化展 十二月十八日—二十二日

大阪・三越

湊實雄滿鮮風景油繪展 十二月十八日

—二十三日 大阪・天賞堂畫廊

多聞洞東西大家日本畫展 十二月十九

日—二十一日 日本橋・高島屋

上田清一洋畫展 十二月十九日—二十

四日 大阪・阪急百貨店

南薰造近作油繪展 十二月二十日—二

十四日 銀座・青樹社

風景、靜物等油繪十九點、水彩二點を

青樹社主催で陳列した。

明治、大正、昭和名家各派綜合油繪展

十二月二十日—三十日 名古屋・後藤版

畫店

能勢龜太郎畫展(洋) 十二月二十一

日—二十三日 銀座・菊屋畫廊

尚美堂日本畫展 十二月二十一日—二

十四日 大阪・そごう

經緯工藝第六回展 十二月二十一日—

美術展覽會（十二月）

二十四日 銀座・資生堂

上島龍個展（洋）十二月二十一日—二十

十五日 大阪・三角堂

坂本華光日本畫展 十二月二十三日

數寄屋橋・日動畫廊

大川武司個展（洋）十二月二十三日—

二十七日 銀座・三昧堂

現代諸大家竝物故作家洋畫小品展 十

二月二十三日—二十八日 大阪・關西畫

廊

眞垣武勝油繪個展 十二月二十四日—

二十六日 大阪・天賞堂畫廊

吉田直方蒐集佐渡と越後けてもの展

十二月二十五日—二十九日 日本橋・高

島屋

徳力富吉郎版畫富士三十六景展 十二

月二十五日—三十一日 銀座・菊屋畫廊

新生活美術第一回展示會 十二月二十

六日—三十日 銀座・資生堂

展覧會以外の作品

日本畫

梶宗樹筆「黃塵」今事變に應召した梶宗樹は徐州戰を回想した縦七尺横六尺の大作を執筆、昭和十四年十一月京都師團に獻納した。(十四年度補遺)

太田天洋筆海軍館依囑畫 太田天洋は海軍省海軍館の依頼により對幅「朝鮮役日鮮軍船の圖」を執筆、四月中旬納入した。寸法は各縦八尺、横五尺五寸、紺本彩色畫である。

堂本印象筆四天王寺再建五重寶塔壁畫 堂本印象は昭和十三年十一月、四天王寺五重塔の本尊壁畫其他の製作に着手したが、本年二月末その執筆を了へた。壁畫の名稱は左の通りである。

中心柱本尊壁畫(藥師佛、釋迦佛、阿彌陀佛、彌勒佛、以上四面縦十二尺横三尺楡板)、寶塔四隅長押上壁畫(藥師、釋迦、阿彌陀、彌勒淨土、各二面縦四尺横四尺楡板)、寶塔四隅長押下八部衆壁畫八面(縦四尺横五尺楡板)、四天主十二天壁畫(直徑二尺楡丸柱四本)。

小川翠村筆四天王寺舞樂殿襖繪「小川翠村は四天王寺舞樂殿を飾る杉戸二十枚の極彩色襖繪を完成、三月同寺に搬入した。(三月三日大朝による)

木村武山筆「弘法大師像」 木村武山は

金剛峯寺の依頼による弘法大師尊像を執筆、三月同寺に納入した。大きさは縦九尺五寸、横六尺である。(三月十日大朝による)

横山大觀筆「昇龍圖」 横山大觀の執筆による「昇龍圖」が東京朝日新聞社より汪精衛に四月贈呈された。圖は横三尺、縦二尺三寸八分、乾隆時代の竹紙に描いたものである。(四月三日東朝による)

竹内栖鳳筆「墨竹」 竹内栖鳳は京都の祇園會の鉾町の一たる鉾町の山鉾見送りに墨竹を揮毫、七月の祭禮に間に合ふように寄進した。地は綾錦、巾四尺、丈六尺である。

境田道德筆「咆ゆる黒潮」 境田道德は皇紀二千六百年を記念し、縦横各八尺、紺本極彩色の大作を八月一日海軍省に獻納した。

鐵道省献上畫帖 天皇陛下には本年六月樞原神宮に御參拜遊ばされたが、鐵道省では行幸を記念すべく行幸御道筋の十八景を撰び之が謄寫を川合玉堂、堂本印象、兒玉希聖その他五十七名の畫家に囑し、畫成つて上梓し、「關西行幸の御蹟」と題して十一月三日獻上した。尙原畫は鐵道博物館に保管されることとなつた。

橋本關雪筆建仁寺襖繪 橋本關雪は文部省宗教局の依頼により建仁寺の圓寶大

方丈の紙本襖繪を揮毫、十一月七、八の兩日その内見披露を行つた。全部で六十枚に及び、その中「生々流轉」と題するもの三十二枚、之は主として水墨により、其他は淡彩を施した「伯樂」八枚、「蕭條」六枚、彩色による「深秋」六枚、水墨の「寒山子」八枚等で、作者としても空前の大制作である。

横山大觀謹作獻畫 横山大觀は今春山海各十題の作畫を提供して國家に奉仕したが、年末に及び奉祝展出品畫「日出處日本」の大作を 天皇陛下に獻上した上に、同畫題の四尺幅の作品を 皇后陛下に、富士山及竹林煙雨の御茶室掛の二點を 皇太后陛下に獻上した。尙別に御靜養中の 秩父宮殿下にも勅題漁村曙の圖を獻上した。

洋畫

清水登之筆「嶽麓演習記念畫」 清水登之は昨秋の近衛師團の天覽演習の狀況を記念描寫した油繪を依頼により製作二月近歩二聯隊に納めた。

荒井陸男筆「江上艦隊」 荒井陸男は滿洲國政府より日本海軍に贈る油繪を執筆五月に完成した。大きさは七尺に十一尺で、滿洲國境を守備する黒龍江上の艦隊の圖である。

小林清榮(舊名茂)筆「乃木將軍旅順入城之圖」 小林清榮は昭和十二年一月同圖の制作に着手、本年五月に完成して陸軍省に獻納した。八尺に六尺の横額で

今後遊就館に保存される。

伊藤清永筆愛中講堂壁畫 伊藤清永は四ヶ年を費して母校愛知中學講堂の油繪壁畫を五月に完成した。同圖は講堂正面三十五坪大及び天井約五坪大の大作で、壇上壁の誕生釋迦及び諸佛像を中心に農業、文化、教育等を象徴する群像を配したものである。

清水登之筆比婆山諸圖 比婆山神蹟顯彰會は紀元二千六百年を奉祝して清水登之の執筆による比婆山の油繪を十月末秩父宮、久邇宮、梨本宮、竹田宮の各宮家に各一點づつ獻上した。

渡邊菊二筆白虎隊の圖 若松市よりムツツリニ首相に贈る渡邊菊二筆「白虎隊」の贈呈式が十一月二十六日イタリヤ大使館で行はれた。同圖は油繪八十號である。

鹿子木孟郎筆「皇軍堂々南京入城圖」 昭和十二年十二月十七日の歴史的南京入城式を記念描寫した同圖が十二月陸軍省に獻納された。大きさは額とも縦七尺四寸、横十七尺二寸で、今後遊就館に保管される。獻納者は京都の松風工業會社長松風嘉定である。

石川寅治筆「鎮江攻略圖」 石川寅治は昭和十二年十二月十二日の揚子江艦隊鎮江攻略の狀況を描いた油繪を十二月に完成した。縦五尺六寸、横六尺八寸で海軍省の委嘱によるもの。

彫刻

展覧會以外の作品 (十二月)

牡丹崩れ (竹田敏彦) 同 一五・三六

世紀の除 (北村伸一) 同 一五・九六

三國志 (吉川英治) 夕刊 一五・年中

講談堀 (一龍齋貞山) 同 一五・一六

部安兵衛 (矢島健三) 同 一五・一七

講談續 (大島伯鶴) 同 一五・一七

快男兒 (今村恒美) 同 一五・一七

講談世 (小金井盛洲) 同 一五・九六

直し公方 (香川芳彦) 同 一五・九六

國民新聞

鐵か肉か (山中峯太郎) 朝刊 一五・一六

街の神話 (南川潤) 同 一五・一六

一劍立吞 (城昌幸) 夕刊 一五・一六

颯風の門 (村上元三) 同 一五・一六

水戸黃門 (琴彈松男) 同 一五・年中

新愛知

朱唇帖 (小島政二郎) 朝刊 一五・一六

生きる強 (廣津和郎) 同 一五・一六

三人姉妹 (丹羽文雄) 同 一五・一六

再販水戸黃門 (中川雨之助) 夕刊 一五・一六

瑞穂太平 (白井喬二) 同 一五・一六

記大化篇 (太田三郎) 同 一五・一六

瑞穂太平 (白井喬二) 同 一五・一六

記奈良朝 (野田九浦) 同 一五・一六

中外商業新報

人生畫帖 (石川達三) 朝刊 一五・一六

伊東顯

星座 (井伏鱒二) 同 一五・三六

磯の人々 (武田麟太郎) 同 一五・三六

三國志 (吉川英治) 夕刊 一五・年中

講談忠臣藏 (桃川若燕) 同 一五・年中

福岡日日新聞

生きる強 (廣津和郎) 朝刊 一五・一六

朱唇帖 (小島政二郎) 同 一五・一六

相馬大作 (旭堂南陵) 夕刊 一五・一六

助中鹿之 (一龍齋貞丈) 同 一五・一六

幕末劍豪 (悟道軒圓玉) 同 一五・一六

傳瑞穂太平 (白井喬二) 同 一五・一六

記田九浦

報知新聞

京漢線突 (伊地知雄進) 朝刊 一五・一六

風の街 (武田麟太郎) 同 一五・一六

義士餘聞 (矢田挿雲) 同 一五・一六

彩る野 (片岡鐵兵) 同 一五・一六

風雲 (白井喬二) 同 一五・一六

忠臣藏 (矢田挿雲) 夕刊 一五・一六

隱密縁起 (野村胡堂) 同 一五・一六

都新聞

水の階段 (大佛次郎) 朝刊 一五・一六

宮本三郎

春扇 (神山伊之助) 同 一五・三六

道 (阿部知二) 朝刊 一五・三六

家庭の秘 (丹羽文雄) 同 一五・三六

濡れた鋪 (高田保) 同 一五・三六

花は偽ら (藤澤恒夫) 同 一五・三六

西郷隆盛 (林房雄) 夕刊 一五・三六

讀賣新聞

女は泣か (竹田敏彦) 朝刊 一五・三六

光に立つ (戸川真雄) 同 一五・三六

破魔弓傳 (土師清二) 夕刊 一五・三六

奇閣記 (福岡青嵐) 同 一五・三六

振袖御殿 (川口松太郎) 同 一五・三六

展覽會以外の作品 (十二月)

美術界彙報

一月

忠靈塔圖案懸賞當選決定

大日本忠靈顯彰會に於て豫て懸賞募集中の忠靈塔圖案は、一月六日軍部及び建築、工業、美術各方面の審査委員會に於て審査を行ひ、第一種（支那大陸に建設するもの）第二種（内地大都市に建設するもの）第三種（内地市町村に建設するもの）の三種につき各一名、二等二名、三等三名及び他に佳作三十一名合計四十九名の入賞を決定した。各一等當選者は、第一種 椋原正則、第二種 竹崎文二、第三種 星野昌一であつた。

朝日文化賞贈呈式舉行

昭和十四年度朝日文化賞は、同社内特設の委員會に於て審議の結果十七氏が推舉され、一月二十日受賞者諸氏を招待贈呈式及び記念講演會を舉行した。美術部門に於ては橋本關雪の「軍馬二題」小磯良平の「南京中華門戰鬥圖」が推舉された。

故岡田三郎助追想會

一月二十三日故岡田三郎助の追想茶話會が本郷繪畫研究所に於て催された。

岡田賞新設

故岡田三郎助の遺志に依り、一月二十七日同遺族は吾が洋風畫の獎勵の爲遺產の一部一萬圓を割いて岡田賞を設け、文展、二科、獨立美術、新制作派、一水會、春臺美術、光風會の各團體の出品作より選り、賞金百圓宛を贈ることとなつた。

長畫畫塾顧問畫獻納 川合玉堂の長

流畫塾に於ては一昨年五月、昨年七月に續き、玉堂をはじめ門生百四十餘名が陸海軍の傷痍軍人慰問の爲陸軍省へ百十三點、海軍省へ二十九點を夫々獻納した。

一月二十七日獻納に先立ち神田如水會館に於て内見を行つた。主なるものに玉堂の「溪林春淺」「山家春鶯」、希望の「水郵初夏」「吠々鳥」等があつた。

日伊文化連絡協議會第一回打合會開催 日伊文化協定に基き豫て準備中であつた同協議會第一回打合會を一月二十七日外務次官官舎に於て開催し、協定の精神に則つて學術、文學、美術、映畫、ラヂオ其他による文化交流の具體化に邁進することとなつた。

日本刺繡院創立

刺繡工藝の藝術探究と、基礎建設を目的として京都に日本刺繡院が創立された。

大光會設立

東光會の大坂支部として大光會が設立され、齋藤與里の指導のもとに洋畫の研究發表を行ふこととなつた。

越後工藝美術會結成

舊來の越佐工藝美術會を解消し、新に新潟縣出身の工藝美術家に依り越後工藝美術會が結成された。

造形美術學會創立

批評家横川毅一郎は美術文化の諸研究發表のため、造形美術學會を設立した。

二月

飛田周山、山村耕花渡支 日本畫家

飛田周山、山村耕花は二月五日彩管報國のため東京驛發南支那へ出發した。

工人社解散 北原千鹿を主宰者とす

工人社は二月十日解散することとなつた。

印象櫻原神宮獻納畫完成

堂本印象は奈良縣奉祝會の依頼に依り華國の聖地櫻原に因む「櫻原」なる作品を完成、二月十二日櫻原神宮に奉納した。

東洋美術國際研究會の設立

世界に於ける日本及東洋美術の研究を進め、美術上の國際聯絡及協力を圖り併せて日本文化の海外宣揚及國際親善に貢獻せんが爲文部、外務兩當局の後援のもとに東洋美術國際研究會が設立され、二月二十日華族會館に發會式が催された。差し當つて美術研究所に同會事務所が置かれたが、その豫定事業は一、講演會及展覽會の開催並に連續講義の開設、二、外國人の研究及見學指導、三、著述、編纂、翻譯、出版並に定期刊行物の發行、四、海外研究機關との聯絡及協力、五、海外に對する出版物の頒布、寄贈及交換、六、其他適當と認められたる事業等である。尙その役員は（會長）侯爵細川護立、（理事）長）伯爵樺山愛輔、（常務理事）兒島喜久雄、男爵團伊能、矢代幸雄、柳宗悅（以下略）である。

駐日伊太利亞大使ジャヤチント・アウリツチ歸國

昭和八年赴任以來八年の間日伊兩國の文化親善に貢獻するところ多大であり、又日本美術の愛好家として知られたジャヤチント・アウリツチ駐日伊太利亞大使は解任歸國することとなり、日伊學會主催にて二月二十三日華族會館

に於て送別會が催された。

「伊太利亞海外發展展覽會」出陳資料展 示 ナポリ市開催「伊太利亞海外發展覽會」出陳の爲日伊學會に於て蒐集せる近世初期より現代に至る日伊文化關係資料の寫眞を二月二十三日華族會館に於て展示した。

池上秀畝、八木岡春山萬國博覽會國際美術館に出品入賞した池上秀畝、八木岡春山への賞金、賞牌授與式は二月二十三日帝國ホテルに於て行はれた。

池上秀畝渡支

南支軍指揮官の招聘に依り池上秀畝は二月二十四日出發廣東方面に赴いた。

庚辰會結成

美術工藝家香取正彦、宮之原謙、松田權六等各部門の作家は二月二十九日庚辰會を結成した。

早苗會更踏社結成

早苗會々員中の中野草雲、井上流光、高田文也、幸田春耕等により更踏社が結成された。

大日美術院第四回展中止

大日美術院は東日、大毎主催奉祝展に會場を譲りその第四回展を中止した。

三月

橋本關雪渡支

兼に「兩面愛染明王」「待機」「柳蔭洗馬」の下繪を終つた橋本關雪はこれ等を完成する爲三月八日長崎出帆渡支した。

野田九浦「聖地繪卷」献上

野田九浦は昭和十年十月秩父宮同妃兩殿下に扈從して日向の國一帯に亘る皇祖神武天皇の御聖跡の地を巡拜した折の寫生を完成すべく五年間努力してゐるが、此の度完

成、三月十五日秩父宮殿下へ献上の光榮に浴した。繪は天、地、人、全三卷三十一圖より成り、各巻縦一尺四寸、長さ一丈五尺である。

伯林日本手工藝品展 日本の手工藝品の紹介を目的とする日本手工藝品展覧會は伯林ウンター・デン・リンデン街の「獨逸手工藝の家」で三月十五日から開かれた。展覽會は日本大使館の後援の下に開催された。開會式には獨逸側からルスト文相をはじめ要人、日本側からは來栖大使以下出席した。

丸山晚霞南洋へ旅行 丸山晚霞は南洋興發會社の依頼を受け、南洋の風物を主題とする猷納畫の下畫寫生の爲、約一箇月に亘り南洋群島を視察、三月十九日歸國した。

シドニー日本品展國內展示會 濠洲シドニーに於て、豫て日本純國産品の展示會が計畫されてゐたが、貿易組合中央會、日濠協會、國際文化振興會の協力により蒐集された資料が三月二十七日現地發送し先立ち高島屋本店に於て展示された。これは文化資料と一般國産品に分けられたが、前者には日本の風物を示す版畫、光筆畫の現代畫家の作品、古代風俗を示す楠木清方の文展出品作「春の愁ひ」、江戸時代小袖等があり、後者はその主旨として美術的工藝ではなく、日本人が普通に使用してゐる布帛、陶磁器、硝子工藝、金屬工藝、七寶、木工品等であつた。

山村耕花、大智勝觀南支より歸朝 南支派遣軍の委囑を受け、廣東を中心に南支戰跡を視察せる山村耕花、大智勝觀

は三月歸朝し、畏きあたりへの献上畫を謹寫した。

蕁和會結成 染織家磯部陽等に依り三月蕁利會が結成された。

鹿鳴館取毀さる 明治時代の由緒ある建築物として知られた鹿鳴館は、廣大な敷地の有用な使用を目的として取毀さるに至つた。

四月

紐育萬國博出品日本畫展示 五月再開さるる紐育萬國博出品の日本畫が、商工省及び紐育、桑港萬國博覽會主催で四月二日より四日迄日本橋三越に於て内示された。尙同十日より十二日迄女子高等師範學校講堂に於て紐育、桑港兩萬國博覽會に出陳さるべき壁面寫眞が内示された。(本欄二十九頁参照)

横山大觀陸海軍へ獻金 横山大觀は彩管報國の熱情からさきに「海」及び「山」を主題とする二十點の連作を完成したが、四月四日其の賣上金五十萬圓を陸海軍省へ夫々飛行機整備費として折半して獻納した。(本欄二十九頁参照)

小杉放庵等渡支 小杉放庵、石井鶴三、田中青坪は支那華北鐵道株式會社の招聘により四月五日前後して出發した。一箇月の間上海、揚州、南京、蘇州、杭州等を旅行して寫生した。

三都工美會結成 工藝の進歩向上を圖り、東西工藝家の親睦をはかる爲、四月十二日東京、京都、大阪を中心とする工藝家五十餘名を以て三都工美會が組織された。

青龍社府美術館不使用聲明 川端龍

子の主宰する青龍社は、さきに在野團體として獨自の展覽會を開催する主旨より九月より開始さるる紀元二千六百年奉祝美術展覽會には不参加を聲明したが、これに關する會期問題より爾今上野公園内東京府美術館を使用せざることを四月十日聲明した。

野口謙次郎渡支 中支派遣軍の招聘に依り約二箇月に亘り長江一帶の風景描寫をなす爲野口謙次郎は、四月十六日出發し、六月十八日歸還した。

正木直彦追善會 十三松堂故正木直彦の追善會が、藝苑の友五十四名の發起により、四月十九日の命日にあたる四月十八日小石川區音羽護國寺の月光殿に於て催された。

陸軍より十二畫家支那戰線へ派遣 陸軍省に於ては今次聖戰を如實に傳へる爲、日本畫家より川端龍子、川崎小虎、吉村忠夫、洋畫家より中村研一、田村孝之介、小磯良平、田中佐一郎、清水良雄、裕伊之助、伊原宇三郎、橋本八百二、宮本三郎を中、南、北支へ軍囑託として派遣することとなり、四月三十日これ等從軍作家の打合せを兼ね壯行會を永田町星ヶ岡茶寮で行つた。尙これ等の作品は昭和十六年三月十日の陸軍記念日を中心に開催さるる戰爭美術展覽會へ出陳の豫定である。

堅山南風福日文化賞を受く 福岡日々新聞社は紀元二千六百年を記念し新に文化賞を創設し、その第一回として西日本出身の學者、發明家、藝術家から五名が選ばれたが、畫家としては堅山南風の第二十六回院展に出品した「千里壯心」

に授賞された。

現代工藝作家協會創立 工藝美術界に於て新人の發見、新素材の研究獎勵、我が國固有技法の保存等を目的とし、川崎克を會長、侯爵細川護立、子爵岡部長景を顧問として四月現代工藝作家協會が結成され、十一月二十七日より十二月七日迄公募展を開催した。

五月

小室翠雲心印畫塾創立 先年帝國美術院改組後その私塾環堵塾を解散した小室翠雲は、五月五日心印畫塾を改めて創設し、同日その自邸に於て門下生參集發會式を行つた。

正統木彫家協會創立 日本木彫會を脱退した澤田晴廣、三木宗策等二十二名は次代の木彫藝術の確立を期し、五月七日正統木彫家協會を結成、公募展を開催することとなつた。

日本産業美術協會創立 産業美術の向上發展をはかる爲、大阪毎日新聞社により日本産業美術協會が成立し、その發會式が五月十一日大阪本町染工聯合會館で舉行された。

紐育、桑港兩萬博再開 再開紐育萬國博は五月十一日開會され、歐洲の動亂に依り歐洲諸國の出品がなかつたが、吾が國は特設日本館並に日本都を開設した。又桑港博も紐育に對應して六月二十三日より開會された。

川端龍子渡支 陸軍の十二作家現地派遣の第一陣として川端龍子は北支方面、ソ滿國境方面へ畫材を求めて五月二十八日出發した。尙龍子は六月二十六日

歸京した。

水彩聯盟創立　水彩畫の發展の爲、日本水彩畫會の荒谷直之介、春日部たすく等八名により水彩聯盟が創立された。

六月

櫻谷文庫設立　故木島櫻谷の遺作及び蒐集品を陳列すべき櫻谷文庫は二月十五日付を以て財團法人の認可を得たが、六月二日京都市上京區等持院東町の遺宅に於てその設立披露を催し内覽に供した。

小早川秋聲渡支　小早川秋聲は陸軍省囑託として北中支及び外蒙へ從軍することとなり六月十五日出發した。

滿洲國皇帝に大觀作「富士靈峰」献上　東京府及び東京市は滿洲國皇帝陛下の御來訪を記念し、美術品の献上を決定、東京府は横山大觀に、東京市は朝倉文夫に製作を依頼したが、大觀の「富士靈峰」が先づ完成、六月二十七日献上した。

又洋畫家川島理一郎は蘭花圖を描き個人として滿洲國皇帝陛下へ献上した。

川合玉堂御前揮毫　再度御來訪の滿洲國皇帝陛下は六月二十九日皇太后陛下の御招きに依り大宮御所に於て御團扇の一日を過ぎさせられたが、此の日川合玉堂は御前に召され「田植の圖」「岩に吠々鳥」を揮毫、御旅情を御慰め奉つた。

亞國海軍帝國海軍へ獻畫　アルゼンチン海軍は紀元二千六百年を奉祝して帝國海軍に油繪「強き太陽の日」(キンケーラ・マルティン作)を贈つた。

清流會結成　楠木清方門の門井掬水、榎本千花俊、寺島紫明、櫻井霞洞に

依り清流會が結成され、第一回展を開催した。

華畝會組織さる　關西に於ける文展系洋風作家により華畝會が結成され第一回展を開催した。

七月

京都美術館常置陳列開始　大禮記念京都美術館は紀元二千六百年を期し、國民文化昂揚のため同館の一部を開放し、七月一日より現代美術品の常設陳列を開始した。

光風會十畫家渡支　光風會の朝井閑右衛門、南政善等十名は南京、北京、青島、太原、上海等大陸各地に旅行製作することとなり、七月二日渡支した。

藤田嗣治等佛蘭西より歸朝　滯佛中の藤田嗣治、高野三三男等は戰禍の歐洲を脱し、七月七日神戸入港の伏見丸で歸朝した。

柴田是真五十年忌　故帝室技藝員柴田是真の五十年忌に際し、その末男梅澤隆眞に依り七月十三日追善會と遺作展觀が築地八百善に於て催され、日本畫及び工藝遺作品が展觀された。

自由美術家協會改稱　昭和十二年創立の自由美術家協會は、美術創作家協會と改稱し、従來の主旨を更に強調貫徹することとなつた。

八月

京都染織繡藝術協會結成　京都在住染織刺繡藝術を専門とする作家に依り、

日本民族精神を根幹とし、健康なる新體制の理念に即して京都染織繡藝術協會が

八月五日結成された。時宜に應じ展覽會を開催する。

中村研一歸國　豫て陸軍の委囑を受け聖戰畫製作の爲北支旅行中の中村研一は八月九日下關著歸國した。

京都工藝家聯盟結成　京都美術工藝協會では各部門の團體を解消して、陶器、金工、染織、漆器、木竹等美術工藝界の作家六十五名を以て一九とする京都美術工藝家聯盟を設立、八月十三日其の發會式を舉行した。

洋風畫家朝井閑右衛門等歸朝　豫て渡支南京、北京、張家口、大同等各地に畫材を求めたる光風會の朝井閑右衛門、鈴木榮次郎、山上猛彦、井手坊也、黒田頼綱、石川滋彦は八月十五日横濱入港の淺間丸で歸朝した。

室内工藝家ベリアン來朝　前に獨逸より招聘されたシュレーマンの歸國に代つて、商工省貿易局の招聘に依り佛工藝家シャルロット・ベリアンが八月二十二日來朝した。ベリアンはコルビュジェの協働者として知られた女流室内設計家である。

安田半圓渡支　日本畫家安田半圓は海軍從軍畫家として長江沿岸警備の海軍將兵の慰問を行ひ、携行の十數幅の作品により個展を開催する爲八月二十三日東京を出發した。

荻須高德等佛蘭西より歸朝　滯佛中の荻須高德、猪熊弦一郎、岡本太郎等は戰禍を避けて八月二十七日横濱入港の白山丸で歸朝した。

川崎小虎、吉村忠夫從軍　陸軍省より日支支變記録畫の製作を依頼された十

二畫家の中、川崎小虎、吉村忠夫の壯行會が、その渡支を前にして八月二十八日日比谷三信ビルに於て催された。

美術品賣上金に對する國債購入通牒　七・七禁令その他價格統制令の埒外にある美術品に對する購賣慾の急騰により、取引高の増加傾向あるにかんがみ、東京府精動部に於ては國債消化のため美術俱樂部に於ける賣上金額の一刻を以て強制的に國債又は貯蓄債券を購入せしめることとし、八月二十九日同俱樂部に通牒を發した。

新日本美術聯盟創立　鹽利彦を理事長、武藤夜舟、中井宗太郎を顧問とし、新體制の文化的一翼たらんとする主旨により新日本美術聯盟が創立され、八月三十一日軍人會館に於て發會式を舉げた。

福岡縣美術協會　福岡縣出身並に縣在住の美術家等を以て福岡縣美術協會が組織された。毎年福岡市に於て日本畫、洋畫、彫塑、工藝に亘る展覽會を開催する豫定である。

美術工藝品に七・七禁令免除　藝に發せられた奢侈品に對する七・七禁令に依り文展第三部第四部の彫塑、美術工藝は直接影響を受け、作家も苦慮してゐたが、今秋開かれる紀元二千六百年奉祝綜合展出品もあり商工省物價局と文部省に於て種々協議の結果、美術工藝品に對しては今後七・七禁令を免除する事に決し、金、銀、銅、錫等の材料の公平な配給を圖ると共に販賣も作家の自肅を重んじて許可さるる事となつた。

九月

藤田嗣治渡滿 陸軍省囑託としてノモンハンノ戦闘を主題とする作品を描くこととなつた藤田嗣治は、九月十一日東京驛出發新京に向つた。

美術研究所長矢代幸雄渡支 美術研究所長矢代幸雄は、同研究所員正木篤三助手豊岡益人と共に支那に於ける文化美術及工藝視察の爲、九月十二日出發し、北、中、南支を歴遊調査を遂げ、十一月十三日歸國した。

ハンガリーに於ける日本兒童繪畫展出 品畫内示 ハンガリー文部省の依頼に依り國際文化振興會に於ては同國首府ブタペスト初め各地で催される日本小學教育展覽會に出陳する小學生の作品の蒐集を終り、九月十九日同會講堂に於て展示會を開いた。

宮本三郎渡支 陸軍省囑託として北支方面に従軍することとなつた洋畫家宮本三郎は、九月十五日發渡支した。

日伯文化條約の締結 ブラジル國リオ・デ・ジャネイロに於て九月二十三日日伯文化條約が締結された。その内容は曩に締結された日伊文化協定とは同様である。

福陽美術會陸軍恤兵部に献畫 福島縣出身者で組織してゐる福陽美術會では九月二十四日同會代表として勝田蕉琴、角田盤谷が會員の作品二十二點を陸軍省恤兵部へ献納した。

新東亞産業美術聯盟結成 商業美術家協會片柳忠勇を中心とし圖案家協會、廣告聯盟、廣告クラブ等を聯合し、九月二十四日新東亞産業美術家聯盟が結成された。

京都彫塑家聯盟設立 京都府在住の彫塑家に依り自肅向上發展を圖る目的を以て京都彫塑家聯盟が結成された。

世紀美術創作協會結成 西山翠嶂門の京都在住日本畫家今尾景春等七名に依り、新しき世界觀に立脚し日本藝術の世界的使命を目標とし、九月世紀美術創作協會が結成された。

日本人形藝術家聯盟結成 日本人形藝術家聯盟は、傳統的的人形美術の保存並に建設を旨とし、且つ相互間の親和を計り以て新體制に即する文化の爲に貢獻するを目的として鹿兒島壽藏等に依り改組結成された。

日本バステル作家協會創立 バステル畫の研究及普及を圖り、我國文化の向上發展に寄與する爲に創立された。

十月

京都市立繪畫專門學校及美術工藝學校創立記念式 京都市立繪畫專門學校及美術工藝學校に於ては其の創立六十年を記念し、十月一日其の記念式を挙げた。

川端龍子新京美術院々長就任 滿洲國新京特別市は十月一日附を以て新京美術院の開設を決定した。院長には川端龍子が就任した。同院には院長一名、主事一名、研究員(講師)若干名等を置き、其の第一期計畫として將來滿洲國美術界の中堅たるべき研究生の指導養成事業に重點を置くこととなり、東京に同院東京分室を新營し、選拔されたる第一年度研究生十四名を次年度より留學せしむることとなつた。

幸野樸嶺胸像除幕式 京都市立繪畫專門學校及美術工藝學校に於ては、十月二日その創立建議者の一人たる幸野樸嶺の胸像除幕式を繪專校校庭に於て行つた

これはその門弟たる竹内栖鳳、川合玉堂清水六兵衛其他門弟に依り組織された凌雪會及び同校關係者により計畫され、同校出身の彫刻家建昌大夢に依つて製作されたものである。

今尾景年十七回忌 元帝室技藝員故今尾景年の十七回忌が十月五日京都東山の南禪寺法堂に於て行はれた。

高木背水謹寫 明治天皇御尊像展觀 洋風畫家高木背水は 明治天皇御尊像を謹寫し別格官幣社佐嘉神社へ奉納することとなつたが、これに先立ち皇紀二千六百年奉祝の意を以て十月八日より同十七日まで上野公園内櫻亭に於て展觀した。

日本挿繪畫家協會結成 従来の挿繪俱樂部を解消し、挿繪藝術及び挿繪文化に關するあらゆる部門を包含して新しく日本挿繪畫家協會が生れ、その發會式が十月八日東京會館に於て催された。(名譽會長) 鍋木清方、(會長) 石井鶴三、(顧問) 小杉放庵、菊池寛外十二名。

藤田嗣治滿洲より歸る 昭和十四年ノモンハンノ草原に展開された近代科學戰を描く爲陸軍省囑託として渡滿中であつた藤田嗣治は十月十三日歸國した。

松岡映丘筆「明治神宮舞樂之圖」奉納 故松岡映丘筆「明治神宮舞樂之圖」の所有者東京日々新聞社は、紀元二千六百年記念及明治神宮鎮座二十周年記念として同圖を明治神宮へ奉納することとなり、十月二十四日奉納奉告式を執行した。

日本商業美術協會解散 大正十五年創立後商業美術確立の運動に努め來つた日本商業美術協會は國內體制の變化に處する爲、再出發の前提として十月二十四日總會の決議に依り解散した。

工藝美術作家協會創立 工藝美術家相互の連絡協調に依り工藝美術の振興を圖り、以て國民文化を昂揚し、併せて輸出工藝の發展に資する爲、工藝美術作家協會が創立され、十月二十五日丸の内永樂クラブに於て發會式を舉行した。

「明治神宮鎮座繪詞」完成奉納 明治神宮鎮座二十年祭は十一月一日から四日迄嚴かに執行されたが、これに先立ち十月三十一日御本殿の奥深く「明治神宮鎮座繪詞」が奉納された。此の繪詞は鎮座祭奉仕の光榮に浴した一條宮司、鈴木權宮司の發願にかかり、磯田長秋が繪を擔當、去る十一月六月謹寫を完了、その詞書が結了、五卷に收められたものである。

黒田子爵記念美術獎勵資金買上 同資金委員會では本年度の買上として奉祝展出品中より長原坦作「牡丹」を選定買上げ、大禮記念京都美術館へ寄贈した。

十一月

跡見玉枝筆「御駒繫ぎ櫻」奉納 日本畫家跡見玉枝は紀元二千六百年奉祝と明治神宮鎮座二十年祭奉祝との心をこめ、明治天皇に御縁りある東京府下南多摩郡多摩村の「向の岡」の櫻の古木を縦二尺五寸、横三尺の畫面に謹寫し、十月二十七日明治神宮へ奉納した。

新版畫會設立 新しき版畫運動を起

すため旭泰宏等に依り新版畫會が十一月三日結成され展覽會を開催することとなつた。

直土會更新 建昌大夢門下の同會は「時代の核心を把握し健全なる彫刻藝術の發展を期し」てその更新を聲明し、十一月五日發會式を舉げた。猶ほ公募展を開催することとなつた。

美術團體聯盟創立 美術團體相互間の連絡を圖る目的を以て一水會、二科會、東光會、獨立美術協會、旺玄社、太平洋畫會、光風會、春陽會、新制作派協會を役員團體として美術團體聯盟が創立され、十一月七日初總會を舉行した。後國畫會を除き、白日會、日本版畫協會、日本水彩畫會、第一美術協會、春臺美術會、美術創作家協會、美術文化協會が加盟した。

川合玉堂文化勳章を授けらる 畏き邊りでは紀元二千六百年の式典に際し、佳年の御慶びを廣く一般にもわかせ給ふ思召から十一月十日の式典當日、文化風教其他社會事業、殖産興業等各方面的の功勞者二百五十七名に叙位、叙勳、文化勳章授賜、褒賞下賜の御沙汰あらせられた。其中文化勳章は日本畫壇の長老帝室技藝員、帝國藝術院會員川合玉堂をはじめ、科學、文學方面の學者四氏に授けられた。その授與式は同日賞勳局總裁室で行はれた。

第三部會改稱 文展改組に際し結成された第三部會は十一月十日皇紀二千六百年祝典に際し「民族彫塑」の創造と建設を旨として國風彫塑會と改稱、此の月公募に依る第一回展を開催した。

上野會創立 東京市内に於て發行する日刊新聞社美術擔當記者を會員とし、相互の親睦と指導的立場に於て美術界の事象を検討する目的を以て十一月十日「上野會」が結成された。

照宮内親王殿下帝室博物館及び奉祝展 台臨 照宮内親王殿下には、十一月十六日女子學習院の御學友九十名と共に上野公園帝室博物館へ成らせられ、特別陳列中の正倉院御物を御覽遊ばされ、次いで東京府美術館に開催中の後期奉祝美術展に成らせられた。

日東美術院創立 美術に於ける肇國精神の發揚、日本畫の海外進出等を目的として關部香峰等により創立された日東美術院は、十一月二十一日上野精養軒に發會式を行つた。

三井洋畫コレクション開設 男爵三井高精はその蒐集せる日本現代洋風畫、及び近代西洋畫を展觀する爲、麹町區平河町に三井洋畫コレクションを開設、十一月二十一日開館式を催した。年數回陳列替を行ひ、毎週一回定期的に公開する筈である。

竹内栖鳳喜壽記念の献金 竹内栖鳳は十一月二十一日その喜壽の齡を記念し、陸海軍兩省へ國防費として夫々金一萬圓を獻納した。

三笠宮、賀陽宮兩殿下奉祝展へ御成り 十一月二十三日三笠宮、賀陽宮兩殿下には後期奉祝展へ御成り遊ばされた。

東京府工藝協會創立 東京府では美術的工藝に生きる管下關係者を糾合してその大同團結をはかり、統制經濟下に於ける法令の適法と工藝技術の研鑽につと

め、東京工藝品の卓越性を宣揚するとともに輸出振興に貢獻する爲東京府工藝協會を創立し、十一月二十五日創立總會を開いた。

川合玉堂午餐を賜ふ 畏き邊りでは紀元二千六百年祝典に際し文化勳章を賜つた川合玉堂並びに佐々木隆興兩氏(西田、高木氏缺席)を正午霞ヶ關離宮に召させられ、我が國文化興隆の功勞者として午餐を賜はつた。

皇后、皇太后兩陛下正倉院御物台覽 皇后、皇太后兩陛下には十一月二十七日上野公園帝室博物館に行啓、同館に特別陳列された正倉院御物を御覽あらせられた。

高村豐周渡米 高村豐周は商工省囑託海外工藝調査員として、北、中、南米各地に於ける工藝調査並に民族視察の爲、横濱出帆靖國丸にて渡米した。

海軍恤兵繪葉書完成 海軍では紀元二千六百年記念の一として恤兵繪葉書を作成、在支海軍部隊をはじめ各地海軍病院等に配布した。第一輯は竹内栖鳳「海」、横山大觀「黒潮」、川合玉堂「山村の春」、第二輯は石井柏亭の「軍艦出雲」、吉田博「海軍航空隊の爆撃行」、古城江親の「海南島警備の陸戰隊」である。

十二月

小村雪岱追悼會 十一月十六日急逝した挿繪畫家小村雪岱の追悼會が十二月三日明治生命マールに於て行はれた。**美術問題研究会生る** 新體制に呼應し、尾川多計、荒城季夫、柳亮、今泉篤男、富永愨一、田中一松、大口理夫、水澤澄夫、相良徳三、森口多里、土方定一等を發起人とし「美術問題研究会」が生れ、十二月六日丸の内エーワンに發會式を舉げた。

日本エツチンク作家協會結成 エツチンクの研究、普及を目的とし、田邊至を會長とし西田武雄等に依り十二月十日結成された。

國畫會美術團體聯盟不参加 國畫會は美術團體聯盟に十二月十四日不参加を次の如く聲明した。

「美術團體聯盟は團體を單位とするが故に無所屬作家を加ふに便なく、全畫壇を包含するものとならず、情實多き既成團體を強化し反つて其の舊弊を助長する恐れあり、時勢の推移に従ふ必要ある場合は個人を單位とし組合を組織するを妥當とす」。

創元會創立 美術本來の精神に徹し、民族性の特質と時代の認識を強調し、我國文化の向上發展に寄與せんが爲、洋風畫の無所屬作家阿以田治修、大久保作次郎、安宅安五郎等に依て創元會が結成され、十二月十七日發會式を舉げた。

和氣清雲公銅像除幕式 紀元二千六百年奉祝の事業として、大日本護王會が厚生省前濠端に建設した佐藤清藏作和氣清齋公の銅像除幕式が十二月十八日舉行された。寄贈者石川博資の令息令嬢の手

で除幕され、續いて建設委員長長林銑十郎大將の式辭、松平宮相祝辭、首相、文相、内相の祝辭代讀があり、盛大に行はれた。(本欄八十二頁參照)

日本出版文化協會創立總會開催 社団法人日本出版文化協會では十二月十九日情報局に於て創立總會を開き、伊藤情報局總裁及び各省關係官をはじめ官民代表五十名出席、會長に鷹司信輔公を推し専務理事一名、常務理事二名、理事六名の役員を決定した。

坂井犀水追悼會 國民美術協會は秋季總會を兼ね十二月十九日同會評議員にして理事たりし坂井犀水の追悼會を開催した。

横山大觀猷畫 横山大觀は奉祝展覽會出品畫「日出處日本」を 天皇陛下に献上、更に同畫題の四尺幅の作品を 皇后陛下に、「富士山」及び「竹林煙雨」の兩圖を皇太后陛下に献上し、それ／＼皇室に對し奉祝の誠を捧げた。又秩父宮殿下にも明春の勅題「漁村曙」の圖を献上した。

邦畫一如會結成 洋風畫家藤田嗣治、石井柏亭、小杉放庵、津田青楓、中川一政等は今回新團體「邦畫一如會」を結成、新たに日本畫の研究發表を行ふこととなつた。

海軍從軍美術家俱樂部結成 今事變に際し海軍に從軍せし石井柏亭、石川寅治、藤田嗣治、中村研一等約六十名の畫家に依り「海軍從軍美術家俱樂部」なる親睦團體が結成された。

日本陶磁彫刻作家協會創立 舊日本陶彫協會を更新し、陶磁彫刻作家の組織的活動に依つて國家の文化的使命に協力

する爲、沼田一雅を中心に十二名の組織委員により「日本陶磁彫刻作家協會」が結成された。

大稻會結成 故森村宜稻門下の服部有恆等により「大稻會」が結成され、大和繪の研究を行ふこととなつた。

國畫工藝協會組織さる 國畫會の一分科會(工藝部)として「國畫工藝協會」が組織された。

七洋美術會創立 海洋美術の研究と其普及の爲文部省練習船に便乗遠洋航海をした畫家により「七洋美術會」が結成された。

「物故作家及美術関係者」 ページ (90～93 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the Articles of the Deceased (pp.90-93)

Cut for protection of the personal information

美術行政

美術振興調査會 豫て文部省に於ては、健全なる美術の發達を促進し、國家的見地より美術行政機構の整備統一、美術の振興、美術教育の刷新等の根本方針確立の爲美術及美教行政に關する識者を集め、これを諮問機關として重要事項を調査審議せしむる美術振興調査會を設置計畫中であつたが、四月十一日勅令第二百五十九號を以て、その官制を公布し、活動を開始した。その官制及び調査會の經過、答申等は次の通りである。

美術振興調査會官制

- 第一條 美術振興調査會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ美術振興ノ施設等ニ關スル重要事項ヲ調査審議ス
- 第二條 美術振興調査會ハ會長一人及委員二十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得
- 第三條 會長、委員及臨時委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ
- 第四條 會長ハ會務ヲ總理ス
會長事故アルトキハ文部大臣ノ指名スル委員其ノ職務ヲ代理ス
- 第五條 美術振興調査會ニ幹事ヲ置ク文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ
- 第六條 美術振興調査會ニ書記ヲ置ク文部省專門學務局長

部大臣之ヲ命ズ

書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

美術振興調査會職員

- | | | | |
|----|-----------|---------|-------|
| 會長 | 細川護立 | 文部次官 | 赤間信義 |
| 委員 | 侯爵 岡部長景 | 子爵 杉榮三郎 | 芝田徹心 |
| | 東京美術學校長 | 芝田徹心 | 植田壽藏 |
| | 京都帝國大學教授 | 植田壽藏 | 大西克禮 |
| | 東京帝國大學教授 | 大西克禮 | 川崎克 |
| | 衆議院議員 | 川崎克 | 松尾長造 |
| | 文部省宗教局長 | 松尾長造 | 田中豐藏 |
| | 東京帝國大學教授 | 田中豐藏 | 藤懸靜也 |
| | 東京帝國大學助教授 | 藤懸靜也 | 兒島喜久雄 |
| | 帝國博物館總長 | 兒島喜久雄 | 渡部信 |
| | 衆議院議員 | 渡部信 | 大口喜六 |
| | 帝國藝術院長 | 大口喜六 | 清水澄 |
| | 美術研究所長 | 清水澄 | 矢代幸雄 |
| | 文部次官 | 矢代幸雄 | 菊池豐三郎 |
| | 東京美術學校長 | 菊池豐三郎 | 田源一 |
| | 文部省宗教局長 | 田源一 | 阿原謙藏 |
| | | 阿原謙藏 | |

文部省專門學務局長 永井浩 (四月十六日任命)
 文部書記官 本田弘人
 文部書記官 青戸精一 (八月五日任命)

斯く官制制定と時を同じくして會長以下委員を任命し、四月十七日文部大臣官邸に於て第一回總會を開催した。松浦文部大臣はその挨拶に於て「凡そ美術が文化の精華であり、國民の風尚と生活とに緊密なる關係を有しますことは今更上上げるまでもありませんが、今や紀元二千六百年の記念すべき年に當り、東亞新秩序建設の大業に伴ひ、我が國文運の隆昌を期するは正に現下の要務と存する次第であります。而して我が國美術の發達は、一面に於て廣く外國の長を採り、豐富なる發展を圖るべきは固よりありますが、他面に於て能く独自の精神と方法を維持發展せしめ、我が國獨特の美術を進展せしむることに努むべきであります。茲に新文化建設の時代的要求に即應して我が國美術の進むべき大切な道の存することを痛感致すのであります。然るに從來、我が國の美術に關する政府の施設は甚だ不十分でありまして、動もすれば相互の連絡を缺く憾みがあつたのであります。文部省に於ては此に稽へまして、從來の美術行政に新に檢討を加へ、大局の見地から美術振興上適切なる具體的方策を確立致す爲に、今回美術振興調査會を設立致し各位を煩はして夫々美術振興に關する重要事項を調査審議し

て頂くことに致したのであります。何か各位に於かれましては如上の趣旨を諒とせられ、敢て問題を特定せず、或は美術獎勵の施設方針なり、展覽會、美術團體の諸問題を始め、美術館の問題、美術に關する國際的諸問題、其他美術上諸般の問題に就きまして御考のあるところを十分に披瀝せられ、我が國美術振興の上に御盡力あらむことを切望して已まざる次第であります」と、本會設置の理由と趣旨を述べた。而して、此の日各委員より提出された提案要項は「一、美術行政ニ關スル文部省ノ機構改革」「一、充分ナル豫算ノ必要」「一、美術行政ニ關スル諸外國ノ制度調査」「一、美術保存問題ニ於ケル民間トノ協力」「一、美術教育ノ問題」「一、現代美術館設立ノ要望」であつた。

五月三十一日同會は文部大臣官邸に第二回總會を開催、懇談的に協議、各委員より意見の開陳があつた。而して此の日會長より澤田、川崎、藤懸、兒島、永井矢代の各委員を小委員に依頼し、小委員會に於て諸種の問題を討議せしむることとなつた。

小委員會は六月十四日以降八月末日迄七回の會合を開催し、前記諸種の問題及び七・七禁令に對する工藝美術保護に就ての對策を協議、此の間七月十五日第三回總會を開催して小委員會に於ける審議の結果を中間的に報告した。

然るに十月十九日の閣議に於て、政府

の各種委員会の整理が決定するに際し、本會も亦一應廢止することとなつた。

十一月二十八日同會は第四回總會を文部大臣官邸に於て開いた。橋田文部大臣はその廢止事情及び今後の方針に就て「去る十月十九日の閣議により、この美術振興調査會を一應廢止といふ事になりましたが、これは甚だ遺憾なことで、それ故にこの會の不要を云ふものがあるかも知れないが決して、このまゝにするわけではなく、將來に考慮するものあるは云ふまでもありませぬ。より強力なものを設置して、美術振興を計りたい考へをもつもので、近いうちに案をつくり、皆様の御協力を仰ぎたいと思つて居ることを御承知願ひたい」と述べた。これに對し會長及び諸委員より希望の開陳あり更に「美術振興上適切ナル具體的方策」なる諮問に對し、次の如き答申案を附議決定した。

答 申

東亞新秩序建設ノ時代的要求ニ即應シ大イニ我民族精神ヲ發揚スルハ正ニ現下ノ要務ナリ而シテ之ガ爲ニハ民族精神ノ結晶タリ國民文化ノ精華タル美術ノ國家的使命ニ鑑ミ之ヲ刷新振興スルト共ニ日本美術ノ世界的宣揚ヲ期シテニ東亞諸國ノ美術提携ヲ圖リ善隣友好東亞共榮ノ一翼ヲラシムルヲ要ス如上ノ趣旨ニ基キ左記各項ノ急速ナル實施ヲ要望ス

一、美術行政ノ統合

美術行政

(1) 文部省ニ美術ニ關スル統一的部局

(例ヘバ美術局)ヲ設置シ美術ノ保存、獎勵、美術教育、美術ニ關スル調査研究等ヲ一元的ニ統合管理セシムルコト

(2) 美術ニ關スル調査研究機關ヲ整備擴充スルコト

二、美術教育ノ刷新

(1) 我國固有ノ美術ヲ通ジ國民精神ヲ醇化シ國民文化ノ向上ヲ期スルため國民學校中等學校等ノ學校教育ヲ通ジ美術教育ノ刷新ニ努ムルコト

(2) 古來ノ傳統ニ立脚シ新時代ニ適應スル新文化ヲ創造スベキ専門家指導者ノ育成ニ努ムルコト

三、美術施設ノ擴充

(1) 國立美術館ヲ設立シテ日本美術ノ精華ヲ内外ニ知ラシメ國民教養ニ資スルコト

(2) 古美術保存施設整備ヲ圖リ國民文化ノ傳統ヲ顯揚スルコト

(3) 展覽會其ノ他ノ美術獎勵施設ノ刷新振興ヲ圖リ新文化ノ建設ニ寄與スルコト

而して、十一月二十八日右答申と共に、美術振興の唯一の機關たる同會に代るべき有力にして權威ある機關の設置を要望する決議を細川會長より橋田文部大臣へ提出した。

猶同會は十六年四月二十四日勅令第四百九十號を以て正式に廢止を公布された。

紀元二千六百年奉祝美術展覽會 光輝

ある皇紀二千六百年を祝し、美術方面に於ても國家的奉祝記念事業の開催が前年來計畫されつゝ、あつたが、當局に於て協議の結果、文部省及び紀元二千六百年奉祝會の共同主催、東京府協賛のもとに綜合美術展覽會を開催することとなり、その具體的の方策を進めた。即ち一月二十日帝國ホテルに於て關係者と帝國藝術院會員等が會合、第一回懇談會を開催、實行方法に就き懇談的に意見を開陳し、更に細川護立侯を委員長、日本畫、西洋畫、彫刻、工藝各部門の作家數名づゝを委員とする實行委員會を作り、更に具體的方法を協議することとなつた。依て一月三十一日華族會館に於て實行委員會を開催、更に二月二十八日帝國ホテルに於て關係者及び帝國藝術院會員中美術會會員全員の懇談會を開き、會期、作品選出方法、作品の大きさ等に就き協議、その後各部門に於て各部門の小會を開き、これ等に基いて規則を定め、七月二十九日附の官報を以てこれを公布した。

次で紀元二千六百年奉祝美術展覽會職員を次の如く決定、八月六日附官報を以て發表した。

(委員長) 侯爵 細川護立(總務委員) 文部次官 菊池豐三郎、内閣紀元二千六百年祝典事務局局長 歌田千勝、文部省專門學務局長 永井浩、東京府知事 岡田周造(委員) 帝國藝術院會員 荒木梯二郎、同 錦木健一、同 川合芳三郎、同 川村萬藏、同 菊池完爾、同 小林茂、同

小室貞次郎、同 竹内恒吉、同 西山卯三郎、同 橋本關一、同 前田廉造、同 松林篤、同 安田新三郎、同 結城眞松、同 横山秀磨、同 有馬壬生馬、同 石井滿吉、同 梅原龍三郎、同 小杉國太郎、同 中澤弘光、同 中村不折、同 藤島武二、同 南薰造、同 安井會太郎、同 山下新太郎、同 和田英作、同 和田三造、青山義雄、石川寅治、太田喜二郎、川島理一郎、木村莊八、小林萬吾、小磯良平、齋藤與里、田邊至、辻永、椿貞雄、東郷鐵春、中川一政、中村研一、中山巍、鍋井克之、野口彌太郎、林重義、正宗得三郎、牧野虎雄、山本鼎、帝國藝術院會員 朝倉文夫、同 北村西望、同 齋藤知雄、同 佐藤清藏、同 建昌彌一郎、同 内藤伸、同 藤井浩祐、同 平櫛傳太郎、同 山崎朝雲、同 板谷嘉七、同 清水六兵衛、同 清水龜藏、同 津田信夫、同 富本憲吉、同 香取秀眞(幹事) 内閣紀元二千六百年祝典事務局書記官 杉山俊郎、同 小野寺五一、文部書記官 本田弘人、同 柴沼直、東京府總務部長 中村四郎、東京府學務部長 酒井榮吉、

次に展覽會に關する日程は左の通り行はれた。(展覽會規則は附録參照)

出品搬入受付

第一部・第三部 九月十六日—十九日
第一部・第四部 十月十七日—二十日
會期 (東京) 前期(第一部・第三部) 十月一日—二十三日 後期(第一部・第四部) 十一月三日—二十四日
(京都) 前期十一月三日—十七日 後期十二月三日—十七日

美術教育

日本美術學校々長就任 日本美術學校では前校長紀淑雄の逝去後長く校長が空席であつたが、三月田中泰祐が新校長として就任した。

帝國美術學校卒業及入學者 帝國美術學校では三月十日第七回卒業證書授與式を舉行、同日卒業製作展覧會を開いた。本年度卒業者及び入學者数は左の通りである。

Table with 3 columns: 卒業者 (Graduates), 入學志願者 (Applicants), 入學者 (Admitted). Rows include 日本畫科, 西洋畫科, 圖案工藝科, 彫刻科, 東京高等工藝學校卒業及入學者.

東京女子高等美術學校卒業及入學者 同校では三月十五日卒業證書授與式を舉行、本年度の卒業者及び入學者数は左の通りであつた。

Table with 3 columns: 卒業者, 入學志願者, 入學者. Rows include 日本畫科, 洋畫科, 美術手藝科, 京都高等工藝學校卒業及入學者.

京都高等工藝學校卒業及入學者 同校は三月十五日卒業證書授與式を舉行した。本年度の卒業者及び入學者数は左の通りであつた。

Table with 3 columns: 卒業者, 入學志願者, 入學者. Rows include 色染科, 機織科, 圖案科, 窯業科, 精密機械科, 人造纖維科, 京都市立繪畫專門學校卒業及入學者.

京都市立繪畫專門學校卒業及入學者 京都市立繪畫專門學校では三月十八日卒業式を舉行了。本年度日本畫科卒業者は三十二名、入學志願者二十一名、入學者は十二名で、圖案科の入學志願者は四十四名、入學者は二十四名であつた。

日の兩日卒業成績品展覧會を校内に開いた。同校本年度の卒業者は十六名、入學志願者六十五名、入學者は六十名であつた。

東京美術學校卒業及入學者 東京美術學校では三月二十五日第四十九回卒業證書授與式を舉行、同日より三日間卒業製作展覧會を開いた。同校本年度卒業者及び入學者数は左の通りである。

Table with 3 columns: 卒業者, 入學志願者, 入學者. Rows include 日本畫科, 油畫科, 彫刻科, 木彫部, 工藝科, 彫金部, 鍛金部, 鑄金部, 漆工部, 建築科, 圖畫師範科.

日本美術學校卒業及入學者 日本美術學校では三月二十五日第二十一回卒業證書授與式を舉行。同校本年度卒業者及び入學者数は左の通りである。

女子美術專門學校卒業及入學者 同校では三月二十五日第四十四回卒業證書授與式を舉行、二十四、二十五の兩日卒業製作展覧會を開いた。同校本年度の師範科、高等科の卒業者及び入學者数は左の通りであつた。

Table with 3 columns: 卒業者, 入學志願者, 入學者. Rows include 高等科, 師範科.

埃及本邦兒童繪畫展 埃及國文部省の招聘により國際文化振興會及び教育美術振興會の主催によつて全國より募集の上同國へ送付した本邦兒童繪畫作品は、三月六日より一週間カイロ市に於ける同國美術協會の展覧會場に於て開催された。三月五日の招待日には文部次官、ワクラフ大臣、外務次官、カイロ知事その他要人等來場盛會を極め、日本兒童の美術的才能の豊かさとする水準の高さに讚嘆した。この企ては日本を認識せしめる文化の使節として多大なる成果を收めた。

東京美術學校校長更迭 東京美術學校長芝田徹心は女子學習院長に轉じ、其後任として五月二十九日浦和高等學校校長澤田源一が任命された。

工藝技術講習所創立 豫て創立計畫中の工藝技術講習所は十月十四日勅令第七百六十九號を以て官制を公布した。差し當り東京美術學校に於て授業を開始する。

理ニ屬シ工藝ニ關スル技術ノ教授ヲ掌
ル
第二條 工藝技術講習所ニ左ノ職員ヲ置
ク

所長

教授 専任二人 奏任

助教授 専任三人 判任

助手 専任二人 判任

書記 専任一人 判任

第三條 所長ハ文部部内ノ高等官ヲ以テ

之ニ充ツ文部大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所

務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第四條 教授及助教授ハ生徒ノ教育ヲ掌

ル

第五條 助手ハ教授又ハ助教授ノ指揮ヲ

承ケ授業及實習ノ補助ニ従事ス

第六條 書記ハ上官ノ命ヲ承ケ庶務會計

ニ従事ス

第七條 所長ハ文部大臣ノ許可ヲ得テ講

師ヲ囑託シ授業ヲ擔任セシムルコトヲ

得

美術講演・講義

講演

一月

新文化講習會 一月十日 於淺草・本願寺
「奈良法隆寺の壁畫」 瀧 精一

浮世繪同好會講演 一月十八日 於日本橋經濟俱樂部
「北齋の東海道」 長瀬 武郎

「初期浮世繪肉筆」ロバート・ペイン
考古學會例會講演 一月二十七日 於帝室博物館

「法隆寺若草伽藍址發掘に就いて」 石田 茂作

二月

奈良帝室博物館列品講座 二月三日 於同館
「日本建築史連講」 足立 康

同講座二月十七日 於同館
「古代の土器」 小林 行雄

考古學會例會講演 二月十八日 於帝室博物館
「元の上都と太都に就いて」 駒井 和愛

三月

東方文化學院講演 三月十二日 於同院
「滿洲撫順の史蹟」 池内 宏

「雲崗石窟と龍門石窟」 水野 清一

大阪市立美術館第二十八回美術講演會
三月十六日 於同館小講堂
「四天王寺の草創について」 出口 常順

「皇國史と四天王寺」 中村 直勝
東方文化學院講演 三月十九日、三月二十二日 於同院

「建築上より見たる支那帝陵敷地の選定」 竹島 卓一

「東西洋の文化を貫く根本思想の差異」 常盤 大定

四月

京都恩賜博物館園城寺名寶展記念講演
四月二十一日 於同館
「智證大師と國家」 西田直二郎

「智證大師受法の大徳について」 羽溪 了諦

五月

第四十五回考古學會講演 五月四日 於帝室博物館
「秦及び前漢時代の錢貨に就いて」 加藤 繁

「宗教藝術論」 矢代 幸雄
東洋文庫講座 五月十六、二十三、三十日 於同文庫

「支那歷朝版木の特徴」 長澤規矩也
東方文化學院講演 五月十八日 於同院

「法隆寺壁畫」 松本 榮一
京都帝國大學史學研究會講演會 五月

十八日 於同史學部教室
「遼の帝后陵の壁畫に表はれた契丹人の生活」 田村 實造

「藤原宮址の發掘について」 足立 康

日本地理歴史學會講演 五月二十九日 於帝大山上會議所
「日本美術の特質」 谷 信一

六月

東洋文庫講座 六月六、七日 於同文庫
「遼金時代の建築」 村田 治郎

東方文化研究所公開講演 六月十五日 於同所
「龍門石佛に表はれたる佛教」 塚本 善隆

浮世繪同好會講演 六月十九日 於東洋經濟俱樂部
「松方コレクションに就いて」 田中 喜作

「現代版畫の制作に就いて」 徳力富吉郎

七月

大阪市立美術館夏期美術講習會 七月二十二日—二十七日 於同館
「藤原建築の繪畫性」 源 豊宗

「日本文化史の展開」 山根徳太郎
「日本美術様式心理」 岡 頼三

「西洋美術の原理」 井島 勉

九月

龍池會例會講演 九月十四日 於松風陳列所
「截金術を見る」 田中 喜作

「探幽縮圖について」 脇本十九郎

大阪市立美術館第三十回美術講演會
九月二十一日 於同館
「雲坪と良寛」 難波 剛平

東京考古學會第十九回總會講演 九月二十八日 於如水會館
「本藥師寺址に關する疑」 田中 重久

「筑前遠賀川立屋敷の彌生式遺蹟の發掘について」 杉原 莊介

渡邊華山百年記念遺墨展講演 九月二十一日—二十五日 於東京美術俱樂部
「華山先生の藝術」 瀧 精一

「郷土の先輩華山先生」 大口 喜六
「我が國民精神と華山先生」 大島 正徳

「華山先生は生くる」 笹川 臨風
「尊き哉華山先生」 松林 桂月

十月

藥師寺に關する講演會 十月七日 於大阪朝日會館
「天武天皇と其の御宇」 中村 直勝

「藥師寺の建築と美術」 足立 康
「藥師寺につきて」 橋本 凝胤

龍池會例會講演 十月二十六日 於松風陳列所
「日本陶器の特色」 北原 大輔

十一月

大阪市立美術館講演 十一月二日 於同館
「小出楡重の人となりとその藝術」 黒田重太郎

「小出楡重の畫に就いて」 國枝 金三
奈良帝室博物館列品講座 十一月二日 於同館

「門の話」 岸 熊吉
新日本美術聯盟講演會 十一月三日
於赤坂・三會堂
「奈良朝藤原より鎌倉に至る美術に就
て」 中井宗太郎
正倉院御物展觀記念講演 十一月九日
十六、二十三日 於帝室博物館
「奈良朝に於ける東亞文化の概観」
原田 淑人
「正倉院御物と奈良朝文化」
石田 茂作
「奈良朝美術」 瀧 精一
東方文化研究所講演 十一月十六日
於同所
「古代支那の藝術的類型」長廣 敏雄
浮世繪同好會講演 十一月二十一日
於東洋經濟俱樂部
「日本繪畫に於ける庶民風俗畫に就い
て」 藤懸 靜也
龍池會例會講演 十一月三十日 於松
風陳列所

「秋の展覽會合評」諸氏
考古學會例會講演 十一月三十日 於
帝室博物館
「撫順に於ける高麗山城址の考古學的調
査」 池内 宏
國語國文學研究發表會 十一月三十日
於慈惠大學
「佛足石歌考」 田村 一雄

十二月
斯文會講演 十二月二日 於湯島聖堂
「燕趙の故都址に就て」 原田 淑人
照明學會講演 十二月五日 於飛行會
館

「法隆寺壁畫の照明と螢光放電燈」 關 重雄
「法隆寺壁畫の模寫について」 和田 英作

ラジオ放送(國內)
東京・講演 一月六日 野口米次郎
「日本藝術的特質」
東京・趣味講演 一月七日
「國史を描いた畫家」 結城 素明
東京・講演 一月八日
「美術雜感」 村田 良策
東京・ラジオ夜話 一月十二日
「日本獨特の庭園」 丹羽 鼎三
東京・日本文化講座 一月二十一日
「日本文化の性格」 長谷川如是閑
東京・日曜特輯講座 一月二十一日
「日本文化と支那文化を語る」
出石 誠彦 榎 一雄
小杉 一雄 安藤常次郎

東京・ラジオ夜話 一月二十二日
「漫畫今昔譚」 須山 計一
大阪・店員の時間 一月二十六日
名人の話(一)「左甚五郎」 食滿 南北
東京・講演 一月二十七日
「記念建造物としての建築様式」
藤島亥次郎
東京・日本文化講座 二月四日
「日本文化の源泉」 西村 眞次
東京・ラジオ夜話 二月七日
「文化と映畫」 伊奈 信男
東京・特輯講座 二月十一日
「鏡の話」 田澤 金吾
「劍の話」 後藤 守一
「玉の話」 柴田 常惠

大阪・店員の時間 二月十六日
名人の話(二)「谷文晁」 行友 李風
東京・講座 二月十七・二十日
「ゴングールの『日本美術論』」
東京・ラジオ夜話 二月二十一日
「樂燒を語る」 樂吉右衛門
東京・ラジオ夜話 二月二十八日
「横瀬とうしろ姿」 西田 正秋
東京・日本文化講座 三月三日
「日本文化と印度文化」 武田豊四郎
東京・日本文化講座 三月十日
「日本文化と支那文化」 中山久四郎
大阪・中等學生の時間 三月十二日
「國風文化と美術の話」 望月 信成
東京・日本文化講座 三月十七日
「日本文化と西洋文化」 後藤 末雄
東京・講演 四月六日
「朝鮮の佛教美術」 中村 亮平
大阪・店員の時間 四月十二日
名人の話「長曾根虎徹」 月山 貞勝
東京・講演 四月二十二日
「美術工藝と輸出工藝」 和田 三造
東京・講演 五月三日
「西藏文化と佛教」 河口 慧海
大阪・講演 五月八日
「南米の古代文化」 佐藤 久平
東京・講演 六月十五日
「現代日本に於ける古きものと新しきもの」
神崎 憲一
東京・ラジオ隨筆 六月二十三日
「鼻の美しさ」 西田 正秋
東京・講座 七月十五日―十八日
「シルレルの美的教育論」 清水幾太郎
東京・店員の時間 七月十九日

「現代文化の話・繪畫」 加藤 一雄
東京・季節の話題 八月十一日
「山岳美隨想」 足立源一郎
東京・講演 八月二十八日
「アイヌの原始文化」 河村 只雄
大阪・一人一顯 九月二日
「美の日本的なるもの」 源 豊宗
東京・日本文化講座 九月八日
「日本美術的特質」 瀧 精一
東京・文藝雜感 九月十日
「美術に於ける新しい精神」
荒城 季夫
東京・中等學生の時間 九月十六日
「日本の美術」 金原 省吾
東京・特輯座談會 九月二十三日
「戦時下の美術問題を語る」
岸田日出刀 田中 一松
富永 惣一 長島 喜三
東京・家庭婦人の時間 九月二十五日
―二十七日、三十日 村田 良策
「美術の味ひ方」
東京・講座 十月十一日―十四日
「渡邊華山の『守因日曆』」 菅沼 貞三
東京・日本文化講座 十月十五日
「日本建築的特質」 藤島亥次郎
東京・日本文化講座 十月二十日
「日本の工藝」 長島 喜三
大阪・婦人の時間 十月二十九日
「新しく興る輸出工藝品の話」
齋藤 信治
東京・講座 十一月四日
「概観明治史・藝術」 土岐 善麿
東京・専門家の時間 十一月十日
「正倉院御物に就て」 瀧 精一
東京・講座 十一月十一日―十四日

「法隆寺壁畫の模寫について」 和田 英作

ラジオ放送(國內)
東京・講演 一月六日 野口米次郎
「日本藝術の特質」
東京・趣味講演 一月七日
「國史を描いた畫家」 結城 素明
東京・講演 一月八日
「美術雜感」 村田 良策
東京・ラジオ夜話 一月十二日
「日本獨特の庭園」 丹羽 鼎三
東京・日本文化講座 一月二十一日
「日本文化の性格」 長谷川如是閑
東京・日曜特輯講座 一月二十一日
「日本文化と支那文化を語る」
出石 誠彦 榎 一雄
小杉 一雄 安藤常次郎

東京・ラジオ夜話 一月二十二日
「漫畫今昔譚」 須山 計一
大阪・店員の時間 一月二十六日
名人の話(一)「左甚五郎」 食滿 南北
東京・講演 一月二十七日
「記念建造物としての建築様式」
藤島亥次郎
東京・日本文化講座 二月四日
「日本文化の源泉」 西村 眞次
東京・ラジオ夜話 二月七日
「文化と映畫」 伊奈 信男
東京・特輯講座 二月十一日
「鏡の話」 田澤 金吾
「劍の話」 後藤 守一
「玉の話」 柴田 常惠

「狩野芳崖傳」 櫻元謙次郎

東京・中等學生の時間 十一月十六日

「正倉院御物の話」 野間 清六

東京・講演 十一月二十六日

「今秋の美術展を中心として」

東京・日本文化講座 十二月十五日

「日本の武具」 關 保之助

東京・日本文化講座 十月二十二日

「日本文化の傳統と發展」 幣原 坦

東京・講演 十二月二十四日

「文藝雜感・藝術と國民生活」 高村光太郎

ラジオ(海外向)

一月二十二・三 北米東部

「北支蒙疆見たま」 長谷川春子

一月三十日 歐洲

「美術的に見た日本の工藝品」 ユーエーカザール

二月七日 北米西部

「二世が見た日本の藝術」 長谷川英彦

二月十四日 歐洲

「日本文化に於ける二三の特徴について」 C・フォン・ウエークマン

三月八日 歐洲

「日本美術の新しい動き」 瀧口 修造

四月十七日 歐洲

「戰爭と日本美術」 鼓 常良

六月四日 歐洲

「日本の近代建築に就て」 南 相夫

八月八日 北米東部

「日本の庭園と支那の庭園」 ベーゼル・ゴーハム

八月十六日 歐洲

「日本建築について」 中村 順平

十一月二十八日 西南アジア

「日本の文化」 N・H・ベルラス

十一月三十日 北米西部

「正倉院御物展のこと」 瀬戸口房子

十二月二十五日 歐洲

「日本文化の私見」 ハンス・エツケルト

各大學美術史講座

〔官立〕

東京帝國大學

〔文學部美術史學科〕(美學)「美學概論」

「藝術ノ根本類型」

「美學演習」 教授大西克禮、

「樂曲様式ノ研究」 田邊尚雄、

(美術史)「美術史研究法」

「西洋美術史演習(古代及近世)」

「ウキンケルマン論」

教授兒島喜久雄、

「日本美術史概説」

「東洋美術史」 講師松本榮一、

(考古學)「漢以前ノ東亞文化」

「考古學演習(考古學上ノ諸問題)」

「考古學實習」 教授原田淑人、

「東亞古代の城址」 講師駒井和愛

京都帝國大學

〔文學部哲學科〕(美學美術史)「美學序論」

「藝術批評論」

「演習(美術の諸問題)」

教授植田壽藏、

「日本近世繪畫史」 講師源豐宗、

「藝術に於ける理念と自然」 講師井島勉

亮、「飛鳥時代の文化」 講師東伏見邦英

東北帝國大學

〔法文學部〕(美學)「美學概論」

「美學演習」 教授阿部次郎、

特殊講義「美學演習」

教授阿部次郎、

「西洋藝術史特殊講義」

「同演習」 助教村田潔、

「音樂論及音樂史」 講師加藤成之、

(文化史學第二)「日本美術史概説」

「同演習」

教授福井吉郎、

(史學第五)「考古學」

(史學第五講座ノ一部) 講師伊東信雄

九州帝國大學

〔法文學部〕(美學美術史)「美學(美術入門)」

「東洋美術史(支那宋代畫論史)」

「西洋美術史(西洋美術史演習)」

「東洋美術史(繪卷物演習)」

「西洋美術史(繪畫ニ現レタル聖母マリア)」

教授矢崎美盛

京城帝國大學

〔法文學部〕(美學美術史第一講座及第二講座)

「美學概論」

「美學美術史演習」

「西洋美術史」 教授上野直昭、

「日本美術史」

「東洋美術史」

「美學美術史演習(古京遺文)」

教授田中豐藏、

「東亞考古學」 教授藤田亮策

東京文理科大學

久雄、「藝術學(音樂論)」 遠藤宏

高野山大學

〔佛教藝術學科〕「佛教藝術學演習」

「西洋美術史」

「水墨畫」 岡直己、

「佛教藝術學概説」

「日本佛教繪畫史」

「佛教藝術ニ於ケル諸問題演習」

佐和隆研 駒澤大學

「佛敎美術」 逸見梅榮、

「支那美術史」 笹川種郎

大正大學

「東洋美術」 脇本十九郎、

「考古學」 八幡一郎

東洋大學

「美學」 大西克禮、

「美學」 山際清 同志社大學

「文學部」

「美學」 園賴三 立正大學

(國史)「日本美術史(鎌倉—江戸) 藤懸靜也、

「日本佛教文化史(佛教ノ文化史的考究)」

石田茂作、

(美學及美術史)「美學概論」

西宮藤朝、

「佛敎美術史」 逸見梅榮

龍谷大學

「美術史」 島田修二郎 早稻田大學

〔文學部哲學科藝術學專攻〕

「東洋美術史概論」

「東洋美術史研究」 教授會津八一、

「西洋美術概論」

「西洋美術史」 講師坂崎坦、

「美學」 講師大西昇

〔文學部史學科〕

「東洋美術史」 教授會津八一、

「考古學概論」

教授西村貞次

古美術展覧會・展觀

一 月

帝室博物館繪畫陳列 一月十日

佛畫類は國寶豐乘寺普賢菩薩像の平安期の名品をはじめとして鎌倉期のもの十七點、その中妙深不動像、眞言八祖像等注目される。尙鎌倉期のもので太田天洋藏圖像が目新しく、次期では傳光信筆桃井安直、足利義政の兩像が並列されたのも興味深い。江戸期の列品の中では、探幽の寫生卷及縮圖卷の各二卷、常信縮圖二卷が共に陳列された。版畫は三代豐國併優似顔大首繪(田畑大藏寄贈)が三十六枚揃つて陳列された。

名作茶道具展觀 一月二十四日—二十八日 名古屋・松坂屋

帝室博物館繪畫陳列 二月中

佛畫は殆ど鎌倉期のもので清野暢一郎藏愛染明王像以下十九點、中國寶宋西金居士筆十六羅漢像(原邦造藏)が珍らしい。繪卷は法然上人四十八卷傳の一部の陳列が注目された。肖像畫には國寶雪舟筆益田兼堯像(益田男爵家藏)宗祇像(南部伯爵家藏)武田信虎像(長禪寺藏)同夫人像(大泉寺藏)等の名品がある。尙版畫は長崎版畫(三谷てい寄贈)二十一點が資料的にも興味深いものと言ふべきであらう。

文明協會主催和蘭展 二月一日—十一日 日本橋・白木屋

財團法人文明協會が「出島蘭館誌」三卷の翻譯完成を記念して催された展觀である。出陳品は和蘭に關する文書類及び美術工藝品で資料として注目すべきものが多くあつた。

紀元二千六百年記念春季展 二月十日—十二日 帝國圖書館

同館所藏の歴史に關する稀觀本を百十六點陳列した。中に北野天神緣起、蒙古襲來繪詞等の模本があつた。

三 月

四天王寺展覽會 三月一日—二十五日 大阪市立美術館

四天王寺五重塔落成大法要が同寺に嚴修されるに就いて、それに因み大阪市では四天王寺展を開催した。同展觀は聖德太子御時代を中心とする文化を提示すると共に、尙當年が二千六百年に當るので、その奉祝をかねて大阪文化の再検討の意圖を以て催されたものである。主として四天王寺を初め太子關係寺院の國寶及什寶を陳列し、尙五重塔内安置の新製品を加へて出陳した。その主要のものを挙げれば、扇面古寫經、七色守、光背、舞樂面等であつた。

紀元二千六百年史展覽會 三月一日—四月三日 大阪朝日會館

大阪朝日新聞社主催に係り、紀元二千六百年の佳歲にあつて御歴代の御聖德を偲び奉ると共に、國民忠誠の發露を顯現し、併せて傳統の文化を玩味するといふ主旨になるものである。陳列された品數は約三十餘點で、御歴代宸影、宸翰をはじめとして史上に著名な人物の肖像、及び關係文書等が主である。國寶四十餘點を數へ、稀觀の資料も尠くなかつた。次に美術關係の主要な品目を掲げる。(○印國寶)

- 後白河天皇宸影 醍醐寺
- 後宇多天皇宸影 大覺寺
- 花園天皇宸影 長福寺
- 聖德太子御影 仁和寺
- 聖德太子勝鬘經御講讀圖 斑鳩寺
- 後鳥羽天皇宸影 水無瀬神宮
- 譽田宗廣緣起 譽田神社
- 三十六歌仙赤人像 藤原銀次郎
- 扇面法華經 四天王寺
- 螺鈿蒔繪小唐櫃 金剛峯寺
- 時雨螺鈿鞍 依爵 細川 護立
- 金銀平脱雙鳳文鏡 京都帝國大學
- 黃金裝太刀 同 神護寺
- 平重盛畫像 同 眞正極樂寺
- 源賴朝畫像 同 眞正極樂寺
- 眞如堂緣起 同 眞正極樂寺
- 北條早雲畫像 同 眞正極樂寺
- 織田信長畫像 同 眞正極樂寺
- 豐臣秀吉畫像 同 眞正極樂寺
- 色繪釘燈 同 眞正極樂寺
- 鍋島色繪野菜圖皿 長尾 欽彌
- 色繪十二支鏡文皿 建 仁 寺
- 染付開扇鉢 木米 野村 徳七
- 楓櫻圖木瓜形鉢 道八 濱口龜太郎

茶屋染小袖 野村正治郎
紅綸子友禪染東巖斗文振 京都友禪會

帝室博物館繪畫陳列 三月中

佛畫類には不動明王二童子像(團男爵家藏)鑑眞和尚像(武藤金太藏)羅漢像(大倉集古館藏)近衛家傳來の春日曼茶羅、山王曼茶羅等が注目される。室町水墨畫系統のものでは雪舟筆四季山水圖四幅(黒田侯爵家藏)如拙筆王羲之書扇面圖(守屋孝藏藏)筑陽筆壽星圖(同上藏)が興味深い。

東京美術學校春季特別展觀 三月二十五日—二十七日 同校陳列館

恆例により同校藏の古美術品の中、主として日本、支那、朝鮮繪畫、及上代染織品・古文書等三十四點を陳列した。

朝鮮古陶器陳列會 三月二十六日—三十日 名古屋・松坂屋

四 月

皇紀二千六百年奉祝記念展 四月一日—三十日 徳川美術館

佳歲を奉祝する意味で、同館に藏する御歴代宸影、宸翰を主として陳列し、併せて宮中儀式に關する古圖及古筆、蒔繪箱、茶器、刀劍等七十五點を陳列した。

醍醐寺靈寶館春季特別展 四月一日—五月三十一日 同館

恆例のやうに此の期間に開催されたが本年は特に紀元二千六百年を記念して一山の名寶が數多く出陳された。

二千六百年史展覽會 四月二日—五月十二日 大阪市立美術館

大阪城天主閣

△尊勝曼茶羅 ○求開持曼茶羅

兩界曼茶羅 ○弘法大師行狀繪詞

十五童子本尊像 火羅圖

東方曼茶羅 大元帥明王像

請雨經曼茶羅 ○大元帥明王像

○覺禪鈔 ○三寶繪詞

○東寶記 大黑天神經

大般若經 ○南都七大寺日記

平家納經特別陳列 四月二十日—五月

三十一日 奈良帝室博物館

平家納經は嚴島神社の秘寶として嚴重に保存され、稀にその一、二巻を公開したのみで、曾つて全貌を見ることが出来なかつた。然るに今年紀元二千六百年に當り、この一具を全部奈良帝室博物館に出陳し、平安文化の輝かしい一端を世に示すことになつた。即ち法華經二十八卷に開結經二卷及心經、阿彌陀經各一卷に清盛願經一卷を加へて合計三十一巻、それと共に經篋、唐櫃である。之等の經卷は開期中順に裏面をも返して展示し研究、鑑賞に資する處があつた。いづれも保存頗る完好であつて、文字通りの金銀紅紫燦然として眼を奪ふ感があつた。美術史上重要な位置を占めてゐる當經卷の公開は學界に計り知れない多大の參考を齎らしたものととして、特記されるべきであらう。

繪卷では平治物語繪卷(松平伯母家寄贈)が珍しく出陳された。室町水墨畫系統のものには如拙筆王右軍書扇面圖をはじめ紹仙筆山水圖(東京美術學校藏)亮仙筆林和靖圖(同上藏)宗休筆果鼠圖、道安筆鐘馗圖、二天筆紅梅鳩圖(細川侯爵家藏)等の逸品が多い。江戸時代では琳派の名作の屏風三點陳列されて鑑賞者を堪能させた。即ち宗達扇面(三寶院藏)光琳紅白梅圖(團男爵家藏)抱一風雷神神圖(澁澤子爵家藏)である。尙今度初公開として注目されたものには、元金地院の襖繪で今春川崎男爵家より寄贈された應舉の遺作九點陳列され、應舉の研究上に重要なものであらう。

池長美術館開館記念展 五月一日—三十一日 同館

神戸池長孟の蒐集品を藏する同館は、皇紀二千六百年を記念して開館し、一般に公開されることになつた。陳列品は同氏が多年に亘つて蒐められたもので、我國初期洋畫及び開國文化に關する文書、書籍等で、資料として重要なものが多い。

白鶴美術館春期特別陳列 五月一日—二十日 同館

皇紀二千六百年にあたり、三種の神器に因んで鏡、勾玉、劍等を主に展示した。その他聖德太子御影、並に奈良朝の遺品等を併せ、計三十五點陳列されたが之等はすべて同館所藏に係るものである。

徳川美術館春季特別展 五月一日—三十日 同館

紀元二千六百年記念日本文化史展 五月四日—二十二日 東京府美術館

東京朝日新聞社では紀元二千六百年を

記念して光輝ある日本文化が如何なる精神的背景の下に生成されたかを示す爲、史上の遺品を以て、具體的に陳列した。よつてその出陳品は文化一般に亘り、しかも優秀な遺品を多數網羅され、之等を十六部門に分け概ね各々時代順に陳列して、その系統を辿る上の便利に重きを置かれた。出陳品は殆ど國寶重要美術品等の逸品が選ばれたが、就中伴大納言繪詞、粉河寺緣起、松方幸次郎、蒐集品浮世繪等秘藏のものが陳列されたことは殊に注目された。

尙展覽會が一般に我が文化の眞髓を端的に理解させる上に多大の効果が擧げられたことは言ふまでもないが、又學界の爲にも頗る貴重な催しであつたと言ふことが出来よう。左に美術關係の主要な目錄を記す。(○印國寶 △印重要美術品)(繪畫)

- 吉祥天像 (奈良) 藥師寺
- 虚空藏菩薩像(平安) 三井合名會社
- 十六羅漢像 (同) 幅内
- 山水屏風 (同) 來迎寺
- 粉河寺緣起 (鎌倉) 教王護國寺
- 明恵上人樹上坐禪像 (同) 粉河寺
- 當麻曼茶羅圖(同) 高山寺
- 當麻曼茶羅緣起 (同) 光明寺
- 山越阿彌陀圖(同) 同
- 聖德太子像 (同) 上野 精一
- 伴大納言繪詞三卷 (同) 村山 長舉
- 一遍上人繪傳(同) 伯爵 酒井 忠博
- 長谷雄草子 (同) 侯爵 細川 護立

- 枕草紙繪詞 (鎌倉) 侯爵 淺野 長之
- 山水圖 傳周文 村山 長舉
- 當麻寺緣起 諸家 慰斗 勝一
- 織田信長像 (桃山) 長 興 寺
- 枯木鳴鶴圖 二天 長尾 欽彌
- 山水圖 木米 中野 孝次
- 蓬萊圖 蘆雪 保田七郎衛
- △中雨月左右熊野鉢木圖 爲恭 小坂 順造
- △鳳凰孔雀圖 若冲 侯爵 淺野 長之
- 蓮花水禽圖 宗達 馬越 恭一
- 紅白梅圖一雙光琳 華山 津輕 義孝
- △耕作機織圖 二幅 椿山 長尾 欽彌
- △自畫像 勝以 中野 孝次
- △人丸圖 同 武岡 忠夫
- △社頭春遊圖 長春 小坂 順造
- △竹林七賢圖 春章 東京美術學校
- △美人圖 歌磨 原 良三郎
- △捕鯨圖 江漢 鷹見久太郎
- 飛鳥山向鳥墨田川圖 廣重 某 氏
- 三幅 泰西王族騎馬圖屏風 (慶長) 子爵 松平 保男
- 鶯鳥圖屏風 山樂 西村重郎兵衛
- 花下遊樂圖屏風 長信 原 邦造
- (彫刻)
- 觀音菩薩像 (飛鳥) 觀心 寺
- 觀音菩薩像 (同) 大塚 稔
- 比丘形像 (天平) 東京美術學校
- 釋迦如來像 (平安) 田万 清臣
- 觀音菩薩像 (奈良) 東京美術學校
- 如意輪觀音像(同) 東 大 寺
- 藥師如來像 (同) 唐招提寺

日 日本橋・高島屋

玉井大閑堂の主催に係るもの、主として各時代に互る佛像、佛畫、佛具類を展観した。就中重要美術品銅鐸及び、平安時代作と稱する木造漆箔の阿彌陀如來像、羽黒山出土藤原鏡等が最も注目された。

六月

帝室博物館繪畫陳列 六月中

西大寺十二天像の中、風天、伊舍那天及び甚目寺不動、達磨寺涅槃等の平安朝の佛畫の名品があり、尙鎌倉時代十二天像七幅(日高昌克藏)は目新しい。繪卷では國寶一逼上人繪傳(前田侯藏)が注目され、室町水墨畫系統のものには國寶雪舟筆惠可斷臂(齋年寺藏)祥啓筆達磨像(南禪寺藏)傳蛇足筆達磨圖(養徳院藏)等の逸品が陳列された。尙支那畫では傳錢選筆蓮花圖(本法寺藏)が擧げられる。

支那古代壁畫展 六月二十六日—三十日

日本橋・白木屋

七月

帝室博物館繪畫陳列 七・八月中

佛畫類では一乘寺紅玻璃阿彌陀像、光明寺四十九化佛阿彌陀、専修寺阿彌陀三尊、常忍寺普賢十羅刹女像等が注目される。肖像畫には之庵禪師像(歸源院藏)興正菩薩像(室泉寺藏)が頂相の古例として價值多い。尙江戸時代の陳列品は季節に因み、京都金剛寺の襖繪として著聞

してゐた應舉筆波濤圖二十八幅、同屏風一雙、その外同寺に藏する應舉の遺作を一室に陳列した。

古代藝術品陳列 七月一日—三日 京都

都市立繪畫專門學校 美術類話會總會展覧 七月六日 帝室博物館會議室

同會は新に理事長藤原銀次郎就任に際し、總會を開催、足利漢畫の名品十三點を展観した。

九月

帝室博物館繪畫陳列 九月中

佛畫類中の主要なものは品川寺佛眼曼茶羅、唐招提寺法華曼茶羅、豐樂寺楊柳觀音像、護國寺般若菩薩像、中藏院如意輪觀音像及地藏菩薩像等がある。室町桃山期の名品としては堅田圖、元信筆神馬圖(賀茂神社藏)友松筆呂望及商山四皓圖屏風(妙心寺藏)長閑源公像(成瀬澄藏)江戸期の陳列には、光琳筆藤原信盈像(青柳瑞穂藏)華山筆佐藤一齋像(河田烈藏)探幽筆草花寫生圖卷等が注目される。

古薩摩名陶展 九月十七日—二十一日

日本橋・高島屋

渡邊華山百年記念展 九月二十一日—二十五日

芝・東京美術俱樂部

東京美術青年會では紀元二千六百年を奉祝し、恰も今年百回忌に相當する華山の遺墨を集めて、中外商業新報社後援の下に、大規模の展覧會を開催した。出陳品は遺品中國寶及重要美術品に認定されたものは殆ど網羅された。その他書簡、

關係資料をも含めて約三百五十點の多數が陳列された。この多數の中には自ら畫品に於て高低の差のあることは免れ難いが、しかし今まで過目することが出来なかつた遺作が明かにされて、華山の藝術の上に從來餘り知られてゐなかつた面も見られた。その結果として華山の全貌が明かに感知され、優れた畫家であることとを認識させた。私團體としてこのやうに効果を齎した展覧會を計畫されたことは注目すべきであらう。尙會期中、左のやうな講演會が開催された。

「華山先生の藝術」瀧精一「郷土の先輩華山先生」大口喜六「我國民精神と華山先生」大島正徳「華山先生は生くる」笹川臨風「尊き哉華山先生」松林桂月、尙出陳品中主要のもの、品目を掲ぐ。(○印國寶 △印重要美術品)

- 鷹見泉石像 帝室博物館
- △海錯圖 岩崎小彌太
- △月下鳴機圖 同
- △所歡校書 同
- 一掃百態 華山會
- 黃梁一夢圖 原 邦造
- △仙桃圖 新津 義雄
- △芝罘祝壽圖 同
- △胡石白猫圖 渡邊善十郎
- △醉李白圖 同
- △目黒詣圖卷 長尾 欽彌
- △千山萬水圖 奈良 盤松
- 花鳥蟲魚畫冊 小坂 順造
- △猛虎圖 本山 竹莊
- △千公高門圖 中野 孝次
- △蘆雁圖 同

十月

帝室博物館繪畫陳列 十月中

佛畫類陳列には平安朝の逸品が多い。即ち東寺十二天像二幅をはじめ藥師寺慈恩大師像、談山神社大威徳明王像、神護寺釋迦如來像、一乘寺天台高僧像、松尾寺普賢延命像、知恩院地藏菩薩像、達磨寺涅槃像、興福院二十五菩薩來迎圖、光明寺二河白道圖等がある。尙繪卷物には信貴山緣起一卷及び紫式部日記繪卷(蛸須賀侯爵家藏)が陳列されたのは特筆すべきことであらう。又同じく融通念佛緣起(清涼寺藏)眞如堂緣起(眞如堂藏)も珍らしい。室町水墨畫系統では默庵筆白衣觀音圖、周文筆竹齋讀書圖、雪舟筆夏冬山水圖等注目される。

紀元二千六百年記念古武具展(東京府)

主催)十月一日—三日 日本橋・高島屋

大谷尊由遺品及西本願寺所藏品展

十月一日—七日 恩賜京都博物館

本願寺法主故大谷尊由の一週忌に當り、その生前の風流雅韻を偲ぶ爲、遺作の書畫及茶器類を陳列したが、それと共に大谷家に傳はる古美術品等を併せて出陳した。

第五同名寶展 十月五日—二十日

阪市立美術館

恒例による展観で鑑賞本位のものを中心として主に室町時代から明治初頃に至る作品を展示した。殆ど關西方面の蒐集家の所藏品で、目新しいものが多く、その點に注目される。左に目錄を掲ぐ。(△)

印重要美術品

(鎌倉末)

舞樂人物圖

善化和尚圖

花鳥圖

蓮池双鷺圖

渡江初祖圖

山水圖

山水圖

張杲老圖

王會圖屏風

荇間孤舟圖

叭々鳥圖

飲中八仙圖

吉野山風俗屏風

源氏繪屏風

松鹿梅鶴圖

梅樹壽老人圖

牡丹鳥禽圖

胡菽風雨圖

山水圖

宮島錦帶橋山水圖

四季山水圖

風雨蕩圖

久晴一雨圖

樞花小禽圖

魚貝圖

江村暴雨圖

秋苑群虫圖

山水圖

山本發次郎

白井 治平

藤澤 清

橋本 喜藏

芳 春 院

湯淺七左衛門

谷 千春

山本發次郎 白井 治平 藤澤 清 橋本 喜藏 芳 春 院 湯淺七左衛門 谷 千春 白井 治平 和田久左衛門 觀 音 寺 田中忠三郎 谷 千春 森山 民彌 村井伊兵衛 宮田 兵三 中島 俊司 安富勘兵衛 橋本 喜藏 中島 俊司 宮田 兵三 湯淺七左衛門 村田虎次郎 中島 俊司 山本 信夫 谷野 彌吉 佐藤 月柯 酒井 利男 吉川友之助

溪山煙雨圖

海棠白鷗圖

花卉禽虫圖卷

大海雲龍圖

蓮池舟遊圖

唐美人採蓮圖

青綠山水圖

赤壁圖

花鳥圖

月夜田家早梅圖

月下狸圖

綿花小禽圖

旭日稻穗圖

源義家圖

仙基圖

寶舟圖

朝陽雙鸞雪鷺圖

仲國圖

白衣觀音圖

紀元二千六百年記念日本文化と京都展

十月五日—二十二日 大禮記念京都美術館

京都市が作歳を奉祝する爲、日本文化にして京都に關係ある資料を蒐めて展觀した。その出陳の資料は各分野に互つて約八百點の多數が展示された。就中古美術品中には國寶、重要美術品等著名な逸品が多く見られた。

永樂陶器特別展 十月五日—十一月十日 大阪市立美術館

了全、保全、和全等の作品が主として陳列された。總點數百點。

白井 治平 酒井安之助 某 氏 白井 治平 柏原孫左衛門 同 橋本 喜造 芝川又四郎 山口 三郎 湯淺七左衛門 岸本兼太郎 湯淺七左衛門 徹山 湯淺七左衛門 吳春 新田 宗一 某 氏 坂井 藍崖 大橋茂三郎 芳園 男爵 住友吉左衛門 谷 千春 寬 慶 寺 仲國 一蕙 爲恭 寬 慶 寺 白衣觀音圖 爲恭 寬 慶 寺 紀元二千六百年記念日本文化と京都展 十月五日—二十二日 大禮記念京都美術館

日本美術協會第百十一回展覧會參考品

陳列 十月六日—二十五日 日本美術協會

御物抱一筆花鳥十二ヶ月圖ノ内「櫻花雉子圖・菊小禽圖」、高松宮家御所藏「五筆三夕圖」をはじめ、足利、江戸期の遺品二十八點が陳列された。

磔川亭蒐集古工藝美術品展 十月九日—十三日 日本橋・高島屋

紀元二千六百年記念日本近世名畫展 十月二十三日—十一月六日 恩賜京都博物館

桃山時代から江戸時代に至るまでの代表作家の遺品を網羅して出陳された。即ち上は永徳松榮からはじまり、南宗、琳派、浮世繪派(肉筆)或は土佐、住吉、洋風畫まで總點數百六十九點であつた。

中に國寶及び重要美術品等に指定された著名なものも多くあつた。又近年種々の意味に於て注目されてゐる長谷川信春久藏の作品と稱されてゐる「名和長年像」「武田信玄像」「大原御幸圖」「祇園祭圖」等が蒐められて居る。これは研究上意義ある提示と言ふべきであらう。尙當展覽會は全體的にも美術史の發展の跡を辿る上に特別の意圖が拂はれてゐることが見られる。その點に於ても有益な展觀であつた。左に目錄を掲げる。(○印國寶)

御物群鷄圖 若冲

花鳥圖屏風 松榮

松鶴蘆雁圖屏風 傳永徳

伯夷叔齊圖 伯爵 室町 公藤

老松圖屏風 同 公爵 九條 道秀

桃雉子圖 山樂

山水圖 光教

繫馬圖 修理

鷹蘆圖 妙法院

山水圖屏風 等伯

傳名和長年像信春 子爵 福岡 孝紹

武田信玄像 同 成 慶 院

大原御幸圖屏風 傳久藏

祇園祭圖 同 帝室博物館

山水人物圖 傳久藏

野馬圖 同 山口 三郎

商山四皓虎溪三笑圖屏風 直庵 山川庄太郎

花鳥圖屏風 同 酒井 利雄

達磨鴨圖 三幅 武藏 菊屋 孫輔

群鷄圖屏風 同 男爵 松井 明之

花鳥圖 襖四面 醍醐寺

宇治川粟津合戰圖屏風 賢勝院殿像 醍醐寺

一照院殿像 聽松院

山水圖屏風 興以 諸戸 清六

花鳥圖屏風 探幽 清 涼 寺

猛虎圖 尙信 子爵 大河内正敏

四季耕作圖屏風 守景 石川 縣

鷹狩圖屏風 同 石崎善一郎

鳥居貫之社人圖 三幅 伯爵 阿部 正直

布晒舞圖 同 遠山 元一

鳥鷺圖屏風 同 田中 宗一 西王母圖 破笠 土屋 茂吉 祇園祭圖屏風友雪 八幡 山町 源氏物語圖 傳光則 西村總左衛門 源氏物語圖 菊屋 孫輔

花鳥圖 梅逸 西村總左衛門

花鳥圖 同 采野 爲吉

△林和靖圖 竹洞 土屋 茂吉

花鳥圖 同 柏原孫左衛門

永源寺觀楓圖 對山 采野 爲吉

奉祝紀元二千六百年記念神道美術展

十月二十五日—十一月八日 大倉集

古館

紀元二千六百年を記念して我國固有の神道思想の具象的表現としての神道美術を提示する爲催された展観である。出陳品は建築、繪畫、彫刻、工藝品等にわたつてゐる。建築は主として寫眞、模型を以てその様式の變遷を示し、殊に鳥居に就いてはその種類を陳べて一目瞭然と形の變化を知り得られるのは興味深い。繪畫は神社の緣起に關するもの、その他垂跡畫等、彫刻は神像彫刻四點が出陳された。尙工藝品には各神社の所藏になる國寶の手筥、鏡類が多く出品された。左にその主要なもの、目録を記す。(○)印國寶

△印重要美術品)

鶴葦草不合尊像

若宮八幡神像

○僧形八幡神像

○石清水八幡宮緣起

二卷

○住吉明神社頭圖

住吉明神像 (鎌倉)

住吉明神像 (江戸)

和歌三聖圖 探幽

○譽田八幡宗廣緣起

(室町)

○那智瀧圖 (鎌倉)

○丹生明神像 (鎌倉)

○狩場明神像 (鎌倉)

△三十番神圖 (江戸)

日光三社權現像 (鎌倉)

役行者及不動像 (室町)

天神像 秋月

△天神像 逍遙軒

△渡唐天神像 光起 男爵

△北野天神緣起 (六卷) 内

北野天神緣起 (室町)

同

○春日曼茶羅圖 (鎌倉)

春日曼茶羅圖 (室町)

△春日曼茶羅圖 (同)

△熊野曼茶羅圖 (鎌倉)

△熊野曼茶羅圖 (同)

△石清水八幡宮曼茶羅 (同)

○石清水八幡宮曼茶羅 (同)

日吉曼茶羅圖 (室町)

○山王靈驗記 (鎌倉)

○箱根權現緣起 (同)

△豐國大明神像 (桃山)

△東照大權現像 (江戸)

雨寶童子像

△祭禮繪草子 (室町)

○男神及女神像 (平安)

△男神像二軀

△藏王權現像 (鎌倉)

藏王權現像 (鎌倉)

狛犬

狛犬二軀 (鎌倉)

狛犬二軀 (鎌倉)

根津育英會

金剛峯寺

本間 光正

輪 王 寺

同

帝室博物館

菅原 壽美

岩崎小彌太

根津育英會

北野神社

能 滿 院

柳原 義光

宮地 直一

岩崎小彌太

内田 孝藏

大倉集古館

井上 三郎

帝室博物館

日枝神社

箱根神社

豐國神社

西 林 寺

宇佐美定憲

前田 利爲

前山 宏平

田万 清臣

幸田彌太郎

山本 倍三

西脇濟三郎

致王護國寺

○藏王權現御正體鏡 (平安)

藏王權現御正體鏡

華嚴形子守三所御正體 (平安)

早馳明神御正體

○月宮鏡 (唐)

瑞雲飛鳥八枝鏡 (奈良)

羽黒山御手洗池埋納鏡

十面

雙龍鏡 (平安)

梅樹雙鳥鏡 (鎌倉)

笹散雙雀鏡 (同)

蓬萊鏡 (同)

檜垣梅樹雙雀鏡 (室町)

○竹虎雙鳥鏡

○黑漆螺鈿飾大刀二口 (平安)

○木地塗螺鈿飾大刀 (同)

沃懸地螺鈿飾大刀二口 (鎌倉)

丹塗弓

黑漆矢五張

金銅檜扇二面

△彩畫檜扇 (室町)

△彩畫檜扇 (同)

○玳瑁裝牙櫛 (平安)

黑漆螺鈿櫛二枚 (鎌倉)

○銀製革帶 (平安)

○秋野蒔繪螺鈿手宮 (同)

○梅樹蒔繪手宮 (鎌倉)

○秋草蒔繪手宮 (同)

○菊蒔繪手宮 (室町)

○菊蒔繪手宮 (同)

東京美術學校

前山 宏平

帝室博物館

安田 一

貫前神社

二荒山神社

香取 秀眞

香取神宮

玉前神社

土師神社

須賀神社

貫前神社

同

嚴島神社

同

鶴岡八幡宮

同

香取神宮

前山 宏平

佐藤豐太郎

土師神社

香取神宮

土師神社

出雲大社

三島神社

春日神社

熱田神宮

香取神宮

○黑漆平文根古志形鏡臺 (鎌倉)

○黑漆鏡臺 (室町)

松喰鶴繪散米衝重 (室町)

同

○銅印 (平安)

銅印 (鎌倉)

黑漆漆畫文臺 (室町)

金銅裝笈 (桃山)

諷訪神社

靜 神社

北野神社

勝浦 孟

十一月

團覺寺風入展観 十一月一日—四日

鎌倉・同寺

白鶴美術館第十四回秋季展 十一月一日—二十日 同館

所藏の古備前、仁清及乾山の銘ある陶器等三十四點を特別陳列した。

東京美術學校秋季特別陳列 十一月三日—九日 同校陳列館

紀元二千六百年記念正倉院御物特別展 十一月五日—二十四日 帝室博物館

館

聖紀にあたり帝室博物館では勅許を得て、正倉院御物の一部を公開し、一般國民に絶大なる奈良文化の跡を示した。知られるやうに正倉院は勅封藏で御曝涼の際特定の者に限り拜觀し得るのみで、このやうな展観を勅許あらせられたのは未曾有のことである。陳列品は北倉の聖武天皇に御由緒の深い御品、又は破損の恐れあるもの等を除かれて、總點數百四十四點であつた。その種類は武具、繪畫、文書、工藝、文房具、伎樂面、等廣汎に互り、且保存完好にして種々の點に於て代表的な御品が選ばれた。しかも之等の

御物は明るい光の下に陳列されて燦然と輝き従来御倉で拜観した者にとつても改めてその高貴な美しさを讃嘆せしめたこととは特記されるべきであらう。尙これと共に法隆寺献納御物三十三點及正倉院御物模造品五十點を併せて展観した。この稀代の展観は文字通り多大の反響を呼び拜観者毎日二萬を超え寔に世紀的な催しとして感銘深きものがあつた。次にその目録を掲げる。

(武具・文房具・文書)

- 梓弓 白葛平胡鞞
- 槻弓 鞞
- 箭五十隻 金銀銅莊唐大刀
- 漆葛胡鞞 黑作大刀
- 黑作大刀 鞞
- 金銀莊橫刀 藏手橫刀
- 無莊刀 鉞(有枝)
- 鉞(無枝) 手鉞
- 手鉞 沈香樺經筆
- 斑竹筆 墨
- 色麻紙二卷 竹帙
- 紅牙撥鏤尺 黒柿兩面厨子
- 白葛箱 柳箱
- 御野國大寶二年戸籍斷簡 豊前國大寶二年戸籍斷簡
- 下總國養老五年戸籍斷簡 大倭國天平二年大稅並神稅收納帳
- 越前國天平四年群稻帳 駿河國天平九年正稅帳
- (調度) 漆挾帙 金銅火舎
- 銅薰爐 木笏
- 革帶 牙櫛
- 瑠璃八角杖 子日手辛鋤

- 斑尾把漆鞘銀莊刀 沈香把鞘金銀珠玉莊刀子一雙
- 紫檀螺鈿把斑尾金銀莊刀子一雙
- 紫檀木畫箱 密陀彩繪箱
- 白瑠璃碗 沈香木畫箱
- 瑪瑙杯 綠瑠璃十二曲長杯
- 平螺鈿背鏡 漆皮八角鏡箱
- 山水鳥獸背團鏡 楓蘇芳染螺鈿琵琶
- 桑木阮成 吳竹尺八
- 牙橫笛 吳竹笙
- 吳竹笙 漆鼓脚
- 伎樂面(力士形) 伎樂面
- 伎樂面(獅子) 伎樂面
- 伎樂面(角アリ) 桑木木畫基局
- 金銀繪基子合子二合 彈弓

- 漆小佛龕屏繪 漆佛龕屏繪
- 漆佛龕屏繪 麻布山水圖
- 麻布菩薩圖 調布
- 布袍 布衫
- 布衫 布袴
- 雜色條帶 具注曆斷簡
- 諸寺三網牒 優婆塞優婆夷貞進解
- 生江息嶋解等 借錢解
- 寫經所布施案 寫經所錢用帳
- 寫經所食物用帳 寫經所用度解
- (染織) 經地狩獵文錦等 赤地唐花文錦等
- 經地大花文錦等 紫地雙鳥文錦等
- 紅地唐花文錦等 花鳥文長斑錦等
- 葡萄唐草文緋綾等 草花文縹綾等
- 連壁文綠綾等 草菱文茶綾等

- 茶地唐花文夾縹綾 橡地花鳥文夾縹綾
- 紫地唐花文夾縹綾 茶地唐花文夾縹綾
- 等 等
- 暈縹夾縹縹等 緋地葡萄鳳風文縹
- 蘇芳地花卉文縹縹 縹地梵文縹縹等
- 霞文縹縹等 草花文刺繡
- (佛具類) 佛像型 銀花盤
- 鐵三鎗 素木三鎗箱
- 斑犀如意 素木如意箱
- 瑠璃如意 赤銅合子
- 金銅大合子 依波理合子
- 金銅花形合子 銀鉢
- 二彩磁鉢 綠彩磁鉢
- 二彩磁皿 二彩磁皿
- (佛具類) 碧地金銀繪箱 黃楊木長八角几
- 粉地彩繪八角几 金銀繪長花形几
- 花鳥密陀繪盆 樹下古人密陀繪盆
- 淺形花籠 深形花籠
- 漆彩繪花形盤 金銅八曲長杯
- 金銅鑲鐸 金銅鑲鐸
- 金銅花菱形風風裁 金銅花菱形花枝裁
- 文 金銅轄
- 金銅杏葉形裁文 (正倉院御物模造) 黃金莊大刀
- 金銀莊唐大刀 十合刀子
- 鮫皮把漆鞘杖刀 四重漆箱
- 赤漆文欄木厨子 蘇芳地金銀繪箱
- 螺鈿唐花文箱 粉地彩繪箱
- 水繪箱 黒漆密陀繪櫃
- 紫檀小櫃 籠箱
- 漆繪彈弓 木畫紫檀雙六局

- 雙六頭六隻 金銀平脫八角鏡
- 銀平脫鏡箱 子日利帶
- 紫檀小架 金銀平文琴
- 金銀繪新羅琴 木畫廿四絃箏
- 螺鈿紫檀五絃琵琶 碧地唐花文錦琵琶袋
- 紫檀金銀繪琵琶撥 螺鈿紫檀阮成
- 紅牙撥鏤琵琶撥 廿竹簫
- 尺八二管 橫笛二管
- 鐵方磬八枚 瑠璃螺鈿槽篋
- 漆槽篋篋 鳥毛帖成文書屏風
- 漆槽篋篋 一隻
- 鳥毛篆書屏風一隻 樹皮色織成
- 花文暈網錦 獅嘯文長斑錦
- 花文橫斑錦 紫地鳳風文錦
- 緋地花文錦 紅地鳥獸文錦
- 紫地唐花文錦 雙鳥文黃綾
- 草菱文綠綾 立菱圓文茶綾
- 雙龍文緋綾 模寫圖卷十卷
- 紫檀金銀繪雙六筒 (法隆寺献納御物) 箭六隻
- 梓弓 壺鏡一雙
- 檜彩繪胡鞞 金銅墨床
- 金銀水滴 法隆寺銅印
- 紅牙撥鏤尺 魚骨笏
- 竹厨子 銅鑪斗
- 口染牙撥鏤針筒三 色氈
- 色氈 赤梅檀經筒
- 珠玉莊沈香經箱 瑠璃黒柿長方几
- 寄木沈香經箱 香木二材
- 金銀繪漆皮箱 漢竹尺八
- 黒漆開元琴 禽獸葡萄背鏡
- 彩繪鼓胴 海磯背團鏡

- 漆繪彈弓
- 漆繪彈弓

- 漆繪彈弓
- 漆繪彈弓

- 漆繪彈弓
- 漆繪彈弓

- 漆繪彈弓
- 漆繪彈弓

- 漆繪彈弓
- 漆繪彈弓

海磯背圓鏡

古人彈琴背圓鏡

犀角如意

塵尾

應量器

五綬鐵鉢

壺鉢

佐波理蓋鉢

佐波理九重加盤

水瓶二口

龍首水瓶

佐波理合子

金銅合子

柄香爐

鎌

鋸

銅釣升

法隆寺獻物帳

法華經

文陀竭王經

細字法華經

陽明文庫展觀

十一月十六—十七日

霞山會館

同文庫所藏の春日驗記寫本二十卷を特別展觀に供した。同本は詞書近衛豫樂院の筆になり、綿密な模して参考に資する處が多かつた。

奉祝紀元二千六百年郷土藝術古瀬戸展

十一月十八日—二十七日 徳川美術館

黄瀬戸、古瀬戸、志野、織部等茶器九十三點を陳列、中に約十點程の名物もあり、注目すべき展觀である。

支那歴代名筆及古美術展

十一月二十一日—二十四日 京都・藤井有鄰館

國民精神文化研究所研究資料展

十一月三十日 同所

十二月

帝室博物館繪畫陳列

十二月 中 武藤家藏愛染明王、同館藏虚空藏菩薩像、田地野家藏十五圓、清野家藏春日曼荼羅等鎌倉期佛畫の遺品として注目され、東福寺維摩像、永保寺千手觀音、天

龍寺觀世音菩薩像等宋代の佛畫の遺品として屈指のものが陳列されて興味深い。

尙支那畫には傳鏡選筆蓮花圖四幅（本法寺藏）任月山筆翠桃書畫圖四幅等も珍らしい。肖像畫には、佛國、佛應禪師の頂相が並列され、繪卷は松崎天神縁起、星光寺縁起（内藤子爵家藏）が陳列された。

大藏會第二十六回展觀

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

十二月二十二日 青山會館

古美術關係彙報

二月

法隆寺國寶保存協議會開催 二月二十日文部省に於て法隆寺國寶保存協議會を開催、昭和十五年度實施する舍利殿、繪殿、傳法堂、東院南門及四脚門、北室院本堂及唐門の維持修理工事並に伽藍保存施設及金堂壁畫保存の計畫を審議可決した。

南斐美術館の創立計畫 和歌山市三尾邦三は其の蒐集古美術品及び私財の寄附を同縣へ申出受理された。これによつて財團法人南斐美術館が創立される豫定である。

伊太利亞に於ける能樂展示會 伊太利亞ローマ藝術劇場に於いて我國能衣裳及能面の展示會を開催するに付き、二月國際文化振興會を通じて潮川侯爵家藏滿光作の翁面をはじめ、美術的價値に富むもの約二十點を送付出陳した。

三月

寧樂美術館設立 奈良に所在する依水園は神戸市中村準策の藏有になるものであるが、この名園を永久的に保存すると共に、所持の美術品を陳列する爲、同園内に美術館を設立することになった。即ち櫻内幸雄、日根松介を發起として財團法人寧樂美術館の設立認可申請中のごとく三月三十一日認可された。(塔影四月號に據る)

法隆寺東院舍利殿下遺構の發見 法隆寺繪殿及び舍利殿地盤下から東西に横はる建築址、井戸等が同調査擔當の淺見清によつて發見された。その遺構は平面の伽藍様式にならず又方位が丁度内外面に偏してゐる點に注目され、所謂東院伽藍以前のものである事が分明であり、その平面の性質、方位の相違によつて全然別個のものであることも明であつて、或はこの遺構は東院舊建築址の中香木堂にあたるのではないかと推察される。(建築史、二ノ二に據る)

古美術關係彙報

池長美術館開館 日本初期洋風美術の蒐集家の一人池長孟は神戸市葺合區熊内一丁目に私設美術館を建設し、三月開館式を行つた。尙年一回適當の期日公開される豫定。

根津嘉一郎記念美術館設立 一月三日八十一歳の高齡を以て逝去せる美術蒐集家根津嘉一郎は生前、その所藏品を陳列する美術館の設立を希望してゐたが、その實現に至らずして逝去した。よつて嗣子藤太郎はその遺志を繼ぎ、全遺産の約五千萬圓及び故人の蒐集品を舉げて財團法人根津育英會に寄付した。即ち同會により、青山六丁目根津邸を改造して美術館を設立せしめることに決定し、三月十八日その大綱を發表した。

四月

法隆寺夢殿觀世音菩薩像厨子の落慶 法隆寺夢殿は嚮に根本的な修理工事に著手して居たが、その修理の終了に際し同

堂本尊救世觀世音の厨子が、佐伯定胤、正木直彦の發願によつて計畫されてゐた。即ち各方面約四百人より寄進した淨財三萬八千圓(内譯厨子奉造費約二萬五千六百圓、同莊嚴具三千三百圓、本尊寶前燈籠製作費三千圓)を以て岸熊吉設計、木地仕上魚住安五郎、漆工松田權六、圖案小場恆吉、金工清水龜藏、海野清、戸張龍村平藏等監督のもとに製作中の處、完成を見るに至つた。厨子は八角寶形造四方四面厨子で、高さ一丈四尺八寸、法隆寺の古材を用ひ、天平様式を模したものである。同寺に於てはその落慶供養を同月二十一日盛大に舉行した。

五月

法隆寺國寶保存協議會開催 五月十一日法隆寺に於て法隆寺國寶保存協議會を開催、夢殿、東院廻廊の維持修理竣工狀況、寶藏の竣工狀況、舍利殿、繪殿及傳法堂、東院南門及四脚門等の工事狀況及金堂壁畫保存狀況を視察し法隆寺に於ける國寶の保存狀況に關し協議を行つた。

四天王寺五重塔落慶供養 昭和九年大風水災に倒壞の厄に遭つた同塔は、その後天沼俊一博士設計による復興工事が昭和十二年より進められてゐるが、この程漸くその竣工を見るに至つた。新塔は曩に倒壞せる文化十年再建塔婆と同様初重方二十四尺五寸であるが、高さは約二間低く、各重遞減の割合を多くし、屋根勾配を遙に緩にして安定感を増さしめ、又相輪を長大にして塔身の釣合を良好ならしめた。塔高地上百四尺四寸、その中

基臺高六尺七寸、塔身九十七尺七寸、相輪四十尺。新塔は奈良時代建築の様式を主とし、飛鳥より鎌倉頃迄の建築の細部を適當に取入れたものである。此の竣工を期とし同寺に於ては五月二十二日落慶の大法要が執行された。(圖版第七〇頁參照)

六月

法隆寺壁畫模寫の助手決定 六月二十四日文部省會議室に於て法隆寺壁畫保存調査會第三部小委員會(藝術及歴史方面に關する小委員會)を開會、伊東調査會委員長、瀧精一小委員會主任以下委員八名出席、曩に法隆寺壁畫模寫執筆者と決定した荒井、中村、入江、橋本の助手として左記十二名を決定、尙壁面に對する執筆の分擔も十二面の内八面を決定、更に今後の實施方法を打合せて閉會した。

- 執筆者 助手 壁面
- 荒井寛方 森田沙夷、藤井
- 白映、鈴木三朝
- 中村岳陵 吉岡堅二、新井
- 勝利、眞野滿

第一號(大壁) 第二號(小壁) 第五號(小壁)

入江波光 吉田友一、吉田義夫、赤松稜一

第六號(大壁) 第八號(小壁)

橋本明治 村田泥牛、名古屋謙一、吉田善彦

第九號(大壁) 第三號(小壁)

(備考) 尙分擔未定の小壁は第四、七、十一、十二號の四壁である。

七月

法隆寺壁畫模寫許可の件 帝國藝術院會員和田英作は聖德太子の鴻恩奉謝の一念を以て獨力法隆寺金堂壁畫を拜寫し法隆寺に寄進致し度しとの豫ての念願に基き、先般第五號壁を洋風畫法により模寫方を法隆寺に申出たる處同寺に於ても之を受納の意向を以て文部大臣に國寶模寫の許可を願出でた。同省に於ては其の趣旨及び執筆者を適當と認め特に模寫を許可した。

當麻寺本曼荼羅の原寸大寫眞完成

日本學術振興會の補助により、瀧、柴田、大賀の諸博士によつて當麻根本曼荼羅の科學的研究を計畫されてゐるが、今度その實施の第一歩として原寸大寫眞が撮影完成された。(國華、五九八號に據る)

朝鮮總督府發掘事業 朝鮮古蹟研究會の事業として昭和十五年七月より約二箇月に亘り、左記樂浪古蹟の發掘が行はれた。平安南道大同郡大同江南井里第一七號甌榎墳、同貞柏里第二〇〇號木柵墳、貞柏里第一三八號木柵墳にして、この發掘による出土品の主なるものは、

貞柏里第三五六號墳

金銅鉾格一、木柄附鐵斧一、木柄附鐵鑿一、金銅轡一、金銅馬面一、青銅車軸頭一、把手様彫文木製品一、有文漆杓一、水晶切子玉四、

貞柏里第三六〇號墳

青銅龍闕銀金具一

貞柏里第二〇〇號墳

漆奩一、漆盃一、(外底ニ蜀郡青龍志用ノ銘アリ) 漆盃一、漆耳杯一、(外底ニ永平十一年蜀郡西工云々ノ銘、内底ニ利程ノ銘アリ) 漆耳杯三、(内底ニ程ノ銘アリ) 漆耳杯一、(外底ニ建武三十年蜀郡西工云々ノ銘アリ) 漆耳杯一、木製斧一、漆鞘環頭鐵刀一、革靴一足、革紐及附屬金具一括、内行花文鏡、鏡收藏袋一、鏡袋收藏匣一、竹櫛一、銅盤一、漆案一、漆扇壺一、瑠璃一枚二、

貞柏里第一三八號墳

耳飾一對、腕飾一、銀釧及琥珀獸形飾各一、内行花文鏡一、金銅馬面殘缺一、

南井里第一一七號墳

銀釧一、金銅漆器附屬品一、五銖錢一、

九月

法隆寺壁畫模寫に螢光燈使用 九月二十三日より法隆寺金堂壁畫の模寫が開始されたが、薄暗い金堂の内部に於ける照明裝置としては幸にも東京芝浦電氣株式會社マツダ支社に於て理想的な晝光色の螢光燈が最近發明され、この模寫に始めて使用されること、なつた。

十月

法隆寺國寶保存協議會開催 十月二十五日法隆寺に於て法隆寺國寶保存協議會を開催、傳法堂の現状變更の件を審議可決した。

十一月

正倉院御物特別展覧 紀元二千六百年の聖代にあたり、萬邦無比の國體の歴史と尊嚴を國民に示す事業として、勅裁を仰ぎ正倉院御物の一部を帝室博物館に於て公開された。

拜觀を許された御物は聖武天皇に御由緒深い北倉御所藏のもの又破損の恐れあるもの等は御遠慮申上げて、その他百四十餘點が法隆寺獻納御物、及び模造品等と共に出陳された。正倉院御物が公開されたことは實に今回がはじめてのことであつて、會期の十一月五日から二十四日までその拜觀者數は未曾有の大多數に達した。

國華第六百號の發行 東洋古美術の雜誌として斯界に重要な地位を占めてゐる同誌は、この十一月號を以て第六百號の刊を重なるに至つた。即ちその創刊は明治二十二年にかかり、爾來五十二年間に亘る命數を保ち、體裁内容共に益々充實を見つつあることは學界の爲に慶賀すべきであらう。

十二月

法隆寺壁畫保存調查會開催 十二月十三日文部省に於て法隆寺壁畫保存調查會を開催、金堂の建物及壁體に關する建

築、理化學、歴史及藝術の各方面よりする具體的な研究調査及壁畫模寫等に就き協議した。

博物館・美術館新收品

帝室博物館並に公共博物館、美術館の昭和十五年度に於ける主要な新收美術品（繪畫、彫刻、工藝、考古學資料）の目錄を左に掲ぐ。

帝室博物館

繪畫・書蹟

- | | | |
|----------------|---------|------------------|
| 山水人物襖繪
二十四枚 | 圓山 應舉 | 寄贈及買上
川崎武之助寄贈 |
| 郭子儀圖一幅 | 岸 駒 | |
| 三夕圖三幅 | 土佐 光起 | |
| 櫻花圖卷一卷 | 跡見 玉枝 | 作者寄贈 |
| 櫻花圖屏風雙一 | 同 | |
| 鐘馗圖一枚 | 鳥居 清倍 | |
| 蟲牙帖四帖 | 増山 雪齋 | |
| 菊花圖一面 | 金山 平三 | |
| 神戸の港一面 | 藤島 武二 | 作者寄贈 |
| 黃浦江圖一面 | 同 | |
| 雜草圖 | 岡田三郎助 | |
| 澤庵和尚法語一卷 | 宮崎光太郎寄贈 | |
| 瀬戸印花花瓶 | 鎌倉時代 | |
| 三彩陶枕一個 | 唐時代 | |
| 青白瓷日月壺一個 | 宋時代 | 高山嘉平寄贈 |
| 粉引茶盃一個 | 李朝時代 | 宮崎光太郎寄贈 |
| 鍍繪山水圖水指一個 | 野々村仁清 | 鳥居千代松寄贈 |
| 八花形透鐵鐔一枚 | 傳林文七 | |
| 撫肩高肉象嵌鐵鐔一枚 | 傳志水菴五 | |

博物館・美術館新收品

- | | |
|--------------|-------------------|
| 木瓜形高彫鐵鐔一枚 | 銘山城國伏見住金 |
| 丸形象嵌鐵鐔一枚 | 銘山城國西陣住理忠重義 |
| 丸形象嵌鐵鐔一枚 | 銘城州西陣住人正阿彌政徳 |
| 撫肩肉彫鐵鐔一枚 | 銘 義 胤 |
| 丸形象嵌鐵鐔一枚 | 銘國友貞榮作 |
| 禽獸荷文文鏡一面 | |
| 太刀一口 | 銘肥前國住人忠吉作寛永五年八月日南 |
| 黃銅花瓶一個 | 佐藤如湖 |
| 秋草蒔繪鏡筒一合 | |
| 樓閣山水螺鈿料紙硯箱一具 | |
| 琴高仙人彫推黑香合一合 | |
| 南天換蒔繪枕一對 | |
| 桐唐草蒔繪鏡筒一合 | |
| 竹林蒔繪香爐一個 | |

漆工

- | | |
|-----------|--------------|
| 菊花文帷子一領 | 江戸時代 |
| 縫箔境巾裂一條 | 服部きぬ寄贈 |
| チンデ織裂一枚 | |
| 金唐革煙草入 | 龜山宗月寄贈 |
| 榎木武揚所用一具 | |
| 變形四獸鏡一面 | 群馬縣勢多郡芳賀村出土 |
| 馬鐔四個 | 右同 |
| 細文式甕形土器一個 | 千葉縣東葛飾郡大柏村出土 |
| 渦雲文塼一枚 | 朝鮮忠清南道扶餘出土 |
| 鳳凰文塼一枚 | 右同 |
| 蟠龍文塼一枚 | 右同 |

- | | |
|----------|-------------|
| 鬼形文塼一枚 | 朝鮮忠清南道扶餘出土 |
| 環頭大刀一口 | 千葉縣君津郡清川村出土 |
| 有柄細形銅劍一口 | |
| 銅鐔一個 | 京都府舞鶴市下安久出土 |
| 埴輪子持家一個 | 宮崎縣見湯郡西那原出土 |
| クリス形銅劍一口 | 傳朝鮮平安南道出土 |

日本畫

- | | | |
|----------|-------|-----------|
| 春雨 | 板倉 星光 | (第十一回帝)寄贈 |
| くぬぎ林 | 小松 均 | (同) |
| 閑ひ | 福田 翠光 | (第二回文展)同 |
| 南島暮色 | 堀井 香坡 | (第十五回帝)同 |
| 壘粟 | 濱田 親 | (奉祝展)買上 |
| 初夏 | 井上 通世 | (同) |
| 蕨 | 井上 流光 | (同) |
| 朝 | 秋野 不矩 | (同) |
| 朝鮮歌妓 | 中澤 弘光 | (第五回市展)買上 |
| 雲の影走る | 南 薰造 | (同) |
| 花 | 小絲源太郎 | (同) |
| 少女讀書 | 木下 孝則 | (同) |
| 港 | 鍋井 克之 | (同) |
| 牡丹 | 長原 坦 | (奉祝展)寄贈 |
| 想ひ | 横江 嘉純 | (第五回市展)買上 |
| 鑄銅鶴文花瓶 | 香取 正彦 | (第五回市展)同 |
| 瑠璃磁群鸞圖花瓶 | 河村 蜻山 | (第十四回帝)寄贈 |
| 葉文銅花瓶 | 村越 道守 | (奉祝展)買上 |
| 漆兔屏風 | 山崎覺太郎 | (同) |
| 眠處成毯 | 津田 信夫 | (大阪工藝展)寄贈 |

- | | | |
|--------------|-------|----|
| 春日曼荼羅一幅 | | 買上 |
| 長谷雄草紙(模本)一卷 | | 同 |
| 源氏物語繪卷(模本)一卷 | | 同 |
| 住吉風景圖一幅 | 安藤 廣重 | 同 |
| 林和靖圖一幅 | 森 寬齋 | 同 |

工藝

- | | | |
|--------------------|-------|--------|
| 高麗青瓷象嵌菊花文水注一個 | | 買上 |
| 三鳥曆手盃一個 | | 同 |
| 高麗青白瓷刻文盃一個 | | 同 |
| 夔鳳文銅壺一個 | | 同 |
| 正倉院御物模造蜜陀彩繪花鳥文大箱一個 | | 同 |
| 東大寺佛殿發掘狩獵文銀壺一個 | | 同 |
| 宋白瓷黑花樹鳥繪枕一個 | | 同 |
| ベルウ古代織物斷片十七片 | | 同 |
| 朝鮮總督府博物館 | | |
| 細線内行花文鏡一個 | 樂浪 時代 | 白神壽吉寄贈 |
| 面石巖里出土 | | |
| 小銅劍一個 | | 同 |
| 綠袖井戸一個 | | 同 |
| (明器)手塚附近出土 | | |
| 藕心錢一個 | | 同 |
| 右同 | | 同 |
| 貨布一個 | | 同 |
| 金耳飾一對 | 高句麗時代 | |
| 黃海道新溪郡赤余面黒川里出土 | | |
| 青瓷象嵌透彫龜甲文匣一個 | 高麗 時代 | |
| 全羅南道長興郡南面茅山里出土 | | |

(内二、青透象嵌合子五個一組、同上油壺一個、青銅長方鏡一個、銀鍍金針一個ヲ收メテ發見セラル)

彫三鳥草花 李朝 時代
文壺 一個全羅南道高興郡高興邑出上

李王家美術館

朝鮮古美術品

加銹土器一個 新羅 時代

銅製五銚一個 高麗 時代

銅製三具足 同

近代日本美術品

街 三輪 晁勢

洛北の秋 西山 翠嶂

椿 望月 春江

見性寺の燕 野田 九浦

村 ヒマラヤの 矢崎千代二

朝 彫刻・工藝

技藝天 高村 光雲

大楠公像 齋藤 素巖

裸女 藤井 浩祐

鹿置物 伊東 陶山

萬曆赤繪意 宮川 香山

香爐 百子閣塔形

山 北原 千鹿

鳥と實 木村 雨山

古美術保存

保存關係彙報

一月

寶壽院大方丈及靈廟燒失 一月十五日靜岡市の大火に因り同市下魚町所在の國寶建造物寶壽院大方丈(神殿)及靈廟は必死の防火も効なく遂に全焼した。尙同寺の國寶木造阿彌陀如來立像一軀は燒失を免れた。

重要美術品等調査委員會開催 一月十八日文部省に於て重要美術品等調査委員會を開催、繪畫十五件、彫刻一件、建造物十件、文書典籍書蹟七十件、刀劍四十一件、工藝品及考古學資料五十件、合計百八十七件の重要美術品等認定の件を議決した。

三月

國寶保存會開催 三月七日文部省に國寶保存會を開催、大阪府烏帽子形八幡神社所有「烏帽子形八幡神社本殿」の建造物一件、東京府男爵岩崎小彌太所有「絹本著色普賢菩薩像一幅」外七十六件の寶物類の國寶指定の件及國寶建造物「教王護國寺金堂」(京都府)外三件、國寶寶物類醍醐寺所有「木造藥師如來坐像一軀及木造普賢菩薩像一軀」(京都府)の維持修理費補助の件、國寶建造物「丸岡城天守」

(福井縣)外四件の維持修理費を昭和十五年度に於て補助の件並に國寶建造物「諏訪神社々殿」(靜岡縣)外一件の現状變更の件等を夫々議決した。

七月

青森縣三戸郡館村郷社八幡宮の國寶盜難 七月九日右八幡宮所有の左の國寶五件が盜難に罹りたる事實を發見、急遽手配の結果、懸て右盜難品全部は同宮に持ち歸られたが數箇所毀損された。尙右は五月三十日より六月十日頃迄の間に盜難に罹つたものと推定せられる。

- 一、唐櫃入赤絲威鎧 兜大袖付 一領
- 一、唐櫃入白絲威妻取鎧 兜大袖付 一領
- 一、紫絲威肩白淺黃鎧 兜大袖付 一領
- 一、唐櫃入白絲威肩赤胴丸 兜大袖付 一領

- 一、兜淺黃威肩赤大袖二枚付 一頭

國寶保存會開催 七月十二日文部省に於て國寶保存會を開催、京都府教王護國寺所有「教王護國寺講堂」外二件の建造物、京都府大覺寺所有「金地著色牡丹圖襖貼付(宸殿牡丹間)十八面」外三十七件の寶物類の國寶指定の件及國寶建造

物「丸岡城天守」(福井縣)外十二件の維持修理費補助の件、國寶寶物類輪王寺「紙本墨書大般涅槃經集解五十九卷」(栃木縣)外十二件の維持修理費補助の件並に國寶建造物「東照宮社殿」(茨城縣)外五件及寶物類報恩院所有「紙本墨書後宇多天皇宸翰御灌頂御諷誦一通」(京都府)の現状變更の件等を夫々議決した。

重要美術品等調査委員會開催 七月二十四日文部省に於て重要美術品等調査委員會を開催、繪畫四十二件、彫刻十件、建造物八件、文書典籍書蹟百九十六件、刀劍四十五件、工藝品及考古學資料五十件、合計三百五十一件の重要美術品等認定の件を議決した。

史蹟名勝天然紀念物調査會開催 七月二十五日文部省に於て、史蹟名勝天然紀念物調査會を開催、史蹟八幡行宮陸外十二件、名勝尾鈴山瀑布群外四件、天然紀念物蓑曳雞外六件並に天然紀念物「瀬戸鉛山村ノ地層面ノ漣痕」の名稱變更の件等を審議可決した。

十一月

國寶保存會常務委員會開催 十一月二十六日文部省に於て國寶保存會常務委員會を開催、國寶建造物「興福寺本堂」(長崎縣)の維持修理費補助の件及同「靈山寺本堂」(奈良縣)外一件の現状變更の件等を夫々議決した。

十二月

史蹟名勝天然紀念物調査會開催 十二月九日文部省に於て史蹟名勝天然紀念物調査會を開催、史蹟 明治天皇原御小休所外九件、名勝金峯山外一件、天然紀念物地雞外十六件並に史蹟 明治天皇行幸所西郷邸の地域追加及一部解除の件等を審議可決した。

重要美術品等調査委員會開催 十二月十七日文部省に於て重要美術品等調査委員會を開催、繪畫四十七件、彫刻二件、建造物十二件、文書典籍書蹟百九十九件、刀劍四十七件、工藝品及考古學資料九十九件、合計三百六十六件の重要美術品等認定の件を議決した。

文部省告示第四百五十九號 昭和十五年五月十四日

建造物之部

名	稱	構造形式	所有者	所在地
鳥帽子形八幡神社	殿	桁行三間、梁間二間、單層、檜根人母屋造、向拜付檜皮葺	大阪府河内郡三日月村	同上
鳥帽子形八幡神社	殿	同	鳥帽子形八幡神社	同上

文部省告示第五百七十二號 昭和十五年十月十四日

建造物之部

名	稱	構造形式	所有者	所在地
教王護國寺講堂		桁行九間、梁間四間、單層、檜根人母屋造、木瓦葺	京都府京都市下京區四ツ堀通大宮龜人ル九條町教王護國寺	同寺境內
同灌頂院		同	同	同
附(四脚門)	(東門)	取層七間、梁間七間、瓦葺、檜根、等棟造、木瓦葺、本瓦葺、四脚門、屋根切妻造、本瓦葺	同	同

繪畫之部

品目	所有者	所在地
金地著色牡丹圖(宸殿牡丹間)	十八面	京都府京都市右京區嵯峨大澤町
金地著色紅梅圖(宸殿紅梅間)	八面	同
紙本墨畫松鷹圖(宸殿松鷹間)	十三面	同

彫刻之部

品目	所有者	所在地
木造男神坐像	一軀	東京府東京市麴町區六番町
木造女神坐像	一軀	同
木造十二神將立像	七軀	同
木造廣目天谷屬立像	一軀	同

工藝之部

品目	所有者	所在地
銅造善薩立像	一軀	同本郡區金助町
木造聖觀音立像	一軀	同本郡區金助町
木造十二神將立像	一軀	同本郡區金助町
木造狛犬	一軀	同本郡區金助町
木造如意輪觀音坐像(清福堂安置)	一軀	同本郡區金助町

木造(軍荼利明王坐像) 大威德明王坐像

木造毘沙門天立像(本堂安置)

木造藥師如來坐像

銅造藥師如來坐像

木造釋迦如來坐像

木造法道仙人立像(閉山堂安置)

木造僧形坐像

木造千手觀音坐像(本堂安置)

木造藥師如來坐像

木造十二神將立像

木造十二神將立像

木造興正菩薩坐像

木造閻魔王倚像

木造司祿坐像

木造地藏菩薩立像

木造阿彌陀如來坐像

木造藥師如來立像(本堂安置)

木造天部形立像

銅造釋迦如來坐像(本堂安置)

置龍鏡

鉦鼓

黑漆厨子

銅製藥師三尊懸佛

銅鐘

筑前國四王寺址經塚群出土品

銅經筒(木製筒付) 一口
 石造如來立像(手湯七伏) 一軀
 以上第一經塚
 輪積式銅經筒(相輪遊離) 一枚
 以上第二經塚
 瓦管 一口
 以上第三經塚

陶製經筒(蓋破損) 一口
 青白磁盆子 一口
 山吹雙雀鏡 一口
 菊花雙雀鏡 一口
 以上第四經塚

陶製(木製摺疊付) 一口
 中二紙本經卷殘塊十箇アリ 一口
 以上第五經塚
 陶製經筒(蓋破損) 一口
 以上第六經塚

陶壺(六耳付) 一口
 青白磁小壺 一口
 以上第七經塚
 輪積式銅經筒(相輪遊離) 一口
 以上第八經塚
 附 陶製經筒(三紙本墨書法華經八卷アリ) 一口
 輪積式銅經筒(相輪七伏) 一口
 四王寺山出上

文部省告示第五百七十五號 昭和十五年十月二十一日

彫刻之部

木造神像

品目 十軀 所 有 者
 岐阜縣益田郡下呂 八幡神社

昭和十五年度國寶改正 燒失及所有者變更

文部省告示第二十一號 昭和十五年一月二十三日

左記國寶ハ昭和十四年八月二十九日火災ニ罹リ燒失セリ

名 稱 指定告示 構造形式 所在地
 醍醐寺經藏(上醍醐經藏) 明治三十一年內務省告示第百三十六號 桁行三間 梁間二間 檼屋 檼間四 京都府京都市伏見區醍醐東大路町見聖院寺境内

文部省告示第三十七號 昭和十五年一月三十日

左記國寶ハ昭和十二年二月五日火災ニ罹リ燒失セリ

古美術保存

種類 品目 指定告示 所有者
 彫刻 木造 胎藏界大日如來(坐像三軀) 明治三十八年內務省告示第五十八號 新瀨縣北蒲原郡乙村 寶寺
 藥師如來(本堂安置)

文部省告示第九十九號 昭和十五年二月二十日

一國寶中左記甲號ハ昭和十年十二月三日乙號ハ同十三年五月四日丙號ハ同年四月十八日丁號ハ同十四年四月五日孰モ御料ニ歸屬セリ

指定告示 種類 品目 所有者
 甲 號 彫刻 木造 阿彌陀如來立像 一軀 東京府東京市麴町區平河町二丁目 安田善次郎
 昭和十年文部省告示第百七十二號 頭部内面ニ正嘉三年三月廿四日木造畢工匠水仙ノ銘アリ

乙 號 繪畫 紙本著色平治物語繪詞 一卷 東京府東京市四谷區元町 伯爵松平直亮
 昭和六年文部省告示第九號 (六波羅行幸卷)

丙 號 指定告示 品目 所有者
 昭和十一年文部省告示第百二十六號 絹本著色鷹見泉石像 渡邊道山 一幅 東京府東京市本郷區駒込曙町 鷹見久太郎
 天保八年四月ノ年記アリ

丁 號 絹本著色後鳥羽天皇宸影 一幅 神奈川縣橫濱市中區本牧町 原富太郎
 昭和十一年文部省告示第百二十六號 紙本墨書西連假名消息(五通) 一卷 同 同
 紙本墨書賀茂(弘安五年四月廿八日) 一卷 同 同
 氏久置文(同十一年四月廿八日) 一卷 同 同
 紙本墨書賀茂氏久讓狀(建治二年十月十日) 一卷 同 同
 紙本墨書後鳥羽(五通) 一卷 同 同
 天皇宸翰御消息(奧ニ賀茂氏久ノ置文ニ三通アリ) 一卷 同 同
 紙本墨書後鳥羽(きみかよは) 一幅 同 同
 天皇宸翰御詠草(二十首) 一卷 同 同
 紙本墨書後鳥羽(二十首) 一卷 同 同
 皇宸翰古今集拔書(二十首) 一卷 同 同
 承元四年六月廿一日ノ御奥書並ニ文永四年七月十三日賀茂氏久ノ跋アリ

文部省告示第三百五號 昭和十五年四月六日

昭和十四年十二月二日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 關係告示 舊所有者 新所有者
 太刀 銘守次 一口 昭和九年文部省告示第百七十一號 東京府東京市京橋區木挽町一丁目 小倉陽吉 東京府東京市杉並區久我山一丁目 中島喜代一

文部省告示第三百六號 昭和十五年四月六日
 昭和十四年八月十三日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 關係告示 舊所有者 新所有者
 太刀 銘則重 一口 昭和十二年文部省告示第百五十號 高山縣富山市總曲 近藤重孝 高山縣富山市總曲 近藤獎太郎

文部省告示第三百七號 昭和十五年四月六日
 昭和十四年六月二十二日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 關係告示 舊所有者 新所有者
 紙本墨書正嘉三年北山行幸御會歌 一卷 昭和十二年文部省告示第百五十六號 神奈川縣三浦郡蓮子町 安藤翔一 東京府東京市世田谷區野澤町三丁目 安藤兵部

文部省告示第三百八號 昭和十五年四月六日
 昭和十四年十一月十日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 關係告示 舊所有者 新所有者
 短刀 銘光包 一口 昭和九年文部省告示第百九號 兵庫縣武庫郡本山村 河瀬澄之助 東京府東京市杉並區久我山一丁目 中島喜代一

文部省告示第三百九號 昭和十五年四月六日
 昭和十四年六月二十八日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

名稱 構造形式 所在地 關係告示 舊所有者 新所有者
 弘前城 天守、三層天守屋 青森縣弘前市大字 昭和十二年文部省告示第百八十八號 東京府東京市麩布區市兵衛町一丁目 青森縣弘前市 伯備津輕義孝

文部省告示第三百十號 昭和十五年四月六日
 本年二月十一日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 關係告示 舊所有者 新所有者
 紙本墨書大般若經 卷第九十九、一卷 昭和十二年文部省告示第百六十六號 奈良縣奈良市登大路町 廣島縣尾道郡瀬戸 中村正勝 金本耕三

文部省告示第三百十一號 昭和十五年四月六日
 本年二月十五日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 關係告示 舊所有者 新所有者
 太刀 銘國宗 一口 昭和六年文部省告示第百三十二號 東京府北多摩郡武藏野町吉祥寺 赤星鐵馬 新潟縣北魚沼郡小千谷町 西脇濟三郎

文部省告示第三百十二號 昭和十五年四月六日
 昭和十三年十二月六日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 關係告示 舊所有者 新所有者
 鹽山蒔繪硯筥 一箇 昭和六年文部省告示第百九號 東京府東京市中野區本町通六丁目 子爵土屋正直 東京府東京市中野區本町通六丁目 土屋尹直

太刀 銘守家造 一口 同 同

太刀 銘則宗 一口 昭和九年文部省告示第百二十三號 同 同

太刀 銘信房作 一口 昭和十二年文部省告示第百五十號 同 同

太刀 銘恒次 一口 同 同

文部省告示第三百十三號 昭和十五年四月六日
 昭和十四年六月二十日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 關係告示 舊所有者 新所有者
 紙本墨書嚴島御幸記並高倉院昇設記(金澤文庫本) 一帖 昭和十二年文部省告示第百五十六號 神奈川縣三浦郡蓮子町 安藤翔一 東京府東京市世田谷區矢來町 梅澤彦太郎

文部省告示第三百十六號 昭和十五年四月八日
 左記國寶ハ本年一月十五日燒失セリ

名稱 構造形式 所有 所在地
 寶臺院大方丈(神慶) 桁行九間、梁間七間、單層、屋根人母屋造、本瓦葺 寶臺院 靜岡縣靜岡市下魚町 寶臺院 靜岡縣靜岡市下魚町

同 靈廟 寶塔 石造寶塔 桁行三間、梁間三間、單層、屋根寶形造、本瓦葺 唐門 一間、唐門、屋根本瓦葺、延長三十九間、屋根兩下、透塼 同 上 同 上

文部省告示第三百二十七號 昭和十五年四月十日
 昭和十四年八月十六日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目 關係告示 舊所有者 新所有者
 絹本着色孔雀明王像 一幅 昭和八年文部省告示第百十五號 神奈川縣橫濱市中區本牧町 原富太郎 神奈川縣橫濱市中區本牧町 原良三郎

絹本着色 焰魔天像 一幅 昭和八年文部省告示第十五號 神奈川縣橫濱原富太郎 市中區本牧町 原良三郎

絹本着色 一遍上人繪傳卷第七 一卷 同 同 同

絹本着色 支井三藏像 一幅 昭和十一年文部省告示第百二十六號 同 同 同

絹本着色 一字金輪像 一幅 同 同 同

絹本着色 笠置曼茶羅圖 一幅 同 同 同

絹本着色 傳柿本曼茶羅圖 一幅 同 同 同

附紙本墨書 文明八年柿本寺修造 慶範動狀一卷 同 同 同

紙本着色 地獄草紙 一卷 同 同 同

紙本着色 三十六歌仙切(小大君) 一幅 同 同 同

紙本墨畫 維摩文酒筆 佐竹家傳來 一幅 同 同 同

居士像 長祿元年祖默贊 一幅 同 同 同

紙本淡彩 山水圖 橫川贊 一幅 同 同 同

紙本墨畫 布袋圖 宗和贊 一幅 同 同 同

紙本淡彩 四季ノ日本禪人等樹ノ款アリ 一幅 同 同 同

山水圖 一幅 同 同 同

絹本着色 蜀葵遊猫圖 傳毛益筆 一幅 同 同 同

絹本着色 萱草遊狗圖 傳毛益筆 一幅 同 同 同

絹本着色 豐臣秀吉像 慶長三年八月日校 一幅 同 同 同

木造地藏菩薩像 一軀 同 同 同

木造不動明王像 一軀 同 同 同

紙本墨書 最(弘仁四年十一月廿五日奉範宛) 一幅 同 同 同

澄書狀 一卷 同 同 同

紙本墨書 慶滋保胤書狀 一卷 同 同 同

紙本墨書 一字蓮臺法華經 普賢勸發品 見返シニ讀經ノ圖アリ 一卷 同 同 同

紙本墨書 源氏物語浮舟卷殘卷一帖 同 同 同

紙本著色 病草紙 殘欠(白子) 一幅 昭和十三年文部省告示第二百五十六號 同 同 同

紙本著色 伊勢物語繪卷 一卷 昭和十四年文部省告示第三百三十七號 同 同 同

紙本墨書 法非法經 一卷 昭和十二年文部省告示第百七十二號 東京府東京市麴町區平河町二丁目 安田善次郎

紙本墨書 黑氏梵志經 一卷 昭和十二年二月十五日藤原夫人願經(元興寺印)ノ朱印アリ 同 同 同

紙本墨書 註楞伽經 卷第二、第六、二卷 一卷 昭和十二年五月一日光明皇后御願經(天平勝寶七年新トアリ) 同 同 同

紙本墨書 般若心經 一卷 同 同 同

紙本墨書 增壹阿含經 卷第四十九卷 一卷 昭和十二年五月廿三日科野(天寶字三年二月廿三日科野 虫磨寫)善光ノ朱印アリ 同 同 同

紙本墨書 中心經 善光ノ朱印アリ 一卷 同 同 同

紙本墨書 瑜伽師地論 卷第七十八 一卷 神護景雲元年九月五日行信願經(法隆寺一切經)ノ黒印アリ 同 同 同

紙本墨書 法華經 五百弟子受記品 一卷 同 同 同

紙本墨書 四輩經 一卷 同 同 同

紙本墨書 法華經 卷第三 奧二卷兩家經トアリ 一卷 同 同 同

紙本墨書 金光明最勝王經 自卷第三 至卷第五 一卷 同 同 同

紙本墨書 根本說一切有部毗奈耶尼陀那目得伽攝頌 一卷 大唐景龍四年四月十五日ノ譯場列位アリ 同 同 同

紙本墨書 在家人布薩法卷第七一卷 東大寺印ノ朱印アリ 一卷 同 同 同

白描繪料 紙墨書 卷第四斷簡 一卷 同 同 同

金光明經 一卷 同 同 同

法華經 繪料 紙墨書 方便品 一卷 同 同 同

紙本墨書 綴類抄 寬永丁卯孟春日照乘ノ跋アリ 一卷 同 同 同

紙本墨書 兼輔集斷簡 保元元年七月廿五日書寫ノ奥書アリ 一卷 同 同 同

紙本墨書 和歌體十種殘卷 一卷 同 同 同

木造胎藏界八葉院曼茶羅刻 一基 同 同 同

出龕 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

紙本著色 華嚴五十五所繪卷 殘欠 一幅 同 同 同

文部省告示第三百二十八號 昭和十五年四月十日

昭和一十一年十月二十三日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品目 關係告示 舊所有者 新所有者

版本法華經卷第二 一卷 昭和十一年文部省告示第百八十號 東京府東京市麴町區平河町二丁目 安田善次郎

奧二承曆四年六月卅日點了ノ墨書アリ

文部省告示第三百二十九號 昭和十五年四月十日

本年二月十六日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

古美術保存

品目
紙本著色不動利益緣起 一卷
關保告示
昭和十年文部省告示第一二六號
岡山縣倉敷市新川町
大原孫三郎 戸田彌七

文部省告示第四百十五號

昭和十四年九月三十日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品目
木造大日如來坐像 一軀
關保告示
昭和八年文部省告示第三百一號
新瀉縣中蒲原郡金山津村
中野忠太郎 中野孝次

木造地藏菩薩立像 一軀
同
昭和八年文部省告示第三百三十七號
同
新瀉縣中蒲原郡金山津村
同

木造騎獅文殊菩薩及脇侍像 五軀
同
昭和十年文部省告示第三百七十二號
同
新瀉縣中蒲原郡金山津村
同

紙本淡彩湖山小景圖 慧鳳賞 一幅
同
昭和十二年文部省告示第二百八十三號
同
同
同

磁製金欄手花鳥文様鉢 一口
同
昭和十二年文部省告示第二百八十三號
同
同
同

木造不動明王及八大童子像 九軀
同
昭和十二年文部省告示第三百四號
同
同
同

附紙本墨書遺像願文一枚
文永九年十一月廿一日大佛師法眼康圓繪佛師法橋承命トアリ
厨子入木造愛染明王坐像 一軀
同
同
同

木造(獅子) 二軀
同
同
同

大手鑑(第一帖) 九十三葉
第三帖 九十九葉
三帖
同
昭和十三年文部省告示第二百五十六號
同
昭和十四年文部省告示第二百七十三號
同
昭和十四年文部省告示第三百三十七號
同
同
同

紙本著色婦女遊樂圖 六曲屏風 一雙
同
同
同

紙本著色白雲紅樹圖 池大雅筆 一幅
同
同
同

紙本墨書神樂和琴秘譜 一卷
元祿七年近衛基熙ノ跋アリ
同
同

紙本墨書 後鳥羽天皇宸翰 三幅
同
同

紙本墨書後二條 自筆本 一卷
殿記 寫本二十九卷
同
昭和六年文部省告示第三百三十二號
同

紙本墨書琴歌譜 一卷
與三天元四年十月二十一日ノ記アリ
同
同

彩牋墨書倭漢抄 下卷 二卷
同
同

短刀銘吉光 一口
同
同

紙本墨書藤原忠通書狀 三幅
同
昭和八年文部省告示第十五號
同

紙本墨書古語集 一卷
與二承德三年三月五日書寫了上トアリ
同
同

紙本墨書兵古寫本 二十九卷
範記(入軍記)照筆寫本十六卷 四十五卷
同
昭和九年文部省告示第二十三號
同

紙本墨書源氏物語 五十四帖
同
昭和十二年文部省告示第二百五十六號
同

紙本墨書後深草天皇宸翰御消息(御花押) 一幅
同
同

紙本墨書後小松天皇宸翰御消息(御花押) 一幅
同
同

大手鑑(第一帖) 百三十九葉
第二帖 百六十八葉
二帖
同
昭和十四年文部省告示第三百三十七號
同

絹本著色春日鹿曼茶羅圖 一幅
同
同

紙本墨書後拾遺抄上 一帖 昭和十四年文部省告示 第三百三十七號 東京府東京市豊町 區水田町二丁目 公爵 近衛文麿 財團法人陽明文庫

紙本墨書慈圓僧正消息(九品) 一冊 同 同 同

紙本墨書明惠上人消息(六日) 一冊 同 同 同

紙本墨書平信範消息(十二日) 一冊 同 同 同

紙本墨書源家長消息(二月四日) 二幅 同 同 同

紙本墨書冷泉爲相消息並萬里小路宣房返狀 一冊 同 同 同

文部省告示第四百八十四號 昭和十五年六月十二日 昭利十五年五月十日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品目 關係告示 舊所有者 新所有者

紙本墨書假名法華經卷第三 一帖 昭利十一年文部省告示第二百二十六號 京都府京都市下京區西條通東入立賣中之町 土橋嘉兵衛 矢代仁兵衛

紙本著色(素性) 十六歌仙切竹家傳來 一幅 同 同 人

文部省告示第四百八十五號 昭和十五年六月十二日 昭利十五年三月三十一日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品目 關係告示 舊所有者 新所有者

太刀銘國安 一口 昭利十三年文部省告示第二百五十六號 兵庫縣武庫郡福道村 瀨戸保太郎 中迫恂逸

文部省告示第四百八十六號 昭和十五年六月十二日 昭利十四年二月十一日左記國寶ノ所有者ニ以下記ノ通變更アリタリ

品目 關係告示 舊所有者 新所有者

紙本墨書論語鄭注殘卷 一卷 同 同 同

紙本墨書三國志吳志第十二殘卷 一卷 同 同 同

紙本墨書三國志吳志廿三殘卷 一卷 同 同 同

紙本墨書抱朴子內篇卷第一殘卷 一卷 同 同 同

紙本墨書莊子天運篇第十四、知北遊篇第廿二 二卷 同 同 同

古美術保存

文部省告示第五百三號 昭和十五年七月五日 昭利十五年三月十四日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品目 關係告示 舊所有者 新所有者

紙本著色法相宗秘事繪詞 十二卷 昭利六年文部省告示第九號 大阪府大阪市北區 網島町 藤田平太郎 藤田光

紙本著色十六羅漢圖 一卷 同 同 同

紙本著色阿字義 一卷 同 同 同

絹本著色普賢十羅刹女像 一幀 昭利九年文部省告示第二十三號 同 同 同

紙本著色華嚴五十五所繪卷殘闕(十題向十段) 一卷 同 同 同

紙本墨畫柴門新月圖 一幅 同 同 同

著色繪料紙墨書扇面 法華經卷第六殘闕 一枚 同 同 同

文部省告示第五百四號 昭和十五年七月五日 昭利十五年四月四日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品目 關係告示 舊所有者 新所有者

紙本墨畫寒山圖(可翁ノ印アリ) 一幅 昭利十二年文部省告示第二百五十號 東京府東京市豊町 區一番町 男爵 鄉誠之助 長尾欽彌

紙本淡彩放牛圖 一幅 昭利十一年文部省告示第二百五十六號 岡山縣倉敷市新川町 大原孫三郎 三尾邦三

文部省告示第五百三十號 昭和十五年八月五日 昭利十四年二月十一日左記國寶ノ品目下記ノ通改ム

品目 關係告示 舊品目 新品目 所有者

明治三十年十二月二十八日內務省告示第八十八號 十二天像絹本著色掛幅 十二幅 六曲屏風 十二天像絹本著色 一隻 京都府京都市右京區區深澤町四丁目 神護寺

狩場明神像絹本著色掛幅 一幅 狩場明神像絹本著色 一幀 和歌山縣伊都郡高野町 龍光院

色掛幅 (傳弘法大師筆) 色 (傳弘法大師筆)

明治三十年十二月二十八日內務省告示第八十八號

明治三十一年八月一日內務省告示第八十八號

明治三十二年八月一日內務省告示第八十八號

明治四十二年四月二十九號
元亨三年二月ノ裏書アリ

大正八年四月十二日
元亨三年二月ノ裏書アリ

大正十年八月八日
元亨三年二月ノ裏書アリ

昭和三年四月四日
元亨三年二月ノ裏書アリ

昭和十一年五月六日
元亨三年二月ノ裏書アリ

昭和十一年五月六日
元亨三年二月ノ裏書アリ

昭和十一年五月六日
元亨三年二月ノ裏書アリ

昭和十一年五月六日
元亨三年二月ノ裏書アリ

昭和十一年五月六日
元亨三年二月ノ裏書アリ

昭和十一年五月六日
元亨三年二月ノ裏書アリ

昭和十一年五月六日
元亨三年二月ノ裏書アリ

昭和十一年五月六日
元亨三年二月ノ裏書アリ

昭和十一年五月六日
元亨三年二月ノ裏書アリ

昭和十一年五月六日
元亨三年二月ノ裏書アリ

藥師十二神將像絹一本
和歌山伊弉那

本著色掛幅一幀
高野町池

文殊菩薩像絹一本
同

文殊菩薩像絹一本
寶壽院

勤操僧都像絹一本
同

色掛幅一幀
普門院

絹本著色虛空藏菩薩像一幀
神奈川縣鎌倉郡大船町

絹本著色淨土曼荼羅圖一幀
滋賀縣甲賀郡石部町

絹本著色淨土曼荼羅圖一幀
常樂寺

稱名寺伽藍古圖一幅
神奈川縣橫濱市磯子區金澤町

紙本墨畫竹林七賢圖一幀
稱名寺

紙本墨畫花鳥圖一幀
京都府京都市東山区小松町

紙本淡彩琴棋書畫圖一幀
建仁寺

紙本墨畫雲龍圖一幀
同

紙本墨畫山水圖一幀
同

紙本墨畫山水圖一幀
同

紙本墨畫山水圖一幀
同

昭和十四年五月二日
文部省告示
紙本墨書廣福寺
二卷
文書(百八通)
四卷
熊水縣玉名郡石貴廣福寺

昭和十五年九月十六日
文部省告示第五百五十四號
昭利十五年九月十六日

本年八月十五日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通り變更アリタリ

品目
紙本著色三十六歌仙(興風)佐竹家傳來一幅
昭利十一年文部省告示第二百二十六號
京都市東區下京區四條通堺町東區立賣中之町
土橋嘉兵衛
山田勝一

文部省告示第五百五十五號
昭和十五年九月十七日

本年一月四日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通り變更アリタリ

品目
紙本著色繪過去卷第二
昭利六年文部省告示第九號
東京府京都市赤坂區青山町六丁目
根津嘉一郎
財團法人
根津育英會

紙本著色那智瀧圖一幅
同

金地著色燕子花圖(昆形光琳筆)一雙
同

紙本墨書註楞伽經卷第七一
昭利六年文部省告示第三百三十二號
同

紙本墨書根本說一切卷第六一
同

紙本墨書大般若經卷第廿三和銅五年ノ裏書アリ
同

紙本墨書觀世音菩薩受記經(天平六年聖武天皇勅經)一卷
同

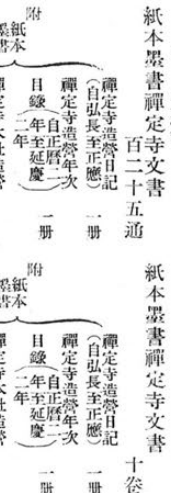
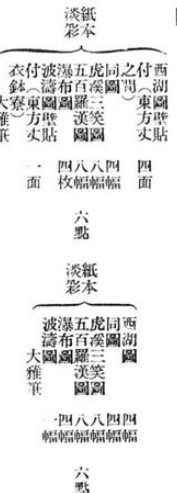
紙本墨書內大臣殿歌合一卷
昭利十三年文部省告示第三十四號
同

紙本墨書金光明最勝王經註釋(飯室切)一卷
同

文部省告示第五百七十號
昭利十五年十月十二日

昭和十五年九月十五日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通り變更アリタリ

品目
手鑑(月琴)(七十八葉)一帖
昭利十三年文部省告示第二百五十六號
東京府京都市澁谷區南平臺町
山田勝一
藤田政輔



品目 關係告示 舊所有者 新所有者

太刀 銘貞次 一口 昭和三十年文部省告示第百七十號 東京府東京市澁谷區豐分町 伯耆 伊東 正治 中島 喜代一

刀 無銘傳則重 一口 昭和三十二年文部省告示第百五十六號 同 人 同 人

文部省告示第五百八十八號 昭和三十五年十一月五日

昭和三十五年九月十七日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品目 關係告示 舊所有者 新所有者

彩霞墨書古今集 二帖 昭和三十五年文部省告示第九號 東京府東京市澁谷區平河町二丁目 三井 高 精 男爵 三井 高大

文部省告示第六百十六號 昭和三十五年十二月十四日

昭和三十五年五月十五日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品目 關係告示 舊所有者 新所有者

紙本墨書一山 (正安三年秋卷) 一幅 昭和三十四年文部省告示第三百三十七號 新潟縣刈羽郡高柳村 山龜 一郎 財 國 法 人

紙本墨書寂室元光墨蹟(龜岩號)一幅 同 同 同 貞觀 國保 存 會

木造藥師如來立像 一軀 同 同 同 會

昭和十五年國寶修理補助金交付額

國寶保存法第十四條ニ依リ國寶維持修理ニ對シ補助金ヲ交付セルモノ左ノ如シ

建造物之部

府縣	件名	修理費豫算額	補助額
福井	丸岡城天守	五七、七四〇、〇〇	一五、〇〇〇、〇〇
滋賀	常樂寺本堂及塔婆	二二、八六〇、〇〇	二一、八〇〇、〇〇
京都	教王護國寺金堂	一六三、九六九、四三	三五、〇〇〇、〇〇
同	萬福寺三門	二七、五八三、五四	八、〇〇〇、〇〇
奈良	昭和三十五年法隆寺國寶保存工事費(舍利殿、繪殿及傳法堂、東院南門及四脚門、北室院本堂及唐門、伽藍保存施設、金堂壁畫保存)	一五〇、〇〇〇、〇〇	一四〇、〇〇〇、〇〇
京都	本圀寺經藏	二三、一六四、九六	三、〇〇〇、〇〇

古美術保存

府縣	品名	目	修理費豫算額	補助額
京都	高臺寺兼亭及時雨亭	九、八〇八、〇八	六、八二八、〇〇	
兵庫	中島神社本殿	一、二五七、八〇	二、〇五七、〇〇	
同	一乘寺塔婆、妙見堂、辨天堂、護法堂	三一、四八〇、〇〇	一一、〇〇〇、〇〇	
奈良	春日神社寶庫、車舍、祭器藏(元禮殿)祭器藏(元酒殿)同神社攝社若宮神社手水屋	三五、八二五、〇九	九、七〇〇、〇〇	
同	雲山寺本堂	六〇、八一五、〇九	二一、〇〇〇、〇〇	
同	吉水神社書院	五九、一八二、七四	三、〇〇〇、〇〇	
香川	國分寺本堂	五八、一七〇、〇〇	八、〇〇〇、〇〇	
長崎	興福寺本堂	四七、四八七、七六	五、七〇〇、〇〇	
計	寶物類之部	二九〇、〇八五、〇〇	〇〇	

府縣	品名	目	修理費豫算額	補助額
栃木	輪王寺 紙本墨書大般涅槃經集解	二、五六二、三〇	一、五〇〇、〇〇	
愛知	妙興寺 紙本著色足利義教像	一六五、九〇	一二〇、〇〇	
京都	相國寺 紙本著色鳴鶴圖	三一、一八〇	二四、〇〇	
同	妙法院 木造千手觀音立像	二〇、八三五、〇〇	一一、〇〇〇、〇〇	
同	醍醐寺 紙本墨畫密教圖像(不動明王像)(毘沙門天像)	二二九、七〇	一八三、〇〇	
同	三寶院 絹本著色五秘密像	三四一、三〇	二七三、〇〇	
同	報恩院 紙本墨書後宇多天皇宸翰御灌頂御諷誦	五七、八〇	四六、〇〇	
同	光臺院 絹本著色尊勝曼荼羅圖	一七三、一〇	一三八、〇〇	
同	寶積寺 木造十一面觀音立像	七、二六一、七五	五、二〇〇、〇〇	
同	同 木造閻魔王坐像	二	〇	
同	同 木造司命坐像	二	〇	
奈良	福源寺 木造藥師如來坐像	一、六〇〇、二一	一、四五〇、〇〇	
同	願成寺 木造千手觀音坐像	二、五四二、八〇	一、五四〇、〇〇	
奈良	淨妙寺 木造藥師如來及兩脇侍像	三、四九七、一五	二、六〇〇、〇〇	
同	藥王寺 木造十二神將立像	十二	〇	
同	同 木造阿彌陀如來坐像	一	〇	
計		五九八、〇九	三〇〇、〇〇	

昭和十五年國寶建造物維持修理 實施狀況

昭和十五年度維持修理竣成建造物 一
五年度に於て維持修理の竣成せる國寶建造物は左の通りである。(竣工順)

名 稱	所在府縣	總工費
吉田神社齋場所大元宮	京都	約二、〇〇〇
唐招提寺禮堂	奈良	約六、〇〇〇
寶臺院大方丈及靈廟	静岡	約七、〇〇〇
延曆寺壇場	滋賀	約八、〇〇〇
御香宮神社表門	京都	約九、〇〇〇
姫路城へノ渡櫓及ノ門西南方土堀	兵庫	約四、〇〇〇
白山神社本社本殿	長野	約〇、〇〇〇
金剛寺塔婆及鐘樓	大阪	約三、〇〇〇
法隆寺東院南門及四脚門	奈良	約一五、〇〇〇
鶴林寺常行堂	兵庫	約一九、〇〇〇
西教寺客殿	滋賀	約三、〇〇〇
萬福寺三門	京都	約二七、〇〇〇
雙栗神社本殿	京都	約 六、〇〇〇
教王護國寺金堂	京都	約一六、〇〇〇

年七月三十一日指定 構造形式・八角殿、屋根入母屋造、茅葺

吉田神社は貞觀年間藤原山陰が祖神大和の春日神を其の邸内に勧請するに創ると云ふ。永延元年官祭に列せられ以後社運愈々隆盛となり、後土御門天皇の文明十六年神職吉田兼俱が唯一崇源神道を唱し社内に新たに齋場所及八神殿を設けるに及び爾後神威益々揚り朝野の崇敬篤く、以て明治に至り官幣中社に列せられた。今の齋場所大元宮は慶長六年の建立にかゝり、特に吉田神道に基く奇古の形式を示すを以て著名である。

近年破損のため昭和十三年十月修理に着手、工事中昭和十四年三月及び同十月の兩度に互り「隆恭肺腑銘」「鈴鹿菊枝氏所藏大元宮繪圖」等を資料として明治以後の姑息的な改變を復舊し、吉田神道上の特徴とする形式を整備する所があつた。(註、本修理は十四年末及十五年一月届出のあつたものである)

現状變更要旨

- 一、後方千木の内ソギなるを外ソギに改む。
- 二、大棟寶篋後方勝男木の一本宛三所なるを三本宛二所に改む。

唐招提寺禮堂

奈良縣奈良市五條町 唐招提寺 明治三十七年二月十八日指定 構造形式 桁行十九間、梁間四間、單屋、屋根入母屋造、木瓦葺

舍利殿及禮堂は元の東室に當り、其の創建に關しては傳はる所詳でない。何時の頃よりか東室として此處に營まれ、やがて千歲傳中には「東室者禮堂絶後建仁年間解脫上人修治之南方十有三間以號禮堂、加干東西一丈故十三間與六間也 中略今歲北方分二其一爲舍利殿中略 其二講房云々」と記し傳へられ、此の時解脫上人によつて舊坊を修治されたのであつた。

其の後弘安六年にも大修造を受けた事が傳へられてゐる。今建物の形式手法を見るに大部分の舊規は鎌倉時代のものなる事を示し、即ち建仁弘安年間の修理再興になるものと考へられる。其の後も寛永十一年、元祿十年等難多な修理を経てはるが、主要部分によく舊規を遺し、往時三面僧房の好參考ともなり又鎌倉時代此の種復興建物の好遺例とされてゐるのである。

本建物は建仁弘安の大修理以來年を経ること久しく、其の間根本的な修理の實施を見なかつた爲、礎石は不同沈下を來し建物主要部分の全般的腐朽弛緩は軸部及屋根を著しく東南方に傾斜せしめ、加ふるに風雨の浸蝕又は雨漏によつて小屋組軒廻の腐朽損甚しく、全く荒廢の域に達してゐた。

即ち昭和十二年十一月建物全部を一旦解體する根本修理に着手し、十三年中は解體調査を進めるかたはら用材購入一部木作等の工事を行ひ、其の間地盤整理の途中遺溝遺瓦古井戸等の發掘、解體調査

に伴ふ屋根瓦銘の發見等あり、七月には慎重調査の結果姑息的な後世の修補部分を撤しては、鎌倉再興當時の舊規に復すべく現状變更の許可を得た。

現状變更要旨

- 一、禮堂舍利殿講坊柱下後補の根礎石を撤去し腰貫及椽の高さを變更す。
- 二、禮堂梁間を四間に復舊し後補の柱七本を撤去し中古撤去の柱十一本を補入し各柱間の裝置を舊に復し平面を整備す。
- 三、禮堂及舍利殿講坊の廻椽・床・天井を復舊整備す。
- 四、馬道を復舊整備す。
- 五、舍利殿講坊の南面梁間を四間に改め、且つ内部の後補の圓柱十一本を除去し方柱十五本を補入し、佛壇間仕切を撤去し内部全體を開放せる一室に改む。
- 六、舍利殿講坊の北妻の妻飾り東立ちなるを椽首組に改め懸魚の形を改む。

斯くて昭和十四年には此の現状變更許可にもついで建物の組立より細部の裝置、屋根葺まで着々と進められ、昭和十五年一月十日完全に此の大工事を終つたのである。(註、工事中發見の瓦銘及び遺溝遺瓦等については、昭和十四年版に既に報告されてゐる)

寶臺院大方丈及靈廟

静岡縣静岡市下魚町 寶臺院 昭和十三年七月四日

指定 構造形式・寶臺院大方丈（神慶）桁行九間、梁間七間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺、同靈廟、寶臺石造寶塔、臺屋、桁行二間、梁間三間、單層、屋根寶形造、本瓦葺、唐門、一間平唐門、屋根本瓦葺、透扉延長三十九間、屋根南下、本尾葺

寶臺院は寛永三年將軍秀忠の生母西郷局を葬つた龍泉寺を移して改めて伽藍を造營、同五年竣工、其の法名をとつて名付けたものである。當時の棟梁は甲良豊後宗廣と傳へられてゐる。大方丈及靈廟は寺内當時の遺構中でも優秀なるものに屬し、よく建立當時の舊態を保存してゐる。大方丈は内陣に家康の像を安んじ別名を神殿と呼び、右側に御成の間上下段を、左側に方丈及次の間を配し、規模宏壯木割雄大、東海稀に見る大書院造の遺構であり、靈廟は靈屋の背後に石寶塔を置き其の四周に透扉を繞らし正面に唐門を開く靈廟としては特殊な一形式を示し、所傳の如く甲良豊後の遺作とすれば、臺徳院日光東照宮等の諸廟に比してなほ溯るものであり、形態優美内部の裝飾亦華麗で、まことに興味多い遺構であつた。

大方丈靈廟共近年荒廢し特に大方丈は建物全體に部材腐朽構造弛緩し内外雜作の破損多く、靈屋亦屋根大破し、雨漏甚しく、唐門透扉も屋根及軸部主要材の破損腐朽甚しい状態にあつた。

乃ち昭和十四年六月一日總工費四五、〇〇〇餘圓工期二十四箇月を以て根本修理に着手し、靈廟の實測調査及建物の解放を終り、用材購入木作等進捗し、一部軸部の組立に着手すると共に、大方丈の

實測調査を實施中、昭和十五年一月十五日静岡市の大火に類焼、燒盡したのであつた。同年二月十日精算三月二十二日燒失公示と共に自然國寶たる資格の消滅したものである。

延曆寺瑠璃堂

滋賀縣滋賀郡坂本大字坂本 延曆寺 明治四十五年二月八日指定 構造形式・桁行三間、梁間三間、單層屋根入母屋造、檜皮葺

本堂の草創及沿革は詳でないが、天正年間創建、寛永七年改造、寶曆四年修造とも傳へ、「西塔堂合並各坊世譜」には「天正年中古地に就て艸堂建立、寛永七年重建新營縱横各三間と云ふ元祿六年正琳坊の舊撫に移す」とあり、現在建物の形式手法より見れば室町中末期の建立になるもの、如く、天正寛永の修補、元祿移建の大修理を経て今日に存するものと見られてゐる。なほ寶曆元年及寛政十年文化二年等の瑠璃堂御修葺箇所帖或は覺等の古記がある。大正七年風害によつて破損、古社寺保存法によつて根本修理を受けたが昭和十三年十月二十一日又々強風のため寂山内諸處に倒木があり、瑠璃堂側目通り徑三尺許りの檜の巨木が棟上に倒れか、つて屋根軒廻等を大破し、建物全體も亦東北方へ傾斜するに至つた。乃ち建物全體を一旦解體し破損材の補修取替をなし再び組立てる方針の下に昭和十四年七月着手、山上寒氣強く冬期勞營不可能のため極力工事を進め十四年中殆んど全工事を終り、十五年に入つては僅かに殘務整理を行つたものである。修理

中本堂が室町時代の建立になると認められる各種細部舊材の調査が完全に出来、又小屋裏から發見された頭貫や臺輪の古材が素木造である所から現在の彩色は元祿修理以後のものである點よりしても創建當時は堂そのものが素木造であつたと推察されるに至つた。

(圖版七一頁参照)

御香宮神社表門

京都府京都市伏見區御香宮門前町 御香宮神社 明治三十九年四月十四日指定 構造形式・三間一戸門、屋根切妻造、本瓦葺

社記に依れば伏見城の遺構を元和元年當社に移建したものであると云ふ。其の構造形式に如何にも城中の一門であつた特徴を示し細部によく桃山時代の手法を止め又移建當時の形式手法をも多く混じてゐる。木割雄大、豪壯の氣風に滿ちた意匠になり高臺寺の表門と共に此の種遺構の代表的なものである。昭和九年の風害の爲め軸部に弛緩を來たし、軒先は荷重のため垂下し、建物全體に傾斜を見る状態にあつた。即ち昭和十四年八月修理に着手、建物全體を一旦解放しコンクリート地形を施し軸部組直しの上小屋組を改造補強し屋根瓦を整へて昭和十五年三月二十日維持修理を完了したのである。修理中破風板拜みの部に城門時代の大金具の痕跡を發見し、創建當時の豪華な裝飾の一部を偲び得たのであつた。

姫路城へノ渡櫓及るノ門西南

方土堀

兵庫縣姫路市本町國（文部省所管）昭和六年十二月

十四日指定 構造形式・へノ渡櫓、單層渡櫓、兩端寄折、屋根本瓦葺、へノ門西南方土堀、延長四百六十二尺、銃眼二十八所、屋根本瓦葺

へノ渡櫓は本丸北側の帶郭を圍み、イロハニホの各櫓渡櫓と共に所謂塩櫓と呼ばれる一郭をなし、その東端を占める建物である。本丸重要な構へであるから慶長築城當時の創建と考へられるが、其の創立沿革に關しては何等詳細を傳ふる所がない。江戸中期以後の古圖には立派に今の建物があらはれてゐる。建物は本丸帶郭の屈折する石垣の上に沿つて極めて自由に建てられた普通の渡櫓で、構造其他に他和相異なる點はないが所謂寄折する屋根小屋組等の仕様はまことに無難作な點が多く、やがて雨仕舞構造等の點から破損腐朽も繁く、現に修理前に於ける有様は屋根に雨漏を生じ主要部材の腐蝕甚しく特に最近の亂暴な改變のため舊趣を失ふ所が多かつたものである。へノ門西南方土堀は其の中央部石垣が崩壞し、其の上の土堀も亦これにつれて倒壞したもので、石垣の修築と共に土堀の修理を行つた。へノ渡櫓内部の整備に關しては別記の如き現状變更が行はれ、本丸外郭の重要な渡櫓としての形態内容とも完全に整備されたのである。

東西二室の土間なるを床板張りに改め、之に伴ひ各一所の出入口を整ふ。

法隆寺東院南門及四脚門

奈良縣生駒郡法隆寺村大字法隆寺 法隆寺 明治三十三年四月七日指定 構造形式・南門、三間一戸八脚門、屋根切妻造、本瓦葺、四脚門、四脚門、屋根切妻

造、本瓦葺

東院南門の創立年代は未だ詳でないが東院資財帳所載の「檜皮葺門貳間」の一つであると察しられてゐる。其の後も沿革不明で、屋根鬼瓦及び丸瓦等に長祿三年の銘文を存する所から其の頃の再建かと考へられてゐる。蓋し現在建物の構造形式及び細部手法共よくこれに一致するからである。建立以來妻破風及び軒廻或は屋蓋の一部等に修理を受けたと認められるが、主要部分は比較的よく保存され、當時の八脚門としては構造手法とも實に堂々たる遺構として注意されてゐるものである。爾來相當の年月を経過し、地盤や軸部構架には弛緩を來たし、斗拱藻股桁木負等松材を使用した部分に虫蝕を被り、化粧裏板野地小屋組等特に破損甚しく、屋根は數次の姑息な修補に寸法も質も不揃な瓦を混用し、又扉装置全般の腐蝕弛緩等も甚しいものがあつた。即ち昭和十四年四月五日根本修理に着手し、基礎建物共一旦全部を解放し、完全な修理を行ひ、昭和十五年六月三十日竣成したのである。

東院四脚門も亦創立年次を詳にしないが、古今目録抄記載の「東西四足門在之」とあるもの、一つと推察されてゐる。其の後の沿革も亦詳でない。現在の建物は凡そ鎌倉末期又は室町時代の再建に係るものと考へられ、元祿年間に東院他の建物と共に大規模な修理をうけたと認められ、最近では斗拱以上小屋組野地等後補

の部分が材質技術粗悪なため腐朽虫蝕等甚しく形態構造等にも村や狂ひが生じ、相當荒廢した状態にあつたものであつた。即ち南門と共に根本修理に着手し、竣工も同時であつた。(圖版七一頁参照)

白山社與社本殿

長野縣飯田市上飯田町白山社奥社 白山社 昭和九年一月三十日指定 構造形式・三間社流造、屋根柿葺

當社の創立は詳でない。別當白山寺の寺記に、養老二年泰澄禪師この地に來り風越山頂の神域を相して開山三社權現の神を祭祀すとあり、以後も亦久しく不明である。中世以後累世武家の尊信篤く、屢々其の社殿が造營された事を傳へ、所傳の棟札によれば天正二十年以下寛永、寛文、貞享、寶永、享保、文化、明和、天保等の修補再興をうけ、明治三十四年にも修理があつた事を示してゐる。現在の建物は、室町中末期の建立になるものと察しられ信州地方特有の細部手法をも示し、注意すべき遺構であるが、近年漸く腐朽破損し基礎は處々沈下し建物全體に傾斜し小屋組の弛緩のため背面軒先等は僅に支柱を以て崩落を支へる状態となつてゐた。よつて昭和十四年七月修理に着手し、建物全部を一旦一體する根本修理を行ひ、よく山頂の不便と寒氣を克服して翌十五年五月竣工を見たものであつた。工事中向拜實肘木上端に永正六年の墨書銘を發見し當社殿建立の年時が明白にされ、その他寶永元年、享保十六年、安永四年等の修理墨書が發見された。

金剛寺塔婆及鐘樓

大阪府南河内郡大野村大字天野山 金剛寺 明治四十年五月二十七日指定 構造形式・塔婆、三間二層塔婆、屋根柿葺、鐘樓、桁行三間、梁間二間、重層、袴腰、屋根本瓦葺

當寺は承安年間阿觀上人に依つて中興されたと傳へられ、塔婆は承和元年三月後白河法皇の勅建になると寺傳する。其の後鎌倉時代にも修理を受けた痕が認められ、更に慶長十一年には豊臣秀頼が森長以を奉行として修理を加へた事が初層勾欄の寶珠銘に刻されてゐる。此の時の修理は極めて大規模のものであつたらしく、相當大部の部材が新しくされてゐるのが今に認められる。更に又元祿十三年には上重の組直しを行つたことが寺藏文書に記されてゐる。鐘樓は其の創建沿革共信するに足る所傳がない。現建物は其の形式手法から見れば吉野朝時代の建造になるものと推定され、これ又慶長十一年三月豊臣秀頼によつて片桐市正を奉行として相當の大修理が行はれてゐる。兩棟共に近年破損やうやく進み、屋根の損傷、軒先の垂下、軸部の弛緩、一部用材の腐朽折損等が認められ、特に鐘樓に於ては軒廻斗拱の一部折損崩落を見るものさへ生じ、荒廢著しいものがあつたので、昭和十三年十二月兩棟の修理に着手し、塔婆は初層柱立のみを残して他を、鐘樓は總てを解放して根本的修理を行ふこととなつた。昭和十四年八月塔婆土壇の整理中内陣佛壇下の土中から建立當時

埋設したものと認められる寫經石、寶瓶及舍利塔、更に其の周圍の玉石群中から瓦製土器等が發見された。嘗て石山寺多寶塔の修理に際して基壇土中から鎮壇具を發見したのとは相異し、或は造塔の一形式を示すものとして特に注意されたのであつた。尙塔婆は解體調査の結果、藤原時代の部材手法を残す點も多々あることを認めたが、是は其の儘とし、主として慶長修理の舊規通りを保存するに努めた。屋根は元柿葺であつた事が明瞭になつたので保存上屋根の荷重を減ずる點から云つても良好なため昭和十四年十二月柿葺復舊に關する現状變更の許可を得て之を施行した。昭和十五年に入つてからは、塔婆鐘樓共屋根工事雜作工事等の最後の仕上行はれ、六月三十日無事竣工を見たのである。(圖版七一頁参照)

鶴林寺常行堂

兵庫縣加古郡加古川町大字北在家 鶴林寺 明治四十年五月二十七日指定 構造形式・桁行三間、梁間四間、單層、屋根寄棟造、本瓦葺

當堂は創建沿革共全く未詳である。唯東境の太子堂と共に數渺い藤原時代の遺構と察しられ、鎌倉時代末から室町時代に大修理を行はれた事が屋根其他内外部の細部形式手法から察しられてゐるに止る。斯うした貴重な遺構ではあるが、既に永年修理をうけた跡もなく單に姑息な彌縫的手入れのみ徒に多く、近年荒廢甚しい状態にあつた。即ち昭和十四年七月根本修理に着手し、解體調査の結果内外部に

亙る近年の姑息な修理改變の痕を究明し得て昭和十五年三月別記の如き現状變更の許可を得、途中工費も亦増額を見、同年七月竣工、堂姿初めて舊に返り全く其の面目を新にしたのであつた。

現状變更要旨

- 一、内陣中央一間の竿縁天井なるを折上小組格天井に改め四周の天井を下げた。
- 二、内外陣の間仕切装置を撤去した。
- 三、正面三間開放、右側面第二間板葺、第三間板葺、左側面第二間板葺、第三間板葺なるを孰れも葺戸に改めた。
- 四、兩側面各一間開放、背面中央一間引戸なるを各兩開放扉に改めた。
- 五、兩側面各後端一間及背面兩端一間の板壁なるを眞壁に改めた。

即ちこれ等は幸にも舊部材の残存、或は一部古材に残る痕跡等によつて慎重調査の結果復舊されたもので、大凡藤原時代末期から鎌倉時代の形式状態に還され、東境の太子堂と相並んで数妙い貴重な遺構例を持つこととなつたのである。

尚ほ修理中舊板屋根流葺の古材が多く発見され、藤原時代から鎌倉時代へかけての當堂屋根が特殊な板葺であつた事が判明し、東境の太子堂亦現に同じ手法の痕跡あるを發見したのであつた。又現在の屋根は瓦銘等の發見されたものによるも永録年間の改修になるものであり、屋根流隅棟の線に一種の特徴ある手法を用ひ

たものであつた事が判明した。(圖版七一頁参照)

西教寺客殿(方丈)

滋賀縣滋賀郡坂本村大字坂本 西教寺 明治三十五年七月三十一日指定 構造形式・桁行十二間、梁間八間、單層、屋根片妻入母屋造、片妻切妻造、柿葺

當客殿に關しては創建沿革とも詳細を缺いてゐる。只其の構造形式及び細部手法から見て桃山時代の建造になるものと認められてゐる。明治四十三年の頃早くも當時の古社寺保存法によつて根本修理が施行されたのであつたが、其の後既に三十年の永きを経過し屋根の柿葺は著しく腐朽し、且つ木部床廻盤貼付壁襖等も濕氣と虫害の爲め其の一部は腐朽剥落するに至つたので、昭和十五年二月二十日屋根葺替及其他一部の修理に着手し、同年七月十九日竣工した。本工事は所謂部分修理ではあつたが、其の間柿葺屋根の仕様は勿論、襖貼付壁等の仕様に關しても種々調査する所あり、得る所も又多かつたのである。

萬福寺三門

京都府宇治郡宇治村大字五ヶ莊 萬福寺 大正二年四月十四日指定 構造形式・三間三戸樓門、屋根入母屋造、本瓦葺、附山廊二所、各桁行二間、梁間一間、單層、屋根切妻造、本瓦葺

萬福寺の伽藍は隱元禪師の創始する所凡そ西方丈の寛文元年の建立から總門が元祿六年に成る間、順次佛殿天王殿齋堂禪堂伽藍堂祖師堂鐘樓鼓樓法堂東方丈西方丈三門總門等黃蘗宗特有の堂宇が造營され、整正せる伽藍の規模と特殊な建築

手法とを以て世に著名な所である。三門は即ち伽藍の正門で伽藍中軸線の前端石基壇上に聳立し、其の左右に山廊を附屬する堂々の大字である。延寶六年の建立、當時の明の建築手法を取り入れた所謂黃蘗式の建物で、大棟の寶珠蛭吻、礎盤の太鼓型なる等特徴多い建築である。本建物は化粧材を除く他小屋組材等總て松材が用ひられ、虫蝕を被り既に荷重に堪へず、加ふるに軸部構架材も弛緩を來たし、天井床勾欄等にも腐朽破損せる部分が多かつた。なまたま昭和十一年七月正面上層軒の崩落を見、やがて今回の維持修理となつたのである。即ち修理は基礎一部の矯正補修、軸部構架材の締直し、化粧軒廻斗拱の補修、屋根小屋組の締直し、軒垂下及び狂ひの矯正等を目して昭和十五年三月着手、同年十一月竣工を見た。

工事中屋根土居葺板に「延寶六年云々」の墨書が発見され、當門建立年次の確證を得、また大棟中央寶珠には「元祿拾四年辛巳吉月穀旦 大樹君賜金重修 黃蘗山萬福禪寺 第六代記」とあり、當門重修の次第が明かとなつた。其他大棟の鯨や下層の鬼瓦に宇治の瓦大工山田源左衛門の名が書かれてゐるものもあつた。

教王護國寺金堂

京都府京都市下京區九條町 教王護國寺 明治三十年十二月二十八日指定 構造形式・桁行七間、梁間五間、重層、屋根入母屋造、本瓦葺

慶長四年豊臣秀頼が勅を奉じて再建、

同十一年九月に落慶供養を行つたのが現在の堂宇で、同じく秀頼造營の方廣寺大佛殿既になき今日桃山時代當時の雄大宏宕なる建築規模を誇る唯一のものとなせられ、又當時代遺構中の大傑作と推されるものである。特殊な天竺様手法を駆使して雄壯の氣宇に満ち、姿態よく整ひ正面上層屋根の處置など古典味豊かなのは金堂創建の舊規をよく生かした點にもよるのであらう。近年破損著しく進み、屋根小屋の腐朽軒先の垂下甚しく、軸部構架材に於ける天竺様特有の挿肘木及通肘木の歪曲柱仕口の破損等は徹底的修理の必要を告げるに至つてゐた。即ち昭和十三年七月根本修理に着手、豫定工費約十六萬圓に上り、近年蓮華王院本堂の維持修理工事に來るの大修理工事であつた。昭和十三年は主として素屋の建設及び實測調査其他に終り、十四年には建物の解放、補促材料の購入引立木作り及び軸部の修補組立が行はれ、十五年には補促材の購入引立木作り及び軸部修補組立の後半部、更に進んで軒廻取付小屋組妻飾の組立屋根工事基礎工事雜作工事等々が順次行はれ、十五年十二月廿日無事此の大工事を終了したのであつた。

建物の解體調査に際しては木材各所の墨書銘使用瓦の刻銘等金堂の再建又は修補に關する好資料が數多く發見され、慶長四年早くも鬼瓦の製作が見られ(「京ちやう四年」とあり)慶長六年八月から八年三月にかけて建物部材に墨書が多く、

紙本墨書正親町天皇宸翰女房奉書(太元八尊像)

一通 長野縣下伊那郡下久堅村 文永寺

太刀銘 來國俊 元應元年八月

同大森區田園調布四丁目

篠原三千郎

紙本墨書後土御門天皇宸翰御懷紙(詠山家夕和歌)

一幅 愛知縣名古屋市昭和區太田町四丁目 高橋佐吉

太刀銘 來國俊 傳一文字

同世田谷區玉川園調布二丁目

久保孚

紙本墨書陽光院誠仁親王御筆御懷紙(秋日詠菊契多福和歌御名アリ)

一幅 和區太田町四丁目 稻木榮三

太刀銘 來國俊 正應三年三月一日

同澁谷區上智町同代々木山谷町

増田次郎

紙本墨書後撰集卷第六斷簡(鳥丸切)

一幅 同東春日郡品野町 定光寺

短刀銘 國光

同代々木山谷町

侯爵山内豊景

紙本墨書本朝皇年合圖

一幅 同東春日郡品野町 堀田英一郎

短刀銘 來國俊

同代々木山谷町

伯耆龜井茲常

紙本墨書後土御門天皇宸翰御詠草

一幅 同海部郡津島町 堀田英一郎

折返銘 備前國住吉次

同代々木山谷町

岡崎

紙本墨書後崇光院宸翰沙玉集六十番

一幅 三重縣桑名市矢田町 竹内文平

刀 金集歌銘 本阿花押

同代々木山谷町

中島喜代一

紙本墨書日本書紀(卷第一、第二各殘卷)

二卷 京都府京都市中京區東洞院通丸太町南人三木木町 守屋孝藏

太刀銘 國宗

同代々木山谷町

角田眞一郎

紙本墨書正親町天皇宸翰御懷紙(詠花逢春久倭哥)

一幅 同大府町三丁目 善田喜一郎

太刀銘 長光

同代々木山谷町

武田秀雄

紙本墨書後陽成天皇宸翰「龍虎」「梅竹」

二幅 同右京區花園扇野町 法金剛院

刀 無銘 傳雲生

同代々木山谷町

森榮一

紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙(詠海邊鹿和歌)

一幅 大阪府大阪市東區伏見町三丁目 古賀勝夫

太刀銘 實阿作

同代々木山谷町

二宮孝順

紙本墨書後水尾天皇宸翰古歌御色紙

一幅 同天王寺區生玉町 竹田儀一

太刀銘 爲次

同代々木山谷町

同

紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙(詠伴菊延齡和歌)

一幅 同 同 同

太刀銘 備前國口爲遠作

同代々木山谷町

同

紙本墨書靈元天皇宸翰古歌御色紙

六幅 同 同 同

短刀銘 備前長船景光

同代々木山谷町

同

紙本墨書東山天皇宸翰御懷紙(詠每日有春和歌)

一幅 同 同 同

太刀銘 備州長船景光

同代々木山谷町

同

紙本墨書秋衣卷第一、第二

二帖 同住吉區濱口町 同 井竹三

短刀銘 藤原貞清

同代々木山谷町

同

紙本墨書兩界曼茶羅集明惠上人筆

一卷 同住吉區濱口町 同 井竹三

刀 肥前國忠吉

同代々木山谷町

同

紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙(詠夜虫和哥)

一幅 兵庫縣武庫郡精道村 山口吉郎兵衛

太刀銘 宇多國房

同代々木山谷町

同

紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙(寶明院宮對斷折)

一幅 同 同 同

太刀銘 正恒

同代々木山谷町

同

附普明院御筆壽字

一幅 同 同 同

太刀銘 宗吉作

同代々木山谷町

同

刀 銘 兼常

一口 東都府京都市小石川區籠籠町 原三右衛門

短刀銘 吉光

同代々木山谷町

同

刀 銘 正恒

一口 同品川區上大崎五丁目 子爵吉川元光

短刀銘 吉光

同代々木山谷町

同

刀 銘 眞則

一口 同五反田五丁目 齋藤茂一郎

短刀銘 吉光

同代々木山谷町

同

刀 銘 國廣

一口 同 同 同

刀 無銘 傳行光

同代々木山谷町

同

應長七年十二月十四日

刀 無銘 傳行光

刀 銘 以南鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋及度々木世劍是也本多飛騨守所持內以有鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋落木世劍是也本多飛騨守所持

同代々木山谷町

同

刀 銘 無銘 傳行光

一口 同 同 同

刀 銘 以南鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋及度々木世劍是也本多飛騨守所持內以有鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋落木世劍是也本多飛騨守所持

同代々木山谷町

同

刀 銘 無銘 傳行光

一口 同 同 同

刀 銘 以南鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋及度々木世劍是也本多飛騨守所持內以有鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋落木世劍是也本多飛騨守所持

同代々木山谷町

同

刀 銘 無銘 傳行光

一口 同 同 同

刀 銘 以南鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋及度々木世劍是也本多飛騨守所持內以有鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋落木世劍是也本多飛騨守所持

同代々木山谷町

同

刀 銘 無銘 傳行光

一口 同 同 同

刀 銘 以南鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋及度々木世劍是也本多飛騨守所持內以有鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋落木世劍是也本多飛騨守所持

同代々木山谷町

同

刀 銘 無銘 傳行光

一口 同 同 同

刀 銘 以南鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋及度々木世劍是也本多飛騨守所持內以有鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋落木世劍是也本多飛騨守所持

同代々木山谷町

同

刀 銘 無銘 傳行光

一口 同 同 同

刀 銘 以南鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋及度々木世劍是也本多飛騨守所持內以有鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋落木世劍是也本多飛騨守所持

同代々木山谷町

同

刀 銘 無銘 傳行光

一口 同 同 同

刀 銘 以南鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋及度々木世劍是也本多飛騨守所持內以有鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋落木世劍是也本多飛騨守所持

同代々木山谷町

同

刀 銘 無銘 傳行光

一口 同 同 同

刀 銘 以南鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋及度々木世劍是也本多飛騨守所持內以有鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋落木世劍是也本多飛騨守所持

同代々木山谷町

同

刀 銘 無銘 傳行光

一口 同 同 同

刀 銘 以南鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋及度々木世劍是也本多飛騨守所持內以有鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋落木世劍是也本多飛騨守所持

同代々木山谷町

同

刀 銘 無銘 傳行光

一口 同 同 同

刀 銘 以南鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋及度々木世劍是也本多飛騨守所持內以有鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋落木世劍是也本多飛騨守所持

同代々木山谷町

同

刀 銘 無銘 傳行光

一口 同 同 同

刀 銘 以南鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋及度々木世劍是也本多飛騨守所持內以有鑑藏於武州江戶感前康繼二ツ朋落木世劍是也本多飛騨守所持

同代々木山谷町

同

同武庫郡鳴尾村 木村巳之吉

工藝品及考古學資料之部

太刀銘 因州住長作 附金打鳥紋打刀拵	兵衛縣武庫郡木山	河瀬虎三郎	黑章威胸紅腹卷
刀 銘 奉納出雲國日御崎靈神 小野繁慶	島根縣日御崎	日御崎神社	銅造立山神立像 慶應二立山神廟如法親王部寬喜二年三月十一日 慶應二越中新川郡口田寺奉鑄ノ刻銘アリ
太刀銘 備前國口河住口兵衛尉藤原爲遠 文保元年丁巳三月	香川縣高松市宮脇	乃村久綱	銅造阿彌陀如來坐像 背函ニ永正三年二月十三日大工河内國 新林住藤原宗次ノ刻銘アリ
太刀銘 康暦元年八月 日包吉	福岡縣戸畑市千防 町四丁目	宮下耕圃	大御堂寺廟所傳 銅製經筒 中ニ經卷殘塊及銅製經 池禪尼墓出土品 卷一竹製經卷一 附陶製經筒破損アリ 皇宋通寶 刀身殘片
金銅裝塔婆文笈 兩側及背面ニ私治二年八月ノ墨書アリ	山形縣東田川郡手 向村	芳賀七右衛門	銅製龍三具足 附箱 底ニ天正十五寄進ノ墨書アリ
馬鐸 上落合出土 群馬縣多野郡美土里村大字	群馬縣多野郡美土 里村	宗永寺	土製異形動物 東京府東京市大森區田園調布一丁目出土 銅製三足香爐 底裏ニ永正十八年四月下旬ノ刻銘アリ
磁製五彩魚藻文五花洗 大明萬曆年製 磁製青華龍文盒子 大明萬曆年製ノ銘アリ	一箇 東京府東京市芝區 琴平町	井上恒一	銅製獅子鈕鼎形香爐 蓋裏ニ南禪寺方丈傳藥壽玉文三年 丙寅正月日ノ朱漆書アリ
陶製茶色釉七寶刻文梅餅	一箇 同高輪南町	岡野繁藏	蒔繪薄鶉圖文臺
陶製安南燒赤繪金彩唐草八稜皿	一枚 同麻布區飯倉三丁 目	總積重威	陶製搔落白花梅餅
安南燒青磁黑花牡丹文大皿	一枚 同六反坂區青山南町 同六丁目	山田節子	京都府相樂郡高麗 寺金堂陸出土品 金銅製破風拜々金具殘關 鐵釘類
陶製安南燒青華魚文大皿	一枚 同麻布區飯倉三丁 目	山田節子	磁製古九谷色繪鶉圖九稜大皿
青白磁蓮苔鈕瓜形水注	一箇 同麻布區飯倉三丁 目	總積重威	銅製半圓方形帶神獸鏡 吳鳳皇元年ノ銘アリ 傳浙江省紹興古壩出土
陶製三彩飛雲寶相華文三脚盤	一枚 同本郷區湯島三組 町中野區野方町一 丁目	人倉龜	磁製古九谷色繪梅竹鳥圖丸形手鉢
陶製定窯獅鈕蓋瓜形水注	一箇 同中野區千光前町	同	廣鋒銅鉢 破損アリ 福岡縣糸島郡怡土村大字三雲出土
陶製高麗鐵釉胡蘆餅	一箇 同中野區野方町一 丁目	同	佐賀縣東松浦郡鬼塚 狹鋒銅鉢 小破アリ 村大字千々賀出土品 銅戈殘關
陶製瀨戸印花蓮花唐草文四耳壺	一箇 同中野區野方町一 丁目	同	狹鋒銅鉢 破損アリ 佐賀縣東松浦郡北波多村大字須須惠出土
高麗青磁象嵌雲鶴雙鳳文長方形函	一合 同本郷區湯島三組 町中野區野方町一 丁目	小倉武之助	佐賀縣東松浦郡鏡村 狹鋒銅鉢 二片ニ折損ス 細形銅鉢 小破アリ 細形銅鉢 銚先缺欠 碧玉製管玉
銀象嵌圓頭大刀柄頭	一箇 同本郷區湯島三組 町中野區野方町一 丁目	松原正業	佐賀縣東松浦郡鏡村 狹鋒銅鉢 二片ニ折損ス 細形銅鉢 小破アリ 細形銅鉢 銚先缺欠 碧玉製管玉
銀象嵌圓頭大刀柄頭	一箇 同本郷區湯島三組 町中野區野方町一 丁目	松原正業	佐賀縣東松浦郡鏡村 狹鋒銅鉢 二片ニ折損ス 細形銅鉢 小破アリ 細形銅鉢 銚先缺欠 碧玉製管玉
群馬縣高崎市出土	一箇 石川縣金澤市下石 引町	東馬三郎	佐賀縣東松浦郡鏡村 狹鋒銅鉢 二片ニ折損ス 細形銅鉢 小破アリ 細形銅鉢 銚先缺欠 碧玉製管玉
銅製海獸葡萄鏡	一箇 石川縣金澤市下石 引町	東馬三郎	佐賀縣東松浦郡鏡村 狹鋒銅鉢 二片ニ折損ス 細形銅鉢 小破アリ 細形銅鉢 銚先缺欠 碧玉製管玉
銅製雙鬘花枝八花鏡	一面 長野縣南佐久郡田 口村	上宮寺	佐賀縣東松浦郡鏡村 狹鋒銅鉢 二片ニ折損ス 細形銅鉢 小破アリ 細形銅鉢 銚先缺欠 碧玉製管玉
銅製仙岳花枝八花鏡	一面 長野縣南佐久郡田 口村	上宮寺	佐賀縣東松浦郡鏡村 狹鋒銅鉢 二片ニ折損ス 細形銅鉢 小破アリ 細形銅鉢 銚先缺欠 碧玉製管玉
銅製忍冬華文六獸鏡	一面 長野縣南佐久郡田 口村	上宮寺	佐賀縣東松浦郡鏡村 狹鋒銅鉢 二片ニ折損ス 細形銅鉢 小破アリ 細形銅鉢 銚先缺欠 碧玉製管玉
銅製龜鈕孔雀雙鳳十二支鏡	一面 長野縣南佐久郡田 口村	上宮寺	佐賀縣東松浦郡鏡村 狹鋒銅鉢 二片ニ折損ス 細形銅鉢 小破アリ 細形銅鉢 銚先缺欠 碧玉製管玉
銅鏡	一面 長野縣南佐久郡田 口村	上宮寺	佐賀縣東松浦郡鏡村 狹鋒銅鉢 二片ニ折損ス 細形銅鉢 小破アリ 細形銅鉢 銚先缺欠 碧玉製管玉
上野國東叢寺推遷曆元年十二月廿一日大江淨圓ノ 刻銘及天文十二年十一月ノ追銘アリ	一張 愛知縣名古屋市中 區東魚町一丁目	三浦助市	佐賀縣東松浦郡鏡村 狹鋒銅鉢 二片ニ折損ス 細形銅鉢 小破アリ 細形銅鉢 銚先缺欠 碧玉製管玉
鹿地螺鈿梅花文儀仗弓	一張 愛知縣名古屋市中 區東魚町一丁目	三浦助市	佐賀縣東松浦郡鏡村 狹鋒銅鉢 二片ニ折損ス 細形銅鉢 小破アリ 細形銅鉢 銚先缺欠 碧玉製管玉

銅製螺式銅

佐賀縣東松浦郡鬼塚村大字千々賀出土

建造物之部

八箇 佐賀縣松浦郡久里 熊本敬太郎

純本著色煙霞帖 田能村竹田筆 文化八年ノ年記アリ

一帖 東京府東京市大森 區久ヶ原町 代田冬蛙

名 稱

所有者

所在地

石造五輪塔

仁安四年己丑四月二十三日ノ刻銘アリ

一基 岩手縣磐井郡平泉村 釋尊院

岩手縣西磐井郡平泉村大字 中尊寺字衣關八十九番地ノ

紙本著色十王經(敦煌出土) 幸未年董文員供養ノ奥書アリ

一卷 同世田谷區玉川用 賀町一丁目 同深澤町四丁目 長尾欽彌

石造九重塔

元亨第三癸亥三月四日ノ刻銘アリ

一基 福井縣丹生郡赤生村 大谷寺

福井縣丹生郡赤生村大字大 谷寺五十五字堂山三十五番 地ノ一

紙本著色須磨明石圖 土佐光起筆 紙本墨畫伊勢物語繪卷(梵字經)

一雙 同滋谷區猿樂町 同原宿三丁目 男爵團 伊能

石造燈籠

觀應元年庚寅六月廿八日ノ刻銘アリ

一基 福岡縣糟屋郡箱崎町 宮崎宮境

福岡縣糟屋郡箱崎町 宮崎宮境 丙

紙本墨畫降三世明王軍荼利明王圖 高山寺ノ印アリ

二卷 同滋谷區猿樂町 同原宿三丁目 竹岡陽一

文部省告示第五百五十八號

昭和十五年九月二十七日

品 目

繪 畫 之 部

所 有 者

所 有 者

絹本著色愛染明王像

絹本著色騎獅文殊像 虎關ノ贊アリ

一幅 東京府東京市麴町 區六番町 前山宏平

絹本著色熊野曼荼羅圖

絹本著色孔雀圖岸駒筆

一幅 滋賀縣甲賀郡石部 町 常樂寺

紙本著色高士探梅圖 周暹等六僧ノ贊アリ

一幅 同 同 同 上

紙本著色住吉眞景圖 岡田半江筆 天保十二年ノ年記アリ

絹本著色鳥羽天皇宸影

二卷 同大阪府大阪市東區 平野町一丁目 同泉北郡高石町 上野精一

紙本墨畫中殿御會圖

一卷 同 同 同 上

紙本墨畫大隨求曼荼羅諸尊等圖像(曾泉本)

紙本著色不動明王像

一幅 同 同 同 上

紙本著色小大君像(上ノ覺歌仙切)

一幅 同 同 同 上

紙本墨畫松梅溪流圖 海北友松筆 六曲屏

紙本著色風水洞圖 水徳ノ印アリ

一雙 同 同 同 上

紙本著色病婦圖(繪卷斷簡)

一幅 同 同 同 上

紙本著色花合戰圖 六曲屏

紙本著色宗夢童子像 南化ノ贊アリ

一幅 同 同 同 上

紙本著色遊行緣起

一卷 同 同 同 上

紙本著色桐風圖 八曲屏

紙本著色鳥羽天皇宸影

一雙 同 同 同 上

紙本墨畫寒山拾得圖 因陀羅筆

一幅 同 同 同 上

紙本著色鳥羽天皇宸影

紙本著色淺井長政像 鎌市宗純ノ贊アリ

一幅 同 同 同 上

紙本墨畫白衣觀音圖 永樂四年ノ贊アリ

一幅 同 同 同 上

紙本著色淺井長政像 鎌市宗純ノ贊アリ

紙本著色淺井長政夫人像

一幅 同 同 同 上

絹本著色千手觀音二十八部衆圖

一幅 同 同 同 上

紙本著色鳥羽天皇宸影

紙本著色淺井長政夫人像

一幅 同 同 同 上

絹本著色李白觀瀑圖 尾形光琳筆

一幅 同 同 同 上

紙本著色鳥羽天皇宸影

紙本著色淺井長政夫人像

一幅 同 同 同 上

紙本著色山田大主像 津川右衛門尉筆 良琳ノ贊アリ

一幅 同 同 同 上

紙本著色鳥羽天皇宸影

紙本著色淺井長政夫人像

一幅 同 同 同 上

絹本著色西湖湖池大雅筆

一幅 同 同 同 上

紙本著色鳥羽天皇宸影

紙本著色淺井長政夫人像

一幅 同 同 同 上

紙本著色蘭亭曲水圖 中山高陽筆 谷文晁筆 安永七年ノ年記アリ

一卷 同 同 同 上

紙本著色鳥羽天皇宸影

紙本著色淺井長政夫人像

一卷 同 同 同 上

絹本著色月下漁夫圖 寛政八年ノ年記アリ

一幅 同 同 同 上

紙本著色鳥羽天皇宸影

紙本著色淺井長政夫人像

一幅 同 同 同 上

探幽縮圖

四卷 同 同 同 上

紙本著色鳥羽天皇宸影

紙本著色淺井長政夫人像

四卷 同 同 同 上

紙本墨書職原鈔上下
上卷三文明十四年孟秋之比書寫云々ノ奥書アリ
二册 同牛込區矢來町 梅澤彦太郎

紙本墨書伏見天皇宸翰御歌集斷簡(廣澤切二首)
一幅 同小石川區關口臺 牧田清之助

彩賤墨書三寶繪斷簡(重大寺切)りてなきかなしふ
一幅 同 同上

紺紙金字摩訶般若波羅蜜經卷第五(中等尊經)
一卷 同 同上

紙本墨書西光筆假名消息
一卷 同 同上

紙本墨書源通具筆懷紙(秋夜陪住吉社壇同詠三百條書)
一幅 同 同上

紙本墨書藤原秀能筆消息(五日)
一幅 同 同上

紙本墨書藤原有家筆懷紙(詠二首和哥)
一幅 同 同上

紙本墨書和調知顯集
一帖 同 同上

紙本墨書三河物語(上下)
各册二元和八年講義ノ奥書アリ
三册 同 同上

紙本墨書櫻町天皇宸翰武者小路實陰像御贊
一幅 同日黒區上目黒八丁目 子武者小路公共

(追慕儀同三司)回忌和歌
一幅 同深澤町四丁目 阪田八十郎

紙本墨書後水尾天皇宸翰古歌御色紙
(右寂蓮法師、くわてゆく)
一帖 同 同上

紙本墨書短冊手鑑
中ニ後花園天皇以下宸翰九葉アリ
一帖 同 同上

紙本墨書中古六歌仙(叢書歌抄)
一卷 同 同上

紙本墨書現存和詞
一帖 同 同上

紙本墨書宗像文書(三十八通)
一卷 同 同上

紙本墨書史堀慶羅經卷第三
(天平十二年五月一日光明皇后御願經)
一卷 同 同上

紙本墨書優婆離問佛經
(天平十二年五月一日光明皇后御願經)
一卷 同 同上

紙本墨書華嚴經卷第二十二
貞觀十九年、元慶二年儀遠墨子ノ奥書アリ
一卷 同 同上

紙本墨書千載和歌集上
一帖 同 同上

紙本墨書後奈良天皇宸翰御詩懷紙(賦垂絲新菊詩)
一幅 同 同上

紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙(しやたれ)
一幅 同 同上

紙本墨書後花園天皇宸翰源氏物語若紫抄
(御ともむじよまじきと云々)
一卷 同 同上

紙本墨書後奈良天皇宸翰渡唐天神像御色紙形
(人如鳥路)
一幅 同 同上

紙本墨書中臣被訓解
一帖 神奈川縣橫濱市磯子區金澤町 稱名寺

紙本墨書新世繼斷簡(八葉)
一卷 同 同上

紙本墨書吾妻鏡寛元二年記斷簡
一卷 同 同上

紙本墨書法曹類林斷簡(二葉)
一卷 同 同上

紙本墨書古今和歌集斷簡(片假名本)
紙背ニ應永三年七月七日書寫ノ胎經法開書アリ
一卷 同 同上

紙本墨書連歌懷紙(正慶元年九月廿三日夜)四葉
一綫 同 同上

紙本墨書連歌懷紙(元弘三年十月廿三日夜)四葉
一綫 同 同上

紙本墨書本朝文粹卷第一、殘卷
一册 同 同上

紙本墨書弘決外典抄卷第一、第二、第三
卷第二弘安七年六月十五日圓種ノ奥書アリ
三帖 同 同上

紙本墨書諸經要文伽陀集上中下
(紙背ニ弘安十一年(下卷)、正應四年(上卷)、元應二年(中卷)ノ假名曆アリ)
三卷 同 同上

紙本墨書善財童子緣起殘卷
一卷 同 同上

紙本墨書泰澄和尚傳
文永十二年四月廿四日書寫ノ奥書アリ
一帖 同 同上

紙本墨書南史列傳卷第三十八(二十三張)
正中二年五月廿四日書寫ノ奥書アリ
一册 同 同上

紙本墨書卜華書卷第廿三斷簡
紙背ニ受善臨戒儀ノ書寫アリ
一卷 同 同上

紙本墨書伏見天皇宸翰三十番歌合(判詞藤原)
一卷 同 同上

紙本墨書萬葉集卷第九殘卷(冊子改裝本)
三卷 同 同上

紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙(おほあらかの)
一面 同 同上

紙本墨書和漢朗詠集卷下斷簡(戊辰切)故宮付故宅
一幅 同 同上

紙本墨書中御門天皇宸翰御願文(享保十八年十)
一卷 同 同上

紙本墨書後深草天皇宸翰御消息(みくらの事)
一幅 同 同上

紙本墨書長者子制經
(天平十二年五月一日光明皇后御願經)
一卷 同 同上

紙本墨書小品般若經卷第九
(天平十二年五月一日光明皇后御願經)
一卷 同 同上

紙本墨書摩訶僧祇律卷第廿八
(天平十二年五月一日光明皇后御願經)
一卷 同 同上

紙本墨書虛空孕菩薩經卷下
(天平十二年五月一日光明皇后御願經)
一卷 同 同上

紙本墨書大威德陀羅尼經卷第十五
(天平十二年五月一日光明皇后御願經)
一卷 同 同上

紙本墨書根本説一切有部苾芻尼毗奈耶卷第九
(天平十二年五月一日光明皇后御願經)
一卷 同 同上

紙本墨書一切有部發智大毗婆沙論卷第一
百一十六(天平寶字六年四月八日僧光覺願經)

一卷
京都府京都市中京區東洞院通丸太町南人三本木町

守屋孝藏

紙本墨書靈元天皇宸翰御消息(十二日御花押難波督冠)

一幅
兵庫縣武庫郡精道村

是則照義

紙本墨書摩訶利頭經

一卷

同

紙本墨書梁塵秘抄口傳集卷第十殘卷

一卷

和田種之助

紙本墨書大般若經卷第三百一

一帖

同

紙本墨書後水尾天皇宸翰古歌御色紙(秋の色に)

一幅

茶谷保三郎

紙本墨書方廣大莊嚴經卷第九

一卷

同

紙本墨書源俊房等願文集
寬元三年十一月二日宗性ノ跋アリ

一卷

藥師院保實

紙本墨書大方廣佛華嚴經卷第十七

一卷

同

紙本墨書後伏見天皇宸翰伏見天皇御置文寫
(正安三年九月一日)

一幅

保井芳太郎

紫紙金字華嚴經卷第廿斷簡

一卷

同

紙本墨書王義之尺牘(海目帖)

一卷

安達萬藏

紙本墨書大般若經卷第六十八、第六十九、第七十(和銅本)

三帖

同

刀劍之部

廣島縣廣島市大手町九丁目

同

紙本墨書明惠上人夢記(建永元年九月十四日)

二幅

同

太刀銘
長光

北海道有珠郡伊達町

男爵伊達廉夫

紙本墨書後相原天皇宸翰懷紙(葉二百和番紅)

一幅

同

太刀銘
備前國住人雲次
正和四年十月一日

北海四國町

同

紙本墨書後奈良天皇宸翰懷紙(葉二百和歌)

一幅

同

短刀銘
大和國高市住口金吾藤原貞吉作
元享四年十一月二日

山形縣西村山郡大谷村

同

紙本墨書後陽成天皇宸翰賀茂明神神號

一幅

同

刀銘
弘化二申ノ月二日依
七十翁藤直胤(花押)

原木縣那須郡大田

大高忠一

紙本墨書後水尾天皇宸翰御勸近衛信尋消息

一幅

同

刀銘
備前國住長船次郎九郎祐定作
天文十二年二月吉日
爲浦上與四郎政宗作之

東京府東京市芝區三田四國町

國藤廉太

紙本墨書伊勢物語傳爲家筆

一帖

同

太刀銘
兼氏

同

同

紙本墨書靈元天皇宸翰源氏物語不審條々
附靈元天皇宸翰御消息(押八月十日御花)一通

一卷

同

太刀銘
吉房

同

同

紙本墨書正親町天皇宸翰女房奉書(天正元年十月廿六日)

一幅

同

太刀銘
親次

同

同

紙本墨書後水尾天皇宸翰懷紙(比叡山中堂に)

一幅

同

太刀銘
國信

同

同

紙本墨書後小松天皇宸翰懷紙(すはらきの)

一幅

同

太刀銘
傳雲次

同

同

紙本墨書東山天皇宸翰御懷紙(詠每日有春和哥)

一幅

同

太刀銘
備州長船基光

同

同

紙本墨書會根好忠集斷簡(夏中、五月上)

一幅

同

短刀銘
江州甘呂
俊長

同

同

紙本墨書正親町天皇宸翰一枚起請文
文藏第正磨林鐘念五日尊朝親王御授與ノ記アリ

一幅

同

刀銘
源清麿
弘化丁未年八月一日

同

同

紙本墨書清水寺假名緣起

一卷

同

刀銘
弘化丁未年八月一日

同

同

紙本墨書禊王家和歌合

一卷

同

短刀銘
景光

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(庚申夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(辛酉夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(壬戌夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(癸亥夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(甲子夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(乙丑夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(丙寅夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(丁卯夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(戊辰夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(己巳夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(庚午夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(辛未夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(壬申夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(癸酉夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(甲戌夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(乙亥夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(丙子夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(丁丑夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(戊寅夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(己卯夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(庚辰夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(辛巳夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(壬午夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(癸未夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(甲申夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(乙酉夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(丙戌夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(丁亥夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(戊子夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(己丑夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(庚寅夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(辛卯夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(壬辰夜)

一卷

同

太刀銘
國俊

同

同

紙本墨書禊王家和歌合(癸巳夜)

鶏形埴輪頭部	一箇	大阪府泉北郡高石町	本山彦一
愛媛縣喜多郡久米村出土			
鹿角製刀装具	二箇	同	同
福岡縣糸島郡雷山村大字雷山古墳出土			
銅製壺蓋	一雙	同	同
福岡縣東地方古墳出土			
石人頭部	一箇	同	同
福岡縣八女郡吉田村出土			
石叢上半部	一箇	同	同
福岡縣八女郡吉田村出土			
山口縣豊浦郡長府町出土鑄錢資料	一括	同	同
鑄室斷片 増塙破片			
樂燒赤茶碗銘道人作	一箇	兵庫縣武庫郡住吉村	野村徳七
徳島縣名西郡下分上山村大字下分上山出土			
平形銅劍	一合	同	同
徳島縣名西郡下分上山村大字下分上山出土			

建造物之部

石造燈籠	一基	滋賀縣滋賀郡坂本村西教寺	滋賀縣滋賀郡坂本村西教寺境内
石造燈籠	一基	同甲賀郡石部町常樂寺境内	同甲賀郡石部町常樂寺境内
石造五輪塔	一基	京都府相樂郡當尾村岩船寺	京都府相樂郡當尾村岩船寺境内
石造十三重塔	一基	大阪府大阪市西區松島町一丁目	大阪府泉北郡大津町下條八百八番地
安貞元丁亥口ノ後刻銘アリ			
石造燈籠	一基	奈良縣高市郡高取町南法華寺	奈良縣高市郡高取町南法華寺境内
大永七年七月七日ノ刻銘アリ			
石造燈籠	一基	同北葛城郡新庄町置恩寺	同北葛城郡新庄町置恩寺境内
文龜二年壬戌仲夏ノ刻銘アリ			
石造寶篋印塔	一基	和歌山縣東牟婁郡那智町青岸	和歌山縣東牟婁郡那智町青岸境内
元亨三壬辰三月十日ノ刻銘アリ			
石造七重塔	一基	福岡縣筑紫郡水城村野野區	福岡縣筑紫郡水城村大字片野字般若寺五番地

昭和十五年重要美術品資格消滅

文部省告示第百二號 二月二十二日

重要美術品認定物件中左記甲號ハ昭和十三年一月三十一日乙號ハ同年八月五日、丙號ハ同年十月二十一日孰モ御料ニ歸屬セリ

認定告示	同上	品目	同上	所有者
昭和九年文部省告示第百三十二號	甲	髹漆螺鈿獅子文鞍	一箇	東京府東京市小石川區大塚坂下町 嘉納治五郎
昭和十一年文部省告示第百七十四號	乙	紙本墨書新葉和歌集 寛政四年十月七日銘至 書寫校合ノ奥書アリ	一冊	京都府京都市上京區藥屋町 富岡益太郎
昭和十年文部省告示第百十八號	丙	石造菩薩半跏坐像(頭部左腕等ヲ缺ク) (舊天龍山石窟佛)	一軀	大阪府大阪市東區高麗橋一丁目 山中定次郎

文部省告示第四百四十九號 五月三日

重要美術品等認定物件中左記ハ國寶保存法第一條ニ依リ本日國寶ニ指定セラレタルヲ以テ其ノ認定物件タル資格ハ消滅セリ

認定告示	同上	品目	同上	所有者
昭和八年文部省告示第百七十四號	同	紙本著色普賢菩薩圖	一幅	東京府東京市麻布區島居坂町 男爵岩崎小彌太
	同	紙本著色榮華物語繪卷	一卷	同
	同	紙本著色住吉物語繪卷	二卷	同
	同	紙本著色三益齋圖(周文筆 周釐外 附地芳筆三益齋圖序文 應永戊戌年記アリ)	一幅	同
	同	紙本著色蜀山圖(龍派、兼良ノ賛アリ 記アリ)	一幅	同
	同	紙本著色萬里橋圖(應仁丁亥ノ年 記アリ)	一幅	同
	同	紙本著色源氏物語圖(野村宗達筆 六曲屏)	一雙	同
	同	紙本墨畫羅漢圖(牧溪筆)	一幅	同
	同	紙本墨畫祖師圖(因陀羅筆 楚石ノ賛アリ)	一幅	同
	同	紙本墨書龜山天皇宸翰(嘉元三年 八月五日)	一通	同本郷區駒込西片町 佐佐木信綱
	同	紙本墨書神代上卷斷簡	一幅	同
	同	版本十誦尼律卷第四十六卷(宋開寶七年 製二年印)	一帖	同下谷區上根岸町 中村不折
	同	太刀銘 寶壽	一口	同趣町區平河町六丁目二三 松方方 赤星鐵馬
	同	太刀銘 備前國長船住長義	一口	同
	同	短刀銘 則重	一口	同牛込區市谷仲ノ町 子爵井伊直方

の築城次第は華城々役儀軌として記録されてゐる。城廓の四方に門を開き、蒼龍門は東門に當る。

水原城廓の修理は昭和六年より初められ、華西門（西門）華虹門（北水口門）訪花隨柳亭、華西門脇の空心墩、長安門（北門）と引續き施工され、昭和十四年六月に蒼龍門の根本的修理に著手し、十五年十一月竣工を見たのであるが、同附屬薨城の修理は十六年に引續き行はれた。

修德寺大雄殿

寶物第三三八號、忠清南道禮山郡德山面修德寺、昭和十二年五月二十三日指定、構造形式、桁行三間、梁間四間、單層屋根切妻造、瓦葺。

修德寺の創建は三國時代百濟にあるものらしく、唐續高僧傳の伯濟僧釋慧顯傳に「初住本國北部修德寺」とある修德寺に比定せられ、修理に際して發見された古瓦に略々この時代に屬すべきものと認められるものがある。沿革は明かでない。

現在の大雄殿は修理に當り肘木上端に至大元年戊申四月十七日立柱或は華盤下端に至大元年戊申四月廿四日修德寺造成衆目抄記等の墨書銘を發見して建立年代を明にし、嘉靖七年に彩色を改めたる由の胡粉書あり、乾隆十六年（紙本墨書）同三十五年（天蓋鼻隱墨書）嘉慶八年（破風極裏板墨書）の紀名あるを見出して夫々屢次修理の加へられたことも明になつた。昭和十二年一月に根本的修理に着

手、十五年十二月にその工を竣つた。修理中當局の許可を得て床板張を印漆喰床に改め、正面扉を舊規に復し、土壁構造を強化する現状變更を行つた。尙斗拱間の壁又妻壁に建立當初描かれし天女草花等の繪畫を後世上塗せる壁土を剝ぐことによつて發見した。

以上の根本的修理とは別に昭和十五年中には江陵客舍門（寶物第二四九號）平壤牡丹臺（古蹟及名勝第一號）中の城壁一部を夫々應急的修理なし、昭和十三年六月に倒されたる神福寺址三層石塔（寶物第一四〇號）掘山寺址（寶物第一二七號）を再建した。

美術市場

東京美術俱樂部

兵庫縣某舊家賣立 二月二十六日
古畫、新畫、工藝品等合計百十七點で
古畫中には南宗畫が最も多い。

展觀入札賣立 三月四日
繪畫は全部新畫で、洋畫も數點含まれてゐる。尙工藝は殆ど髹漆品で、合計三百三十五點であつた。

三樂莊・某舊家賣立 三月十日
古畫は榛原家傳來と稱する抱一の「中仁徳帝左右春耕秋收」三幅對を筆頭に浮世繪、狩野派等比較的多い。新畫は龍子の「戰捷の姿」をはじめとして相當多數展示された。其の他筆蹟、工藝品各種合せて四百二點であつた。

松鶴莊賣立 三月十八日
橋本家賣立 三月十九日
美術蒐集家として著名であつた故橋本辰二郎の蒐集品中支那を除く二百十三點が展示された。その中蕪村筆「野晒紀行」及び「奥の細道」の俳畫屏風は嚮に重要美術品等に認定されてゐる名品である。尙同じく應舉「牡丹小禽・菊花小禽」双幅、秋暉「群禽」椿山「久能山」等をはじめ南宗畫、圓山四條派等の名品が多く見られた。新畫には廣業の「高山清秋」の六曲屏をはじめ、注目すべきものが頗る多かつた。尙工藝品も百四十點展示された。

某大家賣立 四月十七日

美術市場

古畫、新畫、刀劍、工藝品等三百八十點展示された。就中新畫に逸品が多い。古畫は主として南宗畫、圓山四條派等の畫蹟であつた。

松伯軒・某家賣立 四月二十八日
古畫、新畫、工藝品等百九十六點で、その中新畫が比較的多數であつた。

某大家賣立 五月十五日
重要美術品に認定された「戊辰切」香所筆「宜男清齡」古九谷鳳凰文様皿の三點が先づ注目されるべきものであつた。古畫では南宗畫に比較的優品があり、新畫には御舟筆「晚蟬」鐵齋「青綠山水」等があつた。工藝品には唐招提寺傳來と稱する柄香爐や茶器等に名品がある。入札品總數二百八十八點。

溪壽庵賣立 五月二十五日
繪畫は新畫のみで、玉堂の「一樹の蔭」を筆頭として注目すべきものが多い。尙この他工藝品を合せて百八十六點が展示された。

八木家賣立 六月十八日
新畫が多數で、草雲筆「白雲紅樹」を筆頭として約六十點、その他古畫、工藝品、刀劍、甲冑等二百十餘點であつた。

岡野繁藏賣立 六月二十五日
關領東印度諸島に於て三信洋行を經營する同氏によつて蒐集されたもので、主として支那明代、安南交趾等のジャワに移出された陶磁器、及び同じくジャワの衣裳裂等工藝品百六十三點であつた。就中「古赤繪大鉢」、重要美術品「安南燒

青磁黒花牡丹文大皿」等逸品であり、又宋胡錄等にも注目すべきものが多い。

松洞軒並某家賣立 九月三十日
新畫が最も多く、その他古畫・工藝品等總計四百十八點であつた。

某家賣立 十月八日
伊藤駿一賣立 十月十四日
殆ど全部が日本及支那の古陶磁器で、合計三十九點であつた。

舊大名・某家賣立 十月二十五日
繪畫は全部新畫で百四十三點、外に工藝品を加へて合計三百八十五點であつた。

矢島家・某家賣立 十月二十九日
主として古畫であり、その中でも圓山四條派のものが多い。その他新畫・工藝品等計七十四點であつた。

某大家賣立 十二月四日
繪畫は殆ど古畫で、支那畫、佛畫、繪卷等を網羅して居り注目すべきもの比較的少かつた。その他工藝品を合せて總數四百三十八點であつた。

山村耕花賣立 十二月十七日
重要美術品等に指定された「宋黃釉花瓶」「黒地赤漆繪枇杷文瓶子」「瀬戸印花瓶子」「須惠器鹿小壺付」「同脚付埴鳥撮蓋付」等は珍品として注目される。その他古畫、就中大津繪及浮世繪版畫等に又見るべきものがあつた。尙工藝品を加へて計百三十三點であつた。

名古屋美術俱樂部

翠松庵並某家賣立 一月二十五日
繪畫は新畫が多く、工藝品は殆ど茶器

で、合計約百點であつた。

飄々庵賣立 二月六日
暹日庵並某家賣立 四月九日

大觀「青綠不二靈峰」を筆頭に新畫が最も數多く、又見るべきものも少くない。その他墨蹟、工藝品等合せて百餘點であつた。

清風庵並に某家賣立 五月九日
筆蹟、現代繪畫、工藝品等約百五十點であつた。

市内某舊家賣立 五月二十五日
某家賣立 十一月十日
某家賣立 十一月二十五日
武山福樂庵並某家賣立 十二月十四日

京都美術俱樂部

某家賣立 一月二十二日
古畫、新畫、工藝品等で、古畫は南宗畫、圓山四條派等に逸品がある。總數點二百十八點であつた。

石原家賣立 二月二十六日
古畫、新畫、工藝品等百十七點であつた。

展觀入札 四月五日
重要美術品「飯室切」を筆頭に古畫、工藝品等約三百一點であつた。

當市清風庵並某大家賣立 五月九日
當市内貴家賣立 五月二十七日
繪畫は比較的新畫が多い。尙筆蹟は頼山陽筆「詩卷」を筆頭に明治元勳の遺蹟等が多い。その他工藝品を合せて三百三點であつた。

兵庫栗庵賣立 六月十七日
古畫、新畫、筆蹟、工藝品等二百二十

七點が展示された。

第二回内貴家賣立 六月二十九日

佛畫に逸品が見られた。即ち重要美術品等認定の「春日曼荼羅」をはじめ「楊柳觀音像」「地藏菩薩像」等が挙げられる。又同じく「道成寺縁起繪卷」も注目すべきものである。その他新畫、工藝品等を併せて總點數二百二十五點であつた。

市田芙蓉館賣立 十一月十八日

古畫は南宗派、狩野派が比較的多い。其の他新畫、工藝品等合計二百八十五點。

大阪美術俱樂部

某家賣立 二月七日

三樂庵賣立 二月十六日

倉敷市大原孫三郎の蒐集品の一部で、國寶宗丹筆「放牛圖」及び「不動利益緣起繪卷」をはじめ名品が多く網羅された。古筆では重要美術品に認定されている「寸松庵色紙」「石山切」「熊野懷紙」等が注目される。尙繪畫では重要美術品半江「滿山豐雨」をはじめ南宗畫にも見るべきものが多い。それに新畫、工藝品等を加へ計二百十三點が展示された。

某家賣立 三月二十四日

古筆に「小倉色紙」をはじめ重要美術品「戊辰切」等の名品があり、繪畫は古畫が最も多い。その他名物茶器等若干あり、總點數二百點であつた。

展觀入札 五月十一日

某家賣立 五月二十七日

繪畫は新畫、古畫合せて約五十點、そ

の他古筆「拾遺集切」をはじめ若干見るべきものあり、工藝品は殆んど茶器類であつた。總點數百八十八點。

松筠亭賣立 六月十二日

三百年來開かずの藏として聞えて居た鴻池男爵家の所藏品の賣立である。展示されたものは、古筆、古畫、墨蹟、茶器で、古畫は支那畫、室町水墨畫、狩野、琳派等である。大物と目されるものは東山御物牧溪「鶴」、胡直夫「布袋」、錢舜舉「茄子」、雪舟「かはせみ・芦雁」の三幅對、秋月「徑山寺」、光琳「佐野渡」屏風、古筆では「寸松庵色紙」「住吉切」「熊野懷紙」であつた。尙茶器は最も注目すべきもの多く、名物と稱されてゐるものが多く見られた。總點數二百三十七點で、その賣上は六百八十九萬圓といふ新記録を作つた。

某家賣立 六月二十七日

古畫、新畫、工藝品等總點數二百一點であつた。

當市積翠庵賣立 十二月五日

某家賣立 十二月十一日

某家賣立 十二月十八日

當市廣松庵賣立 十二月二十五日

目次

現代美術關係文獻 (定期刊行物所載)

論文及隨筆

總說 雜誌別五十音順

日本畫 〃

洋畫 〃

彫刻 〃

工藝 〃

建築 〃

作家論 〃

物故作家及美術關係者 人名別五十音順

時評 雜誌別五十音順

身邊雜記 〃

雜 〃

明治大正以降美術 〃

外國現代美術 〃

繪畫

彫刻

工藝

建築

其他外國美術 〃

展覽會記事及批評

綜合展覽會 題目別五十音順

日本畫展覽會 〃

洋畫展覽會 題目別五十音順 一五
彫刻展覽會 〃 一五
工藝展覽會 〃 一五

行政及教育

行政 雜誌別五十音順 一六
教育 〃 一六

現代美術關係單行圖書

總說 署名五十音順 一五
日本畫 〃 一六
洋畫 〃 一六
版畫 〃 一六
彫刻 〃 一六
建築 〃 一六
工藝及圖案 〃 一六
教育 〃 一六
外國美術 〃 一六
雜 〃 一六

古美術關係文獻 (定期刊行物所載)

總說・綜錄 一六
繪畫 一六
彫刻 一六
建築 一六
工藝 一六
書蹟・印章・文書 一七

古美術關係單行圖書

歷史・考古學・地誌 一七
雜 一七

總記 一七
繪畫 一七
彫刻 一七
工藝 一七
建築及庭園 一七
書道 一七
歷史及考古學 一七
其他 一七

現代美術關係文獻(定期刊行物所載)

論文及隨筆

總說

レアリズム十年	今泉 篤男	アトリエ	七〇一
アブストラクトアート十年	植村鷹千代	同	同
シュールレアリズム十年	瀧口 修造	同	同
將來の課題—永徳をめぐつて—	保田與重郎	同	同
ダダの社會的必然性に就て	神原 泰	同	同
現代美術の必然	田近 憲三	同	同
近代畫に於けるマチエール	岡 鹿之助	同	同
超現實主義と現實的意義	瀧口 修造	同	同
畫面に表はれた思想性と裝飾性	植村鷹千代	同	同
美術に於ける詩的精神の位置	佐藤 敬	同	同
繪のうちにある時間	三枝 博音	同	同
藝術に於ける怪奇の位置	植村鷹千代	同	同
繪畫と音樂の接觸面	山根 銀二	同	同
美術に於ける機能について	内山 久男	同	同
立體派以後の繪畫論	春山 行夫	同	同
全體主義國家の藝術政策	小池 新二	同	同
新體制と美術	清水幾太郎	同	同
移植文化論	土方 定一	同	同

鑑賞の倫理	佐藤 正彰	アトリエ	七〇三
激動期に生きる美術家のモラル	小松 清	同	同
革新と前進	新明 正道	同	同
世界的構想へ	大口 理夫	現代美術	八〇八
リアリズム考	倉田 三郎	學校美術	一〇六
健康性と美	柳 宗悦	工藝	一〇三
美術品の防衛	桑原 武夫	思想	三三
繪畫彫刻に於ける主題の消失に關する二三の考察	アンドレ・ブロン	國畫と手	二四
川口雄男譯	同	同	同
藝術的能力の助成	須田國太郎	同	二五
戰爭と藝術	長谷川如是閑	同	二四
藝術とは時代に生きる事である	内田 巖	造形藝術	二〇
形似と生動	森口 多里塔	影	二〇
時局と美術	川崎 克	同	二〇
日本文化の獨創性	保田與重郎	同	同
美術を愛する心と國民の品格	湯澤三千男	同	二〇
造型藝術の旋律	K・シエフ	南畫鑑賞	九〇二
黒と白の問題	内田 巖	同	九〇三
「畫題」の問題	三雲祥之助	同	九〇四
文學と藝術	片山 敏彦	青	二〇
視るといふこと	濱 徳太郎	同	二〇
美術家と學問—美術雜感	長與 善郎	美術評論	九〇二
日本畫の所謂前衛性に就て	今泉 篤男	美之園	二〇

アブストラクシオン・クレアシオン	外山卯三郎	美之園	二〇
これからの日本繪	廣瀬 熹六	同	二〇
自畫像の研究	荒城 季夫	みづゑ	四三
歴史美術の要望	植村鷹千代	同	四三
裸體藝術抄論	佐田 勝	同	四三
象徴について	植村鷹千代	同	四三
日本人の場合	同	同	四三
美術の新體制	荒城 季夫	同	四三
續新造型哲學	成田 重郎	同	四三
簡素美	須田國太郎	同	四三
用途と繪畫上、	相良 徳三	商	二二

日本畫

風俗畫としての現代繪畫の問題	三雲祥之助	アトリエ	七〇七
現代風俗畫の性格	北川 桃雄	浮世繪界	五〇一
花鳥畫談義	荒木 十畝	國畫と手	二〇
日本畫と現代知覺	川路 柳虹塔	影	二〇
日本畫と日本人の生活様式	鼓 常良	同	同
現代日本畫に於ける新しきものと古きもの	神崎 憲一	同	二〇
日本畫に於ける個性の問題	岡崎 義惠	同	二〇
日本畫の表現	金原 省吾	同	二〇
南畫の現代性	河野 桐谷	南畫鑑賞	九〇一
日本畫と指導精神	檜崎 宗重	同	同
日本南畫の特質	孝橋 謙二	同	同
現代と南畫	原田 尾山	同	同

新日本南畫の創造

下店 靜市	南畫鑑賞	九〇一	
傳統藝術	大口 理夫	同	
—南畫の現代性—	鈴木 進	同	
現代南畫試論	本間 久雄	美術術	七〇五
現代の宗教畫	堂本 印象	同	同
五重塔の壁畫	堂本 印象	同	同
四天王寺壁畫印象記	下店 靜市	同	同
堂本印象宗教畫を語る座談會	久間善三郎	同	同
三輪 廣光	同	同	同
大山 順一	同	同	同
古山 順一	同	同	同
日本畫と批評の問題	荒木 十畝	同	七〇九
二千六百年の日本畫に就て	田口 信行	美之園	二〇
日本畫の前衛性に就て	同	同	同
描線に現れた日本精神	廣瀬 熹六	同	二〇
ある現代日本畫のとり方	須田國太郎	同	二〇
畫的色彩法について	同	同	二〇
東洋の繪畫と戰爭畫	橋本 關雪	朝	二一

洋畫

洋畫に於ける日本的感性	長谷川如是閑	アトリエ	七〇一
質量空間	清水 登之	教育美術	六〇六
ポーズと背景と手	安井曾太郎	造形藝術	二〇五
油繪の歎き	岡 鹿之助	美之園	二〇
彫刻	高村光太郎	造	三〇二
木彫地紋の意義	同	同	同

工 藝

南米事情と輸出工業に就いて 堀口九萬一 漆と工藝 四五
 現代漆工藝の各種傾向に對する見解 六角 哲雄 同
 商工省の工藝品輸出振興施設 水谷 良一 四五
 製漆法に就て 澤口 悟一 同
 家具・特輯——三越新設計室内裝飾展觀その他 建築世界 三〇
 工藝の頁 編輯 D・D・L 同
 輸出向小木工品の試作に就いて 工藝ニユ 九ノ三
 南洋産漆液の利用に就いて 同 九ノ一
 アルミニウム鑄造工藝品の研究 同 同
 鐵の電鑄による金型の製造 同 同
 新年を迎ふる工藝界回顧 同 同
 展望座談會 同 同
 合成樹脂用金型の試作に就いて 同 九ノ二
 輸出向編組工藝品の試作 同 同
 産業工藝の「外廓的問題」を拾ふ座談會 同 同
 新造船に活躍する日本の漆技 同 同
 新興脱乾標地の研究 同 九ノ三
 脱色漆の研究 同 同
 紐育萬博に於ける國産實用工藝品の反響 同 同
 工藝品に於ける模倣と創作 同 九ノ四
 戦時下の工藝と之が原材の確保に就いて 久保 喜六 同 九ノ五
 物資統制の概要に就いて 同 同

統制下の工藝用原材料

品別解説——
 A金屬材料類
 B木製材料及編組材料類
 C塗料關係材料類
 D工藝用複合材料類
 E其他の附屬材料類
 F其他の附屬材料類
 第六回木漆金工關係技術官會議經過
 工藝用金屬材料の將來を語る座談會
 奢侈品禁止令と工藝
 水産皮革の利用研究
 歐米に於ける最近の産業美術
 單純化と美の問題
 日本人趣味の再検討
 蒔繪瑣談 竹内 梅松 影 三〇
 漆の代用塗料に就いて 太田 誠二 汎工藝 三〇
 山崎 覺太郎 同
 福岡 萍哉 同
 柴崎 風岬 同
 工藝指導員養成所私見 柴崎 風岬 同
 振興アルマイト工藝の將來性 張問 禧一 同
 藝術家と天分(故赤塚冨得氏の言) 柴崎 風岬 同
 工藝と藝術(故田田秋悅氏の言) 同 同
 工藝と工藝家の使命 同 同
 國策上から見た今後の漆藝 同 同
 工藝美術家の一元化 柴崎 風岬 同
 新體制下の工藝家 高村 豊周 美術街 三〇
 工藝ニユ 九ノ五

建 築

民藝及上テ下テの問題に就て——美術雜感 長與 善郎 美術評論 九ノ一
 既存建物の防護施設に關する獨逸法規 森田 康次 建築雜誌 同
 松島パークホテル 同
 廣島市に舉行せられたる防火改修家屋火災實驗報告 中山 元晴 同
 東京市に於ける防火改修模範街區造成に就て 警視廳建築課 同
 忠靈塔懸賞設計當選圖案 同
 建築偽裝法及偽裝例 星野 昌一 同
 工場に附隨せる新都市計畫の一例 早川 文夫 同
 法隆寺寶藏 同
 名譽員佐野利器博士の還歴を祝す 同
 新大阪驛舎 同
 保生會館・保生園 同
 新造船・新田丸、あるせんち丸 同
 我國に於ける住宅問題管見 藤谷 兼雄 同
 家族向アパートメントハウス懸賞當選設計競技當選圖案 同
 紀元二千六百年奉祝記念事業に就て 大熊 喜邦 同
 時局下美術家の覺悟 同
 紀元二千六百年式典及奉祝會場 同
 日本競馬會馬事公苑 同
 岡田邸(白木屋住宅部山口芳春設計) 建築世界 三〇

龜井邸(ヴォーリス建築事務所設計)

聽禽莊(堀口捨巳設計) 建築世界 三〇
 O公爵邸(渡邊仁工務所設計) 同
 松本附近淺間の大切妻破風造りの民家 大熊 喜邦 同
 樺太「オタスの杜」の土人の住居 小寺 廉吉 同
 建築行政展望 警視廳建築課 同
 國際ホテル(竹中工務店神戸支店設計施工) 同
 M・T邸(鈴木建築事務所設計施工) 同
 民家——東北農村標準住宅設計案——小倉 強 同
 S・T邸(渡邊仁建築事務所設計) 同
 主婦の友體育館(江口義雄設計) 同
 岩田邸(大澤建築事務所設計) 同
 武藏高等工科學校(同校營繕課設計) 同
 武藏高工の新校舎 藏田 周忠 同
 山越邸(白木屋住宅部山口芳春設計) 同
 新田丸(長崎造船所設計) 同
 某邸(江口義雄設計) 同
 S・K邸(吉田五十八設計) 同
 特輯 洋風住宅構成 D・D・L 編輯 同
 大日本航空株式會社(和田信夫設計) 同
 野尻湖ホテル(十代田三郎設計) 同
 丸中織物株式會社寄宿舎(吉田倫恒設計) 同

松園女史のこと

谷口富美枝塔 影 六ノ二

竹内栖鳳(喜壽記念特輯)

同 六ノ二

老を語る(その他)

同 六ノ二

添田達嶺

同 六ノ二

中西嘉助

同 六ノ二

西山翠嶂

同 六ノ二

大谷梢佛

同 六ノ二

加茂利造

同 六ノ二

伏原幸一郎

同 六ノ二

神崎憲吉

同 六ノ二

北田魯吉

同 六ノ二

柴田倉七

同 六ノ二

柴田素心庵

同 六ノ二

松本亦太郎

同 六ノ二

楠部彌次

同 六ノ二

山崎覺太郎

同 六ノ二

少年時代の沼田一雅

同 六ノ二

自叙傳

同 六ノ二

創造の長谷川榮治氏

大藏 雄夫美之園 三ノ五

大観の休みなき成長

須藤 鐘一同 六ノ五

大観に學ぶ

廣瀬 熹六同 同

横山大観

石川幸三郎同 六ノ九

川合玉堂文化勳章を拜し(特輯)

井上辰九郎同 六ノ三

岡鹿之助君の繪

田近 憲三みつゑ 四ノ六

熊谷守一の作品(その他)

今泉 篤男同 四ノ三

追憶の土田麥徳

奥平 武彦京 城 六ノ三

椿貞雄君と岸田劉生君

安倍 能成同 一ノ三

至寶・川合さん—文化勳章に輝く人々—

和田 英作 朝 二ノ三

玉堂の人と藝術

楠木 清方 東 二ノ二

物故作家及美術関係者

江馬長閑追悼 柴崎 風岬汎工藝 六ノ五

小川芋銭追悼 齋藤 隆三中央公論 五ノ一

大恩芋銭 林 達郎美之園 六ノ一

岡田三郎助追悼 笹鹿 彪美之園 六ノ七

紀俊秀男追悼 相澤 赤津隆助等 教育美術 六ノ二

田中頼璋追悼 添田 達嶺塔 影 六ノ三

野田英夫追悼 内田 巖みつゑ 四ノ三

正木直彦追悼

板谷 波山 學校美術 四ノ四

正木先生の思ひ出を語る(その他)

川合 玉堂 關畫と手 三ノ五

履歴

藤島 武二同 同

明珍恒男追悼

丸尾彰三郎等 同

村上華岳追悼

遺稿 塔 影 六ノ二

邸田丹陵追悼

神崎 憲一等 同

乾南陽追悼

石川 寅治美 育 六ノ九

履歴

同 同

新らしい美術體制を語る(座談會)

猪熊弦一郎 同 二ノ二

美術文化の新體制を検討する—新しい美術家のタイプ—

長谷川七郎 同

新體制下の美術批評について

藤尾龍四郎等 同

新體制と様式の問題

内田 巖 同

新體制と美術のありかた

徳永 郁介 同

再び美術新體制に要する集團と個人の位置について(その他)

廣澤 一 同

軍需景氣と日本美術の新出發

尾川 多計改 造 三ノ三

戦争と畫家

相良 徳三 同 三ノ六

奉祝展に因みて

馬淵 逸雄 同 三ノ三

農山漁村文化と美術

尾川 多計 同 三ノ三

特異兒童の繪

湯川 尙文 教育美術 一ノ三

適材—岸田氏に寄す—

高村光太郎 中央公論 五ノ三

先覺者的主張の國土的實踐—大觀翁個展—

神崎 憲一塔 影 一ノ五

大觀奉祝記念展

松浦鎮次郎 同

美術界近時雜感

荒木 十畝 同 一ノ八

舊態市井展整理

神崎 憲一同 一ノ九

在野展總評

鈴木 進 同 一ノ〇

美術愛の日獨交流—林日本古美術展の思ひ出—

丸尾彰三郎 同

橋本關雪氏の建仁寺の襖繪

神崎 憲一同 一ノ三

時局と奉祝展

岡部 長景 同

新秩序と文藝復興

南畫鑑賞 九ノ〇

今秋の文展綜合説の可否

柴崎 風岬汎工藝 一ノ二

三都工美術會と東西兩京の初集會

同 同 一ノ五

漆界二話

福岡龍太郎 同 一ノ八

工藝美術作家協會設立に

同 同

就て	杉田 禾堂同	スノ二	工藝美術作家協會所感	柴崎 風岬 汎 工藝 スノ二	美術家の部屋	長谷川春子等 アトリエ	二七ノ二	「龍」その他	川端 龍子塔	影	スノ二
青年は動い	秦泉寺 正一 美	青 スノ二	前衛運動への疑念	植村鷹千代同	新春二題(繪と文)	鍋木 清方 改 造	三ノ一	幽玄に就いて	金原 省吾同	同	同
(その他)	志賀 貞彦	青 スノ二	美術の圓周	山中 散生同	窠邊雜筆	富本 靈吉同	三ノ二	戦後の支那人達	三輪 晁勢同	同	同
時局の要求する	宮本 幸恵	青 スノ二	シーズン展望	荒城 季夫同	北支行(繪と文)	福澤 一郎同	同	蘇州の秋	上村 松篁同	同	同
玉堂先生を讀ふ(時評)	田崎 捨三同	スノ二	本年上半期の畫境の動向	江川 和彦同	木場(繪と文)	小村 雪岱同	三ノ四	大陸行(俳句)	酒井 三良同	同	同
轉換期は来りつゝある	藤森 順三 美術評論	スノ六	新體制への美術	田中 一松 重 朝	寒玉の手	朝倉 文夫同	三ノ八	冬の大同行	川島理一郎同	同	同
去年の問題作	川路 柳虹 美之園	スノ一	新體制と漫畫について	高村光太郎同	日本橋檜物町(繪と文)	小村 雪岱同	同	玉堂氏の言葉	三輪 鄰同	同	同
紀元二千六百年と美術界	廣瀬 熹六同	同	文化政策へ望む	阿本 一平同	大音寺前(繪と文)	山口 蓬春同	三ノ〇	剛毅樸訥の風尚を望む	鹽田 力藏同	同	同
新歸朝者座談會	横川毅一郎同	スノ三	新體制と美術	須田國太郎同	筆墨談義	山口 蓬春同	同	鶏を描く	田中咄哉州同	同	同
美術界近時	黒田 鵬心同	スノ四	思想と教養の貧困	荒城 季夫 審大新聞	空襲下の巴里(繪と文)	藤田 嗣治同	三ノ四	個展の前に	郷倉 千毅同	同	同
日本畫の黎明	須藤 鐘一同	スノ六	戦時下の美術	今泉 篤男同	四礁島の影から(繪と文)	長谷川春子同	三ノ六	奉祝展その他	藤島 武二同	同	同
最近彫刻界の動き	大藏 雄夫同	同	畫境の新體制	川端 龍子 福 同	巴里の悲劇(繪と文)	岡本 太郎同	三ノ六	北滿行を前に	川端 龍子同	同	同
美術界上半期の回顧	田澤 田軒同	スノ七	美術新興の問題	岡部 長景 報 知	希望峰を迂回して(繪と文)	猪熊弦一郎同	同	惜春賦(俳句)	川合 玉堂同	同	同
奉祝展豫想	石井 柏亭同	スノ九	戦争と美術	朝倉 文夫 同	河内と海防風景	長谷川春子同	三ノ三	水墨餘滴	近藤浩一路同	同	同
新體制下の美術を考へる	灘波田龍起同	同	奢侈と美術	柳 亮 都 同	正倉院御物を拜観して	武者小路實篤同	同	身邊雜記	山口 蓬春同	同	同
新體制について	荒木 十畝同	スノ二〇	我が美術界の進路	今泉 篤男 同	滯佛飄々	高田 力藏 教育美術	スノ四五	大陸の自然と日本の自然	大智 勝親同	同	同
新體制と畫家	勝田 寛一同	同	大政翼賛會文化部へ建築	大口 理夫 同	年頭の言葉	川島理一郎 現代美術	スノ一	制作隨想	八木岡春山同	同	同
新體制に於ける美術	山内 一彦同	スノ三	青年の夢を育め	水澤 澄夫 同	墳空隨筆	兒島喜久雄 思想	三ノ三	中ノ澤温泉(繪と文)	堅山 南風同	同	同
美術革新の要望(公評)	富澤有爲 男 外 文藝日本	スノ八	奢侈品と工藝品の差違	福澤 一郎 同	今様駭駢錄	原 貫之助 工 画 同	三ノ三	四天王寺壁畫の制作	堂本 印象同	同	同
若さについて	植村鷹千代 みづゑ	スノ三	(社會時評)	瀧澤 一郎 同	滯佛日記抄	猪熊弦一郎 同	三ノ	北滿の旅と新京美術院	川端 龍子同	同	同
昭和十四年度美術界の回顧(座談會)	同	同	身邊雜記	同	白羊寺海印寺	小杉 放庵 造形藝術	二ノ一	「何」を描く	式場隆三郎同	同	同
特異兒童の作品(座談會)	藤島 武二同	スノ三	滯歐雜感	高田 力藏 アトリエ	一佛蘭西畫家の見た文展	メイランド 同	二ノ二	法衣に包んだ鑿	相馬 御風同	同	同

夢・軍鶏の子 兒玉 希望塔 影六〇〇

身邊雜記 矢野 橋村同 六〇二

一生一硯 竹内 栖鳳同 六〇二

制作餘語 田中咄哉州同 六〇三

鹿を語る 内田清之助同 同

北京再遊 梅原龍三郎同 同

建仁寺の襖繪に就て 橋本 關雪同 同

私感 河村喜太郎汎工藝六〇〇

皇紀二千六百年を迎へて 正木 直彦美 青六〇一

皇紀二千六百年を迎へて 芝田 徹心同 同

皇紀二千六百年を迎へて 原 貫之助同 同

武内桂舟翁雜談 野田 九浦同 七〇二

明日の日本畫 川合 玉堂美術殿 八〇二

意義深き新春を迎へて 上村 松園同 同

昔尊く リアリズムとアカデミズム 山本 鼎同 八〇三

「文明」について 荒木 十畝同 八〇五

旅と人 野田 九浦同 八〇六

廣東紀行 山村 耕花同 同

能の中から 後藤 良同 八〇七

從軍閑話 蕪岡 美彦同 八〇八

南支從軍記 飛田 周山同 八〇九

利尻島の印象 野口彌太郎同 同

故郷の窓 吉田 秋光同 同

贅語 横山 大觀美術評論 九〇三

省察すべき大きな節 川合 玉堂美之國 六〇二

大亞細亞に及ぶもの 川端 龍子同 同

古代の研究を 朝倉 文夫同 同

史上人物の記念作 北村 西望美之國 六〇二

年頭への自戒 川島理一郎同 同

迎皇紀二千六百年 香取 秀真同 同

古都南京(文・繪) 飛田 周山同 同

蘇州を想ふ(同) 池田 遼村同 同

鎮江から揚州へ(文並繪) 伊東 深水同 同

中支二趣(同) 上村 松篁同 同

上海から蘇州へ(同) 三輪 晁勢同 同

臺灣風物に添えて 山口 蓬春同 同

土依の意氣 奥村 土牛同 同

座右の支那古彫 川島理一郎同 六〇三

梅曆 矢澤 弦月同 六〇四

青年畫家へ 武藤 夜舟同 同

漢と六朝の味 廣瀬 熹六同 同

畫界の人々(感想斷片) 高須芳次郎同 六〇六

廣東の春を探る(繪と文) 池上 秀畝同 同

新東京美術院と私 川端 龍子同 六〇八

模寫談義 高田 力藏同 同

冬旅三度 曾宮 一念みづゑ 四〇五

蒙古の初夏 安田 豊同 四〇七

オリンピアに就て 佐藤 敬同 四〇六

國分寺の初夏 兒島善三郎同 四〇六

沖繩旅行 加治屋隆二同 同

夏の夜話 大久保 泰同 同

フイレンツェの旅 久保貞次郎同 四〇三

鎮夏漫筆 大久保 泰同 同

龍 橋本 關雪讀 賣二〇一

梅に寄す 松林 桂月東 朝 二〇〇

日本美術の印象 アウリチ同 四〇一

三つの死(正木直彦、明珍恒男) 高村光太郎 都 四〇五

巴里の戦雲 足立源一郎同 四〇七

戦時描寫(其一) 藤田 嗣治同 七〇三

戦火を逃れて 岡本 太郎同 八〇六

戦禍とバリの美術界 猪熊弦一郎讀 八〇六

一老畫家の速懷 矢崎千代二京 城 二〇六

雜

明治以後の筆を語る 秋葉 和助畫 說 四〇

繪表具 楠瀬 日午造形藝術 二〇六

表具の話 同 二〇八

青邨氏の舞臺美術 高澤 初風塔 影 二〇一

明治大正以降美術

明治美術文獻鈔 森口 多里アトリエ 七〇二

芳年追憶談(小林きん女史を圍んで) 高橋誠一郎 浮世繪界 五〇四

曉齋と末期浮世繪 吉野 建雄同 五〇九

金子静枝の傳記 香取 秀真畫 說 四〇

黎明期の手工教育 棚橋源太郎 學校美術 四〇八

岡田三郎助先生のこと 中村 研一 教育美術 六〇三

白濱先生を憶ふ 淺野 秀一 圖畫と手 二〇一

小川半錢の藝術 横川毅一郎 造形藝術 二〇一

岩村透先生 森田龜之助同 同

美術新報と坂井犀水氏 同 二〇九

ヒューザン會の想ひ出 俊同 二〇〇

小林清親(本朝畫人傳) 村松 梢風 中央公論 五〇九

小川半錢(本朝畫人傳) 同 二〇〇

松岡映丘(本朝畫人傳) 同 五〇三

新聞美術記者今昔 田澤 田軒塔 影 二〇六

神武天皇の御尊像と竹内久一翁 添田 達嶺同 二〇六

柴田是真翁の事ども 同 二〇九

田崎草雲の前半生 大串 純夫 南畫鑑賞 九〇九

父樂全の一周忌に 山田 豊汎工藝 六〇五

思ひ出さるゝあの元氣(山田樂全) 柴崎 風岬同 同

竹久夢二の繪に就て 三村 精一美 青 六〇六

富岡鐵齋翁傳 本田 成之 美術研究 二〇六

滯佛中の黒田清輝 隈元謙次郎同 二〇三

五雲先生を想ふ 山口 華楊美術殿 八〇三

師・友・弟 吉田 芳明同 八〇九

谷中初音町を語る 山本 純民美之國 二〇五

美術界二十七年 石川幸三郎同 二〇七

松岡映丘遺作展を觀て 同 二〇八

菱田春草の素描

林 達郎 美之園 二六ノ九

竹内栖鳳素描 石川幸三郎 同 二六ノ〇

川合玉堂素描 同 同 二六ノ二

回想の黒田清輝 森口 多里 みづゑ 二六ノ三

青木繁の藝術 久保貞次郎 同 二六ノ五

外國現代美術

繪 畫

マチス(現代美術の位置) クリスチヤン アトリエ 二七ノ一

パウル・クレイ 太田咲太郎譯 同 二七ノ二

瀧口 修造 同 二七ノ四

現代獨逸繪畫とモルゲン ターラー 江川 和彦 同 二七ノ八

スーチンの藝術 ロシエル 同 二七ノ〇

二つのステートメント パブロ・ピカソ 同 同

ホアン・ミロについて ツアアラ 同 同

富永武彦譯 同 同

戦争美術について ハアバア 同 二七ノ四

要田鐵平譯 同 同

近代戦の性格描寫 尾川 多計 造形藝術 二七ノ二

コンラド・メイリ キク・ヤマダ 同 同

額縁を通して見た巴里の 畫家 上永井 正 同 二七ノ八

マチス ジヤン・カ 同 二七ノ九

栗原孟男譯 同 同

裸體論 ボール・ ヴアレリー 中央公論 二七ノ三

フルベルトオ・ヂヤコメ 外山卯三郎 美之園 二六ノ二

ツテイ論 コンラッド・メイリ 同 同

ピカソ 佐波 甫 みづゑ 二六ノ四

ボオル・エ 同 同

リユアル 山中 散生譯 同 同

ビエル・ロアを訪ふ 高田 力藏 同 二六ノ六

ビエエル・ロア 山中 散生 同 同

巴里畫壇努力の人々 岡 鹿之助 同 二六ノ七

アメリカ畫壇展望 高田 力藏 同 二六ノ九

自由人ビエル・ボナアル 岡 鹿之助 同 二六ノ五

アンリ・マチス 青山 義雄 同 二六ノ五

フランス現畫壇の展望 宮本 三郎 同 二六ノ七

パブロ・ピカソ 同 同 二六ノ八

オランダの美術 兒島喜久雄 朝 三三ノ三

彫 刻 瑛 久 みづゑ 二六ノ六

工 藝 ザツキン 同 同

アメリカに於ける生産工 藝 アメリカに於ける生産工 藝 長谷川七郎 アトリエ 二七ノ四

瑞典の室内工藝 トリエンナレ展 同 同 二六ノ七

建築 型美の現代建築と造 山脇 アトリエ 二七ノ四

イタリヤの建設活動 ナリスの建設活動 谷口 吉郎 建築雜誌 二六ノ一

現代支那の建築文化相 佐藤 武夫 建築雜誌 二六ノ三

廣東視察談 岸田日出刀 同 同

滿蒙開拓幹部訓練所の建 築に就て 清田 文永 同 二六ノ六

滿蒙開拓幹部訓練所大講 堂の構造設計に就て 高岡 清 同 同

獨伊視察談 片岡 安 同 二六ノ六

一九三九年瑞西國內博覽 會々場畫報 建築世界 二六ノ一

ヴトルヴウス建築論 足立 一郎 同 二六ノ一

民家(新京郊外・狼洞溝・ 李氏宅) 阿部 繁雄 同 二六ノ一

蒙古の奥地の印象 山崎 隆 同 二六ノ二

非常時英國の建築・住宅 立法 小池 新二 同 二六ノ三

民家・鄆陽平原の民家 (七) 河村 五朗 同 同

上海所感 田中 誠 同 二六ノ六

支那海に臨む都市と建築 吉村 辰夫 同 二六ノ六

錦州滿鐵厚生館(錦州鐵 道局工務課建設係設計) 同 同

戦時獨逸住宅・住宅地建設 同 同

滿蒙開拓幹部訓練所講堂 及本部(清田文永設計) 同 同

戦後獨逸の住宅政策 小池 新二 同 同

滿蒙開拓幹部訓練所の設 計報告 清田 文永 同 同

アメリカに於ける現代住 宅 ニュートン街の住宅 國際建築 二六ノ一

Dens Lasdun 同 同

LEIPZIG, VÖLKER SCHLACHT-DENKMAL, 藏田 周忠 同 二六ノ一

パレスゲートのアパート (英) Wells Coates 設計 國際建築 二六ノ三

ロンドンアパート (E. Maxwell Fry) 設計 同 同

アパート「ハイボイント 二號館」のメントハウス (英) Tecton 設計 同 同

インペングトンのウイレ ヅチカレットヂ(英) Walter Gropius 及 E. Maxwell Fry 設計 同 同

英國に於けるウイレツチ カレットヂのアイデア「The Architectural Review」 松村正恒譯 同 同

インペングトンのウイレ ヅチカレットヂ(設計概 要) 同 同

パレスゲートのアパート、 (設計概要) 同 同

リットリオ・イタリヤ青 少年團と競技場(設計概 要) アニョル・ドメ ニコ・ビーカ 同 同

南京の革命記念塔 佐藤 武夫 同 同

航空港の設計 Major R. Mealing Christopher Nicholas 同 同

本多 修譯 同 同

美術家は建築を探索して みる Richard J. Neutra 同 同

松村正恒譯 同 同

D・V・W邸(上海)ヒュ ーデック設計 同 同

發且女子文理學院(上海) ヒュエック設計 同 同

一九四〇年第七回ミラノ・ トリエンナーホテルの一室(アニョル・ドメニ コ・ビーカ設計) 同 同

ローマ・パリアー・ロンド ン——パルリ 藏田 周忠 同 二六ノ八

一九四〇年紐育萬國博覧會國際館日本部(改装)山脇設計 國際建築 二六ノ八

セルビアの厚生コロニー (E. G. Faludi 設計) 新建築 二六ノ九

米國工場建築の新傾向 柳瀬 駿 同 二六ノ二〇

鳥瞰計畫・工場建築計畫に於ける新しき要素は? Arch. Record 同 二六ノ二一・二二・二三

一九三九年後期歐米新建築紹介 藏田周忠 日本建築 二六ノ二四

輝く眉タリエツセンの巨匠フランク・ロイド・ライト 久保貞次郎 みづゑ 同 二六ノ二五

其他外國美術

ドガ ルオ アトリエ 二七ノ一

オーギュスト・ロダン リルケ 二七ノ二

西域美術集略解 西田 正秋 同 二七ノ三

西域美術概観略説 同 同 二七ノ四

オランダの色彩村 三輪 福松 同 二七ノ五

料考 ユ・ルオ 同 二七ノ六

ギユスタヴ・モロー デュ・ルオ 同 二七ノ七

武者小路實光譯 武者小路實光譯 同 二七ノ八

若き日のルヌワル 成田 重郎 同 二七ノ九

帖木兒晩年の撒麻耳土 森田龜之助 同 二七ノ一〇

デッサンの器械 Ph. ダリー 同 二七ノ一一

美術館の問題 ボオル・ヴ 同 二七ノ一二

西歐美術の近況座談會 今泉 篤男 同 二七ノ一三

戦争美術について 高田 鹿之助等 同 二七ノ一四

マネエの勝利 要田鐵平譯 同 二七ノ一五

ジョン・コンステブル 大島博光譯 同 二七ノ一六

オデイロン・ルドン 宅間 道哉 同 二七ノ一七

ルドン考 里見 勝藏 同 二七ノ一八

カタロニヤのロマネスク美術に就いて 初見 靖一 同 二七ノ一九

ドラクローアのデッサン 浩 同 二七ノ二〇

現在のドイツ美術 三輪 福松 同 二七ノ二一

動きつゝある造型 鮎倉 雄策 同 二七ノ二二

アノルド・ベツクリン 吹田 順助 同 二七ノ二三

妖怪幻想賦 渡邊 一夫 同 二七ノ二四

ウ・イ・スリコフ紹介 西田 正秋 同 二七ノ二五

動きつゝある造型 小池 新二 同 二七ノ二六

リユーベンスとレンブラント 篠島 正男 同 二七ノ二七

リユーベンスの手紙 永井善次郎 同 二七ノ二八

新生トルコの建設 三輪 福松 同 二七ノ二九

平松 幸彦 同 二七ノ三〇

平松 幸彦 同 二七ノ三一

一九四〇年大ドイツ美術展 小池 新二 アトリエ 二七ノ三二

寓話と小話 レオナルド・ダ・ヴィンチ 同 二七ノ三三

苦悶と憧憬の畫家——アマデオ・モデリアーニの生涯 尾川 多計 同 二七ノ三四

モデリアーニの生涯 モウリス・ド・ヴラマンク 同 二七ノ三五

概説歐洲造型文化史 古川達雄譯 同 二七ノ三六

支那繪畫文化史 鈴木豐次郎 學校美術 二七ノ三七

古典に就いて 渡邊 素舟 同 二七ノ三八

或る日のドオミエ 宮本 三郎 教育美術 二七ノ三九

荒城 季夫 同 二七ノ四〇

ガスケの肖像 富永 惣一 造型藝術 二七ノ四一

肖像畫の問題 ジェルムク・ゲオルク・草薙正夫譯 同 二七ノ四二

肖像三點 兒島喜久雄 同 二七ノ四三

ロダンの素描 高村光太郎 同 二七ノ四四

西洋の城郭 長瀬 武郎 同 二七ノ四五

顔 ヴアレリ 同 二七ノ四六

ドラクローアの業績 秋山光利譯 同 二七ノ四七

ドラクローアの業績 小林太市郎 同 二七ノ四八

近 ドラクローアのアトリエ 三輪 福松 同 二七ノ四九

アルブレヒト・デュラ 近 三輪 福松 同 二七ノ五〇

パリの彫刻其他 北村義男譯 同 二七ノ五一

蘭領印度の美術 上野 春香 同 二七ノ五二

獨逸造型藝術の動向 齊藤 正雄 同 二七ノ五三

北京の美術學校その他のクルウエ父子——十六世紀フランスの肖像 林 達郎 美之國 二七ノ五四

ドガと現代日本 松本 弘二 同 二七ノ五五

ブラキシテレス 大久保 泰みづゑ 同 二七ノ五六

アフリカ黑人藝術 山中 散生 同 二七ノ五七

ゴヤの「ロス・プロヴェルビオス」に就いて 柳 亮 同 二七ノ五八

寂智の畫家ウツエロ 須田國太郎 同 二七ノ五九

ルネッサンスの藝術の心 瀧口 修造 同 二七ノ六〇

「戦争と美術」 江川 和彦 同 二七ノ六一

アラン「繪畫論」 佐波 甫 同 二七ノ六二

ニオベの娘 大久保 泰 同 二七ノ六三

ヨーロッパで見た古典から 宮本 三郎 同 二七ノ六四

ギリシヤ壺瓶繪畫の諸要 素とその發達 江川 和彦 同 二七ノ六五

近代巨匠の古典研究(下) ガ・ルノアール・セザンヌ・ゴッギヤン(各篇) 柳 亮 同 二七ノ六六

プンケの話 大久保 泰 同 二七ノ六七

北歐の建築 成田 重郎 同 二七ノ六八

タナグラ人形 大久保 泰 同 二七ノ六九

希臘彫刻とマイヨールのことなど 同 同 二七ノ七〇

ルノアール論 山中 散生 同 二七ノ七一

エル・グレコ 三雲祥之助 同 二七ノ七二

蹲まるヴィイナス 大久保 泰 同 二七ノ七三

フランスの古典素描 荒城 季夫 みづゑ 四八

憩ふ拳闘者 大久保 泰同 同

ポリグノーツ以後のギリシヤ繪畫 江川 利彦同 同

佛蘭西藝術は何處へ行く (座談會) 同 同 四九

生誕百年祭を迎へたルンドンモネ、ロダン山中 散生同 同 四九

中世期の藝術 中井 あい同 同 四九

巴里に籠城したマネの手紙 大森 啓助同 同 四九

佛蘭西古典繪畫の概要とアウイニヨン派前後 田近 憲三同 同 四九

キレネのヴィナス 大久保 泰同 同 四九

ジオヴァンニ・チマブーエ 青柳 正廣同 同 四九

ゴヤとその時代 尾川 多計同 同 四九

カリビーチのヴィナス 大久保 泰同 同 四九

北支山西で見た藝術品 木下奈太郎 賣 一六

歐洲文化はアメリカに移動する——美術への新機運 高田 力藏同 一〇

奈翁と戦利美術品 中村 恒夫 朝 八

伊太利亞の美術 有馬 生馬 東 二〇

獨逸の美術界 北村 義男 都 一五

紀元二千六百年奉祝展覽會 奉祝展の彫刻 芝 虎一郎 アトリエ 七〇

奉祝展の日本畫を観る 荒城 季夫 同 七〇

奉祝展の工藝 本所 虎夫 同 七〇

奉祝展の版畫 鈴木 仁一 浮世繪界 六〇

奉祝展洋畫私感 福田豊四郎 現代美術 八〇

奉祝展二部 山本 鼎 教育美術 六〇

奉祝展評 尾川 多計 造形藝術 六〇

奉祝展の彫刻 多田 信一 同 六〇

奉祝展の版畫 檜崎 宗重 同 六〇

奉祝展の日本畫 田中 一松 同 六〇

奉祝展工藝批判 大島 隆一 同 六〇

奉祝展日本畫一作評 (彩雨他) 鈴木 進 同 六〇

奉祝展日本畫一作評 (彩雨他) 鈴木 進 同 六〇

奉祝展雜感 清水 澄 影 六〇

奉祝展に寄す 川崎 克 同 六〇

奉祝展を観る 喜多壯一郎 同 六〇

奉祝展日本畫總評 鈴木 進 同 六〇

奉祝展第一部所感 神崎 憲一 同 六〇

時局と奉祝展 岡部 長景 同 六〇

奉祝展の工藝を観る 柴崎 風脚 汎工藝 六〇

奉祝展の工藝作品 大島 隆一 汎工藝 六〇

奉祝展感想 藤井 浩祐 美術殿 八〇

奉祝展所感 小林 萬吾 同 八〇

奉祝展合評會 木下奈太郎 美術評論 九〇

奉祝展を聞いてみて 鍋木 清方 同 九〇

寸感 菊池 契月 同 九〇

奉祝展の日本畫 藤森 順三 同 九〇

奉祝美術展の日本畫について 田口 信行 美之園 六〇

奉祝展第一部 林 達郎 同 六〇

奉祝展の日本畫 佐波 甫 同 六〇

奉祝展日本畫の展望 吉副 禎三 同 六〇

奉祝展の工藝 渡邊 素舟 同 六〇

奉祝展第四部寸評 鈴木 重夫 同 六〇

奉祝展後期を見て何を感じたか 石井 柏亭 同 六〇

奉祝展の洋畫と彫刻 齋藤 隆三等 同 六〇

奉祝展の洋畫と彫刻 森口 多里 同 六〇

奉祝展日本畫評 海老原喜之助 都 二〇

奉祝展日本畫評 春山 武松 東 二〇

奉祝展日本畫評 田中 一松 賣 二〇

奉祝展日本畫評 森口 多里 中 二〇

奉祝展日本畫評 脇本樂之軒 帝 二〇

奉祝展洋畫評 森口 多里 東 二〇

今泉 篤男 報知 一八

遠山 孝 大 〇九

春山 武松 朝 一〇

川路 柳虹 商 一〇

荒城 季夫 賣 一〇

高村光太郎 朝 一〇

高村光太郎 朝 一〇

木下奈太郎 朝 一〇

合評 菊池 一雄 東 一〇

大隅 武松 朝 一〇

春山 武松 朝 一〇

高村光太郎 朝 一〇

兒鳥喜久雄 朝 一〇

木下奈太郎 朝 一〇

奉祝展工藝評 大隅 爲三 東 一〇

並川 安幸 大 一〇

水澤 澄夫 朝 一〇

渡邊 素舟 朝 一〇

森口 多里 商 一〇

京都美術展の工藝 柴崎 風脚 汎工藝 六〇

光風會第二十七回展 純一 美之園 六〇

國畫會展 佐波 甫 同 六〇

世代と様式 今泉 篤男 アトリエ 七〇

國展・春陽會評 尾川 多計 造形藝術 二〇

國畫會展 林 達郎 美之園 六〇

國展評 荒城 季夫 同 六〇

國展評 荒城 季夫 同 六〇

自由美術家協會展 今泉 篤男 賣 二〇

自由美術家協會展 江川 利彦 日 同

自由美術家協會展 藤井 浩祐 朝 一〇

自由美術家協會展 藤井 浩祐 朝 一〇

展覽會記事及批評

綜合展覽會

海軍從軍美術展 武藤 國惠 塔 影 六〇

田口 信行美之國 二六〇六
江川 達郎同 同
利彦みづゑ 同
新構造社第十三回展 三輪 鄰塔 影 二六〇三
新興美術家協會第五回展 豐田 豐同 二六〇三

新制作派展(十四年十一月)
思想と方法の問題 柳 亮 造形藝術 二六一
新制作派展評 柳 亮 みづゑ 同

新制作派展
新制作派・二科・院展の彫刻 袁田 新アトリエ 二七〇三
新制作派展の印象 別府貫一郎 現代美術 八八七
新制作派と二科 荒城 季夫 造形藝術 二七〇三

新制作派
二科展と新制作派を評す(座談會) 美術創作家同 同
上野の彫刻 大藏 雄夫同 同
前進する力と後退の性 尾川 多計同 同

新燈社第十七回展
黒田憲一郎 塔 影 二六〇二
大山 廣光 美術街 七〇二
二科展(春季) 今井繁三郎 美之國 二六〇五
二科會展

二科と新制作派
植村鷹千代 アトリエ 二七〇三
末長 護 現代美術 八八七
二科 林 達郎 美之國 二六〇三
二科展と新制作派を評す(座談會) 美術創作家同 同

上野の彫刻 大藏 雄夫同 同

○

二科展評 今泉 篤男 讀 實 一八九二
新體制下の二科展 荒城 季夫 中 高九四一七
二科と新制作派展評 松島 一郎 都 九六六七
清光會第七回展 神崎 憲一塔 影 二六〇八
大潮會第四回展 豐田 豐同 二六〇三

日本美術院展
青龍社と院展 佐波 甫 アトリエ 二七〇三
院展と青龍社 木村 莊八 造形藝術 二七〇三

日本美術院院第廿七回展
古徑の「観音」と聽雨の「大雅」 長與 善郎 美術評論 九九五
兒島喜久雄 奧村 土牛 吉岡 堅二等 宇野 浩二同 同

繪畫の貧困 青龍社と院展 三輪 鄰みづゑ 同
院展詳 遠山 孝希 大 九九
紐育萬國博出品畫展 神崎 憲一塔 影 二六〇六
美術創作家協會秋季展 林 達郎 美之國 二六〇二

文展(十四年)
昨十四年の文展を語る 田中 豐藏 畫 七
藤本十九郎等
文展第三回工藝評 村田 良策
文展第三回工藝評 人社同人 汎工藝 二六〇二
文展第三回工藝評會 六色會一同 同

六潮會展
六潮會と九阜會 (その他) 豐田 豐 現代美術 八八四

日本畫展覽會
青木大乘第二回展 三輪 鄰塔 影 二六〇八
荒井寛方佛畫展 添田 達徹同 二六〇三
池田遙村・小野竹喬兩氏展 豐田 豐同 二六〇二

院友第五回展 同 同 二六〇六
小川千穂個展 齋田 素州同 同
小野竹喬個展 豐田 豐同 二六〇四
大河内夜江個展 神崎 憲一同 同
小川芋錢遺作展 齋田 素州同 二六〇七

大阪女流畫家展 濱崎 三夏塔 影 二六〇九
狩野晃行個展 豐田 豐同 二六〇六
堅山南風個展 神崎 憲一同 二六〇二
金島桂華・奥村土牛新作展 豐田 豐 現代美術 八八四
川端龍子第九回個展 大山 廣光 美術街 七〇一
木谷千種個展 大森 富平塔 影 二六〇一

九阜會第六回展 神崎 憲一同 二六〇七
本田 純一 美之國 二六〇六
乾坤社第二回展 神崎 憲一塔 影 二六〇二
淺野 利眞 美之國同 同

園外社第一回展 齋田 素州塔 影 二六〇五
小杉放庵個展 吉副 禎三 美之國同 同
小早川清個展 豐田 豐塔 影 二六〇七
五作家展(關雪、龍子、清方、蓬泰、放庵) 本田 純一 美之國 二六〇六
兒玉塾第四回展 林 達郎同 影 二六〇五
神崎 憲一塔 影 同

浩一路と青楓の個展 金井 紫雲同 二六〇三
郷倉千靱個展 三輪 鄰同 二六〇五
綵々會第一回展 大森 富平塔 影 同
綵會第二回展 三輪 鄰同 同
榊原始更個展 神崎 憲一同 二六〇八
三春會第一回展 豐田 豐同 二六〇五
珊々會第六回展 齋田 素州同 二六〇八
今井繁三郎 美之國 二六〇七

七絃會第十回展 田中 一松塔 影 二六〇一
大山 廣光 美術街 八八七
朱絃會の諸作 金井 紫雲塔 影 二六〇四
春虹會第六回展 同 同 二六〇五
林 達郎 美之國 二六〇四

春陽會日本畫展 豐田 豐塔 影 二六〇三
春耀會第一回展 黒田憲一郎同 二六〇五
昭華會新作畫展 富田 啓子同 二六〇一
昭華會第二回展 齋田 素州同 二六〇六
新興美術院第三回展 齋田 素州同 二六〇五
林 達郎 美之國同 同

○

新美術人協會展

本所 虎夫 アトリエ 二ノ八

大幸 正 九ノ九

新美術人協會の科學主 義 豐田 現代美術 八ノ五

新美術人展評 多田 信一 造形美術 二ノ七

新美術人協會第三回展 三輪 鄰塔 影 二ノ八

新美術人協會構成員 美術評論 九ノ四

堅二豐四郎雜談會 吉岡 堅二 同

福田 豐四郎 同

村雲 大撰子 同

藤森 順三 同

「水原」と「鴉」 柳 亮 同

新美術人協會の繪につ いて 青野 季吉 同

青丘會第五回展 豐田 豐塔 影 二ノ八

青衿會展 藤懸 靜也 浮世繪界 五ノ三

青衿會と世相畫 進 同

青衿會と花鳥畫 鈴木 宗重 同

(その他) 豐田 豐塔 影 二ノ八

青龍社展(春季) 豐田 豐同 二ノ八

春の青龍社八回展 林 達郎 美之國 同

春の青龍展 佐波 甫 アトリエ 二ノ三

青龍社と院展 木村 莊八 造形美術 二ノ〇

院展と青龍社 青龍社第十二回展 神崎 憲一 塔 影 二ノ〇

青龍社と院展 三輪 鄰みづゑ 三

青龍社展評 田中 一松 讀 八ノ〇

素心 庵中 商 八ノ三

大口 理夫 都 九ノ二

遠山 孝帝 大 九ノ九

若穹會の二作 金井 紫雲 塔 影 二ノ〇

大毎・東日奉祝日本畫展 大毎東日展の受賞作 (その他) 金井 紫雲 現代美術 八ノ五

豐田 豐同 同

神崎 憲一 塔 影 二ノ七

豐田 豐同 同

山口 翠峰 美之國 二ノ五

菊池 梨月 同

小野 竹喬 同

川島理一郎等 (座談會) 大輪畫院第二回展(春季) 神崎 憲一 塔 影 二ノ八

今井繁三郎 美之國 二ノ六

大輪畫院第三回展 豐田 豐塔 影 二ノ三

高島屋新作畫展 豐田 豐同 二ノ五

齋田 素州 同 二ノ五

玉村方久斗の仕事 今井繁三郎 美之國 二ノ二

登内微笑個展 杉浦 冷石 塔 影 二ノ八

東丘社第三回展 三輪 鄰同 二ノ八

加藤 紫雲 美之國 二ノ六

東京會新作畫展 齋田 素州 塔 影 二ノ一

德永親林・鈴木 朱雀 合同 豐田 豐同 二ノ六

個展 讀畫會展 金井 紫雲 同 二ノ五

今井繁三郎 美之國 二ノ五

巴會第四回展 添田 達嶺 塔 影 二ノ九

中村岳陵個展 豐田 豐同 七ノ一

廣光美術街 中村岳陵作品觀賞會 神崎 憲一 塔 影 二ノ三

中村大三郎畫塾奉祝 豐田 豐同 二ノ八

永田春水個展 豐田 豐塔 影 二ノ五

南畫聯盟第四回展 三輪 鄰同 二ノ八

竹内 梅松 南畫鑑賞 九ノ六

西村五雲遺作展 五雲遺作展所感 (その他) 金井 紫雲 塔 影 二ノ六

川路 柳虹 同 二ノ六

山口 華楊 同 同

廣光美術街 七ノ四

日本畫院第二回展 豐田 豐塔 影 二ノ六

今井繁三郎 美之國 二ノ五

林 達郎 同 同

日本美術協會第百十一回 展 豐田 豐塔 影 二ノ三

日本文化史展(朝日新聞 社主催) 廣瀬 熹六 美之國 二ノ六

波光・竹喬・紫峰 神崎 憲一 塔 影 二ノ〇

白御會第四回展 三輪 鄰同 二ノ四

柏舟社第二回展 神崎 憲一 同 二ノ五

橋本多聞洞新作展 同 同 同

橋本關雪スケッチ展 富田 啓子 同 二ノ三

林文塘個展 杉浦 冷石 同 二ノ一

平田松堂氏個展 齋田 素州 同 二ノ六

福田翠光氏個展 神崎 憲一 同 二ノ七

牧野克次氏個展 富田 啓子 同 二ノ二

牧野虎雄氏個展 豐田 豐同 二ノ五

松岡映丘遺作展 同 同 同

川合 玉堂 塔 影 八ノ六

同 清方 同 同

添田 達嶺 塔 影 二ノ八

吉田 忠夫 同 同

豐田 豐同 同

遠藤 教生 美術街 七ノ八

築本 一洋 美之國 二ノ八

金井 紫雲 同 同

清方 同 同

案本一洋個展 神崎 憲一 塔 影 二ノ八

水田硯山個展 齋田 素州 同 二ノ二

三輪晃勢個展 金井 紫雲 美之國 二ノ三

武者小路實篤個展 富田 啓子 同 二ノ二

明朗美術第十回展 豐田 豐同 二ノ〇

森守明個展 神崎 憲一 同 二ノ七

八木岡春山第六回個展 三輪 鄰同 二ノ五

齋田 素州 同 二ノ七

今井繁三郎 美之國 二ノ七

山川秀峰個展 神崎 憲一 塔 影 二ノ四

山川秀峰個展 同 同 同

山村耕花個展 杉浦 冷石 同 二ノ二

山本倉丘個展評 加藤 紫雲 美之國 二ノ一

横山大觀奉祝記念展 安井曾太郎 美術評論 九ノ三

志賀直哉 志賀直哉 美術評論 九ノ三

兒島喜久雄 志賀直哉 美術評論 九ノ三

川崎 墨仙 同 同

島田 墨仙 同 同

齋藤 隆三 同 同

今井繁三郎 美之國 二ノ五

横山大観個展

龍 東 朝 四ノ六

歴程第二回美術展評

豊田 現代美術 八ノ六

歴程第三回展

武藤 國惠塔 影 二ノ九

京都三塾小品連鎖展

佐波 市美之園 六ノ四

洋畫展覽會

伊藤繼郎・服部正一郎二人展 江川 和彦 アトリエ 二ノ七

一水會展(十四年十一月)

一水會展入選作品評 (その他)

木下 孝則 教育美術 六ノ一

植村鷹千代 造形美術 二ノ一

尾川 多計 みづゑ 四ノ三

一水會展(十五年十一月)

荒城 季夫 東 二ノ三

森口 多里 讀 二ノ五

龍 東 朝 二ノ八

旺玄社第八回展評 田澤 八甲 現代美術 八ノ三

岡田三郎助遺作展 遺作展を終りて 辻 水 アトリエ 二ノ五

岡田三郎助の藝術の展 森口 多里 八ノ五

岡田三郎助遺作展 遠山 孝帝 大 二ノ元

今泉 篤男 讀 二ノ六

菅野 圭介 アトリエ 二ノ七

角浩個展 佐波 甫 同 同

川島理一郎個展 荒城 季夫 みづゑ 同 同

庫田發個展 内山 義郎 アトリエ 二ノ七

今井繁三郎 美之園 六ノ五

佐藤敬個展

植村鷹千代 アトリエ 七ノ七

春陽會展

世代と様式 今泉 篤男 同 同

春陽會第十八回

倉田 三郎 教育美術 六ノ五

國展・春陽會評

尾川 多計 造形美術 二ノ五

春陽會展評

佐波 甫 みづゑ 四ノ六

春陽會展評

荒城 季夫 都 讀 四ノ三

森口 多里 讀 四ノ三

新美術家協會評 須田國太郎個展 内山 義郎 造形美術 一ノ四

第一美術協會展 江川 和彦 アトリエ 二ノ七

高間惣七個展 林 達郎 美之園 六ノ五

獨立美術協會展 獨立展美術評 植村鷹千代 アトリエ 二ノ五

荒城 季夫 造形美術 二ノ四

尾川 多計 みづゑ 四ノ五

ロペール・同 四ノ六

荒城 季夫 東 朝 一ノ三

柳 亮 讀 一ノ七

今泉 篤男 都 讀 一ノ六

日本水彩畫會展 江川 和彦 みづゑ 四ノ七

美術文化協會展 美術文化展を終りて (その他)

福澤 一郎 アトリエ 二ノ七

大嶋 博光 同 同

林 達郎 美之園 六ノ五

瀧口 修造 みづゑ 四ノ七

美術文化協會展を評す 森口 多里 東 四ノ四

三雲祥之助個展

植村鷹千代 アトリエ 七ノ七

山本鼎の個展

石井 柏亭 美之園 六ノ三

彫刻展覽會

大須賀黒田彫刻展 大藏 雄夫 美之園 六ノ七

塊人社展

構造社展評 同 同 六ノ四

三部會

同 同 六ノ五

東邦彫塑展

同 同 六ノ七

日本彫刻家協會展 武井直也氏の遺作展を 觀る 外山卯三郎 アトリエ 二ノ七

作品と人物 本郷 新 造形美術 二ノ四

武井直也の遺作彫刻 横川毅一郎 同 同

日本彫刻家協會 大藏 雄夫 美之園 六ノ四

雜

彫刻家と展覽會 養田 新 アトリエ 二ノ七

工藝展覽會

大阪工藝振興展評 柴崎 風岬 汎工藝 六ノ七

大阪府主催戦時産業工藝展覽會 同 同 同

香取正彦個展 古山 順一 同 同

經緯工藝展評 本郷 新 造形美術 二ノ七

京都工藝院第四回展所感 大山 廣光 汎工藝 六ノ四

漆藝院第四回展に就て 渡邊 素舟 漆と工藝 四ノ七

實在工藝同人展 大島 隆一 汎工藝 六ノ三

柴崎 風岬 同 同

商工省工藝指導所展

工藝指導所展 代用材によるモデル・ルームに就いて 工ニ藝 九ノ九

商工省工藝指導所展

東北々海道巡回工藝第三回展報告 工ニ藝 九ノ九

代用品工業振興展

「代用展」本所出品モデル・ルームに就いて 同 同

貿易局工藝品輸出振興第三回展

永田 五郎 建築世界 三ノ八

貿易局第二回輸出工藝圖案展概況

工ニ藝 九ノ八

雜

三つの工藝展を觀る(河村靖山、清水正太郎、庚辰會) 大山 廣光 汎工藝 六ノ五

行政及教育

二千六百年奉祝紀念展への要望 石川 帛水 美之園 六ノ三

官展

奉祝展について 川合 玉堂 同 同

奉祝展と文展の性格 鐔木 清方 同 同

綜合紀念展への期待 石川 帛水 同 同

奉祝綜合展の核心を衝く 田澤 田軒 同 同

奉祝展の實體 今井繁三郎 同 同

教育

版畫教材の研究	松田 義之 學校美術	二二〇	藝能科圖畫工作(教則案 檢討座談錄) 學校美術協會 學校美術 研究部同人	二二〇
理工教材の價值と實踐	上田 駒男 同	二二一	皇國民鍊成の美育	三苦 正雄 教育美術
日本精神と圖畫教育(一)	多賀谷健吉 同	二二二	聖戰下の圖畫教育	瀧村 虎雄 同
(二)	同上	二二三	生活圖畫の基本原理	水口 檢二 同
理工教材の實踐的取扱	上田 駒男 同	二二四	藝術教育寸感	百田 宗治 同
藝能科圖畫手工に備へて	岡田 清 同	二二五	教育機構改革その他	紀 俊秀 同
新造形教育に對する希望	高村 豊周 同	二二六	人物畫の描き方(一)	木下 孝則 同
藝能科圖畫手工の教育方針について	武井 勝雄 同	二二七	藝能科の使命	小林 澄見 同
物資の統制と手工教育	山田 敏雄 同	二二八	圖畫科指導の再吟味	小林 保司 同
國民學校案の精髓と構作	山崎 諒郎 同	二二九	國民學校立案の趣旨	林 博太郎 同
藝能科について	小林 澄見 同	二三〇	藝能科と皇國の道	角南 元一 同
藝能科教育と圖畫手工教 本に就て	岡田 清 同	二三一	藝能科圖畫・工作教育	三苦 正雄 同
國民學校藝能科總論	近藤 壽治 同	二三二	日本圖畫教育の前途	板倉 贊治 同
藝能科圖畫・工作精説	三苦 正雄 同	二三三	藝能科の位置	金原 省吾 同
圖畫手工教育家に望む	澤田 源一 同	二三四	藝能科圖畫	多賀谷健吉 同
趣味性の涵養	小澤 恒一 同	二三五	圖畫教科書編纂に對する 希望意見の種々相	山形 寛 同
發明創作と圖畫工作教育	河崎文珠次郎 同	二三六	藝能科と鑑賞教育	石井 柏亭 同
國民學校の圖畫に就て	石井 柏亭 同	二三七	藝能科圖畫への希望	中谷 健次 同
創造能力陶冶の重要學科	近藤 壽治 同	二三八	材料と技法	伊藤 繼郎 同
國民學校に於ける教科 科目の特質と圖畫工作	武井 勝雄 同	二三九	時局下の藝能科圖畫	小松澤正徳 同
			藝能科圖畫に就て	角南 元一 同
			藝能科圖畫工作の統合	武田新太郎 同

昭和十五年度美術文獻目錄

今後の圖畫教育	松本 幹雄 教育美術	六〇三	小學校に於ける圖畫教育 の變態	三尾與喜藏 圖畫と手 工	二二五
藝能科圖畫工作教育の眞 髓	角南 元一 圖畫工作	六〇二	圖畫教育の新體制	本間 良助 同	二二六
圖畫工作教育に新體制を 齎せ	岡登 貞治 同	六〇一	藝能陶冶について	池田 計三 同	二二七
生活行爲の根源鍊成とし ての圖畫工作	長島 益 同	六〇〇	藝能科教則案説明	文部 省 同	二二八
獨逸の技能教育と日本の 圖畫手工	姜 世 澤 同	五九九	藝能科圖畫教則案説明	同 同	二二九
工作科に關する問題	山形 寛 同	五九八	藝能科工作教則案説明	同 同	二三〇
藝能科に於ける機能美に 就いての一考察	伊藤好太郎 同	五九七	國民學校の藝能科	松久 義平 同	二三一
兒童の描畫心理(八)	大友一三 譯 圖畫と手 工	五九六	藝能科圖畫工作	角南 元一 同	二三二
圖畫科指導過程の革新形 態	瀧村 虎雄 同	五九五	現行圖畫教育は日本精神 に反するや	名取 堯美 青 六〇二	二三三
造形教育と知性	松田 操 同	五九四	日本文化史と圖畫教育	原 貫之助 同	二三四
新卒業生に對する告辭	芝田 徹心 同	五九三	制作と教育	田村 宗吉 同	二三五
藝能科圖畫手工教育への 出發	岡田 清 同	五九二	構成教育論と圖畫教育	本間 良助 同	二三六
美術鑑賞の教育	佐藤 勉 同	五九一	美育家の養成は此の儘で よいか	杉山 司七 同	二三七
藝能科の圖畫指導	淺野 秀一 同	五九〇	自在畫と其の取扱につい て	一三三 圖畫科研究會 同	二三八
藝能圖畫の進路	大竹 拙三 同	五八九	趣味教育と皇國民的教養	小西 重直 同	二三九
圖畫教育と非理法權天	本間 良助 同	五八八	大國民の養成と圖畫教育	吉田 雖一 同	三三〇

現代美術關係單行圖書

總說

學生叢書第十篇 學生と藝術	日本評論社	同	紀元二千六百年奉祝美術 展覽會圖錄 全四册	文部省 美術工藝會
藝能科圖畫工作の統合	武田新太郎	同	近代美術	森口 多里 東京文 堂
藝能科圖畫に就て	角南 元一	同	藝術解剖學	中村 不折 崇文 堂

昭和十五年版美術總覽
川路誠 藝苑社

新制作派五協
新制作派 美術工藝會

西洋美術論(學生文庫)
石井柏亭 河出書房

第十五回國展
朝日新聞社 同社

第二十七回二科畫集
朝日新聞社 同社

第二十七回日本美術院
朝日新聞社 同社

展覽會圖錄 日本美術院
大塚巧藝社

獨立美術十周年記念畫集
櫻木俊晃 朝日新聞社

日本美術年鑑昭和十四年版
美術研究所 岩波書店

美術問題と美術批評
兒島喜久雄 小山書店

明治初期來朝伊太利亞美術家の研究
隈元謙次郎 三省堂

森田恒友畫集
奈鳥會 同會

日本畫

旭谷左右畫集
旭谷暘 同

芋錢子遺作畫册
齋藤隆三 大塚巧藝社

永悠作品集
井上慎太郎 東方美術協會

小川芋錢翁草畫帖(輔二輯)
横地信輔編 青果堂

紀元二千六百年記念現代日本畫展覽會畫集
巖津政右衛門 合同新聞社

現代畫家評傳
堅山南風 憲一 美術春秋社

現代畫家評傳
芳川 越 美術春秋社

德岡神泉評傳
豐田 越 美術春秋社

豐田 越 美術春秋社

現代名家素描集
森白甫 芸艸堂

堅山南風 同

山口蓬春 同

福田平八郎 同

十二月圖帖 聚樂社 同上

昭和日本畫大鑑 今福武雄 東亞美術院

鉦鼓洞畫選 大塚稔 大塚巧藝社

翠光個展作品集 福田翠光 芸艸堂

翠光花鳥 九福田 翠光 同

栖風逸品集 第二期第 三輯 竹内栖風 同

大日本畫家名鑑(昭和十五年版) 大日本繪畫講習會代理部 同上

華國創業繪卷 中澤經夫 內閣內

富岡鐵齋その他 下島勳 興文社

日本畫傑作年鑑 芳川越 美術春秋社

煤嶺遺墨 竹内栖風 同上

煤嶺翁建碑記念畫集 本田壽次郎 神人社

麥僊遺作集 麥僊遺作 芸艸堂

麥僊遺作集 麥僊遺作 同

麥僊遺作集 麥僊遺作 同

麥僊遺作集 麥僊遺作 同

麥僊遺作集 麥僊遺作 同

麥僊遺作集 麥僊遺作 同

麥僊遺作集 麥僊遺作 同

麥僊遺作集 麥僊遺作 同

麥僊遺作集 麥僊遺作 同

麥僊遺作集 麥僊遺作 同

麥僊遺作集 麥僊遺作 同

麥僊遺作集 麥僊遺作 同

麥僊遺作集 麥僊遺作 同

油繪の實技(下) 石井柏亭 アトリエ社

石川寅治畫集(第四輯) 美術工藝會 同上

岡田三郎助作品圖集 辻永 便利堂

クレパス畫の描き方 中村善策 教育美術會

兒島善三郎畫集 美術工藝會 同上

人物畫の描き方 足立源一郎 崇文堂

第十回獨立展集 朝日新聞社 同上

第十八回春陽會畫集 朝日新聞社 同上

高橋貞一郎滯歐作品集(一) 美術工藝會 同上

寺内萬治郎畫集 第五輯 美術工藝會 同上

風景畫の描き方 鍋井克之 崇文堂

物故作家油繪名作畫集 高崎正男 明治美術所

牧野虎雄畫集(第一、二輯) 牧野虎雄 座右寶刊行會

版畫

銅版繪本 地上的祭 武井祭雄 アオイ書房

富士三十六景(第三、四輯) 德力富吉郎 内田美術書肆

滿蒙風物即興 前川千帆 アオイ書房

建築

世界美術文庫 エチプト彫刻 森口多里 アトリエ社

放送會館建築 吉田鐵郎 新建築社

國際造園裝飾 西田富三郎 有光社

歐米新建築の紹介 日本建築士會 同

扇葉莊 藤井厚二 新建築社

陸屋根 藏田周忠 相模書房

工藝及圖案

板谷波山 藤井石童 大阪美術社

岡田三郎助蒐集工藝圖譜 大隅爲三 座右寶刊行會

工業意匠圖案集 東京府立工業獎勵館 同

新聞廣告圖案傑作集 日本電報通信社 同

世界裝飾美術年鑑 一九四〇年版 東光堂 同

チリ一國貿易並工藝事情調査 商工省工藝指導所 同

時局下の世界工藝貿易局 日本輸出工藝聯合會 同

輸出工藝を語る 日本輸出工藝聯合會 同

彫刻

荻島安二作品集 荻島安二 同上

教育

新しい想畫の指導 中西 良男 教育美術振興會

教育圖畫の實踐 長澤 菊慈 學校美術協會

國民學校藝能科精義 三苦 正雄 教育科學社

國民學校研究叢書(一) 小西重直外 玉川學園出版部

藝能科圖畫工作指導大系 武井勝雄外 學校美術協會

造形教育實踐諸問題 伊藤 高道 晃文社

造形教育體系—造形教育の指導過程— 曾根 靖雄 同

新時代の圖畫科施設 山崎 壽郎 學校美術協會

圖案指導大系 武井勝雄外 同

農山村圖畫教育の確立 青木實三郎 同

外國美術

歐洲に於ける工藝意匠の重要性 チリ・シユ・ブール・マン 日本輸出工藝聯合會

近代畫家論(一) 世界文庫二〇 ジョン・ラス 弘文堂

近代佛蘭西名畫選 全六卷(福島コレクシヨン) 春鳥會

原色版ボール・セザンヌ 硯伊之助外 アトリエ社

新傳記叢書 ミケシンヂエロ 板垣 鷹穂 新潮社

セザンヌ ヴオラアル著 成田重郎譯 東京堂

セザンヌ全集(全二卷) 高見澤木版社 同

西歐名家原色畫集(第一二卷) 岩佐 新 美術發行所

西洋近代繪畫選集 大阪市立美術館 同

西洋近代繪畫選集 高津 滿 便利堂

西洋美術文庫 アンリ・ルソオ 大森 啓助

西洋美術文庫 コンスタブル 石井 柏亭

セザンヌ 富永 惣一

ダリ 瀧口 修造

チシアン 植村鷹千代

トウルーズ・ロート レック 木下 孝則

ドナテルロ 清水多嘉示

フラ・アンジェリコ 西村 貞

ミロ 瀧口 修造

リュイベンス 嘉門 安雄

ワトオ 三輪 福松

造形美術 ヴァレリイ著 吉田健一譯 筑摩書房

ドガ(第四輯) 泉田 泰助 三 甲 社

ボナアル 高見澤木版社 同

マチス 高見澤木版社 同

ラスキン 繪畫論 石井正雄譯 第一書房

ルオー版畫集 伊藤 廉 三 甲 社

ロダン(世界文庫三六) リルケ著 石中象治譯 弘文堂

山水人物畫談 松本亦太郎 岩波書店

山水と藝術 金井 紫雲 芸 艸 堂

支那山水隨緣(普及版) 橋本 關雪 文 求 堂

紫峰藝術觀 榊原 紫峰 河出書房

松濤閑談 牧野 伸顯 創 元 社

春陽會隨筆五人 木村莊八外 第一書房

從軍繪日記 工藤芳之助 同

製陶餘錄 富本 憲吉 昭 森 社

東洋美術文庫 土方 定一 アトリエ社

隨筆 富貴の人 鍋井 克之 小山書店

ブルーノ・ウタウトの回想 まつかぜ 浦野 芳雄 長崎書店

山旅の素描 野口 三郎 東京美術書院

茨木猪之吉 三省 堂

朝日文化史展を見る 田中 一松 美術日本 六ノ六

大藏會と陽明文庫の展覧 宮島 榮 越 味 六ノ二

劫火と國寶 鈴木 進 茶 わ ん 二ノ三

お蔵帳の話 三井 高 陽 星 岡 二ノ二

首里と那覇 工 藝 二ノ三

朝鮮・支那・印度 久志 卓 眞 茶 わ ん 二ノ五

朝鮮古美術の特徴 野田 九 浦 嗣 同

臨筆朝鮮 杉山 司 七 美 青 二ノ九

朝鮮紀行慶州の巻 東 伏 見 邦 英 資 雲 三ノ六

可無流知 慶州とこころ 小 杉 放 庵 造 形 藝 術 二ノ一

白羊寺海印寺 武 彦 茶 わ ん 二ノ五

李朝隨筆 藤 懸 靜 也 同 二ノ二

支那藝術の再検討 漢と六朝の味 廣 瀨 熹 六 美 之 國 二ノ四

北京古美術の印象 清 見 陸 郎 茶 わ ん 二ノ〇

北京日録抄 谷 川 徹 三 思 想 七ノ三

遼陽の一日(二、完) 鴛 淵 一 史 學 研 究 二ノ二

支那に於ける裝飾の龍 藝 術 資 料 四ノ七

西域美術概観略説 西 田 正 秋 ア ト リ エ 一ノ一

西域美術集略解 同 一ノ二

蘭領印度の美術 齋 藤 正 雄 造 形 藝 術 二ノ〇

大印度一周考古學の旅略 山 本 智 教 ビ タ カ 八ノ三

報 繪 畫 昭 和 十 五 年 度 美 術 文 獻 目 録

東洋畫の畫題に就いて 下 店 靜 市 藝 苑 三

繪畫の浪漫主義と土方定一 茶 わ ん 二ノ二

古畫に現はれた品格と風韻 工 藤 悟 郎 藝 術 日 本 八ノ五

論畫雜誌一 伊 勢 專 一 郎 南 畫 鑑 賞 九ノ〇

胸中の山水 青 柳 正 廣 同

東洋畫の陰影法 瀧 精 一 國 華 五ノ七

構圖と描線 今 泉 篤 男 南 畫 鑑 賞 九ノ六

鐵線描新説 仲 田 勝 之 助 畫 說 二ノ二

竹の畫と詩 古 川 北 華 藝 苑 四

表具の様式三一五 造 形 藝 術 一ノ三

墨、紙、絹、繪具の話 丸 山 登 藝 術 日 本 八ノ六

掛物の名稱 楠 瀨 日 年 造 形 藝 術 二ノ八

對幅考 同 清 閑 六

日本畫の本質 鼓 常 良 南 畫 鑑 賞 九ノ〇

日本畫に於ける個性の問題 岡 崎 義 惠 塔 影 一ノ八

日本畫と日本人の生活様式 鼓 常 良 同 一ノ三

日本畫の表現 金 原 省 吾 同 一ノ三

日本畫の進路 玉 蟲 龍 三 郎 南 畫 鑑 賞 九ノ〇

日本畫の沿革 兼 松 蘆 門 藝 術 日 本 八ノ五

日本の畫論に就て 坂 崎 坦 國 華 五ノ九

畫意十五則(校刊) 日 本 の 花 鳥 觀 佐 藤 良 南 畫 鑑 賞 九ノ五

天平期の白描畫 松 田 不 空 一 路 茶 わ ん 二ノ二

白描畫の變遷 松 田 福 一 郎 同 一ノ二

近世初期の大和繪裝飾畫 谷 信 一 國 寶 三ノ九

と狩野諸派 飯 島 勇 茶 わ ん 二ノ三

復古大和繪の時代の意義 飯 島 勇 茶 わ ん 二ノ三

室町期の筆様 谷 信 一 南 畫 鑑 賞 九ノ一

初期風俗畫論 同 國 寶 三ノ八

參考古畫の二三に就いて 相 見 香 雨 日 本 美 術 協 會 報 告 五

曲水の宴 中 村 亮 平 浮 世 繪 界 五ノ二

思功供養展畫目録(校刊) 畫 說 五ノ五

日本耶穌會の繪畫活動と明末支那の洋畫 西 村 貞 美 術 研 究 九ノ一

法隆寺とアザヤンタの壁畫の異趣 野 生 司 香 雪 茶 わ ん 二ノ二

地獄變に就いて 家 永 三 郎 歷 史 地 理 六ノ五

畫僧定智に就いて 佐 和 隆 研 畫 說 二ノ二

來迎藝術論 大 串 純 夫 國 華 三ノ八

聖衆來迎圖 和 歌 山 大 圓 院 外 藏 國 寶 三ノ六

涅槃圖 解 說 金 剛 峯 寺 藏 美 術 研 究 九ノ七

文殊菩薩八大童子圖 侯 爵 井 上 三 郎 氏 藏 國 華 五ノ二

十一面觀音圖 金 澤 金 澤 商 品 陳 列 所 藏 同 五ノ六

東寺五大尊畫像金森 遠 建 築 史 二ノ二

赤不動圖の製作時代に就て 田 中 喜 作 美 術 研 究 九ノ三

赤不動圖年代考補記 同 九ノ〇

明王院赤不動畫像の一考 岡 直 己 寶 雲 三

赤不動の研究と最近の田中喜作氏説の破綻 山 本 辰 一 茶 わ ん 二ノ九

愛染明王圖 東 京 根 津 藤 太 郎 氏 藏 國 華 五ノ三

毘沙門天像解說 上 杉 神 社 藏 美 術 研 究 九ノ一

羅漢圖由來(古畫鑑賞) 帝 室 博 物 館 藏 秋 山 光 夫 藝 苑 四

來迎寺羅漢圖 滋 賀 來 迎 寺 藏 國 華 五ノ二

茨城金龍寺の羅漢畫 大 口 理 夫 畫 說 一ノ六

東寺曼茶羅一印會圖 京 都 教 王 護 國 寺 藏 國 華 五ノ七

法皇帝說書寫年代に關する新史料 附 法 隆 寺 北 斗 曼 茶 羅 關 係 の 古 文 書 萩 野 三 七 彦 畫 說 二ノ二

來迎寺十界圖 滋 賀 來 迎 寺 藏 國 華 五ノ九

鳳凰堂壁畫中の住宅 前 田 松 韻 國 寶 三ノ三

醍醐寺現存圖像筆者の問題 里 多 僧 藥 哩 五 部 心 觀 と 藏 文 金 剛 頂 經 坂 野 榮 範 ビ タ カ 八ノ五

版本融通念佛緣起 近 藤 市 太 郎 日 本 美 術 協 會 報 告 五ノ七

摺佛に就て 中 村 直 勝 國 寶 三ノ四

住吉明神の御影について 宮 地 直 一 國 華 五ノ一

長谷能滿院の春日淨土曼茶羅 龜 田 孜 國 寶 三ノ六

男山八幡曼茶羅圖 侯 爵 井 上 三 郎 氏 藏 國 華 五ノ八

畫卷藝術論 矢 代 幸 雄 同 五ノ三

繪詞の文學的價值四、五 久 曾 神 昇 書 道 九ノ七

繪卷物とお伽草子 丸 山 進 南 畫 鑑 賞 九ノ四

繪卷物と假名字 下 店 靜 市 興 亞 書 報 二ノ五

構圖より見たる古因果經 田 口 信 行 畫 說 一ノ一

繪 畫 一 畫 昭 和 十 五 年 度 美 術 文 獻 目 録

一六三

信貴山縁起繪卷の詞

—その語法に就いて— 佐藤 信彦 畫 說 二五ノ二

善財童子歷參圖卷殘闕 大阪 男爵藤田光一氏藏 國 華 五ノ四

能惠法師繪詞について 梅津 次郎 美術研究 九ノ八

鑑真和上の東征繪傳に就て 望月 信成 以可留我 一〇

三大寺氏の高野大師行狀 田口 信行 畫 說 五ノ八

當麻寺縁起畫卷興意筆 瀧 拙庵 國 華 五ノ九

歡喜天靈驗記畫卷 兵庫 武藤金太氏藏 同 五ノ四

山王靈驗記繪卷 蓮華寺本その他— 梅津 次郎 美術研究 九ノ三

山王靈驗記繪卷詞書 (詞書集第十九卷) 同 同

山王靈驗記繪卷 侯爵井上三郎氏藏 同 九ノ四

天狗草子繪卷 伴大納言繪詞覺書 田中倉琅子 同 二五ノ九

伴大納言繪詞(名品小解) 寢覺物語繪に就て 正木 篤三 美術研究 九ノ一

繪師の草子に就いての考 田中 喜作 畫 說 二五ノ四

繪師草子詞(校刊) 五節淵醉圖 高野 辰之 造形藝術 二ノ二

土佐光祐の畫卷に就て 梅 軒 國 華 五ノ二

繪卷物に見える帳臺構 關野 克 建築史 二ノ三

初期繪卷物に見える住宅 建築雜誌 五ノ六

春日權現靈驗記に現はれたる寢殿造に就いて 太田 靜六 日本美術協會報告 五

近世初期肖像畫の特質

再び似繪に就て 谷 信一 國 寶 三ノ二

再び似繪 田中 喜作 畫 說 二五ノ二

似繪に關する新史料 似繪に關する新史料 荻野三七彦 同 二五ノ五

肖像畫家としての長谷川 聖德太子御像に就て 土居 次義 建築史 二ノ四

聖德太子圖 田中 一松 塔 影 二ノ〇

兵庫 村山長舉氏藏 國 華 五ノ三

玄井三藏行脚圖考 松本 榮一 同 五ノ一

一休和尚像 大阪 池戸宗三郎氏藏 同 五ノ〇

日教聖人畫像補遺 西村 貞 造形藝術 二ノ一

信實の歌仙繪の難 田中倉琅子 畫 說 二五ノ一

佐竹本歌仙繪について 藤田 經世 同 二五ノ二

歌仙畫卷補考 田中倉琅子 同 二五ノ四

佐竹本三十六歌仙の切斷 前後の事情 金子 範二 同 二五ノ七

基家の筆蹟 —歌仙畫卷又補考— 田中倉琅子 同 二五ノ五

業兼本歌仙繪に就て 森 暢 同 二五ノ六

專修寺藏國寶歌仙繪に就て(圖版解説) 釋教卅六歌仙圖殘闕解説 加藤正治氏藏 美術研究 九ノ三

平野神社の歌仙扇額と海 北野雪 土居 次義 美術と 二ノ四

扇面寫經 堀江 知彦 日本美術協會報告 天

日無經に就いて 白畑 よし 美術研究 九ノ九

平家納經繪に見たる唐繪 樣式に就ての一考察 下店 靜市 美術と 二ノ七

藤原信實について 故中川忠順 畫 說 二五ノ三

土佐光信考 —土佐派研究の一節— 谷 信一 美術研究 九ノ四

土佐光祐の畫卷に就て 梅 軒 國 華 五ノ二

薄鴉圖解説 伯爵伊達興宗氏藏 美術研究 九ノ二

住吉如慶筆赤染衛門圖 長岡 羽賀順藏氏藏 國 華 五ノ五

田中訥言の繪入板本 日本水墨畫の語 藤本十九郎 同 二五ノ七

詩畫軸に就いて 松下 隆章 日本美術協會報告 五

三益齋圖の繪畫史的位 置に就いて 田中 喜作 美術研究 九ノ七

竺雲等連贊山水圖 男爵山本達雄氏藏 國 華 五ノ一

無款白衣觀音圖 男爵山本達雄氏藏 同 五ノ四

文清筆湖山圖 湯淺七左衛門氏藏 美術研究 九ノ六

雪舟入明に就ての補遺 雪舟入明に就ての補遺 谷 信一 畫 說 二五ノ一

傳雪舟筆天橋立之圖解説 侯爵山内豊景氏藏 美術研究 九ノ九

雪舟と雪村 中村 寒林 藝術日本 八ノ五

雪村筆七賢舞圖 東京 阪田八十郎氏藏 國 華 五ノ三

單庵智傳梅に營圖 宗祈筆伯牙鍾子期圖 男爵山本達雄氏藏 國 華 五ノ五

雲谷等宥と三谷等宿 雲谷等哲筆花鳥圖 神戶 布施亮延氏藏 同 五ノ六

重直筆額圖 東京 久田益太郎氏藏 同 五ノ九

前田侯爵家山水屏風と會 我蛇足 相見 香雨 國 寶 三ノ三

襖繪その他 中田 宗男 茶わん 二ノ二

洛中洛外圖古屏風 公爵三條公輝氏藏 國 華 五ノ二

京都寺院障屏畫と狩野山 樂 土居 次義 造形藝術 七ノ二

花卉圖 解説 天球院藏 美術研究 九ノ三

海北友松の裝飾畫 笹川 臨風 國 寶 三ノ三

友松琴棋書畫圖屏風 傳海北友松筆綱千圖 大阪 大原忠隆氏藏 國 華 五ノ七

帝室御物海北友松筆海濱 松原御屏風 同 五ノ一

多賀神社の調馬圖屏風に ついて 土居 次義 茶わん 二ノ三

平野神社の歌仙扇額と海 曾我直庵筆鶯圖 男爵山本達雄氏藏 國 華 五ノ〇

「向掛花」屏風 水谷川紫山 南蠻屏風の異國的内容 岡本 良知 史 學 二ノ三

南蠻寺と屏風 岡田 章雄 畫 說 二五ノ七

近世初期の矢和繪裝飾畫 和狩野諸派 谷 信一 國 寶 三ノ九

正文周茂叔圖 文筆筆松鷹圖 秋山 光夫 藝 苑 二五ノ九

畫僧文筆に就いて 將來の課題 永徳をめぐ 保田與重郎 アトリエ 二七ノ四

林鷲峯の山樂傳に就いて 京都寺院障屏畫と狩野山 樂 土居 次義 美術と 二ノ八

狩野元秀筆四季花鳥屏風 大阪 田萬清臣氏藏 國 華 五ノ八

多賀神社の調馬圖屏風に ついて 土居 次義 茶わん 二ノ三

重信筆若竹芥子圖 國 華 五ノ三
京都三大寺喜兵衛氏藏

二條城の探幽 中田 宗男 茶わん 九ノ三
狩野探幽筆中白衣觀音圖 國 華 五ノ七
左右花鳥圖 某氏藏

探幽下繪の蒔繪經營 青木 外吉 畫 說 二五ノ六
久隅守景筆鳩圖月下薄圖 國 華 五ノ三
東京 久田益太郎氏藏

林道春贊傳狩野興意筆樓觀圖 東京久田益太郎氏藏 同 五ノ三
當麻寺緣起畫卷與意筆の一段 拙庵 同 五ノ九
清原雪信筆王昭君圖 同 五ノ八
東京 久田益太郎氏藏

探幽家彩色略記(校刊) 畫 說 二五ノ六
日本南畫の話 脇本十九郎 同 二五ノ三
南畫成立論 金原 省吾 南畫鑑賞 九ノ二
南畫起源の新研究 二、 同 九ノ三
下店 靜市 同

俳畫の鑑賞 南洋軒舟人 茶わん 九ノ三
池大雅評傳 一〇一—一二 南畫鑑賞 四八
人見 少華 同 九ノ二
評傳外池大雅雜記 同 九ノ二

大雅堂の書風とその師承 山本 辰一 茶わん 二〇ノ二
與謝蕪村の藝術 宮田 戊子 南畫鑑賞 九ノ六
與謝蕪村筆花鳥圖 大津市 村田虎次郎氏藏 國 華 五ノ二
蕪村竹間賞月圖 原田 尾山 興亞書報 二ノ八
國 華 五ノ一

蕪村應舉合璧併畫 柴田 宵曲 南畫鑑賞 九ノ六
東京 久田益太郎氏藏
子規居士と蕪村 柴田 宵曲 南畫鑑賞 九ノ六
日本美術協會報告 五六
浦上玉堂の學系 池上幸二郎 同 五八
玉堂小記 森 銚三 畫 說 二五ノ八

浦上玉堂山湖讀易圖 原田 尾山 興亞書報 二ノ五
玉堂東雲節雪圖 畫 說 二五ノ二
美術研究 九ノ八
柴田哲之助氏藏 解説 美術研究 九ノ八

華山の藝術 瀧 精一 美之國 二六ノ二
華山先生の藝術同人としての華山先生 大島 正徳 造形藝術 二ノ二
藝術家としての渡邊華山 藤懸 靜也 同 同
先生 森 銚三 畫 說 二五ノ二

華山傳の研究 谷 信一 寶 三ノ二
華山先生に就て 外狩素心庵 畫 苑 九
渡邊華山先生のひとと藝術 松林 桂月 美術日本 六ノ二
偉なるかな華山先生 竹内 梅松 南畫鑑賞 九ノ九

華山の研究的態度 尾川 多計 同 同
華山の科學的精神 筆山と日本畫(箕南居雜筆) 水守龜之助 美之國 二六ノ二
華山に就いて 伊藤 廉みづゑ 同 四三
華山を裏切る者 杉浦 冷石 美之國 二六ノ二

渡邊華山研究への私語 鈴木 進 茶わん 二〇ノ二
華山雜記 脇本十九郎 畫 說 二五ノ三
華山の田原 原 杉太郎 三田評論 五六
華山先生の幽居と其の墓 甘露寺敬亭 新風土記 一ノ三

渡邊華山先生の最後 伊奈森太郎 同 同
華山先生が長崎に居たかどうか 板澤 武雄 同 同
毛武に於ける華山の足跡 稻村 垣元 同 同
北武藏における渡邊華山 山口 平八 同 同

忠孝の化身華山先生と南畫 小室 翠雲 新風土記 一ノ三
華山の人物 森 銚三 同 同
酒中の渡邊華山 杉浦 冷石 茶わん 二〇ノ二
華山畫展覽會 國 華 五ノ二
華山展を見て 長與 善郎 造形藝術 二ノ二
華山先生百年展有懷此賦 外狩素心庵 同 二ノ二

渡邊華山の畫蹟 廣瀬 憲六 美之國 二六ノ二
華山晩期の作品 菅沼 貞三 美術研究 九ノ二
渡邊華山筆の肖像畫 藤懸 靜也 國 寶 三ノ二
華山の肖像畫 上野 照夫 畫 說 二五ノ二
家藏華山畫の模本 石井 柏亭 同 同
華山の版本畫 漆山又四郎 同 二五ノ四
華山の畫論と畫法 藤懸 靜也 同 二五ノ二

華山先生の畫說併畫論に就て 鈴木 進 同 二五ノ三
華山筆所敷校書圖 解説 美術研究 九ノ二
男爵岩崎小彌太氏藏
華山筆白鷺遊魚秋卉雙鷺圖 解説 同 九ノ二
橋本辰二郎氏藏

華山筆月下鳴機圖 解説 同 九ノ九
男爵岩崎小彌太氏藏
華山筆魯生邯鄲夢裡圖に就て 野間 清六 國 寶 三ノ二
渡邊華山筆鹿圖 國 華 五ノ四
男爵山本達雄氏藏

渡邊華山筆風竹圖 東京 加藤正治氏藏 同 同
華山翁併畫 藤懸 靜也 新風土記 一ノ三
訪蹟錄 藤懸 靜也 新風土記 一ノ三
續全樂堂點描 笹川 臨風 同 同
渡邊華山の訪蹟錄 石坂 養平 同 同

渡邊華山先生年譜 新風土記 一ノ三
華山の守困日歴(公刊) 美術研究 九ノ二
華山の尺牘(校刊) 畫 說 二五ノ二
全樂堂後日錄覺書 森 銚三 國 寶 三ノ二
全樂餘韻 相見 香雨 日本美術協會報告 五七
椿山の肖像畫 菅沼 貞三 美術研究 九ノ三
高久露屋雜俎中ノ三 貞三 南畫鑑賞 四九
人見 傳藏 同 九ノ三

木米筆山水圖 解説 美術研究 九ノ三
中野孝次氏藏
立原杏所筆花鳥圖 國 華 五ノ九
水戸 木村傳兵衛氏藏
竹田莊慈感 内山 雨海 書 道 九ノ八
柳里恭の處生觀 宮田 戊子 南畫鑑賞 九ノ二
米山人の藝術 堂谷 憲勇 造形藝術 二ノ一

桑山玉洲の再認識 外狩素心庵 同 四ノ二
桑山玉洲の藝術觀と茶道 山本 辰一 茶わん 二〇ノ五
良寛と一茶の面影 森 繁夫 清 閑 五
白雲文泉の西遊に就て 相見 香雨 日本美術協會報告 五
畫僧白雲とその寫生圖卷について 西村 貞 同 同
中京派竹洞の藝術心境 神山 白土 藝術日本 八ノ二

田崎草雲の前半生 大串 純夫 南畫鑑賞 九ノ九
松浦武四郎に就て 村松 春水 同 九ノ四

圓山應舉筆式三番圖 國 華 五ノ八
男爵山本達雄氏藏
圓山應舉筆群鶴圖 男爵三井高陽氏藏 同 同
雪中孤松の美と圓山應舉 山本 辰一 茶わん 二〇ノ三
國 華 五ノ一

蕪村應舉合璧併畫 國 華 五ノ一

東京 久田益太郎氏藏	浮世繪の型と幼兒表現	細田榮之と朝妻船圖	金平本挿繪とその影響
松村景文筆藤花小禽圖	西田 正秋畫 說 二五ノ八	椎江 多藏 浮世繪界 五ノ五	木村 捨三 浮世繪界 五ノ一
男爵山本達雄氏藏	太田蜀山と浮世繪	豊國の古稀賀宴に就て	仲田勝之助 茶わん 二〇ノ八
松村景文筆雨中採藻圖	玉林 晴朗 浮世繪界 二二	豊國の女 山下 光華 同 五ノ五	古堀 榮 浮世繪界 五ノ一
男爵山本達雄氏藏	風俗畫と浮世繪	二代豊國の名勝八景	日蓮註畫譜とその異版に就て
宗達派論	男澤 淳 同 一三	檜崎 宗重 同 五ノ二	平塚 運一 同 五ノ〇
宗達下繪光悅短冊貼交屏	ボストン美術館に於ける	廣重の名所繪 脇本十九郎畫 說 五ノ八	手遊繪史 二 津金巨摩雄 同 五ノ二
矢代 幸雄 美術研究 九ノ六	ロバート・ペイン 同	信州小布施村に於ける鴻	繪馬論攷 上 鈴木 進畫 說 二五ノ一
宗達筆伊勢物語帖に就て	ボストン美術館の肉筆浮世繪	山と北齋 長瀬 武郎 浮世繪界 五ノ〇	敬神象徴の神佛御影
同	初期肉筆かぶき繪	北齋の山姥と金太郎	平塚 運一 美 育 二〇
御物宗達屏風 伊勢物語圖	三井 高大 造形藝術 二ノ三	北齋の構圖、空間、遠近	大津繪說
宗達書狀 解説	江戸名所十二月屏風	北齋の水	繪ごよみ
安田靉彦氏藏	岩佐又兵衛勝以と自畫像	北齋の東海道	長谷部言人 茶わん 二〇ノ三
伊勢物語圖 解説	檜崎 宗重 國 寶 二ノ七	北齋畫東都十二景帳	朝鮮・支那・印度
男爵團伊能氏藏	藤懸 靜也 浮世繪界 三六	長谷川雪且の旅日記	滿洲國通化省輯安縣に於ける高句麗の壁畫
尾形乾山の人と藝術	浮世繪版畫の性格	同	池内 宏 考古學 三ノ九
添田 達嶺 塔 影 二六ノ七	檜崎 宗重 同 五ノ二	國芳の資料一つ	梅原 末治 雜誌 三ノ九
尾形乾山に就て	錦繪の始源	森 銚三 同 五ノ一	支那繪畫文化史觀
新 榮 堂 藝術日本 八ノ五	保永堂版初摺に就て	一つ家傳説の展開 中、下	渡邊 素舟 學校美術 一四ノ七
光子内親王の繪畫	山下 光華 同 五ノ一	主として淺草寺藏一勇齋國芳の畫額に就て	支那畫の鑑賞 堂谷 憲勇 ビタカ 八ノ二
松花堂昭乘 鷺尾 順敬 茶わん 二〇ノ二	松方氏浮世繪版畫コレクションの意義	鈴木 仁一 國 華 五ノ二	支那繪畫の話 金原 省吾 美 育 一四
相澤 春洋 書 道 九ノ五	鶴岡八幡宮藏の錦繪	曉齋と末期浮世繪	支那繪畫史の創始者一遺業
松花堂筆花籠圖	鎌倉管見生 浮世繪界 五ノ九	吉野 建雄 浮世繪界 五ノ一	故内藤湖南博士の上
男爵山本達雄氏藏	廣瀬重信筆三幅對	古堀 榮 同 五ノ二	支那山水畫論講話
寶藏坊信海の師傳と複製	小松屋百龜について	抱瘡繪 同 五ノ五	支那山水畫論講話
山本 辰一 茶わん 二〇ノ三	仲田勝之助 同 五ノ七	司馬江漢と捕鯨圖	正倉院山水圖の研究
英一蝶筆金山寺圖	新發見の色摺繪本番附と鳥居清經	檜崎 宗重 南畫鑑賞 九ノ五	支那の花鳥觀 佐藤 良 南畫鑑賞 九ノ四
東京 大倉集古館藏	柳川米志 古堀 榮 同 五ノ三	日本の銅版四 岩橋 章山 エツチング 八九	泰以前の繪畫 西丸 小園 書 道 九ノ三
小川破笠筆奉禮高松圖	歌麿北里挿物に就て	上方銅版畫の江戸名所	謝赫畫品の序 堂谷 憲勇 畫 說 二五ノ八
東京 加藤正治氏藏	歌麿北里挿物に就て	上方銅版江戶名所追考	六法攷 上 同
江戸時代に於ける浮世繪	松木喜八郎 同 二二、三	上方銅版畫雜錄	黃休復の畫評 今村 龍一 畫 說 五ノ二
菊地廣太郎 藝術日本 八ノ九	歌麿畫婦人相學十體	同	張彦遠の繪畫史觀
再檢される浮世繪	長瀬 武郎 同 五ノ三	同	同
木村 月兔 同 八ノ八	豊泰の上野仁王門圖	同	同
浮世繪始源に於ける土佐的要素	玉林 晴朗 同 五ノ七	同	同
於崎 宗重 造形藝術 二ノ二	蘆齋筆屋臺店の圖	同	同
浮世繪雜記 熊代 莊蓬 畫 說 二五ノ八	同	同	同
美術講話浮世繪の話	同	同	同
四一終	同	同	同

歷代名畫記と詩品

山室 靜南畫鑑賞 九ノ六

王維の畫論及畫 西丸 小園 畫道 九ノ六八

王維江山雪霽圖に關する 奧村伊九良 造形藝術 二ノ八

半度又關聖變相の一斷片 松本 榮一 建築史 二ノ五

伏生授經圖 阿部孝次郎氏藏 美術研究 九ノ四

檄煌出千手觀音圖 國華 五ノ三

胡舜臣祭京送郡玄明使秦 書畫合卷 阿部孝次郎氏藏 美術研究 九ノ八

世界的古典 田中 一松 阿々土 三

風雅集と牧溪 風卷景次郎 文學 八ノ一

傳夏圭山水圖 畫說 五ノ八

因陀羅柳下布袋圖 同 二ノ二

因陀羅の禪會圖 島田修二郎 滿開 五

寒江獨釣圖 三橋 亘 南畫鑑賞 九ノ六

水牛渡江圖 東京 久田益太郎氏藏 國華 五ノ三

群牛散牧圖卷 兵庫 阿部孝次郎氏藏 同 五ノ二

元畫山水圖 名賢寶續冊中の一畫 同 五ノ二

馬麟筆夕陽圖 東京 根津藤太郎氏藏 星岡 二九

雪窓筆蘭圖 東京 久田益太郎氏藏 國華 五ノ五

文嘉筆琵琶行圖 阿部孝次郎氏藏 美術研究 九ノ一〇

董其昌の西洋畫 布施 知足 南畫鑑賞 九ノ七

文從簡筆江山平遠圖 兵庫 阿部孝次郎氏藏 國華 五ノ六

明畫伏生圖に就て―伏生 授經圖の研究 小林太市郎 寶雲 三

張璪圖筆拔嶂懸泉圖 兵庫 阿部孝次郎氏藏 國華 五ノ一

董其昌書畫合璧盤谷卷 兵庫 阿部孝次郎氏藏 同 五ノ三

邵彌筆山水卷 兵庫 阿部孝次郎氏藏 同 五ノ四

沈南蘋筆一品當朝圖 兵庫 阿部孝次郎氏藏 同 五ノ八

王時敏筆山水圖 兵庫 阿部孝次郎氏藏 同 五ノ二

王賢筆高士聽泉圖 兵庫 阿部孝次郎氏藏 同 五ノ七

高鳳翰筆草堂秋菊圖 兵庫 阿部孝次郎氏藏 國華 五ノ七

黃慎漁樂圖 原田 尾山 興亞書報 三ノ六

王安節聽泉圖 同 三ノ三

李鱣 黑田重太郎 南畫鑑賞 九ノ二

清李鱣年年富貴圖 高島槐安氏藏 原田 尾山 興亞書報 三ノ四

吳歷筆山水圖 兵庫 阿部孝次郎氏藏 國華 五ノ五

顧大申筆老松飛瀑圖 兵庫 阿部孝次郎氏藏 同 五ノ九

伊字九筆離合山水圖解説 長谷川治郎兵衛氏藏 美術研究 九ノ一

支那古壁畫の展視 松岡 護みづゑ 四九

日本支那の繪畫活動と 明末支那の洋畫 西村 貞 美術研究 九ノ一

支那民藝版畫 平塚 運一 茶わん 二ノ五

支那に於ける民藝版畫 中村 亮平 浮世繪界 五ノ二

西藏の喇嘛佛教繪畫 北郷 鷹生 苑 六七

印度繪畫の發達 木村 泰次 同 五八

法隆寺とアヂヤンタの壁 畫の異趣 野生司香雪 茶わん 二ノ二

彫刻 彫刻史研究の基礎 金森 遼 美術と 二ノ九

佛像に於ける製作意識の 變遷 野間 清六 茶わん 二ノ九

佛像と修理 金森 遼 同 二ノ九

佛像の素人鑑定 松田不空 一路 同 二ノ九

佛像探求 鎌原 正巳 南畫鑑賞 九ノ三

佛教尊像講話二六一完 吉祥 眞雄 美術と 二ノ三

飛天光とその源流 大口 理夫 畫說 二ノ七

龍を現はした彫刻 田中 主水 美術と 二ノ八

上代佛像彫刻論 猪熊 兼繁 美術と 二ノ二

天平彫刻試考 金森 遼 美術研究 九ノ三

古代彫刻の乾漆像の話 太田 正雄 藝術日本 八ノ五

白鳳彫刻史論 小林 剛 藝考古學 三ノ八

白鳳彫刻に關する基礎的 問題 足立 康 同 三ノ二

藤原時代の佛像 久志 卓眞 茶わん 二ノ六

運慶と快慶 朝日 道雄 ビタカ 八ノ四

佛像光背の基本形式につ いて 足立 康 建築史 二ノ三

佛像光背の種類と變遷 石田 茂作 藝考古學 三ノ二

ひげ 大口 理夫 畫說 五ノ二

押出佛の二つの場合 法隆寺三尊佛と唐招提 寺三尊佛 同 一五ノ八

唐招提寺金堂の諸佛 米山 徳馬 以可留我 一〇

唐招提寺木彫群の文化史 的意義 石崎 達二 同

西大寺四佛像に就て 金森 遼 寶 三ノ五

東寺講堂とその眞言佛像 足立 康 建築史 二ノ二

高野山金堂七尊像の造顯 年代 同 國華 五ノ六

白水阿彌陀堂 豐岡 益人 美術研究 九ノ九

白杵石佛の年代 白杵石佛の年代 玉蟲龍三郎 南畫鑑賞 九ノ三

大谷石佛と清嚴寺鐵塔婆 田口 信行 畫說 五ノ二

京の三十三間堂 故明珍恒男 同 一五ノ九

興福寺北圓堂及びその佛 像の再興 足立 康 建築史 二ノ六

下野藥王堂の鐵佛 八橋徳次郎 美術と 二ノ二

安祥寺五智如来佛の造顯 年代 足立 康 建築史 二ノ六

運慶の大日如来 相内武千雄 三田評論 五五

興福院阿彌陀三尊乾漆像 太田 古朴 美術と 二ノ三

相州秋谷の鎌倉丈六佛 倉田 信行 畫說 五ノ七

善光寺式三尊 篠崎 四郎 星岡 二九

遣迎院の二尊佛 米山 徳馬 美術と 二ノ三

法隆寺の戊子年銘釋迦三 尊像を中心として 金森 遼 寶 三ノ三

釋迦如來像 解脫 美術研究 九ノ七
奈良 中宮寺藏

平等寺釋迦如來立像 米山 德馬 美術 二ノ二
大報恩寺釋迦如來坐像 同 二ノ二

誕生釋迦如來像 澁江 二郎 茶わん 二ノ四
上醍醐藥師三尊と會理僧 足立 康 建築史 二ノ三

日向藥師 黒田 鶴心 茶わん 二ノ八
藥師寺東院堂聖觀音像 足立 康 二ノ二

小松寺如意輪觀音像 畫 說 五ノ五
如意輪觀音像 解脫 美術研究 九ノ五

觀心寺本尊と觀心寺緣起 實錄帳 足立 康 建築史 二ノ三
山口市長谷觀音堂十一面觀音像 史迹と 二ノ八

十一面觀音像 解脫 美術研究 九ノ三
奈良 法華寺藏

法金剛院十一面觀音坐像 米山 德馬 美術 二ノ四
往生極樂院勢至像 同 二ノ五

室生寺の地藏菩薩 澁江 二郎 漆と工藝 四ノ六
尾張に鐵地藏を追ふて 柴田 常恵 茶わん 二ノ八

中宮寺の紙製文殊 菅原 安男 畫 說 二ノ四
明王院不動明王小像 川勝政太郎 美術 二ノ二

大覺寺金剛夜叉明王立像 (五大尊像ノ内) 米山 德馬 同 二ノ七
宇佐神宮二王像 稻葉 倉吉 同 二ノ三

關東に於ける聖德太子像 稻村 坦元 畫 三ノ三
鑑真大和上像愛慕 大川 逞一 以可留我 二

文安元年銘空寂上人の木像 藤野 勝彌 美術 二ノ二
空寂上人像とその胎内銘 伊藤 樸堂 汎工藝 一〇

丹波清源寺に於ける木像 中野 楚溪 美術 二ノ五
上人の彫刻 三井 高大 造形藝術 二ノ四

伎樂斷章 同 星 同 二ノ三
天平の伎樂 同 星 同 二ノ三

大阪府叡福寺發見的伎樂 考古學 三ノ二
面 平林 悦治 雜誌 二ノ二

下野佐貫の銅板曼荼羅 篠崎 四郎 星 同 二
神形影像濫觴私考 金森 遼 考古學 三ノ九

藥師寺神像雜感 野間 清六 茶わん 二ノ二
吉野水分の女神 續賞古遊 丸尾彰三郎 畫 說 五ノ二

心録(一) 丸尾彰三郎 畫 說 五ノ二
建部神社の女神像に就て 森口奈良吉 美術 二ノ八

快慶作八幡神像 朝鮮・支那・印度 華 二ノ二

朝鮮の佛像 黒田 鶴心 茶わん 二ノ五
朝鮮紀行佛國寺の卷 杉山 司七 美 育 三ノ八

座右の支那古彫 川島理一郎 美之園 六ノ三
印度及び支那に於ける彌 勒崇拜の史實 望月 信亨 大學 三ノ三

パリ島の彫刻其他 上野 春香 造形藝術 二ノ二

建築 建築史研究の態度について 足立 康 建築史 二ノ四
大岡 實

日本支那の長さの單位と數詞に關し二加藤 泰 建築世界 一ノ一

日本建築の美 渡邊 護畫 說 二ノ二
日本建築解説 福山 敏男 建築史 二ノ四

日本建築解説 飛鳥ノ一 康 同 二ノ五
建築の時代識別同 飛鳥ノ一 康 同 二ノ五

日本建築は支那系に非ず 同 茶わん 二ノ二
古建築雜記二則 同 同 二ノ二

茅負に於ける特殊なる技 同 建築史 二ノ五
繪卷物に見える帳臺構 大岡 實 同 二ノ三

宮室建築と一般住宅 關野 克 同 二ノ三
斑鳩宮陞の發見 前田 松韻 建築雜誌 五ノ六

斑鳩宮陞の發見 中上川彦一郎 建築史 二ノ五
大津宮の位置に就いて 足立 康 同 二ノ五

前藤原宮と後藤原宮 松崎 宗雄 同 二ノ三
藤原宮陞調査の近況 竹井 春男 同 二ノ四

平城京と小學國史 足立 康 同 二ノ四
平城京宅地割の一例 松崎 宗雄 同 二ノ六

平城宮朝堂院龍尾壇の問 題 同 同 二ノ三
平安京の宅地割と町屋 關野 克 同 二ノ二

延暦十二年の平安宮十二 門の造營 松崎 宗雄 同 二ノ五
平安宮十二門の門號につ いて 同 同 二ノ二

桂離宮の造營時代 森 薊 建築史 二ノ一
桂離宮の印象 北川 桃雄 茶わん 二ノ二

日本最初の瓦葺の宮殿 足立 康 同 二ノ三
天竺様の源流について 村田 治郎 國 寶 三ノ二

禪宗建築と圓覺寺舍利殿 藤岡 通夫 畫 說 二ノ三
法隆寺論爭史話 五一一 美術 二ノ三

法隆寺研究の動機 伊東 忠太 建築史 二ノ一
法隆寺研究の動機 伊東 忠太 建築史 二ノ一

北畠男の法隆寺二寺說 家永 三郎 同 二ノ三
法隆寺再建論を賛し喜田 博士の靈に獻す 小場 恒吉 以可留我 二

法隆寺若草伽藍址の發 掘 足立 康 建築史 二ノ一
法隆寺若草伽藍址 關根 龍雄 考古學 三ノ三

法隆寺獻納御物の目錄に 就て 附若草伽藍發掘記 萩野三七彦 畫 說 五ノ四

法隆寺若草伽藍址の發掘 經過 足立 康 建築史 二ノ二
法隆寺東院の發掘 中上川彦一郎 同 二ノ四

法隆寺舍利殿下遺構の發見 同 同 二ノ二
聖武天皇聖蹟東大寺 足立 康 新風土記 一ノ二

東大寺雜記二則 中上川彦一郎 建築史 二ノ四
東大寺の鐘樓について 太田博太郎 同 二ノ六

榮西の「入唐緣起」に就 いて 足立 康 同 同
東大寺大佛殿の永祿再興 に就て 中上川彦一郎 同 二ノ一

唐招提寺研究論主要目 佐伯 啓造 以可留我 二

唐招提寺銘文集成 瀨廣 直彦 以可留我 〇〇
 唐招提寺金堂の建立年代 福山 敏男 同 〇〇
 唐招提寺の遺構 岸 熊吉 建築史 二ノ四
 唐招提寺講堂複原考 黒田 昇義 以可留我 〇〇
 鑑真和尚の東征と招提律 橋本 凝胤 同 〇〇
 唐招提寺の舍利殿と經藏 康 同 〇〇
 大安寺の伽藍配置に就て 同 同 〇〇
 常陸國分僧寺址考 太田 静六 考古誌 三ノ四
 常陸國分寺址考 同 建築雜誌 五ノ六
 常陸新治廢寺の調査 高井 悌三郎 建築史 二ノ五
 行基菩薩と所謂四十九院 足立 康 美術 二ノ〇
 行基建立の四十九院 田中 重久 同 二ノ九
 下野藥師寺址 赤木 邦輔 書 道 九ノ七
 礎石 猪原 一美 美術 二ノ八
 紙屋川礎石に就て(野寺の再檢討) 川井 銀之助 同 二ノ四
 修圓僧都と室生寺彌勒堂 猪熊 兼繁 同 二ノ二
 東寺の伽藍配置 大岡 實 建築史 二ノ一
 東寺講堂とその眞言佛教 足立 康 同 二ノ二
 延暦寺相輪様の規模 同 同 二ノ六
 法成寺の創建 家永 三郎 美術研究 九ノ八
 法成寺の創立に關する文獻 同 建築史 二ノ三
 法成寺塔婆に關する一資 同 同 二ノ四
 因幡堂雜記 川勝 政太郎 美術 二ノ五

山城國觀音寺の創建 毛利 久美 美術 二ノ〇
 「山城國觀音寺創建」の訂正 同 同 二ノ二
 醍醐寺の伽藍配置 大岡 實 建築史 二ノ二
 白水阿彌陀堂 豐岡 益人 美術研究 九ノ九
 法界寺阿彌陀堂 同 華 二ノ二
 本山寺本堂(古建築巡禮一) 川勝 政太郎 美術 二ノ〇
 京の三十三間堂 故明 珍恒男 書 道 五ノ九
 泉涌寺伽藍に就て 太田 博太郎 建築史 二ノ三
 興福寺北圓堂及びその佛像の再興 足立 康 同 二ノ六
 禪宗建築と圓覺寺舍利殿 藤岡 通夫 書 道 五ノ三
 建長寺指圖 飯田 須賀斯 考古誌 三ノ七
 彌勒寺本堂 同 美術 二ノ二
 鶴林寺本堂(古建築巡禮二) 川勝 政太郎 美術 二ノ二
 正傳寺方丈建築に就て 藤岡 通夫 書 道 二ノ一
 建築から見た南蠻寺 岡田 幸雄 同 二ノ二
 寶臺院大方丈と靈廟 靜岡市大火に類焼した國寶寶臺院大方丈及靈廟 澤島 英太郎 建築雜誌 三ノ六
 仁王門の位置に就いて 特に塔婆との關係 杉山 信三 同 二ノ六
 小塔に見える建築的意匠 大岡 實 建築史 二ノ五
 向造の名稱について 小倉 強 同 二ノ一
 上賀茂神社嘉元造替の本殿 谷 重雄 同 二ノ四
 石上神宮攝社出雲建雄神社拜殿建築考 黒田 昇義 國 寶 二ノ二

石の間 福山 敏男 建築史 二ノ二
 寶來山神社本殿の建築 大岡 實 同 二ノ六
 尾張東照宮社殿造替年次に就て 城戸 久國 寶 三ノ四
 神明宮本殿(口繪解説) 大岡 實 建築史 二ノ二
 神明宮と式年造替 田邊 泰國 寶 三ノ八
 神宮の式年造替について 福山 敏男 建築史 二ノ六
 古い鳥居を探ねて 阪谷 良之進 美術 二ノ一
 春日神社一ノ鳥居覺書 黒田 昇義 同 二ノ二
 宮室建築と一般住宅 前田 松韻 建築雜誌 五ノ六
 平安時代公家住宅建築三例 關野 克 建築史 二ノ五
 鳳凰堂壁畫中の住宅 前田 松韻 國 寶 三ノ三
 初期繪卷物に見える住宅建築 關野 克 建築雜誌 五ノ六
 春日權現靈現記に就いて たる寢殿造に就いて 太田 静六 協會報告 六
 寢殿造に就て 同 茶わん 二ノ一
 泉殿釣殿の研究(中) 泉殿に就て 森 蘊 寶 雲 三ノ三
 釣殿の考察 太田 静六 考古誌 三ノ三
 源融公河原院の遺址に就て 特に涉成園との關係に及ぶ 田中 義一 美術 二ノ三
 豐公聚樂第の大廣間 大熊 喜邦 建築史 二ノ一
 聚樂第の一遺構―長州萩常念寺の大門に就て 藤岡 通夫 書 道 二ノ七
 二條城の創建に就て 足立 康 建築史 二ノ一

國寶二條城の建築、上下 藤島 亥治郎 國 寶 三ノ六七
 二條城本丸と天明の大火 足立 康 建築史 二ノ二
 舊二條離宮(二條城)の本丸について 澤島 英太郎 美術 二ノ一
 名古屋城天守造替年次考 城戸 久 建築雜誌 五ノ六
 慶長造替の伊賀上野城天守に就て 藤岡 通夫 建築史 二ノ六
 江戸城蓮池門遺構現名古屋城正門に就て 城戸 久國 寶 三ノ三
 和歌山城天守とその造替について 藤岡 通夫 建築雜誌 五ノ六
 釋家並びに庶民住宅に於ける納戸 關野 克 建築史 二ノ六
 大岡越前守と南町奉行 大熊 喜邦 新風土記 二ノ一
 日本の農民建築 石原 憲治 同 〇〇
 仙臺平野に於ける茶居村 小倉 強 建築雜誌 五ノ六
 民家 民家研究會 建築世界 一三
 茶室茶庭考 外山 英策 國 華 五ノ五
 茶室に於ける利休の功績 澤島 英太郎 茶わん 二ノ一
 妙心寺の茶室 四方 義一郎 同 二ノ八
 金地院の遠州作茶室について 澤島 英太郎 書 道 五ノ五
 床間と茶室に就て 月 兎 藝術日本 八ノ五
 古瓦名稱の變遷 久保 常晴 考古誌 三ノ八
 古瓦名稱の用例について 會津 八一 同 三ノ〇
 唐招提寺出土の古瓦紋様に就て 溝邊 文和 以可留我 〇〇
 三たび軒瓦の名稱を論じ 石田 茂作氏の考慮を促す 足立 康 同 〇〇

三たび軒瓦の名稱に就て 足立 康 考古學 三〇ノ三

四たび軒瓦の名稱に就て 同 同 三〇ノ四

龍角寺文字瓦攷 篠崎 四郎 同 三〇ノ四

棺に利用されたる鴉尾 梅原 末治 建築史 二〇ノ三

瓦猿の話 加藤 雲山 茶わん 二〇ノ八

前栽秘抄の研究 森 蘊 建築史 二〇ノ五

平安朝の庭園 同 造形藝術 二〇ノ九

夢窓國師の作庭 同 同 二〇ノ三

善阿彌初期の作庭 同 建築史 二〇ノ三

二代目善阿彌 同 同 二〇ノ六

慈照寺庭園の作者に關する疑 同 同 二〇ノ三

慈照寺築庭に關する一考 察 同 畫 說 二〇ノ三

益之集箴の作庭 同 建築史 二〇ノ五

慶長以前の三寶院庭園 同 同 二〇ノ三

二條城二之丸庭園 龍居松之助 國 寶 二〇ノ五

烈公と借樂園 同 同 二〇ノ一

茶室茶庭考 上、下 外山 英策 國 華 二〇ノ六

利久の示した茶庭の極致 山本 辰一 茶わん 二〇ノ七

南微多野志留邊(大崎不味公茶室觀覽記) 桑原 雙蛙 同 二〇ノ三

枯山水抄一、二 三橋 亘 同 二〇ノ三

朝鮮・支那 朝鮮・支那 建築雜誌 二〇ノ六

朝鮮建築に於ける柱内轉 小川 敬吉 建築雜誌 二〇ノ六

千軍里雙塔の意匠計畫に就て 米田美代治 建築雜誌 二〇ノ六

朝鮮古建築雜信 支那古代の尺度に關する一考察上、下 竹島 卓一 美術史 二〇ノ三

宗代に於ける方位の決定と水盛法―營造法式通解 其一― 同 同 二〇ノ六

晋北朔縣の林衝崇福寺 村田 治郎 建築雜誌 二〇ノ六

河北省易縣開元寺 同 同 二〇ノ六

廣州市佛寺 岸田日出刀 建築史 二〇ノ四

錦州省興城縣の白塔に就て 園田 一龜 考古學 二〇ノ三

工 藝

佛具 佛具 黒田 鵬心 茶わん 二〇ノ三

支那工藝文化概説三、四 渡邊 素舟 學校美術 二〇ノ一

陶 磁 工

茶器と宸翰 高柳 光壽 茶わん 二〇ノ一

陶磁鑑賞の醜陋味 山崎 徳吉 同 二〇ノ二

陶磁器表現の兩技法 鹽田 力藏 同 二〇ノ八

うはぐすりの話五―八 内藤 貧狂 趣 味 二〇ノ三

佛教と燒物 柴田 常惠 茶わん 二〇ノ一

續旅襍記 小山富士夫 陶 磁 二〇ノ一

茶陶研究覺書九―一六 西堀 一三 趣 味 二〇ノ三

圓覺寺の古陶磁を觀る 梅澤彦太郎 同 二〇ノ三

陶器今昔談 井上吉次郎 茶わん 二〇ノ八

青磁一夕談 寺内 半月 同 二〇ノ六

海鼠青の現象について 鹽田 力藏 趣 味 二〇ノ四

正倉院の陶器 鷹巢 豐治 茶わん 二〇ノ三

祥瑞水玉茶盤 粟田有聲 庵 星 二〇ノ二

―根津青山莊藏― 祥瑞赤繪 西山南天子 京都美術 青年會々誌 二〇

祥瑞と稱する青花白磁 尾崎 洵盛 同 同

祥瑞年代考 石割松太郎 同 同

祥瑞磁祖論反駁 鹽田 力藏 同 同

入札に現はれた祥瑞香合 同 同

染付禮讚譜一、二 永末新次郎 茶わん 二〇ノ七

古染付の見どころ 河村 蜻山 同 二〇ノ九

染付の鑑賞 久志 卓眞 同 二〇ノ七

染付について 小林太市郎 同 同

染付青料への感覺 河合卯之助 同 同

染付放談 河村 蜻山 同 同

赤繪と青花 小村 俊夫 同 二〇ノ一

吳須青料の話―蘇勃泥青と蘇泥勃青― 鹽田 力藏 趣 味 二〇ノ二

故藏六翁の「泥中庵今昔陶話」より 小野賢一郎 同 同

こま土 小野賢一郎 同 同

やきもの香合小考一、二 鈴木智足堂 趣 味 二〇ノ六

形物香合に就て 京都美術 青年會々誌 二〇

香合隨筆莊子隅田川 田川 いちのりや 清 閑 二〇

日本陶磁と其源流 久志 卓眞 茶わん 二〇ノ二

子持高杯山村耕花藏 後藤 守一 星 岡 二〇

正倉院の天平三彩瓷器 中村 亮平 茶わん 二〇ノ五

弘仁瓷器 久志 卓眞 同 二〇ノ一

弘仁瓷器と青瓷 鹽田 力藏 同 二〇ノ三

利物香合 山科茶入に出遇ふ 高草 藍山 趣 味 二〇ノ七

千家名物山科茶入は丹波か瀬戸か 菅原 英伍 陶 磁 二〇ノ二

切込燒 佐々城朴安と神取御殿山 長谷部言人 同 同

燒 水戸景山公の陶道と其作 陶中庵主人 趣 味 二〇ノ二

品 印花瓶子壺について―法 照禪師墳墓發掘記 金子規矩雄 茶わん 二〇ノ九

黄瀬戸に就いて 佐羽 未央 同 二〇ノ三

瀬戸の狛犬 久志 卓眞 同 二〇ノ九

黄瀬戸小觀 井上吉次郎 同 二〇ノ二

元寶燒 正木 直彦 同 二〇ノ一

川名銅版染付 茅原退二郎 同 二〇ノ七

黒織部の高台―織部に關する雜感― 小野賢一郎 同 二〇ノ六

古田織部正の陶器に就いて 三宅 長策 同 二〇ノ六

古田織部に關く 賤樓 山人 同 同

織部の研究 佐羽 未央 同 同

織部を語る 久志 卓眞 同 同

織部燒を顧みて 鹽田 力藏 同 同

織部の獨創性 北大路魯艸 同 同

美意識の陶器織部の今昔 赤塚 幹也 同 同

織部隨想 原 伊蘇 同 同

織部について	小田 冷劍 茶わん	二〇ノ六	仁阿彌道八作龍香會	藤 庵 子星 岡	二〇	八代燒(高山燒) 初代の	製品に就て	米 智徳 茶わん	二〇ノ二	說々中國陶瓷一	尙 志 怡 茶わん	二〇ノ二	
二碗吟味	小野賢一郎 同	二〇ノ一	古備前陶窯と其の作風に	就いて	寛 藝衛日本 八ノ五	肥後八代(やつしろ) 燒	やきもの 六ノ三、	橋本 敦喜 趣 味 二	六ノ二	印象にある支那陶瓷の二	小林太市郎 同	同	
伊賀と信樂について	上野 寛 藝衛日本 五	ハノ五、	古備前の見方	桂 又三郎 茶わん	二〇ノ二	古薩摩茶碗を語る	前田幾千代 同	支那縹瓷考	神谷 泳山 趣 味	六ノ六	支那縹瓷考	神谷 泳山 趣 味	六ノ六
無釉土器の妙趣	久志 卓眞 茶わん	二〇ノ八	古備前のみどころ	多田 利吉 同	二〇ノ九	平佐燒の染付	同	茶わん	二〇ノ五	支那の茶入と香爐に就て	藝衛日本 八ノ五	同	
壺屋信齋追ひ書	胡桃澤勘内 同	二〇ノ〇	蟲明燒及び三笠燒聞書	高草 藍山 趣 味	六ノ二	龍門司燒雜考二、三	同	同	二〇ノ四、六	陶器と茶鉢と陸羽	諸岡 存 茶わん	二〇ノ六	
男山窯陶工光川亭仙馬	石村賢次郎 同	二〇ノ九	陶燒大原燒に就て	松尾仙人洞 茶わん	二〇ノ四	琉球の古陶に就いて	山里 永吉 同	同	二〇ノ二	ねりあげ手	小山富士夫 同	二〇ノ九	
越中瀬戸の古窯地を發掘するまで	鴻巢 山人 同	二〇ノ二	古萩茶碗	松本 保三 同	二〇ノ二	朝鮮陶磁器の變遷	(新羅土器より高麗青磁まで)	山田萬吉郎 同	二〇ノ二	青磁の話	九龍莊主人 藝衛日本 八ノ五	同	
越中瀬戸古窯址發掘について	鷹巢 豐治 同	二〇ノ三	源内燒の見方について	入田 整三 同	二〇ノ〇	朝鮮陶磁器の特質	小林太市郎 同	同	二〇ノ五	異國物香合	交趾香合	いちのりや 茶わん	二〇ノ六
古九谷餘談(大瀬莊隨筆)	井上 銚次 趣 味	六ノ四	豊前上野燒の研究七、八、九	井上 圓藏 趣 味	六ノ二、四、二	朝鮮陶磁私感	小野賢一郎 同	同	二〇ノ〇	古染付小話	梅澤彦太郎 同	二〇ノ三	
九谷宮本屋窯に就て	上 同	六ノ三	上野窯渡家系圖の訂正	渡 源彦 同	六ノ五	高麗時代古墳出土の鐵彩手	野守 健 陶 磁	二ノ一	二〇ノ一	陶製三彩花文様大盤解説	侯爵細川護立氏藏	美術研究 九ノ八	同
吉田屋九谷の看方	彩雅房主人 同	六ノ六	上野窯渡家系圖に就て	渡 源彦 同	六ノ二	高麗茶碗	山田萬吉郎 茶わん	二ノ一	二〇ノ一	越州窯の壺、御物青瓷四耳壺其他	藤岡 了一 陶 磁	二ノ一	
九谷再興窯の研究吉田屋窯	井上 銚次 同	六ノ七、八、〇	古市文書上野燒關係資料	古市 宗利 同	六ノ六、九	高麗青磁の一考察	野守 健 同	二ノ五	二〇ノ五	吉州窯に就て	小山富士夫 畫 說	五ノ六	
九谷本窯と永樂和全	前 同	六ノ二	古高取窯の遺跡	武田 勘治 茶わん	二〇ノ二	熊川に黒を探る	光成 信男 同	二ノ五	二〇ノ五	支那柴窯考	尾崎 洵盛 趣 味	六ノ七	
後篇	同	六ノ三	筑後陶磁私觀	梅野 滿雄 同	二〇ノ九	井戸茶碗についての一考察	鈴木智足堂 趣 味	六ノ二	六ノ二	吳州の産地	尾崎 洵盛 同	同	
九谷本窯と永樂和全補遺	同	六ノ三	伊萬里の古窯	寺内 信一 趣 味	六ノ八	新羅の土器・高麗の瓦器	奥平 武彦 茶わん	二〇ノ八	二〇ノ八	吳州赤繪考	上田 恭輔 同	同	
他窯に紛れ易い丹波	杉本 捷雄 茶わん	二〇ノ〇	伊萬里燒の染付	寺内 半月 茶わん	二〇ノ七	李朝古染	笠井周一郎 同	二〇ノ三	二〇ノ三	吳須・吳須赤繪	尾崎 洵盛 同	同	
丹波窯雜記	同	六ノ二	南海で拾つた古伊萬里	齋藤 正雄 同	二〇ノ二	李朝白磁	飯島滋次郎 同	二〇ノ五	二〇ノ五	入札に現はれた吳州香合	同	同	
樂燒の濫觴に就て	田中作太郎 茶わん	二〇ノ四	最初に發掘した現川古窯の想出	金原 陶片 趣 味	六ノ八	二碗吟味	小野賢一郎 同	二〇ノ一	二〇ノ一	宣徳染付	久志 卓眞 茶わん	二〇ノ〇	
陶工永樂傳を續りて	竹中 久七 同	二〇ノ一	現川窯と關係深き通祖元	寺内 半月 同	六ノ九	常の茶碗	堂本 印象 同	二〇ノ二	二〇ノ二	鼻煙壺	島田 貞彦 同	二〇ノ三	
陶土永樂を語る(座談)	故齋藤 快樂 畫 說	一五ノ七	唐津燒	金原 陶片 造形藝衛	二ノ八	務安地方の窯跡―務安刷毛目の窯跡―	山田萬吉郎 同	二〇ノ五	二〇ノ五	萬曆赤繪	梅澤彦太郎 同	同	
千家並に永樂家と私の郷里	西川 義方 茶わん	二〇ノ八	蘭人の親たる肥前陶器	永見徳太郎 茶わん	二〇ノ九	支那陶器の概観	小田 三郎 趣 味	六ノ六	六ノ六	南蠻古陶の看方問答	芳賀 喜清 趣 味	六ノ九	
行基燒	太田 能壽 趣 味	六ノ三	唐津香茶碗	金原 陶片 同	同	支那陶器の概観	永山 鑑人 藝衛日本 八ノ五	八ノ五	八ノ五	安南染付雜考	鎌倉芳太郎 茶わん	二〇ノ七	
仁清―五段園莊隨筆―	蟻川 第一 清 閑	五	献上唐子	林 源吉 同	同								
公寛親王と乾山	玉林 清朗 趣 味	六ノ二											

武藏國玉川村古墳出土の
七鈴鏡 笠井新也 考古學雜誌 三ノ四

阿波國名西郡左右山出土
の平形銅鏡と其遺蹟 村木幸雄 考古學雜誌 三ノ三

畫的の蒔繪 吉野富雄 漆と工藝 四六
蒔繪瑣談 竹内梅松 塔影 一六〇

具々理染 高野辰之 澗 六
染繪花籠圖 解説 美術研究 九三
神奈川安田叔彦氏藏

相武出土の鏡鑑に就て 石野瑛同 同 三ノ一

鐵裝大刀と鐵裝柄頭 神林淳雄同 同 三ノ二

出雲大社蒔繪櫛笥 島根出雲大社藏 國華 五〇二

本邦木綿機業成立の過程 中世纖維工業史の一節 小野晃嗣 史學雜誌 一〇〇
日本に於ける正裝の推移 櫻井秀 文部時報 六六六、六六八、六六九

正倉院御物拓影に就て (圖版解説) 寶雲 同 三

後藤光乘とその作品に就いて 高柳光壽 畫說 二五九

南蠻様蒔繪器物の一種に就いて 吉野富雄 美術研究 九二

聖餅箱の蒔繪に就いて 同 畫說 二五九

藤原鏡の發生に就て 前田泰次同 同 同

漢三國六朝紀年鏡銘集錄 增補 其七 梅原末治 史學 二九二

浄法寺のお椀市 吉川保正 工藝 一〇三

俗の一斷面 遠藤武 史苑 三〇三

鎌倉時代鏡について 後藤守一同 三ノ一

鏡背漫語 廣瀬都巽 澗 六七

幸阿彌家傳卷(公刊) 幸阿彌家傳書(公刊) 幸阿彌家文書(公刊) (梅ヶ枝御硯箱日記) (唯一心) 同 同 同 同

近世服飾上より見たる半襟の問題 遠藤武 美術研究 九二

唐招提寺鐘の鑄造年代に就て 田中重久 以可留我 二

古鏡 西丘神社境内發掘の古鏡 丸山瓦全 新風土誌 一〇一

諸考漫抄 服部梅素 澗 六七

狂言袴 梅澤彦太郎 茶わん 二〇一

再び發見された香取神宮寺鐘 服部清道 新風土誌 一〇五

支那銅利器の成分に關する考古學的考察 梅原末治 (東京) 東方學報 二二三

毛利家の高麗時代螺鈿箱 吉野富雄 畫說 一五七

我國の硬玉問題に就て 所謂「玉」について 入田整三 同 同

美濃の鐵塔 八橋徳次郎 茶わん 二〇二

古代利器の化學的研究 山内淑人 同 二〇二

朝鮮時代折脚卓 奥平武彦 茶わん 二〇四

古墳出土玉類の研究に就て 古墳出土玉類の研究に就て 森貞成 同 三〇五

舊箱根山御在所銅香爐 石川茂作 茶わん 二〇二

陶齋吉金錄に見えたる形銅鏡 駒井和愛 考古學雜誌 三〇三

福州の漆器に就いて 齋藤勝 ニューズ 九七

硬玉製大珠の問題 硬玉製大珠の問題 八幡貞彦 同 同

幡幢の龍頭 山村排花 茶わん 二〇四

桃氏の青銅鏡について 水野清一同 同 同

染織・服飾 正倉院の染織品に就いて 白石染人 茶わん 二〇三

淡路で見た異形硬玉器 奈良時代に於ける玉の種類と用途 石田茂作 同 同

釣燈籠四題 篠崎四郎同 二四

木漆工 正倉院の木漆工藝 吉野富雄 茶わん 二〇三

天壽國繡帳緣起文異本の斷片 田中豐藏 畫說 一五七

類と用途 石田茂作 同 同

茶湯釜 香取秀眞同 一〇

上古時代の香葉 後藤守一 國寶 三〇九

天壽國曼荼羅の復原に就いて 石田茂作 同 二五九

垂玉考 樋口清之 考古學雜誌 三〇六

正倉院御物の兵器 保之助 茶わん 二〇三

古墳時代前期の銅 後藤守一 考古學雜誌 三〇三

天壽國繡帳の原形 福山敏男 國寶 三〇四

禪定寺五輪石塔 川勝政太郎 史迹と美術 二〇四

平形銅鏡出土の遺蹟に就て 三木文雄 同 同

漆器の耐久性に就ての觀察 吉野富雄 茶わん 二〇七

天壽國繡帳の原形 足立康 建築史 二〇五

大阪濱口町發掘石造五輪塔 同 同 二〇九

同 同 二〇九

西武庫素畫鳴神社層塔其史迹と 二ノ二
他 梶山彦太郎 美術史 二ノ二
熊野の墓塔 黒田 昇義 美術史 二ノ二
如法經石塔の發見 川勝政太郎 同 二ノ八
石塔類に於ける蓮華文様 高松宮殿下御藏傳小 二ノ三
とその傳播 川勝政太郎 同 二ノ三
丹後溝谷神社の石燈籠 永濱 宇平 同 二ノ七
朝鮮紀行佛國寺の卷 千二百年前の石佛と石 二ノ八
塔の美しさ 杉山 司七美 青 二ノ八

其 他
四天王寺藏七種懸守についで 望月 信成 星 同 二ノ四
釜敷に弦袋 飯の家主人 茶わん 二ノ六
端研餘談 麻野 惠三 星 同 二ノ七
硯の話 新榮堂兒龍 藝術日本 二ノ一
伊勢辰回願錄二〇一—二八 星 同 二ノ一
西林 壽岳 文章思想 二ノ八
古い人形の見方 山田徳兵衛 茶わん 二ノ六
舍利譚 前田 泰次 語 同 二ノ五

書蹟・印章・文書
書道と東洋思想 山本 幹夫 文部時報 七〇九
我國上代の文化と書道 瀧 精一 書 道 九ノ〇
日本書道と日本精神 尾上 柴舟 興亞書報 三三〇
日本書道の再建設 野本 白雲 同 二ノ四
日本書道の理想と菅唐墨 大澤 雅然 書 道 九ノ二

筆蹟の時代識別法 相澤 春洋 茶わん 二ノ二
茶器と宸翰 高柳 光壽 同 二ノ一
古筆手鑑の話 太田 正雄 藝術日本 八ノ四
藤原と鎌倉 相澤 春洋 書 道 九ノ二
高松宮殿下御藏傳小野道風筆秋萩歌卷 秋萩歌卷に就いて 尾上 八郎 同 同
寸松庵色紙 行成日記抄 田中 塊堂 書 道 九ノ三
高野切(名寶物語) 一ノ瀬方丈 藝術日本 八ノ四
類聚歌合について 堀部 正二 星 同 二ノ五

八重葎の小倉色紙 青木 外吉 書 道 二ノ九
小倉色紙雜考 田中 槐堂 語 同 二ノ五
基家の筆蹟 田中倉琅子 書 道 二ノ五
歌仙畫卷又補考 西行偶言 相澤 春洋 書 道 九ノ二
熊野懷紙 藤田 經世 書 道 二ノ一
願行上人の眞筆に就いて 八橋徳次郎 茶わん 二ノ二
順逆の書 相澤 春洋 同 二ノ六
豐太閤の自筆消息 桑田 忠親 國 寶 三ノ三
寛永の三筆 相澤 春洋 書 道 九ノ五
寛永の三筆と近衛信尹 田中 塊堂 同 同

上代様復古の人々 相澤 春洋 茶わん 二ノ二
本阿彌光悅 植村 和堂 書 道 九ノ五
良寛の書を見る眼 相馬 御風 茶わん 二ノ三
華山の書 藤原 楚水 書 道 二ノ二
水戸藩の書道に就いて 神郡 晩秋 書 道 九ノ六
幕末の奇傑三舟の書道に就いて 佐倉 達山 同 九ノ五

正倉院文書所感 入田 整三 茶わん 二ノ三
日本の古寫經 飛田 周山 造形藝術 二ノ二
國分寺勸願經に就いて 關根 龍雄 協會報告 蓋
支那に於ける書體の變遷 井上 太郎 藝術日本 八ノ三
甲骨から紙へ 中村 不折 ビタカ 八ノ四
漢字の變遷を語る 書史と代表的碑法帖 石橋 厚水 興亞書報 二ノ八
漢碑の形制 中村 不折 書 道 九ノ八
漢・泰山都尉 孔宙碑に於ける隸法 林 祖洞 同 同
孔宙碑の形態 恒川 樵谷 同 同
孔宙碑の管見 須羽 源一 同 同
漢・武都太守李翁西狹頌・釋文 明拓西狹頌に就いて 中村 不折 同 同
武都太守李翁西狹頌 須羽 源一 同 同
西狹頌の欣賞 恒川 樵谷 同 同
蔡邕傳 中村 不折 同 九ノ九
日本書道の理想と菅唐墨 大澤 雅然 同 九ノ二
蹟との關係 菅川 臨風 茶わん 二ノ二
王右軍の書 菅原 江南 書 道 九ノ二
唐代墨蹟の欣賞 桑原 白雲 同 同
唐人の眞蹟に就いて 野本 源一 書 道 九ノ七
唐の太宗と晉祠銘 須羽 源一 書 道 九ノ七
唐太宗御製御書晉祠銘 釋文 池田 醇一 同 九ノ八
晉祠行 池田 醇一 同 九ノ七
太宗の書法 大澤 雅然 同 同

太宗の書を鑑賞す 桑原 江南 書 道 九ノ七
晉祠銘欣賞 恒川 樵谷 同 同
晉祠を訪ふ 西川 寧 同 同
晉祠銘の新舊拓に就いて 江川 碧潭 同 同
唐宋の告身の刻石 須羽 源一 同 九ノ二
張令曉告身について 西川 寧 同 同
唐の張令曉告身 仁井田 陞 同 同
米元章の三帖について 西川 寧 同 九ノ一
張即之の報本庵記について 同 同 九ノ二

淺草寺所藏國寶元版一切經緣起 外山 知三 史 學 二ノ四
印の知識 山田 正平 書 道 九ノ〇
倭古印 楠瀬 日年 語 同 五ノ七
大和古印 篠崎 四郎 星 同 二ノ三
名家私印の蒐集に就いて 市嶋 春城 語 同 七
起請文の料紙牛王寶印に就いて 相田 二郎 史學雜誌 一七

歴史・考古學・地誌
國史・文化の再認識 岡部 長景 茶わん 二ノ二
上代人の生活 後藤 守一 同 二ノ三
朝鮮上代文化と日本 奥平 武彦 同 二ノ二
我が古代社會に於ける甕棺葬 鏡山 猛史 瀧 三
求女塚と菟原郷土誌 福原潛次郎 考古學 三ノ〇
土器繩文の意義 長谷部言人 茶わん 二ノ八
國寶に指定された日吉出土品に就いて 編輯部 三田評論 五

昭和十五年度美術文獻目録

一七三

神代石 長谷部言人 雜考 古學 三〇
長谷寺の金石文 篠崎 四郎 星 同 三三
隨筆金石文 高田 十郎 史 迹と 二〇
古銘文 佛敎と背合せの 美 術と 二〇
佛敎の傳來と其の受容 松本 解雄 史 林 二〇
上代佛敎史小考二題 家永 三郎 歴史地理 六〇
上宮聖德法王帝説の書史 家永 三郎 同 一〇
的研究 法皇帝説書寫年代に關する 新史料 萩野三七彦 説 二〇
附法隆寺北斗曼荼羅關係の古文書 鑑眞の一考察 細川 公正 歴史地理 六〇
鑑眞和上の東征と招提律 橋本 擬胤 以可留我 二〇
寺 弘法大師と茶 佐々木教純 茶わん 二〇
修圓僧都と室生寺彌勒堂 猪熊 兼繁 美 術と 二〇
當麻無量光寺をめぐる 中世佛敎の一面 多賀 宗牟 歴史地理 五〇
納經思想の變遷 高瀬 承嚴 學 報 三三
中世東大寺油倉の經濟的活動 伊奈 健次 歴史地理 五〇
興福寺再興と九條兼實の國體觀 中川上彦一郎 建築史 二〇
五山叢林の塔頭に就て 前編 上、下 玉村 竹二 歴史地理 六〇
藤涼軒及び藤涼職考 同 同 六〇

中世に於ける古典の傳來 史學雜誌 六〇
法興寺の打匳 宮地 直一 建築史 二〇
口傳と敎命 足立 康 建築史 二〇
公卿學系譜(秘事公傳成立以前) 竹内 理三 歴史地理 五〇
上代山城に於ける秦氏の繁延 大井重二郎 美 術と 二〇
放氏源流考 中山 太郎 歴史地理 六〇
風俗の流行と其の變移 丸山 昇 藝術日本 八〇
延喜式附圖に就て 桃 裕 行 歴史地理 五〇
鎌倉時代に於ける神話及傳説の發展 村山 修一 史 林 二〇
西園寺家「管見記」に就て 伊木 壽一 三田評論 五三
俊成本春記と其後の發見 萩野三七彦 歴史地理 五〇
春記の最後の寫本 同 史 觀 三三
吾妻鏡記述の態様について 山中 武雄 史學研究 二〇
吾妻鏡の奥州花園城考 補遺 堀巳 史 觀 三三
天正遣歐使節記の一本に就て 岡本 良知 史 學 二〇
文祿元年の日本 土井 忠生 同 一九
日本古代の世界圖 松田福一郎 茶わん 二〇
重源上人と陳和卿 太田博太郎 建築史 二〇
子規居士と蕪村 柴田 宵曲 南畫鑑賞 九〇

朝鮮上代文化と日本 武彦 茶わん 二〇
昭和十四年に於ける朝鮮古蹟調査概要 齋藤 孝 古學 三〇
殷末周初の東方經略に就て 小川 茂樹 (東京) 二〇
特に山東省壽張縣出土の銅器銘文を通じて 後漢の佛敎に就いて 石川 博道 史 學 二〇
殷墟侯家莊記 水野 清一 史 林 二〇
支那佛敎より見たる藏外佛敎 資料の蒐集整理に就て 池内 宏 考古學 二〇
撫順の史蹟 重源上人と陳和卿 中央アジア興亡史 四 W・M・マツガウソ原著 ビタカ 八〇
大唐西域記に見えたる印度河河口の諸國の研究 足立 喜六 史學雜誌 五〇
帖木兒晩年の撒麻耳土の親たる 森田龜之助 アトリエ 二〇
安南沱瀆(トゥラン)の日本町 金 永 鍵 史 學 二〇

宇治の茶話 山田萬吉郎 茶わん 二〇
利久居士三百五十年大遠忌 越 味 六〇
利休居士の三百五十年忌に際して 田中 仙樵 茶わん 二〇
利久雜觀 花見 潮巳 同 二〇
利久の死 粟田 天青 同 二〇
桑山玉洲の藝術觀と茶道 山本 辰一 同 二〇
陶器と茶、舜と陸羽 陸羽茶經時代の茶道と平壤 加藤茂三郎 同 二〇
插花様式の變遷序説 西堀 一三 畫 説 二〇
插花師・俳諧師五十一〇 山中保之輔 茶わん 二〇
立華考 水谷川紫山 同 二〇
蒙恬の碑 樂 之 軒 畫 説 二〇
喜田貞吉博士略傳(附論者目錄) 佐伯 啓造 以可留我 二〇
正木先生の薨去を悼む 香取 秀眞 畫 説 二〇
感謝の思ひ出 梅原 末治 陶 磁 三〇
故ユーモルフォオロスの思ひ出 奥田 誠一 同 同
アーサー・ウェーレイ ハウスホーファーとグンデルト 友枝 高彦 同 二
ビニヨンのことども 矢代 幸雄 同 九
國華沿革略 矢代 幸雄 同 九
國華の世界的存在 矢代 幸雄 同 同

古美術關係單行圖書

總記

美學及藝術學講義(金子博士選集下卷) 金子 馬治 理想社
東洋美術文庫 アトリエ社

吳 春 望月 信成
寫 樂 井上 和雄
天平彫刻 澁江 二郎
歌 麿 近藤市太郎
貞觀彫刻 金森 逸

周 文 松下 隆章
廣 重 内田 誠
圖 像 佐和 隆研
古美術寫真集 二五―三二
東亞古文化研究 原田 淑人

刊座香 行右 會寶山

於東京美術俱樂部

二月 某舊家
三月 展觀入札 三樂莊、某家
四月 某大家 松柏軒、某家
五月 某大家 某舊家 溪壽庵
六月 八木、某舊家 某家
九月 松洞軒並某家 某家
十月 某家 伊藤駿一氏 舊大名
十一月 油繪展觀
十二月 某大家 辻野家、某家 山村耕花

於名古屋美術俱樂部

一月 翠松庵、某家
二月 嘸々庵
四月 暹日庵
五月 清風庵、某大家 某舊家
十一月 某家 某家
十二月 武山福樂庵外某家

於京都美術俱樂部

一月 某家
二月 石原家
四月 展觀入札
六月 栗庵 內貴家
十一月 市田芙蓉館
十二月 某家 三樂庵 某家
三月 笹川慎一コレクション展觀
四月 某家
六月 松筠亭 某家
十二月 積翠庵 某家 某家 廣松庵

繪畫

藝苑聚芳 第一期
繪畫篇 一、二 藝苑聚芳 芸 艸堂
繪畫鑑賞の心理 松本亦太郎 岩波書店
東洋繪畫の傳統 (アジヤ問題講座一〇) 思想文化 植村鷹千代 創元社
山水人物畫談 松本亦太郎 岩波書店
本朝畫人傳一 村松 梢風 中央公論社
奈良帝室博物館繪畫圖錄 鎌倉時代一、二 奈良帝室博物館 同 館
紀元二千六百年奉祝紀念 日本近世名畫展覽會目錄 恩賜京都博物館 同 館

宸影光暉 菊山 喜男 京都市史編纂事務局
日本肖像畫(教養文庫六〇) 上野 照天 弘文堂
繪卷物の鑑賞 (東雲文庫七) 望月 信成 寶雲舍
繪卷の構成(アトリエ臨時増刊號) 奧平 英雄 アトリエ社
戰記繪卷の研究 櫻井 清香 日本文獻資料研究所
三寶繪詞 中 七條 愷 古典保存會
能惠法師繪詞(複製) 附 解說 美術研究所 同 所
聖德太子傳繪卷(複製) 再版 森地 明陸 鶴故郷舎
一遍聖繪六條緣起 淺山圓祥校註 山喜房
春日驗記詞書 陽明 文庫 同 上
圖像(東洋美術文庫) 佐和 隆研 アトリエ社
佛教圖像 一—七 製刊行會 便利堂

日本佛像圖說 木村 小舟 磯部甲陽堂
法隆寺金堂壁畫 吉田 覺胤 法隆寺
平家納經圖錄 奈良帝室博物館 便利堂
二條離宮障壁畫大觀 帝室博物館 便利堂
周文(東洋美術文庫) 松下 隆章 アトリエ社
海北友松名畫集 恩賜京都博物館 芸艸堂
池大雅研究發表 四大雅堂を中心 人見 勇市 洽陽盧
渡邊華山(增補訂正版) 笹川 種郎 高陽書院
渡邊華山(補再版) 太田鐔太郎 華山叢書出版會
憂國の畫傑渡邊華山先生百年記念展覽會出陳目錄 東京美術青年會 同 會
再認識せらるべき杉谷雪樵 長谷川巳之吉 第一書房
玉堂琴士畫譜 一、二 秋葉 啓 聚樂社
木米名畫譜 五、六 秋葉 啓 聚樂社
吳春(東洋美術文庫) 望月 信成 アトリエ社
新選宗達派畫集 三—六 秋葉 啓 聚樂社
宗達 高見澤木版社 同 社
宗達伊勢物語圖帖 第一輯ノ四 藤本 韶三 造形藝術社
乾山妙蹟譜 秋葉 啓 聚樂社
光琳 附錄 光琳百圖 高見澤木版社 同 社
乾山、抱一 同 同 文華書院
曲亭馬琴翁自畫贊帖 同 同 文華書院

寒葉齋綾足先生建墓紀念 拓本自畫像 寒葉齋綾足 建墓會 同 會
浮世繪版帖 一—六 高見澤木版社 同 社
母性愛浮世繪集 松本喜八郎 芸艸堂
富士三十六景 第三四輯 德力富吉郎 內田美術書肆
廣重(東洋美術文庫) 內田 誠 アトリエ社
廣重 野口米次郎 丸善書店
歌麿、寫樂、北齋(浮世繪十大家集一) 高見澤木版社 同 社
歌麿(東洋美術文庫) 近藤市太郎 アトリエ社
寫樂(東洋美術文庫) 井上 和雄 同 同
興福寺の繪馬目錄(獸魯庵漫錄第三) 新藤 默魯庵 新藤地學文庫
小繪馬圖集 北條 時宗 旅の趣味會
日本廿六聖人殉教者畫集 鶴田源次郎 長崎天主堂
通溝下(滿洲國通化省輯安縣高勾麗壁畫墳) 池內 宏 日滿文化會
西域畫聚成 一—四 結城 素明 審美書院
印度の古壁畫を探る 再版 杉本 哲郎 出版命館

彫刻

佛像の鑑賞 下 (東雲文庫四) 中村 亮平 寶雲舍
日本佛像圖說 木村 小舟 磯部甲陽堂
佛像彫刻案内 奈良帝室博物館 同 館

天平彫刻 (東洋美術文庫)

貞觀彫刻 (東洋美術文庫)

大佛師運慶 (日本精神叢書三二)

快慶作阿彌陀如來尊像

能と能面 (教養文庫)

工藝

原始民藝圖集

器物篇三 (茶道全集十四)

鑑定備考日本陶器全書

日本古陶銘款集

形物香合圖鑑

續伊部燒陶印集

現川燒の研究

繪唐津鑑賞圖錄

定本九谷

九谷燒研究

備前燒早わかり

支那陶器圖說

支那陶磁の諸考察 (改版)

古鏡

水瓶及湯瓶實測圖

アトリエ社

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

刀劍鑑定之書

日本刀研究の手引

日本刀要覽

日本刀私談

大日本刀劍史

日本刀の近代的研究 (増補改訂)

日本刀工年表

古銅器形態の研究

考古學的研究

時代時繪襷漆集成

大日本織物二千六百年史

上、下

江戶時代染色技術に關する文獻解題

織寶大鑑

綾錦類纂

織繡遺寶

三、四、七

小袖のすがたみ

能衣裳

江戸期衣裳名鑑

江馬務解説

時代甲冑百領展覧會

茶杓 (茶道文庫十)

高屋

洗硯

第一期第四輯

横川毅一郎

洗硯社

同

同

同

同

同

同

同

建築及庭園

東洋建築論 (アジヤ問題) 講座第十卷思想文化篇一

日本建築史 (大親日本文化史叢書)

日本建築史 (足立日本文化史叢書)

日本建築 (上、下、補三版)

日本の建築 (學生課叢書第七篇)

日本の建築と藝術上 (關野博士論文集一)

神宮の建築に關する史的調査

日本の城

法隆寺建築讀本

南河内發見二塔婆址及び其の心礎

國寶興福寺東金堂修理工事報告

國寶延曆寺瑠璃堂維持修理報告

國寶書院圖聚

護國寺月光殿

茶室篇 (茶道全集卷三)

日本庭園發達史 (園藝考の改題) (日本文化名著選十三)

日本庭園 (教養文庫四七)

庭園と日本精神 (日本精神叢書十四)

社寺の庭園

重森三玲

河原書店

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

京都の庭園

慈照寺庭園の變遷を論ず

後樂園誌

作庭記

支那建築史 (東洋史講座十二)

道教思想と支那建築 (啓明會講演集)

琉璃塔

滿洲都城沿革考

支那の佛塔 (支那歴史地理叢書九)

熱河遺蹟

考古學上より見たる熱河 (滿洲國古蹟古物調査報告第二篇)

書道文庫

張芝、鐘繇、索靖、陸機

唐太宗、虞世南

三三 隱元、木庵、即非

日本書道と日本精神 (日本精神叢書)

日本書道手本集

御物倭漢朗吟集

古經斷簡

興福寺斷碑 (傳寂運寫本複製)

古今和歌集序

鸞鳳帖

善隣帖及解説

藤本

且

同

同

同

同

同

同

同

同

同

昭和十五年度美術文獻目錄

崇神天皇御本古今和歌集
久曾神昇 文明社

袖珍假名名筆抄 上、下
鷹見 芝香 三省堂

中務集(尊經閣叢刊)
こけ衣(同) 同 育徳財團

良寛遺墨 藤本 韶三
アトリエ社

不昧公御印影 桑原羊次郎
同 同上

増訂寰宇真石圖 藤原 楚水
興文社

袖珍王右軍書聖教序 藤原 楚水
三省堂

崇恩藏墨皇王右軍聖教序
(王羲之書)(複製) 清 雅堂

袖珍孫過庭書譜 藤原 楚水
三省堂

海内第一唐拓本九成宮醴
泉銘 歐陽詢書 清 雅堂

褚遂良行書四種 廣瀬 保吉
同 同上

袖珍智永真草千字文 藤原 楚水
三省堂

宋拓真艸千字文 中村 準策
依水園

歴史及考古學

日本考古學論攷 梅原 末治
弘文堂

日本遠古之文化 内山 清男
考古學會

日本考古學 後藤 守一
四海書房

日本史蹟の研究 上田 三平
第一公論社

關東の史蹟と民族 須田 重臣
文永堂

上代帝都の史蹟 佐藤善次郎
三教書院

西都原古墳の調査別冊
實測圖共(日本古文化研究報告第十)
濱田 耕作 日本古文

聖德太子と日本文化(日本精神叢書三) 教 學 局
内閣印刷局

飛鳥白鳳國民の精神生活
(日本思想史2) 清原 貞雄
中文館

樟園餘影 吉井 良尚
同上

見聞談叢 (岩波文庫) 龜井伸明校訂
岩波書店

近世崎人傳 伴 蒿蹊
同 同上

大分縣史蹟名勝天然紀念物
大分國寶概説 天然紀念物 同 縣

三重縣知事指定三重縣史蹟名勝天然紀念物
三重縣史蹟名勝天然紀念物 同 縣

鳥根縣史蹟名勝天然紀念物
鳥根縣史蹟名勝天然紀念物 同 縣

兵庫縣史蹟名勝天然紀念物
兵庫縣史蹟名勝天然紀念物 同 縣

佐賀縣史蹟名勝天然紀念物
佐賀縣史蹟名勝天然紀念物 同 縣

愛知縣史蹟名勝天然紀念物
愛知縣史蹟名勝天然紀念物 同 縣

滋賀縣史蹟名勝天然紀念物
滋賀縣史蹟名勝天然紀念物 同 縣

大津京陸上柴田 實 調査會

香川縣史蹟名勝天然紀念物
香川縣史蹟名勝天然紀念物 同 縣

大分縣史蹟名勝天然紀念物
大分縣史蹟名勝天然紀念物 同 縣

長野縣史蹟名勝天然紀念物
長野縣史蹟名勝天然紀念物 同 縣

一輯 筑前國嘉穂郡王塚裝飾古墳(京都帝國大學文學部考古學研究報告第十五册)
梅原 末治 桑名星文堂

大和の光 中村 安雄
國寶社

大分縣金石年表 日名子太郎
同上

京華叢英 菊山 喜男
京都市史編纂事務局

近畿名蹟全書 辰馬 六郎
金剛社

河内之南部 九 辰馬 六郎
金剛社

加賀藩史料 第十三篇
前田家編輯部 石黒 文吉

大津京陸の研究 肥後 利男
文泉堂

南河内發見二塔婆址及び其の心礎 藤野 勝彌
中央文化研究會

山背國分寺瓦文字 西 戊 會
清水卓夫

上宮聖德法王帝説 (岩波文庫) 花山 信勝
岩波書店

東京掃苔錄 藤浪 和子
東京名墓顯彰會

鏡鏡及玉の研究 考古學會
吉川弘文館

紋章の研究(創元選書四二) 中島利一郎校訂
創元社

奈良帝室博物館歴史圖 奈良帝室博物館
同 同上

二千六百年歴史 大阪毎日
同 同上

二千六百年歴史 朝日新聞
同 同上

二千六百年歴史 朝日新聞
同 同上

紀元二千六百年歴史 朝日新聞
同 同上

文化史展覽會目錄 東京朝日新聞
同 同上

日本文化史展覽會目錄 朝日新聞
同 同上

紀元二千六百年奉祝「日本文化と京都」大展覽會目錄 築事務局
同 同上

大阪二千六百年歴史展覽會目錄 大阪毎日
同 同上

大阪二千六百年歴史展覽會目錄 大阪毎日
同 同上

後鳥羽天皇七百年式年御祭紀念展覽會目錄 金丸 二郎
同 同上

日本社寺大觀 寺院篇・藤本弘三郎
教育圖書社

兵庫縣神社誌 兵庫縣神社職會同
株式會社

多賀神社文書 解說共 中村 直勝
多賀神社

八坂神社文書 下卷 (八坂神社叢書第四輯) 八坂神社
同 同上

南都巡禮記 附解説 石黒 文吉
侯爵前田家育徳財團

法隆寺論攷(喜田貞吉選集一) 喜田 貞吉
地人書館

東大寺史 土屋 徳城
東大寺

淺草寺志 上 松平 定常
淺草寺

東本願寺史料 自藤貞太郎註
東本願寺

年史文久三年 柏原 祐衛
宗學院

校訂增補續天台座主記 延曆寺
同 同上

龍谷大學佛教史學論叢 龍谷大學
富山房

綜合國史論文 佛敎史學會
富山房

要目 高師部會
刀江書院

國史辭典 二 お一か 富山房
同 同上

改訂有職故實 關根 正郎
林平書店

辭典 加藤貞次郎
近澤書店

新羅史研究 今西 龍
同 同上

朝鮮寶物史蹟名勝天然紀念物一覽 朝鮮總督府
同 同上

滿洲歷史地理(再版) (歷史調查報告第一) 滿洲洲鐵道株式會社
丸善株式會社

六朝墓誌精華一清 雅堂 同 同上

河南安陽遺寶 梅原 末治
小林寫真製版所出版所

通溝下(滿洲國通化省梅原 末治
日滿文化會)

池内 宏 協 同 同上

考古學上より見たる熱河
(滿洲國古蹟古物調査報告第二編)
島田 貞彦

雲南四川踏査記
米内山庸夫

滿洲都市沿革考
八木英三郎

興京二道河子舊老城(建
國大學研究院歴史報告一)
稻葉 岩吉

建州紀程圖記(清芬室叢
刊第一) 申 忠一

法顯傳中亞、印度南海紀
行の研究 足立 喜六

蒙古と青海 下卷(アジア
内陸叢刊第三)
ブルジエウ 谷 耕平

アラスキ 高橋勝之譯

トウルケスタン(アジア内
陸叢刊第四) デニソン・ロ
ス、ヘンリ
ス、クライン

三橋富治男譯

沙漠の蒙疆路(大陸叢書二)
ラテイモア 朝日新聞社

オウエン・
西卷周光譯

古代の蒙古(支那歴史地
理叢書第五) 内田 吟風

富 山 房

中央アジア熱沙行 世界
秘境探險叢書 春日 俊吉

博文 館

ゴビの謎 S.ヘディン
福富勇雄譯

生活 社

トルキスタンへの旅
タイクマン 岩波 書店

神近市子譯

西南支那踏査記
向 尙 等 大東出版社

河上純一譯

西康・西藏踏査記
劉 曼 鄉 改造 社

松枝 茂夫 譯

岡崎 俊夫 譯

印度・印度支那(普及版)
久留島秀三郎 相模 書房

東洋史論叢(池内博士選
歴記念) 池内博士還歴記念
東洋史論叢刊行會 刊行會

萬葉圖録 文獻地理篇
佐々木信綱 靖 文 社

家藏看板圖譜(雲泉莊山
誌卷之五) 杉浦(丘園
野上) 豊一郎 岩波 書店

宮本武藏言行錄 森 銚三 三省 堂

日本茶道史 西堀 一三 創元 社

日本喫茶史 木宮 泰彦 富山 房

日本茶道論 田中喜四郎 十字 屋

茶道全集 矢部 良策 創元 社

卷一 茶說茶史篇

卷三 茶室篇

卷五 茶人篇

卷七 懷石篇

卷十 茶道用語解説
古今茶入綜覽

卷十二 文獻篇

卷十四 器物篇 三

茶道辭典 高橋 義雄 富山 房

茶道聖典千ノ利久全集
(二百五十年忌記念出版)
千利久 西堀 一三 河原 書店

茶聖利休居士記録 高木 文 同 上

古田織部正殿茶湯開書
卷六、七 桂 又三郎 文獻 書房

普齋茶書 松風氏藏版
脇本十九郎 同 上

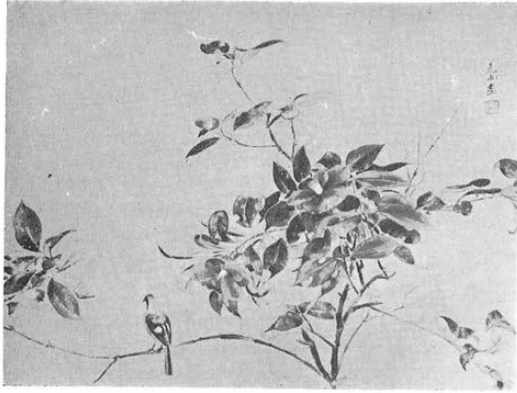
茶道文庫 十一 木下 桂風 河原 書店

茶入花押抄 諸岡 存 日本 茶道
朝鮮の茶と禪 家入 一雄 出版 部

昭和十五年度美術文獻目錄

挿

圖



市 晃 鳥 廣 (展會春三) 椿 紅 三

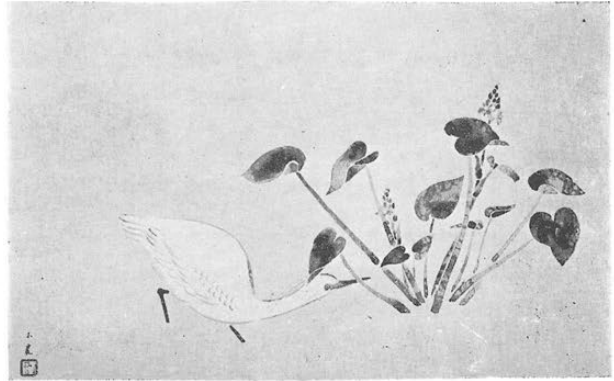


彦 叔 田 安 (展會弦朱) 刀 太 之 靈 御 都 布 一



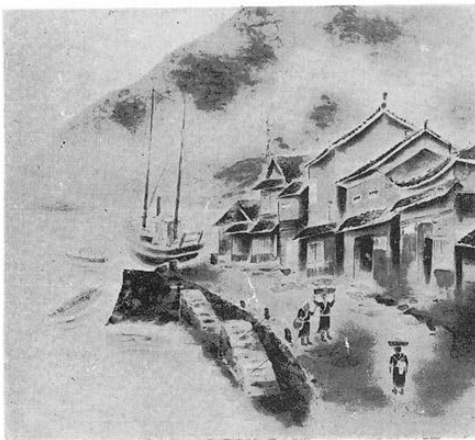
四 鴨 (春虹會展)

宇 田 荻 邨



二 白 鷺 (沼三題之内) (同)

川 崎 小 虎



六 海 邊 七 題 之 内 (薄暮)
(新興美術院展)

田 中 案 山 子

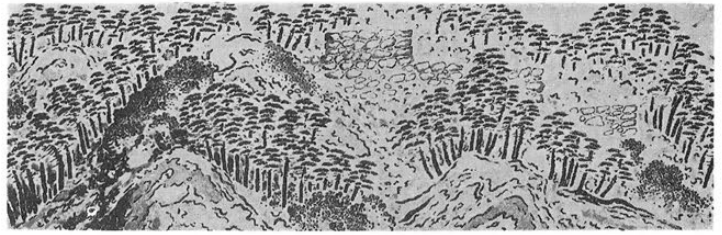


園 松 村 上 (同) 櫛 五

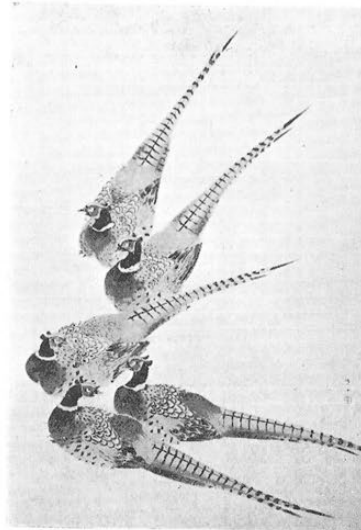


一〇 前庭訪春圖 (同)

川端龍子



風 杉 木 茨 (展院術美興新) (分部) 卷の山湖 七



八 高麗雉 (春の青龍社展)

鍛治貫一

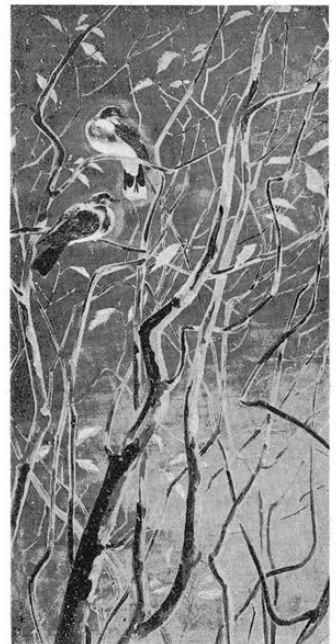


(同) (内の題二月) 夜 青 二一
草 一 口 坂

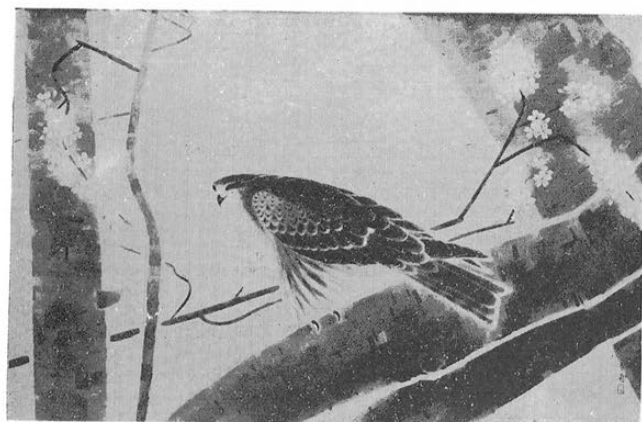


一一 雪 鱗 (同)

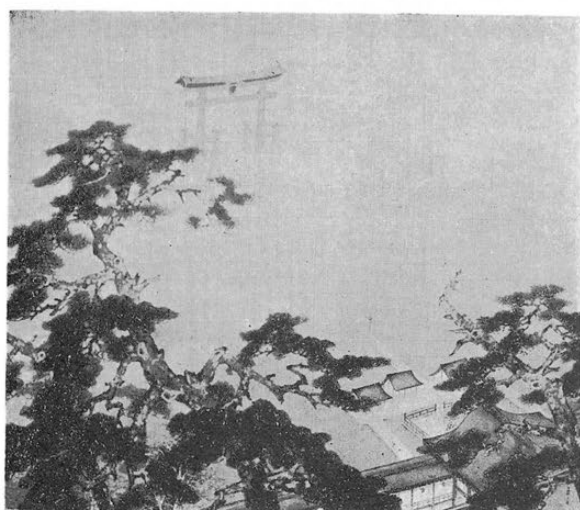
木村鹿之介



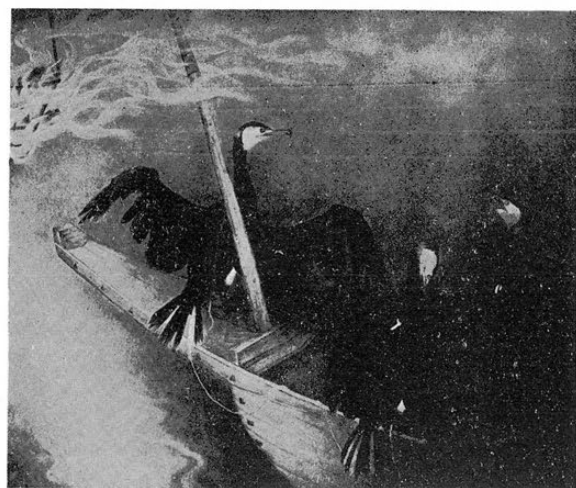
樂三納加 (同) 陽斜 九



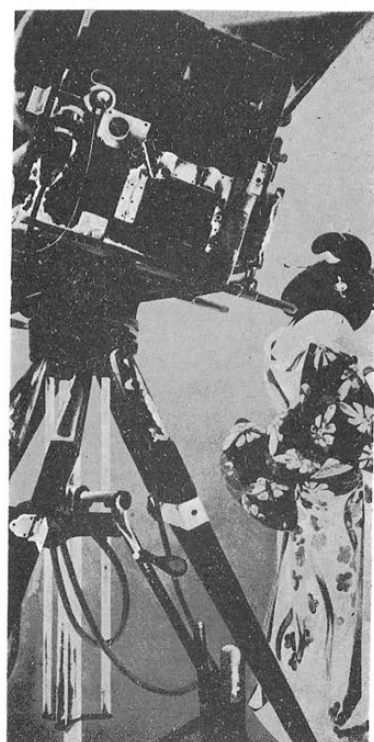
市白森 (展會畫讀) 陰 春 四一



舟曼村川 (同) 鳥嚴の朝 六一



畝十木荒 (同) 明 玄 七一



一三 撮影 小憩 (同)

依田季夫



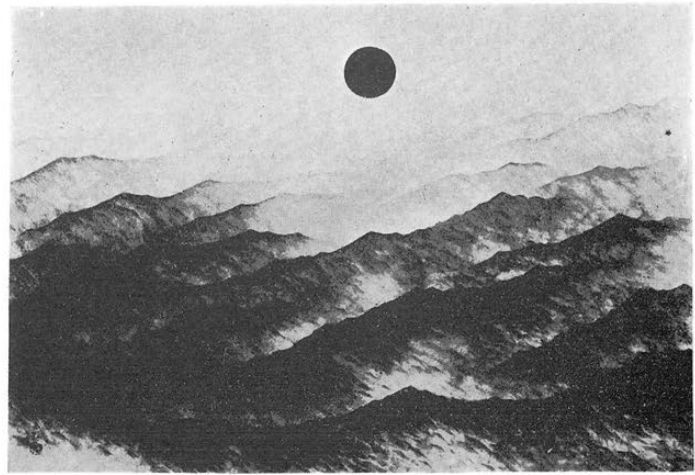
(會示展畫品出博萬育紘) 活生の沼 五一
虎小崎川

二〇 軍荼利明王(日本畫院展)

野田九浦



「春」内ノ趣四峰靈・題十む因に山 八一
觀大山横(展個)



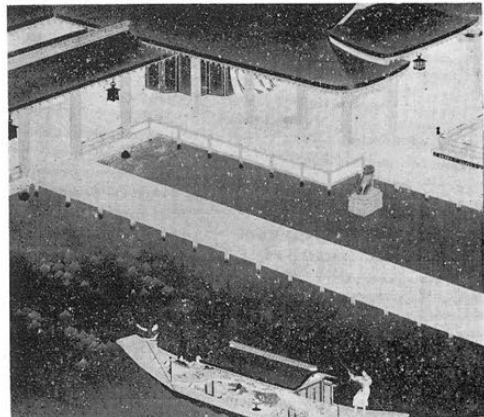
觀大山横 (同) 潮黒・題十む因に海 九一



月弦澤矢(同)てに舫畫 一二



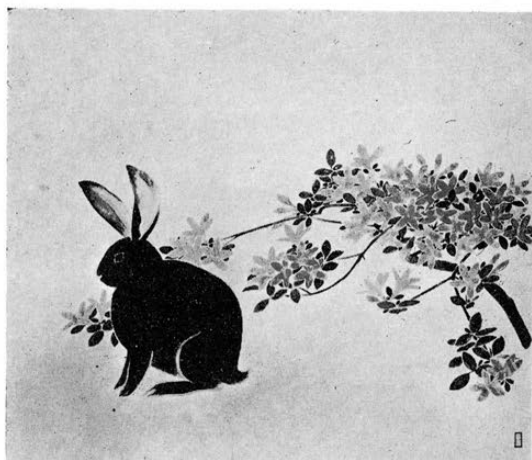
郎八平田福 (展會潮六) 花 桃 三二



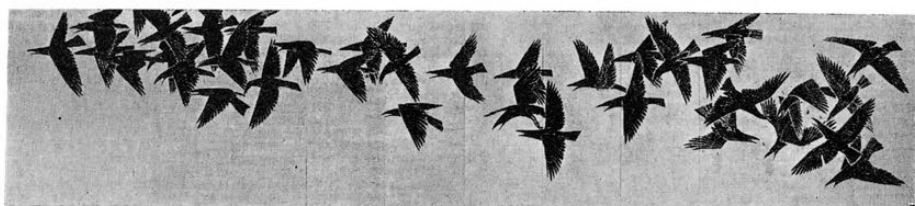
夫忠村吉 (同) 寺太徳後 二二



二五 佛像 (新美術人協會展) 米田 莞爾

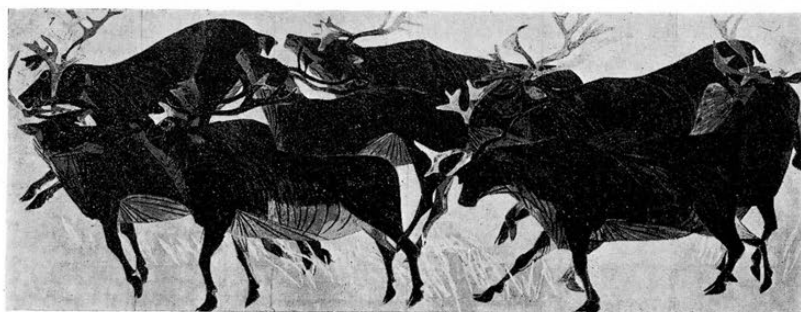


春蓬口山 (同) 月五四二



郎四豐田福

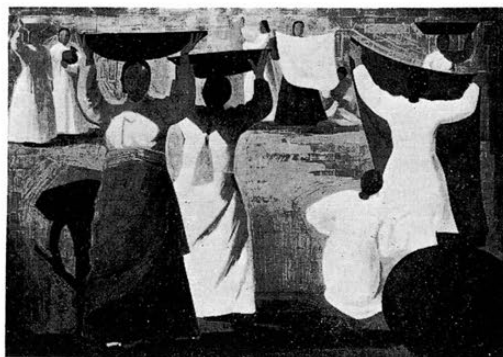
(同) 鴉 六二



二七 水原(同) 吉岡 堅二



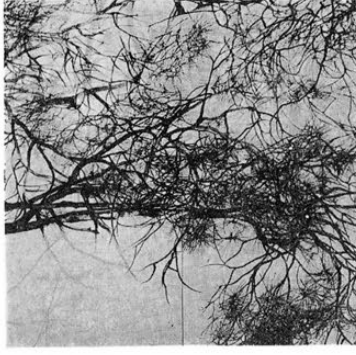
美 泰 石 立 (展畫本日東每大) 土 耕 九二



子 安 田 柴 (同) 衣 灑 八二



樹玉田船

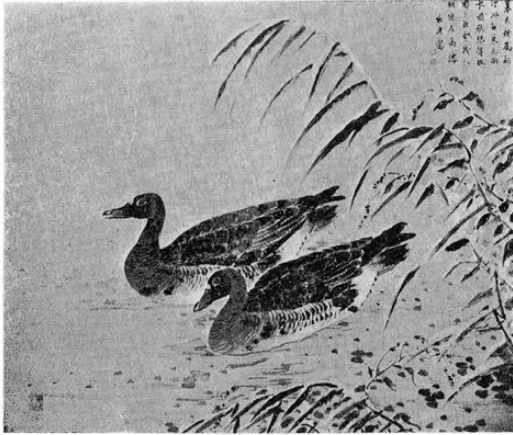


(同) 輪 日 三三

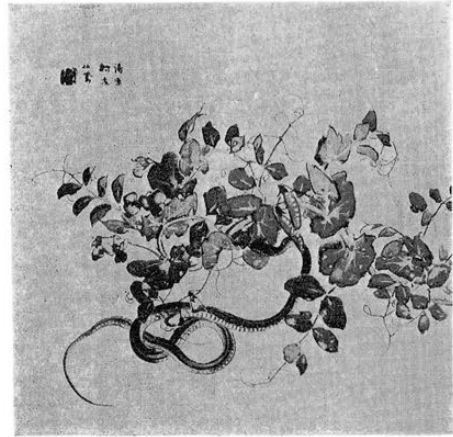


三〇 孔雀明王(大毎東日本畫展)

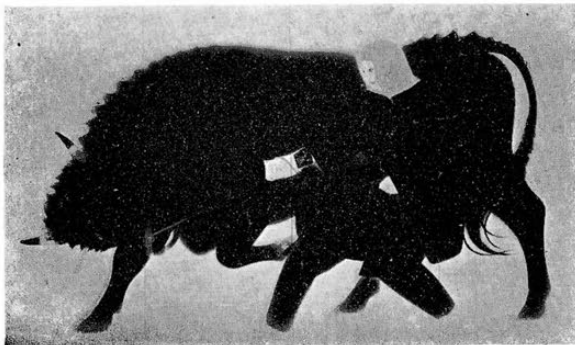
菊池契月



三四 蘆雁(同) 小室翠雲



三一 艶陽(同) 竹内栖鳳



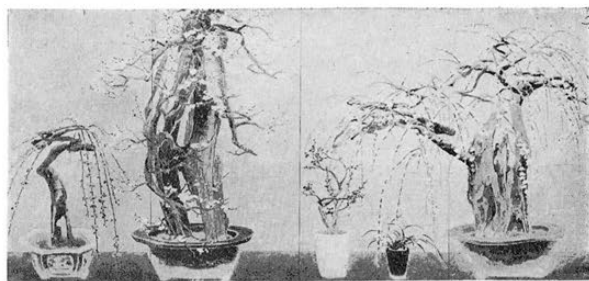
二節 高和 (同) 牛 牡 五三



雪 關 本 橋 (同) ふ洗を馬蔭柳 二三



靱 宏 澤 (同) 影 斜 七三



堂 華 邊 川 (同) 薰 清 六三



三九 八 幡 鳩 (同)

結 城 素 明



三八 少年 家 康 (珊々會展)

菊 池 契 月



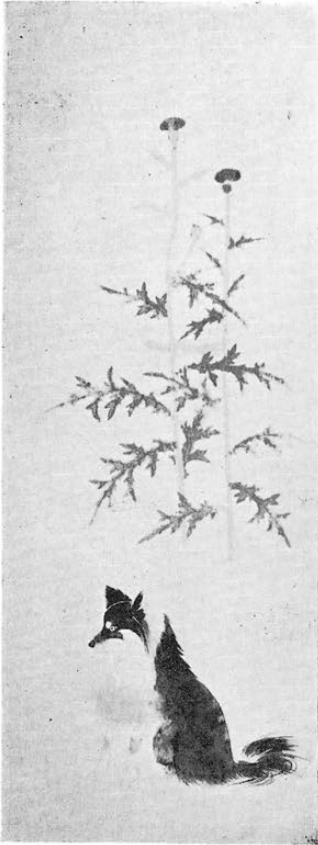
四一 明 治 時 世 粧 (右) (同)

鍋 木 清 方

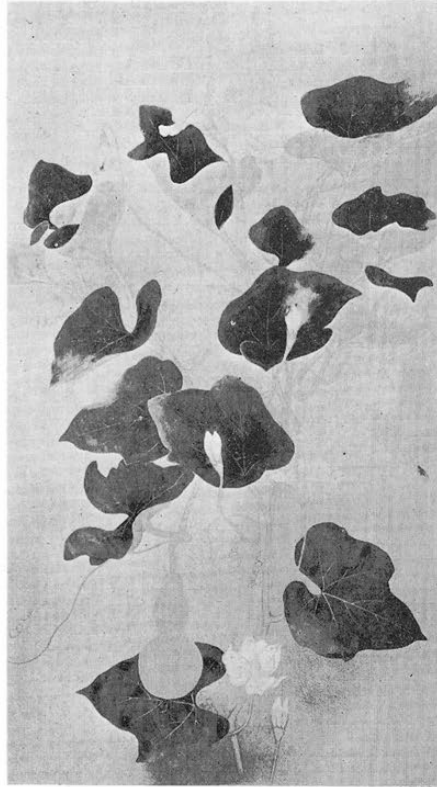


四〇 薄 暮 (同)

西 山 翠 嶂



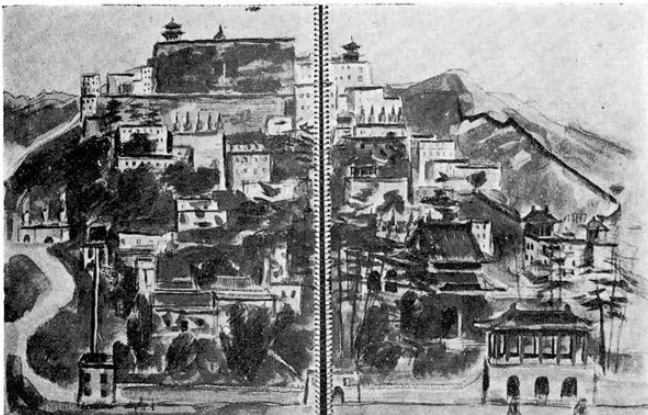
徑古林小 (同) 犬 四四



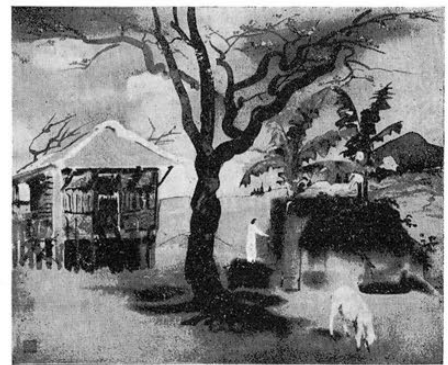
彦 叔 田 安 (展會光清) 花の箆瓢 三四



(展個) 風 薰 二四
山 春 岡 木 八



郎 四 豊 田 福 (展會南山) チツケス軍從支滿 六四

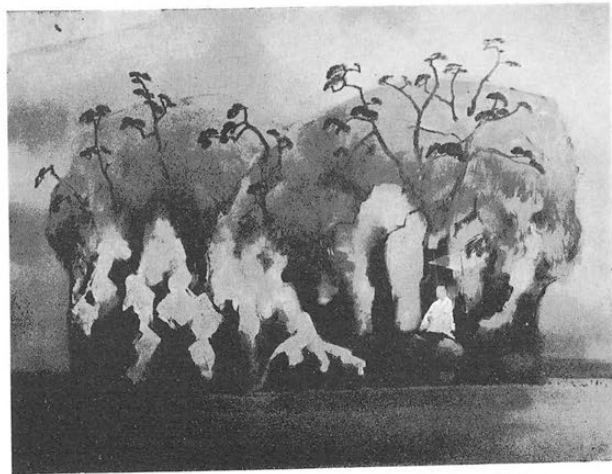


(展個) 外郊ヤバラス 五四
觀 江 城 古



川 端 龍 子

(展社龍青) 雲 摘 花 七 四

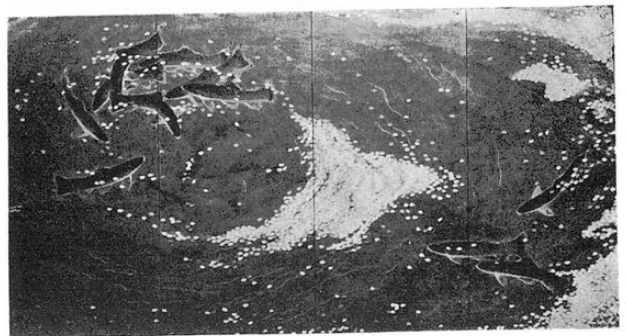


嵐 青 岡 福

(同) 傳 惠 明 八 四

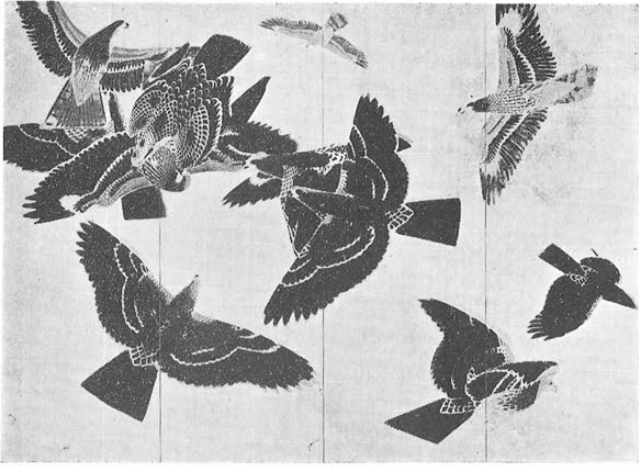


五〇 梨 白 (同) 丸 山 皎



草 一 口 坂

(同) 圖 彩 櫻 九 四



五二 蒼空 (同) 市野亭



(展社龍青) 將神二十 一五
善直田時

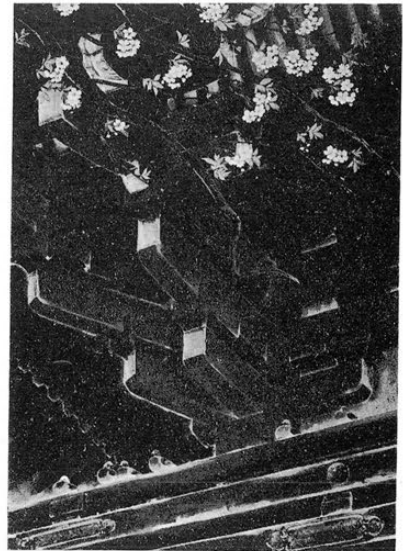


豊崎山 (同) 室御三五



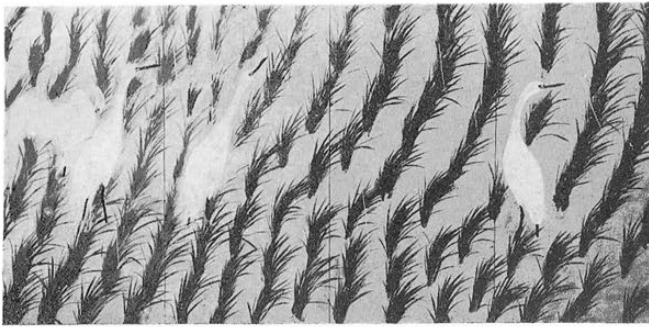
五五 麗 (同)

渡邊龍三



五四 仰春 (同)

上條靜光



樂三納加 (同) 情雨七五



子鼎島小 (同) 猫白六五

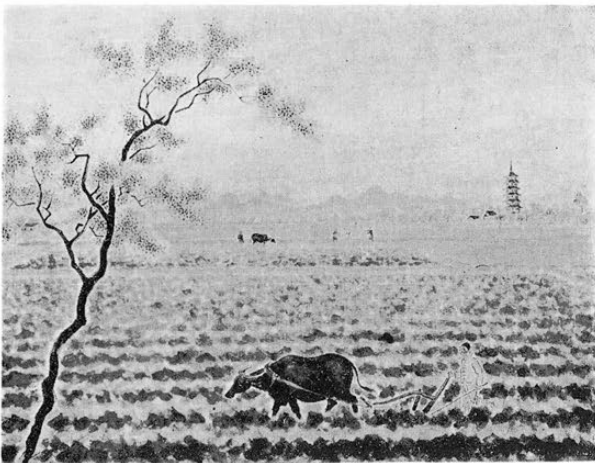


五八 曉の雄阿寒嶽 (院展)

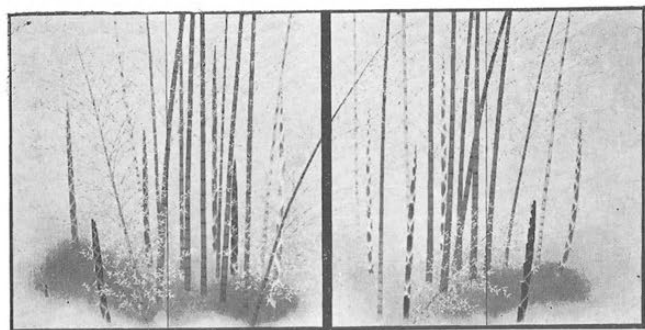
眞道黎明



(同) (内ノ題三花の夏初) 丹 牡 九五
清 島 中



(同) (内ノ題三見所支中) 色 春 南 江 ○ 六
良 三 井 酒



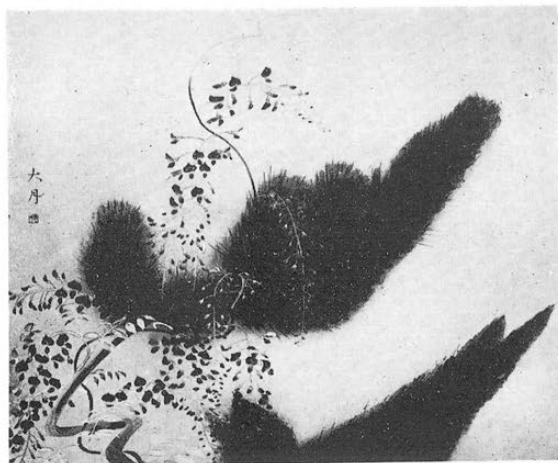
觀勝智大 (同) 頃月阜 二六



徑古林小 (展院)音觀 一六



觀大山橫 (同) 夏首 三六

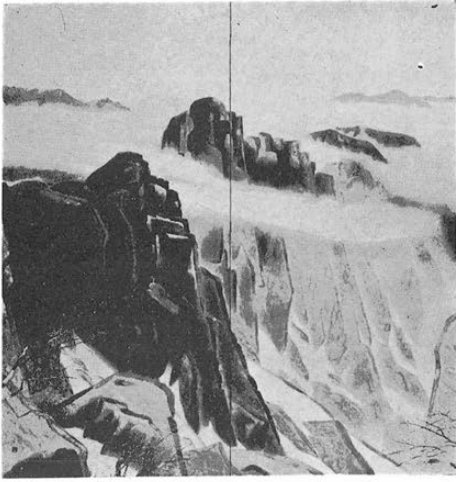


六五 藤 (同)

小山大月



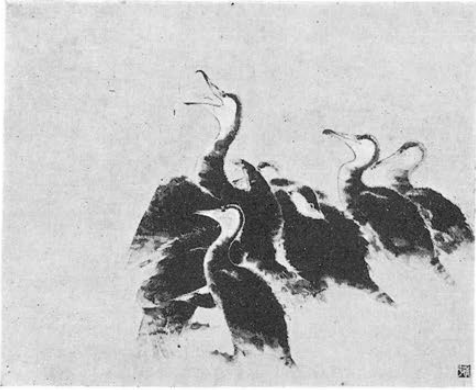
水靜本橋 (同) 王明染愛 四六



六七齋 春(同) 筆谷等觀



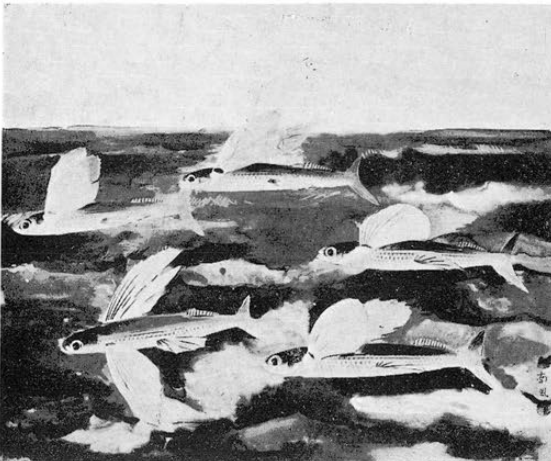
雨聽田太 (同) 雅大六六



邨青田前 (同) 鶴九六



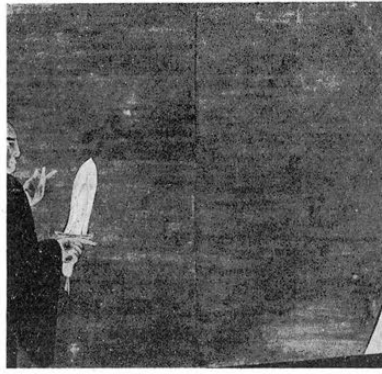
利勝井新 (同) 待攝伏山八六



風南山堅 (同) 原海ノ秋 一七



靱千倉郷 (同)(内ノ題二雪) 湖〇七



高 光 條 東



(展術美朗明) 臂 斷 覺 正 二七



七三 櫻樹白鳳(同) 狩野晃行



向 白 邊 渡

(同) 土 四七



七五 跳翔(其一)(大輪畫院展) 小林彦三郎



七七 阿修羅 (同)

前田 青邨



七六 不動 (奉祝展)

小林 古徑



七八 秋樹林 (同)

松林 桂月



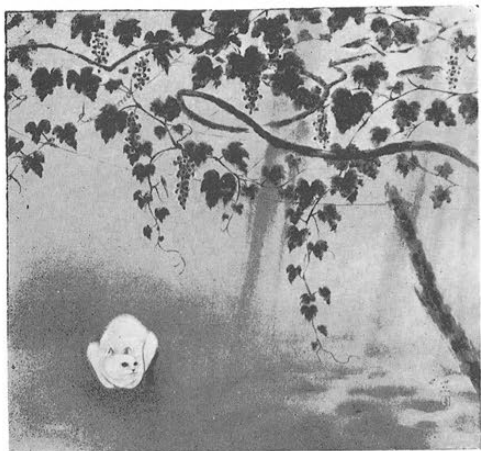
八〇 信濃路の女 (同)

山川 秀峰



七九 鸚鵡小町 (同)

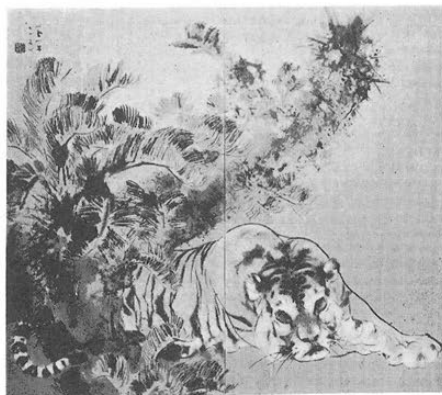
中村 大三郎



州哉喘中田 (同)潤豐二八



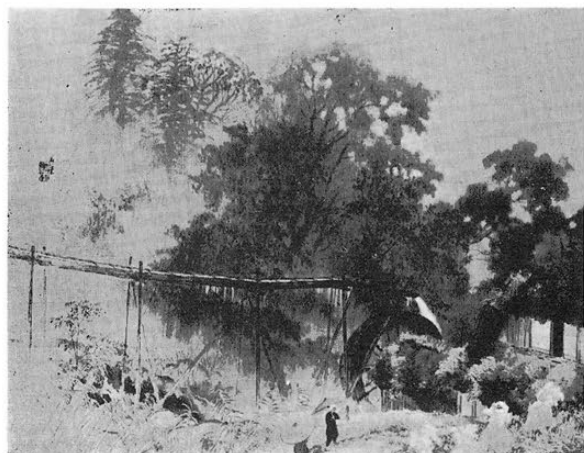
靱千倉郷 (展祝奉)林樺白一八



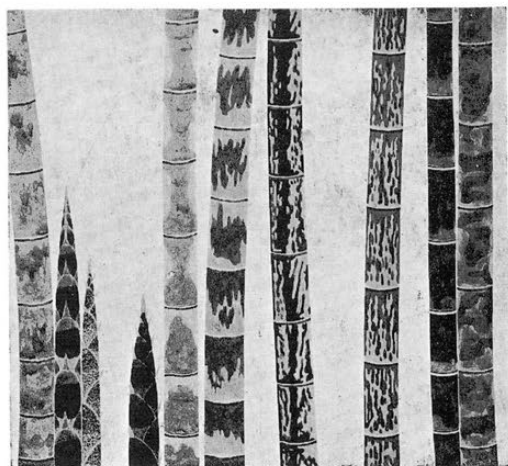
鳳栖内竹



(同)風雄三八



堂玉合川 (同)雨彩五八



郎八平田福 (同)竹四八



八七一 葉 (同)

籥木清方



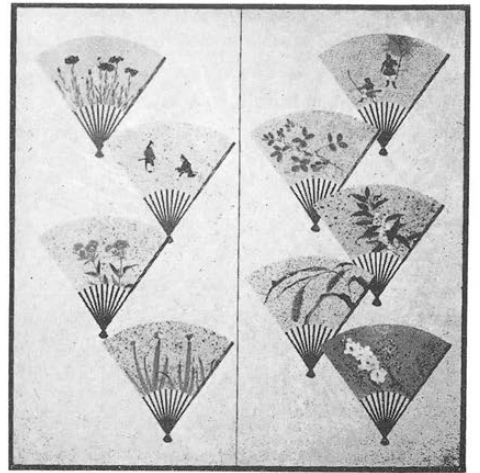
瑤光崎石

(同) 冬 隆 六八

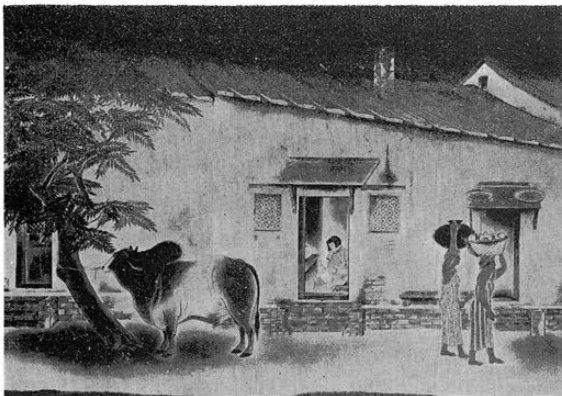


剛半田安

(同) 春 送 九八



(同) (一其) 畫卉花と圖史國 八八
明 素 城 結



春 蓬 口 山 (同) 暮 薄 島 南 一 九



琴 蕉 田 勝 (同) 彪 白 〇 九



九三 坂上田村曆將軍(同) 小堀安雄



水春田永 (展祝奉) 内の題二花の夏 二九



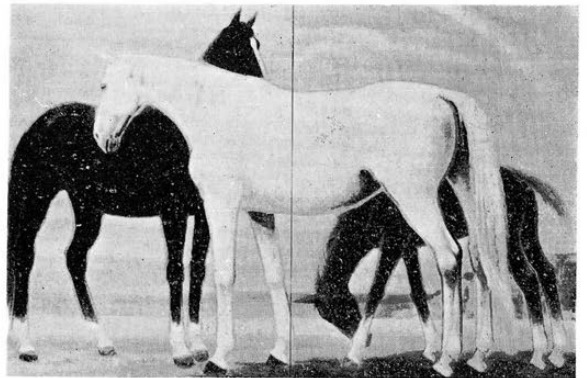
畝笛澤西 (同) 春和五九



江春月望 (同) 紅來雁 四九



雲翠室小 (同) 仁俗鳥林 七九



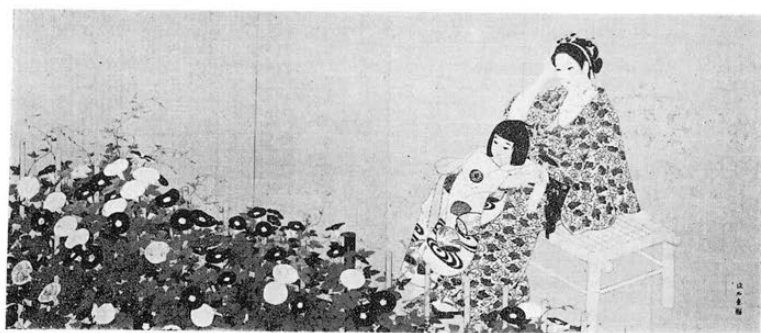
夷魁山東 (同) 風 六九



(同) 妻の豊一内山 九九
坡小藤伊



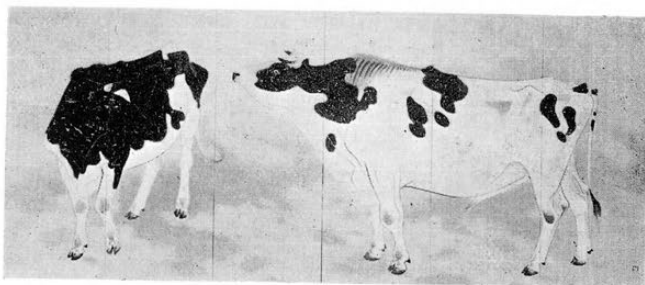
觀大山橫 (同) 本日處出日 八九



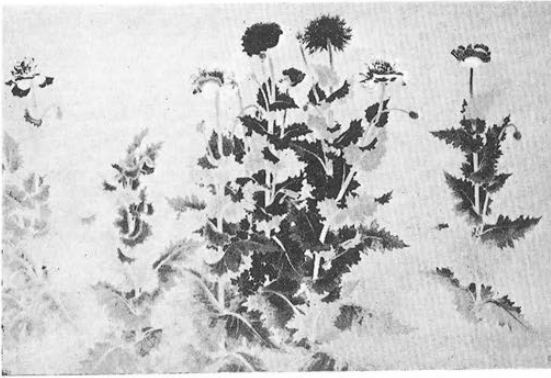
水深東伊 (同) 朝 〇〇一



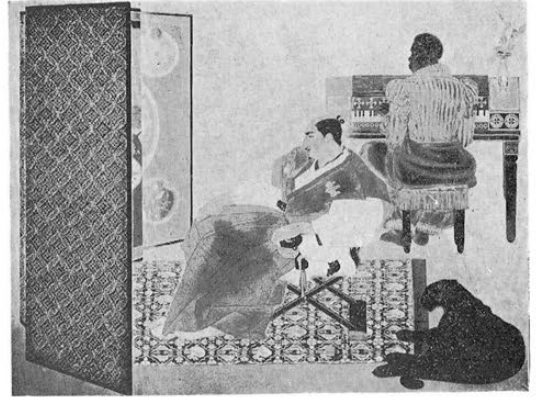
嶂翠山西 (同) 秋の北洛 二〇一



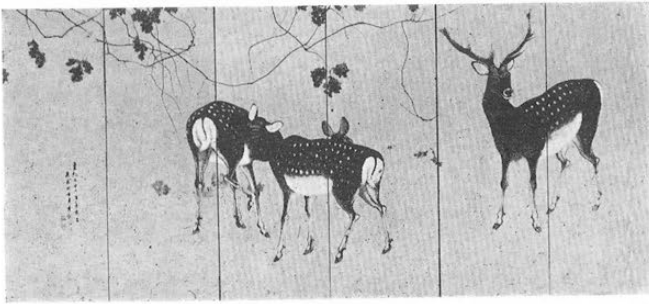
光休久松 (同) 圖牛雙 一〇一



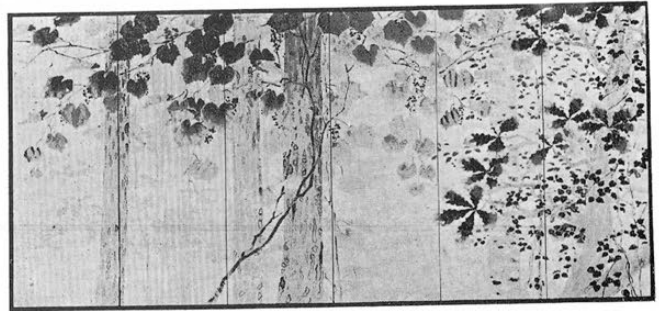
一〇四 山口冷照 (同) 芥子 四〇一



一〇五 福田惠 (展祝奉) 圖 雄 三〇一



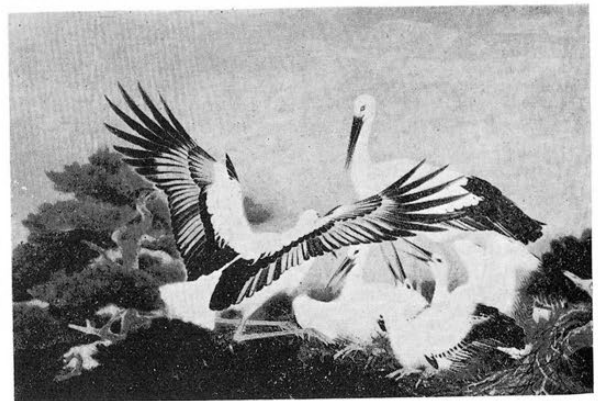
一〇五 老秋 (左) (同)
池上秀敏



一〇六 宇田荦 (左) 秋新 六〇一



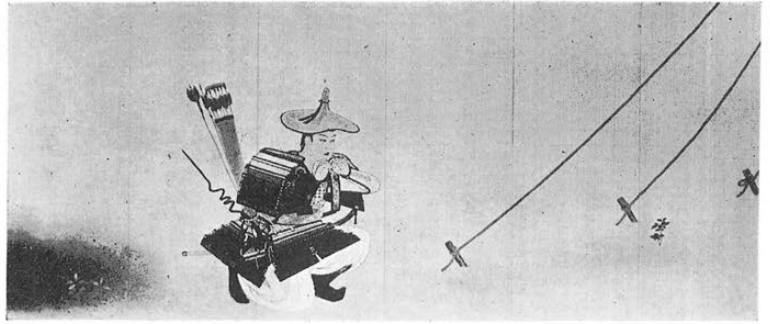
一〇八 出發 (同)
江崎孝坪



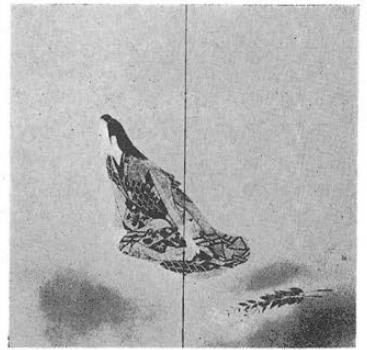
一〇七 福田翠光 (同) 鶴 七〇一



（床覺寢曾木）雨 微 ○——
舟 曼 村 川（同）



彦 叔 田 安 （同）著 參 經 義 九〇一



以 貞 村 中 （同）種 色 之 秋 ——



一 二 三 月 下 興 武（同）

長 野 草 風



望 希 玉 兒 （同）夜 六 十 二 ——

四瑞雪(奉祝展) 矢野橋村



一一五朝霧(同) 不二木阿古



一一六孔雀明王(個展)



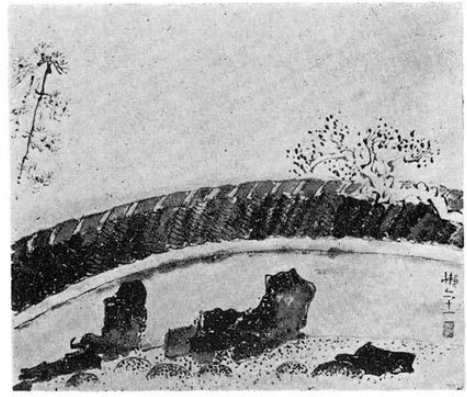
荒井寛方

一一八 吹奏(七絃會展)

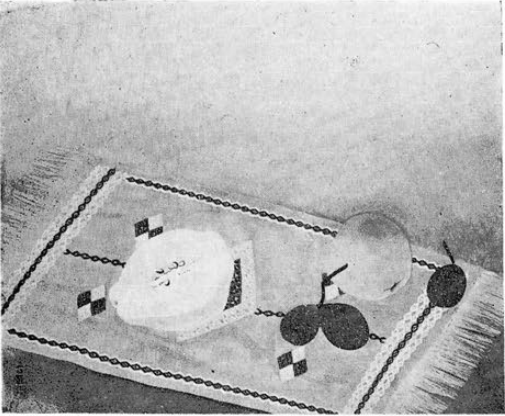


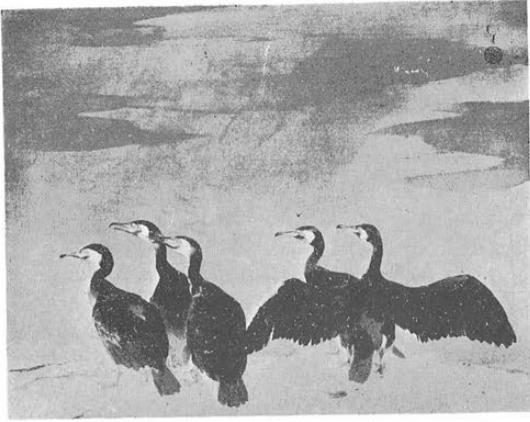
菊池契月

一二七一休寺(個展) 津田青楓



一二九菓子(同) 小林古徑





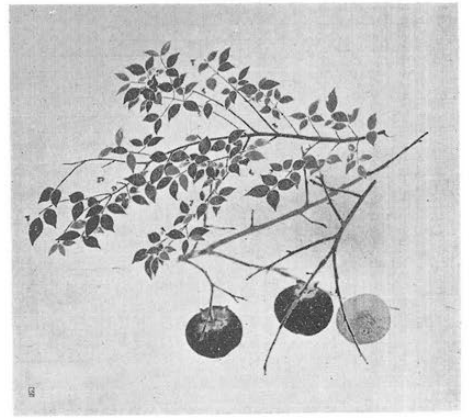
子龍端川 (展個)剛金海 二二一



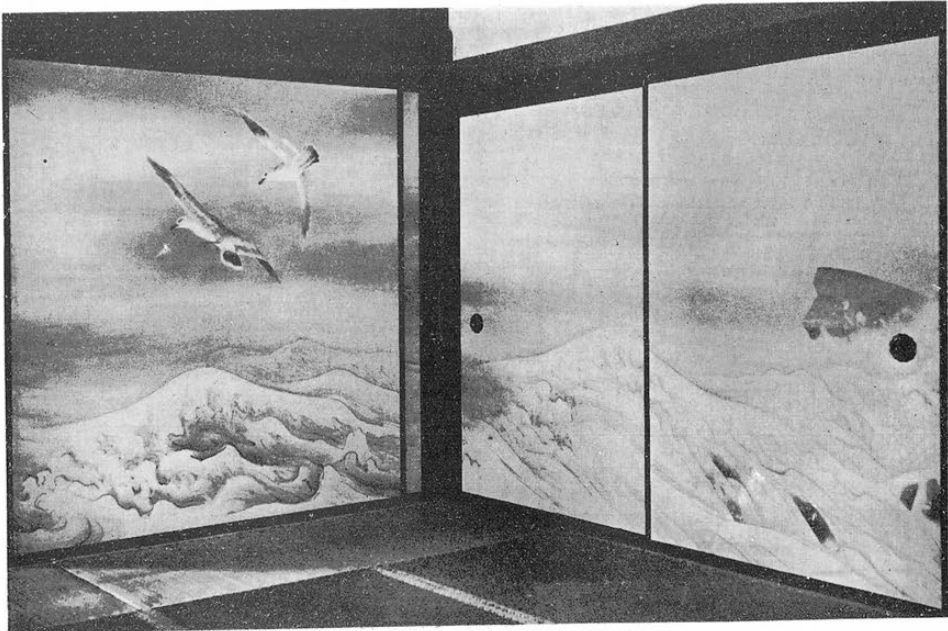
方清木 鎬 (同)利登美のべらくけた ○二一



(畫壁塔重五寺王天四) 婆達乾衆部八 三二一
象印本堂



彦叔田安 (同)色秋 一二一



雪關本橋 (轉流々生) 繪模丈方寺仁健 四二一



雄虎野牧 (展社玄旺) しけ四



一 温室のカトレヤ (個展)

山本 鼎

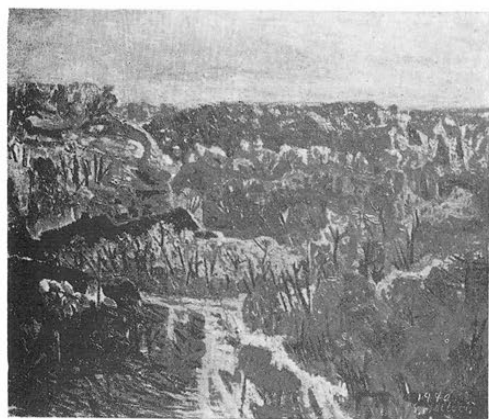


新家古 (展會協家術美新) 港の日旗五



二 ボンネット (光風會展)

森田 元子

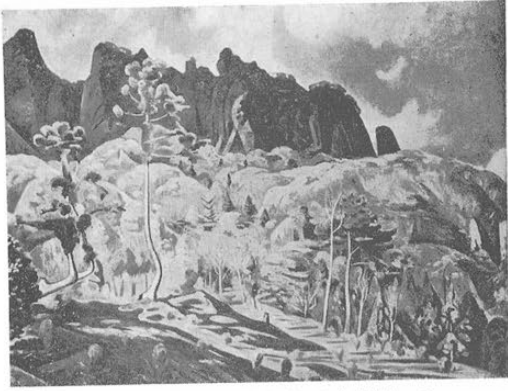


郎一正部服 (同) 景風六



三 立春 (同)

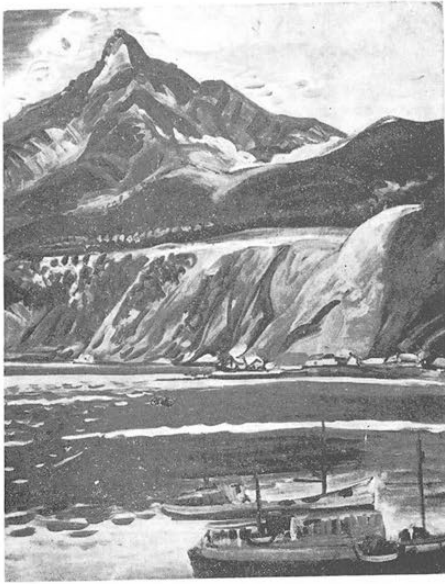
中村 研一



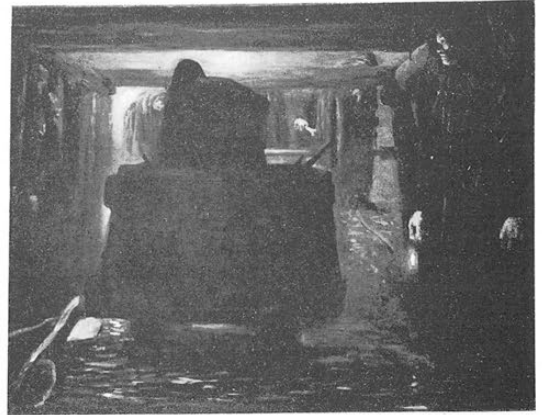
三 英 瀬 奥 (同) 秋晚義妙 〇一



信 博 子 金 (同) 松の上吹園義六 七



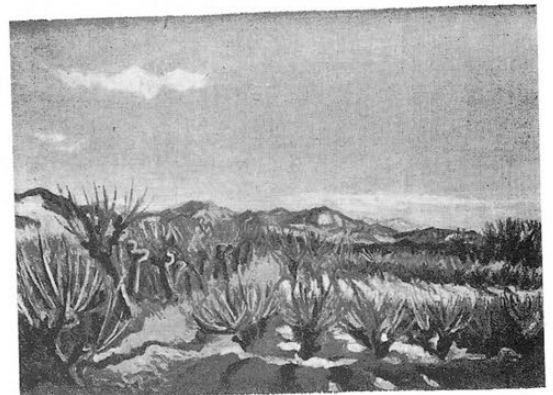
一一 利尻富士(獨立展) 野口彌太郎



郎 吾 田 鶴 (展會畫洋平太) 道鑿下地 八



郎 一 島 松 (同) 池 凍 二一



眞 井 淺 (同) 春淺の原高 九



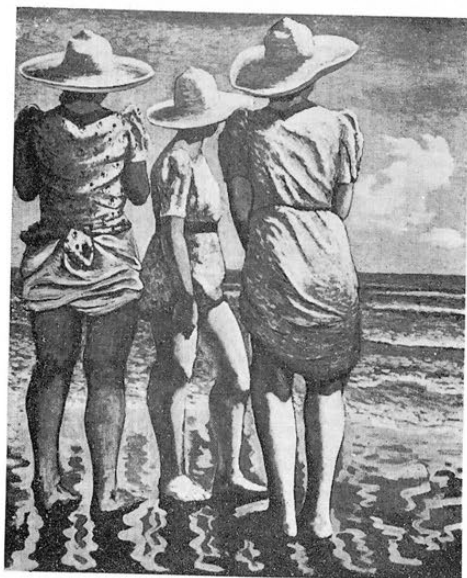
武 林 (同) 像 人 婦 六 一



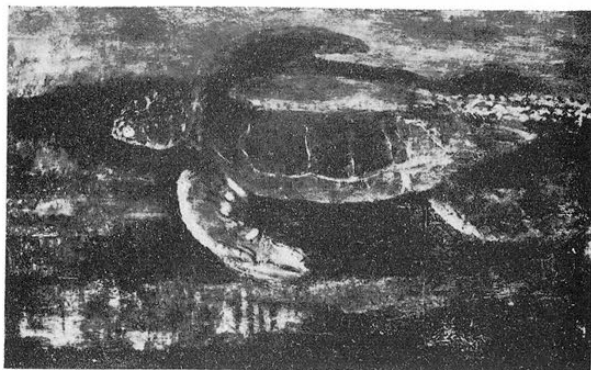
外 軌 口 川 (展 立 獨) 海 の 夏 三 一



郎 四 達 畠 高 (同) 夫 農 四 一



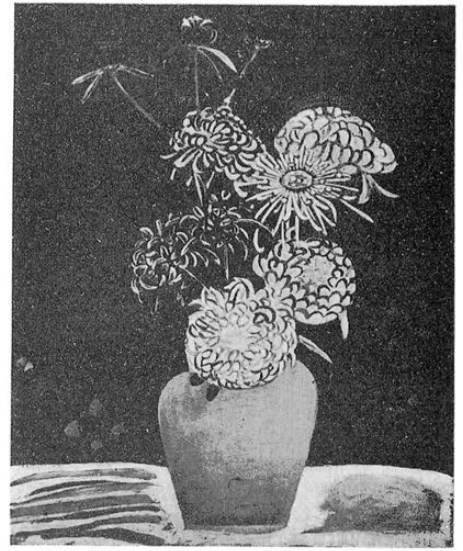
夫 亞 木 鈴 (同) 渚 七 一



郎 太 國 田 須 (同) 龜 海 五 一



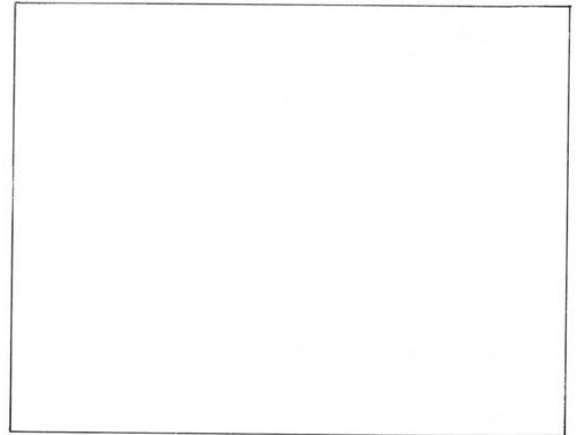
之 登 水 清 (同) 山 婆 比 陵 神 一 二



郎 三 善 島 兒 (同) 菊 八 一



三 三 秋 山 (同) 小 林 和 作



郎 一 佐 中 田 (同) 營 夜 張 田 赤 九 一



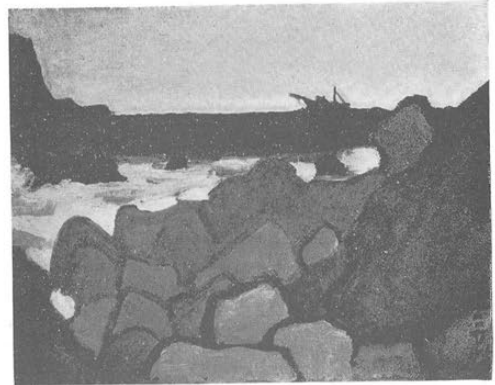
三 長 藤 齋 (同) 雪 三 二



巍 山 中 (同) (一 其) 子 と 父 〇 二



昇 川谷長 (展個) 語 鳥 七二

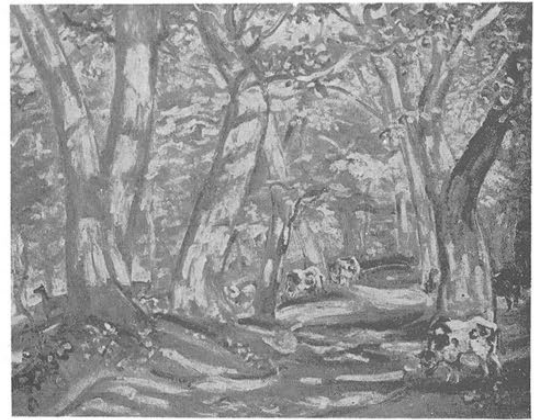


一 守 谷 熊 (展個) 港里良安 四二

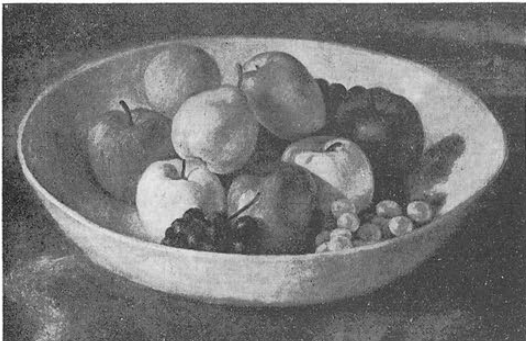


二八 雲中天壇 (國畫會展)

梅原龍三郎



彦 美 岡 熊 (展會光東) 牧放の森 五二



吉 孝 橋 大 (同) 物果と鉢磁白 九二



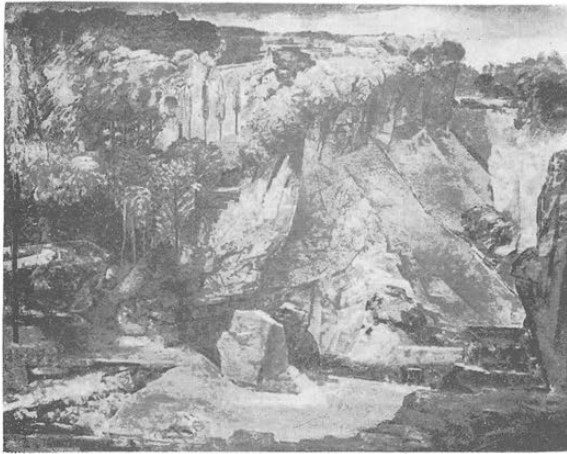
藏 謙 口 野 (同) 草とミグツ 六二



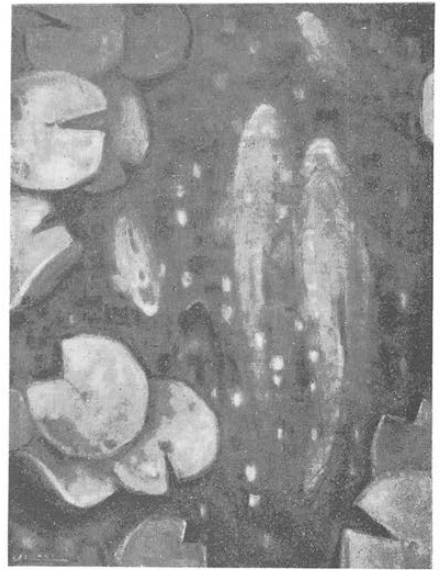
三三 雲崗石佛頭(同) 宮田重雄



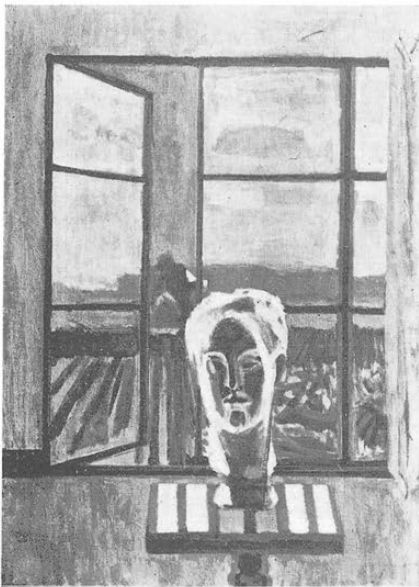
守保久 (同) 庭〇三



三四 石切場(同) 河野通勢



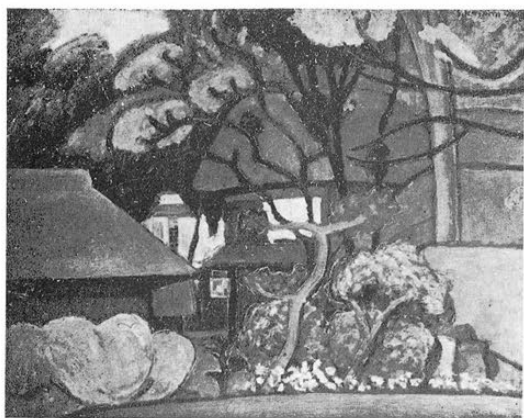
助啓森大 (同) 鯉一三



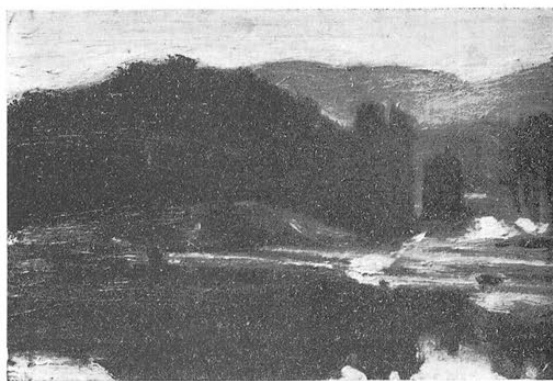
三五 窓(春陽會展) 倉田三郎



一俊木柏 (同) 春早二三



郎 四 山 加 (同) B 景 風 九 三

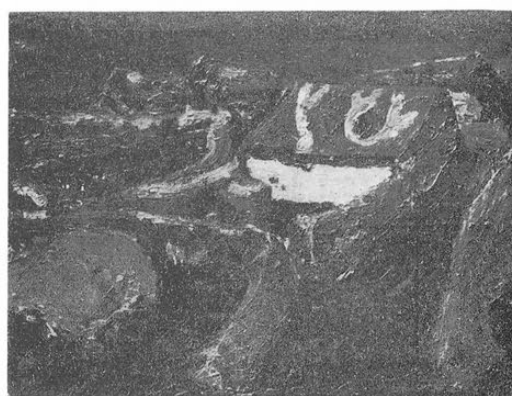


郎 次 角 堀 横 (展 會 陽 春) 畔 池 六 三

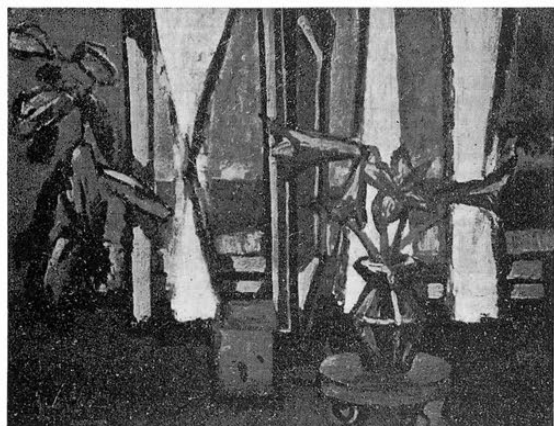


四
〇
う
と
ふ
女
(同)

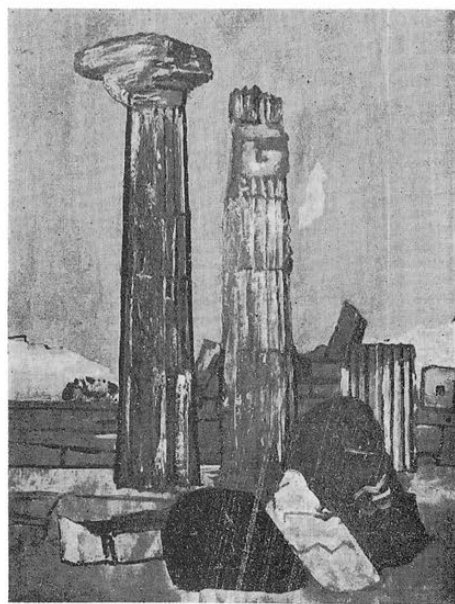
水
谷
清



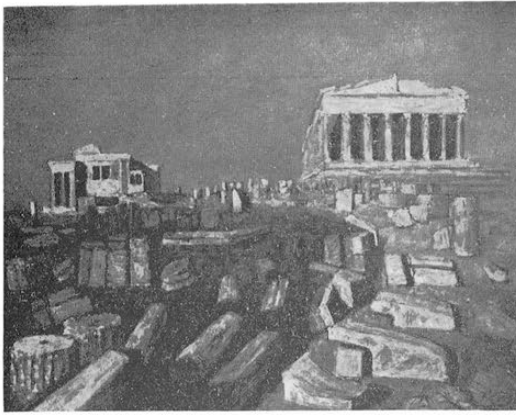
兒 青 海 島 (同) 根 屋 る あ の 理 修 七 三



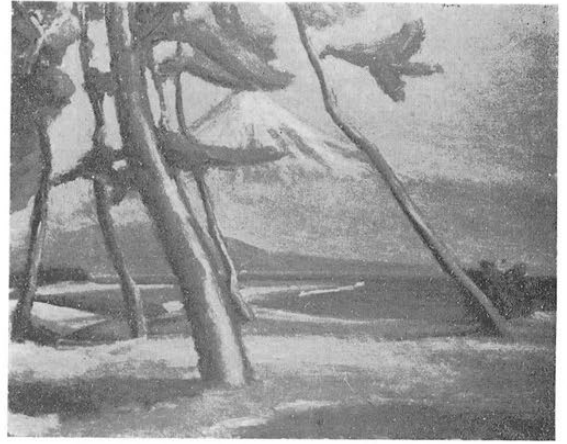
次 勇 木 高 (同) 窓 る え 見 の 海 一 四



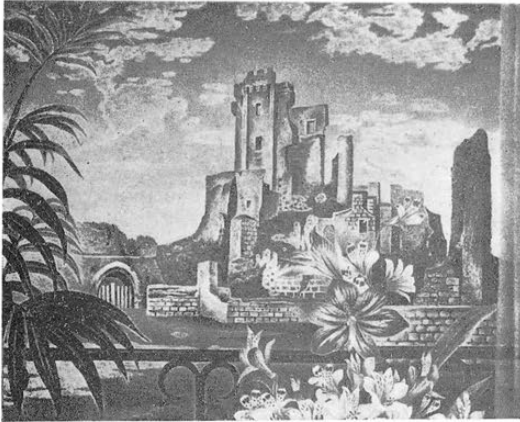
周 正 田 津 (同) 空 の ー リ 、 シ 八 三



藏力田高 (同) 後午のスリボロクア 五四



司啓關今 (同) る見を士富 二四

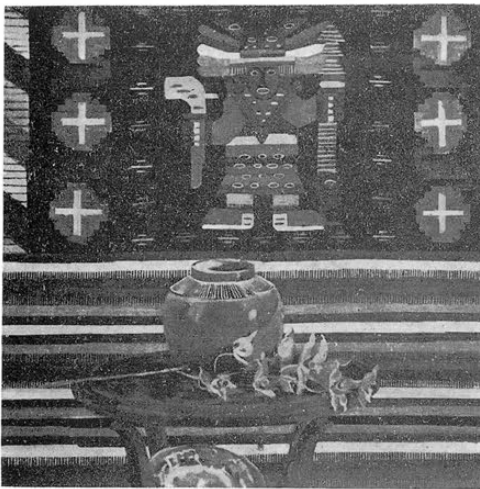


助之鹿岡 (同) (イデミ) 墟廢 六四

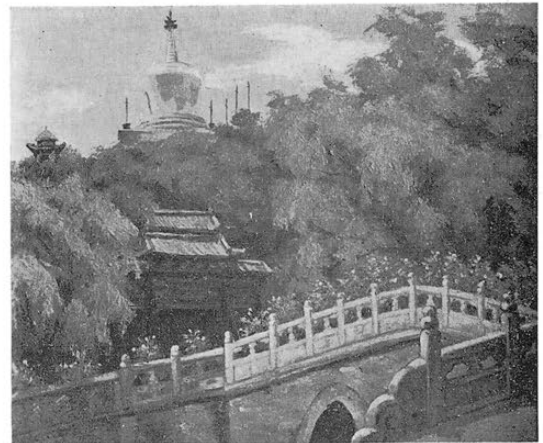


四三 靜物(同)

鬼塚金華



一隆穴小 (同) 物 靜 七四



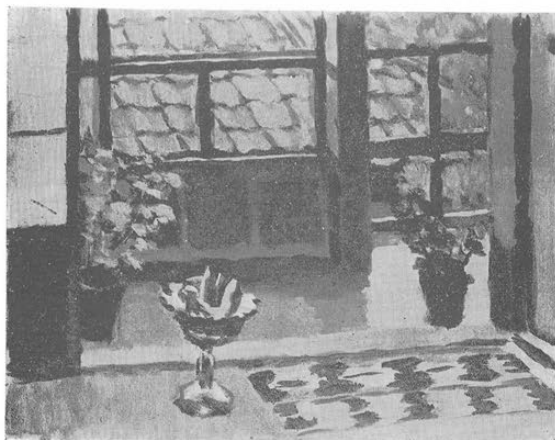
四四 北京風景(北海公園にて)(同)足立源一郎



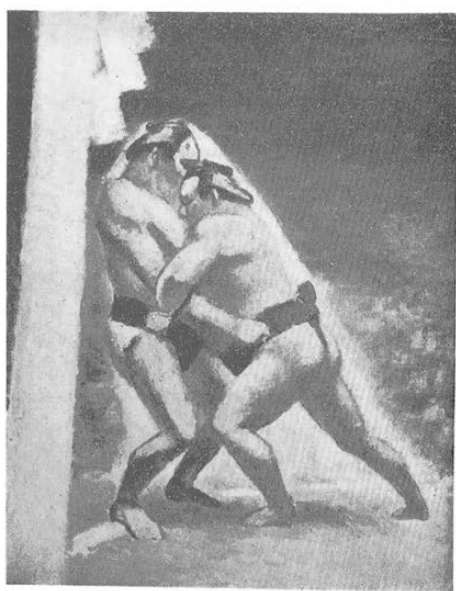
脩原川小 (同) 話對兒生双 一五



一 精 原 (展會陽春) てに地戦 八四



郎三徳林小 (展個) 縁の階二 二五



三鶴井石 (同) 撲相 九四



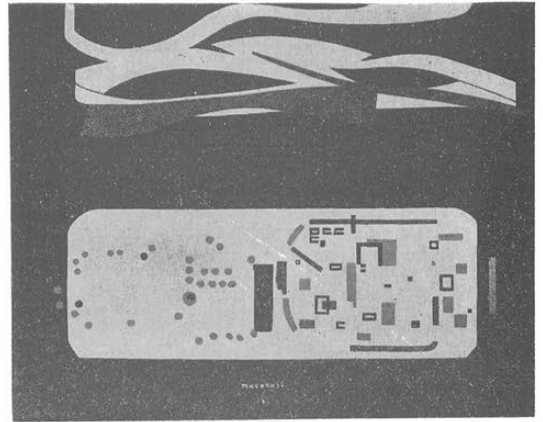
くすた部日春 (展會畫彩水本日) 場 網 三五



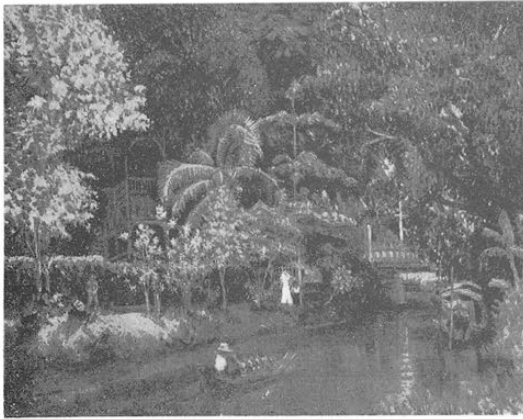
郎一澤福 (展化文術美) 圖 西 山 〇五



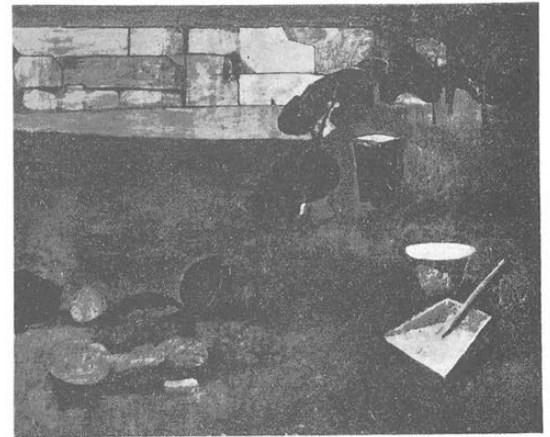
石川寅治 (展術美洋海) 撃爆洋渡 七五



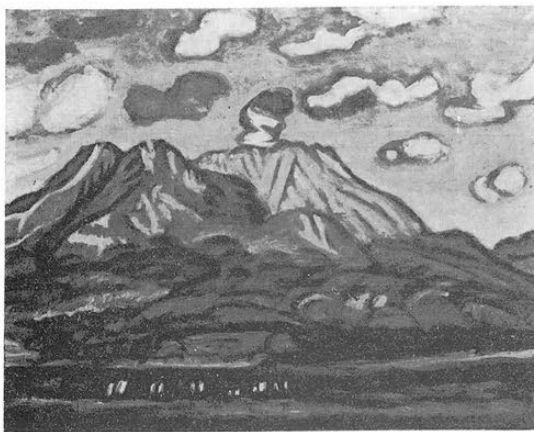
村正誠 (展會協家術美由自) Village 四五



小林剛 (展會巷綠) てにンデーラサ 八五



森芳雄 (同) 庭 五五



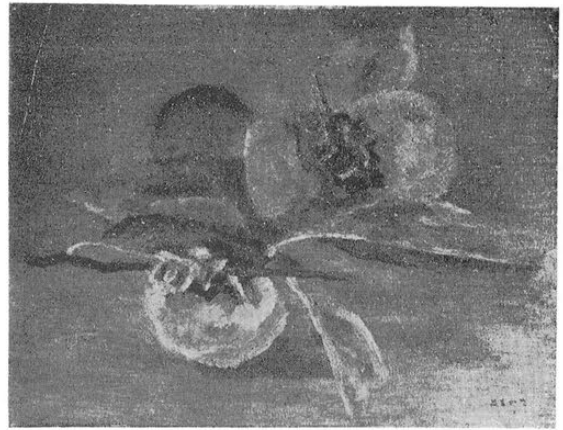
梅原龍三郎 (展會光清) 島櫻 九五



矢橋六郎 (同) 女ム飲ヲ水 六五



誠 木 鈴 (同) 女見る絵 三六



郎 二 繁 本 坂 (展會光清) 柿 〇六



和 田 脇 (同) 濱 海 四六



六 一 女 と 犬 (同) 安 井 曾 太 郎



義 正 藤 工 (同) 朝 五 六



義 正 勢 伊 (展派作制新) - ビグラ 二六



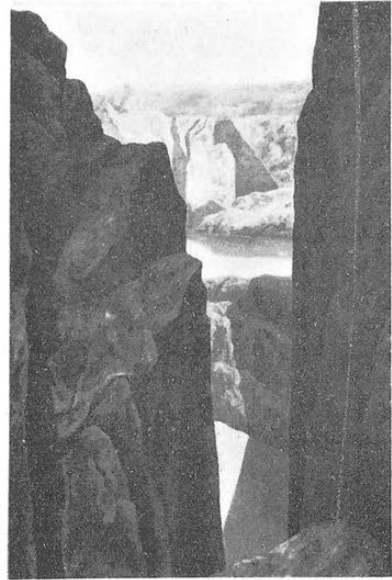
康 田 三 (同) 棒 鐵 九六



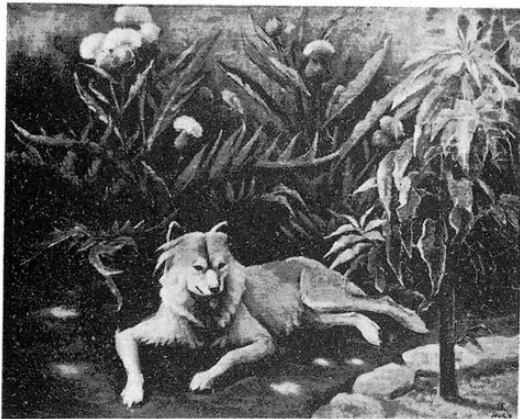
徳高須萩 (同) ユニータル 六六



二弘本松 (展會科二) (山海鳥) 題二鹿男 〇七



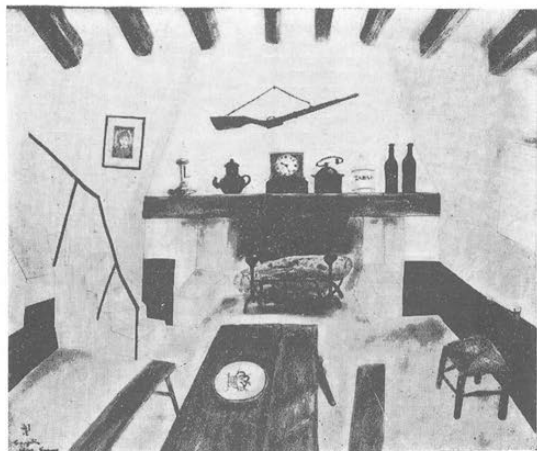
六七 止 水 (同) 内 田 巖



光 稜 田 濱 (同) 庭 一七



敬 藤 佐 (同) 馬 八六



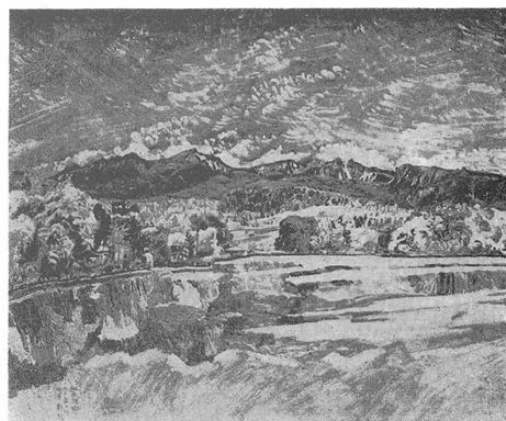
治 嗣 田 藤 (同) 家のユギードルド 五七



兒 青 郷 東 (展會科二) 道い白 二七



之 克 井 鍋 (同) 園公島中之夜の夏 六七



根 仁 間 野 (同) ム望ヲ岳ケ八リヨ湖原松 三七



信 原 栗 (同) 旅の古蒙 七七

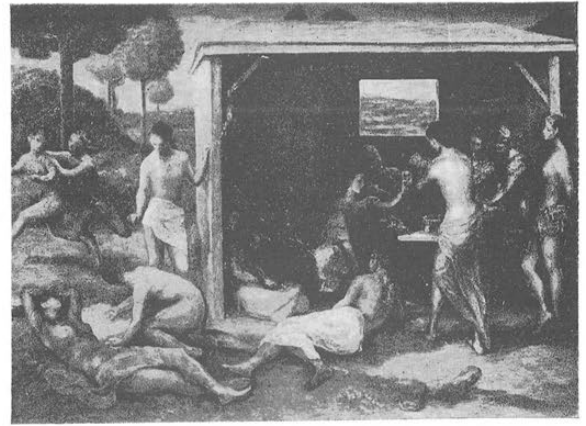


三 金 枝 國 (同) 園 四七



八一 子ども (同)

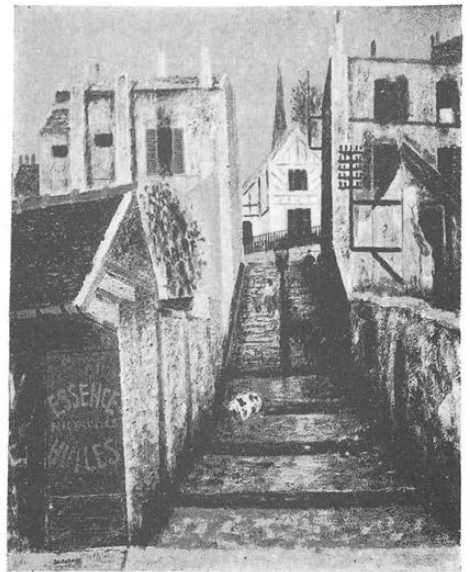
中川紀元



三 謙田岡 (同) 屋小八七



八二 良寛堂 (同) 正宗得三郎



郎三本宮 (同) 町の外郊 九七



八三 南國の花 (同)

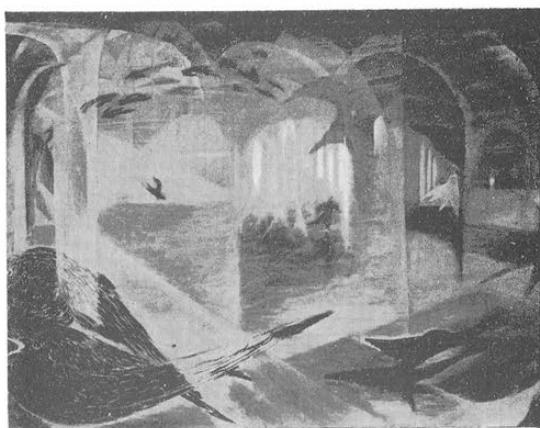
北川民次



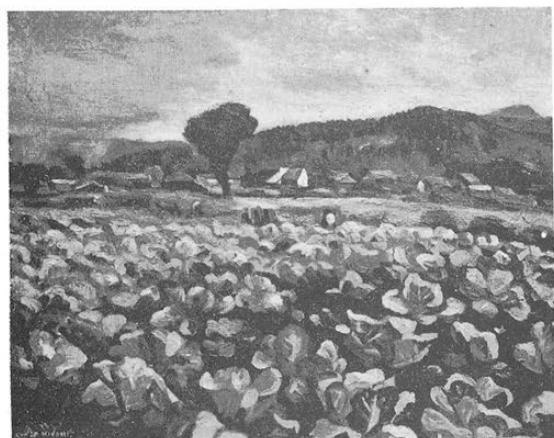
吉潤井向 (同) 畔江満豆 〇八



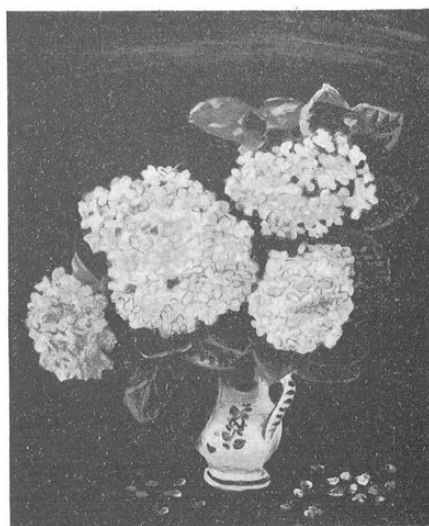
吾 萬 林 小 (展祝奉) 衫 綠 七八



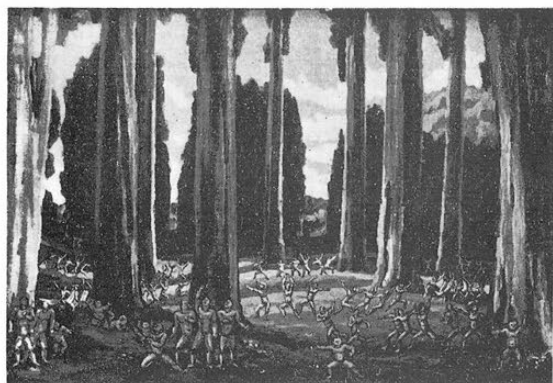
郎 三 久 藤 伊 (展會科二) 燕 四八



造 薰 南 (同) 畑 藍 廿 八八



郎 太 信 木 鈴 (同) 花 陽 紫 五八



郎 一 理 島 川 (同) 年〇〇六二 九八



男 三 三 野 高 (展 個) 椿 六八



永 辻 (同) の 映 秋 三 九



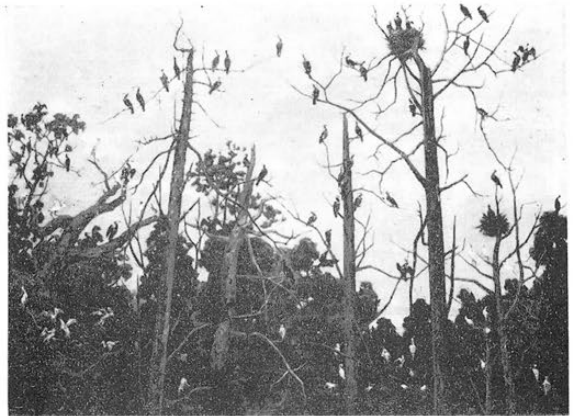
九〇 新 秋 (同)

寺 内 萬 治 郎

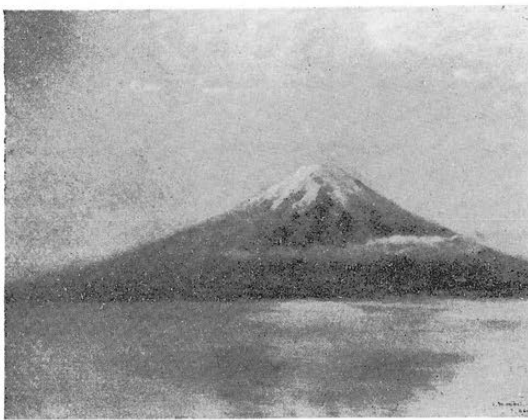


九四 北 京 官 話 (同)

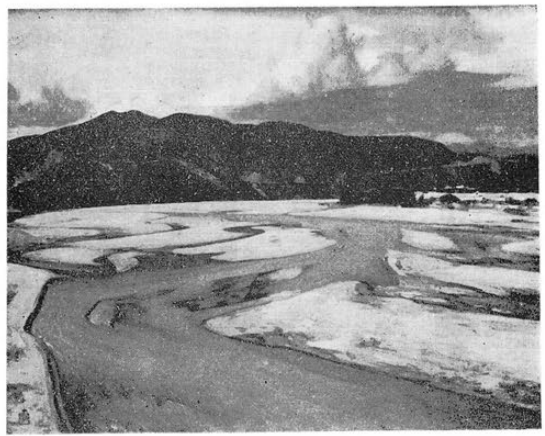
中 村 研 一



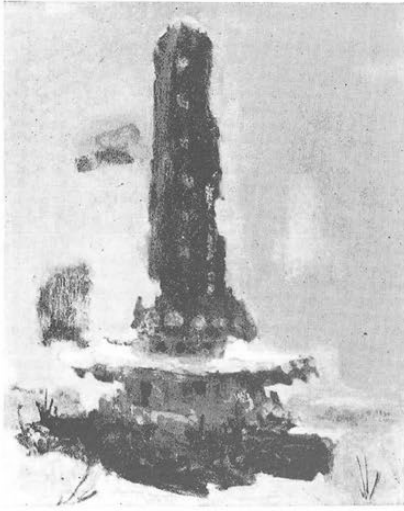
光 弘 澤 中 (同) 森 の 鶉 一 九



助 之 幾 瀧 白 (同) 士 富 五 九



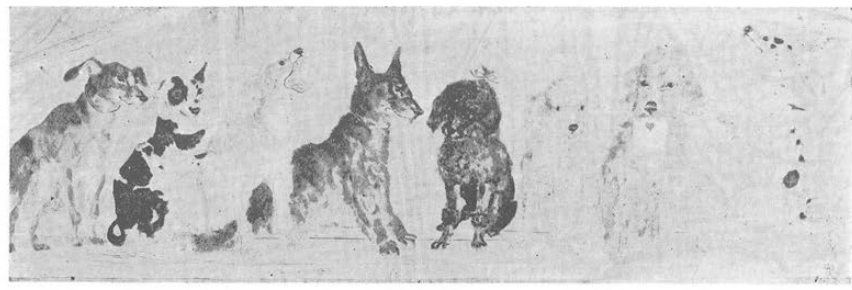
博 田 吉 (同) 原 河 二 九



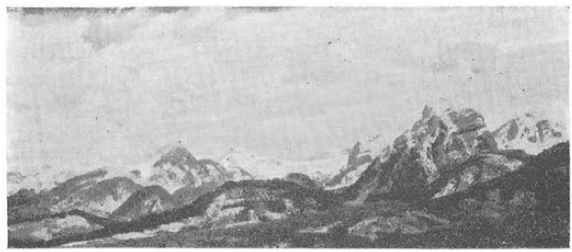
九七 逆光瑠璃寶塔(同) 青山義雄



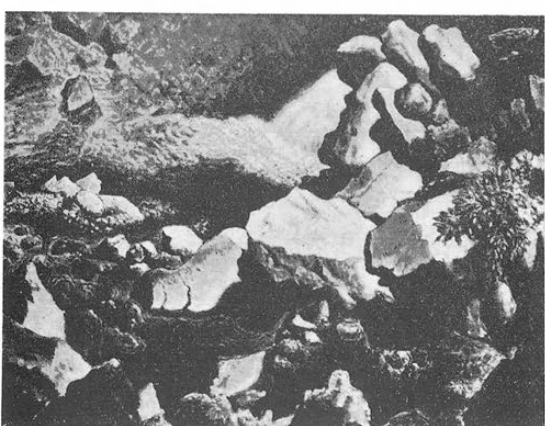
三 敬 山 小 (展祝奉) 映夕畔河桂 六九



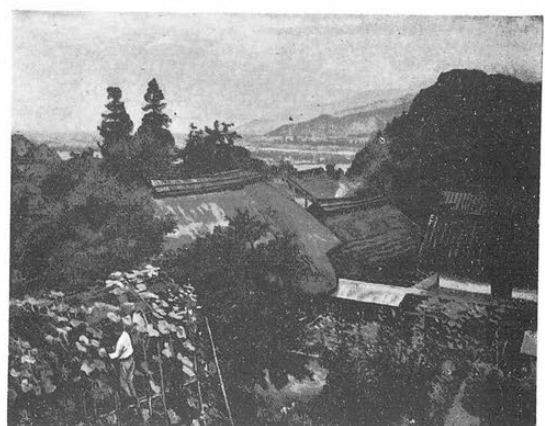
九八 犬 (同) 藤田嗣治



九九 八ッ岳 (同) 倉員辰雄



雄 貞 椿 (同) 流 溪 一〇一



亭 柏 井 石 (同) 秋 初 村 農 〇〇一

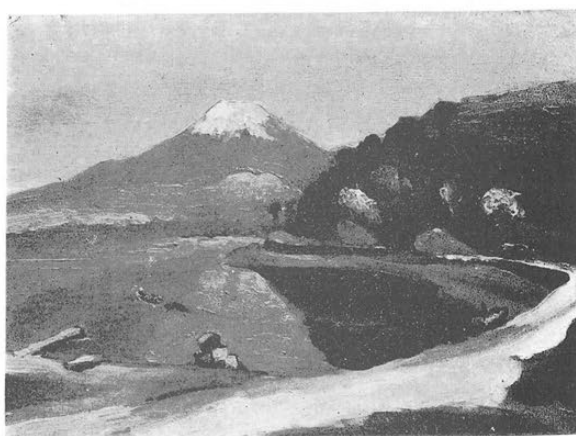


德保木鈴

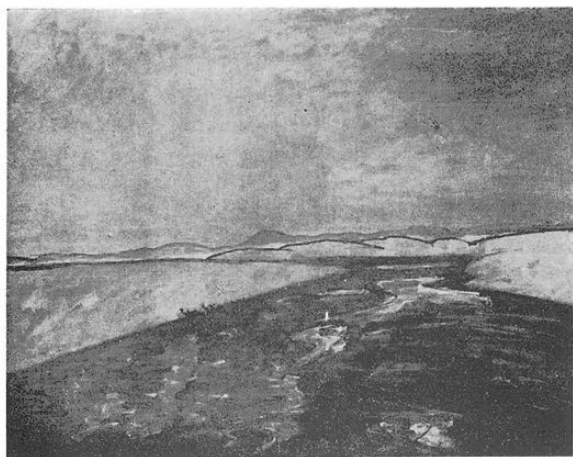
(同) 近附場鹽製 二〇一



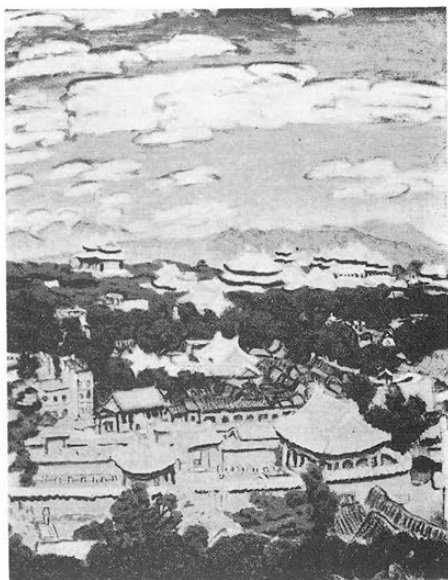
郎太曾井安 (同) 扇 黒 五〇一



之克井鍋 (同) 士宮の湖進精 三〇一



二武島藤 (同) 原高古蒙 六〇一



郎三龍原梅 (同) 城禁紫 四〇一



一一〇 日本號出發 (同)

清水登之



郎太善島小 (展祝奉) 士 富 七〇一



一一一 時化の朝 (同)

山本 鼎

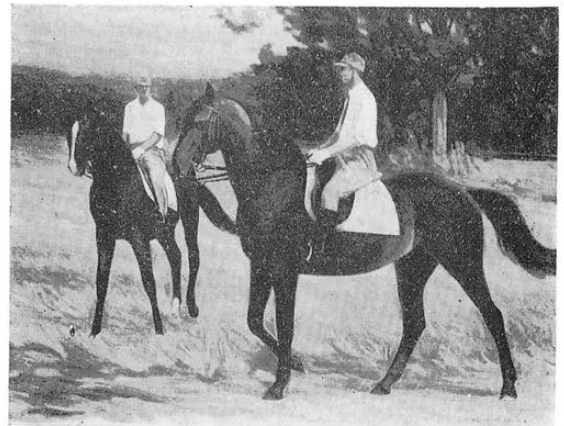


郎一弦熊猪 (同) 葉ノ木と女 八〇一



一二二 樂 人 (同)

小杉放庵



治知上三 (同) 朝 九〇一



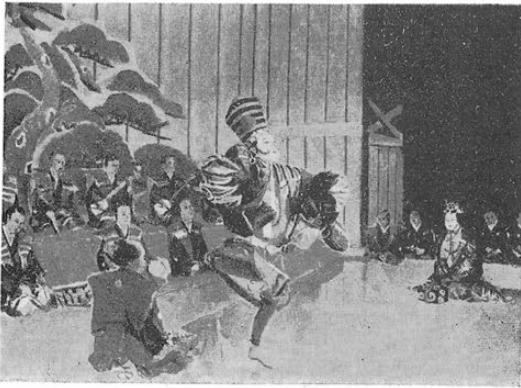
一六 F 嬢像 (同)

裕 伊之助



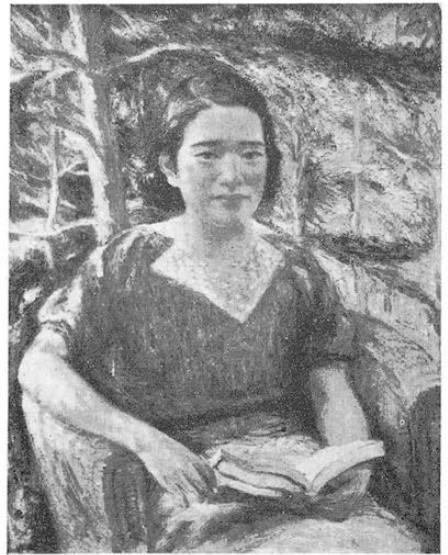
一三 朱草の牡丹 (同)

黒田重太郎



一七 三番叟 (同)

木村莊八



一四 綠 蔭 (同)

田邊 至



一八 素 衣 (同)

伊原宇三郎



一五 冬の日 (同)

海老原喜之助



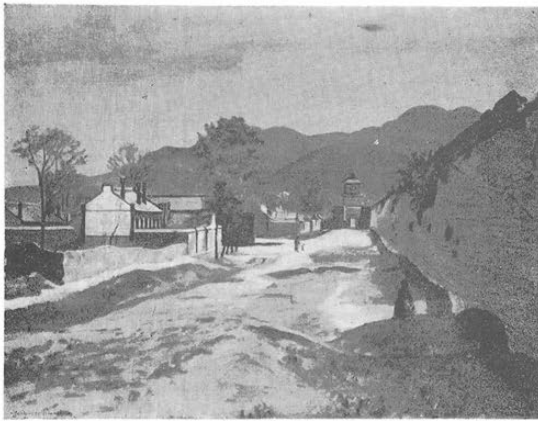
一二三 踊り子 (同)

小磯良平

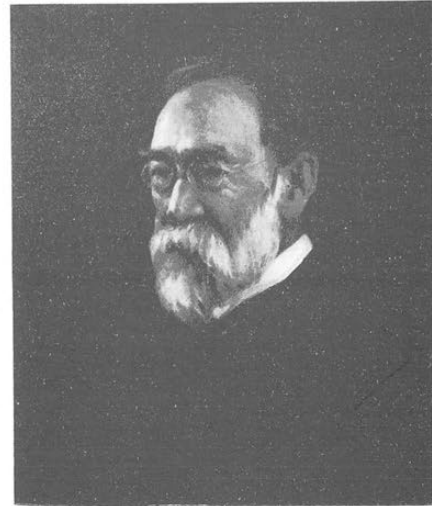


一一九 少女 (奉祝展)

林重義



木下義謙 (同) 五月の金洲 三二一



一二〇 海老名彈正氏像 (同)

松岡壽



一二四 子供 (同)

寺田竹雄



一二一 牡丹 (同)

庫田 毅



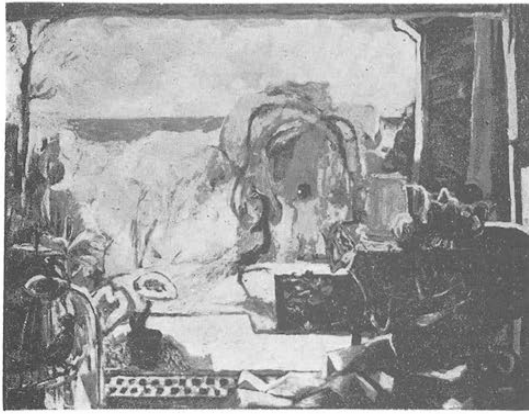
一二八 白樺の若木(同)

山下新太郎



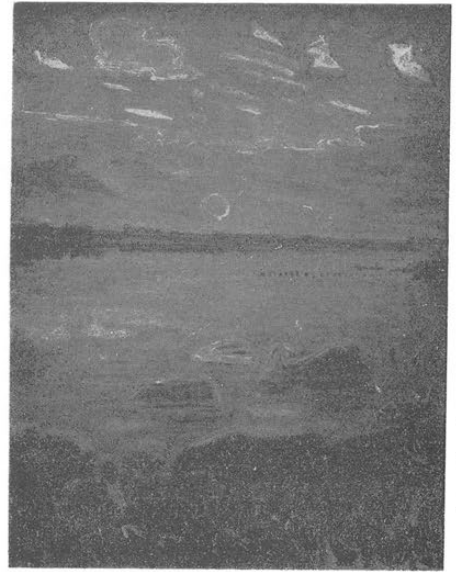
一二五 樹の上の少年(同)

中川一政



一二九 陽光(同)

高間惣七



一二六 利根川(同)

齋藤與里



一三〇 T令嬢像(同)

木下孝則



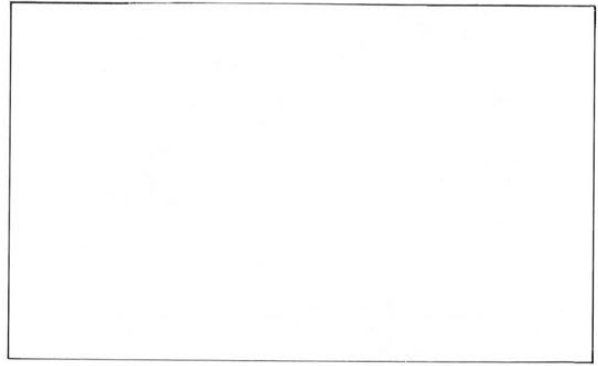
一二七 早春(同)

小絲源太郎

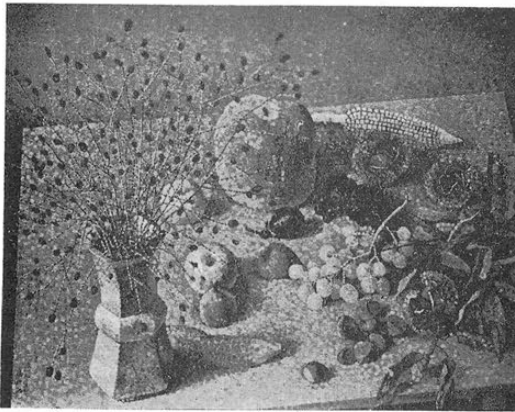


一三四 詩宗青尾先生（二水會展）

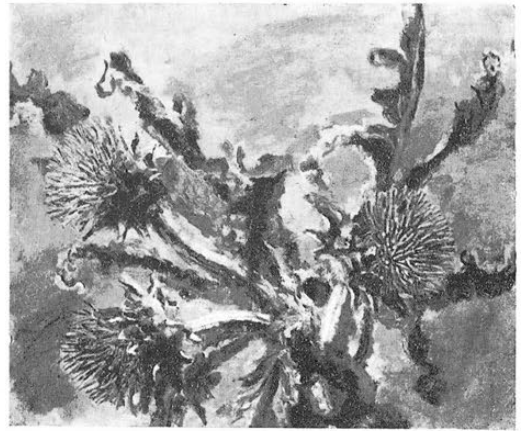
有島生馬



廉 藤 伊 （展會林霜）湖の山 一三一



一三五 秋の静物（同）高田誠

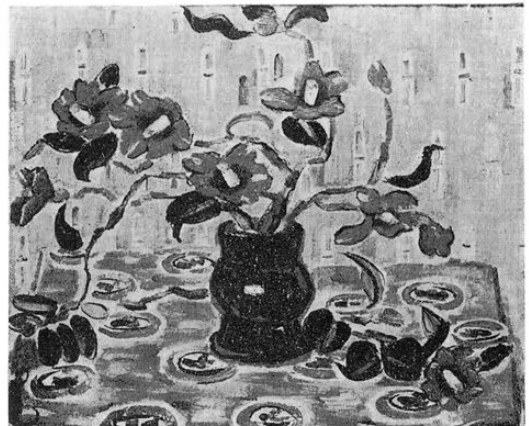


念一宮會 （同）蘇鮮朝 二三一



一三六 菊（同）

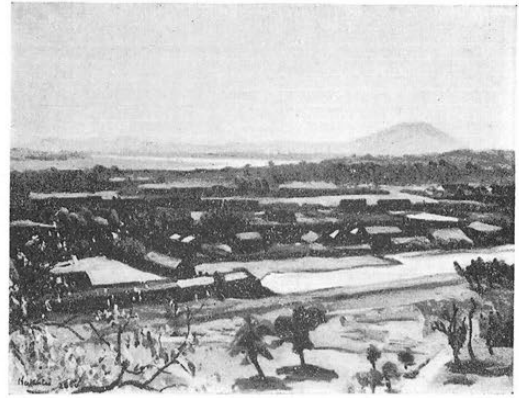
安井會太郎



藏勝見里 （同）椿 三三一

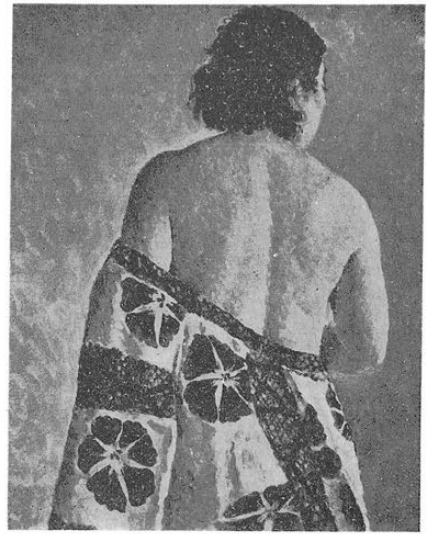


策善村中 (同)原河瀬高 ○四一



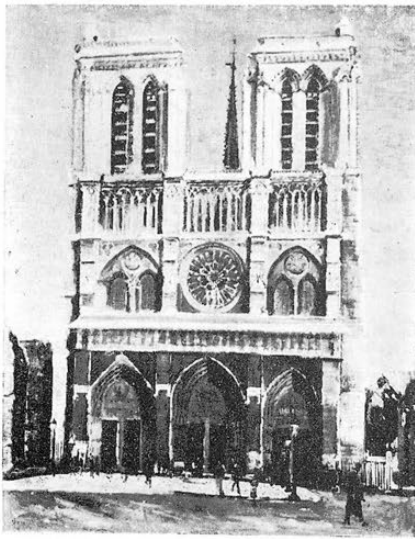
一三七 吉林(同)

石井柏亭



一三八 後向き(同)

コンラッド・メイリ



一四一 ノートルダム寺院(新古典派展) 高橋貞一郎

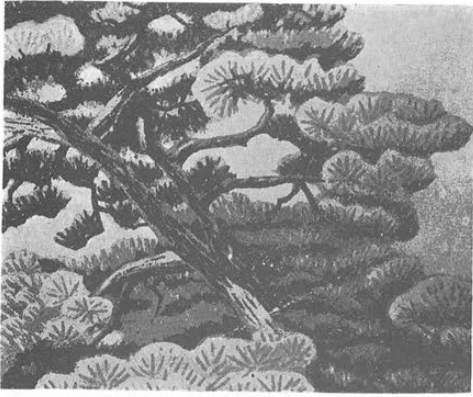


郎孟木子鹿

圖城入京南二四一



鈞邊池(同)祭宵 九三一



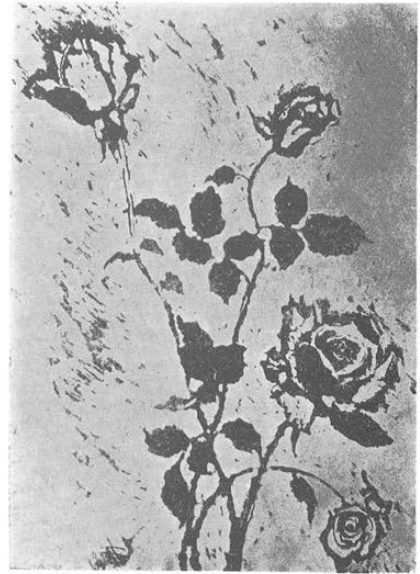
四 黒猫 (同) 前田政雄



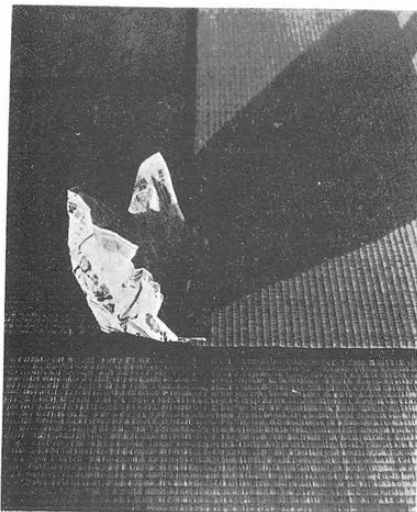
一 白杵石佛 (國畫會展) 平塚運一



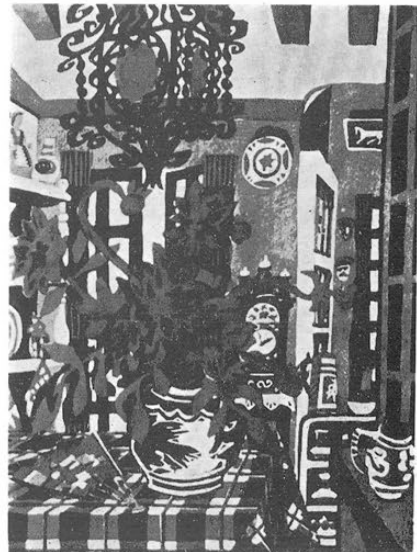
五 花芭蕉 (春陽會展) 前田藤四郎



二 バラ (同) ブブノワ



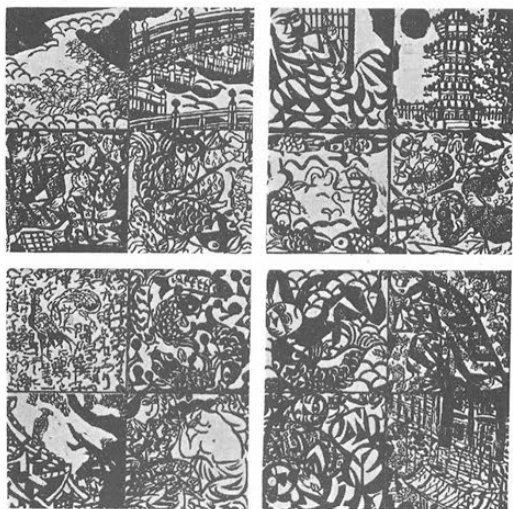
六 室内 (自由美術家協會展) 長谷川三郎



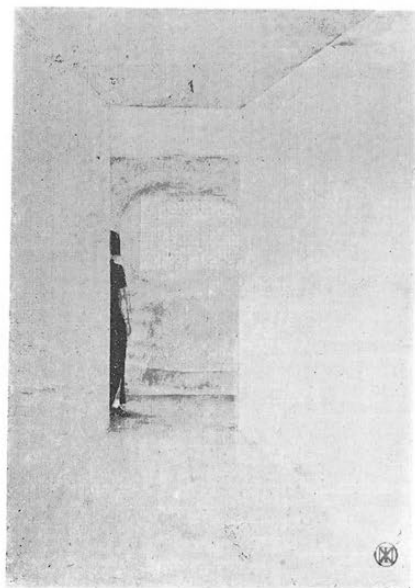
三 グリヤ (同) 川西英



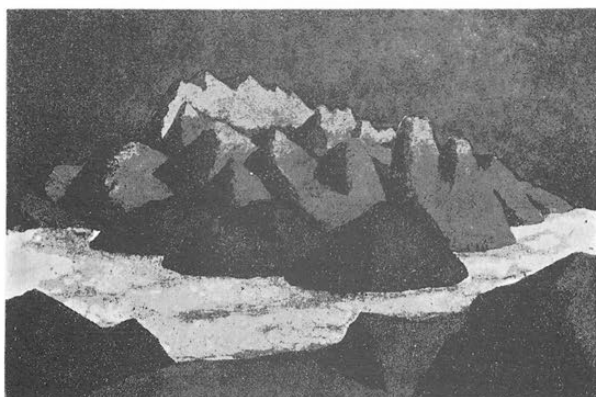
進 口 山 (同) 士 富 遠 ○一



功 志 方 棟 (展祝奉)起縁寺航慈 七



郎四孝地恩(同)(州蘇)堅 白 一一



郎 太 梅 地 畦 (展會協畫版本日) 森ヶ瓶 八



展會協術美道報 二一

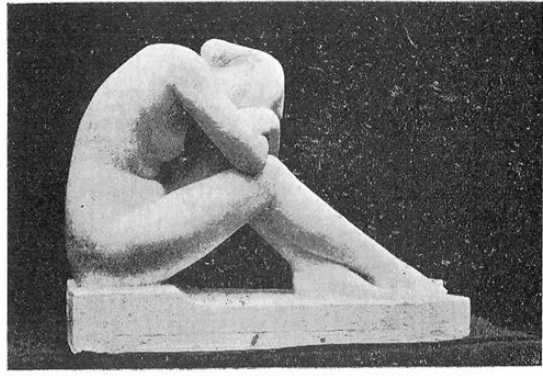


帆 千 川 前

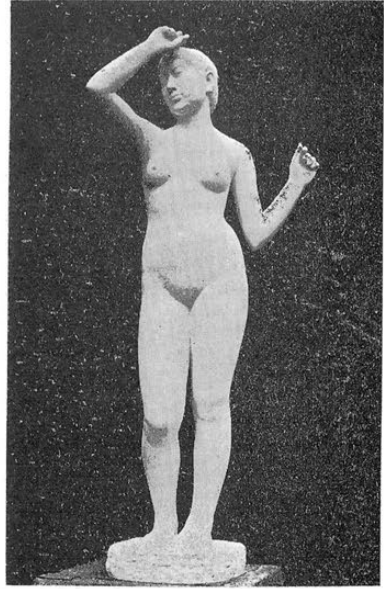


(同) 娘の村・婦農 九

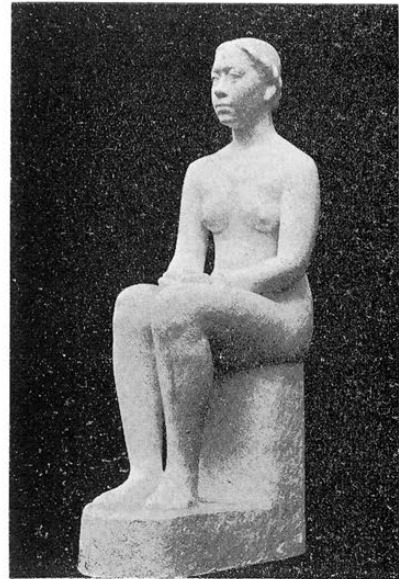
一 裸像(魂人社展) 泉谷喜一郎



二 習作(同) 小室達



三 腰かけた像(同) 三澤寛



五〇

四 思索(日本彫刻家協會展) 畝村直久



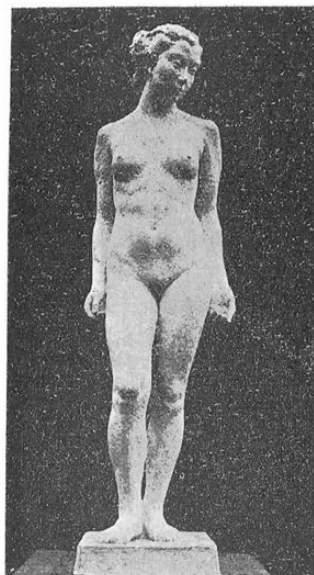
五 座せる少女(同) 佛子泰夫



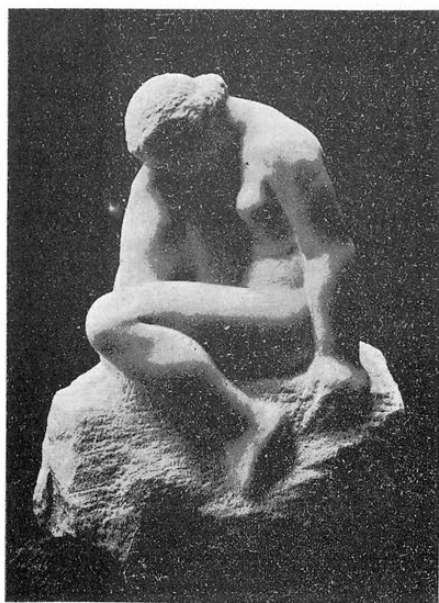
六 樂手(同) 雨川光平



七 裸婦(日本彫刻家協會展) 菅沼五郎



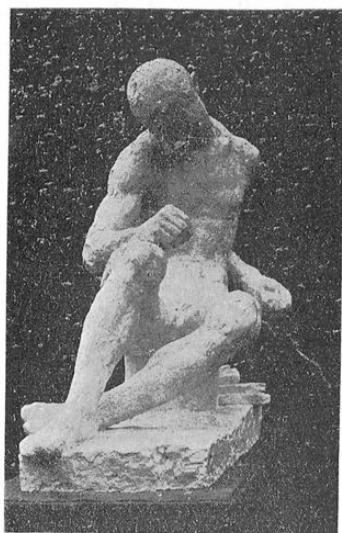
九 瞑想(同展遺作陳列) 武井直也



一一 牡牛(同) 大島駒藏



八 青年(同) 加藤顯清

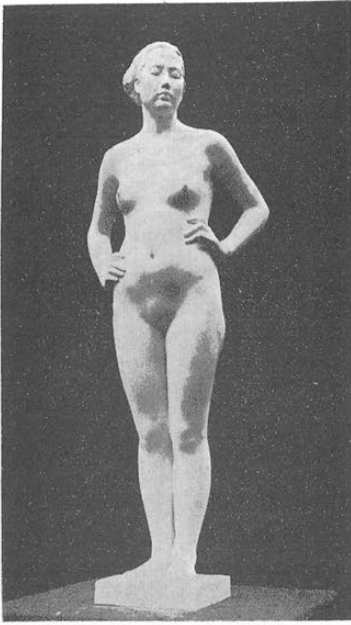


一〇 絃の音(日本木彫會展) 佐々木大樹



一二 凝集せる群像(構造社展) 安永良徳





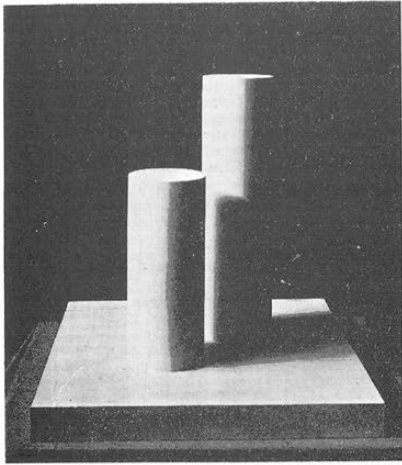
一六 女 (同)

進藤武松



一三 故高橋是清子爵像 (構造社展)

齋藤素巖



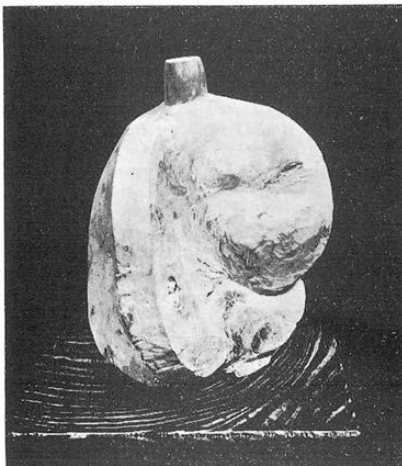
一七 柱 (自由美術家協會展)

長谷川三郎



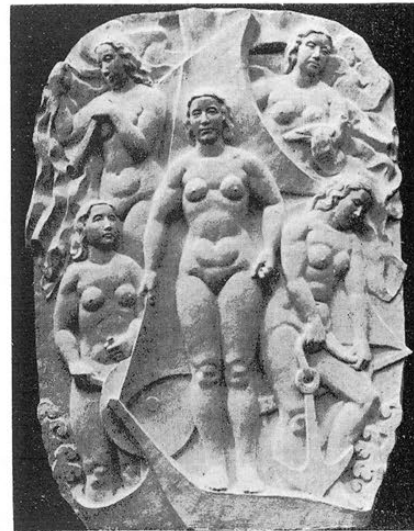
一四 髪 (同)

後藤清一



一八 人 (同)

山口 薫



一五 ギイナスの出帆 (同)

野村公雄



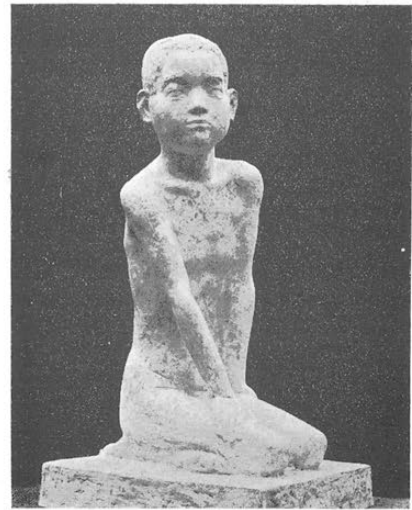
信正村北 (同) 後浴〇二



一九春庭華(東邦彫塑院展) 長谷川榮作



二三 民族の交流(二千六百年に寄す)
(第三部會展) 向山峽路



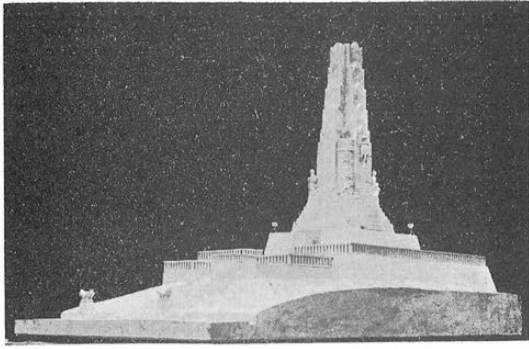
二一 座せる少年(同) 有地滋勉



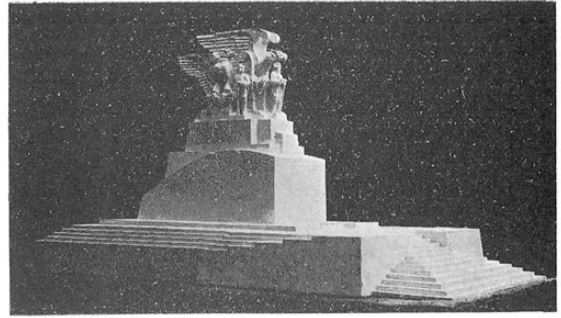
二四 軍用動物供養塔(同) 池田勇八



二三 二千六百年建國の譜(同) 永原 廣



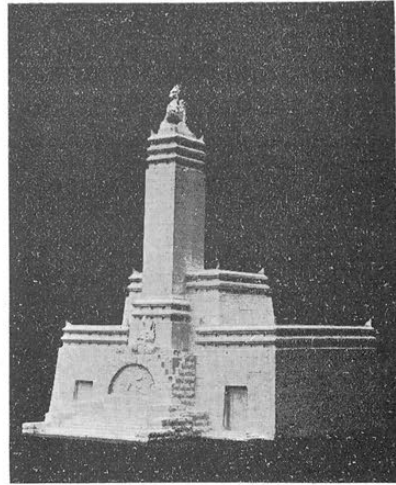
三實子名日 (同)柱基之紘八 六二



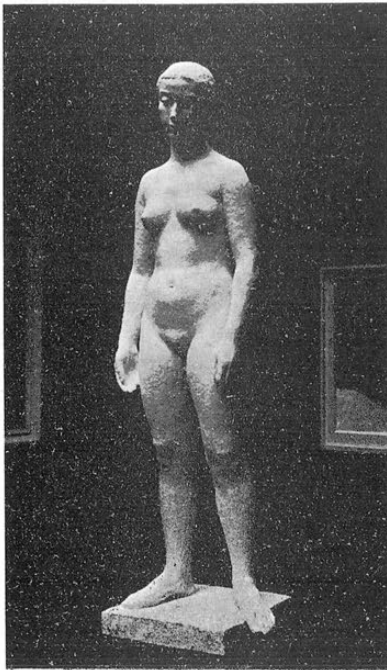
(一ノ分五十)碑忠表空航 五二
三實子名日 (展會部三第)



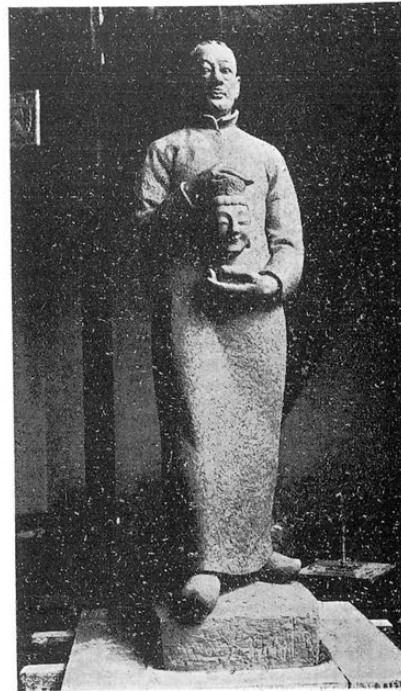
二八 隕石(新制作派協會展) 舟越保武



二七 上海・海軍陸戰隊表忠塔(二十五分ノ一)
(同) 日名子實三



三〇 裸婦 (同) 佐藤忠良



二九 藤島武二先生の像(同)

本郷新

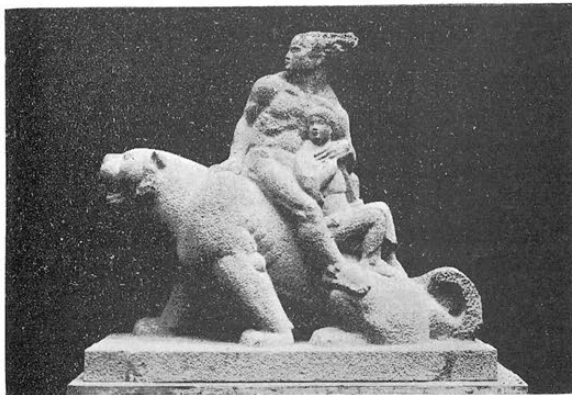


三二 異郷 (同)

山内壯夫



三一 スペインの娘 (新制作派協会展)
菊池一雄



松村外次郎 (同) 和唐内 (同)

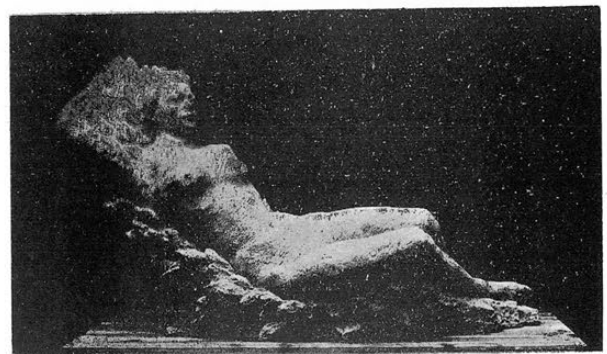


三三 新らしき道 (二科會展)

水野欣三郎



三六 モニユマン・國土を護る (二千六百年頌)
(同) 渡邊義知



三三 五横隊 (同) 笠置季男

三七 飛翔童兒(二科會展)

泉二勝磨



三八 女の顔(院展)

山本豊市



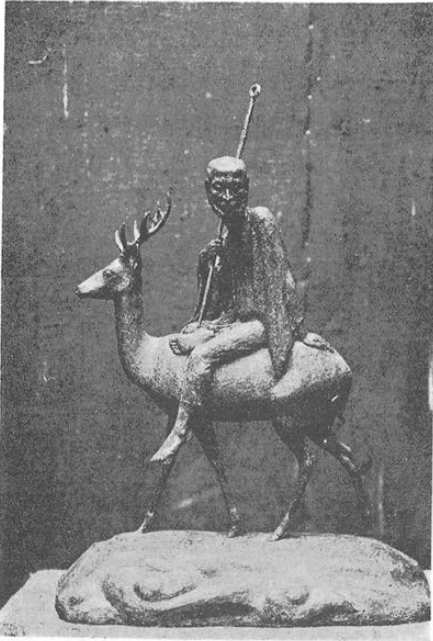
三九 飛行天女(同)

大内青圃



四〇 伯道仙人(同)

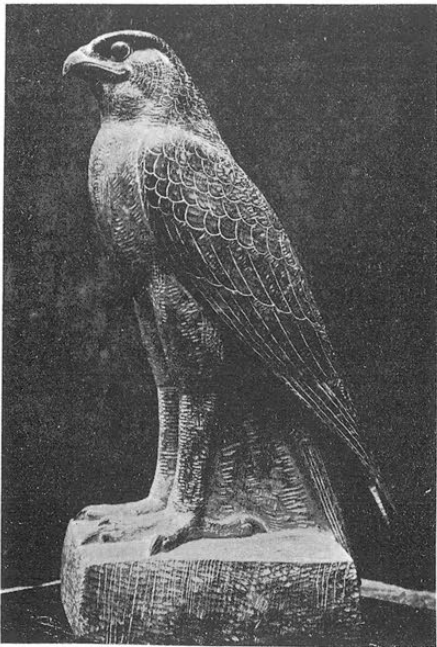
柏木康兵



四一 鷹

(同)

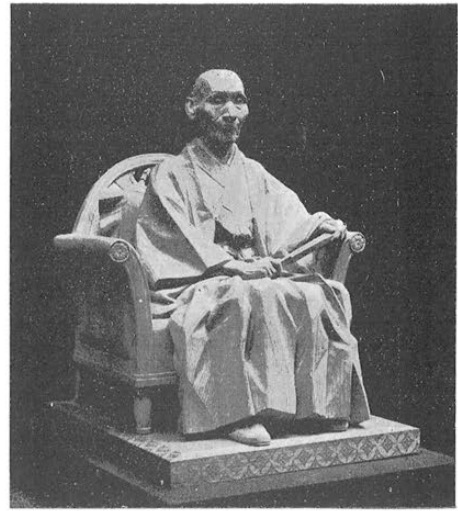
中村直人





四三 閑座(同)

石井鶴三



四二 森氏像(院展)

關谷充



四五 學童の首(同)

松森一三



四四 座婦(其一)(同)

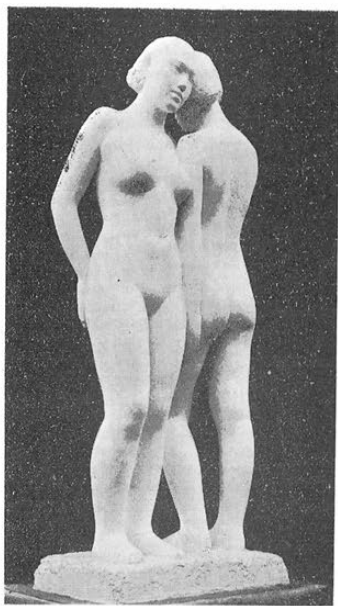
村田徳次郎



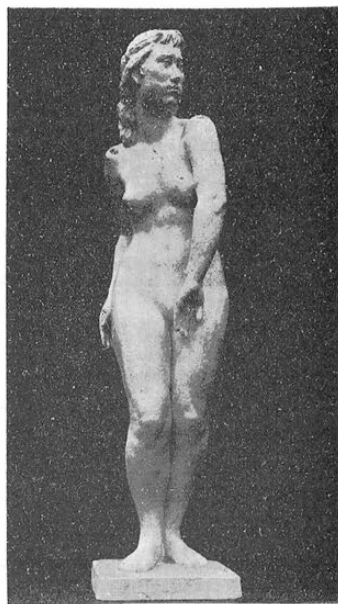
四七 象山先生像(奉祝展) 寺瀬默山



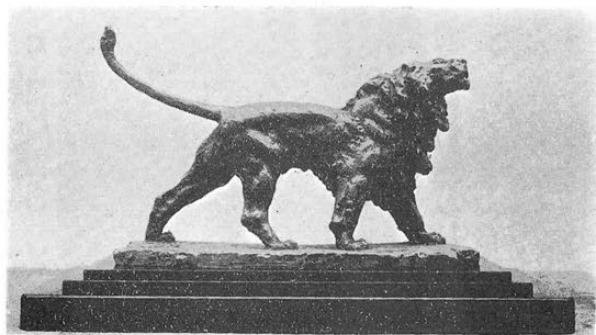
門 龍田保 (展市阪大)命下倉高 六四



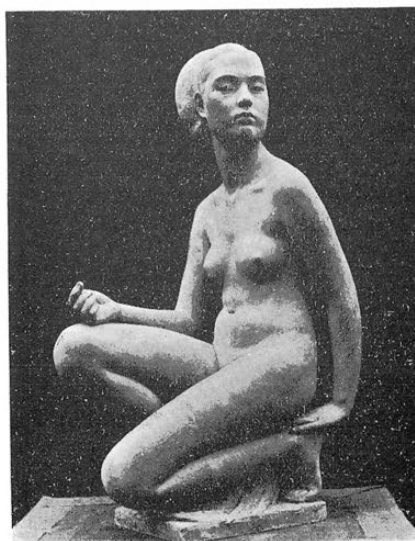
五一 二つの対象に求めて(同) 安藤 照



四八 若き女性(奉祝展) 中村 七十



望 西 村 北 (同) 發風哮一 二五



四九 裸 女(同) 藤井 浩祐



五三 出征兵士ヲ送ル(千人針記念碑の一部) (同) 清水 多嘉示



五〇 頰 杖(同) 建昌 大夢



五七 神 火(同)

森野 圓象



五四 原翁開日(奉祝展)

平 櫛 田 中



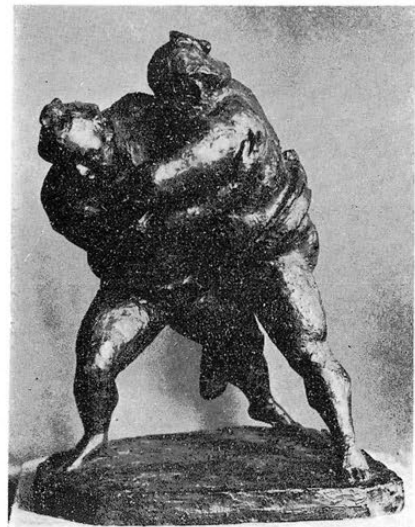
五五 順天我往(同)

内 藤 伸



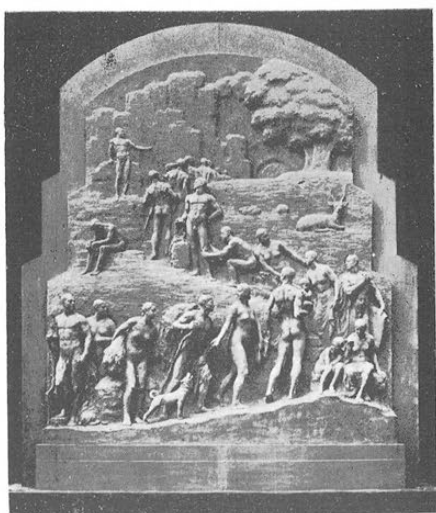
五八 倭 乙 女(同)

山 崎 朝 雲



五六 相 撲(同)

石 井 鶴 三



六一 日は昇る(同)

齋藤素巖

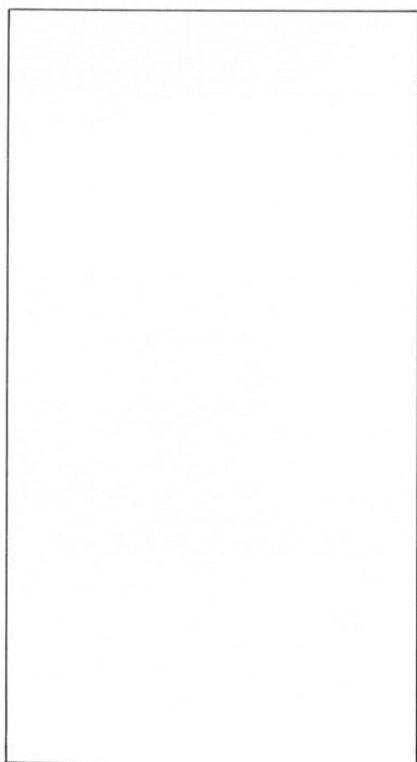


五九 山田長政(奉祝展)

小倉右一郎



六二 支那事變出征軍馬記念像
乘馬、挽馬、駄馬
伊藤國男



六三 和氣清磨像

佐藤清藏

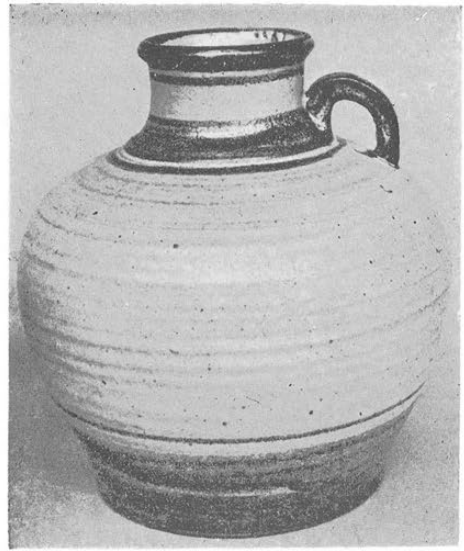


六〇 清磨公像(同)

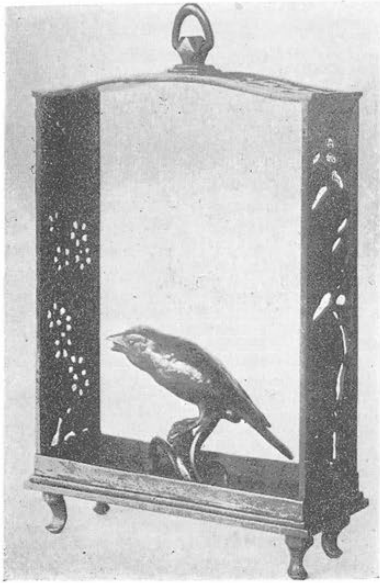
朝倉文夫



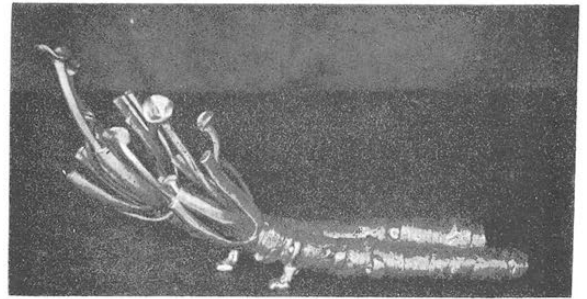
四 銀と鉛草虫文花瓶(同) 寺田龍雄



一 片手壺(個展) 清水正太郎



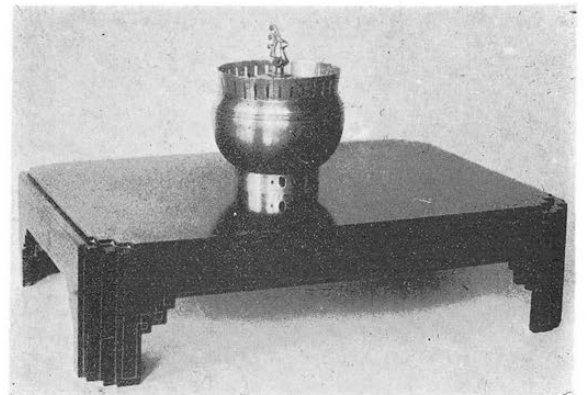
五 鑄銅鳴禽置物(同) 香取秀眞



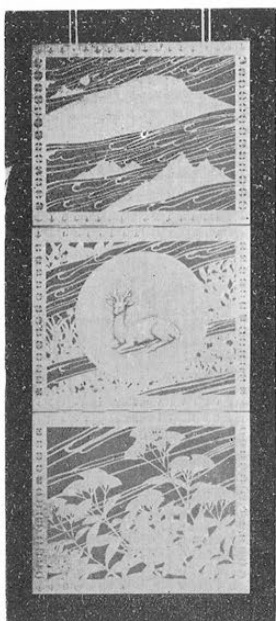
曇安本山 (展祝奉) 葵山銀鑄型蠟 二



周豊村高 (同) 壺花銅青 六

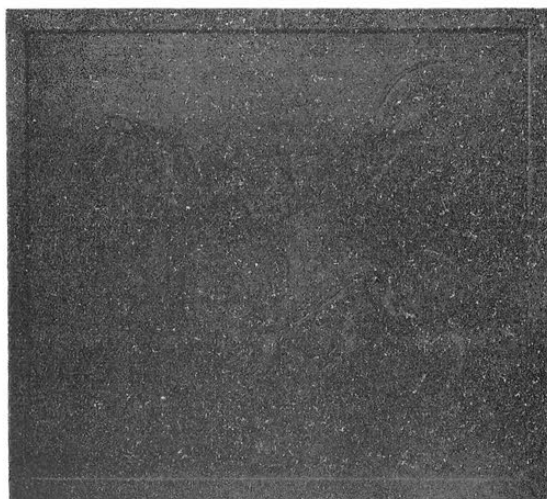


彦正取香 (同) 爐香と卓金鑄 三



一〇 山壁掛(同)

北原千麿



七 鐵板術立(奉祝展)

清水龜藏



一一 盛花器(同)

安原喜明



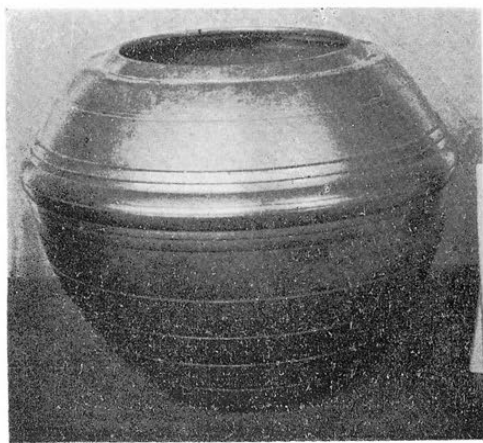
八 鑄銅飛躍(同)

津田信夫



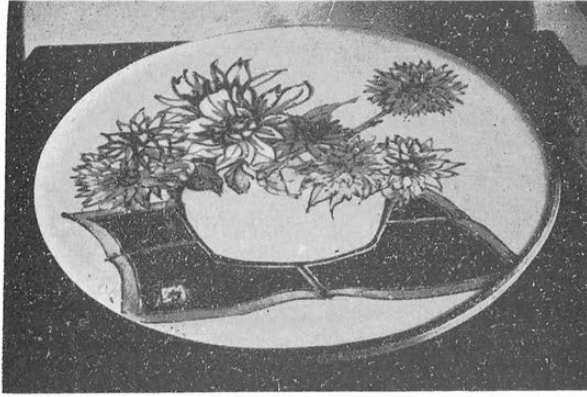
一二 陶器草花文壺(同)

宮之原謙

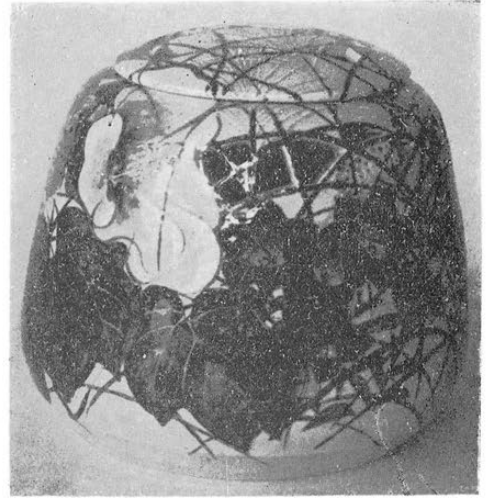


九 鑄銀花瓶(同)

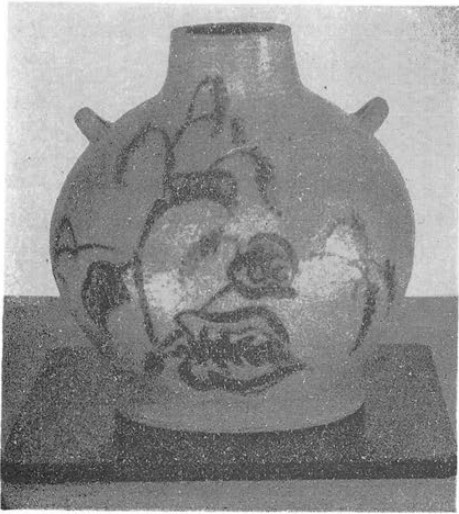
豊田勝秋



吉 憲 本 富 (同) 板 陶 六一

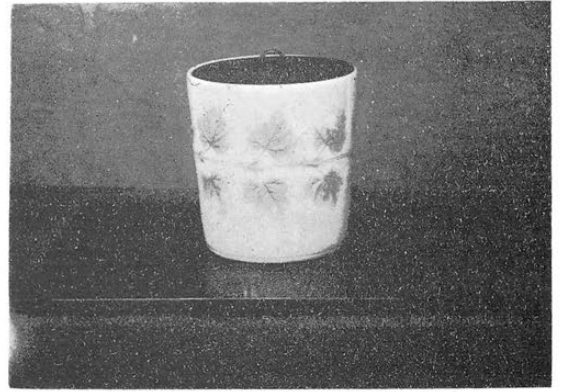


衛兵六水清 (同) 爐手草秋陶 三一

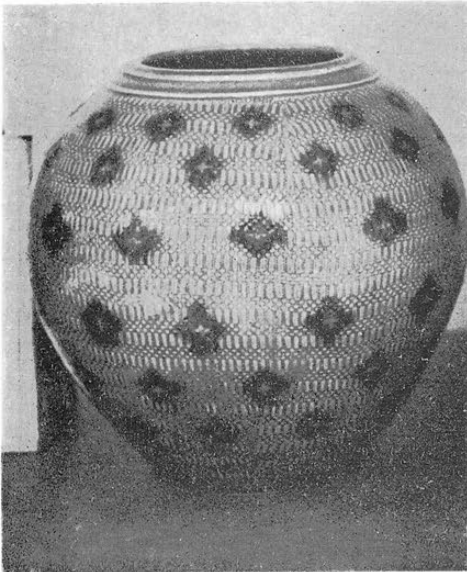


一七 陶製鐵畫草花紋花瓶(同)

新開邦太郎

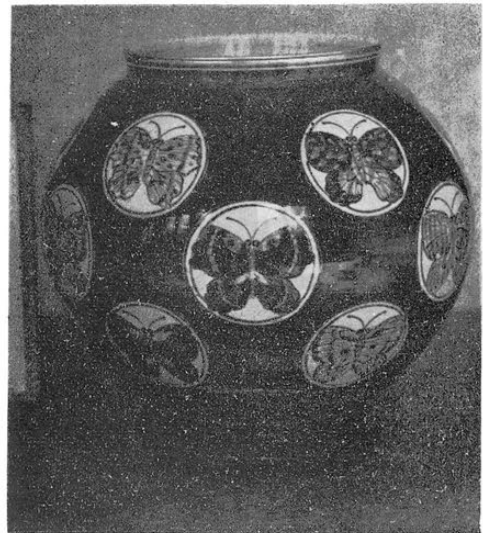


山 波 谷 板 (同) 差水文草山磁彩 四一

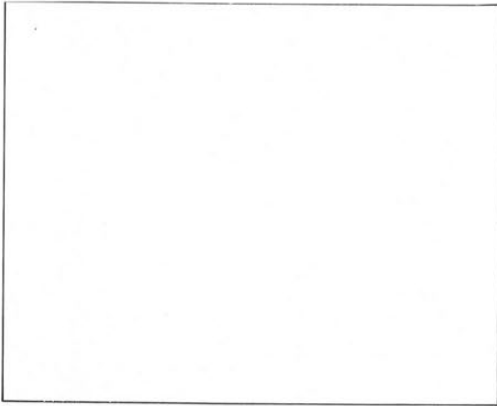


一八 布目陶花瓶(同)

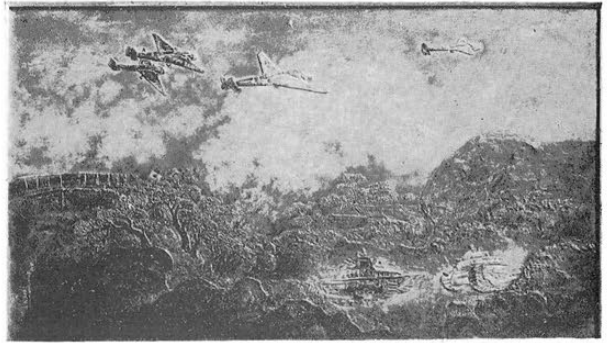
八 田 蕪 谷



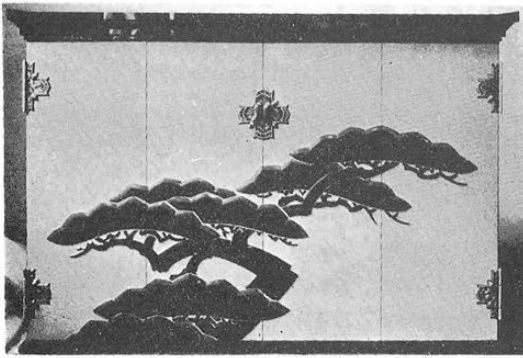
一五 染付色彩蝶丸紋花瓶(同) 岡本爲治



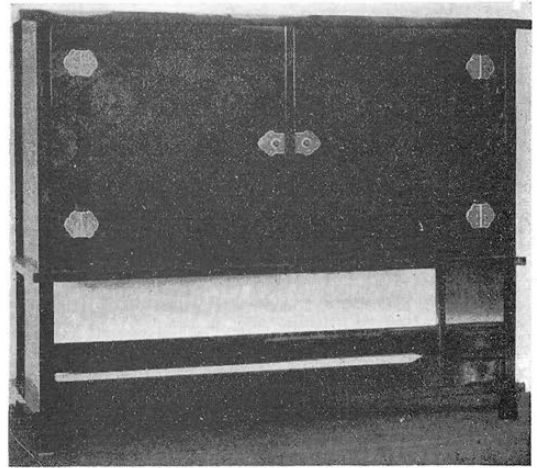
成楊朱堆 (同) 宮飾漆彫神龍日春 二二



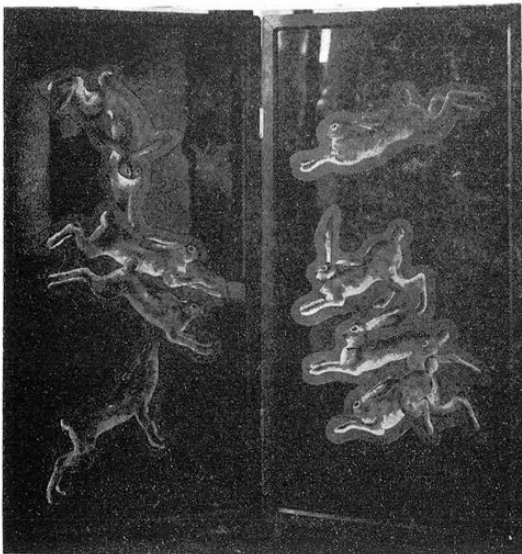
水紫角六 (展祝奉) 行擊爆畫漆 九一



眞如井磯 (同) 棚鳥敷器漆 三二



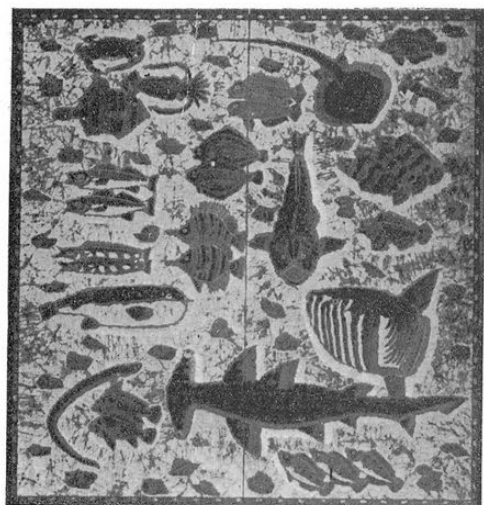
郎十源田吉 (同) 棚之様模菊器漆 〇二



郎太覺崎山 (同) 風屏兔漆 四二



眞隆澤梅 (同) 箱硯繪蒔水清石泉神 一二



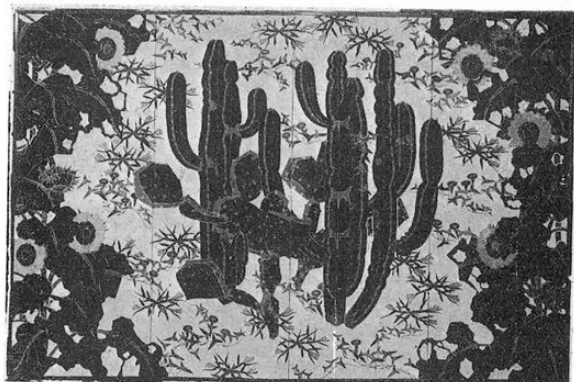
二八 海幸染色二枚屏風(同) 櫻井霞洞



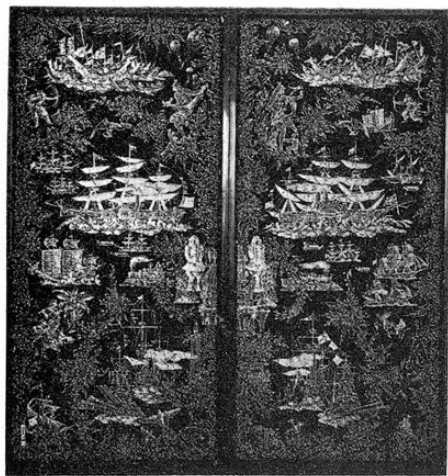
華彝問本 (同) 笥繪蒔瓢大 五二



二九 手織錦樂土圖敷物(同) 山鹿清華



男春邊渡 (同) 風屏ンテボサ繭蘭 六二



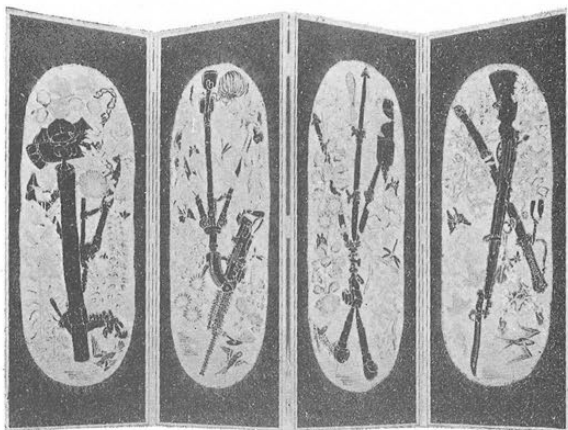
三〇 漆色國難屏風(同) 長安右衛門



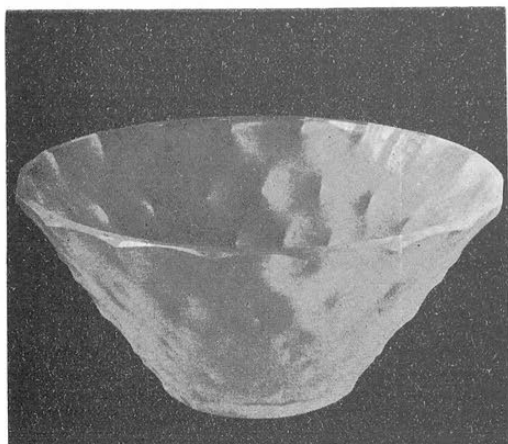
二英鳥鹿 (同) 双半風屏曲六絨驚天 七二



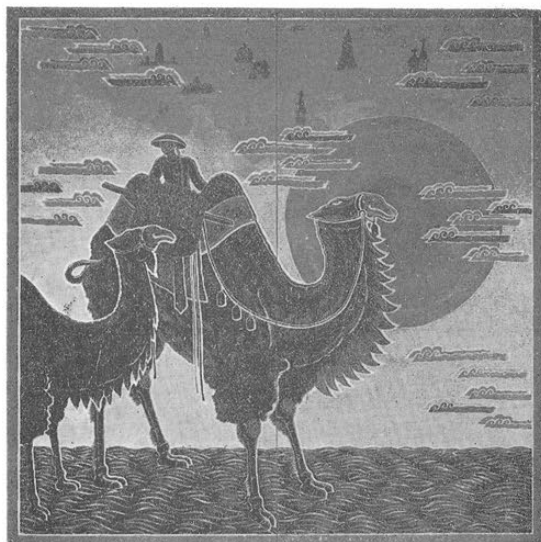
彦光口野 (同)形人所御子童鳥咫八 四三



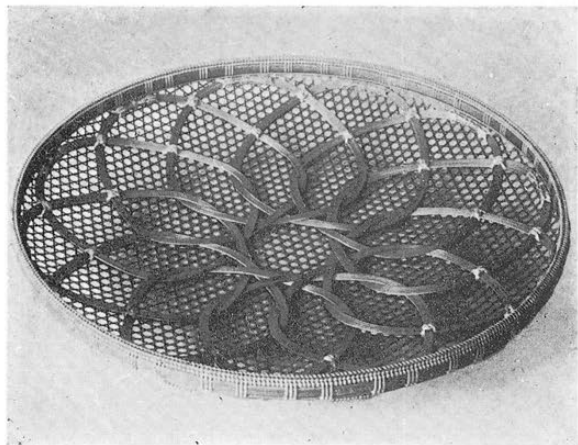
留波貞樋武 (展祝奉)風屏花花と器兵 一三



三鍍務各 (同)鉢子硝 五三



郎太駒形山 (同)風屏曲二く輝は日に陸大 二三



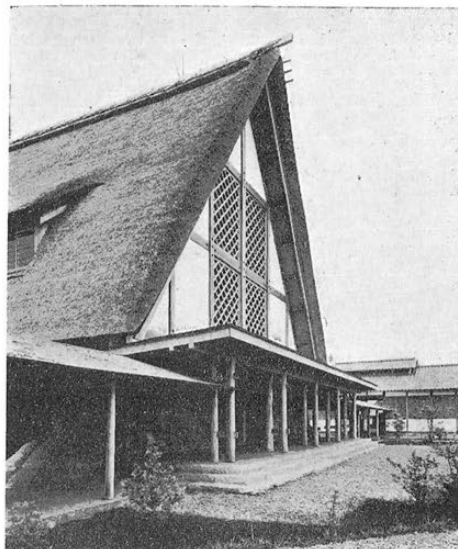
齋玕琅塚飯 (同)皿花竹 六三



郎五松川廣 (同)屏爐鷹皮染 三三



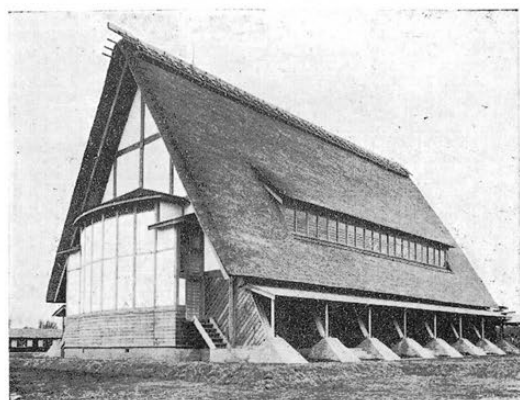
計設省道鐵 線架高新驛橋新四



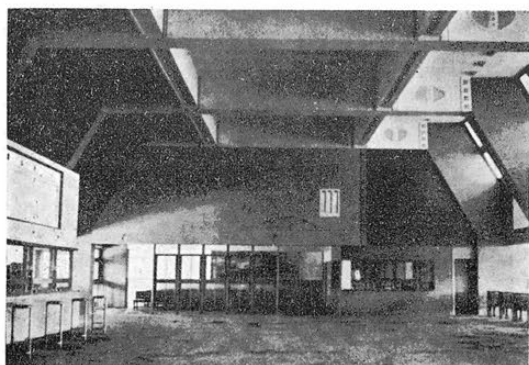
關玄 堂講大所練訓部幹拓開蒙滿 一
(眞寫社築建新) 計設永文田清



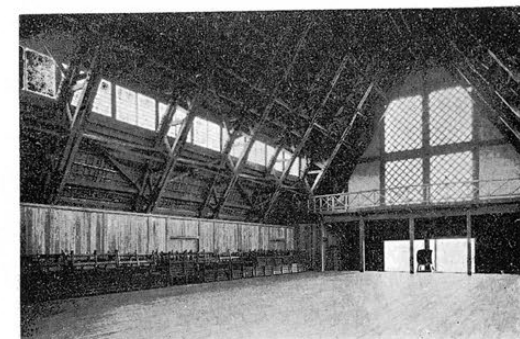
社會式株道軌氣電阪大 場車停合綜驛宮神原樞 五
(ルヨニ誌築建際國) 計設課良改



面背堂講大 上同二



部 內 上 同 六



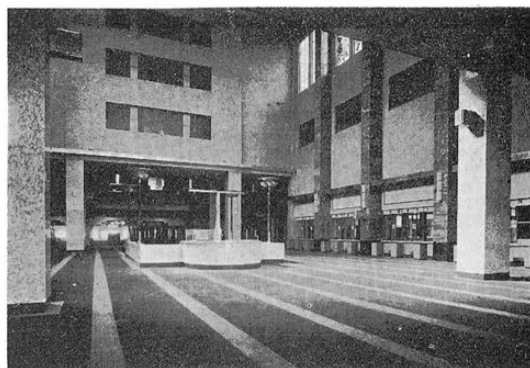
部 內 堂 講 大 上 同 三



場車停前陵御傍畝 七
計設課良改社會式株道軌氣電阪大
(ルヨニ誌築建際國)



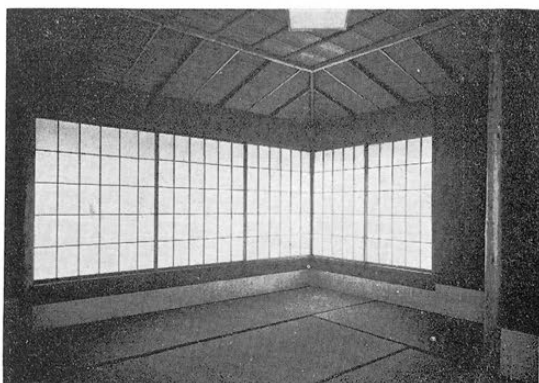
計設八十五田吉 關玄邸口山 一一
 (眞寫所務事築建田吉)



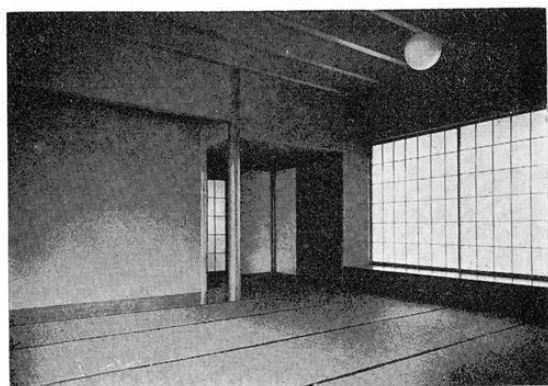
(眞寫社築建新) 計設省道鐵 間廣大驛阪大 八



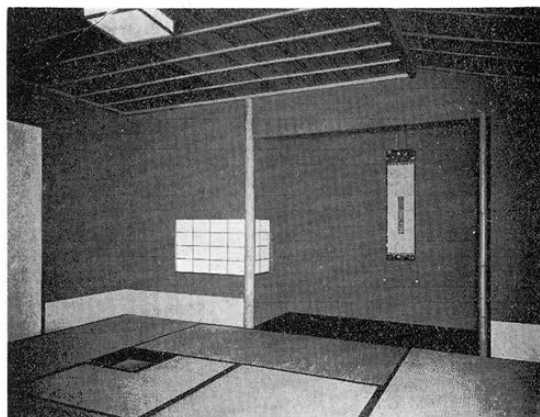
室畫と間客一第 上 同 二一



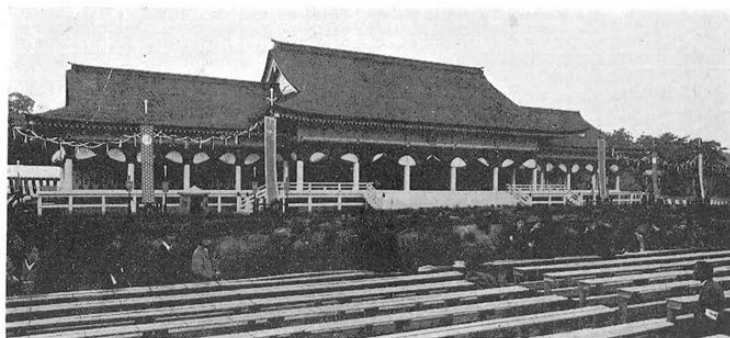
計設八十五田吉 室茶内邸氏K 九
 (眞寫所務事築建田吉)



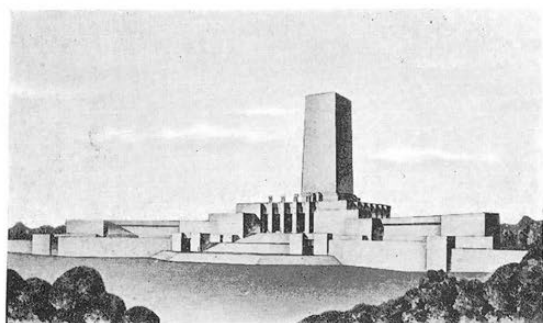
室 畫 上 同 三一



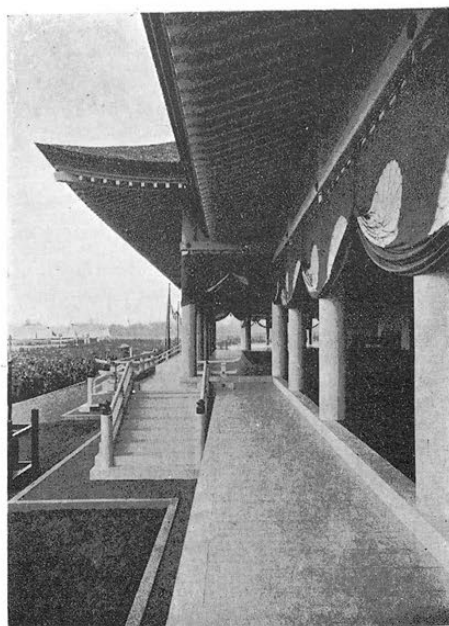
間 床 上 同 〇一



場典式祝奉年百六千二元紀 四一
 (真寫社築建新) 計設局財管繕營省藏大



計設二文崎竹 等一種二第 同 七一



上 同 五一

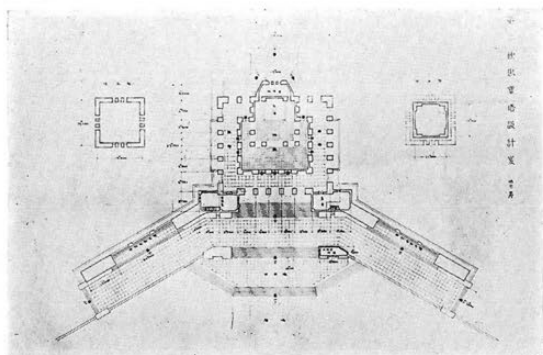
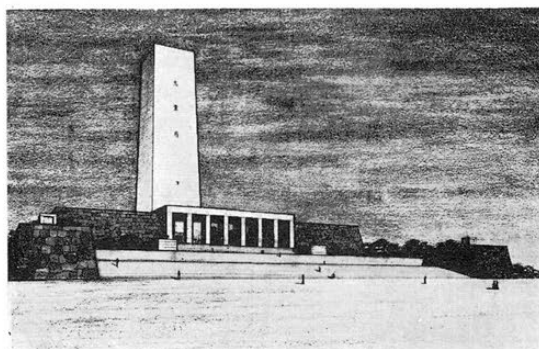
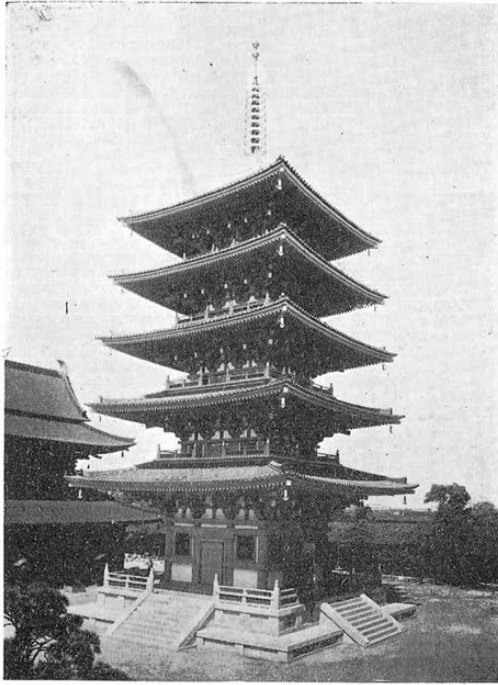


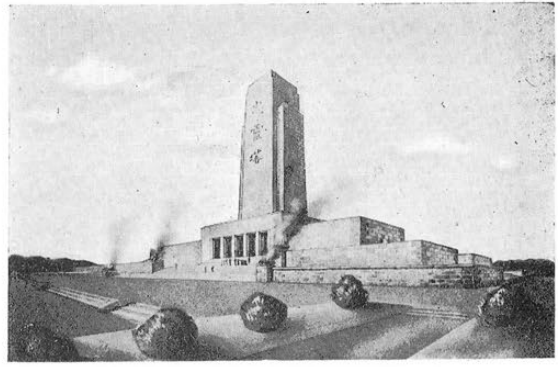
圖 面 平 上 同 八一



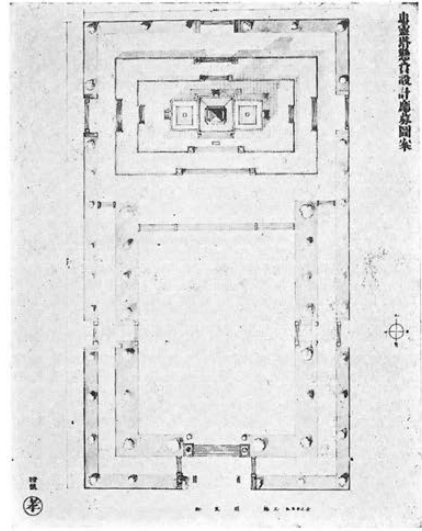
席一等二種二第 計設賞懸塔靈忠 六一
 (真寫社築建新) 計設三順村吉



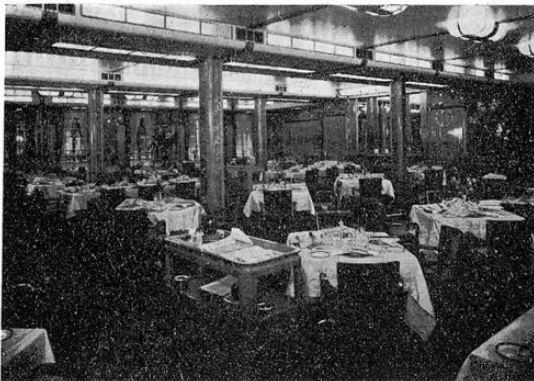
計設一五田武 塔重五寺玉天四 一二



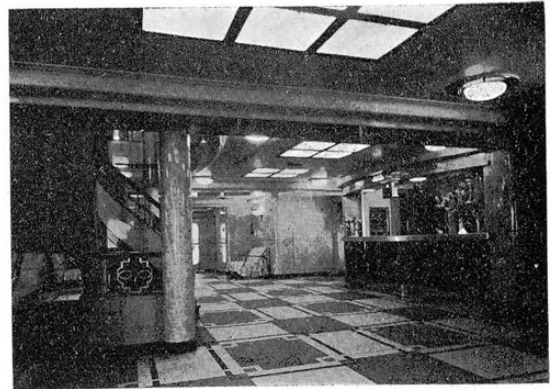
等一第一 計設賞懸塔靈忠 九一
計設則正原棕



圖面平上同〇二



堂食大等一同 三二



ルーホスンラトシエ等一丸田新 二二
(真寫社會船郷本日) 造建所船造崎長業工重菱三



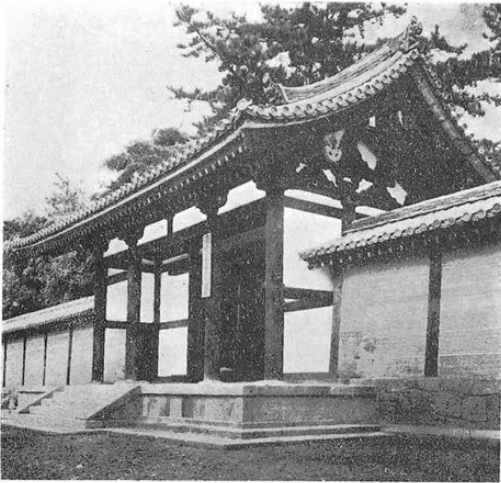
四 法隆寺四門



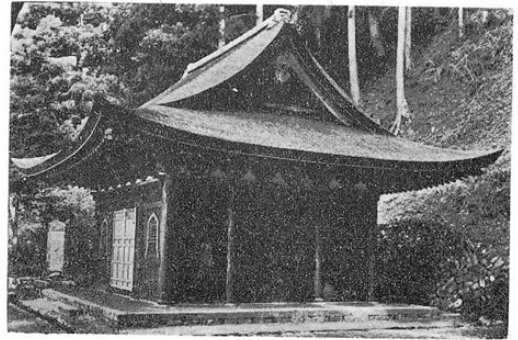
一 鶴林寺



二 唐招提寺禮堂



五 法隆寺南門



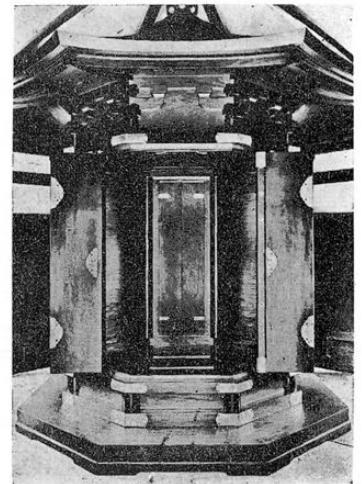
三 延曆寺瑠璃堂



八 金剛寺鐘樓



七 金剛寺寶塔



六 法隆寺夢殿厨子



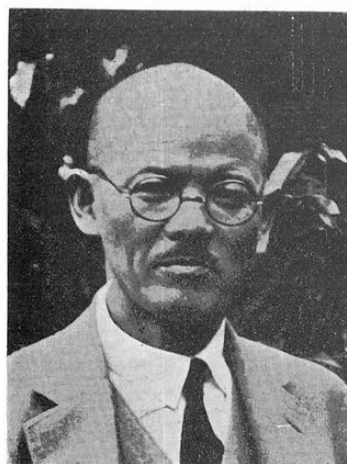
去逝日五月二 也直井武 三



去逝日七十二月一 陵丹田邨 二



去逝日五十一月一 鼎 田保久 一



去逝日八十月三 男恆珍明 六



去逝日二月三 彦直木正 五



去逝日六十月二 璋頼中田 四



去逝日七十月十 岱雪村小 九



去逝日一十三月七 水犀井坂 八



去逝日九十二月七 崩不岡 七

附

錄

國寶保存會

國寶保存會官制

昭和四年六月二十九日
勅令第二百一十一號

第一條 國寶保存會ハ文部大臣ノ監督ニ

屬シ其ノ諮問ニ應ジテ國寶保存法第一
條、第五條、第十一條、第十三條及第

十四條ニ規定スル事項其ノ他國寶保存
ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス

國寶保存會ハ國寶保存ニ關スル事項ニ
付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第二條 國寶保存會ハ會長一人、副會長
一人及委員三十人以內ヲ以テ之ヲ組織
ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アル
トキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、副會長、委員及臨時委員
ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之
ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議
ヲ文部大臣ニ具申ス

副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アルト
キハ其ノ職務ヲ代理ス

會長及副會長共ニ事故アルトキハ文部
大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理
ス

第五條 會長及副會長ハ會議ニ於テ意見
ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第六條 國寶保存會ニ常務委員會ヲ置ク
國寶保存會ノ委任ヲ受ケ其ノ權限ニ屬
スル事項ノ一部ヲ處理ス常務委員會ハ

國寶保存會ノ會長及副會長並ニ國寶保
存會ノ委員ニシテ文部大臣ノ指名シタ
ル者十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

第七條 文部大臣ハ必要ニ依リ又ハ國寶
保存會ノ要求アルトキハ文部省高等官
其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出
席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第八條 國寶保存會ノ議事ニ關スル規則
ハ文部大臣之ヲ定ム

第九條 國寶保存會ニ幹事ヲ置ク文部大
臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ
幹事ハ會長及副會長ノ指揮ヲ受ケ庶務
ヲ整理ス

第十條 國寶保存會ニ書記ヲ置ク文部大
臣之ヲ命ズ

附則
本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行
ス（昭和四年七月一日ヨリ施行）
古社寺保存會規則ハ之ヲ廢ス

國寶保存會職員

會長 倭細川 護立

委員 三矢 宮松 溝口順次郎

福井利吉郎 奥田 誠一

德富猪一郎 田中 豐藏

伊東 忠太 香取秀治郎

山田準次郎 藤懸 靜也

渡部 信 山田 孝雄

瀧 精一 黒板 勝美

神津 伯 藤島亥治郎

武内 義雄 常盤 大定

新納忠之介 阿原 謙藏

土屋 純一 辻 善之助

芝 葛盛 石井 政一

新村 出 古宇田 實

原田 淑人 横河 民輔

上野 直昭 梅原 末治

臨時委員 岸 蕪吉

幹事 青戸 精一 丸尾彰三郎

大岡 實

重要美術品等調査委員會規程

重要美術品等調査委員會規程
昭和八年四月十一日
文部省訓令第九號

第一條 重要美術品等調査委員會ハ文部
大臣ノ監督ニ屬シ重要美術品等ノ保存
ニ關スル法律（以下單ニ法ト稱ス）第
一條ノ規定ニ依リ輸出及移出ノ許否並
ニ法第二條ノ規定ニ依リ認定（以下單
ニ認定ト稱ス）及其ノ取消ニ關スル事
項ヲ調査審議ス

第二條 重要美術品等調査委員會ハ會長
一人及委員二十五人以內ヲ以テ之ヲ組
織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アル
トキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、委員及臨時委員ハ文部大
臣之ヲ依嘱シ又ハ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議
ヲ文部大臣ニ具申ス

會長事故アルトキハ文部大臣ノ指名シ
タル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ
可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第六條 文部大臣ハ必要ニ依リ文部省高
等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議
ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第七條 重要美術品等調査委員會ノ議事
ニ關スル規則ハ別ニ之ヲ定ム

第八條 重要美術品等調査委員會ニ幹事
若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第九條 重要美術品等調査委員會ニ書記
若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ

書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ
從事ス

第十條 文部大臣ニ於テ必要ト認ムルト
キハ會長、委員、臨時委員又ハ其ノ他
ノ者ヲシテ認定及其ノ取消其ノ他重要
美術品等ニ關スル調査ヲ爲サシムルコ
トヲ得

重要美術品等調査委員會職員

會長 文部次官 菊池豐三郎

委員 伊東 忠太 黒板 勝美

三矢 宮松 辻 善之助

奥田 誠一 原田 淑人

藤懸 靜也 神津 伯

香取秀治郎 佐佐木信綱

丸尾彰三郎 關 保之助

文部省國寶調査官

國寶保存會・重要美術品等調査委員會

一

帝室技藝員—文部省美術展覽會

和田 英作	日本畫	横山 大親	昭和六年六月
梅原 末治	同	橋本 鬮雪	同九年十二月
天沼 俊一	同	安田 靱彦	同
阿原 謙藏	同	菊池 契月	同
角南 隆	洋畫	藤島 武二	同
脇本十九郎	同	和田 英作	同
本間 順治	彫刻	山崎 朝雲	同
岩橋小彌太	工藝	板谷 波山	同
柴田 常恵	同	香取 秀眞	同
中村 直勝	同	清水 龜藏	同
尾崎 洵盛	同	同	同
秋山 光夫	同	同	同
田中 一松	同	同	同
吉野 富雄	同	同	同
北原 大輔	同	同	同
青戸 精一	同	同	同
丸尾彰三郎	同	同	同
大岡 實	同	同	同

帝國藝術院

帝國藝術院官制
昭和十二年六月二十三日
勅令第二百八十號

第一條 帝國藝術院ハ文部大臣ノ管理ニ
屬シ藝術ノ發達ヲ圖リ文化ノ向上ニ資
スルヲ以テ目的トス

第二條 帝國藝術院ハ藝術ニ關スル重要
ノ事項ヲ審議ス

帝國藝術院ハ藝術ノ發達ニ資スル爲必
要ナル事業ヲ行フコトヲ得

帝國藝術院ハ藝術ニ關スル重要ノ事項
ニ付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第三條 文部大臣ハ藝術ニ關スル重要ノ
事項ニ付帝國藝術院ニ諮問スルコトヲ
得

第四條 帝國藝術院ハ院長一人及會員八
十人以上ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條 院長及會員ハ藝術ニ關シ意見聞
歴卓越スル者ノ中ヨリ文部大臣ノ奏請
ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

院長及會員ハ勅任官ノ待遇ヲ受ク

第六條 院長ハ院務ヲ總理ス
院長事故アルトキハ文部大臣ノ指名ス
ル會員其ノ職務ヲ代理ス

第七條 帝國藝術院ニ主事ヲ置ク文部部
内ノ高等官ノ中ヨリ文部大臣ノ奏請ニ
依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

主事ハ院長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第八條 帝國藝術院ニ書記ヲ置ク文部部
内ノ判任官ノ中ヨリ文部大臣之ヲ命ズ
書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附 則
本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

帝國美術院官制ハ之ヲ廢止ス
本令施行ノ際現ニ帝國美術院長又ハ帝國
美術院會員タル者別ニ辭令ヲ發セラレザ
ルトキハ夫々帝國美術院長又ハ帝國美術
院會員ヲ命ゼラレタルモノトス

帝國藝術院職員

院長 清水 澄

會 員 (五十番順)
朝倉 文夫 荒木悌二郎(十畝)

有馬壬生馬(生馬) 石井 滿吉(柏亭)

板谷 嘉七(波山) 伊東 忠太

井上 通泰(通去) 上村 常子(松園)

梅原龍三郎 梅若万三郎

多 忠龍 尾上 八郎(柴舟)

香取秀治郎(秀眞) 鍋木 健一(清方)

河井 又平(醉茗) 川合芳三郎(玉堂)

川端昇太郎(龍子) 川村 萬藏(曼舟)

清水六兵衛	窪田 通治(空穗)
幸田 成行(露伴)	幸田 延
國分 高胤(青厓)	小杉國太郎(放庵)
小林 茂(古徑)	小林 萬吾
小室貞次郎(翠雲)	齋藤 茂吉
齋藤 知雄(素巖)	佐佐木信綱
佐藤 清藏	志賀 直哉
島崎 春樹(藤村)	清水 龜藏
高濱 清(虛子)	竹内 恆吉(栖鳳)
建島彌一郎(運去)	谷崎潤一郎
千葉 胤明	津田 信夫
徳田 末雄(秋聲)	徳富猪一郎(蘇峰)
富本 憲吉	内藤 伸
中澤 弘光	中村 不折
西山卯三郎(翠嶂)	橋本 鬮一(鬮雪)
平櫛傳太郎(田中)	藤井 浩祐
藤島 武二	藤田 嗣治
豊 時義	寶生朝太郎
前田 廉造(青邨)	正宗 忠夫(白鳥)
松林 篤(桂月)	南 薫造
三宅雄二郎(雪嶺)	武者小路實篤
安井曾太郎	安田新三郎(靱彦)
山崎 朝雲	山下新太郎
山本 勇造(有三)	結城 貞松(素明)
横山 秀磨(大觀)	六角注多良(紫水)
和田 英作	和田 三造
主 事	文部書記官 本田 弘人

文部省美術展覽會

文部省美術展覽會は、明治四十年制定
された美術審査委員會官制に基き同年第
一回を開催、爾來毎年開催して十二回に
及んだが、大正八年同官制を廢止して帝

帝室技藝員

帝室技藝員の制度は明治二十三年十月
我が皇室におかせられて、明治維新以來
藝術的に衰退し經濟的に困窮してゐた當
時の我が美術界振興の思召しから制定せ
られたもので、帝室技藝員には人格藝術
共に後進の師表と仰がるべき大家を、特
にその爲に選ばれたる委員をして銓衡せ
しめ任命せられるものである。

(帝室技藝員銓衡委員) 清水澄、大谷正
男、瀧精一、依廣幡忠隆、依細川護立
帝室技藝員名簿 拜命年月
日本畫 竹内 栖鳳 大正二年十一月
同 川合 玉堂 同六年六月

國美術院規程を制定、同年以後帝國美術院美術展覽會を開催し來り昭和九年第十五回に至つた。昭和十年帝國美術院を改組し新に帝國美術院官制を制定、同十一年春第一回帝國美術展覽會を開催したが繼續されず、同年秋臨時に昭和十一年文部省美術展覽會を開催、同十二年六月帝國美術院を廢止して帝國藝術院官制が公布されるに及び、展覽會は舊の如く文部省の主催として同年第一回展覽會を開催、以後繼續することとなつた。

文部省美術展覽會規則

昭和十二年九月十一日
文部省告示第三百十九號
改正 昭和十三年八月三十一日
文部省告示第三百三號

第一章 總 則

第一條 文部省美術展覽會ハ本規則ノ定ムル所ニ依リ毎年一回之ヲ開催ス會場會期及事務所ハ其ノ都度之ヲ公告ス

第二條 本會ハ作品ノ種別ニ依リ之ヲ左ノ四部ニ分ツ

第一部 繪畫

第二部 繪畫(油繪、水彩畫、バステル畫、素描、創作版畫等)

第三部 彫塑

第四部 美術工藝

第三條 陳列スベキ作品ハ鑑査ヲ經ベキモノトス

前項ノ規定ニ拘ラズ出品人ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ専門技術ニ依ル作品ニ限り無鑑査ニテ陳列スルモノトス但シ第四部ニ於ケル綜合製

文部省美術展覽會

作ニ依ル作品ハ總テ鑑査ヲ經ベキモノトス

一 帝國藝術院會員

二 文部省美術展覽會審査員

三 無鑑査ト認メラレタル者

第四條 本會ハ各部ノ綜合展覽會トシ鑑査作品及無鑑査作品ヲ同時ニ陳列ス

第五條 鑑査、審査及陳列ノ事務ヲ處理スル爲審査員長及審査員ヲ置ク

審査員長ハ文部次官ヲ以テ之ニ充ツ
審査員ハ文部大臣之ヲ依囑ス

第六條 鑑査ハ提出セル作品ニ付陳列スベキモノヲ定メ亦査ハ陳列品ニ付優秀ナルモノヲ選定ス

第七條 審査員ハ審査員長ノ定ムル所ニ依リ第一部乃至第四部ノ各部ニ分屬ス
審査員長ハ各部ノ審査員主任ヲ指命ス
審査員ハ各部ニ付鑑査及審査ヲ行フ

第二章 出 品

第八條 出品スベキ作品ハ自己ノ製作シタルモノニ限ル

故人ノ製作ニ依ルモノハ其ノ相續人ニ於テ之ヲ出品スルコトヲ得

第九條 第三部ノ作品ニシテ原型製作者ト實材製作者ト其ノ人ヲ異ニスルトキハ原型製作者ヲ以テ其ノ出品人ト爲ス

第四部ノ作品ニシテ綜合製作ナルトキハ其ノ代表製作者一名ヲ以テ出品人ト爲ス但シ代表製作者ハ共同製作者ノ氏名ヲ附記スルコトヲ得

第十條 出品スベキ作品ハ同一人ニ付各部共一點トス

第十一條 形狀表裝等ノ如何ニ拘ラズ同

一意匠ニ依レル一箇ノ作品ト認メ得ベキモノハ二箇以上ニ分離セルモノト雖モ之ヲ一點ト看做ス

第十二條 同一意匠ニ依ラザル數箇ノ作品ト雖モ一箇ニ合裝セルモノハ之ヲ一點ト看做ス

第十三條 出品スベキ作品ノ大サハ左ノ各號ニ依ル

一 第一部ハ 縱七尺 以内(裝飾設備ヲ含ム)トス

二 第二部ハ 五十號以内トス

三 第三部ハ 制限ナシ

四 第四部ハ 立體ニ在リテハ六尺平方以内ノ場所ニ陳列シ得ルモノトシ其ノ他ニ在リテハ 縱六尺 横六尺 以内(裝飾設備ヲ含ム)トス

第十四條 作品ノ搬入受付期間ハ毎年度展覽會開催ノ都度之ヲ公告ス

第十五條 左ニ掲グルモノハ之ヲ出品スルコトヲ得ズ

一 製作後五年以上ヲ經タルモノ

二 既ニ帝國美術院美術展覽會及文部省美術展覽會ニ陳列シタルコトアルモノ

三 風致ニ害アリト認ムルモノ

第十六條 鑑査ヲ受クベキ作品ヲ出品セントスル者ハ金一圓ノ手数料ヲ納入ス

ベシ既納ノ手数料ハ如何ナル事由アルモ之ヲ還付セズ

第十七條 出品セントスル者ハ所定書式ノ申込書ト共ニ作品ヲ本會事務所ニ提出スベシ故人ノ作品ヲ出品セントスルトキハ申込書中解説書欄ニ製作者ノ氏名及履歷ヲ記入スベシ

作品ニハ命題及出品人氏名ヲ記シタル紙片ヲ裏面ニ貼付スベシ

第十八條 本會事務所ニ於テ作品ヲ受理シタルトキハ直チニ受領書ヲ交付ス

第十九條 受理シタル作品ハ撤回スルコトヲ得ズ但シ審査員長ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第二十條 第一部第二部ノ作品ハ額面ト爲シ裱縁ヲ附ス等出品人ニ於テ適當ノ裝飾設備ヲ爲スベシ

第二十一條 出品人ハ陳列品ノ位置、配列等ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第二十二條 作品ノ荷造及運送費ハ總テ出品人ノ負擔トス但シ遠隔ノ地ニ在ル出品團體ニ對シテハ文部省ヨリ特ニ其ノ費用ノ一部ヲ補助スルコトアルベシ

第二十三條 文部省ハ作品ノ保管ニ關シ充分ノ注意ヲ爲スト雖モ紛失、毀損、其ノ他ノ損害ニ對シ一切責ニ任ゼズ

第二十四條 作品ノ撮影又ハ摸寫ハ出品人ノ承諾ヲ得且文部省ノ許可ヲ受クルニ非ザレバ之ヲ爲スコトヲ得ズ

前項ノ許可ヲ受ケタル者會場ニ於テ作品ノ撮影又ハ摸寫ヲ爲サントスルトキハ許可證ヲ掛員ニ提示シ其ノ指揮ヲ受カベシ

文部省ハ作品ヲ撮影若ハ摸寫シ又ハ之ヲ刊行スルコトアルベシ

第三章 鑑査及審査

第二十五條 鑑査及審査ノ方法ハ審査員長及各部ノ審査員ニ於テ之ヲ定ム

鑑査及審査ノ議事ハ之ヲ秘密トス

第二十六條 鑑査ヲ經タル陳列品ハ總テ

特選ノ査定ヲ受クルモノトス

第二十七條 鑑査及査査ノ結果ハ査査員

主任ヨリ之ヲ査査員長ニ報告スベシ

第二十八條 出品人ハ鑑査及査査ニ對シ

異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第四章 賣約及搬出

第二十九條 陳列品ハ本會事務所ニ於テ

其ノ賣買契約ヲ取扱フモノトス但シ開

會後五日間陳列品ノ賣買契約ヲ取扱ハ

ズ

第三十條 陳列品ヲ購買セントスル者ハ

代金ヲ添ヘテ本會事務所ニ申出ヅベシ

第三十一條 即時ニ代金ヲ支拂ハザルト

キハ手附ヲ以テ賣買契約ヲ爲スコトヲ

得手附ノ金額ハ代價ノ三分ノ一以上ト

ス 前項ノ買主ガ會期中ニ殘餘代金

ノ支拂ヲ爲サザルトキハ手附ハ之ヲ抛

棄シタルモノト看做ス但シ拋棄シタル

手附ハ當該出品人ノ所得トス

第三十二條 第三十條ニ依ル代金及第三

十一條第二項ニ依ル手附ハ展覽會終了

後拂渡ヲ爲スモノトス

第三十三條 賣買契約ヲ爲シタルトキハ

作品ニ其ノ旨ヲ貼紙ス

第三十四條 出品人ニ於テ陳列品ノ代價

ヲ變更セントスルトキハ本會事務所ニ

届出ヅベシ

第三十五條 出品人ニ於テ作品及代金受

領等ノ爲特ニ代理人ヲ置キタルトキハ

其ノ住所及氏名ヲ本會事務所ニ届出ヅ

第三十六條 陳列品ハ展覽會終了後三日

以內ニ出品人ニ於テ之ヲ搬出スベシ

前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ文部

省ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第三十七條 陳列品ノ搬出ニ決定シタル

作品以外ノモノハ展覽會開會後五日ヲ

經過シタル後十日間以內ニ出品人ニ於

テ之ヲ搬出スベシ

前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ文部

省ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第三十八條 陳列品中賣約済ノモノハ展

覽會終了後買主ニ於テ之ヲ搬出スベシ

前項ノ場合ニ於テハ代金受領證ヲ提出

シ自己ノ買主タルコトヲ證スルヲ要ス

第三十九條 展覽會終了後陳列品ノ搬出

運送等ニ關シ買主ノ依頼アルトキハ本

會事務所ハ買主ノ費用ヲ以テ之ニ應ズ

ルコトアルベシ

第五章 觀覽

第四十條 觀覽時間ハ開會中毎日午前九

時ヨリ午後五時迄トス但シ都合ニ依リ

之ヲ伸縮シ又ハ觀覽ヲ停止スルコトアル

ベシ

第四十一條 觀覽人ハ陳列品ニ觸ルルコ

トヲ得ズ

觀覽人ハ靜肅ヲ旨トシ且掛員ノ指揮ニ

從フベシ

第四十二條 觀覽人ニシテ秩序風俗ヲ紊

ルノ虞アリト認ムルモノハ入場ヲ禁ジ

又ハ退場セシムルコトアルベシ

紀元二千六百年奉祝美術展覽會

紀元二千六百年奉祝美術展覽會規則

第一章 總則

第一條 紀元二千六百年奉祝美術展覽會

ハ本規則ノ定ムル所ニ依リ文部省及紀

元二千六百年奉祝會ノ共同主催トシ、

内閣紀元二千六百年祝典事務局及東京

府ノ協贊ノ下ニ東京市上野公園内東京

府美術館ニ於テ之ヲ開催ス

第二條 本會事務所ハ文部省專門事務局

學藝課内ニ之ヲ置ク但シ昭和十五年九

月十六日ヨリ同十一月二十八日迄ハ之

ヲ會場内ニ置ク

第三條 本會ハ作品ノ種別ニ依リ之ヲ左

ノ四部ニ分ツ、

第一部 繪畫

第二部 繪畫(油繪、水彩畫、バステ

ル畫、素描、創作版畫等)

第三部 彫塑

第四部 美術工藝

第四條 本會ノ開會ハ之ヲ二期ニ分チ前

期(第一部、第三部)ハ昭和十五年十

月一日ヨリ同二十二日迄トシ、後期

(第一部、第四部)ハ同十一月三日ヨ

リ同二十四日迄トス

第五條 本會ニ關スル一切ノ事務ヲ處理

スル爲左ノ職員ヲ置ク

委員長 若干名

總務委員 若干名

委員 若干名

幹事 若干名

係員 若干名

前項職員ハ文部大臣並ニ紀元二千六百

年奉祝會長之ヲ委囑ス

第六條 委員ハ委員長ノ定ムル所ニ依リ

各部ノ委員長主任ハ委員長之ヲ指名ス

第七條 陳列スベキ作品ハ各部委員ニ於

テ之ヲ選定ス

第二章 出品

第八條 出品スベキ作品ハ自己ノ製作シ

タルモノニ限ル

故人ノ製作ニ依ルモノハ其ノ相續人ニ

於テ之ヲ出品スルコトヲ得

第九條 製作後五年以上ヲ經タルモノハ

之ヲ出品スルコトヲ得ズ

第十條 第三部ノ作品ニシテ原型製作者

ト實材製作者ト其ノ人ヲ異ニスルトキ

ハ原型製作者ヲ以テ其ノ出品人ト爲ス

第四部ノ作品ニシテ綜合製作ナルトキ

ハ其ノ代表製作者一名ヲ以テ出品人ト

爲ス但シ代表製作者ハ共同製作者ノ氏

名ヲ附記スルコトヲ得

第十一條 出品スベキ作品ハ同一人ニ付

各部共一點トス

第十二條 形狀表裝等ノ如何ニ拘ラズ同

一意匠ニ依レル一箇ノ作品ト認メ得ベ

キモノハ二箇以上ニ分離セルモノト雖

モ之ヲ一點ト看做ス

第十三條 同一意匠ニ依ラザル數箇ノ作

品ト雖モ一箇ニ合裝セルモノハ之ヲ一

點ト看做ス

第十四條 出品スベキ作品ノ大サハ左ノ

各號ニ依ル

一 第一部、第三部、第四部ハ隨意ト

ス

二 第二部ハ縱横二米以內(裝飾設備

ヲ含ム)トス

第十五條 作品ノ搬入受付期間ハ第二部

第三部ハ昭和十五年九月十六日より同十九日迄トシ、第一部、第四部ハ同十月十七日より同二十日迄トス受付時間ハ右期間内毎日午前九時ヨリ午後五時迄トス

第十六條 出品セントスル者ハ所定書式ノ申込書ト共ニ作品ヲ本會事務所ニ差出スベシ 故人ノ作品ヲ出品セントスルトキハ申込書中解説書欄ニ製作者ノ氏名及履歷ヲ記入スベシ

第十七條 (以下省略)

第三章 陳列作品ノ選定

第二十四條 陳列作品ノ選定方法ハ委員長及各部ノ委員ニ於テ之ヲ定ム選定ノ議事ハ之ヲ秘密トス

第二十五條 選定ノ結果ハ委員長主任ヨリ之ヲ委員長ニ報告スベシ

第二十六條 出品人ハ選定ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第四章 賣約及搬出(省略)

第五章 觀覽

第三十八條 昭和十五年十月一日ヲ前期招待日、同十一月三日ヲ後期招待日トシ、招待狀又ハ優待券ヲ所持スル者ノ觀覽ニ供シ其ノ翌日ヨリ一般公衆ノ觀覽ニ供ス

第三十九條 (以下省略)

貿易局工藝品輸出振興展覽會

從來開催され來つた商工省工藝展覽會は昭和十三年度第二十五回を重ね、又買

貿易局輸出工藝展覽會は第六回まで繼續されたが、十四年度より兩者を合併し新に貿易局工藝品輸出振興展覽會として第一回を開くことになつた。

貿易局工藝品輸出振興展覽會規程

昭和十四年八月二十五日
商工省告示第二百七號
昭和十六年
商工省告示三百六十五號改正

第一章 總則

第一條 工藝品ノ輸出振興ヲ圖ル爲毎年一回貿易局工藝品輸出振興展覽會ヲ開ク

前項ノ展覽會ノ會期、會場其ノ他ノ事項ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第一條ノ二 本會ニ左ノ二部ヲ置ク

第一部 機械的工藝品

第二部 手工的工藝品

第二條 出品物ハ工藝品ニシテ自己ノ製造若ハ加工シタルモノ又ハ自己ノ爲製造若ハ加工セシモノニ限ル

第三條 出品物ハ鑑査ニ合格シタルモノニ限り之ヲ陳列ス但シ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノニ付テハ鑑査ヲ行ハズシテ之ヲ陳列ス

一 工藝ニ關スル官公立ノ指導又ハ研究ノ機關(學校ヲ除ク)ノ出品ニ係ルモノ

二 審査委員又ハ本會、工藝展覽會若ハ貿易局輸出工藝展覽會ノ審査委員タリシ者ノ出品ニ係ルモノ

三 本會ニ於テ商工大臣賞ヲ授與セラレタルコトアル者ノ出品ニシテ當該

褒賞ヲ授與セラレタル出品ト同種ノモノ

四 貿易局輸出工藝圖案展覽會ニ於テ一等賞、二等賞又ハ三等賞ヲ授與セラレタル圖案ヲ試作シタルモノ

五 審査委員ノ推薦ニ係ルモノ

第四條 出品物ノ搬入及搬出ニ要スル費用ハ總テ出品人ノ負擔トス

第五條 出品物ノ亡失、毀損、汚染其ノ他ノ損害ニ對シテハ別ニ定ムルモノノ外ハ其ノ責ニ任ゼズ

第六條 本會ノ許可ヲ得ルニ非ザレバ出品物ヲ撮影又ハ摸寫スルコトヲ得ズ本會ハ出品物ヲ撮影若ハ摸寫シ又ハ之ヲ刊行スルコトアルベシ

第二章 出品

第七條 左ノ各號ノ一ニ該當スルモノハ出品スルコトヲ得ズ

一 本會、工藝展覽會、貿易局輸出工藝展覽會、其ノ他博覽會、共進會又ハ展覽會(本會ニ對スル出品ヲ豫選スル爲各地方ニ於テ開ク展覽會ヲ除ク)ニ陳列セラレタルコトアルモノ

二 風教ヲ害スルモノ

第八條 出品セントスル者ハ附屬様式ノ出品申込書ヲ貿易局ニ差出スベシ

出品申込書ノ差出期間及出品物ノ受理期間ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第九條 出品物ヲ受理シタルトキハ出品物受領證ヲ交付ス

第十條 鑑査不合格ノ通知アリタルトキハ出品人ハ遲滞ナク其ノ出品物ヲ搬出スベシ通知ヲ發シタル日ヨリ十日ヲ經

ルモ搬出セザルトキハ貿易局ニ於テ適宜之處分スルコトアルベシ

第十一條 出品人ハ出品物ノ陳列ノ位置配列等ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第十二條 陳列品ハ會期中之ヲ搬出スルコトヲ得ズ

第三章 鑑査及審査

第十三條 陳列品ハ總テ審査ヲ受クベキモノトス但シ第三條第一號乃至第四號ニ該當スルモノニ付テハ審査ヲ行ハズ

第十四條 鑑査及審査ハ商工大臣ノ任命又ハ囑託スル審査委員之ヲ行フ

第十五條 商工大臣ハ審査委員中ヨリ審査委員長一人ヲ命ズ

審査委員長ハ鑑査及審査ノ事務ヲ統理シ其ノ成績ヲ貿易局長官ヲ經由シ商工大臣ニ報告ス

第十六條 出品物鑑査ノ結果ハ之ヲ出品人ニ通知ス

第十七條 鑑査又ハ審査ニ對シテハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第四章 褒賞

第十八條 審査ノ結果優等ト認メタル出品物ノ出品人ニ對シ褒賞ヲ授與ス

第十九條 褒賞ハ左ノ四等級トス

一等賞

二等賞

三等賞

褒狀

第二十條 第十八條ノ規定ニ依リ褒賞ヲ受ケタル者ニ對シ褒賞ノ外賞金ヲ授與スルコトアルベシ

五

前項ノ賞金ニ關シテハ其ノ都度之ヲ告示ス

第二十一條 第十八條ノ規定ニ依リ褒賞ヲ受ケタル者ノ中特ニ優等ト認メタル

出品物ノ出品人一人ニ對シ褒賞又ハ賞金ノ外商工大臣賞ヲ授與スルコトアル

第二十二條 受賞ハ之ヲ拒ムコトヲ得ズ

第五章 外國ニ於ケル陳列會

第二十三條 商工大臣ハ審査委員ニ諮リ

陳列品ノ一部ヲ選定シ政府又ハ其ノ指定スル團體ガ外國ニ於テ開催シ又ハ參加スル陳列會展覽會又ハ博覽會ニ本會

會期終了後出品人ヲシテ出陳セシムルモノトス

第二十四條 出品人ハ前條ノ出陳ヲ拒ム

コトヲ得ズ

第二十五條 第二十三條ニ依リ選定セラ

レタル陳列品ハ本會會期終了後政府ニ於テ之ヲ保管スル場合ノ外政府ノ指定

スル團體ニ之ヲ引渡スモノトス

第二十六條 第二十三條ノ陳列會展覽會

又ハ博覽會ノ名稱、開催地其ノ他陳列會、展覽會又ハ博覽會ニ關シ必要ナル事項ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第六章 雜則

第二十七條 陳列品ハ非賣品及第二十三

條ニ依リ選定セラレタルモノノ外購買ノ申込ニ應ズルモノトス

陳列品ノ購買申込ハ本會ニ於テ之ヲ取

扱フ出品人ニ於テ本會ヲ經ズシテ陳列品ノ賣買契約ヲ爲サントストキハ本

會ノ承認ヲ受クベシ

第二十八條 陳列品ヲ購買セントスル者

ハ其ノ旨ヲ本會ニ申出デ代金又ハ手附金ヲ支拂フベシ

前項ノ手附金ハ代價ノ三分ノ一以上トス

手附金ヲ納付シタル買主本會ノ閉會後

十五日以内ニ殘額代金ヲ支拂ハザルト

キハ手附金ハ之ヲ拋棄シタルモノト看

做シ當該出品人ノ所得トス

第二十九條 出品人又ハ買主ハ陳列品ヲ

本會ノ閉會後指定ノ期間内ニ搬出スベ

シ前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ貿易局ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアル

出品人又ハ買主陳列品ヲ搬出セントス

ルトキハ出品物受領證又ハ代金領收證ヲ差出スベシ

(附屬様式) 以下略

第三回貿易局工藝品輸出振興展覽會ノ

會期會場出品申込期日等ニ關スル告示

昭和十六年 昭 和 十 六 年 商上省告示第三百六十六號

記念京都美術館内 自七月二十六日

至八月一日(七日間)

二 名古屋會場 名古屋市中區南大津

通二丁目 株式會社松坂屋内 自八

月十三日 至八月十九日(七日間)

三 省略

四 出品物ノ種類

イ 陶磁器及硝子製品

ロ 漆 器

ハ 金屬製品

ニ 染織物及其ノ製品(刺繡、編組物

ヲ含ム)

ホ 木竹製品及其ノ他ノ工藝品

五 貿易局工藝品輸出振興展覽會規程第

二十條ノ規定ニ依リ賞金ノ金額左ノ如

シ

品名、箇數、價格及出品人住所氏名ヲ

記載シタル荷札一葉ヲ同封スベシ

組合セ品ニハ各箇毎ニ必ズ當該番號及

出品人氏名ヲ記載シタル小札ヲ附スベ

シ

九 出品申込書提出後出品物ノ變更ハ之ヲ

許サズ但シ事情已ムヲ得ザル場合ニ於

テ豫メ承認ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在

ラズ

出品申込書提出後出品ヲ中止セントス

ル場合ハ運滞ナク之ヲ貿易局第一部歐

米課ニ届出ヅベシ

十 出品物及出品人ノ會場ヘノ往復ニ對

シテハ國有鐵道ニ於テ運賃割引ノ特典

アルヲ以テ必要ノ向ハ貿易局第一部歐

米課ニ對シ割引證ノ交付ヲ請求スベシ

十一 各會場ニ於ケル初日ハ招待日トス

十二 陳列品ノ購買申込ハ六月二十日ヨ

リ受付ケ賣約ハ申込順ニ依ル

十三 大阪會場、京都會場及名古屋會場

ニ於テ展示スル爲移送スル場合ニ於テ

ハ左ノ條件ニ依ルモノトス

イ 移送ノ荷造費及運搬費ハ貿易局之

ヲ負擔ス

ロ 移送ノ爲生ジタル損害ニ付テハ貿

易局之ガ賠償ノ責ニ任ゼズ但シ事情

酌量スベキモノアリト認メタル場合

ニ於テハ貿易局ニ於テ相當ト認ムル

程度ノ賠償ヲ爲スコトアルベシ

十四 出品物又ハ賣約品ハ會期終了後左

ノ條件ニ依リ之ヲ發送シ又ハ直接引渡

スモノトス

イ 發送スル場合ニ於テハ荷造費及運

搬費ハ出品人又ハ買主ノ負擔トス
ロ 直接引取ヲ希望スル場合ニ於テハ
東京又ハ名古屋ノ別ヲ出品申込書又
ハ購買申込書ニ記載スルモノトス

十五 貿易局工藝品輸出振興展覽會規程
第二十三條ノ規定ニ依リ選定セラレタ
ル陳列品ハ社團法人日本輸出工藝聯合
會ガ海外ニ於テ開催スル日本工藝品陳
列會ニ左ノ條件ニ依リ出陳セシムルモ
ノトス

イ 移送ノ荷造費、運搬費其ノ他ノ經
費ハ社團法人日本輸出工藝聯合會之
ヲ負擔ス
ロ 出品物ノ亡失其ノ他ノ損害ニ付テ
ハ社團法人日本輸出工藝聯合會之ガ
賠償ノ責ニ任ズ

ハ 出品物ハ購買ノ申込ニ應ズルモノ
トシ購買申込ハ社團法人日本輸出工
藝聯合會ニ於テ之ヲ取扱フモノトス
陳列會終了後出陳物又ハ其ノ賣却代
金ハ東京ニ於テ出品人ニ發送シ又ハ
直接引渡スモノトス

發送スル場合ニ於テハ爲替料金、荷
造費及運搬費ハ社團法人日本輸出工
藝聯合會ノ負擔トス

第三回同展覽會審査員

〔委員長〕貿易局長官石黒武重〔委員〕藤
島亥治郎、霜島正三郎、豊田勝秋、六角
注多良、和田三造、高村豊周、山崎覺太
郎、秋月透、國井喜太郎、太田誠二、長
島喜三、飯野逸平、河井寛次郎、川勝堅
一、各務鐵三、龍村平藏、大隅爲三、山

脇巖、明石國助、淺見五郎助、北原千祿
鳥野新太郎

貿易局輸出工藝圖案展覽會

貿易局輸出工藝圖案展覽會規程

昭和十四年四月
商上省告示第八十號

第一章 總 則

第一條 輸出工藝品圖案ノ改善進歩ヲ圖
ル爲毎年一回貿易局輸出工藝圖案展覽
會ヲ開ク

本會ニ左ノ二部ヲ置ク
第一部 一般輸出工藝品圖案

第二部 特定地向輸出工藝品圖案

展覽會ノ會期會場其他ノ事項ハ其ノ都
度之ヲ告示ス

第二條 出品物ハ輸出工藝品圖案ニシテ
自己ノ考案シタルモノ又ハ自己ノ爲考
案セシメタルモノニ限ル

第三條 出品物ハ鑑定ニ合格シタルモノ
ニ限り之ヲ陳列ス但シ左ノ各號ノ一ニ
該當スルモノニ付テハ鑑定ヲ行ハズシ
テ之ヲ陳列ス

一 工藝ニ關スル官立ノ指導又ハ研究
機關(學校ヲ除ク)ノ出品ニ係ルモノ

二 審査委員又ハ審査委員タリシ者ノ
出品ニ係ルモノ

第四條 出品物ノ搬入及搬出ニ要スル費
用ハ總テ出品人ノ負擔トス

第五條 出品物ノ亡失毀損汚染其ノ他ノ
損害ニ對シテハ其ノ責ニ任ゼズ

第六條 本會ノ許可ヲ得ルニ非ザレバ出
品物ヲ撮影又ハ摸寫スルコトヲ得ズ

本會ハ出品物ヲ撮影若ハ摸寫シ又ハ之
ヲ刊行スルコトアルベシ

第二章 出 品

第七條 左ノ各號ノ一ニ該當スルモノハ
出品スルコトヲ得ズ
一 本會其ノ他博覽會、共進會又ハ展
覽會ニ陳列セラレタルコトノアルモ
ノ(但シ本會ニ對スル出品ヲ豫選ス
ル爲各地方ニ於テ開ク展覽會、品評
會ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ)

二 風教ヲ害スル虞アルモノ

第八條 出品セントスル者ハ附屬様式ノ
出品申込書ヲ貿易局ニ差出スベシ

第九條 出品物ヲ受領シタルトキハ出品
物受領證ヲ交付ス

第十條 鑑定ニ不合格ノ通知アリタルトキ
ハ出品人ハ遲滞ナク其ノ出品物ヲ搬出
スベシ通知ヲ發シタル日ヨリ二十日ヲ
經ルモ搬出セザルトキハ貿易局ニ於テ
適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

第十一條 出品人ハ出品物ノ陳列ノ位置
配列等ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得
ズ

第十二條 陳列品ハ開會中之中ヲ搬出スル
コトヲ得ズ

第十三條 陳列品ハ總テ審査ヲ受クベキ
モノトス但シ第三條各號ノ一ニ該當ス
ルモノニ付テハ審査ヲ行ハズ

第十四條 鑑定及審査ハ商工大臣ノ任命
又ハ囑託スル審査委員之ヲ行フ

第十五條 商工大臣ハ審査委員中ヨリ審
査委員長一名ヲ命ズ

第十六條 審査委員長ハ鑑定及審査ノ事務ヲ統理
シ其ノ成績ヲ貿易局長官ヲ經由シ商工
大臣ニ報告ス

第十七條 出品物鑑定ノ結果ハ之ヲ出品
人ニ通知ス

第十八條 審査ノ結果優等ト認メタル出
品物ノ考案者ニ對シ褒賞ヲ授與ス

第十九條 褒賞ハ左ノ四等級トス
一 等賞
二 等賞
三 等賞

第二十條 第十八條第一項ノ規定ニ依リ
褒賞ヲ受ケタル者ニ對シ褒賞ノ外賞金
ヲ授與スルコトアルベシ

第二十一條 第十八條第一項ノ規定ニ依
リ褒賞ヲ受ケタル者ノ中特ニ優等ト認
メタル出品物ノ考案者一人ニ對シ褒賞
又ハ賞金ノ外商工大臣賞ヲ授與スルコ
トアルベシ

第二十二條 受賞ハ之ヲ拒ムコトヲ得ズ
第二十三條 第十八條第一項ノ規定ニヨ
リ一 等賞、二 等賞又ハ三 等賞ヲ授與セ

ラレタル者ハ當該圖案ヲ試作シ之ヲ貿易局長官ノ指定スル展覽會ニ出品スベシ

前項ノ考案者ニシテ前項ノ出品ヲ爲サザルモノハ貿易局長官ニ其ノ指定スル期日迄ニ事由ヲ具シ其ノ旨届出ズベシ

第二十四條 前條ノ場合ニ於テ考案者出品ヲ爲サザルモノト認メタルトキハ貿易局ハ其ノ指定スル者ニ當該圖案ヲ試作セシメ之ヲ展覽會ニ出品セシムルコトアルベシ

前項ノ場合ニ於テハ考案者又ハ出品人ハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第二十五條 第二十三條及前條第一項ニ於テ考案者トアルハ考案者出品人ニ非ザル場合ニ於テハ之ヲ當該圖案ノ出品人トス

第五章 雜則

第二十六條 陳列品ハ非賣品及第十八條ノ規定ニ依ル受賞(一等賞、二等賞又ハ三等賞ニ限ル)ニ係ルモノノ外購買ノ申込ニ應ズルモノトス

陳列品ノ購買申込ハ本會ニ於テ之ヲ取扱フ

第二十七條 陳列品ヲ購買セントスル者ハ其ノ旨ヲ本會ニ申出デ代金又ハ手附金ヲ支拂フベシ

前項ノ手附金ハ代價ノ三分ノ一以上トス

手附金ヲ納付シタル買主本會ノ閉會後十五日以内ニ殘額代金ヲ支拂ハザルトキハ手附金ハ之ヲ抛棄シタルモノト看做シ當該賣主ノ所得トス

第二十八條 出品人又ハ買主ハ陳列品ヲ本會ノ閉會後指定ノ期間内ニ搬出スベシ

前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ貿易局ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

出品人又ハ買主陳列品ヲ搬出セントスルトキハ出品物受領證又ハ代金領收證ヲ差出スベシ

(附屬様式) 以下省略
第三回貿易局輸出工藝圖案展覽會ノ會期、會場、出品申込期間、賞金等ニ關スル告示

昭和三十五年七月商工省告示第三百三十六號

一 會期 自昭和十六年十月一日至同 年十一月十四日

二 會場及展示期間

イ 東京會場 東京市日本橋區通二丁目株式會社 高島屋東京支店內 自十月一日 至十月五日(五日間)

ロ 名古屋會場 名古屋市西區御幸本町通 愛知縣商工館内 自十月十六日 至十月二十日(五日間)

ハ 京都會場 京都市岡崎公園 京都市勸業館内 自十月三十日 至十一月三日(五日間)

ニ 大阪會場 大阪市東區内本町橋詰町 大阪府立貿易館内 自十一月十日 至十一月十四日(五日間)

三 省略

四 貿易局輸出工藝圖案展覽會規程第一

條第二項ノ特定地左ノ如シ

イ アルゼンチン

ロ ブラジル

五 出品物ハ左ニ掲グル種類及品種ノモノトス

(一) 服飾用品(イ 染織物及布帛加工品、ロ 裝身具、ハ 携帶品、ニ 其ノ他ノ服飾用品)

(二) 家庭用品(イ 飲食器、ロ 化粧用具、ハ 裁縫用具、ニ 其ノ他ノ家庭用具)

(三) 室内調度品(イ 家具、ロ 照明器、ハ 文房具、ニ 喫煙具、ホ 其ノ他ノ室内調度品)

(四) 趣味遊戯具(イ 玩具、ロ 運動用具、ハ 趣味用品、ニ 園藝用品、ホ 其ノ他ノ趣味遊戯具)

(五) 其ノ他ノ工藝品

六 貿易局輸出工藝圖案展覽會規程第二

十條ノ規定ニ依ル賞金ノ金額左ノ如シ

一等賞 二千圓

二等賞 千圓

三等賞 三百圓

賞狀 百圓

一等賞ニ當ラスベキ受賞者無キ場合ハ其ノ賞金ヲ二等賞ニ充當スルコトアルベシ

七 出品人ハ出品物ノ種類毎ニ別紙ニ認メタル出品申込書ヲ昭和十六年九月三日ヨリ同年九月十三日迄ニ貿易局第一部歐米課ニ差出スベシ

八 出品物ノ受理期間ハ昭和十六年九月十六日ヨリ同年九月十七日迄トス

出品物ヲ搬入セントスル者ハ前項ノ期間内毎日午前九時ヨリ午後四時迄ニ東京市赤坂區溜池町一番地三會堂内本會事務所ニ搬入スベシ

出品申込書ノ差出ナキ搬入物、驛留荷物又ハ送料未納ノモノハ之ヲ受理セズ

九 出品物ニ對スル諸注意

イ 出品物ハ畫用紙又ハ強靱ナル紙ヲ使用シ其ノ大サハ日本標準規格A列零番(841×1180mm)トシ額縁、表裝等ヲ要セズ但シ用紙ハA列零番ノ代リトシテ畫用紙菊判又ハ畫用紙全紙ヲ夫々使用スルモ妨ゲナシ

ロ 圖案ハ原寸又ハ適當ノ縮尺ヲ用ヒ描法及著色ハ自由トス

ハ 用材、仕上加工法其ノ他ニ特記スベキ必要アルモノハ説明書其ノ他ヲ添付スルコト

ニ 出品物ハ考案者一人ニ付五點以内トシ詳細圖ハ一點ニ付成ルベク五枚以內トス

ホ 圖案ハ正面圖、平面圖及見取圖ヲ要ス

ヘ 雛型、模型又ハ立體圖案ハ之ヲ受理セズ

ト 出品人ハ出品番號並ニ住所及氏名ヲ圖案ノ裏面ニ記載スベシ

十 出品人又ハ考案者ノ會場ヘノ往復ニ對シテハ國有鐵道ニ於テ運賃割引ノ特典アルヲ以テ必要ノ向ハ貿易局第一部歐米課ニ對シ割引證ノ交付ヲ請求スベシ

第三回同展覽會審査委員

〔委員長〕貿易局長官石黒武重〔委員〕
向井寛三郎、宮下孝雄、津田信夫、和田三造、水谷武彦、松田權六、水町和三郎、國井喜太郎、宇都宮誠太郎、濱田象二、堀口捨巳、狩野秀峰、木下勝次郎、日野厚、芹澤銚介

美術研究所

東京市下谷區上野公園
電下谷三〇八七

當所は故黒田清輝子爵の遺志に基きその遺産を以て開始されたもので、昭和五年開設の準備成ると共に同子爵遺言執行人より建物、諸設備及事業の一切を政府に寄附移管し、同年六月政府は之を帝國美術院附屬として設置した。昭和十年六月帝國美術院改革に伴ひ新に美術研究所官制を制定、文部省所管、帝國美術院に附置され、次で昭和十二年六月官制改正を見、文部大臣直接監督の下に獨立して既定の事業を進めることとなつた。その目的は美術に關する事項の學術的調査研究に在り、傍ら美術に關する研究資料を蒐集して美術圖書館的な貢獻をなさんとし、又調査研究の結果を出版、展覧、講演等に依つて發表せんとするものである。現在著手しつゝある事業は大略次の如くである。

一、研究資料蒐集

美術品の寫真其の他の複製、模寫模造等の標本、圖書雜誌其の他の資料
一、古美術に關する調査研究

東洋及日本美術に關する美術史的調査研究、東洋美術總目錄、落款印譜、東洋美術家辭典、美術關係史料、美術關係文獻目錄等の編纂

一、明治大正時代美術の調査研究
明治大正美術史の編纂

一、現代美術に關する調査研究
現代美術及美術界に關する調査、日本美術年鑑の編纂

一、其他美術行政及教育並に美術の技法及材料に關する調査研究
一、刊行物頒布

「美術研究」月刊、「日本美術年鑑」、「日本美術資料」毎年一回刊行、其他他臨時「美術研究資料」、「研究報告」を刊行頒布する。

一、研究資料閱覽及展覧
研究者の爲に當所蒐集の圖書、寫眞、其の他の研究資料の閱覽を許可する、又臨時陳列室に於て特殊なる資料を展覧して一般に觀覽せしめる

一、黒田清輝作品陳列
所内に黒田子爵記念室を設け、其の作品を陳列して（定時毎週木曜日午後）に公開する。

〔所長〕矢代幸雄〔所員〕矢代幸雄、和田新、隈元謙次郎〔助手〕中川千咲、豐岡益人、倉田平吉〔書記〕木下龍也〔囑託〕田中喜作、菅沼貞三、大給近清、中根勝、岩淵幸左衛門、渡邊一、梅津次郎、小高根太郎、白畑よし、林眞彦、石澤正男、丸尾彰三郎、富永憲一、堀井三友、田中豐藏、望月信成、福井利吉郎、兒島

喜久雄、山田智三郎、須賀利雄、筒崎謙齋、吉川逸治、守中裕幸、大串純夫、秋山光利、正木篤三

美術研究所官制

昭和十年六月一日勅令第四百四十八號
改正昭和十二年勅令第二百八十一號

第一條 美術研究所ハ文部大臣ノ管理ニ屬シ美術ニ關スル事項ノ調査研究ヲ掌ル

第二條 (削除)

第三條 美術研究所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長 專任三人 奏任

助手 專任三人 判任

書記 專任一人 判任

第四條 所長ハ所員ノ中ヨリ文部大臣之ヲ補ス

第五條 所員ハ所長ノ命ヲ受ケ所務ヲ掌ル

第六條 助手ハ上司ノ指揮ヲ承ケ所務ニ從事ス

第七條 書記ハ上司ノ指揮ヲ受ケ庶務ニ從事ス

附 則
本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

東京美術學校

東京市下谷區上野公園
電下谷八〇二〇—二

東京美術學校は明治二十年十月勅令を

以て設置せられ、文部省専門學務局長濱尾新が學校長事務取扱を命ぜられ、同二十二年二月授業を開始した。同二十三年濱尾新に代つて岡倉覺三學校長となつたが同三十一年退官し、彼と共に教授橋本雅邦以下多數の教授、助教授が辭職した。高嶺秀夫、久保田鼎に次いで同三十四年正木直彦學校長となり、昭和七年和田英作これに代り、次いで同十一年には芝田徹心學校長に任ぜられ、同十五年澤田源一學校長に任ぜられた。

本校の學科を本科(豫科、研究科を置く)と圖書師範科(研究科を置く)に分ける。尙選科、聽講生の設置あり。

(本科)日本畫科、油畫科、彫刻科(塑造部、木彫部)工藝科(圖案部、彫金部、鍍金部、鑄金部、漆工部)及び建築科に分つ。修業年限四年。入學資格豫科修了者。授業料年額八十圓。在學中特定の學科目を修了したる者に中等教員無試験檢定の特典あり。

(豫科)修業年限一年。入學資格中學校四年修了者、高等學校尋常科修了者、高等學校尋常科入學資格試驗合格者。授業料年額八十圓。實技及學科の入學試験を行ふ。檢定料五圓。

(圖書師範科)修業年限三年。入學資格中學卒業程度。授業料を徴收せず。入學試験を行ふ。檢定料五圓。

(研究科)實技、學術の二部に分つ。修業年限三年以内。入學資格實技は本校卒業後二年を経過せず且卒業成績八十點以上の者、學術は本校卒業業者。授業料年額

五十圓。

〔選科〕本科入學資格を有せざる者にして本科各科の實技のみを學習せんとする者を銓衡の上入學を許可す。近年募集せず。授業料年額八十圓

〔聽講生〕聽講料一學年間に科目に付二十圓、一科目を増す毎に十圓。

昭和十六年四月末に於ける各科豫科及師範科一年の生徒数は左の如くである。

日本畫科 二一名
油畫科 三三名
彫刻科塑造部 一六名

同 木彫部 七名
工藝科圖案部 一四名
同 彫金部 三名

同 鍛金部 四名
同 鑄金部 六名
同 漆工部 六名

建築科 七名
圖畫師範科 二〇名

又本校には文庫があつて圖書標本を收藏し、陳列館及正木記念館があつて諸種の展覧を試み、何れも生徒學習の参考に資する。

〔校長〕澤田源一
〔名譽教授〕和田英作

〔教授〕藤島武二、結城貞松、森井健介、多賀谷健吉、六角注多良、佐々木卓、小林萬吾、津田信夫、清水顯藏、矢代幸雄、建昌彌一郎、朝倉文夫、北村西望、南薰造、和田三造、香取秀治郎、石田英一、田邊至、森田龜之助、小泉勝爾、海野清、關野金太郎、高村豊周

廣川松五郎、松田義之
〔生徒主事〕佐々木卓、森田龜之助、多賀谷健吉、北村西望、南薰造
〔助教〕松垣蠶雄、水谷武彦、松田權六、山田廉、岡四郎、森田武、山崎覺太郎、金澤庸治、當岡文龜、伊原宇三郎、丸山義男、西田正秋、羽下修三、深瀬嘉臣、内藤春治、八田辰之助、磯矢陽

〔講師〕杉田精二、大澤三之助、村田良策、澤口悟一、小場恒吉、齋藤幸晴、岡田捷五郎、鎌倉芳太郎、正木篤三、小塚新一郎、白川一郎、鈴川信一、羽野嶺三、入谷昇、蒔田宗次、石澤正男、矢澤貞則、川崎隆一、沼田勇次郎、富永惣一、平野茂、關野克、加藤鬼頭太、大峽秀榮、新規矩男、豊田朝一郎、石橋啓十郎、原田謹次郎、田邊孝次、矢崎好幸、中村傳治、吉田五十八

東京高等工藝學校

東京市芝區新芝町
電三田二五六八

本校は大正十年十二月の設立に係り、松岡壽初代の校長に任せられ翌十一年開校された。同十二年吉武榮之進代つて校長となる。同十三年東京高等工業學校附屬職工徒弟學校を本校に移管、附屬工藝實業學校として設置した。同十四年松岡壽再び校長となり、翌年東京美術學校寫真科を本校に移管し寫真部として設置した。昭和三年安田祿造、同十六年鈴木京平が校長に任せられて現在に及ぶ。

本校の學科を工藝圖案科、造型工藝部、金屬工藝科、精密機械科、木材工藝科及印刷工藝科(寫真部を含む)に分ち、他に、研究生、選科生、聽講生、木材工藝別科を設置す。
尙昭和十二年十月一日より工業學校實習指導員養成科を設置した。
〔本科〕修業年限三年。入學資格中學校卒又は專檢合格者。授業料年額八十圓。
〔研究生〕修業年限二年以内。入學資格本校又は實業專門學校卒業者。授業料年額八十圓。
〔選科生〕修業年限三年以内。入學資格工業學校、中學校卒業者は一年以上、學歴なき者は五年以上志望學科の工藝に従事せる者。授業料年額八十圓。
〔聽講生〕聽講料一學科一學期十圓
〔木材工藝別科〕修業年限二年。入學資格中等程度工業學校卒業者、又は中學校卒業者(作業科工作修得)授業料年額五十圓。
〔工業學校實習指導員養成科〕修業年限六ヶ月。入學資格縣立工業學校機械科卒又は中等學校卒業後六ヶ月間以上實地經歷を有する者。學費は毎月金四十圓宛補給せられ授業料は徴收せず。
本科生徒數

工藝圖案科 六二名
造型工藝部 一九名
金屬工藝科 七九名
精密機械科 二一九名
木材工藝科 七四名
印刷工藝科 六三名

寫真部 三〇名
木材工藝別科 二九名
工業學校實習指導員養成科 三三名
〔校長〕鈴木京平
〔生徒主事〕教授 近藤春文
〔工藝圖案科〕教授 宮下孝雄、築島棟吉、杉山豊祐、助教 渡邊春男、塚田章、講師 日野厚、藏田周忠、渡邊素舟、石本光太郎
〔造型工藝部〕教授 畑正吉、寺畑助之丞、助教 中山保雄、囑託 西田正秋
〔金屬工藝科〕教授 豊田勝秋、益田森治、講師 瀨谷準造、諏訪常次郎、神矢敦親、富田久三郎、中原益次郎
〔精密機械科〕教授 竹屋金太郎、永澤謙三、橋本宇一、長谷川一郎、助教 中野喜八郎、川崎弘司、講師 淺川權八、山田幸五郎、佐々木達次郎、富田久三郎、原田幸夫、藤木久男、大久保謙、大角亨
〔木材工藝科〕教授 木楡想一、西海幸一郎、野村茂治、助教 鈴木太郎、講師 廣瀬誠一、猪熊泰三、佐田辰夫
〔印刷工藝科〕教授 鎌田彌壽治、伊東亮次、岡利亮、助教 如保之、星野幸衛、講師 矢野道也、矢野矢、大江恒吉、廣瀬義太郎、飯島俊一郎、佐伯祐二、菊池實
〔寫真部〕教授 鎌田彌壽治、伊東亮次、岡利亮、久米福衛、助教 畑保之、講師 矢野道也、廣瀬義太郎
〔木材工藝別科〕教授 木楡想一、築島棟吉、助教 渡邊力、講師 佐田辰夫

(共通學科) 教授 江崎歡藏、岡田楠次郎、和田香苗、馬場秋次郎、村尾力太郎、助教 山本德三、鈴木豐次郎、刑部人、講師 阿部三郎太郎、齋藤茂三郎、鹿島英二、三浦太郎、松野喜内、三橋逢吉、土井義信

京都高等工藝學校

京都市左京區松ヶ崎御所海道町
電上五七、五〇三、五七七〇

明治三十五年三月設置。中澤岩太初代校長となり、大正七年七月鶴巻鶴一之に代り更に大正十五年四月、村上宇一校長に任せられ現在に至る。

(學科) 色染科、機織科、圖案科、窯業科を置く。尙昭和十四年四月より精密機械科、人造纖維科の二學科を新設した。(本科) 修業年限三年。入學資格中學校卒、實業學校卒及其と同程度。授業料月額八十圓。

(研究生) 本校又は他の實業専門學校卒業者が既修の學科目を更に研究しようとする場合詮議の上二箇年以内在學を許可されるもの。授業料月額八十圓。

(選科生) 修業年限三年以内。授業料一科目に付月額十圓。

(校長) 村上宇一(名譽教授) 中澤岩太 會田龍雄(教授) 村上宇一、本野精吾、古城鴻一、霜島正三郎、小島幸三郎、目賀田廉一、山上操、藤野清久、向井寛三郎、田中隆吉、平岡尙、青武雄、荒木長治、湯淺南海男、山田隆、高辻幸之助、鳴智惠人、河村正義、藤田畔二、青木一

郎、淺尾健次、廣野治助、菊池武勝、齋藤義一、脇村利一郎、立入明、實藤玄、町田誠之(助教) 田邊武夫、飯田秀夫、端與之助、山崎實、美和正忠、平島剛、田中三郎、富樫正三、淺野羅雄、岡本恒彦、寺前皓介、白木小三郎、山本晃久

本科生徒數

- 色染科 七九名
- 機織科 八四名
- 圖案科 一〇一名
- 窯業科 八四名
- 精密機械科 一七四名
- 人造纖維科 九一名

京都市立繪畫專門學校

京都市東山區今熊野日吉町 電話一五八

明治四十二年三月創立。同校は「専門學校令」據り日本畫及圖案ヲ研究セントスル者又ハ圖畫教員ヲラントスル者ニ必要ナル教育ヲ施ス」ことを目的とする。初め京都市立美術工藝學校の西隣に校舍を營んだが大正十五年六月現地に移轉した。創立以來多數の日本畫家を輩出して今日に及ぶ。

(學科) 日本畫科、圖案科に分ち各科に豫科及本科を置き、別に研究科及選科を置く。

(豫科) 修業年限日本畫科二年。圖案科一年。入學資格中學校卒、專檢合格者。授業料月額五十圓(京都市内に居住せざる者は六十七圓五十錢)

(本科) 修業年限日本畫科、圖案科共三

年。入學資格同校豫科修了者。授業料豫科に同じ。

(研究科) 在學期間五年。入學資格同校各學科又は他の専門學校卒業者。授業料月額四十五圓(京都市内に居住せざる者は六十二圓五十錢)

(豫科) 入學資格高等小學卒業者及之と同等以上の學力を有する者。授業料月額四十圓(京都市内に居住せざる者は五十五圓五十錢)

(校長) 川村曼舟(教授) 入江波光、宇田萩郎、案本一洋、中村大三郎、石崎光瑤、榑原紫峰、宇都谷誠太郎、中井宗太郎、塩津眞二(助教) 山口華揚、上村松篁、松元道夫、池田遙村、三宅風白、大橋是(講師) 太田喜二郎、森守明、岸田宗三郎、福永俊吉、猪熊淺磨、久世欽十郎、河野通一、清水光繁、千野光茂、伊藤壽一、島津榮一

京都市立美術工藝學校

京都市東山區今熊野日吉町 電話一五八

明治十三年七月の創立で、元京都府畫學校と稱し本邦最初の畫學校である。初め普通畫學のみの教授をしたが、同二十一年應用畫學科を併置したのを初めに同二十七年には校則を改正、繪畫科、彫刻科、工藝圖案科を置くに至り、同三十四年には名稱を京都市立美術工藝學校と改めた。大正十五年現地に校舍を移轉した。同校は工業學校規程に據り、美術及び美術工藝に従事せんとする者に必要な

技能を授くるを目的とし、學科を繪畫科、圖案科、彫刻科、漆工科の四科とし修業年限を五箇年とす。入學資格は國民學校初等科卒とし、授業料は京都市内在住者は一箇年四十五圓其の他は六十圓五十錢である。

(校長) 川村曼舟(實習科受持) (繪畫科) 入江波光、勝田哲、登内微笑、西村卓三、多田敬一、小宮信一、辻字佐雄、前田萩郎、猪原大華(圖案科) 千熊宇平、山鹿清華、田村春曉、山田江秀、片山行雄、丸毛又三郎、田ノ口青光、太田喜二郎(彫刻科) 松田尙之、矢野判三、建昌大夢、北村西望、太田喜二郎

工藝指導所

東京市豊島區一丁目 電大塚七八六三―五
大阪市西區江ノ子島上ノ町 電土佐堀六六八〇
仙臺支所 仙臺市二十人町通 電三七六〇

本所は商工省所管に屬し、我國固有の工藝を改善し之が全國工業化を圖り現代民衆生活の要求を合致せしむる」目的を以て昭和三年設置された。當初商工省内に假事務所を設けたが同年十一月仙臺市に建築中の廳舎竣工と共に事務所を移轉し事業を開始したが其の後事業の進展に伴ひ東京に於ける調査研究の必要を認め昭和八年五月商工省内に本所出張員事務室を設け當時所員を駐在せしむる事となつた。昭和十二年八月には官制の改正に依り、「木工及金屬工品」を「工藝品」に改め職員を増員し、必要と認められる

地に支所を置き事務を分掌せしむることとなつた。

尙輸出工藝雜貨改善に關する調査研究並に關西支所設置準備事務取扱の爲大阪府工業獎勵館内に當所出張員事務室を設け昭和十四年一月より事務を開始しつゝあつたが、同年八月大阪市江の子島に關西支所を設置され、昭和十五年十一月には職員を増員と共に、商工省告示を以て工藝指導所本所を東京市に移轉、又仙臺市に東北支所を設置された。東京本所は企劃部、研究部、指導部、庶務課の三部一課を置き、關西東北兩支所と共に三位一體となり一層本邦産業工藝の積極的改善指導に邁進現在に至つた。

一 調査研究

主として輸出向工藝品に關する調査代用原材料並代用品の基本的條件の調査、工藝品の原材料、技術、意匠、工具、機械に關する技術的調査、國內市場商品、生産、需要現況の調査、内外優良參考品の蒐集

二 試験研究

工藝品の基礎的改善のために必要なる一切の技術的研究、市販賣品改善に必要な各種試験並びに實驗

三 試作研究

研究試驗實驗に必要な各種モデルの試作、その結果に基き各種工藝品を試作し、工業的生産のために規範的原型を提供す

四 講習、講演、審鑑査その他の實地指

導、當所の指導方針、試験研究、調査の結果に基き、講習、講演會を開催し又は申請により地方講習、講演會又は審鑑査のため職員を派遣し、實地指導をなす

五 地方工業化促進

當所の研究、試作の成果が工藝品の改善發達に對し、基礎的一般的なる場合は全國の普及を圖り、又特種、又は地方的なるものを目標とせる場合は、當該指導機關に移讓實施を促し全國的指導及全國的地方工業化を圖る。

六 製作加工圖案調製應需

依頼により工藝品の製作加工、又は意匠圖案の調製に應じ、又當所の研究に基き試作品及圖案の配布をなす。

七 製品、圖案、參考品の貸與及展示、

本所の研究、試作、設計圖案又は參考品は申請により之を貸與し、或は展覽會、博覽會に出品す

八 傳習生及研究生の養成

全國斯業の發達向上、近代化を目的とし、工藝各方面の業者及び子弟並に工業從業者に對し實務に必要な技術及び知識を短期間に修得せしむ

九 質疑應答

工藝品の原材料、技術、工具、設備意匠、傾向その他工藝に關する質問に對し、口答又は文書を以て應答、業者を啓發指導す。

一〇 設備貸與

當業者の試験研究又は製品加工のため申請あるときは當所作業に支障なき限り、設備を貸與、便宜を圖る。

一 刊行物の頒布

本所の試験研究及び調査に基き月刊「工藝ニュース」を編輯す

二 各方面との聯絡

地方各指導機關其の他關係諸方面との聯絡を圖つて、研究試驗其の他の重複、不統制を避けしめ、又各方面の力を集聚して指導計畫の綜合的効果的立案を圖る

三 一般指導啓發

適切なる方法に於て一般大衆の工藝への關心を鼓吹し、又工藝知識の普及、趣味の涵養を計り、以て工藝的水準の高揚を期すると同時に海外に我が工藝の特質、長所の宣傳啓蒙に當り、以て彼等の認識理解を深むるに努む。

工藝指導所官制

昭和十五年十一月十九日勅令七百七十號改正

第一條 工藝指導所ハ商工大臣ノ管理ニ屬シ工藝ノ指導ヲ爲ス爲左ノ事務ヲ掌ル。

一 工藝品ニ關スル試験及研究

二 工藝品ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定

三 工藝品製作ニ關スル傳習及講話

四 試験研究ノ爲製作シタル工藝品並ニ加工シタル其ノ材料、調製シタル其ノ意匠圖案及製作シタル其ノ

原型ノ配付

第二條 工藝指導所ハ工藝ノ改善ニ必要アリト認ムル場合ニ限り工藝品ノ製作並ニ其ノ意匠圖案及其ノ原型ノ調製ノ依頼ニ應スル事ヲ得

第三條 工藝指導所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

技師 專任 十一人 奏任

屬 專任 三人 判任

技手 專任 十六人 判任

所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ

第四條 所長ハ商工大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス

第五條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル

第六條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第七條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス

第八條 商工大臣ハ必要ト認ムル地ニ工藝指導所ノ支所ヲ置キ本所ノ事務ヲ分掌セシムルコトヲ得

附則 本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

商工省内臨時職員設置制拔萃

昭和八年勅令第三十六號改正

第二十條 工藝指導所ニ左ノ職員ヲ置ク

一、工藝振興ニ關スル事務ニ從事スルモノ

技師 專任 一人

技手 專任 二人

二、代用品工業ノ振興ニ關スル事務ニ

従事スルモノ

技師 専任 一人

屬 専任 一人

技手 専任 三人

同所處務規程抜萃

第一條 工藝指導所ニ企畫部、研究部、指導部及庶務課ヲ置ク

第二條 企畫部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一、工藝技術改善ニ關スル計畫ノ設定ニ關スル事項

二、内外工藝狀況ノ調査及資料ノ蒐集ニ關スル事項

三、工藝ニ關スル研究機關トノ連絡ニ關スル事項

第三條 研究部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一、工藝品ニ關スル基礎的試験及研究ニ關スル事項

二、工藝品ノ意匠圖案ノ調製及其ノ原型ノ製作ニ關スル事項

三、工藝品ノ製作ニ關スル事項

四、工藝品ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定ニ關スル事項

第四條 指導部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一、試験研究ノ爲製作シタル工藝品並ニ加工シタル其ノ材料、調製シタル其ノ意匠圖案及製作シタル其ノ原型ノ配布ニ關スル事項

二、工藝品ノ製作ニ關スル實施指導ニ關スル事項

三、工藝品ニ關スル講習及講演並ニ工藝品ニ關スル展示會ニ關スル事項

四、傳習生ノ養成ニ關スル事項

陶磁器試驗所

第五條 庶務課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

(以下略)

第六條 工藝指導所支所ニ支所長ヲ置ク支所長ハ所長ノ指揮監督ヲ承ケ支所全般ノ事務ヲ處理ス

第七條 所長處務細則又ハ支所ノ處務規程ヲ設クルトキハ商工大臣ニ報告スベシ、之ヲ變更スルトキ又同ジ

第八條 所長試験又ハ鑑定ノ成績書ヲ作製スルトキハ其ノ擔任者ト共ニ之ニ署名又ハ捺印スヘシ

第九條 所長ハ毎年事業ノ成績ヲ商工大臣ニ報告スヘシ

職員 本所 所長 國井喜太郎 齋藤信治 寺坂毅 研究部長 阿久津保太郎 庶務課長 小池新二 調査係長 西川友武 指導係長 福阿羅太郎 研究係長 渡邊金三郎

兼任 商工技師 佐藤笠太郎 同 谷内治楠 同 藤井左内 同 和平徳治郎 劍持勇 福岡和雄 大原彰三 鈴木毅 明石一男 鹿取一男

屬 技師 國井喜太郎 齋藤信治 寺坂毅 研究部長 阿久津保太郎 庶務課長 小池新二 調査係長 西川友武 指導係長 福阿羅太郎 研究係長 渡邊金三郎

屬 技師 國井喜太郎 齋藤信治 寺坂毅 研究部長 阿久津保太郎 庶務課長 小池新二 調査係長 西川友武 指導係長 福阿羅太郎 研究係長 渡邊金三郎

屬 技師 國井喜太郎 齋藤信治 寺坂毅 研究部長 阿久津保太郎 庶務課長 小池新二 調査係長 西川友武 指導係長 福阿羅太郎 研究係長 渡邊金三郎

屬 技師 國井喜太郎 齋藤信治 寺坂毅 研究部長 阿久津保太郎 庶務課長 小池新二 調査係長 西川友武 指導係長 福阿羅太郎 研究係長 渡邊金三郎

屬 技師 國井喜太郎 齋藤信治 寺坂毅 研究部長 阿久津保太郎 庶務課長 小池新二 調査係長 西川友武 指導係長 福阿羅太郎 研究係長 渡邊金三郎

屬 技師 國井喜太郎 齋藤信治 寺坂毅 研究部長 阿久津保太郎 庶務課長 小池新二 調査係長 西川友武 指導係長 福阿羅太郎 研究係長 渡邊金三郎

屬 技師 國井喜太郎 齋藤信治 寺坂毅 研究部長 阿久津保太郎 庶務課長 小池新二 調査係長 西川友武 指導係長 福阿羅太郎 研究係長 渡邊金三郎

屬 技師 國井喜太郎 齋藤信治 寺坂毅 研究部長 阿久津保太郎 庶務課長 小池新二 調査係長 西川友武 指導係長 福阿羅太郎 研究係長 渡邊金三郎

屬 技師 國井喜太郎 齋藤信治 寺坂毅 研究部長 阿久津保太郎 庶務課長 小池新二 調査係長 西川友武 指導係長 福阿羅太郎 研究係長 渡邊金三郎

屬 技師 國井喜太郎 齋藤信治 寺坂毅 研究部長 阿久津保太郎 庶務課長 小池新二 調査係長 西川友武 指導係長 福阿羅太郎 研究係長 渡邊金三郎

關西支所

技師 支所長 豐口克平

兼任 大阪工業試驗所技師 杉本俊三

屬 庶務係長 東海林榮

技手 指導課長心得 八井孝二

研究課長心得 芳武茂介

鍋谷外茂男 稻森健吉 原直陳

東北支所 支所長 松崎福三郎

兼任 指導課長 安倍郁二

庶務課長 鈴木清之介

技手 鈴木三男 東原卓馬

大場吉三郎 猪狩英一

陶磁器試驗所

當所は本邦陶磁器工業の改善進歩並に其の輸出増進を圖る爲の國立研究指導機關である。大正八年京都市より、元京都市立陶磁器試驗場の敷地、諸設備及事業の一切を政府に寄附移管し、時の農商務省所管としたもので後に商工省の所管となり現在に至つて居る。而して昭和八年

度、政府に於て國策として工藝振興に關する經費を新に支出することになつたが、この際偶々瀬戸市に計畫された市立窯業試驗所の土地、建物その他諸設備一切を舉げて當所に移管し、同所を陶磁器試驗所瀬戸試驗場として當所に於て經營することになつた。

陶磁器試驗所官制 大正八年四月五日 勅令第八十三號

第一條 陶磁器試驗所ハ商工大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

一、陶磁器ニ關スル試験及研究

二、陶磁器ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定

三、陶磁器製作ニ關スル傳習及講話

四、試験研究ノ爲製作シタル陶磁器及加工シタル其ノ材料ノ配布

第一條ノ二 陶磁器試驗所ハ試験研究成績ノ普及促進ニ必要アリト認ムル場合ニ限り陶磁器ノ製作ノ依頼ニ應スルコトヲ得

第二條 陶磁器試驗所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長 技師 専任一〇人 奏任 技師 専任二人 奏任 技手 専任一三人 判任

第三條 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ商工大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス (第四條以下略)

同所處務規程抜萃 一、陶磁器試驗所ニ第一部、第二部、第

三部、第四部、瀬戸試験場及庶務課ヲ置ク

一、第一部ニ於テハ陶磁器ニ關スル基礎的研究並陶磁器ノ原料、材料ノ品質ノ鑑定ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第二部ニ於テハ陶磁器製作ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第三部ニ於テハ陶磁器ノ意匠及圖案ノ研究ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第四部ニ於テハ特殊陶磁器ノ研究ニ關スル事務ヲ掌ル

一、所長ハ必要ト認ムル地ニ試験場ヲ置キ陶磁器試験所ノ事務ノ一部ヲ分掌セシムル事ヲ得

同所製品配付及受託製作規則拔萃

一、陶磁器試験所ノ試験研究ニ依リ製作シタル陶磁器及加工シタル陶磁器材料ノ配付ヲ受ケントスル者又ハ陶磁器ノ製作ヲ依頼セントスル者ハ別記所定様式(中略)ニ依リ陶磁器試験所長ニ出願スヘシ

一、前條ノ出願ヲ許可セントスル場合ニ於テハ陶磁器試験所長ハ左ニ掲クル事項ヲ定メ之ヲ出願人ニ通知スヘシ

一 品種及數量

二 代金又ハ製作費及其ノ納付期限

三 引渡豫定期日

出願人前項ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ五日以内ニ配付ヲ受クヘキ旨又ハ製作ノ依頼ヲ爲スヘキ旨ヲ申出テサルトキハ出願ハ其ノ效力ヲ失フ

一、陶磁器試験所長必要アリト認ムルトキハ道府縣市立商品陳列所規程ニ依ル商品陳列所又ハ學校ニ對シ無償ヲ以テ製品ヲ配付スルコトヲ得

同所傳習生規程拔萃

一、陶磁器試験所ハ陶磁器ノ製作ニ關スル技術ヲ修得セントスル者ノ爲傳習ヲ行フ

一、傳習生ノ傳習期間ハ五箇月トシ傳習開始ノ期日ハ毎年四月一日及十月一日トス 前項ノ期間及期日ハ陶磁器試験所ノ都合ニ依リ之ヲ變更スルコトアルヘシ

一、傳習事項、傳習生ノ定員、傳習期間及傳習開始ノ期日ハ豫メ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

一、傳習生ハ陶磁器ノ製作ニ經驗アル十八歳以上三十五歳以下ノ男子ニシテ官公署、學校、組合其ノ他ノ團體又ハ工場主ノ推薦ニ係ルモノタルコトヲ要ス 一、傳習料及傳習ニ要スル費用ハ之ヲ徴セス

附 瀬戸試験場

瀬戸市大學瀬戸
電瀬戸二四五六

京都本所ノ基礎的研究よりなる中間試験の結果を更に進んで實地的製作に移し以て陶業者と相互に聯絡を保ち、益々斯業の發展を圖らんとするものであつて、當場には技術科、圖案科、及び庶務係を置く。

陶磁器試験所職員

技師	所長	秋月透
同	第一部長	磯松嶺造
同	第二部長事務取扱	秋月透
同	第三部長	水町和三郎
同	第四部長	藤井兼壽
同		梶崎千代利
同		淺山哲二
同		保野福太郎
同		滑川正雄
同		井本米次郎
同		馬淵利貞
同		田川基一
同		宮崎正治
同		熊澤靖一
同		水原祐三
同		船津英治
同		加藤鏡一
同		栗本照
技手	庶務課長	

技師	瀬戸試験場長	中根俊雄
屬		澤村滋郎
技手		久保利一郎
		日根野作藏

帝室博物館

東京市下谷區上野公園
電下谷六一九九〇、四六〇一

同館の創立は明治五年正院に於ける博覽會事務局の設置に始まり、其後同局を博物館と改稱し内務省の管轄に付したが、同十四年農商務省へ移管となり、事

務所(當時博物館と稱す)を上野の舊寛永寺本坊跡に移轉し翌十五年同所に新築の本館を開いた。十九年宮内省管理となり、二十二年帝國博物館と改められ、歴來、美術、美術工藝、工藝、天産の五部を設け、三十三年現稱に改められた。天産部は大正十四年文部省に移管された。昭和十二年從來の歴史課、美術課を廢し列品課に改め、別に學藝課を新設した。陳列本館は震災に大破し、其の後表慶館を列品陳列に充てたが、今上陛下の御即位記念の事業たる帝室博物館復興委員會の復興大工事が七年を閲して昭和十二年に竣工し、同年獻上せられ、同十三年十一月開館された。建物は地上二階、地下二階、總面積六千五百二十二坪、鐵骨鐵筋コンクリート造りの東洋風大建築である。館内を約二十室に分ち陳列は概ね第一、二室考古、第三、四室染織、第五、六、七室金工、第八室陶瓷、第九、十室彫刻、第十一、十二、十三、十四及十八室繪畫、第十五、十六、十七室漆工、第十九、二十室書蹟等に區分し、尙特別第一室に考古、特別第二、五室に彫刻を陳列する。以上の中繪畫、書蹟は毎月陳列替を行ふ。尙本館開館と共に從來の表慶館には明治以降の日本畫、洋畫、彫刻、工藝を陳列し、近代美術館の機能を果たすことになつた。

又構内には公爵九條道秀及益田孝より夫々寄贈され、昭和十一年開館された九條公爵記念館及應舉館がある。前者はも

と東京赤坂なる九條公爵邸内の前公爵道實の居室で、昭和九年道秀が宮内省に前公爵の記念として獻納した。總坪凡そ四十四坪、二室、廻廊下附で一の間、二の間を通じて床張付、襖、腰障子に傳山樂山雪筆の著色四季樓閣山水圖が描かれ、これはもと京都御所内九條邸にあつたのを東京邸に應用したものである。後者はもと舊尾張國海部郡大治村明眼院の書院で寛保二年の建立、明治二十二年男爵益田孝により東京御殿山の邸内に移築され、昭和八年宮内省に獻納された。總坪凡四十三坪、書院造、二室、廻廊下附、一の間に松梅笹稚松が、二の間には蘆雁圖が共に墨畫で壁張付、襖、腰障子等に描かれ、何れも圓山應舉の筆である。

又構内の茶室六窓庵は金森宗和の建立にかかり、もと奈良興福寺の慈眼院に在つたものである。何れも毎週一回晴天の日に公開する。尙外に校倉があり、奈良十輪院から移した奈良時代の遺構で、扉に四天王を、内部壁板に般若十六善神を畫き、石臺には十六善神の彫刻がある。

〔總長〕 渡部信〔事務官〕 藤井宇多治郎
〔鑑査官〕 溝口禎次郎、秋山光夫、三條西公正、石田茂作、矢島恭介、小林剛、野間清六、鷹巢豊治、蓮實重康〔御用掛〕 溝口三郎〔鑑査官補〕 高橋勇、高橋直一、尾崎元春、田中作太郎、金森遼關根龍雄、堀江知彦、近藤市太郎、藤岡了一、岡田讓、藏田藏、松下隆章、神林淳雄、澁江二郎、守田公夫、岡田敬男

〔顧問〕 男爵郷誠之助、清水澄、澤田源一、羽田亨、菊池豊三郎、飯沼一省、阿原謙藏、池内宏、侯爵徳川義親、侯爵細川護立、侯爵前田利爲、加藤正治、子爵岡部長景、松本俊一、瀧精一、伊東忠太、黒板勝美、男爵大倉喜七郎、男爵團伊能杉榮三郎、大橋新太郎、横河民輔〔學藝委員〕 奥田誠一、藤懸靜也、香取秀治郎、關保之助、入田整三、吉野富雄

〔觀覽日〕 一月三日より十二月廿五日迄午前九時より午後四時迄、但し季節により多少伸縮す。〔觀覽料〕 大人十錢、小人五錢、廿人以上の團體は大人五錢、小人三錢、教員引率の學生生徒の團體は無料。

帝室博物館官制

大正十年十月六日皇室令第十四號
改正大正十三年四月八號

第一條 帝室博物館ハ宮内大臣ノ管理ニ屬シ古今ノ美術品ヲ蒐集シテ公衆ノ觀覽ニ供シ兼テ美術ノ發達ニ資スル事業ヲ行フ所トス

第二條 帝室博物館ハ之ヲ東京及奈良ニ置ク

第三條 帝室博物館ニ左ノ職員ヲ置ク
總長、事務官、鑑査官、鑑査官補、屬

技手
第四條 總長ハ勅任トス各帝室博物館及

正倉院ニ關スル事務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

第五條 事務官ハ專任二人委任トス庶務ヲ分掌ス

第六條 鑑査官ハ專任九人委任トス美術

品ノ鑑査解説陳列及保存ノ事ヲ分掌ス
第七條 鑑査官補ハ判任トス鑑査官ヲ助ク

第八條 屬ハ判任トス庶務ニ従事ス

第九條 技手ハ判任トス技術ニ従事ス

第十條 奈良帝室博物館ニ館長ヲ置ク
館長ハ事務官ヲ以テ充ツ館務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

帝室博物館顧問

昭和十三年十一月七日
宮内省令第八號

宮内省ニ帝室博物館顧問ヲ置ク
顧問ハ帝室博物館ニ關スル重要ナル事項ニ付宮内大臣ノ諮問ニ應ス

顧問ハ二十五人以上以内トシ宮内大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス

帝室博物館社寺寶物受託規程

昭和十一年十一月三十日
宮内省令第十二號

第一條 帝室博物館ニ於テ陳列ニ供スル爲社寺寶物ノ寄託ヲ受クルハ本規程ノ定ムル所ニ依ル

第二條 社寺其ノ寶物ヲ帝室博物館ニ寄託セムトスルトキハ寄託期間ヲ定メ書面ヲ以テ帝室博物館總長又ハ奈良帝室博物館長ニ申出ツヘシ寄託期間ヲ更新セムトスルトキ亦同シ

第三條 帝室博物館寄託ノ目的物ヲ受領シタルトキハ附録様式ノ受託證書ヲ交付シ返還スルトキハ之ト引換フヘシ
受託期間ヲ更新シタルトキハ受託證書ニ其ノ期間ヲ明記シ繼續ノ印ヲ押捺ス

第四條 受託物ハ受託期間内ト雖モ之ヲ返還スルコトアルヘシ
受託物ハ祭典法要修理其ノ他ノ事由ニ因リ寄託者ヨリ願出アリタルトキハ三十日ヲ限り之ヲ返還スルコトアルヘシ
前項ノ期間ハ修理其ノ他己ムコトヲ得サル事由アルトキハ之ヲ延長スルコトヲ得

第五條 寄託社寺ニ對シテハ毎年十二月ニ社寺交附金ヲ交附ス

第六條 寄託又ハ受託物ノ返還ニ要スル荷造費及運搬費ハ帝室博物館ニ於テ之ヲ負擔ス

第七條 寄託期間六年以上ニ互ル寄託物ニ付テハ特別ノ事情アル場合ニ限り寄託者ノ申出ニ限り帝室博物館ニ於テ其ノ修繕費ノ全部又ハ一部ヲ負擔スルコトアルヘシ

第八條 前條ニ依リ費用ヲ負擔スル受託物ノ修繕ハ帝室博物館内又ハ指定ノ場所ニ於テ之ヲ行フモノトシ帝室博物館總長(奈良帝室博物館ニ在リテハ同館長)之ヲ監督ス

前項ノ修繕ノ方法及程度ニ付テハ當該社寺帝室博物館總長(奈良帝室博物館ニ在リテハ同館長)ト協議スヘシ

第九條 受託物ハ帝室博物館ニ於テ保管ノ責ニ任ス但シ天災地變其ノ他不可抗力ニ因リ滅失紛失又ハ毀損シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十條 本令施行ニ關スル細則ハ宮内大臣ノ認可ヲ經テ帝室博物館總長之ヲ定ム

帝室博物館出品規則

第一條 所藏ノ物品ヲ本館ニ出陳セシコトヲ望ム者ハ口頭若ハ書面ヲ以テ申出ツヘシ、但シ書面ヲ以テ申出ツルトキハ其ノ品名形状傳來等ヲ詳記シ且略圖ヲ添付スヘシ

第二條 物品ノ出陳ヲ承認シタルトキハ物品ト引換ニ預證書ヲ交付スヘシ

第三條 出品ハ本館ニ於テ保管ノ責ニ任ス但シ天災其ノ他不可抗力ニ因リ紛失毀損シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四條 出品ノ輸送費用ハ所有者ニ於テ支辨スヘシ

第五條 出品ヲ摸寫摸造若ハ撮影セシコトヲ請フ者アルトキハ所有者ノ承諾ヲ得タル後之ヲ許可スヘシ但シ各種列品集合全體ノ形状ヲ撮影スルハ此ノ限ニアラス

第六條 出品ニシテ當時手入ヲ要スルモノハ本館ニ於テ之ヲ爲スヘシ但シ修繕ハ此ノ限ニアラス

第七條 出品ノ預期間ハ三箇年トス預期間ノ計算法ハ現品ノ領收力六月以前ナルトキハ其ノ年ノ一月ヨリ起算シ七月以後ナルトキハ其ノ年ノ七月ヨリ起算ス

第八條 預期間満了シタルトキハ書面ヲ以テ之ヲ所有者ニ通知ス 所有者前項ノ通知ヲ受領シタルトキハ速ニ物品ノ引渡ヲ受クヘシ

第九條 出陳ヲ繼續スル場合ニ於テハ本證書ノ表面ニ繼續ノ印ヲ押シ期限ヲ延

長スルモノトス

第十條 出品預期間内ト雖所有者ノ希望ニ因リ若ハ本館ノ都合ニ因リ物品ヲ返付スルコトアルヘシ

第十一條 返付スヘキ物品ハ執務時間中何時ニテモ預證書ト引換ニ之ヲ引渡スヘシ

引渡ヲ受ケタルトキハ本人又ハ代理人ハ證書ノ裏面ニ受領ノ旨ヲ記載シ記名捺印スヘシ

第十二條 出品預期間満了ノ場合ニ於テ所有者ノ所在不明ナルトキハ官報及三種以上ノ新聞紙ニ五日間之ヲ廣告スヘシ此ノ場合ニ於テハ其ノ末日ニ於テ通知ヲ受ケタルモノト看做ス

預期間満了ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ三ヶ年ヲ經過スルモ引渡ヲ申出サルトキハ預證書ハ無効トシ現品ハ本館ニ於テ隨意ニ之ヲ處分ス

第十三條 出品預證書ヲ紛失若ハ毀損シタルトキハ速ニ本館ニ届出證書ノ再交付若ハ引換ヲ請求スヘシ但シ紛失シタルトキハ官報又ハ新聞紙ニ廣告シ三箇月ヲ經過スルモ發見セサル場合ニ於テ再ヒ證書ヲ交付スヘシ

第十四條 紛失若ハ毀損ニヨリ再ヒ預證書ヲ交付シ若ハ引換ヲ爲ストキハ其ノ理由ヲ證書ニ摘記ス

恩賜京都博物館

京都市東山区大和路通七條上ル 電話四五四

明治廿二年五月宮内省達を以て圖書寮

附屬博物館が廢止され、帝國博物館、帝國奈良博物館と同時に帝國京都博物館が設置された。

廿五年工事に着手し廿八年竣工、三十年五月開館した。廿三年官制改革により京都帝室博物館と改稱。大正十三年今上陛下の御成婚に際し思召を以て宮内省より京都市に下賜され、同年二月一日より恩賜京都博物館と改稱し、京都市の經營に屬する事となつた。

本館は京都其他各地社寺の國寶什寶及び個人所藏の優品を蒐集して之を受託陳列し、一般の觀覽に供してゐる。陳列品を大別して歴史部、美術部、美術工藝部の三部とし、更に之を細分して左の如く部門を別けて居る。歴史部(一)、圖書二、古代遺品 三、祭祀宗教關係品 四、武器 五、禮式風俗關係品 六、貨幣、度量衡、信印)美術部(一)、繪畫 二、書蹟 三、彫刻 四、建築) 美術工藝部(一)、金屬品 二、窯製器 三、漆漆品 四、織繡品 五、玉石甲角竹木品 六、紙革品 七、寫真並圖繪)。現在の列品點數三千四百九十九點。繪畫、文書、書蹟は毎月陳列替を行ひ、又年に數度特別展覽會又講演會等を開催する。

本館は建坪一千二百一坪、館内は十六の陳列室に區分され、他に中央室あり、講演會場に充ててゐる。

(館長)川口知雄(學藝委員)猪熊淺磨 小山源治、猪熊信男、加藤修、源豐宗、水町和三郎、明石國助、植中直次郎(主事)棚田嘉藏(鑑査員)松本聰二郎、土居次義、神田松之助、景山畔四郎

(觀覽日)一月五日より十二月二十五日迄。(觀覽料)大人二十錢、子供十錢(特別觀覽料)一人一圓、團體(二十人以上)大人一人十錢、小人五錢

大禮記念京都美術館

京都市左京區岡崎公園 電話六七〇〇、七〇二〇

今上陛下の御即位の大禮を慶祝記念し奉るため京都市に於て建設せるもので、昭和六年起工し、八年竣工。爾來同市竝に同館主催の美術展覽會を開催する他一般美術團體に陳列室を貸與する。尙十五年七月より明治以降の新美術品の陳列を開始し、毎月陳列品替を行ふ。本館は二階建鐵筋混凝土造にして建坪千四百八坪延坪二千八百三十二坪。

(館長)戶津吉之助(顧問)飯田新七、竹内恒吉(評議員)西山卯三郎、太田喜二郎、川村萬藏、神坂吉隆、田中和一、植田壽藏、清水六兵衛、菊池完爾、西村力(主事)西野嚴三(書記)大井茂(囑託)岡部三郎、瀬木忠夫、奥田重雄、松山武太郎

同館規則拔萃

第一條 本館ハ美術品及美術工藝品ヲ陳列シテ一般ノ觀覽ニ供シ其ノ他斯道獎勵ノ用ニ供スルヲ以テ目的トス

第一項 新美術品及美術工藝品ノ常設陳列ヲナス(茲ニ新美術品及美術工藝品トハ明治四十年以後ノ製作品トス)

第二項 臨時ニ特別美術展覧會ヲ開催
シ美術品及美術工藝品ノ陳列ヲナス

第三項 一定ノ期間ニ限り團體又ハ個人ニ對シ美術品及美術工藝品陳列ノ爲本館陳列室ノ使用ヲ許可ス

第四項 右ノ外美術獎勵ノタメ美術品及美術工藝品ニ關スル參考資料ノ展觀ヲ爲シ美術關係圖書ノ閱讀機關ヲ設ケ又講演會映寫會等ヲ開ク

第二條 本館ハ前條ノ目的ヲ達スル爲本館ノ所藏ニ係ルモノ及官廳團體又ハ個人等ヨリ出品アリタルモノヲ陳列シテ一般ノ觀覽ニ供ス本館ハ一定ノ期間ヲ限リ團體又ハ個人ニ對シ美術品及美術工藝品陳列ノ爲本館ノ全部又ハ一部ノ使用ヲ許可スルコトアルベシ

第七條 本館ニ評議員若干人ヲ置ク、評議員ハ識見アル者ノ中ヨリ市長之ヲ委嘱ス

第八條 評議員ハ重要ナル館務ニ關シ館長ノ諮問ニ應ジ又ハ意見ヲ開陳スルモノトス

第十條 本館ハ一月五日ヨリ十二月二十五日迄毎日左ノ時間中間館スル但シ時宜ニ依リ之ヲ伸縮シ又ハ閉館スルコトアルベシ

一月、二月、三月、十月、十一月、十二月、午前九時ヨリ午後四時マデ
四月、九月、午前八時ヨリ午後四時マデ
五月、六月、七月、八月、午前八時ヨリ午後五時三十分マデ

大阪市立美術館

大阪市立美術館—李王家美術館

大阪市天王寺區茶臼山町天王寺公園内電天王寺六〇〇、六一〇一

古美術品の當設展觀と一般美術展の展觀場としての設備を兼ね、昭和十一年五月落成。同月帝展作品の陳列を以て開館し、古美術の當設展觀は同年九月より正式に開館した。建物は鐵筋混泥土造、三階建て地階を加へ、建坪一二二二坪、延坪三八五五坪。陳列室、展覽會室、講堂、圖書閱覽室等より成り、陳列室は同館の蒐集保存に係る古美術品—繪畫、彫刻、美術工藝、書蹟、考古學資料等を常設展觀し、展覽會室及講堂は一般美術展暨美術講演會、講習會等の開催希望者に貸館し、又圖書閱覽室に於て同館所藏の圖書を規定に従ひ一般の觀覽に供する。

〔館長〕上野直昭〔主事〕高津滿、望月信成〔學藝員〕小林太市郎、藤井源一、片山喜之、前田泰治〔囑託〕廣瀬治兵衛、上田令吉、堂谷憲勇

奈良帝室博物館

奈良市奈良御料地

明治二十二年奈良帝國博物館設置せられ同二十八年四月開館。三十三年官制の改革と共に現稱に改められた。陳列品は古社寺所有の國寶にして政府の命令出陳に依るもの、及社寺、個人その他よりの寄託による古美術品を蒐めて居る。概して佛像、佛畫が多く、殊に彫刻は上古より鎌倉期に至る優秀品が多數陳列されてゐる。出陳物を美術品、歴史品、美術工藝品及書蹟の四部門に分ち、彫刻繪畫等

の美術品は各室別、時代參考順に陳列し歴史品及美術工藝品は箱別とし、類聚陳列をしてゐる。館内は十三室に分れ、第一室より第三室まで彫刻、第四室より第七室迄工藝品、第八室は歴史品、第九室より第十二室迄繪畫、第十三室書蹟の順に陳列し、此中第一室より第八室に至る彫刻歴史及工藝品は六月、十二月に定期の陳列替を行ひ、第九室以降の繪畫、書蹟は毎月陳列替を行ふ。尙毎月第一、第三土曜日の午後陳列品に即しての解説的講座が開かれる。官制、社寺寶物受託規程等は帝室博物館の項參照。

〔館長〕宮野安〔御用掛〕大宮武磨〔鑑査官補〕龜田孜、松島順正〔學藝委員〕中村雅眞、新納忠之介、梅原末治

〔觀覽日〕自一月三日至十二月二十五日

〔觀覽料〕大人十錢、小人五錢

朝鮮總督府博物館

京城府光化門通景福宮内 電光化門六六一

大正四年、施政五週年記念朝鮮物産共進會の開催に際し、京城舊王宮景福宮構内に新築した美術館を中心とし、同構内の舊宮殿をも併せ利用して同年十二月開館。本館陳列品は朝鮮石器時代、金石併用時代遺物、樂浪帶方郡發掘品、三國時代、新羅統一時代の遺物、高句麗時代の古墳壁畫、高麗時代の陶器、李朝時代の書畫、陶器、漆器及び中央亞細亞の發掘品等で、朝鮮各時代に互る美術考古資料約一萬四千六百餘點が蒐集されてゐる。

〔主任〕藤田亮策〔觀覽日〕月曜日、大祭祝日の翌日、自十二月二十六日至一月三日の間を除き毎日開館〔觀覽料〕一人五錢、引率者を有する學校生徒並軍人は無料

李王家美術館

京城府貞洞町五 電光化門七五

朝鮮に於ける美術獎勵の思召を體し、昭和八年德壽宮を公開し宮内の石造殿を改装して日本近代美術の陳列館とし、日本畫、洋畫、彫刻、工藝品を陳列したが、更に朝鮮の古美術をも一堂に陳列すべき美術館建設の適切なるを認め昭和十一年八月新館の工事に着手、同十三年竣工、同六月開館した。新館は近世復興式の三階建て、從來昌慶苑内にあつた舊李王家博物館の藏品中、陶磁器、工藝品、繪畫古瓦、彫像など美術品のみを陳列してゐる。上記の石造殿並新館を李王家美術館と總稱する。

〔館長〕葛城末治〔屬〕主任 平田武夫 李揆弼〔技手〕高橋喜太郎〔囑託〕李海善〔委員〕黒板勝美、和田英作、工藤壯平、澤田源一、川合芳三郎、山崎朝雲、香取秀治郎〔評議員〕田中豐藏、藤田亮策、鮎貝房之進、金谷鎮

大正四年、施政五週年記念朝鮮物産共進會の開催に際し、京城舊王宮景福宮構内に新築した美術館を中心とし、同構内の舊宮殿をも併せ利用して同年十二月開館。本館陳列品は朝鮮石器時代、金石併用時代遺物、樂浪帶方郡發掘品、三國時代、新羅統一時代の遺物、高句麗時代の古墳壁畫、高麗時代の陶器、李朝時代の書畫、陶器、漆器及び中央亞細亞の發掘品等で、朝鮮各時代に互る美術考古資料約一萬四千六百餘點が蒐集されてゐる。

〔主任〕藤田亮策〔觀覽日〕月曜日、大祭祝日の翌日、自十二月二十六日至一月三日の間を除き毎日開館〔觀覽料〕一人五錢、引率者を有する學校生徒並軍人は無料

李王家美術館

美術家團體一覽

(五十音順)

愛知縣工藝協會 名古屋市西區御幸本町一丁目、愛知縣商工館内

縣下工藝の振興を圖り、意匠圖案の調査研究、展覽會の開催、宣傳等を行ふ。

〔總裁〕愛知縣知事〔會長〕安積得也〔理事長〕井澤新

愛知社(綜合) 東京市澁野川區田端町六一二、朝蔭其明方

大正七年創立。愛知縣出身の在京美術家を以て組織。毎年公募展開催。

〔會員〕(日本畫)川崎小虎、服部有恒、清水有聲、太田一彩、森田沙夷、森村稻門(洋畫)山本鼎、加藤靜兒、渡邊正太郎、水野義正(彫刻)毛利教武、加藤顯正、朝蔭其明(工藝)藤井達吉、長野埜志

青丹會(洋) 東京市品川區大井庚塚町四八三二、田坂乾方 電大森二八五一

昭和七年文化學院美術科卒業生を以て組織。同人展開催。

〔會員〕千葉明、千頭清策、近岡善次郎等十一名

青森縣工藝協會 弘前市百石町三六電四七

縣下工藝の振興を圖り、弘前地方の工藝品製作者、販賣者等を以て組織。年一回競技展覽會開催。

〔會長〕橋本良雄〔理事〕奈良金一、八木橋文平、木村勇藏、齋藤熊五郎

〔會員〕九十餘名

秋田美術會(綜合) 東京市世田谷區

代田一ノ七六、福田豐四郎方

昭和三年、故平福百穂を中心として、秋田縣出身の在京美術家有志を以て組織した。年一回東京及秋田市に展覽會開催。會員六十四名。

石川縣工藝獎勵會展覽會 石川縣廳内經濟部商工水産課

縣下の美術工藝、生産工藝、輸出工藝の發達を圖り、年一回金澤市に展覽會開催。引續き東京、大阪其他樞要の地に陳列會を開く。會員二百餘名。

〔會長〕石川縣知事

石川縣美術協會(綜合) 石川縣廳内學務部

昭和十四年田邊孝次を創立委員長として創立。郷土に於ける美術、工藝の向上を計り、綜合展を開催す。

〔總裁〕侯府前田利爲〔會長〕成田一郎

石川縣輸出工藝振興會 金澤市泉旭町一丁目

昭和九年創立。縣下輸出工藝の振興を目的とし輸出工藝品關係者に依り組織せらる。見本製作の獎勵、販路擴張等の事業をなす。

〔會長〕石川縣知事〔副會長〕中川剛毅〔幹事〕千田專平、高田利守、淺野廉、能波清二

一軌社(洋) 東京市豊島區池袋二ノ九四三、桑原實方

舊スクラム社改稱。昭和八年度東美校

師範科卒業生により組織。同人相互の研究機關。

〔會員〕林佐門、高田廣喜、小島勇、桑原實、榛葉嘉一郎、森繁

一水會(洋) 東京市澁谷區千駄谷五ノ九〇二、木下孝則方

昭和十一年十二月、舊二科會員八名は「會場藝術を非とし、技術を重んじ、高雅なる藝術を尊重することに於て一致」、同會を創立した。同十二年十二月東京府美術館に第一回公开展を準備し、爾後毎年繼續してゐる。

〔會員〕有馬生馬、池部鈞、石井柏亭、木下孝則、木下義謙、小山敬三、碓伊之助、安井會太郎、山下新太郎、高野三三男、中村善策、田崎廣助、安宅虎雄

茨城縣美術展覽會(日、洋、工) 水戸市南町いばらき新聞社内 電水戸五〇、三〇四、三三二

大正十二年創立。いばらき新聞社の主催。

主なる會員、横山大觀、飛田周山、永田春水、五島耕畝、齋藤隆三、熊岡美彦、板谷波山、海野清、磯崎美亞等。

〔會長〕いばらき新聞社長〔顧問〕茨城縣知事

若手美術工藝協會 盛岡市岩手縣工業試驗場内 電五一一

昭和八年創立。縣下美術工藝の振興を圖り研究の助成及展覽會指導を事業として郷土古民藝の現代的再生に努む。

〔總裁〕岩手縣知事〔會長〕同經濟部部長 會員八十名

上野會 東京市麻布區飯倉町三ノ一九、田澤良夫方 電赤坂四七八六

昭和十五年創立、東京市内の日刊新聞社に屬し多年美術記事を擔當、又は擔當しつゝ、ある記者を以て組織する。

〔會員〕外狩素心菴、遠山孝、金子義男、高原四郎、高澤初風、田澤良夫、上島長健、青柳隆治、坂崎坦、澤壽次、三宅正太郎、宮澤明義、宮川謙一、廣瀬煮六、鈴木武久

烏城會(日、洋) 京都市岡崎法勝寺町一八、柴原希祥方

昭和二年創立、岡山縣出身京都在住畫家を以て組織。毎月研究会を開く。

〔擔任幹事〕柴原希祥、稻葉春、生戸田英次、會員三十餘名

愛媛美術工藝協會 松山市愛媛縣商品陳列所 電四四五

愛媛縣在住並出身の美術及工藝家を以て組織。縣下の美術及工藝の振興を圖り綜合展を開催す。

〔總裁〕縣知事〔會長〕縣經濟部部長

越後工藝美術會(工) 東京市瀧野川區西ヶ原町三三、小澤天來方 電王子三三七一(呼)

舊來の越佐美術會を解消し、新に新潟縣出身の工藝家を以て結成した。昭和十五年一月創立。

〔會員〕小澤天來、小川友衛、小川英鳳、龜倉蒲舟、山本光次、市橋雅堂、原直樹、堀如眞、山本自爐、齋藤玉城、清水辰雄、入山白翁、富樫光成、吉田醇一郎、高井白陽、佐藤陽雲、森三樹、武樋

貞波留、篠原淑子、廣川松五郎、岡とよ子、原宗治、小野爲郎、渡邊無涯

大分縣工藝協會 大分市舞鶴町大分縣工業試驗場内 電三三一

昭和十年四月創立。翌年三月第一回展
十三年三月第二回展開催。研究会、講習會の開催、作品集刊行等を行ふ。

〔會長〕大分縣經濟部長

大分縣美術協會(綜合) 大分市荷揚町縣文化會館内

昭和十二年石丸優三を中心として創立。縣下美術の向上を圖り、春秋二回展覽會開催。

〔會長〕松本古村、會員約二〇〇名。

大阪繪畫會(洋、版) 大阪市南區大寶寺町東之町六〇、川島方

昭和十三年五月創立、同人展を開催、又大阪新美術家同盟に加盟。

〔會員〕赤松大祐、入江令一、今竹七郎岡本誠、片山一子、川島昇太郎、河野重軌、田川覺三、谷福太郎、南平

大阪工藝振興展覽會 大阪市西區江之子島、大阪府工業獎勵館内 電土佐堀七九〇、七九一

昭和十四年三月、大阪府下の工藝關係諸團體の聯合により創設。毎年春季には美術工藝展を、秋季には産業工藝及圖案展を開催する。同年大阪府、大阪市、大阪商工會議所、堺市、大阪府工業懇話會大阪府工藝協會の聯合主催の下に第一回展開催。

〔審査員〕津田信夫、廣川松五郎、松田權六、岩田藤七、杉田禾堂、中島豐次、

黒岩淡哉、山本策園、島野三秋、安原祥憲、根箭忠錄

大阪漆人會(工) 大阪市住吉區北高東一ノ二四

昭和十五年秋大阪在住の漆藝家を以て組織す。年一回展覽會開催。

〔會員〕小澤裕、川合泰仙、川端近左、川口虛舟、橋外波、安原祥憲、越田尾山三砂良哉、島野三秋、森田誠之助

〔顧問〕柴崎風岬
大阪女人社(日) 大阪市天王寺區上汐町六丁目、藤枝春月方

大阪の婦人日本畫家により組織され、毎年大阪三越に於て「大阪女流畫家展」を公募により開催し、昭和十五年第七回展に及ぶ。

〔同人〕生田花朝、橋本花乃、星加雪乃、磯紅琴、大江更園、村岡小丘、矢島玉女、松本華洋、福田芳穂、小松華影、木谷千種、四夷星乃、嶋成園

大阪新美術家同盟(洋、彫) 大阪市東成區深江中三丁目七、田川寛一方

關西に於ける各美術團體の合同展開催を目的とす、昭和八年四月大阪の洋畫團體、紳園會及ZIGZAG、彫塑團體クレイによつて結成。

(現在參加團體)核眞美術協會、關西水彩畫協會、新畫人集團、大阪繪畫會、大阪彫塑會、阪神彫塑家協會

〔委員〕木村孝三、藤田金之助、米良道博、難波架空像、田川寛一、池島勘治郎、青野馬佐奈、桂龍雄、藤井光、寺田清四郎、川島昇太郎、入江令一、岡本誠、田

川覺三、谷福太郎、宮島久七、白石正義、日高正法、唐木政一、大西金次郎

大阪彫塑家聯盟 大阪市北區新川崎町一、宮島久七方

昭和十六年四月創立。大阪を中心とする彫刻家の團體で、大阪彫刻會、大阪彫塑會、大阪木彫作家協會、彫光會の會員を始め、無所屬の作家を以て組織する。

會員相互の連絡を圖ると共に對外的の交渉機關たらしめる。

〔委員長〕黒岩淡哉〔委員〕岩田千虎、井上重四郎、大栗利七、横田文夫、田中圭水、津田鳳雲、仲眞弘、上田曉、保田龍門、山野長江、佐伯量良、宮島久七、美濃村松雲、白石正義、清水要、日高正法

大阪彫塑會 大阪市北區新川崎町一宮島久七方

昭和六年洋畫團體ZIGZAGの彫刻部として成立。翌年獨立して大阪附近の青年彫塑家を加へ帝展、二科、院展、國展、構造社各系の相互研究團體たる「クレイ」を結成。同八年より大阪新美術家同盟展に加盟。同十一年十月組織を擴大して大阪彫塑會と改名した。

〔會員〕菅原安男、保田龍門、白石正義、谷本整映、宮島久七、木下正彦、大栗利七、金森勝太郎、木下幹、日高政法、三澤賢三

大阪美術懇話會 大阪市東區大手前之町、大阪府情報部内

昭和十四年二月、大阪情報部の勸奨により阪神を中心とする美術家が相集り同

會を結成した。趣旨は「會員相互の時局に處する信念を固くし美術の振興と文化の向上に努め以て美術報國の使命を全うせんとする」にあり、之に必要な事業を行ふ。

〔評議員〕矢野橋村、北野恆富、菅栢彦、庭山耕園、福岡青嵐、中村貞以、山口艸平、赤松雲嶺、幸松春浦、矢野鐵山、須磨對水、國枝金三、鍋井克之、赤松麟作、松本銳次、藤堂奎三郎、永瀬義郎、園部晋、青木大乗、小西謙三、古家新、齋藤清二郎、上田曉、保田龍門、中島豐次

〔監事〕庭山耕園、齋藤清二郎

大阪美術展覽會(日) 大阪市東區高麗橋、三越大阪支店內

大阪三越が主催となり、毎春一回開催する日本畫の公募展。昭和十五年三月第二十六回展開催。

〔鑑査委員〕西山翠嶺、堂本印象、川村曼舟、中村大三郎、宇田萩邨、山口華楊、矢野橋村、福田平八郎、菊池梨月、北野恆富、水田竹圃、菅栢彦

大阪府工藝協會 大阪市東區大手前之町、大阪府商工第一課内

大正十三年十月創立。社團法人。各種の工藝家、斯道關係者を以て組織。調査研究、展示會等行ふ。月刊「大阪府工藝協會雜誌」發行。

〔名譽會長〕大阪府知事〔名譽副會長〕大阪府經濟部長〔理事長〕中野哲夫、會員三百五十餘名。

旺玄社(洋) 東京市澁谷區八幡通二ノ一六、坂田方

牧野虎雄を主宰者とする洋畫家の團體。昭和八年より毎春東京府美術館に公募展を開催、出品種目は油繪、水彩、素描、パステル、版畫等。

〔同人〕牧野虎雄、市村雄造、岩井彌一郎、新野歡一、遠山陽子、千木良富士、川城國司、橋作治郎、田邊嘉重、村瀬眞治、梅澤照司、松本茂雄、深澤省三、藤村はつゑ、小林喜代吉、小林榮、小林猶治郎、坂田虎一、佐藤文雄、樹下行雄、水戸範夫、宮部進、三好俊一、東久世秀雄、森由太郎、東久世小六、鈴木金平、野村豊子、村尾榮、皆見鸞三、青山爽

〔社員〕十九名。
岡崎美術展覽會(日、洋) 岡崎市立圖書館内 電六五〇

岡崎市の美術の發達を圖り、大正十二年設立。昭和二年繪畫部と工藝部は分離し岡崎美術展を創設。十六年第二十回展開催。

〔會長〕岡崎市長菅野經三郎
佳都美村(工) 京都市上京區小山村
音町、會見延藏方
明治四十二年神坂雪佳を中心に設立された佳都美會の後身、隨時作品發表をなす。

〔社員〕伊東陶山、伊東翠壺、岩村哲齋、岩村光貞、一瀬小兵衛、丹羽冬橋、神坂祐吉、神坂松壽、江馬長閑、鈴木表朔、三木表悦、魚野自醒、奥村霞城、清水六兵衛、溝口安太郎、古市垣太郎、皆川月華、山鹿清華(専務理事)會見延藏

香川縣工藝美術綜合展覽會(綜合)

香川縣商工獎勵館内
縣下の工藝並に美術の發達を圖るを目的とし、豫算の範圍内に於て毎年五月公募展を高松三越で開催す。昭和十三年第三回展に至る。

尙十三年度審査員は、洋畫小林萬吾、日本畫高田美一、西村平間、彫刻新田藤太郎、工藝大須賀喬、磯井如眞、三好眞長等である。

香川縣漆藝會 高松市花ノ宮町、香川縣工業試驗場内 電三九〇二
昭和十年一月設立。香川縣工業試驗場の輸出向漆器講習修了者を以て組織。同試驗場指導の下に輸出向一般工藝品の研究をなす。同十二年八月第二回漆藝展開催。

〔會長〕香川縣工業試驗場長〔會員〕二十餘名。
華敵美術協會(洋) 京都市烏丸通上立賣上ル、太田喜二郎方、電西陣五九六〇
昭和十一年創立。舊稱爾歩美術協會。

一回公募展を開く。同年京都美術館に第一回展開催。

〔會員〕伴庄兵衛、太田喜二郎、角野判治郎、吉田苞、坪井一男、赤松麟作、新井完、安藤義茂、森脇忠、霜島正三郎、會友十六名。

華陽會(彫) 京都市本郷區駒込神明町三四一、後藤良方 電駒込一一五五
昭和八年後藤良社中により組織。彫塑研究を目的とし、年一回展覽會開催。

塊藝會(彫) 名古屋市西區臺所町三ノ一一、石田方

昭和八年一月創立。名古屋に於ける新進彫塑家の團體。年一回同市に展覽會開催。

〔會員〕石川清、大嶽茂樹、高藤鎮夫、曾我八代、野々村一男、穴吹義雄、安藤菊男、森本啓史、千木谿山、菅沼五郎、塊人社(彫) 澁谷區代々木初臺町五九四、安藤照方 電四谷四六三八

昭和十四年春、主線美術協會が解消したので、同會の彫刻部は舊稱「塊人社」に復歸した。公募展を開催する。

〔同人〕泉谷喜一郎、長谷川塊記、堀江越、小笠原貞弘、大屋義昌、渡邊徹、成瀬藤治、村田勝四郎、松田尙之、小室達河内山賢祐、岸崎猪之助、安藤照、荒居徳亮、三澤寛〔社員〕十名
各人社(綜合) 京都市押小路富小路角、岡本庄三方

昭和六年結成。藝術一般の研究及會員相互の向上を目的とす。毎年展覽會開催。

〔會員(日本畫)〕辻村宗太郎、中村敏郎、赤松稜一、芝正雄、白岩悦三郎(洋畫)仲千代二、安田謙、藤井勇、徳永玉樹(版畫)稻垣耕四郎(彫塑)岡本庄三、吉川常雄、吉田徹示、中村三郎(工藝)天野六郎助

革丙會(日) 京都市本郷區弓町一ノ二六、棚田曉山方
明治四十年故小堀頼音門下に依りて組織。大和繪系の國史畫研究並に創作を目的とす。
〔會員〕磯田長秋、岩田豊麿、太田天洋

川崎小虎、川船水棹、棚田曉山、山川永雅、安田毅彦、小山榮達、小堀安雄、森戸果香、永井幾麻、眞野滿、羽石光志、川邊菊二郎(幹事) 棚田曉山

學校美術協會 京都市荒川區日暮里町三ノ一九六 電根岸一〇三〇
昭和二年設立。我が國の小學校、中等學校に於ける圖畫手工教育の發達を側面より助成するを以て目的とし、圖書の刊行、教材用具の研究製作供給、本邦圖畫手工の海外紹介等の事業を行ふ。

〔會長〕岸邊福雄(常務理事) 後藤福次郎(理事) 板倉贊治、山本鼎、霜田靜志、赤津隆助、石谷辰治郎
型會(工) 京都市濠野川區田端一五五、小杉二郎方 電駒込二二六五

東京美術學校昭和十三年度の工藝科出身者を以て組織。十三年銀座資生堂に於て第一回展を開催。

〔會員〕小杉二郎、高橋節郎、黒瀬英雄、金子徳次郎
關西水彩畫協會 大阪市住吉區萬代東二丁目三三、桂龍雄方
昭和十年關西在住の水彩畫家十二名を以て組織。年一回大阪、神戸、京都に於て作品展開催。

〔會員〕池島勘治郎、別車博資、桂龍雄、吉倉三郎、田中丘人、中谷武雄、福井逸郎、江本兼次、青野馬左奈、會友六名、研究會員百三十名。

鬼面社(洋) 京都市淀橋區下落合一ノ五四〇、大久保方 電大塚四〇三七
昭和十四年組織。大久保作次郎を中心

とする會で、同人展を開く。

〔會員〕大久保作次郎、足立眞一郎、飯守好雄等十八名。

岐皇社(日) 岐阜市大宮町二、杉山方

岐阜縣下郷土美術の向上を目的とする公募展。昭和十四年六月岐阜市に第四回展を開催した。

〔同人〕長谷川朝風、川田虚舟、横山春溪、杉山祥司

九夏會(洋) 東京市世田谷區赤堤町一ノ一五四、土屋義郎方

昭和九年創立。春陽會々友の組織する洋畫發表團體。十一年第一回展開催。

〔會員〕岩田榮之助、上野春香、遠藤典太、小栗哲郎、大澤鉦一郎、塚家金華、川端彌之助、兼平英示、齋藤清二郎、眞田久吉、上屋義郎、藤堂三三郎、久泉共三、森田勝、楊佐三郎、和田茂一、新沼杏一、原精一

九元社(彫) 東京市世田谷區玉川奥澤町二ノ一四九 電田園調布三一八〇

昭和八年創立。昭和二年より八年までの東美校卒業生有志が結成せる木彫研究團體。年一回展覽會開催。

〔會員〕森大造、高橋泰藏、中野四郎、村井辰夫、鈴木三郎助、長沼孝三、紺谷英儀、石塚貞男、江上正男

九室會(洋) 東京事務所 板橋區中新井町二ノ六五三、伊藤久三郎方 大阪事務所 蘆屋市樋の口新田七四三、吉原方

昭和十三年九月創立。二科會の主とし

美術家團體一覽

て第九室を中心とする新傾向作家の親睦を圖り、併せて各自の研究に資する。毎年春季東京に展覽會開催。

〔會員〕青木壽、新井ふみ子、遠藤倫太郎、藤田金之助、原田直康、稲田徳生、稻垣志行、井上覺造、石丸一、伊藤久三郎、伊藤研之、桂ユキ子、川口四郎吉、村田實史雄、中野淑子、浪江勘次郎、難波架空像、小川貞彦、岡田オカイン、高井貞二、高根澤政子、栃木宗三郎、山口長男、山路眞護、山本敬輔、山本直武、吉原治良、松本俊介、松島スゞ子、村田耕、平松豊彦、戸川串田、山形稔三、西原照子、北島達夫、神保俊子、榎本徹郎、二宮榮一郎、能間弘、野尻三郎、鈴木進平、田中君子

九州沖繩各縣聯合のもとに毎夏公募展を開催。昭和十三年第七回展を鹿兒島市に開催した。

九年會(洋) 東京市豊島區駒込一ノ八六、川端實方 電大塚五〇九六

昭和九年度東京美術學校洋畫科卒業生を以て組織。相互の親睦、向上を目的とす。會員四十餘名。

玖窓會(日) 東京市豊島區池袋町三ノ一四五七、菅澤幸司方

東京美術學校日本畫科の昭和九年度出身者を以て組織。十三年二月第一回展開催。

京都工藝院 京都市東山區五條坂五

丁目 電祇園六九八

昭和十二年一月創立。京都に於ける工藝の八團體、五條會、陶藝協會、綵工會、伸更會、京都漆藝會、金工作家聯盟、若潤社、工友團が京都工藝の革新甦生を宣言して大同團結した工藝の綜合團體。其の結成に伴ひ右諸團體は解消された。同年京都美術館に第一回展を、十三年第二回展を、京都及東京の兩市に開催。

〔常任理事〕山鹿清華、清水正太郎、〔會員〕(陶藝部)伊東翠壺、井上憲吾、井上素明、八田蘇谷、堀岡道仙、中條昇岡本爲治、桶谷定一、浦波蘇隆、小倉千尋、叶松谷、叶光夫、米澤蘇峰、瀧本蘇嶺、高木風子、谷口道仙、中村昌夫、中村幸節、村井瓶生、草加春陽、山澤松篁、國領素夫、寺池旬焔、福井榮印、淺見與志三、中谷小太郎、清水正太郎、北村祥風、清水祥次、北村陽山、宮下善壽、新開邦太郎、森野嘉光、清風與平、萬代正一、小華和忠雄、宮川香齋、菊地熊市、勝尾青龍洞、東野春生、高木岩華、杉本正、河原金吾、清水六兵衛、林沐爾、野本正光、林圓山、宮本香齋、諏訪蘇山

(染織部)石田玉英、今西良夫、今村冠峰、岩崎眞也、八田泰造、長佐川文平、馬場笛山、小合友之助、川瀬茂次、太田光嶺、龜山善博、横山芙明、田中初雄、田中貞造、中村鶴生、長村華城、村田春綠、安武聖果、山崎茶平、山鹿清華、前田良三、福村健、佐野多景夫、岸本景春、皆川月華、島田勝四郎、服部好雅、加納白千、宇野善三、山田誠一、伊藤逸平、山本孝甫

(漆藝部)井上彦之助、岩村貞雄、井上金花、番浦省吾、戸島光阿彌、堂本漆軒、奥村究果、止原清、山田豊、迎田嘉亭、水田平一郎、鈴木貞路、山岸表壽、山田一哲、清水美象、板倉未到、尾闕成章、山野井益四郎、森元伊造、平山閑水、平石孝、森富義典、松室重信、大藏甲子、竹中微風、西澤玉舟、湯淺華曉(金工、木竹部)今大路長光、高瀬好山、國保美永峰秀作、西屋庄三、野呂天潤、田中保藤澤伸一、中野平一

京都工藝美術協會 京都府廳經濟部

京都工藝界の各部門、各流派の作家を網羅して相互の聯絡統制を圖り京都工藝界の全面的進出を圖るを目的とす。毎春京都市及東京市に工藝展を開催、勸奨を爲して新進作家を世に紹介する。機關誌發行。

〔名譽顧問〕中澤岩太(會長)安藤狂四郎(副會長)加賀屋朝藏、竹上藤次郎、評議員四十一名、會員五百名

京都染織藝協會(工) 京都市左京區岡崎北御所町三七、山鹿清華方

昭和十五年八月創立、京都の染織刺繍藝術の作家を以て組織、展覽會を開催す。〔會員〕石田玉英、今西良夫、岩崎眞也、稻垣稔次郎、箸尾清、箸尾昇、八田泰造、山鹿清華等四十餘名。

京都漆藝院(工) 京都市左京區淨土寺西田町一二、戸島方 電上局七九二五 大正十年創立の京都漆光園を昭和二年京都漆匠會と改稱したが、同十三年日本

漆畫院と合流し、現稱に改めた。漆器部
漆畫部の二部を設け、昭和十四年第一回
展を開催した。

〔院長〕戸島光阿彌〔幹事〕板倉未到、
西村平市、大野龍之介、中井清隆、山野
井藤四郎、冬木春翠、平山樂水〔會員〕
五十五名。

京都裝飾藝術協會 京都府伏見桃山
宗和園

昭和二年七月設立。織染繻及其他の装
飾藝術の向上普及を圖るを目的とす。作
品展覽會、互評會、講演及出版等の事業
をなす。

〔總務〕澤田宗山〔理事〕箸尾清、狩野
秀峰、岸本景春、山田江秀、井田宣秋、
小林文齋、吉田玉城、櫻田光可、其他會
員三十八名、顧問六名

京都青年美術家クラブ〔綜合〕 京都
市河原町二條下ル、河原町ビル内

昭和十二年五月創立。京都在住青年作
家日本畫六十八名、洋畫三十六名、彫刻
四名、工藝二名に依り組織。相互批判を
通して懇親裡に京都美術界の革新向上に
資せんとするもの。月例研究會の他、講
演會開催。

〔幹事〕樋口富麻呂、北脇昇、井上和雄
政田英三、奥村厚一、川口金作、西垣壽
西田信、戸島宇雄、木村廣吉

京都彫塑家聯盟〔彫〕 京都市左京區
修學院大町一六、松田尙之方 電山端
一〇八番

昭和十五年九月創立。京都府に居住す
る彫塑家を以て組織し、一、製作の自肅

強制、二、製作に必要な物資の共同購
入、三、鑄造部の設備、四、展覽會の開
催を目的とす。

〔會員〕西川享、德力牧之助、大西三四
助、岡本庄三、吉川當雄、田中源三、村
井次郎、國安稻香、矢野判三、山本節郎
松田尙之、松尾薫、藤林重治、河野薫郎
若田政一、島津良藏、柴田利彦

京都陶磁器工業組合 京都市東山區
五條通東大路東入 電祇園一二五〇

昭和九年十二月設立認可。製作品検査
共同販賣、金融統制等の事業をなし同地
方美術陶磁器の産業化を計る。

〔理事長〕淺見五郎助〔副理事長〕藤岡
幸二、組合員五百八十五名

京都美術家クラブ 京都市河原町三
條朝日新聞社京都支局内 電上七二〇〇

昭和十二年八月設立。京都在住の美術
家並評論家の親睦團體。毎月例會を開催
〔理事〕石崎光瑤、宇田萩郎、山口華楊
塚本一洋、森守明、黒田重太郎、須田國
太郎、松田尙之、清水正太郎、皆川月華

〔幹事〕櫻井義臣、佐久間義雄
行人社〔洋〕 東京市淀橋區東大久保
一ノ三五七、岡田一馬方 電四谷九三七

昭和四年創立。年一回展覽會開催。
〔會員〕金原五郎、齋藤三男、安達眞太
郎、中村節也、白石隆一、倉員辰雄、新
道繁、佐藤章、水船三洋、井上脩、福原
達朗、岡田一馬、小林榮

金城畫壇〔日、洋〕 金澤市下新町四
山科杏亭方
大正十四年石川縣の畫家に依り組織。

〔會長〕中島德太郎〔同人〕市川昌徳、
原田太致、田邊榮次郎、山科杏亭等十五
名。

銀座美術協會〔洋〕 東京市京橋區銀
座四丁目三和ビル 銀座聯合會事務所内
昭和十一年二月房野德夫の發起にて創
立。同年四月銀座聯合會後援の下に銀座
通兩側商店ウインドウに洋畫展開催。

〔會員〕井手坊也、房野德夫、島津一郎
石川滋彦、木下幹一、川端實、富川潤一
三輪孝、沼田一郎、大貫松三、島崎政太
郎、副島秀生、黒田頼綱、眞木小太郎、
須田壽、千葉衛、笹岡了一

黒門會〔洋〕 東京市世田谷區北澤二
ノ一九六、東郷方 電世田谷二四三一
有島生馬の恩顧を受けた洋畫家の有志
が組織した會で、年一回展覽會を開く。

〔會員〕林俊衛、碇伊之助、岡田謙三、
兒島善三郎、小山敬三、島崎雞二、中川
紀元、海老原喜之助、東郷青兒
華嚴社〔日〕 東京市下谷區谷中坂町
七九、田口勝三郎方

昭和四年、故小堀朝音、小杉未醒、荒
井寛方等の主唱により栃木縣の出身在京
日本畫家有志を以て組織。隔年東京及郷
土に展覽會を催し、後進の誘導に任ず。

〔理事〕石川宰三郎、田口勝三郎〔會
員〕小杉放庵、荒井寛方、松本委水、福
田浩湖、關谷雲唄、岡田蘇水、小林草悅
武井晃陵、河内舟人、大貫鏡心

形象工藝美術會〔工〕 大阪市東成區
勝山道八ノ四〇六

昭和十四年五月創立。工藝美術の向上

を圖るを目的とし、工藝の作家及批評家
を以て結成す。毎年展覽會開催の豫定。
〔會員〕〔顧問〕白川朋吉、入江來布、
今井千尋、羽原秋芳、中條義男、小澤裕
大國壽郎、河合壽成、川口虛舟、橋外波
川邊竹雲齋、津田禎二、根箭忠縁、中島
豐次、黒岩淡哉、山本笙園、安原祥窓、
深田駒吉、越田尾山、古賀藤々、小林美
春、會田裕宣、坂口宗雲齋、柴崎風岬、
島野三秋、日比野近三、平松宏春、杉田
禾堂、中島義夫、芳武茂介

昭和通リ二ノ七、辻方

昭和十三年辻光典主宰の下に東京美術
學校工藝科出身者を以て組織す、同人展
開催。

〔會員〕辻光典、吉田丈夫、染川鐵之助
篠井欽治、美輪智一、田澤清美

乾坤社〔日〕 大阪市外枚方町御殿山
電二六二

昭和十四年秋、大阪、東京に第一回の
公募展を開催した。

〔同人〕矢野橋村、矢野鐵山、小松均
〔社友〕三十二名

園外社〔日〕 大阪府池田市滿壽美六
五二、瀧秋方方

昭和十四年十月瀧秋方を責任者として
創立。あらゆる流派を超越し野逸性ある
作家と共に新日本畫の確立を期する。同
十五年三月大阪及び東京に公募展開催。

〔顧問〕小杉放庵〔會員〕瀧秋方、渡邊
大虛、八百谷大樹等

建築學會 東京市京橋區銀座西三ノ

一 電京橋一三三二、一三三八

明治十九年創立。社團法人組織。建築に關する學術技藝の攻究發達を圖るを目的とす。月刊「建築雜誌」、其他圖書の刊行、建築に關する調査研究、講演會、展覽會の開催等を行ふ。

〔會長〕内藤多伸〔會員〕一萬二千名

現代工藝作家協會〔工〕 東京市品川

區上大崎長者九二六一、大隅爲三方

昭和十五年創立。新人の發見、新素材の研究獎勵、我が國固有技法の保存等を

趣旨とす。同年十一月、日本橋高島屋に

公募による第一回展開催。出品者は會員

の推薦によるもの、鑑査合格者等である。

〔顧問〕侯爵細川護立、子爵岡部長景

〔會長〕川崎克〔常任理事〕大隅爲三、

森田龜之助、評議員二十五名、名譽會員

十三名、會員七十余名

現代美術展覽會〔日、洋〕 東京市中

野區野方町二ノ一二六八、現代美術協會

内 電中野三五七一

現代美術社主催公募。昭和十六年五月

東京府美術館に第三回公募展を開催。

〔同會第三回展査査員〕〔第一部〕奥村

土牛、金島桂華、中村岳陵、山口蓬春、

福田平八郎、宇田萩郎、前田青郎、小野

竹喬〔第二部〕金山平三、安井會太郎、

牧野虎雄

古伊賀復興會〔工〕 東京市品川區下

大崎一ノ九四、川崎方 電大崎一〇五〇

大正十年三月發會。古伊賀燒の復興を

目的とす。展覽會を開催。

〔會長〕川崎克

互陽會〔洋〕 東京市澁谷區若木町三

二 土屋實方

昭和十三年創立。春陽會系作家を以て

組織し、毎秋同人展を開く。同年十二月

銀座資生堂に第一回展開催。

〔會員〕中谷泰、土屋實、二見利節、高

木勇次、藤野龍、角南松生、伊川鷹治

興亞美術聯盟〔洋〕 東京市目黒區原

町一三五五、齋藤種臣方〔中支事務所〕

中支那上海施高塔路四達路新四達邸一號

田代博方

昭和十四年結成。繪畫を通して善隣友

好の實を擧げることと目的とする。

〔會員〕齋藤種臣、倉垣辰夫、小川智、

池邊一夫、清水七太郎、衛天霖〔北支〕、

深澤省三〔蒙疆〕、田代博〔中支〕

工華社〔工〕 東京市小石川區宮下町

六〇、深瀬嘉臣方

昭和六年設立。工藝の研究並に發表の

團體。年一回展覽會開催。

〔會員〕長谷川昇、唐杉榮四、笠木敦次

郎、内藤四郎、山口寅男、深瀬嘉臣、小

柳今朝一、湯川豊、島崎正二郎、下暢

工畫會〔工〕 京都市中京區蛸薬師新

町西入、梅原榮二路方 電本局一三二三

昭和九年創立。染織圖案家を以て組織

し、工畫の創作に努む。毎年一回以上展

覽會開催。

〔會員〕小合友之助、横山英明、中村聰

生、梅原榮二路、山田泰三、麻田辨次、

佐藤久吉、平尾周叟

工藝技術官協會 商工省化學局内

昭和十三年五月、從來の圖案技術官協

會と木漆金工技術官協會とを合併して、新に同協會を創立した。廣く我邦工藝産業の改善發達を企圖し、各方面の調査研究と會員相互の業務上の連絡並に親睦を圖る。會員百二十一名。

工藝濟々會〔工〕 東京市澗野川區田

端町四三八、香取方

大正十四年創立。隨時展覽會開催。

〔會員〕板谷波山、石田英一、六角紫水

飯塚瑠珂齋、保坂光山、仰木政齋、香取

秀眞、鹿島英二、河面冬山、桂光春、堆

朱楊成、海野清、梅澤隆眞、山本安曇、

松田權六、佐々木泉堂、都筑幸哉、北原

千鹿、清水龜藏、森川紫山

工藝美術作家協會〔工〕 東京市下谷

區谷中眞島町一、平出敏方

昭和十五年十月創立。

會員は「一、舊帝展又ハ文展第四部ニ

一回以上入選シ且ツ現在ニ於テ各種工藝

美術展覽會ニ自己ノ製作ヲ發表シツツア

ルモノ。二、前項ニ準スル作家ニシテ本

會委員會ノ承認ヲ經タルモノ。」

下記の事業を行ふ。「一、國策ヲ基調ト

スル工藝美術ノ全般的研究並ニ實行。一、

工藝美術各般ニ付當該官廳へ建議又ハ諮

問ニ對スル答申。一、製作資材等ニ付關

係官廳トノ連絡。一、研究事項ニ付各專

門機關トノ聯絡。一、官設展覽會へノ積

極的參加。一、新人作家へノ援助育成。

一、新材料及ヒ新技術ノ研究紹介指導。

一、特殊技術保存ニ關スル調査及研究。

一、輸出工藝面トノ折衝。一、工藝美術

振興ニ關スル講演及出版。」

〔會長〕澤田源一〔顧問〕永井浩、本田弘人、牧橋雄、長谷川公一、香取秀眞、板谷波山、清水龜藏、津田信夫、富本憲吉、清水六兵衛、六角紫水、委員四十余名。

工藝美術批評家協會 東京市京橋區

銀座西五ノ三、大野法律事務所内 電銀

座一三四七

昭和十三年創立。「嚴正なる工藝美術

批評の確立を期して研究會を開きパンフ

ツレットを發行す」。

〔會員〕大山廣光、大島隆一、柴崎風岬

光風會〔洋、工〕 東京市杉並區西荻

窪三ノ一二九、太田三郎方 電荻窪二九

二二三

明治四十五年創立。舊帝展系洋畫家の

團體。春季洋畫及び圖案工藝の公募展を

開催。昭和十六年二月第二十八回展を東

京府美術館に開いた。

〔會員〕石川欽一郎、石橋武助、池上浩

石川滋彦、井手坊也、伊藤悌三、岩崎勝

平、伊藤四郎、岩船修三、服部亮英、橋

口康雄、星野正三、遠山清、土佐林豊夫

太田三郎、大野隆徳、岡野榮、緒方亮平

大澤海藏、小川智、大河内信敬、和田香

苗、和田清、加藤靜兒、梶原貫五、河井

清一、川合修二、角野判治郎、花嚴巖、

栢森義、川端實、吉田苞、武内鶴之助、

田中實一、田村一男、相馬其一、辻永、

中澤弘光、中村研一、中田滿雄、長原垣

上野正之助、黒田頼綱、山形駒太郎、山

喜多二郎太、山崎坤象、山下忠平、岩猛

彦、牧野司郎、藤岡俊一郎、小林萬吾、

小林鐘吉、小林眞二、小寺健吉、小絲源太郎、江藤純平、寺内萬治郎、跡見泰、赤城泰舒、安達眞太郎、朝井閑右衛門、鮫島利久、鬼頭鍋三郎、清原重以知、南薰造、南政善、三宅克己、耳野卯三郎、水上信雄、清水良雄、島野重之、新道繁白川一郎、市ノ木慶治、平岡權八郎、森山肇、杉浦非水、鈴木榮二郎、杉村惇、須田剋太〔會友〕池田快三、妹尾壽信、伊藤應九、西山眞一、戸塚孝三郎、岡田又三郎、小田忠、大富隼雄、渡邊武夫、數見定一、反町博彦、高橋道雄、田中義夫、高宮一榮、高木春太郎、巽勇、辻光典、中谷ミユキ、中上川蝶子、中尾達、黒田久美子、山中清一郎、益山雅衛、藤井芳子、藤彦右衛門、藤江理三郎、藤本東一良、小林貞三、足立眞一郎、木村八郎、神保利幸、白井次郎、白石隆一、本儀信、森田元子、森棟澄子、瀬戸千代三〔昭和十六年九月現在〕

神戸實用新美術協會 神戸市神戸區榮町通五ノ三〇、瀧山金市方

昭和七年五月創立。舊稱神戸創作圖案協會。商業美術の向上と研究とを目的とす。

〔會員〕渡邊正雄、梶原庄之助、土谷勇、藤井郁博、青木宣二郎、南正光、樋口芳太郎、關山金市

高知縣工藝協會 高知市丸之内、高知縣廳商工課

縣下工藝の綜合的發達を圖るを目的とし、工藝品の研究指導、展覽會、講演會の開催、他展への出品販路斡旋等を行ふ。

會員九十名

〔會長〕縣經濟部長菅野一郎〔副會長〕商工課長寺川喜代治、山本輝美

浩然社〔日〕 東京市中野區榮町通二ノ二、高橋慶伸方

荒井寛方門下に依り組織。毎月研究會を開く。昭和八年第一回展開催、十三年六月第六回に至る。

〔指導者〕荒井寛方〔幹事長〕高橋慶伸〔幹事〕笹沼寛祐、座間素賢、菊池公明、鈴木三朝、佐藤耕寛、廣原浩暉〔會員〕石澤孝輔、磯部白鳩、今田青宏、西木爲雄、常盤大空、大西郷島、渡邊明洋、神田好司、瀧澤直七、田中茂雄、深見月光塚本政子、中村春泥、山下浩素、仙田青也、關口眞緒、木村光甫、井出岳水、中川博江、佐藤一鳳、河内舟人、時田南鳳、六川水聲、松本渡、赤松惠園女、田山正臣、黒崎慧美

紅日會〔日〕 東京市下谷區谷中眞島町七、横山孝行方

昭和十年故松岡映丘門下による創立。大和繪研究並發表機關。同年六月日本橋高島屋に第一回展開催。

〔顧問〕服部有恆〔同人〕林雲鳳、橋本明治、河村東次郎、横山孝行、中村徳二名古屋謙一、森村稻門

皇國藝術京都聯盟 假事務所 京都市東山區山科毘沙門道、杉本哲郎方

昭和十六年六月創立。國防國家建設途上に於ける美術の文化的使命を期し、展覽會、講演會等を行ふ。

〔理事長〕杉本哲郎〔理事〕岡山聖虛、

平井椽仙、内藤礎土、角田素江、久保飛路史、小早川好古、後藤秋崖

臯陶會〔工〕 東京市目黒區下目黒四ノ八四二、安原喜明方

昭和十四年結成。窯業工藝の進展を期す。

〔顧問〕板谷波山〔會員〕板谷梅樹、各務鐵三、安原喜明、宮之原謙

煌土社〔日〕 東京市杉並區上高井戸町五ノ一八九〇、野田九浦方

野田九浦の塾、居仁洞の改稱。昭和十四年四月日本美術協會にて第五回展開催

構造社〔彫〕 東京市豊島區池袋二ノ一〇九一安永方・電大塚一八四四〔呼出〕

大正十五年九月立體藝術の研究及發表を目的として齋藤素巖、日名子實三の兩人を以て發會、昭和二年東京府美術館に第一回展を開いた。同年平井爲成の入會により洋畫部を設け、次で神津港人が入會した。三年構造社彫塑研究所を開設。

七年九月第六回展の終了後齋藤素巖退會を宣言、會内に紛擾あり、日名子實三、清水三重三が脱會し、一時同會解散を聲明したが、それを取消して事務所を神津方に移し、彫塑研究所を閉鎖した。八年齋藤素巖復歸し、九年會則を改め新會員彫塑部三十三名、繪畫部二十一名を加へた。十年五月齋藤素巖帝國美術院會員となる。六月齋藤、濱田、陽三名を残し彫塑部全會員が一時退會したが内十名は留任。同月神津港人退會、又構造社幹事會の決議によつて繪畫部を解消した。十年九月寺畑助之丞退會。尙構造社彫塑研究

所は十年より再會されてゐる。昭和十六年四月東京府美術館に於て第十四回展を開催した。

〔會員〕河村龍興、中野五一、野村公雄、安永良徳、後藤精一、齋藤素巖、進藤武松、袖月芳、宮地寅彦〔會友〕星野健一、淺沼俊雄、山畑阿利一、小口節二、森本清水、井手則雄

曠技會〔彫〕 東京市淀橋區十二社四二〇、吉田宗齋方

東京彫工會が大正十三年解散して日本美術協會に合併後、第七部の牙彫家が大家會を組織、後曠技會と改稱したものである。象牙彫刻の向上に努め展覽會を開催する。

〔委員長〕吉田宗齋〔顧問〕中山昇民、森田藻己、藤田景雲、篠秀一、石坂錦一〔代行委員〕竹内土生、菊地親章、吉田尚秋、内田祐康〔委員〕安藤文雅、安藤綠山、松田道直、田中秀行、堀志光、平賀明吟、小川流水、今井雅邦〔會員〕三十九名

國畫院〔日〕 東京市豊島區巢鴨五ノ一一四一、吉村忠夫方

昭和十年九月故松岡映丘盟主となつて設立。同十三年松岡映丘逝去するに及び國畫院研究會を結成、展覽會を開かず、研究團體として存續することとなつた。

〔同人〕岩田正巳、服部有恆、長谷川路可、狩野光雅、吉田秋光、吉村忠夫、遠藤教三、穴山勝堂

國畫會〔洋、工、寫眞〕 東京市品川區北品川三ノ三一二、益田方 電大崎三

〔同人〕(繪畫部) 青山義雄、池邊貞喜、梅原龍三郎、大森啓助、大谷房吉、仰木茂、仰木ゲルトロード、大淵武夫、柏木

俊一、河野通勢、久保守、庫田葵、佐藤哲三、佐藤豊吾、清水多嘉示、立石鐵臣、土田文雄、辻愛造、椿貞雄、杉本健吉、中村博、野島照正、長谷川春子、平塚運一、藤田太郎、別府貫一郎、眞垣武勝、益田義信、富田重雄、宮坂勝、村上嚴、馬越樹太郎、山田正、山村誠、山脇信徳、山下品藏、香月泰男、中村鐵(版畫部)恩地孝四郎、川西英、平塚運一、ブノワ、棟方志功(工藝部)石井恒、仰木ゲルトロード、奥村博史、富本憲吉、北出塔次郎、内藤四郎、福田力三郎、山永光甫

國畫工藝協會 東京市瀧野川區中里町三三六、矢部連兆方 電駒込二二一 國畫會の工藝部同人が組織する研究會〔會長〕富本憲吉〔役員〕奥村博史、山永光甫、内藤四郎、矢部連兆、福田力三郎、德力孫三郎、北出塔次郎、平野利太郎、稻垣稔次郎

國際人形協會 東京市品川區南品川三ノ一五一七 電高輪六四七〇 昭和十一年十一月發會。日本人形の實際的進出、人形製作技術の指導、人形の普及等を目的とす。

〔理事〕有坂與太郎、横山正三、成舞平兵衛

國土會(洋、彫) 東京市牛込區若松町一二三、青木具也方 日本主義に立脚して、繪畫、彫塑の創作に向ふ。同人展を開く。會員十名

國風畫會(日) 東京市杉並區天沼二丁目三一 昭和五年十一月創立。倭繪の進歩發達

を圖るを以て目的とす。創立後間もなく同人一同の謹作に係る伊勢物語繪卷を陛下に獻上す。毎月研究會を開き又隨時作品發表を爲す。

〔會頭〕子爵入江爲守(幹事) 岩田豊磨〔會員〕安田毅彦、磯田長秋、大坪正義、棚田曉山、川崎小虎、永井幾麻、前田氏實、小山榮達、荻生天泉、公文蘆淵、兒玉輝彦

國風彫塑會(彫) 東京市荒川區日暮里渡邊町一〇四〇、石川方 電駒込二六九七

「民族彫塑の創造と建設」を目標とする同會は、元第三部會が昭和十五年十一月改稱せるもので、十六年九月第七回國風彫塑會展を開催、今日に到る。

〔會員〕石川確治、濱田三郎、向山峽路 早乙女龜次、日名子實三、鈴木賢二(會友) 永原廣、新關國臣、大木芳朗、名久井十九三、田村辰治、瀧川藤一郎、成田政男、石塚裕康

國民總力朝鮮美術家協會 京城府蓬萊町一ノ五四 昭和十六年二月創立。美術を通じて内鮮一體の實を擧ぐべく、展覽會、講演會機關紙發行等を行ふ。

〔會長〕總督府學務局長眞崎長年(顧問) 軍部總督府より若干名(理事長) 總督府學務局社會教育課長桂珠淳(理事) 江口敬四郎、戸張幸男、遠田運雄、大橋實等十八名、會員二百五名

國民美術協會 東京市丸之内、明治生命館マーブル内

大正元年、第六回文展洋畫部の出品者懇親會の席上「美術全部門を包容する協會組織」の設立が發議され、翌二年三月創立總會を開催、森林太郎、黒田清輝、岩村透、松岡壽、和田英作の五名が理事となつた。同會は作家並美術關係者を以て組織し、繪畫(日本畫、洋畫)彫塑、建築、裝飾美術、學藝の五部を設置し、藝術家共通の利益擁護並美術の社會的普及を圖るを以て目的とする。既往に於ける主要なる業績は大正年間に於ける美術館建設、美術學校改革、裸體畫取締り、文展工藝部増設等の美術行政上の諸問題に關する政府當局への進言及數回に互る佛蘭西及獨逸現代美術展覽會の開催等で尙前後十二回に互り本會員の綜合展を開催したが昭和三年以後中止となつた。

〔理事〕小倉右一郎、黒田鶴心、小寺健吉、菅原榮藏、津田信夫、西澤笛畝

國民美術研究所 東京市小石川區小日向水道町五三 電大塚六〇六八 昭和十六年八月創立。美術に關する出版、展覽會開催等を行ふ。

〔理事長〕芳川起(理事) 高木紀重、高田俊郎(評議員) 浦崎永錫、中山貞夫、大山廣光

國策宣傳美術教育協會 東京市淺草區芝崎町二ノ三、淺草女子商業學校内 電根岸五九二

舊稱全國商業美術教育協會。昭和十一年全國商業學校百一校の聯合に依つて設立。事業として年一回展覽會を開催、會報を發行し、又商業美術に關する教材の

美術家團體一覽

交換、頒布等を行ふ。

〔會長〕伯爵松平頼壽〔副會長〕小林愛雄、安藤弘〔理事〕九名

早苗會(日) 京都市釜座二條下ル、三宅風白方

故山元春舉の遺業を繼承す。年一回展覽會を開催し、又月次研究會、講演會を開く。

〔會長〕川村曼舟〔參事〕山元清秀〔評議員〕庄田鶴友、山下竹齋、玉舎春輝、久保田竹文、林文塘、高橋秋華、岡文濤、船川華州、伊藤溪水、植中直齋、山元櫻月、中島春鳴、小早川秋聲、柴田晚葉、古谷一晃〔常議員〕玉舎春輝、山下竹齋、古谷一晃、堀江春露、案本一洋、武田鼓葉、齋藤柴山、三宅風白、中野草雲、佐々木春華、勝田哲〔幹事〕貴道草衣〔副幹事〕高木富三、齋藤和秀〔會計〕谷口英雄

佐賀縣工藝協會 佐賀縣經濟部商工課内

昭和十一年設立。縣特産工藝品の産業化並その海外的進出を圖るを目的とし、工藝資料の蒐集展示、作品展、競技會の開催、宣傳等を行ふ。

〔會長〕佐賀縣經濟部長 佐賀美術協會(綜合) 佐賀市興賀町精町、山口亮一方

大正三年久米桂一郎、岡田三郎助を指導者として、佐賀縣出身の美術同好者に依り組織。郷土美術の啓蒙を趣旨とす。

年一回公募展開催。會員三十八名 皇月會(工) 東京市豊島區駒込三ノ

三九九、山本安曇方

昭和十一年第一回展開催。十四年第四回展開催。會員の新作を發表する。

〔會員〕板谷波山、石田英一、飯塚琅玕齋、六角紫水、保坂光山、仰木政齋、香取秀眞、桂光春、鹿島英二、河面冬山、堆朱楊成、都筑幸哉、海野清、梅澤隆眞、山本安曇、松田權六、佐々木象堂、北原千鹿、清水龜藏、森川紫山

彩交會(日) 名古屋市熱田區玉ノ井町八二、石川英風方

大正十年創立。舊名愛土社。名古屋市在住及同市出身にして京都に在住する京都繪畫專門學校卒業生を以て組織。

〔會員〕織田杏逸、和田青雨、石川英風等三十餘名

埼玉縣工藝協會 埼玉縣廳商工課

昭和九年七月創立。縣下工藝の産業の發達を圖り業者約三十名を以て組織。展示會、講習會の開催、出品斡旋、意匠圖案の配布等をなす。

〔會長〕經濟部長 遠山信一郎 催青會 東京市品川區大井伊藤町五七七八、渡邊進方

昭和十三年二月創立。同人展を開催す。〔會員〕池田榮一、石井了介、渡邊進、金井正、谷とし子、高濱虎喜、津谷鹿市、中西義雄、奥田まち子、岡村進、山崎省三、山本鼎、政森敏男、湯尾留吉、三澤正三

練尚會(日) 東京市麹町區九段四ノ一五、關尚美堂方 電九段二六〇二

關尚美堂が主催の日本畫展。

〔會員〕磯田又一郎、橋本明治、西村卓三、西山英雄、奥田元宋、奥村厚一、加藤榮三、村田泥牛、山本丘人、新井勝利、三谷十糸子、菊池隆志、高橋周桑、江崎孝坪、寺島紫明

讀岐美術協會(日、洋) 高松市兵庫町、古木堂本店内 電二七〇一

昭和四年創立。地方美術の向上發達を圖る。毎年一回公募展を開催し、講習會寫生會等を行ふ。昭和十二年二月高松三越に第八回展開催。

〔會員〕井川敬逸、小西光雄、高橋正三、谷口國介、神内正芳、岡田秀雄、黒田純二、小川誠一、高木靜雄、高尾雄次、中村重幸、本多一郎、藤田四郎、河部基一、平井爲成

三春會(洋) 東京市本郷區森川町四二、野崎方

昭和三年度東美校洋畫科卒業生を以て組織。十六年五月東京府美術館に第八回展開催。

〔會員〕岩田芳助、伊勢幸平、波多野勝好、二宮不二齋、和佐良顯、大澤昌助、奥村義雄、加藤顯清、飯島誠二郎、勝見謙信、田中致美、田中孝夫、田淵巖、竹田讓、中井惣之助、野崎龍雄、山村孝太郎、山口猛彦、安田岩次郎、丸山清六、松原勝、福島順之助、小松原義則、天野武吉郎、淺井景一、佐藤文雄、佐藤功、佐川源治、三木辰夫、加藤久幹、原田直康、關谷陽、杉山榮、鈴木重成、林清

三都工美會(工) 大阪市住吉區北畠東一ノ二四、汎工藝社内

昭和十五年四月創立。東京、京都、大阪の三大都市に在住する工藝家を以て組織し、汎工藝社主宰柴崎風岬が會の運用を計り、年一回展覽會を開く。

〔贊助員〕板谷波山、香取秀眞、津田信夫、沼田一雅、清水六兵衛、山鹿清華、戸島光阿彌〔會員〕五十餘名 山南會(日) 京都市右京區太秦組石町、徳力方

故土田麥偃の門下が昭和十四年十一月

結成した會で、研究並に發表を行ふ。

〔會員〕伊藤草白、稻田麥楓、原田美智恵、徳力富吉郎、築地徹三、千地瑠弘、萩原涌石、恩田耕作、川勝一止、高橋太三郎、丸岡比呂史、松山政春、松本晃光、福田豊四郎、小松均、小柳泰然、江龍白岑、木村楊照、清水洵平、山林文子、吹田草牧

珊々會(日) 東京市日本橋區通二丁目、高島屋美術部

高島屋美術部主催。昭和十六年六月第七回展開催。

〔會員〕西山翠嶺、鑄木清方、菊池契月、結城素明、上村松園、小杉放庵

産業工藝社 大阪市浪速區惠美須町二ノ一四六 電戎一九四、七五一

京阪神地方を中心とし、産業工藝に關する調査、指導獎勵、海外紹介を行ふ。機關誌「産業工藝」の編輯をなす。

〔主事〕上田儀一 産業美術振興運動

廣告美術作品展覽會 大阪市北區堂島、大阪毎日新聞社事業部内

大阪市北區

大毎事業部の主催する産業美術振興を目的とする展覧會で、年一回新聞廣告圖案並にポスター圖案及び染織圖案の懸賞公募による展覧會を開催す。昭和十六年春東京及大阪に第十回展を開催。

燦木社(日) 東京市板橋區中村町三ノ六二二、東谷桃園方

大正十五年五月創立。東美校圖書師範科出身の在京日本畫家有志を以て組織。年一回展覧會開催。

〔會員〕穴山勝堂、山田義雄、東谷桃園、松垣芳夫、小林澄心、福宿一穂、中居良次、藤原鶴春、山田武、石井進、原竹男、志津輝雄、永山利男、大橋太郎、川合清

四元莊(洋) 東京市淀橋區東大久保一ノ三五七、鈴木繪畫研究所内

昭和十一年十月鈴木千久馬門下に依り組織。

〔莊首〕鈴木千久馬〔同人〕倉員辰雄、安藤信哉、新道繁、外十三名

四行會(洋) 東京市豊島區池袋四ノ四四五、齋藤福藏方 電大塚二五〇一 獨立展所屬の作家四名を以て組織。展覧會を開催する。

〔會員〕竹中三郎、中尾彰、佐藤英男、富樫寅平

滋賀縣工藝協會 滋賀縣經濟部商工課内

縣下工藝の發達を圖り、展示會其他を行ふ。

〔會長〕縣經濟部長 滋賀縣案會 大津市東浦、縣物産陳列場 電大津一四五七

昭和三年創立。滋賀縣内各指導機關に於ける圖案關係技術者を以て組織。縣内の物産及工藝品の意匠圖案の向上を計るため展覧會、講演會の開催、現地指導視察旅行等をなす。

〔會員〕深澤和美、村瀬眞治、新井武治、廣瀬義景、坪井明、藤田幸助、松宮寛明、井口俊夫

自由學園工藝研究所 東京市豊島區雜司ヶ谷六丁目

自由學園卒業生を以て昭和五年創立。工藝品の創作並に發表をなす。十三年五月以降自由學園北京生活學校に於て中國少女を指導し、工藝品の製作を行ふ。

時習園(工) 京都市東山區五條橋東四丁目、淺見五郎助方

大正九年十一月創立。嶄新なる意匠圖案の創作並に其工藝品への應用を研究するを以て目的とし、年一回作品發表を行ふ。

〔顧問〕中澤岩太〔指導者〕霜島正三郎

〔會員〕澤田宗山、稻葉七穂、淺見五郎助、井本米泉、小川文齋、中谷小太郎、池田泰山、淺見隆三、米澤蘇峰、井田宣秋、平井香秋、樫田光可、平野泰三、西澤玉舟、楠田撫泉

七絃會(日) 東京市日本橋、三越美術部内

昭和五年創立。毎年一回作品發表をなし、十六年十一月第十二回展開催。

〔會員〕楠木清方、小林古徑、菊池契月、安田敦彦、前田青郎、〔物故會員〕平福百穂、速水御舟、土田麥僊、西村五雲

七彩會(洋) 東京市大森區馬込町東三ノ八二二、長谷川春子方

昭和十一年一月結成。各派七名の女流洋畫家の組織する會。毎年、東京、大阪に展覧會開催。

〔會員〕橋本はな、藤川榮子、三岸節子、佐伯米子、遠山陽子、島あふひ、長谷川春子。

七人社(圖) 東京市牛込區東五軒町二、岸秀雄方 電牛込四二七

大正十三年杉浦非水に師事する七名にて發企、昭和元年東京三越に第一回創作ポスター展開催。圖案、商業美術、挿繪等をなす。

〔會員〕岸秀雄、岸信男、野村昇、新井參夫、關口謙輔、小池巖、金丸重嶺、原萬助、須山浩、田中富吉、毛利滋、小川金重、金田徳郎、野依健、前島誠一

七洋美術會(洋) 東京市蒲田區仲蒲田三ノ九、三木辰夫方 電蒲田二七五六 文部省航海練習所の練習船に便乗した畫家を以て組織する。海洋美術の研究、普及を目的とする。

〔會員〕竹内英雄、内堀勉、北川民次、三木辰夫、中西次郎、松下義晴、宮下仁

靜岡縣工藝協會 靜岡市追手町、靜岡縣商工課内

昭和九年設立。縣下工藝の發達を圖り工藝に關する調査研究、展覧會、講演會等を行ふ。

〔會長〕靜岡縣經濟部長 靜岡縣美術協會(綜合) 靜岡市綠町

地方美術の向上を圖る目的を以て昭和九年靜岡縣出身並在住美術家を以て組織年一回靜岡市に於て繪畫、彫刻、工藝の公募展を開催。

〔總裁〕靜岡縣知事〔會長〕尾崎元次郎〔常任幹事〕原川和雄

〔第四回展審査員〕牧野虎雄、石川欽一郎、中村岳陵、澤田晴廣、岸澤銈介

實在工藝美術會 東京市本郷區駒込林町一五五、高村豐周方 電駒込一一八二

昭和十年十月創立。從來の帝展第四部の鑑賞本位にのみ向ふ傾向にあきたらず、「工藝の實在性」に新境地を開拓するを目的とす。十一年度より春季公募展秋季同人展開催。尙十五年度は奉祝美術展參加のため恒例の公募展を臨時中止した。

〔會員〕豐田勝秋、河村喜太郎、吉田源十郎、高村豐周、内藤春治、山崎覺太郎、丸山不忘、新井謹也、佐藤陽雲、木村和一、廣川松五郎〔會友〕磯矢阿伎良、西村敏彦、大坪重周、金丸重嶺、武樋貞波、留、中村董一、山脇敏子、山脇道子、松崎福三郎、深瀬嘉臣、小畑雅吉、清水巖、森耀一郎、八井孝二、渡邊春男、山本壽會田裕宜

芝浦工藝會 東京市芝區西芝浦一、東京高等工藝學校内

東京高等工藝學校出身者、及び同校關係者を以て組織す。

〔會長〕鈴木京平〔副會長〕鎌田彌壽治

〔幹事長〕杉山豊桔、會員二、二五〇名 支部二十ヶ所

島根縣工藝協會 松江市殿町、島根縣物産獎勵館内 電四五

昭利九年七月創立。同縣の工藝振興を計り縣内の工藝家、圖案家及販賣業者を以て組織し、工藝品及意匠圖案の調査研究、展覽會、競技會の開催又は助成、内外展への出品斡旋等を行ふ。

〔總裁〕島根縣知事

下萌會(日) 東京市牛込區若宮町二九、川合玉堂方

明治三十二年川合玉堂門下長流畫塾々生により組織、毎月一回定期研究會を開催し、又臨時展覽會を催す。

〔理事〕長野草風、菊池華秋、松本姿水、佐々木尙文、今中素友、兒玉希望、大島佳山、伊藤澤浦

朱玄會(洋) 東京府下武藏野町吉祥寺本田南二四〇五、栗原信方

二科會の宮本三郎、田村孝之助、栗原信の三名により組織、同人展を開く。

朱弦會(日) 東京市世田ヶ谷區代田二ノ七六三、川船水掉方

故小堀軯音の門下が組織する革丙會の會員の一部を以て結成する。大和繪の研究、國史畫の検討を目的とし、展覽會を開く。

〔會員〕安田鞞彦、川崎小虎、川船水掉、磯田長秋、小堀安雄、森戸果香、眞野滿、羽石光志

朱葉會(洋) 東京市淀橋區下落合一ノ五四〇、大久保方 電大塚四〇三七

大正七年創立。年一回公募展を開く。〔會員〕土肥正枝、達山陽子、大久保百

合子、大久保爲世、龜高みよ子、吉田ふじを、谷島豐子、谷貞子、八星三代、秋元松子、宮崎美喜、平岩夏子、一木徹子

徳川禮子、仰木ゲルトルド、黒瀬雅子、山口葉子、櫻井その子、下田愛子、友田みね子、小野信子、尾關梅子、渡部百合子、中山時子、村井静江、藤川榮子、藤江志津、安藤孝子、佐藤敦子、佐伯米子

本間瀧子、島あふひ、岡本みち子(會友)七名

聚工會(工) 東京市豊島區雄司ヶ谷町一ノ三四七、磯矢阿伎良方 電牛込二三一四

昭和八年解散の凸凹會々員を中心に昭和十年六月結成。工藝各科作家の集團、相互の研究並親睦機關。

〔會員〕磯矢阿伎良、武樋貞波留、田中武雄、多田茂吉、宮井連平、三好弘、清水巖、森羅一郎(地方會員)八井孝二、大原彰、武田武文、松崎福三郎、小泉清一、安部郁二、高見九藏、山本達次(客員)安藤春治

十年社(日) 東京市淀橋區下落合一ノ一六八八、石田粧春方

大正十年度東美校日本畫科卒業生に依り組織。展覽會開催。

〔同人〕池田幸太郎、中井三介、石井巖江、平岩三陽、石田粧春、小野踏青、畠山錦成、山崎良夫、長谷川路可、柳晴一、花村晃歡、中村青以、楠本千花俊、遠藤敦三

春光會(洋) 西宮市神樂町四一、伊藤慶之助方

春光會(洋) 西宮市神樂町四一、伊藤慶之助方

春陽會、新興美術展の出品者にして、伊藤慶之助の指導下にある洋畫家の集團。昭和九年以降毎年大阪、神戸に展覽會開催。會員四十五名

春虹會(日) 東京市日本橋、三越美術部氣付

三越の主催で昭和十年京都在住の畫家十余名を以て組織。毎春東京、大阪の三越に展覽會開催。同十六年第七回展開催

〔會員〕板倉星光、石崎光瑤、西山翠峰、堂本印象、徳岡神泉、小野竹喬、川村曼舟、金島桂華、竹内栖鳳、中村大三郎、宇田萩郎、上村松園、山口華楊、窓本一洋、福田平八郎、禰原紫峰、菊池契月、三宅風白、三木翠山

春臺美術會(洋) 東京市麻布區網代町一ノ十號、内藤謀方 電三田四七八五

大正十年本郷研究所有志に依り赤淘社繪畫展が組織され、同十三年迄四回の展覽會を開いたが、同十四年之を解散し改めて本郷繪畫展を組織し、會長に岡田三郎助を副會長に片多徳郎を推して同年より毎春一回展覽會を開催、昭和五年「春台美術展覧會」と改稱、昭和十四年九月岡田會長逝去に依り組織を改め同十六年一月公募展として第十六回展開催。

〔顧問〕和田三造、辻永(賛助)中村研一、太田三郎(委員)岩崎勝平、石川滋彦、緒方亮平、和田清、内藤求、江藤純平、有岡一郎、笹鹿彪、鬼頭鶴三郎、關口隆嗣

春泥社(日) 京都市富小路二條南、福村方

春泥社(日) 京都市富小路二條南、福村方

昭和十二年五月結成。關西の婦人日本畫團體。同十三年九月京都大丸に第二回展開催。

〔會員〕生田花朝、丹羽阿樹子、大日三世子、梶原緋佐子、藤本園子、小松華影、秋野不矩、木谷千種、三谷十糸子、廣田多津

春陽會(洋) 東京市杉並區利田本町八三二、木村莊八方 電中野四二四七

大正九年秋、藝術の自由を唱へて日本美術院元洋畫部を脱退した小杉未醒、山本鼎、倉田白羊、森田恆友、長谷川昇、足立源一郎の六名は同十一年一月、新歸朝の梅原龍三郎を加へ、更に九名の客員を迎へて同會を創立した。發會に際し

「春陽會は從來屢々見たる如き既成會への社會的對抗として興らず、單なる藝術家の心を以て因縁相熟したるものです」と聲明した。翌年五月上野竹之臺陳列館に第一回展を開き、爾後毎年春季に公募展を開催し、又東京開催後大阪、名古屋等に地方展を催して居る。昭和四年春陽會研究所を開設し十二年迄續いた。昭和十年帝院改組に際し、同會はその試案を提出したが結局新帝展の機構は會の理想に一致せず、其の年不参加を聲明した。

尙山本鼎、山崎省三は離脱して帝院に參加、同翌年長谷川昇、岡本一平が之に續いた。同十三年當局より文展審査員參加の交渉あり、官展機構に關する豫ての會の意見である綜合案に近い故を以て、中川、木村を審査員に送り爾後協賛の方針を持して居る。同會自營の春季展には變

春陽會は從來屢々見たる如き既成會への社會的對抗として興らず、單なる藝術家の心を以て因縁相熟したるものです」と聲明した。翌年五月上野竹之臺陳列館に第一回展を開き、爾後毎年春季に公募展を開催し、又東京開催後大阪、名古屋等に地方展を催して居る。昭和四年春陽會研究所を開設し十二年迄續いた。昭和十年帝院改組に際し、同會はその試案を提出したが結局新帝展の機構は會の理想に一致せず、其の年不参加を聲明した。尙山本鼎、山崎省三は離脱して帝院に參加、同翌年長谷川昇、岡本一平が之に續いた。同十三年當局より文展審査員參加の交渉あり、官展機構に關する豫ての會の意見である綜合案に近い故を以て、中川、木村を審査員に送り爾後協賛の方針を持して居る。同會自營の春季展には變

化はない。

〔會員〕足立源一郎、石井鶴三、伊藤慶之助、今園啓司、岡鹿之助、加山四郎、川端彌之助、木村莊八、國盛義篤、倉田三郎、栗田雄、小穴隆一、小林徳三郎、小杉放庵、田中善之助、高田力藏、島海青兒、中川一政、長谷川潔、前田藤四郎、水谷清、森田勝、横堀角次郎、若山爲三

〔會友〕岩田榮之助、上野春香、遠藤典太、小栗哲郎、大澤鉦一郎、鬼塚金華、兼平英示、木下公男、齋藤清二郎、眞田久吉、柴田恕夫、高木勇次、田中壽太郎、田川勤次、土屋義郎、津田正周、藤堂奎三郎、中谷泰、新沼杏一、南條一夫、原精一、二見利節、本莊越、楊佐三郎、吉田達磨、和田茂一

女性人形同人 東京市荏原區戸越一
二五五
昭和十一年發會。趣味涵養のための人形製作を目的とし、年一回作品展開催のほか懇談會、講習會を開く。
〔顧問〕今井邦子、與謝野昌子、有坂與太郎、會員四十六名
如水畫談會 東京市神田區一ツ橋、如水會館内
昭和七年六月創立。如水游心畫談會と稱し如水會員及其家族を以て組織。岸浪百艸居を講師とする。會員六十名
昭和工藝協會 京都市岡崎公園、京都市商品陳列館内
昭和二年創立。京都在住の各部門の工藝作家三十八名を以て組織。毎年京都及東京に於て展覽會を開催。

〔會長〕村上宇一〔總務〕霜島之彦〔顧問〕中澤岩太
昭和工藝美術展覽會 東京市日本橋區通二丁目、高島屋美術部内
昭和九年創立。舊帝展系作家の集團。作品發表、新古工藝美術の研究等をなす。同年高島屋に於て第一回展を開催、以後毎年展覽會を開く。
昭和みつゑ會 横濱市神奈川區岡野町一三一、藝能教育研究所内 電神奈川六二五
昭和十年創立。水彩畫の展覽會、講演會を開催す。
〔主なる會員〕山口敏男、桂龍雄、青野馬佐奈、東本春水、古川弘、藤田薫、石野隆、若生政夫
上社會(洋) 東京市豊島區駒込一ノ二八、藤岡一方
昭和二年度東美校洋畫科卒業生に依り組織。年一回展覽會開催。
〔會員〕林炳東、張秋海、瀨水龍、金貞探、譚連登、都相風、池田幸太郎、石井清夫、猪熊弦一郎、荻野映彦、染木煦、加山四郎、田村義夫、高橋弘二、大館健三、中西利雄、牛島憲之、矢田清四郎、深井修次、藤岡一、小堀四郎、近藤啓二、小磯良平、水上信雄、島野重之、白井次郎、日高榮聰、森寅雄、森達雄、菱田武夫、橋口康雄、高野三三雄、岡田謙三、青山襄、高嶋功、瀧波恒雄、中川規矩磨、大月源二、杉浦俊雄、永田一脩、荻須高德、山口長男、太刀川英次郎
晨鳥社(日) 京都市上京區北野紅梅町、山口華楊方
明治四十五年創立の西村五雲塾農鳥社は昭和十三年九月五雲の逝去により解散同年十一月六日舊塾生の總意に依り新たに晨鳥社を結成し、山口華楊、前田萩郎、西村卓三の三名が總務となつた。研究會展覽會等を行ふ。同人七十五名
新關西美術協會(洋) 大阪市南區南炭屋町四九、池島柳治郎方 電南九一八
關西に於ける獨立美術協會系の團體で昭和十六年十一月公募第一回展を開催した。
〔當任理事〕小出三郎、豊藤男、森有材
新古典美術協會(洋、彫、工) 東京市世田谷區玉川奥澤町一ノ一一九、金子九平次方
昭和十一年設立。舊稱新古典派協會。洋畫、彫刻、工藝の公募展を開催す。
〔會員〕金子九平次、蜂須賀年子、片山健吉、土方久功、高橋貞一郎、今西洋、小泉勝世、土田實、會友四名
新簞會(日) 京都市左京區銀閣寺前橋本關雪方 電上四六〇
大正八年橋本關雪門下に依り組織。其後一時解散したが、昭和十年橋本關雪の帝國美術院會員に任命を機とし、有志の發起に依り再興された。昭和十一年十一月、京都大丸に第一回展開催。以來引續き數回開催。
〔指導者〕橋本關雪〔會員〕檜崎鐵香、榎崎朱雀、三津川光胖、小笠原彌、川田虛舟、宮瀨泉城、竹林愛作、竹内貞親、高安龍雲、後藤香鳥、石塚仙堂、仙波久

〔幹事〕木村杏園、仙波久榮
新構造社(洋、彫、工) 東京府下小金井町四四八、三村英一方
昭和十年六月構造社有志幹事會は繪畫部の解消を決議したが同部は翌月構造社總會を招集、前記の解消宣言を「彫刻部の計畫的なる違犯行動と認め」、彫刻部會員を退會者なりとして決議し新に會規を制定して同年十一月第九回構造社繪畫展を公募の上開催した。同十一年七月寺畑助之丞を代表とする彫塑團體十七會の加盟により名を新構造社と改稱、更に工藝部を新設した。同十五年寺畑助之丞外六名が退會。
〔會員〕(繪畫部) 足立重興、内田正男、内島親晴、改井德寛、葛西康、倉本七郎、神山恒、多比羅榮一、武田芳雄、上田重正、福崎精哉、三村英一、北澤博生、中田博三、市川兼治、石田隆一、山本好信、田代一郎(彫刻部工藝部) 岡登けい子、添田賢郎、中森遊、スエタケ・タツ
〔會友〕十名〔代表〕三村英一
新興美育協會 東京市豊島區堀内町三〇 電大塚二五一八
昭和九年二月創立。學校教育に於ける圖書、工作及び作業科教育の擴充を圖り隨時、會報及研究、パンフレット等を發行する。
〔理事長〕石野隆
新興美術院(日) 東京市下谷區竹町九五、芝垣興生方

〔會友〕十名〔代表〕三村英一
新興美術院(日) 東京市下谷區竹町九五、芝垣興生方

〔會友〕十名〔代表〕三村英一
新興美術院(日) 東京市下谷區竹町九五、芝垣興生方

昭和十二年、日本美術院を脱退せる元院友十二名を以て結成した。春季に公募展を開く。

〔同人〕 茨木杉風、保登良朔、吉田澄舟、田中案山子、小林三季、小林巢居、鬼原素俊、芝垣興生、森山斐笑〔準同人〕 岡田魚降森、竝木瑞穂、福島秀行、眞島元枝

〔同友〕 十六名

新興美術協會(洋) 大阪市旭區新森小路南一丁目一九、藤堂三三郎方

昭和七年田中善之助、若山爲三、國盛義篤により設立。關西洋畫の發達を期し一派に偏せず、特色ある作家を迎ふるを趣旨とす。毎年一回公募展を、大阪を中心として開催する。昭和十五年十一月大阪市立美術館に於て第九回展を開催した。

〔會員〕 田中善之助、足立源一郎、齋藤清二郎、岩崎又二郎、田川勤次、三木朋太郎、木下公男、若山爲三、藤堂三三郎、西村鳳山、前田藤四郎、和田歳一、國盛義篤、川端彌之助、伊藤慶之助、佐藤昌胤、山川清、飯田衛、加藤啓三、永瀬義郎、會友十三名

新自然派協會(洋) 東京市目黒區中目黒四ノ一四四一

昭和十年七月小城基門下により創立。年一回同人展開催。

〔主幹〕 小城基〔顧問〕 荒城季夫、川路柳虹、黒田鶴心、森口多里、田邊孝次、外山卯三郎、會員其他四十餘名

新制作派協會(洋、彫) 東京市大森區久ヶ原八二八、脇田方

昭和十一年七月、第二部會が文展に參加するに及び、從來「帝院の獨立帝展の解消」を主張し來れる猪熊弦一郎、内田巖佐藤敬、中西利雄、小磯良平、三田康の六名は同會を離脱、脇田利、伊勢正義、鈴木誠の三名と、もに同會を設立した。同十四年七月國畫會の彫刻部と合同した。同十六年東京府美術館に於て第六回公募展を開催す。

〔會員〕(繪畫部) 猪熊弦一郎、伊勢正義、脇田利、中西利雄、内田巖、小磯良平、佐藤敬、三田康、鈴木誠、三岸節子、荻須高德、坂井範一、伊藤繼郎、小松益喜、内田武夫、今村俊夫(彫刻部) 本郷新、吉田芳夫、柳原義達、山内壯夫、舟越保武、明田川孝、佐藤忠良、菊池一天、早川魏一郎

新挿畫家集團 東京市板橋區板橋一ノ二五二七、渡邊太刀雄方

昭和十四年冬創立。研究會を開催し、春秋二回展覽會を開く。

〔同人〕 渡邊太刀雄、加藤一志、桂木謙輔、筒井直衛、直木久蓉、木原芳樹、京川敦美、結束菊彌

新彫塑協會 東京市世田谷區野澤町一ノ二四一、元野木昇一方

昭和十年八月二科會彫塑部の故藤川勇造門下、早川魏一郎(後に脱退)、太田三郎、飯島三四二の三會友外九名は故藤川勇造の藝術的主張を繼ぎ新に同協會を組織、二科會と訣別した。同會は年一回公募展を開催し又海外作家の紹介に努める

十一年六月第二回展開催。

〔同人〕 飯島三四二、岩田滿平、太田三郎、小田定一、菊池一雄、酒見恆、元野木昇一、中澤安雄、中村米藏、中島武、岡本庄三

新燈社(日、洋) 兵庫縣芦屋市芦屋岸ノ下七二、山田皓齋方 電片屋四五二九

大正十一年創立。毎年東京及大阪に公募展を開催し、昭和十五年第十八回展に及ぶ。

〔名譽同人〕 青木大乗〔同人〕 北村種三、寺田六華、菖蒲大悅、山田皓齋、沖中陽明、上田巳之助、(幹部) 十六名

新日本美術會 岡山市中之町四四、金剛莊内 電四二八八

岡山市の金剛莊の經營で、日本畫、洋畫、彫刻等の作家を名譽會員に推し、展覽會を開く。

〔幹事〕 金海達水

新日本美術聯盟 東京市京橋區木挽町五ノ一、オリオン社内 電銀座四〇八八、五三八四

昭和十五年十一月創立。「我國戦時下の精神面を積極化し、皇國の風土、民族の特質に由來する独自の新美術形態を確立し、新體制の文化的一翼とならんとす」。展覽會、講演會の開催、機關誌發行等を行ふ。

〔理事長〕 鱸利彦〔常任理事〕 河越虎之進、中村新次郎、尾崎三郎、徳丸照彦、葛見安治郎、兒玉徹、佐藤章、淺野薫、芳賀俊、入江弘〔理事〕 坪井甚吉、赤塚時雄、田澤八甲、笹野松夫、小室孝雄、

池田永一路、沼田城佳、勝間田武夫、谷口午二、新居廣治、福田左都夫、加賀山啓二、村田元、喜入巖、渡邊八洲夫、井口奈保江、加藤新〔顧問〕 武藤夜舟、中井宗太郎

新日本畫研究會 昭和九年六月結成 新美術人協會の項参照。

新日本洋畫協會 京都市大宮通下長者町下ル、獨立美術京都研究所内

獨立美術京都研究所の研究有志の組織する作品發表機關。昭和十年九月京都美術館に第一回展開催。毎秋展覽會を開く。會員二十名

新版畫會(版) 東京市蒲田區蓮沼二ノ二一、旭方

昭和十五年十一月創立。展覽會を開く。

〔會員〕 旭泰宏、森田路一、大宮昇、前川千帆、畦地梅太郎、奥山儀八郎

新美術家協會(洋) 東京市世田谷區世田谷四ノ五〇四、松本方 電世田谷三九三一

昭和四年設立の鉦人社を同七年改稱せるもの。年一回東京府美術館に同人展を開く。

〔會員〕 伊藤久三郎、伊藤繼郎、服部正一郎、早川國彦、金子博信、柏原覺太郎、桑原實、大澤昌助、吉井淳二、高田力藏、田中忠雄、高橋庸男、田崎廣助、中村三樹男、中村善策、山尾蒸明、松本弘二、田邊三重松、瀧川太郎、寺田竹雄、古家新、藤井二郎、近藤光紀、荒井一郎、酒井亮吉、新海覺雄、清水刀根

新美術人協會(日) 東京市世田谷區

喜多見二、藤田復生方 電碓一八

昭和九年東京、京都の同志十七名により新日本畫研究會を結成、新時代の日本繪畫樹立を盟約し、展覽會を開き十二年第三回展に及ぶ。十三年二月同會々員により新美術人協會展を設立、「新時代と共に成長する作家の協力を求むる」公募制を採用、十六年五月第四回展開催に至る。

〔會員〕(新日本畫研究會々員)猪飼俊一、岩崎鐸、海老原南爽、大石哲路、神田禎之、久保田善太郎、酒井亞人、島田良祐、柴田安子、福田豊四郎、藤田隆治、藤田復生、間宮正、柳文男、米田莞爾、吉岡堅二、堀文子、柴山光台

新浪漫派美術協會 東京市荏原區戸越町四七〇、佐田勝方

昭和十四年六月、日本畫、油繪、立體寫眞等の青年作家を以て組織した。展覽會を開く。

〔顧問〕福澤一郎、瀧口修造〔同人〕三十餘名

水彩聯盟(洋) 東京市豊島區池袋三ノ一三六六、荒谷直之介方

水彩畫専門の會で、昭和十五年十二月第一回の同人展を開催した。

〔會員〕荒谷直之介、春日部たすく、小堀進、小山良修、荻野康兒、齋藤大、渡部菊二、山中仁太郎

寸土社(洋) 兵庫縣寶塚局區内米谷和田正節方

洋畫研究團體。昭和八年より略毎年大阪に作品發表を行つてゐる。

〔會員〕池永英夫、井上富三、原崎吾一

和田正節、鍋本順三、高岡義次、高岡徳太郎、竹中良吉、向井潤吉、須藤保、安藤金一郎、木下公男、樋口治、森島忠夫

鈴木總作〔顧問〕榊原一廣〔常任幹事〕和田正節

瀬戸作陶會(工) 瀬戸市大守瀬戸一五二七

昭和四年創立。瀬戸古來の特技、傳統的工藝の再興を趣旨とす。毎年東京及瀬戸に於て展覽會を開催す。

〔會長〕水野憲吾〔同人〕大江文象、加藤綾、瀧川七郎、栗本儀三雄、龜井清市、松原廣長、加藤壽郎、水野壽山〔會友〕五名

瀬戸市陶藝協會(工) 瀬戸市役所産業課内 電二四〇〇

昭和十一年創立。同市の陶工並贊助者を以て組織。事業として陶藝に關する研究、郷土工藝資料の調査、展覽會、講演會の開催、他への出品斡旋、圖書刊行、工藝研究獎勵金の交付等を行ふ。

〔名譽會長〕水野憲吾〔理事長〕齋藤元男

正統木彫家協會(彫) 東京市世田谷區玉川田園調布二ノ七二六、澤田晴廣方

昭和十五年五月結成した。木彫の藝術研究、公募展の開催を目的とす。同年十一月大阪三越に於て第一回展を開催。

〔會員〕澤田晴廣、三木宗策、西村雅之、阿井瑞峯、橋本高昇、本田徳義、長澤幸夫、圓錫勝二、西山如搦、和田金剛、宗像庄一郎、佐藤靜司〔會友〕十餘名

世紀美術創作協會(日) 京都市左京

區下鴨森ヶ前町二六、戸田北邊方

昭和十五年九月創立。京都及び大阪に於て展覽會を開催す。

〔同人〕今尾景春、戸田北邊、大高爲山、奥村紅稀、寺田蘆秋、佐藤空鳴、宮尾光峯

生活工藝聯盟 東京市芝區西芝浦一東京高等工藝學校内

同校卒業の有志を以て組織し、生活工藝に關する研究、發表、出版等を行ふ。

〔幹事〕杉山豊祐、西川友武、豐口克平、山崎幸雄、岩村朝彦、磯村卓郎、石井華一、鈴木太郎、伊藤米次郎、齋藤四郎、山口正城、古關弘之、大泉博一郎

井井會(日) 東京市麴町區六番町六一宮崎政近方 電九段二七四七

井南居宮崎政近の主催する新作日本畫展。昭和十三年三月第一回展開催、以後毎春開催。

生産意匠聯盟 大阪市浪速區惠美須町二ノ一四六、上田儀一方 電戎一九四七五一

昭和十四年五月創立。意匠的研究を中心として實用工藝の新しき展開を促しその科學的生産化と輸出商品化を圖るを以て目的とし研究製作及其の發表を事業の樞軸として活動す。

〔會員〕跡部勇、近藤桂二郎、加藤清澄、中山正人、須藤雅路、寺尾作次郎、上田儀一、柏崎榮助、小池岩太郎、松岡武夫、須田幸治、上田健一、安永良徳、村井次郎、鈴木正道、小松榮、西野弘、久野久成層美術集團 東京市目黒區下目黒

三ノ五七六 電大崎三八三三

小林源太郎が主宰する日本畫、洋畫、商業美術等の研究並發表の團體。

〔構成員〕(主班)小林源太郎〔準會員〕有田秀夫、猪飼俊一、池澤賢、石田一郎、川邊實、神田禎之、込山俊男、高柳博也、森茂一、山崎穰、渡邊修

青丘會(日) 東京市日本橋區通二丁目、高島屋美術部内

高島屋美術部主催。昭和十六年四月第六回展開催。

〔會員〕德岡神泉、山口華楊、奥村土牛、小倉遊龜、太田聽雨、吉岡堅二、福田豊四郎、山本丘人、上村松篁

青杵會(日) 東京市大森區池上本町一一一、伊東深水方 電池上二二二

伊東深水、山川秀峰を中心とする人物畫の研究發表團體。

青松會(日) 大阪市南區日本橋三丁目、大阪松坂屋内

東西の日本畫家十五名を以て創立。昭和十年大阪松坂屋に第一回展開催。

〔會員〕伊東深水、服部有恆、堂本印象、德岡神泉、金鳥桂華、中村大三郎、中村岳陵、宇田荻郎、矢野橋村、山口蓬春、山口華楊、察本一洋、福田平八郎、兒玉希望、廣島晃甫

青樹社(日) 名古屋市外守山町文化村、横山方 電守山一一四

舊稱白曜會。毎月研究会を開き、初夏に大展覽會、秋に小品展開催。

青驪社(日) 東京市淀橋區下落合三丁目一五〇一、岩田秀雄方

昭和十三年四月創立。日本畫の研究團體。展覽會を開く。

〔同人〕石井了介、岩田秀雄、大山華環等十一名

青土社(彫) 京都市左京區修學院大

林町一六、松田尙之方

昭和十三年創立。京都在住の彫塑家を以て組織し、毎年春秋二季に展覽會を開く。

〔會員〕松尾薫、松田尙之、徳力牧之助

田中源三、柴田和彦、山本節郎、岡本庄三、芦田政一、伊勢保三、加藤春平、矢野判三、丸山政次、西川亨、吉川常雄、久保駒太郎

青龍社(日) 東京市大森區新井宿四ノ一〇五三 電大森三〇一二

昭和三年川端龍子日本美術院を脱退するに及び、龍子及び其御形塾員の制作發表の機關として同四年六月同社を創立。

同年東京府美術館に第一回展を開催同十六年第十三回展に至る。尚秋期本展覽會に對して毎年「春の青龍社展」を開催す。

春期展は秋期展に於ける入選者を出品資格者として、鑑別の上陳列す。豫て「健剛なる會場藝術」を唱へ、且つ在野團體としての主張を明瞭にすべく官展には參加しない。

〔主宰〕川端龍子〔社人〕川端龍子、坂口一草、加納三樂、福岡青嵐、山崎嘯

〔社友〕安西啓明、渡邊綱雄、小呂朋子

木村鹿之介、佐藤木草、市野亨、時田直

善、利谷双樹、濱出青松、森省三〔社子〕松宮左京、坂平安、奥田正一、結城天童

岡部建一郎、大塚榮治、菱田幾久、渡邊不二根、佐藤正一、鈴木茂子、里見公起

上條靜光、直江義春、内池星子、鍛治海雪、小川茂麻呂、龜井藤兵衛、沼野匡志

林榮太郎、琴塚英一、佐々木邦彦、丸山皎、依田季夫、高山晴雄、中川佐風路、古野新生

清光會(日、洋、彫) 東京市日本橋區江戸橋二ノ八松慶ビル、座右寶刊行會

内 昭和八年四月創立。東京、大阪に展覽會を開催す。

〔會員〕小林古徑、安田靉彦、梅原龍三郎、安井曾太郎、坂本繁二郎、佐藤清藏

高村光太郎〔責任者〕後藤眞太郎

清流會(日) 東京市澁谷區圓山町四

櫻井霞洞方 會員は錦木清方の門下門井掬水、榎本千花俊、寺島紫明、櫻井霞洞の四名。同人展開催。

蓄我會(日) 京都市御幸町三條下ル

大正十年水田竹圃門下を以て組織。年一回展覽會を開催す。

〔會長〕水田竹圃〔評議員〕水田硯山、安田半圃、幸松春浦〔幹事〕栗田槐山、會員七十餘名

齊々會(彫) 東京市板橋區練馬南町

一ノ三四七、眞鍋忠行方

東美校彫刻科の最近の卒業生を以て組織。昭和十三年第三回展開催。

〔會員〕岩井藤吉、伊藤三子雄、井上信

道、石橋史郎、堀田巖美、渡邊一八大、高橋英吉、山内皓臣、眞鍋忠行、佐伯留守夫

絕對象派協會(洋) 東京市中野區鷺ノ宮五ノ四〇七、山本方

昭和十三年一月二科會出品の新傾向作家五名にて創立。同年日動畫廊にて第一回展開催。

〔會員〕廣幡憲、齋藤義重、高橋迪章、鷹山宇一、山本敬輔

染織技術官協會 商工省化學局内

昭和五年六月創立。各府縣主任染織技術官、地方染織關係試驗場並講習所の場長及所長並染織關係技術官を以て組織。

染織工業の改良發達を圖る爲必要な調査研究をなし、併せて會員相互の業務上の連絡並に親睦を圖るを目的とす。會員百二十名

染織刺繡作家協會 東京市赤坂區青山南町四ノ一、大槻一雄方

染色、織物、刺繡の研究を目的として昭和三年創立。展覽會を開く。

〔常務委員〕山形駒太郎、齋藤五百枝、木村和一、大槻一雄、遠藤順治

閃人社(日) 東京市品川區大井倉田町三四一九、濱倉清光方

伊東深水の朗峯畫塾々々有志に依り組織。昭和十二年五月第一回展開催。

〔會員〕池田輝治、濱倉清光、津村新太郎、植草保二郎、福山美都夫、遠藤燦可

佐伯春虹、澤井一三郎、鈴木康之

全關西美術協會 大阪市住吉區天王寺町三〇七三、塚口正一方

〔特別會員〕濱田葆光、國枝金三、黒田重太郎、鍋井克之、横井禮市

〔會員〕古家新、小野藤一郎、高岡徳太郎、田川寛一、渡邊造酒三、岩崎重雄、藤井二郎、小出三郎、中村眞、西阪修、津田周平、伊谷賢藏、塚口正一、石丸一錦義一郎、小出卓二、辻愛造、福島金一郎、西村五郎、榎倉省吾、石井元、伊庭傳治郎、田村孝之介、早川國彦、山本直治、松本銳次、伊藤繼郎、飯田清毅、米良道博、池島勘治郎、玉澤潤一

全日本産業美術聯盟 東京市牛込區東五軒町二 電牛込四二七

昭和十一年十月創立。各種商業美術家の團體を以て結成す。

〔委員長〕杉浦非水〔常任委員〕多田北鳥、山名文雄、岸秀雄〔加盟團體〕H・L圖案研究會、N・Cデザイン研究會、構圖社、七人社、資生堂廣告美術研究會

新圖案協會、中央圖案家集團、實用版畫美術協會、東京廣告美術家俱樂部、東京印刷美術家集團、東京包裝美術協會、銀座産業美術研究會、北海道商業美術協會、靜岡商業美術協會、大阪商業美術協會、關西廣告美術協會、商業美術聯盟、新廣告美術作家同盟、日本新美術家協會

神戸創作圖案協會、廣島商業美術家協會

北九州商業美術家聯盟、長崎商業美術協會、熊本ホスター研究會

全日本彫塑家聯盟 (事務所) 東京市瀧野川區上中里七二、北村西望方〔故銅配給部〕東京市瀧野川區上中里一七二、小倉右一郎方

舊稱日本彫塑家聯盟。昭和十三年九月物資動員に基く青銅使用禁止に對する策を講ずるため、新に彫刻十四團體により組織、翌十四年當局より銅使用許可を受けたが、同十六年八月銅鐵回收運動のため再び禁止となりしを以て、當局と接衝同九月故銅使用の許可を受けた。

〔加盟團體〕文展第三部作家協會、東邦彫塑院、構造社、日本美術院彫刻部、瀧野川彫塑研究所、日本彫刻家協會、日本木彫會、日本美術協會彫刻部、九元社、新構造社、朝倉塾、太平洋畫會彫刻部、塊人社、新制作派協會彫塑部、國風彫塑會、二科會彫塑部、直士會、正統木彫家協會

梳風會(日) 東京市荒川區日暮里町九ノ一二四
故鳥崎柳場の榎々亭塾門下一同により組織、大正二年以來隨時展覽會を開いた。

〔幹事〕清田柳莊、木島柳嶋、石川綠南
高橋樵場、仲村眞齋

疎韻會(日) 豐中市新免北通四丁目瀧秋方
昭和十三年九月創立。毎年春秋二回展覽會を開催する。

〔會員〕生田花朝、内田稻葉、梶川真人、草刈樵谷、小松均、菅橋彦、菅白華、園田栞二、立松玉泉、瀧秋方、津田青楓、西田逸堂、宮本頌、矢野鐵山

楚人社(洋) 札幌市北七條西五丁目能勢眞美方 電一六七六
昭和六年創立。主として札幌在住の洋畫家を以て組織する。同十二年五月第四回展開催。

〔同人〕今田敬一、繁野三郎、能勢眞美、久保守、山田正、伊藤信夫、大森滋、齋藤尚、本間紹夫〔社友〕十六名
双台社(洋) 東京市目黒區下目黒四ノ一〇〇四、岡見弟三方 電大崎三五

四
石井柏亭に師事する畫家を以て昭和十六年五月創立。同年第一回公募展を開催す。

〔會長〕石井柏亭〔常任委員〕岡田行一、岡見弟三、瀧川太朗〔委員〕荒谷直之助、上田徹雄、岡田行一、岡見弟三、大石俊彦、齋藤大、坂本正春、鳥常武、瀧川太朗、田坂乾、田中悌六、谷内俊夫、鍋谷傳一郎、野口道方、堀忠義、松田晃八、松田文雄、松村三冬、三角嘉壽男、山中仁太郎、會員九十八名

神園會(洋) 大阪市浪速區西關谷町一ノ八、黒田方 電戎三〇一八
大正十五年創立。當時の會員は伊藤慶之助、奥村正三郎、小西謙三、大石輝一、和田歳一、辻愛造等で展覽會、講習會を開催し、又研究所を經營したが昭和八年ZIGZAGと共に大阪新美術家同盟を創立、以後同展に参加したが、十二年一月同展を脱退した。同十三年十一月第九回展開催。

〔會員〕抱康子、黒田繁成、松本銳次、前田藤四郎、田川寛一、田川勸次、和田歳一、三崎孝雄、土岐流司、小西清太郎、西雅司、大石輝一、田中惣三郎、三崎六郎、六條篤、浦久保義信

草芽會(工) 京都市東山區山科竹花塚本方 電山科一五
昭和五年創立。京都高等工藝學校圖案科卒業生有志を以て組織。工藝各種の研究團體。八年東京に於て第一回展開催。

〔同人〕川那部澄、塚本繁、赤澤鐵太郎、峯親吉、加藤八洲男、宮永友雄
艸兒社(日) 京都市伏見區深草正覺町七ノ四、西山英雄氣付
京都繪專學校の卒業生、在學生有志を以て組織。昭和十二年京都大丸に第二回展開催。

造形美術學會 東京市京橋區西八丁堀一ノ二 電京橋二三五九
横川毅一郎を主事として昭和十五年一月創立。現代美術研究部、美術史學研究部の二部を設け、美術文化諸般の研究發表を行ふ。

創元會(洋) 東京市神田區東松下町二、小柴方 電浪花四〇六一
昭和十五年十二月創立。美術本來の精神に徹し、我が國文化の向上發展に寄與する。展覽會を開催す。

〔會員〕阿以田治修、安宅安五郎、大久保作次郎、金澤重治、小柴錦侍、佐竹徳次郎、鈴木千久馬、中野利高、矢島堅土、柚木久太、吉村芳松
創元美術協會(日、洋) 臺北市京町一ノ三八、古川義光方

昭和十三年創立、文展、二科、獨立等各派の出品者を以て組織す。十五年第一回展開催。

〔會員〕古川義光、久保田明之、飯田實雄、蒲地薫、宮田彌一郎、横田太郎、吉見庄助、秋本好春、名島貢、有川武夫、小田部三平、大賀湘雲、宮田金彌、染浦三郎

創造美術協會(洋) 堺市甲斐町西四丁目一六、玉澤方
昭和十年創立。舊稱セクション・ダール。毎秋大阪市立美術館に於て會員の作品發表展を開催す。

〔會員〕上島龍、河野通紀、小島大輔、小島結治、小林武夫、下高原龍巳、高須操、高橋進、玉澤潤一、田村譽志那、永田禎彌、西阪修、長谷川初女、堀澤好一、山口久一、花谷時子

蒼原會(洋) 東京市神田區淡路町二ノ一、水谷景房方 電神田一三二五
大正十一年日本水彩畫會研究所の小山良修、富田通雄、中西利雄等が創立した東京三脚會を同十三年改稱せるもので水彩畫專門の研究團體。

〔在京本部會員〕馬場重次郎、不破章、小山良修、水谷景房、丸山東美男、松田寅重、中西利雄、野口健司、岡田正二、齋藤大、富田通雄、山中仁太郎、山崎政太郎、荒谷直之介、岡田節男、野澤潤二郎、相澤光朗、藤江志津、本多信彦、福田建夫。

菰青社(日) 京都市左京區下鴨中河原町七一、池田逸郎方 電上六六〇

昭和九年創立。竹内竹杖會内の研究團體で、月例研究會展覽會等を開催する。昭和十二年大阪に第一回展開催。

〔會員〕池田遙邨、稻葉谷生、川口吳川、加藤清彬、川本參江、山本朝光、小松華影、小豆島甘兆、柴原希祥

造型彫刻家協會 東京市豊島區要町二六ノ一、山内壯夫方

昭和十一年二月創立。科學的造型性に立脚した彫刻藝術の創作を目的とす。展覽會に際しては主題の美術性を強調し、又、毎回外國作家の作品を紹介する。

〔會員〕芥川永、明田川季、川口信彦、佐藤邦輔、清水要、武内收太、谷本整映、本郷新、峯孝、宮島久七、柳原義達、山内壯夫、山本常市、尾島禎二、佐藤忠良、舟越保武、吉田芳夫、昆野恒、稻田健四、造型版畫協會 東京市本郷區金助町七三、柴秀夫方

昭和七年、新版畫集團の舊稱を以て創立。十一年第六回展を経て組織變更、十二年三月造型版畫協會と改稱、第一回展開催。十六年四月公募展により第五回展開催。版畫の純粹なる繪畫的造型性の確立を目的とす。

〔會員〕清水正博、柴秀夫、小野忠重、水船六洲、末木東留、矢田桂一、宇治山哲平、畑野織藏、齋藤清

霜林會(洋) 東京市澁谷區千駄ヶ谷町五ノ五〇九、石原龍一方

伊藤藤、林重義、曾宮一念、里見勝藏を會員とし、毎秋同人展を開催す。

太平洋畫會(洋、彫) 東京市下谷區

谷中眞島町一 電下谷一七九二

明治二十二年創立の明治美術會を同三十四年組織を一新し翌年一月太平洋畫會と改稱、第一回展を上野公園第五號館に開催した。同三十七年に洋畫研究所を開設、昭和四年に太平洋美術學校と改稱した。昭和十六年第三十七回公募展に至る。

〔會員〕淺井眞、相曾秀之助、江崎寛友、布施信太郎、藤坂太郎、布施梯次郎、平澤定治、堀進二、星野二彦、石川寅治、石井柏亭、池田永一治、伊藤成一、石橋美三郎、飯田實、石井明、井口勇、今里龍生、金子保、木原二郎、北島吾次平、桑重儀一、小宮宗太郎、丸山晚霞、前田眞一、三上知治、光安浩行、水戸敬之助、永地秀太、中村不折、中野桂樹、野田半三、中田恭一、能見三次、岡精一、奥瀬英三、小野田元興、大沼靜巖、佐々貴義、齋藤俊雄、澤田晴廣、佐藤三郎、澁谷榮太郎、山下繁雄、清水敦次郎、菅谷元三郎、杉本宗一、高村眞夫、高橋虎之助、多々羅義雄、田原輝夫、鶴田吾郎、佃武昭、都島英喜、等々力巳吉、戸津文雄、玉井力藏、渡部春也、内田泉水、吉田博、吉田ふじを、安田豊、吉原甲藏

〔會員〕有川武夫、福王誠、畑本一夫、堀潔、本郷惇、市原達夫、河本一夫、海洲正太郎、小泉秀松、小坂健三、國澤和衛、小林森次、久保進、三輪捨三郎、名鳥實、小倉一雄、坂本不二、島添鶴雄、鈴木貫司、鈴木隆、田村政四郎、田原利一、恒石敬磨、平尾良秀、早川芳彦

大潮會(日、洋) 東京市豊島區駒込三ノ四〇三、浦崎永錫方

全國中等學校の圖畫教育關係者の作品の主張を明かにし、その中央畫壇への進出を計るを目的として、毎年秋季に日本畫洋畫の公募展を開く。十六年東京府美術館に第六回展を開催した。

〔會長〕小村捷治〔常任理事〕浦崎永錫〔理事〕多賀谷健吉〔評議員〕岩佐新、大下正男、垣見宜修、松垣鶴雄、藤本留三、杉山司七、三浦直政、大光會(洋) 大阪市住吉區王子町一丁目三六、胡桃澤方

東光會の大坂支部として昭和十五年一月結成。齋藤里指導の下に洋畫の研究發表を行ふ。會員八十餘名。大稻會(日) 名古屋市中區上前津五森村宜水方 電中二四八

昭和十五年創立。故森村宜稻の門下を以て創立。大和繪の研究を行ふ。〔會員〕服部有恆、林雲鳳、小寺禮三、喜多村光穂、森村宜永 大日美術院(日) (東京事務所) 東京市本郷區西片町一〇、結城素明方 電小石川一五七三(大阪事務所) 大阪市天王寺區勝山通一ノ五四 電天王寺八一九

男、是永伸一、西山英雄、樋口富麻呂、濱田清治、東山魁夷、菖蒲大悅、寺田六華、長嶺雅男

大日本體育藝術協會 東京市麴町區有樂町一ノ一一、東日會館内 電丸ノ内二九〇二

體育運動に關する藝術の普及發達を圖り、國際オリンピック大會藝術競技の參加、明治神宮體育大會藝術競技の參加、體育運動に關する美術の調査研究等の事業を行ふ。昭和七年及十一年のオリンピック大會藝術競技に参加した。

〔會長〕男爵森村市左衛門〔副會長〕澁澤秀雄〔顧問〕伊東延吉、岩原拓、乘杉嘉壽、大島又彦、山川建、芝田徹心、平沼亮三〔常任理事〕吉村忠夫、中村岳陵、矢澤弦月、伊原宇三郎、伊藤廉、裕伊之助、齋藤素巖、高村豐周、成澤金兵衛、土浦龜城、小林政一、小森宗太郎、澤崎定之、諸井三郎、中島健藏、深田久彌、佐藤謙三

大日本業協會 東京市京橋區銀座西四丁目五ノ六號、銀座商館第四階 電京橋五五一九 明治二十五年創立。社團法人。本邦業の發達を圖り、雜誌圖書の發行、講演會、講習會の開催、調査、建議、公共事業の助長等をなす。京都、大阪、名古屋八幡等に支部を設く。〔會頭〕伯爵金子堅太郎〔理事長〕山田清太郎〔理事〕利泉正光、熊澤治郎吉、近藤清治、佐々木源藏、芝田理八、高田安雄、永井彰一郎、不破政吉〔監事〕大

野政吉、倉田昌孝〔常議員〕八十八名
大日本航空美術協會 東京市芝區田
村町一丁目三ノ一、大日本飛行協會内
昭和十六年五月創立。航空思想の發達
を計り、公募展の開催其他の諸事業を行
ふ。同年九月第一回展開催。

〔發起人〕伊東深水、島山錦成、島海青
兒、太田聰雨、渡邊義知、加藤顯清、勝
田哲、吉岡堅二、吉村忠夫、田村孝之介
名井萬嶺、中村岳陵、中村恒夫、中村節
也、中野和高、中山巖、向井潤吉、上村
松篁、野口彌太郎、國盛義篤、栗原信、
山口蓬春、前田荻郎、藤田嗣治、福田平
八郎、福田豊四郎、小磯良平、澤田晴廣
北川民治、木村莊八、木下孝則、宮本三
郎、水谷清、清水登之、鈴木千久馬

大日本海洋美術協會〔洋、日〕 東京
市澁谷區原宿三ノ二四九、海軍協會内
電青山二七七一、二七七二

昭和十二年五月海軍記念日を機として
海軍協會主催、海軍省後援の下に在京洋
畫家九十五名の出品を得て、日本橋三越
に海洋美術展が開催され、同年六月本會
の創立を見た。毎年海軍記念日を中心と
して、海軍協會と共同主催、海軍省後援
のもとに海洋に關係の深い展覽會を開催
する。

〔洋畫〕石井柏亭、石川寅治、長谷川昇
奥瀬英三、田邊至、中澤弘光、中村研一
永地秀太、山下新太郎、小林萬吾、權藤
種男、北蓮藏、南薰造、御厨純一、三上
知治、三國久、清水良雄

〔日本畫〕伊東深水、石本光郎、川端龍

子、錦木清方、川崎小虎、吉岡堅二、野
田九清、久保田金徳、安田毅彦、矢澤岐
月、松林桂月、町田曲江、新井勝利、坂
口一草、結城素明

大美工展〔日、洋〕 大阪府北河内郡枚
方町御殿山、大阪美術學校内
大阪美術學校日本畫並西洋畫部卒業生
全員を會員とす。昭和三年より毎年一回
展覽會開催。

〔會長〕矢野橋村〔役員〕齋藤與里、福
岡青嵐

大輪畫院〔日〕 東京市目黒區上目黒
八ノ五三八 電澁谷三三四四

昭和十三年六月創立。小林彦三郎主宰
し、主として明朗美術聯盟の舊同人に依
り結成す。春秋二回展覽會を開催し、秋
季展は公募に依る。毎月研究会を開催。

〔同人〕小林彦三郎、樋口英雄、谷良治
楠奉白光、立脇泰山〔院友〕佐々木順、
穗坂光希〔準院友〕廣井陵雲、窪田玉穂

〔會員〕十九名
體漆工房〔工〕 東京市四谷區永住町
二 電四谷八〇四九〔呼出〕

昭和十三年五月創立。漆工、乾漆の立
體的工藝品製作研究を目的とす。

〔顧問〕和田英作、和田三造、畑正吉、
六角紫水

〔主事〕大槻二雄〔漆工主任〕河面冬山
第一美術協會〔洋〕 東京市瀧野川區
田端町四五五、三國久方

昭和四年創立。毎年初夏、洋畫の公募
展を開く。十六年第十三回展開催。
〔會員〕濱地清松、石川重信、河邊梅村

黒越正二、三國久、御厨純一、三木辰夫
松見吉彦、松坂康、中原實、佐野忠吉、
鈴木巖、高橋亮、山田篤、山口美勇、吉
澤廉三郎

〔會友〕荒木菊次、袴田恒男、長谷川富
三郎、川口精六、小島三郎、照木廣一、
谷井喜三郎、高橋賢一郎、土岐浩藏、宇
田川榮三郎、横山群、山樹寅二郎、木下
正治

〔客員省略〕
高松工藝協會 高松市市役所内
昭和七年五月創立。高松市の各工藝團
體を綜合せるもので、展覽會、販路調査
他への出品斡旋等を行ふ。

〔會長〕高松市長富家政市
鍛金協會〔工〕 東京市下谷區谷中眞
島町一

鍛金工藝作家を以て組織す。展覽會、
其他を開催す。

〔會長〕石田英一〔委員〕二十二名、正
會員九十一名
筑前美術會〔綜合〕 東京市麻布區櫻
田町二八、薄拙太郎方

筑前出身作家により昭和八年結成、帝
展及其他有力の展覽會に三回以上入選せ
る者を以て會員とす。毎年展覽會開催。

〔顧問〕山崎朝雲、和田三造
竹立會〔日〕 京都市右京區嵯峨神明
町二一、山本紅雲方 電嵯峨三六

竹内栖鳳門の竹内竹枝會内の研究團體
昭和十二年七月大阪三越に第一回展開催
〔同人〕山本紅雲、青木生冲、岩周巢、
中田晃陽、小森綠光、伊藤石華

中央美術會〔日、洋〕 東京市杉並區
井荻三ノ四〇、田口掬汀方
大正四年以來雜誌「中央美術」を刊行
昭和四年休刊したが、同八年復興し、十
一年十二月迄續刊し以後廢刊した。尙同
會主催の公募展は當分休止。

中部水彩畫會 名古屋市昭和區洲原
町六ノ二八、東本春水方
昭和十二年創立。年に一回公募による
水彩展を開く。十三年十二月名古屋美術
館に第一回展開催。昭和十五年十一月紀
元二千六百年奉祝展開催。

〔公募展鑑査委員〕横井禮市、北川民治
早川國彦、石野隆、船橋治彦、藪野正雄
渡邊多平、東本春水

中部日本商業美術聯盟 名古屋市西
區御幸本町通一丁目、愛知縣商工館内
電本二一五六

昭和十一年創立。中部各縣に於ける商
業美術關係諸機關を以て組織。商業美術
の發達を圖るため展覽會、講習會等を開
く。十二年愛知縣商工館に第二回展開催

〔加盟團體〕岐阜縣商業美術協會、滋賀
圖案會、富山商業美術協會、福井商業美
術協會、靜岡商業美術協會、愛知商業美
術協會、三重縣觀光協會、新潟商業美術
協會

忠愛美術院〔日、洋、彫〕 東京市杉
並區中通町一七七、藤田方 電四谷二八
三〇

昭和十六年八月創立された會で同年十
一月第一回展を開いた。

〔總裁〕中島今朝吾〔同人〕花岡萬舟、

長谷川八十、西川宗舟、穂坂光希、本多桃多郎、吉田廣洋、高澤圭一、中條芳園、津田正周、土田實、内藤外次、山田順治、松田康一、益田柳外、益田英一、藤田峯英、木寺轍、島津純一

朝鮮童寶藝術院 京城府大和町一ノ三五、松田方

昭和十二年五月創立。朝鮮の人物發達と人形を通じての日鮮融和並社會教育の一助たらしとするもの。毎春朝鮮在住者の出品による展覽會を開催。

〔顧問〕津田信夫、西澤笛畝、大塚源二郎〔會員〕松田泰光、宇野光惠、遠田運雄其他十二名

朝鮮南畫院 京城府並木町二四 大正三年創立。舊稱朝鮮木石南畫會。朝鮮に於ける南畫道の振興を目的とす。

本部及支部を設置し之に加盟する者を院友となし、年一回院友の出品による展覽會を開催す。昭和十一年十九回展に至り十四年第二十回展開催。院友六百餘名。

〔主幹〕久保田天南〔幹事〕江原如水、伊藤天遠、大森天爵、今井天澄、今澤天洲

直土會(形) 東京市瀧野川區田端町三六二、建昌研究所内 電駒込一四〇一 建昌大夢の門下を以て組織す。公募展開催。

〔會員〕建昌大夢、服部仁郎、林謙三、大須賀力、渡邊弘行、黒田嘉治、倉澤興世、山根八春、山本稚彦、安達貫一、毛利教武、杉浦藤太郎、伊藤芳雄、長谷川正雄、分部順治、中野昂、安田周三郎、

江川治、酒見恒、木下繁、木内五郎、三木凱歌、明珍勝友、峯孝、白井謙二郎、廣井吉之助、杉本三郎〔會友〕石渡清三郎、富岡泰、片岡環、吉賀壽雄、小田寛一、大石兼、小松彌六、小林南龍、坂上正秋、喜田三五、北地莞爾、宮本光庸、今村輝久晃、建昌覺造、田淵勝章、曹圭奉、長島利雄、野口晴朗、荒木珠子、佐野文夫、木村石芥

朝陽社(日) 東京市板橋區常盤臺一ノ二九、西澤方

西澤笛畝の門下を以て結成する。展覽會を開く。

〔會員〕酒井白澄、梅岡玉葩、坂倉半井藤龍生、等十一名。

〔贊助〕西澤笛畝 二七二、林是方 東美校彫刻科製造部の卒業生に依り、昭和二年發會。毎春展覽會を開く。

〔同人〕長谷川正雄、林是、大須賀力、奥田勝、黒田嘉治、佐上哲二、喜田三五 三木凱歌

圖案家協會 京都市伏見區桃山町宗和園、澤田宗山方 電伏見六〇二 大正十一年創立。京都在住の圖案家を以て結成。展覽會、研究會等を催す。

〔總務〕澤田宗山〔理事〕澤田宗山、山鹿清華、田村春曉、落合萬水、狩野秀峰 福岡玉僞正會會員百六十五名

圖書教育獎勵會 東京市下谷區櫻木町二 電根岸三五六三 出版、展覽會開催等を行ふ。

〔會長〕結城素明〔理事長〕岩田櫻太郎 〔理事〕澤田源一、加藤賢 帝國工藝會 東京市芝區芝浦一丁目、東京高等工藝學校内

大正十五年七月創立。本邦工藝の産業化並其の進歩發達を圖るを目的とし、事業として生産業者、販賣業者、美術工藝家並に科學者の聯絡提携に努め、産業工藝の狀況を調査研究し、又地方特産工藝品の改良並に販賣の紹介等をなす。毎月雜誌「帝國工藝」發行。(事變中休刊)

〔副會長〕鶴見左吉雄〔顧問〕伯爵金子堅太郎、伯爵牧野伸顯、伯爵清浦奎吾 〔常務理事〕安田祿造、和田嘉衛 天地會(洋) 東京市世田谷區世田谷一ノ九一八、岡常次方

葵橋洋畫研究所の末期の出身者を以て組織す。恩師黒田清輝の遺徳を追慕し、相互の研鑽に努む。同人展を開く。

富山縣工藝協會 高岡市巾川、富山縣工業試驗場内 電七一九 昭和四年創立。縣内の工藝家、販賣業者其他を以て組織。工藝の發達、販路擴張を目的とし、毎年縣下及東京、大阪に展覽會を開催し、随時講習會、講演會等を開く。

〔會長〕富山縣商工水産課長〔副會長〕縣工業試驗場長〔常務理事〕縣商工水産課主事、富山市商工獎勵館長、高岡市商工獎勵館長

東叡會 東京市麴町區四番町八、甫喜山義夫方 電九段三七五四 東京府美術館の借館に就て協議すべく

昭和九年組織された。 〔加盟團體〕一水會、白日會、二科會、日本寫真會、日本美術院、日本水彩畫會、日本畫院、東光會、東京裝束師組合、獨立美術協會、讀畫會、東邦彫塑院、直土會、旺玄社、太平洋畫會、第一美術協會、第三部會、泰東書道院、南畫聯盟、構造社、光風會、國畫會、明朗美術聯盟、上社會、塊人社、春陽會、春臺美術會、新制作派協會、新構造社、新美術家協會、新美術人協會、實在工藝美術會、表裝同人會、青龍社、正統木彫會

〔理事〕甫喜山義夫、垣見泰山、藤本昭三〔評議員〕石井柏亭、富田温一郎、田口省吾、東根徳夫、望月省三、熊岡美彦、香取重吉、兒島善三郎、湯原柳畝、小林喜代治、石川寅治、濱地清松、石川確治、福田浩湖、齋藤素巖、太田三郎、梅原龍三郎、狩野晃行、藤岡一、安藤照、木村莊八、笹鹿鹿、内田巖、三村英一、酒井亮吉、福田豊四郎、高村豊周、栗山弘三郎、川端龍子、北村西望、建昌大夢、澤田晴廣、野田九浦

東海美術協會(綜合) 名古屋市西區御幸本町、愛知縣商工館内 明治四十三年創立。美術及び美術工藝の振興を圖るを目的とし、會内に東洋畫西洋畫、彫塑、工藝の四部を置く。毎年協會展を開催の傍、文展への出品の獎勵並に之に關する各種の事務の取扱、研究會、講演會の開催をなす。昭和十六年四月第三十回を開く。

〔會頭〕伊藤次郎左衛門〔副會頭〕岡谷

惣助、菅原省三〔評議員〕、石河有輝、渡邊秋齋、小林松仙、菊地香三、原田隆諦〔主事〕、淺野甚七、岡田良右衛門、宮部鈴三郎〔正會員〕（東洋畫）六十一名、〔洋畫〕十五名（彫塑）一名（工藝）一名

東京鑄金會（工） 東京市下谷區谷中眞馬町一ノ一號

明治三十六年創立。主として東京在住の鑄金家を以て組織し、毎秋展覽會を開催する。

〔會長〕香取秀眞〔副會長〕渡邊長男

〔幹事〕山本安曇、香取正彦、北原三佳、山本純民、梅村豊舟〔評議員〕丸谷端堂、小野田晴正、長野埜志、山口淨雄、渡邊紫鳳、林萬壽人、山本自燼、根來實三、會田富康、加藤龍雄、原直樹、川和曉雲、高橋樂翠、村井美正、木村庄太郎

東京表裝師組合 東京市淺草區淺草橋一ノ三、香取重吉方 電淺草四七四一

東京市に於て營業をなす表裝師を以て組織。技術の向上及同業親睦を圖るため種々の事業をなす。年一同東京府美術館に表裝展を開催。昭和十五年四月第十八回展に及ぶ。

〔組合長〕香取重吉〔副組合長〕前波鐵太郎、矢谷精宏、新井清吉

東京みつる會〔洋〕 東京市淀橋區下落合三ノ一七二七、佐藤平太郎方

昭和二年春創立。水彩畫の展覽會、講習會等を行ふ。會員二十餘名。

〔總務〕佐藤平太郎

東光會〔洋〕 東京市淀橋區戸塚町二

ノ一二 電牛込一四四一

昭和七年、橋本八百二、堀田清治、岡見富雄、高間惣七、熊岡美彦、齋藤里の六名に依り結成。毎年春季に公募展を開き昭和十六年第九回に至る。尙十一年創立會員橋本八百二、堀田清治、高間惣七の三名は退會。

〔會員〕齋藤里、熊岡美彦、岡見富雄、渡邊浩三、野口謙藏、佐藤一章、小早川篤四郎、水船三洋、園部晋生、胡桃澤源人、平通武男、岩下三四、正田二郎、森田茂、石本秀雄、井上脩、江藤哲、田代順七、松岡正直、辻利平、河原修平、家永麒三郎、河井達海〔會友〕山本清、松岡正、大和田富子、三田村榮、小貫綾子、松本富太郎、松居均、安達良雄、福井芳郎、西寺鐵舟、八藤勳人、塩津誠一、藤田慎治、熊岡正夫、大寄丹次郎、野澤寛徳、永富士子、山本貞子、井手祐子、清原武則、後藤愛彦、川本浩三

東皐會〔日〕 東京市澁谷區向山町一〇二、吉田方 電高輪三六五八

從來東美校出身有志の日本畫家が相互の親睦の爲、毎月懇話會を開催し來つたが、昭和十二年六月、新に東皐會と命名、結成した。邦畫壇の進展に寄與せんとするものである。

〔會員〕岩田正巳、服部有恆、畠山錦成、橋本明治、川崎小虎、狩野光雅、加藤榮三、吉田秋光、吉村忠夫、常岡文龜、根上富治、永田春水、村島西一、野口謙次郎、矢澤弦月、山本丘人、小泉勝爾、榎本千花俊、穴山勝堂、廣島晃甫、望月春

江、杉山寧

東皐會〔綜合〕 奈良市雜司町、新納忠之介方 電三七五

昭和五年四月發會。東美校出身奈良在住者有志の懇親並研究團體。毎年春季同人の展覽會を開催し、隔月集會を行ふ。

〔會員〕〔日本畫〕富田一昭、立野雪郷、谷山介春〔洋畫〕西孝親、遠山八二、小野藤一郎、谷山藤四郎、中村義夫、小松原義則〔彫刻〕新納忠之介、細谷三郎、吉川政治、奥田勝、明珍恒男〔昭和十五年逝去〕菅原安男〔金工〕後藤年彦〔漆工〕幸王好太郎、北村久造〔圖案〕岸蕉吉〔染織〕井上清一

東土會〔彫〕 東京市本郷區駒込神明町三四一、後藤良方 電駒込一一五五

昭和六年創立。東京生れの東美校彫刻科出身者にして舊帝展出品者を以て組織臨時作品展開催。

〔會員〕淺岡重治、安藤秀吉、大須賀力大橋清、金田豊、木内五郎、黒田嘉治、後藤光行、後藤良、杉浦藤太郎、杉本三郎、明珍勝友、安一、安田周三郎、吉田久繼、武田榮

東邦彫塑院〔彫〕 東京市杉並區永福町四〇五、雨宮治郎方

昭和十年六月帝院改組に際して舊帝展審査員級の長谷川榮作、加藤顯清、吉田久繼、國方林三、山根八春、後藤良、雨宮治郎、北村正信、關野聖雲等の九名は「帝國美術院改組の結果、吾人等主義を同じくする者に於ては團結の必要を痛感し、こゝに東邦彫塑院を結成して藝術權

威維持と後進誘掖に盡し、もつて吾人の生命とする創作により主義主張の貫徹を期するものなり」と聲明して、東邦彫塑院を結成、同年十一月東京府美術館に第一回公募展を開催した。昭和十六年第五回展に至る。

〔顧問〕山崎朝雲〔委員長〕北村西望

〔評議員〕長谷川榮作、新田藤太郎、横江嘉純、中島東洋、國方林三、後藤良、雨宮治郎、北村正信、關野聖雲〔委員〕一色五郎、羽下修三、橋本朝秀、花里金央、富永朝堂、岡本金一郎、奥山泰堂、矩幸成、上條俊介、吉田淑示、吉開伊喜藏、田村審火、梁川剛一、藤野舜正、古川順三、古賀忠雄、赤堀信平、安一、宮本朝濤、森山朝光、會員百四名、會友十六名

東北美術展覽會〔日、洋〕 仙臺市三番丁、河北新報社内 電四一〇〇

昭和五年創立の東北美術協會の主催展覽會を同八年より河北新報社が引き繼いだもので、仙臺市に年一回日本畫洋畫の公募展を開催する。

〔會長〕河北新報社長一力次郎〔副會長〕同副社長一力五郎

東北北海道工藝協會 仙臺市二十人町通一〇、商工省工藝指導所内 電三七六〇一三七六二

昭和四年設立。東北六縣及北海道に於ける工藝關係者相互の聯絡を保持し、東北工藝の産業的發達を圖るを目的とし、事業として工藝品並意匠圖案の指導、販路擴張、競技會、展覽會の開催、各種工

藝的副業の指導獎勵等をなす。

〔理事長〕國井喜太郎〔常任理事〕寺坂毅、松崎福三郎〔常任幹事〕阿久津保太郎、西川友武、樋浦守治

東陽會 東京市豊島區巢鴨六ノ一二九〇 宮尾方

宮尾しげを、岡本一平、北澤樂天、麻生豐其他の漫畫家を以て組織する。昭和十六年十月第一回展開催。

等迦會〔洋〕 東京市澁橋區角管三ノ一七八、長屋勇方

大正十一年度東美校洋畫科出身者を以て組織。隨時展覽會開催。

〔會員〕飯守好雄、大海清三、小野藤一郎、長屋勇、窪田照三、松本銳次、三田康、三谷浩三、光石藤太、鈴木誠、鈴木啓二

稻花會〔工〕 東京市杉並區久我山三ノ一一三、三田村自芳方

大正十一年故赤塚自得の社中を以て組織。相互の親睦並向上を目的とし、漆工藝をあらゆる方面より研究せんとす。隨時展覽會開催。

〔會員〕三田村自芳、魚野自醒、太田自適、久慈自然、横越自入、岡本昇三、石川古堂、關藤雨、井澤靈山、辻喜一郎、月尾慶水、金井正文、村田義忠、吉岡都三、南忠、池田自勝、小澤裕、工藤喜代志、山浦等

濤友會〔洋〕 東京市豊島區池袋二ノ九七〇、日高方

昭和十一年春結成。二科出品者の洋畫研究團體。

〔會員〕木崎轍、小堀進、桑原實、荻野

康兒、日高健泰、財保、百足遠六、中野亨、川合喜二郎、北島達夫、増田英一、森繁、山田順治〔贊助〕藤田嗣治、野間仁根、北川民次

同人會 東京市神田區東神田二ノ四

栗山弘三郎方 電浪花一七一六 表装師の團體で、毎年展覽會を開催。

〔同人〕稻本金次郎、星野常吉、宇田川孝太郎、栗山弘三郎、安見三郎、山越廉三

同調會〔日〕 東京市板橋區常盤臺一ノ一〇號、岩崎方

昭和十三年度東美校日本畫科卒業生を以て組織す。年一回展覽會開催。

〔會員〕岩崎鐸、池澤賢、石田一郎、河原丈夫、川本壽一、加藤英純、神田禎之米澤裕二、土田幸一郎、村尾博仁、野嶋清一、黒田哲二、山崎民士、小池平四郎、佐藤正衛、三浦眞一、宮川澄康、白尾殿理、澁谷保三

堂本畫塾東丘社〔日〕 京都市東山區八坂東大路西小松町二、堂本印象方 電

祇園一〇八八 堂本印象の主宰する畫塾。昭和十三年六月第一回東丘社展を京都美術館に開催す。塾員七十三名。尙ほ同塾には三樹會春風會、如月會等があり、隨時展覽會を開催す。

童心文化美術協會 東京市中野區野方町一ノ七三五和光莊、西原方

昭和十六年一月創立。兒童のための繪本、玩具、演劇等に於ける美術文化の健全なる進歩を圖る。

〔幹事〕脇田和、大石哲路、齋藤長三、中尾彰、寺田竹雄、西原比呂志、山下大五郎、宇田川種治

童寶美術院 東京市淺草區淺草橋一ノ三 電淺草二四六九

昭和五年創立。人形藝術並に童心を表

現し、童心を啓發し得るやうな藝術作品の向上普及を目的とし、展覽會、出版等を行ふ。

〔同人〕石井柏亭、笹川臨風、豊泉益三

西澤笛歌、山田徳兵衛、山本鼎、和田英作、倉橋惣三、津田信夫〔顧問〕子爵岡部長景

董林社〔洋、彫〕 東京市澁谷區原宿一ノ六三、佐藤邦輔方

昭和六年度東美校洋畫科及び彫刻科の入學者により組織。毎年展覽會を開催す

〔會員〕五十餘名 德島縣工藝協會 德島市前川町、德島縣工業試驗場内 電二八五三

昭和十二年創立。工藝品製造者、販賣者等を以て組織し、同縣の木材及其他の工藝の發達を圖る。事業として各種の調査、指導、印刷物の刊行、展覽會、講演會の開催、助成等をなし、輸出工藝の振興に努む。同十四年六月第一回展開催。正會員六十餘名。

獨立美術協會〔洋〕 蒲田區東六郷四丁目三一ノ八、鈴木保徳方

昭和五年十一月二科會の兒島善三郎、里見勝藏、林重義等十一名、及び三岸好太郎、福澤一郎、高島達四郎を發起人と

して創立。同六年より東京府美術館に公募展を開催、大阪、京都、名古屋、福岡臺北等に地方展を催して居る。又自治制の研究所を東京、大阪、京都に設く。同十六年第十一回展開催。會員には種々移動ありしも現在は左の通り。

〔會員〕居串佳一、海老原喜之助、川口軌外、菊池精二、熊谷登久平、兒島善三郎、小島善太郎、小林和作、齋藤長三、清水登之、鈴木亞夫、鈴木保徳、須田國太郎、高島達四郎、田中佐一郎、中間册夫、中村節也、中山蘂、野口彌太郎、林武、藤岡一、松島一郎〔會友〕今西中通

森有村、樋口加六、池田金之助、富樫寅平、佐藤英雄、中尾彰、青柳楊夫、菅野圭介、鳥居敏、赤星孝、大野五郎、加藤陽、小出三郎、佐川敏子、島村三七雄、志村計介、竹中三郎、常安靜人、豊藤勇山道榮助

讀畫會〔日〕 東京市本郷區動坂町三二七、湯原方 電駒込五三二

明治四十年荒木寛政を主宰として設立

寛政の歿後は十畝を會長とし、毎春展覽會を開催、昭和十五年三月第三十三回展に及ぶ。

栃木縣美術協會〔洋〕 栃木縣鹿沼町下材木町、吉村勇方 東京市淺草區馬道町二ノ五、文挾勝方

栃木縣在住並出身者の結成する洋畫團體。昭和十年宇都宮市に於て第一回公募展開催。

巴會〔日〕 東京市本郷區駒込東片町三〇 鹽崎逸陵方

故寺崎廣業門下にして舊帝展所屬の作家を以て組織す。展覽會開催。

〔客員〕飛田磐山〔會員〕野田九浦、矢澤弦月、吉田秋光、水上泰生、菊澤武江、鹽崎逸陵、伊藤龍涯、岡部光成、町田曲江、角田磐谷、登内微笑

七日會(工) 東京市豊島區駒込三ノ三九九、山本方

工藝の研究團體で、昭和五年創立したが、十四年末事情により一先づ解散、十五年一月再組織した。

〔會員〕林萬壽人、渡邊紫風、香取正彦、高野松山、桂信泰、長野埤志、海野建夫、山本安曇、山本純民、山本自爐、丸谷端堂、藤本長邦、會田富康、北原三佳

名古屋工藝協會(工) 名古屋市役所産業部内

名古屋市の工藝家及昇界關係者を以て組織。調査、出版、展覽會開催等を行ふ。

〔會長〕三樹樹三〔顧問〕藤井達吉、津田信夫、板谷波山〔理事長〕中川貞三

名古屋美術聯盟 名古屋市役所内

昭和十一年創立。愛知縣在住及出身の美術家を以て組織。郷土美術界の向上を圖り展覽會、講習會等開催の外美術獎勵に關する諸事業を行ふ。

〔會長〕(市長)縣忍〔評議員〕川崎小虎、服部有恆、太田三郎、伊藤藤、鬼頭鍋三郎、加藤靜兒、毛利致武、長野埤志、狩野梅齋、朝蔭其明、小川鴻城、横山葩生、織田杏逸、淺井正臣、石川英風、朝見香城、岩佐古香、井上安男、中野安治郎、船橋治彦、藪野正雄、渡邊多平、安藤邦

衛、伊藤鎌、石井國義、杉本健吉、横井禮市、遠山清、市ノ木慶治、加藤忠三郎

原田隆謠、佐藤空鳴、加藤華仙、橋本良介、石田清、野水信吉、森本啓史

奈良美術家聯盟(洋) 奈良市大佛殿裏、田中修方

昭和十年創立。奈良在住の帝展、二科獨立等の出品者を以て結成す。毎年春秋二回展覽會開催。研究所を設置。

〔會員〕今西春治、乾平三、岩本恒三、間瀬謹平、森島包光、岡島吉郎、六條篤下瀬貞和、田中修、辰巳義人、寺瀬信一

遠山八二、浦久保義信、吉田直之〔贊助員〕濱田葆光、中村義夫、山下繁雄

奈良洋畫會 奈良市法蓮佐保川町曾根靖雅方

昭和七年設立。奈良縣美術家の指導養成を目的とす。例年五月に公募展、十月に同人展開催。夏季洋畫講習會を開く、昭和十三年度は事變の爲公募展開催を中止した。

〔同人〕若山爲三、飯田衛、笠松春彦、森永春雄、武若武作、辻操、小森重雄、廣瀬英男、岩井濱子、謙田史彦、吉澤健二、曾根靖雅、御宮地保、庄司吉郎、保田貞治、顧問十二名

長野縣農美生産組合聯合會(工) 長野縣廳經濟部規則課内 電長野四三〇一

縣下農村工藝品生産團體により組織。各團體の聯絡を圖り、生産の指導、販路擴張並輪旋、展覽會開催等を行ふ。

〔會長〕(經濟部規則課長)今井清武〔副會長〕(經濟部副主任)江島次郎、

中村實

南畫聯盟(日) (東京事務所) 東京市麴町區四番町、小室方 電九段六二〇

(京都事務所) 京都市新町北大路上小柳北通西入、白倉二峰方 電西陣三二二四

昭和十一年九月日本南畫院及環堵畫塾の解散後、有志相謀り翌十月に結成した。南畫道の興隆を目的とし、研究會、公募展を開催する。

〔顧問〕小室翠雲〔幹事〕岡田晴峰、白倉二峰、人見少華、福田浩湖〔委員〕關谷雲峯、大栗旋竹、荒居翠湖、高須芝山

横内大明、村岡應東、小川千麿、須藤幽郎、降旗篁岳、鷹野樗亭、木内一榮、馬來田愛岳、峰村北山、宮原柳櫻、渡邊黃華、松野自得、久保田玉堂、小山居泉、

佐々木喜堂、高橋暉山、横山松雲、高島祥光、栗飯原大醒子〔會員〕七十七名

南紀美術會(日、洋、彫) 東京市荒川區日暮里渡邊町一〇四〇、建昌大夢方

電駒込一四〇一 大正八年紀州出身の美術家により結成年一回東京或は郷里に展覽會を開く。

〔常任幹事〕建昌大夢〔幹事〕後藤光行、木下繁、三木凱歌、中川藤次郎、會員二十九名。

南洋美術協會(洋) 東京市麴町區永田町、南洋廳内

昭和十六年七月發會。南洋に遊歴せし作家三十餘名を以て組織す。同月三越に第一回展開會。

〔會長〕小林萬吾〔常任理事〕堀田清治、笹鹿彪〔理事〕和田香苗、山崎坤象、布

施信太郎

二科會(洋、彫) 東京市四谷區愛住町七八 電四谷四九七八

大正三年文展第二部に二科設置運動が起つたが、當局に容れられず、同年十月つひに文展より分離して、上野竹之臺陳列館に二科美術展覽會が開催された。同展の開催に際して其の任に當りたる鑑査委員十一名は翌年そのまゝ、會員となり、二科會は茲に在野團體として獨立した。

(其の中柳敬助、田邊至の二名は直ちに脱會) 爾來同會は常に新進流派的作家を包容して我が洋畫史上に啓蒙的功績を擧げて居る。大正八年第六回展の開催に際し藤川勇造會員に推され初めて彫刻部加入を見た。昭和五年兒島善三郎、里見勝藏外會友七名は退會し、獨立美術協會を創立した。昭和十年會員石井柏亭、山下

新太郎、安井會太郎、有馬生馬、藤川勇造の五名新帝國美術院會員に任命さるゝや同會は其の盟約に基いて右五名と訣別し、その功勞を謝して名譽會員に推薦し、同會は從來の通り飽くまで在野として行動する旨を聲明した。同十二年石井柏亭、有馬生馬、山下新太郎、安井會太郎等は名譽會員を辭退、十六年藤田嗣治も藝術院會員に就任するに及び離脱した。毎秋東京に展覽會を開催し、引續き

京都、大阪、福岡、名古屋等に於て隨時地方展を開催する。同十六年九月第二十八回展に及ぶ。

(繪畫部)〔評議員會員〕熊谷守一、北川民次、栗原信、正宗得三郎、宮本三郎

向井潤吉、中川紀元、鍋井克之、野間仁

根、岡田謙三、島崎鷄二、鈴木信太郎、

東郷青兒、田口省吾、高岡徳太郎、吉井

淳二、横井禮市、黒田重太郎、國枝金三

濱田葆光、田村孝之介、坂本繁二郎〔普

通會員〕伊藤久三郎、松本弘二、酒井亮

吉、峰岸義、服部正一郎、伊谷賢藏、錦

義一郎、松井正、藤井二郎、古家新、福

島金一郎、吉原治良〔主事〕安部治郎吉

〔會友〕柏原覺太郎、榎倉省吾、椎塚猪

知雄、岡部邦香、早川國彦、藤川榮子、

田中忠雄、橋本做郎、加治屋隆二、桂ユ

キ子、大澤昌助、寺田竹雄、山尾薫明、

安部治郎吉、村田實史雄、雜賀文子、野

村守夫、鶴田宏、篠原來介、山本不二夫

松本俊介、高井貞二、佐野繁次郎、北島

達夫、丹下富士男、神保俊子、清水刀根

藪野正雄、尾澤辰夫、飯田清毅、伊庭傳

治郎、松村綾子、津田周平、浪江勘治郎

山本直治、加藤敏子、米良道博、小出卓

二、井上登造、小林喜一郎、田邊三重松

原勝四郎、旭亮弘、佐藤吉五郎、伊藤研

之、坂宗一〔彫塑部〕〔評議員〕笠置季

男、松村外次郎、泉二勝磨、水野欣三郎

渡邊義知、上田曉〔會友〕後藤一彦、柳

田昌、川崎榮一、三浦舜太郎、中堀正孝

野水信吉〔在外會員〕國吉康雄、齋藤豐

作、ナスラン、ピツシエールオト、ザ

ツキン

二科西人社〔洋、彫〕 福岡市大名町

八七、青木壽夫

昭和九年十一月創立。九州出身の二科

會出品者の組織する洋畫彫刻の研究團體

年一回展覽會開催。

廿四人會〔洋〕 東京市中野區櫻山一

一、樋口加六方

昭和七年創立の十七人會の擴大せるも

ので獨立展出品者の親睦團體。隨時作品

展開催。

〔會員〕樋口加六、岡部文之助、法充昌

雄、小島圭一、長島榮吉、横山清治、熊

谷登久平、久保田久一、今西忠通、池田

金之助、中尾彰、佐藤英男、竹中三郎、

清水鍊徳、坪内節太郎、森有村、浦久保

義信、赤星孝、小原雄二、坂本善三、赤

堀佐兵、綠川廣太郎、富樫寅平

新潟縣輸出工藝振興會 新潟縣經濟

部商工課内

舊來の新潟縣工藝協會を改組して昭和

十四年四月設立した。工藝品の調査研究

講習會、展覽會の開催、作品の宣傳、幹

旋其他を行ふ。

〔總裁〕新潟縣知事 正會員三七〇名

賛助會員二二一名

西日本美術展覽會〔洋、工〕 福岡市

下警固九八四、福岡日日新聞社内

福岡日日新聞社の主催する洋畫及工藝

の公募展で、昭和十一年第四回展開催。

〔時局に鑑み當分休止する。〕

西山畫塾青甲社〔日〕 京都市東山八

坂塔前、小川翠村方

大正十二年西山翠峰門下を以つて創立

毎月研究会、年一回展覽會開催。

〔幹事〕福田翠光〔副幹事〕水野深艸、

本庄陶苑〔研究会主事〕澤宏毅〔學藝部

主事〕樋口富麻呂〔評議員〕山ノ内信一

外十四名〔常議員〕堂本印象外九名

日東美術院〔日〕 東京市大森區堤方

町九〇七、園部香峰方

美術に於ける華國精神の發揚、日本畫

の海外進出等を目的として昭和十五年創

立した。公募展を開催す。

〔會員〕園部香峰、川口春波〔院友〕西

村雨北、渡邊示光、鳥海龍海、山城象二

郎、松野皓晟、大町宰世、竹下茂樹等十

四名

日本アンデパンタン協會〔洋〕 神戸

市神戸區元町一丁目、プチギヤラリー内

毎春神戸にて左記委員の主催により洋

畫の無鑑査公募展を開催する。

〔委員〕今井朝路、井關昇、奥村一彦、

吉田一夫、多田榮二、田中香苗、三好繁

治、森川豊三、有吉正雄、木村五六

日本油繪會〔洋〕 東京市世田ヶ谷區赤

堤町一ノ一九七、福田方

昭和十六年創立。主として一水會出品

中堅作家を以て組織。年一回發表展を開

催する。

〔會員〕鈴木良三、瀧川太郎、林鶴雄、

福田新生、矢崎重信

日本醫家美術協會〔洋〕 東京市神田

區三崎町二ノ二〇、醫事公論社内

醫師にして美術を愛好する人々により

組織。展覽會を開催す。

日本漆繪協會 東京市麻布區今井町

二五、三木義榮方

昭和十一年設立。漆繪及漆工藝の新生

面開拓を目的とす。毎年春季に會員展、

臨時試作展を開催する。十二年四月第一

回展開催。

〔會員〕片山佳吉、横井弘三、太齋春夫

大村素峰、松岡素峰、三木義榮、森山珪

秀

日本エツチング作家協會 東京市麴

町區麴町一ノ三、日本エツチング研究所

内、電九段五一四

昭和十五年十二月西田武雄を中心に結

成。エツチングの研究、普及を圖り同月

第一回展を開催した。

〔會員〕田邊至、西田武雄、今純三、會

我尾武治、松田義之、關野準一郎、中井

平三郎、神原浩、内田進久、田中進、高

羽敏、武藤完一、中田幾久治

日本カトリック美術協會 東京市小

石川區小日向臺町二ノ二七、湯川方

昭和四年創立。カトリック信徒の美術

家及び美術愛好者を以て組織。「日本精

神による基督教美術の研究創作發表」及

「海外同種團體との交渉機關」。昭和十二

年マニラに於て展覽會を開催した。

〔會員〕長谷川路可、小倉和一郎、木村

圭三、佐田好陽、小關君子、岡山聖虛、

佐々木松次郎、古屋清

日本畫院〔日〕 東京市本郷區駒込千

駄木町五九、望月春江方、電駒込二六四七

昭和十三年東京の文展系日本畫壇有志

に依り結成。「現下の日本畫壇の趨勢に

鑑み、之を横斷的に結束するの要を痛感

し茲に日本畫院の成立を見るに至る。吾

等は協力以て清澄なる畫壇の先驅者たら

んとす。」と聲明した。公募展を開催す。

〔同人〕岩田正巳、服部有恆、畠山錦成

川崎小虎、吉田秋光、吉村忠夫、吉岡堅二、常岡文龜、根上富治、野田九浦、矢澤玄月、松本泰水、福田豊四郎、小泉勝爾、穴山勝堂、飛田周山、望月春江

日本玩具協會 東京市世田ヶ谷區世田ヶ谷町二ノ一〇八〇

昭和三年設立。玩具産業の發達を圖り玩具の研究調査並發明考案の助成に關する諸事業を行ふ。

〔常務理事〕畑正吉、西澤信敏、加納淳男、永澤謙三、氏家壽子、國井喜太郎、山根省三、山田義郎、木楡恕一、阿部七五三吉、鈴木豐次郎

日本建築士會 東京市京橋區銀座西三ノ一建築會館七階 電京橋六二〇（近畿支部）大阪市北區中之島三ノ三朝日ビル四階日本建築協會内（名古屋支部）名古屋市中區南大津通安田生命館佐藤四郎建築事務所内（上海支部）中華民國上海市狄思威路五〇二號

大正三年創立。昭和三年社團法人設立認可。建築の設計監理に關する業務の改善進歩を圖り建築の發達に資するを以て目的とす。月刊雜誌「日本建築士」を發行。

〔會長〕石原信之

日本工藝美術會（東京）東京市下谷區谷中眞島町一ノ一號（關西）大阪市住吉區住吉町一三〇〇、柴崎方

大正十五年創立。工藝の作家、鑑賞家評論家を以て組織せる綜合團體。毎年一回展覽會を開催す。

〔常務委員〕岩田藤七、大島隆一、吉田

源十郎、津田信夫、内藤春治
日本工作文化聯盟 東京市麴町區内幸町二ノ三、幸ビル内 電銀座三三八三
昭和十一年十二月九日發會、本會は科學、藝術其他工作文化に關する諸分野の専門家を糾合し、且つ産業上の諸機能と提携して「一、様式建築より生活建築へ二、有閑工藝より目的工業へ三、低俗製品より價值製品へ」なる指標の下に建築を中心とする工作文化の健全なる發達を圖らんとするもので次の如き項目を事業課題とし、且つ出版、展覽會、講演會の開催、諮問應答等をなす。（イ）研究

（一）住の基本問題の研究 二、都市及農村計畫に關する研究 三、史的生活文化財の研究（ロ）指導（一）住に關する工業製品の指導 二、建築生産の指導 三、工作の諸分野に關係し來る藝術的諸形式の批判檢討（ハ）普及（一）生活文化に關する知識の普及 二、健全なる工作文化財の普及

〔會長〕伯爵黒田清（理事長）岸田日出刀（理事）堀口捨巳、佐藤武夫、關重廣小池新二（幹事）市浦健、關野克（特別會員）澤島英太郎、鈴木道次、上野伊三郎、奥本新太郎、藏田周忠、坂倉準三、谷口吉郎、土浦龜城、中村彌三次、服部勝吉、藤島亥治郎、前川國男、山越邦彦山脇巖、吉田鐵郎

日本挿繪畫家協會 東京市淀橋區下落合四ノ二一一、林唯一方
挿繪俱樂部を解消して新に組織した會で展覽會研究会の開催、出版等を行ふ。

〔名譽會長〕鍋本清方（會長）石井鶴三〔委員長〕林唯一〔委員〕岩田專太郎、石井泰治、富田千秋、鴨下晃湖、吉田貫三郎、玉井徳太郎、田代光、向井潤吉、野村俊彦、野口昂明、松野一夫、木村莊八、宮本三郎〔書記長〕鈴木御水、會員六十八名、客員三十六名

日本山岳畫協會（洋） 東京市品川區大井元芝町八七〇、茨木猪之吉方
昭和十一年創立。山岳に關する繪畫の發表を行ふ。

〔會員〕足立源一郎、中村清太郎、茨木猪之吉、石井鶴三、丸山晚霞、武井眞澄吉田博、末光積、内野猛、中村善策、山川勇一郎、山下品藏、上田徹雄、河越虎之進、宮田熊雄、榎谷敬藏

〔顧問〕小島烏水、藤木九三
日本自由畫壇（日） 京都市烏丸通出水上ル西、廣田方 電西陣三〇五六
大正八年京都の日本畫家に依り設立。毎年秋季公募展開催。

〔同人〕上田萬秋、廣田百豊、玉舎春輝久保飛路史
日本刺繡院（工） 京都市東山區山科御陵原西町四〇
昭和十五年一月創立。刺繡工藝の發達を目的とす。展覽會を開催す。

〔會員〕長谷川文平、長村華城、岡村土佐生、由井康陽、村田春綠、山田誠一、福村健、酒井榮一、小林由松、清水順造柴田儀藏（參與） 箸尾清
日本漆藝院 東京市芝區西久保巴町一五、岩瀧方 電芝六九八

昭和十一年結成。本邦独自の漆藝の發展を圖るため従来の漆藝家の小黨分離の弊を打破して協力邁進せんとす。毎年三越に公募展を開き、同十六年第五回展開催。

〔同人〕石井青士、本間舜華、富樫光成河面冬山、河合秀甫、勝田靜璋、吉田醇一郎、横越自入、高井白陽、高野松山、多畑宗哉、堆朱楊成、都築幸哉、梅澤隆眞、太田自適、大村素峯、岡本昇三、山永光甫、松田權六、福澤健一、結城哲雄三田村自芳、莊司芳眞、森川紫山、守屋松亭、六角顯雄、中川哲哉、船本汀〔賛助員〕六角紫水、渡邊素舟〔主事〕岩瀧尙美
日本漆工會 東京市神田區鍛冶町一六ノ二
財團法人、明治二十三年小川松民、柴田是眞、川邊一朝、池田泰眞、白山松哉田邊源助等二十四名の發金により設立。品川彌次郎子初代會頭となり、二代には田中光顯伯爵宮内大臣現職のま、就任最も力を會勢に致した。爾來略隔年に漆工競技會を開催し、大正十一年迄に十六回を重ねた。而して十二年の震災後同展は一時期開催を休止したが、昭和九年三月より新に現代漆藝品展覽會の名稱の下に全國漆藝展を開催するに至つた。日本特有の蒔繪並に漆に關する傳統保存及進歩を圖り、事業として漆並に漆工業に關する諸般の施設調査及技術上の研究、漆樹栽培の奨励及其生産調査、圖書標本類の蒐集、展覽會講演會開催等をなす。月刊雜

美術家團體 一覽

二

四一

誌「漆と工藝」發行。

〔理事長〕手塚千代吉〔理事〕吉野富雄
都筑幸哉、松田權六、山崎尙三郎、岩瀧
尙美

日本女子美術院(日、洋) 東京市淀橋
區西大久保二ノ二五三 電四谷六三二五
昭和十六年二月創立。日本畫、洋畫の
公募展を開く。

〔主幹〕垣見泰山〔幹事〕伊藤鈴子、石
田重子、石井克枝、陳進、尾形奈美、渡
邊玉花、春日井久代、永井勝子、江崎
照子、宮内英子、大久保百合子、吉田ふ
じを、住井ミエ

日本新興南畫院 大阪市天王寺區松
ヶ鼻八一

昭和十二年十一月主として大阪並京都
在住南畫家に依り結成。十三年五月大阪
市立美術館に公募に依る第一回展開催。

〔會員〕稻村虹亭、池田十朗、西岡都久
路、直原放青、廣瀬凌雲、片山秀陵、片
桐白登、横山春溪、高須白雲、橋徹州、
村上蘭田、福田青藤、福與悅夫、船井秋
浦、衛藤晴村、秋吉玄圃、佐野蘆水、湯
川三舟、平野長彦、須網雨亭、末藤米圃
杉本白象

日本水彩畫會 東京市本郷區駒込神
明町七二、望月省三方

故大下藤次郎、故丸山晚霞、故河合新
藏の三人の經營せる日本水彩畫會研究所
を大正二年四月石井柏亭、石川欽一郎、
故戸張孤雁等三十七名の發起に依り、改
制擴張して新に各派水彩畫家の綜合團體
として設立、毎春公募展開催、昭和十六

年第二十八回展に至る。

〔總務〕石井柏亭、石川欽一郎、石井鶴
三、眞野紀太郎、南薰造、中澤弘光、相
田直彦、赤城泰舒、平井武雄小山周次、
望月省三、富田温一郎、板倉贊治、水野
以文

〔會員〕百二十名〔會友〕十五名

日本彫金會(工) 東京市本郷區駒込
動坂町三二七、海野清方

明治中期に結成された日本金工協會が
大正の末に解散され、その中の彫金家が
金聲會を創立、其の後彫金會と改稱した
が昭和九年會規を改め現在の日本彫金會
となした。展覽會を開く。

〔會長〕清水龜藏〔委員長〕海野清
日本彫刻家協會(彫) 東京市目黒區
自由ヶ丘二七七、林是方

昭和十一年五月結成。彫刻の研究團體
昭和十六年東京府美術館に第五回公募展
を開催。

〔會員〕岩田滿平、林是、坂東文夫、大
川逞一、大獄茂樹、奥田勝、加藤顯清、
片山義郎、高澤七郎、武次郎、畝村直久
野々村一男、倉持芳、小柴利孝、明石順
吉、雨田光平、金谷與三郎、三坂耿一郎
小寺昌三、菅沼五郎〔會友〕伊室正次、
國領辰彌、高田進吉、北地莞爾、來家末
治、陳夏雨、北古賀一郎、川瀬永治、佛
子泰夫

日本圖書工作協會 東京市世田谷區
上馬町三ノ一〇五〇、三尾方 電世田谷
二八七八

全國中等學校圖書、手工、作業科教員

有志を以て組織し、本部を東京に、支部
を各府縣に置き會員相互の親睦を圖ると
共に前記學科の振興に資するを以て目的
とす。毎月雜誌「造形教育」發行。

〔會長〕伯爵平田榮二〔理事長〕三尾興
喜藏〔理事〕關口晚三郎、松岡正雄、麻
生隆秀、三浦直政、橋本興家、高橋重雄
日本圖書手工協會 東京市神田區駿
河臺二ノ五、伯爵平田榮二方

昭和六年設立。主として中等學校の圖
畫手工科並作業科の教職員を以て組織。

東京に本部を置き各府縣に支部を設く。
技能科教育の振興、同科教員の地位擁護
及び向上を目的とし、事業として同教育
に關する研究調査、展覽會の開催、各地
講習會展覽會等に於ける援助、同科教員
の人事斡旋、圖書雜誌の出版等をなす。

〔會頭〕伯爵平田榮二
日本陶藝研究會 東京市大森區田園
調布三ノ四六〇、小倉雅道方

昭和十四年舊東陶會系の有志に依り組
織。隔月研究會を、毎年公募展を開催す

〔會員〕長谷川怒、星野國太郎、土肥刀
泉、塗師淡齋、小倉雅道、大森光彦、小
川雄平、唐杉榮四、加藤閑陸、横山朝陽
竹内蘭山、松島一夫、小柳今朝一、湯山
青厓、水野清一、鈴木禾丈子

日本陶磁彫刻作家協會 東京市世田
谷區赤堤町二ノ四六九、小川雄平方 電
松澤三八九七

陶磁彫刻を専門とする會で昭和十五年
十二月創立。
〔會長〕沼田一雅〔監事〕長谷川怒、三

深寬〔理事〕小川雄平、加藤顯清、小室
達、雨宮治郎、伊奈辰次郎、山崎彌一、
高山泰造、久保駒太郎、眞鍋知道、船津
英治、木村好雄、寺内信平

日本陶彫協會(工) 京都市東山區大
和路五條下ル二丁目東入ル梅屋町六〇
高山泰造方 東京市世田谷區赤堤町二丁
目四六九、小川雄平方

昭和十一年創立。沼田一雅の指導の下
に彫刻陶器に關する研究を行ふ。展覽會
を開催す。

〔同人〕沼田一雅、石田來之助、長谷川
怒、土淵道禎、小川雄平、加藤顯清、吉
川常雄、高山泰造、津田芳太郎、中村健
治、武藤太郎、久保駒太郎、山本正年、
山本一夫、八木一夫、眞鍋知道、船津英
治、寺前皓介、淺見賢一、關本昇

日本人形作家聯盟 東京市小石川區
久堅町二七、野口方

昭和十五年創立。傳統的人形美術の發
達を圖り、作品展、調査出版、海外紹介
輸出斡旋等の事業を行ふ。

〔委員〕鹿兒島壽藏、黒川多加詩、小島
與一、佐久間珉甫、佐野光輝、中川光一
野口光彦、山川亨造、山本壽、綿貫萌春
猪谷春峯

日本人形美術院 東京市下谷區上野
櫻木町五四、平田方 電下谷九二

白澤會、日本人形社を経て昭和十六年
十一月創設。我國人形美術の保護と育成
を目的とす。同年十一月第一回展を開催。
〔同人〕岡本玉水、平田郷陽、外に會員
十一名

日本版畫協會 東京府北多摩郡狛江
村岩戸、下澤方

大正七年創立の日本創作版畫協會が、
昭和六年版畫家の大同團結をはかり改組
せるもの。毎年定期の公募展を開催す。
尙文部省、外務省の後援で、歐米各地に
國際的版畫展を開催した。

〔副會長〕山本鼎(會務委員)石井鶴三
前川千帆、恩地孝四郎、平塚蓮一、栗田
雄、清宮彬、逸見享、山口進、旭泰宏、
畦地梅太郎、柿原俊男、前田政雄、深澤
索一、稻垣知雄、小泉葵巳男、下澤木鉢
郎、田坂乾、關野準一郎、根本霞外、佐
々木孔

日本美術院(日、彫) 東京市下谷區
谷中上三崎南町五二 電下谷二五一〇

明治三十一年十月、當時東京美術學校
長を退いた岡倉覺三を盟主とし、橋本雅
邦以下二十六名を正員として結成。「新
時代に於ける東洋美術の維持並開發」が
創立に際しての二大主張であつた。同年
十月第一回展を開催、且つ研究所を下谷
谷中初音町に設置して後進の養成に努め
雑誌「日本美術」を發刊。同三十九年十
二月に至り一時東京の研究所を撤廢、同
人四名は岡倉覺三と共に常陸の五浦に退
去し、專念研鑽に努めたが、大正二年岡倉
覺三病歿するに及び、直に院の再興を劃
し新に院舎を谷中上三崎南町に起し翌三
年九月開院式を舉行、十月再興第一回展

を開催した。再興に當りしは横山大觀、
下村觀山、木村武山、安田靉彦、今村紫
紅、小杉未醒、辰澤延次郎、笹川種郎、

齋藤隆三等で其中實技者六名を以て同
人とした。再興美術院には彫刻部並に洋
畫部を設けたが洋畫部は大正九年小杉未
醒、山本鼎、倉田白羊等の脱退と共に消
滅した。毎年秋期に公募展を開き、又春
季には内部の試作展を開く。大正十年米
國クリイブランド美術館の要請に應じ、
同國主要都市六箇所に巡回展を開き、以
降日本美術の海外紹介にも努む。昭和十
年帝院改組に際して、同人合議の上新帝
院への参加を聲明し、横山大觀、安田靉
彦、小林古徑、前田青邨、富田溪仙、平
櫛田中、佐藤朝山、藤井浩祐の八名が會
員に就任した。十一年二月第一回帝展に
参加す。六月新任平生文相の試案提示さ
れるに及び、同院出身の會員は(藤井浩
祐を除く)他の八會員と共に、同試案を
改組の趣旨を致却せるものとなし、當局
不信任を聲明して會員を辭任した。同年
近藤浩一路、藤井浩祐、武井直也の三名
脱退、十二年三月院友の集團として院友
俱樂部が結成されたが同年十二名の院友
が脱退した。十五年第二十七回展開催。

〔經營者〕横山大觀、木村武山、安田靉
彦、齋藤隆三、小林古徑、前田青邨、大
智勝觀、平櫛田中

〔同人〕(繪畫部)横山大觀、木村武山
安田靉彦、小林古徑、前田青邨、大智勝
觀、中村岳陵、荒井寛方、山村耕花(逝
去)、筆谷等觀、長野草風、橋本靜水、北
野恆富、眞道黎明、小林柯白、橋本永邦
郷倉千靉、堅山南風、酒井三良、富取風
堂、小山大月、奥村土牛、小倉遊龜、田

中青坪、太田聽雨、中村貞以(彫刻部)
平櫛田中、吉田白嶺、佐藤清藏、石井鶴
三、保田龍門、喜多武四郎、新海竹藏、
大内青圃、山本豊市、中村直人、宮本重
良、松原松造、村田徳次郎、關谷充(院
友)(繪畫部)西村青歸、牛田鶏村、兒
玉素光、石原春秋、野生司香雪、奥村澤
山、大塚晃峻、橋本秀邦、黒田古郷、木
下春、四田觀水、加藤洵綾、歸山千蒼、
奥村玲瓏、野田文雄、跡部白鳥、三石紅
樹、中庭煖華、小島一谿、並木瑞穂、眞
道秋皓、藤井白映、鈴木大麻、石本光太
郎、柴宗廣、高橋萬年、中島清、小谷津
任牛、村田泥牛、高橋周榮、上田畦草、
高橋秀佳、高橋都哉、中島菜刀、岡田壺
中、川手青郷、鈴木鳥心、島田納郎、岡
田雄躑、松永成路、宮崎東里、河村良孝
半田鶴一、我妻碧字、丸儀太郎、宮田隆
子、鶴飼節夫、横田仙草、花岡朝生、佐
藤耕寛、冬木大丙、小林草悅、八ツ井舜
圭、中澤一僑、新井勝利、對馬安正、佐
野光穂、岩橋英遠、河内舟人、小島丹次
半田泰至、鈴木主子、里内久則、安孫子
荻聲、久保清子、中島萬木、鈴木三朝、
菊池公明、柿沼宗居、岩田光壹、岡本彌
壽子、山口蒼輪、關暉明、岡茂以、長井
亮、粥川伸二、三村石邦、佐々木京林、
鈴木麻古等、小松均、片岡球子、上垣候
鳥、山本大慈、狗卷南名雄、酒井とし、
郷倉和子、鹽出英雄(彫塑部)大橋敏男
松村秀太郎、杵谷精一、寺瀬鉄山、入江
美法、大野隆一、林是、矢崎虎夫、横田
七郎、宮本理三郎、辻晉堂、長濱虎雄、

長谷川豊雄、岡村進、小林章、中平四郎
古藤正雄、土井要輔、河野正造、關長造
柏木康兵、加藤泰三、武林與吉、小林貞
吾、森豊一(研究會員)百十六名
日本美術協會(綜合) 東京市下谷區
上野公園櫻ヶ岡 電下谷一九一〇

明治十一年日本美術の衰頽を憂ひ河瀬
秀治等の同志會して美術品評會を開き、
翌十二年會名を選んで龍池會と命名し、
佐野常民を會頭に推し明治十六年有栖川
宮職仁親王殿下を總裁に奉戴した。而し
て明治十三年内務省博物館の開設せる第
一回觀古美術會を第二回より繼承して開
催し明治二十年に至つた。此年十二月規
則を改正し、會名をも亦日本美術協會と
改め、其後毎年春季二回(彫刻、工藝及
書、篆刻)秋季二回(日本畫及華道)の
四回に分ち展覽會を開催するのを例とす
る。昭和十一年度は第百回に相當せるを
以て記念の爲各部の綜合展覽會を春季に
於て開催した。大正十四年組織を改めて
財團法人とした。而して現在其組織は第
一(繪畫)第二(書、篆刻)、第三(彫刻)
第四(玉、石、木、竹、牙、角、介甲彫
品、木象嵌)、第五(彫金、鍍起、鍍金)
第六(鑄金、鍛金)、第七(陶磁、七寶、
彫玻璃)、第八(漆器、蒔繪)、第九(織
物、刺繡)、第十(寫眞、製版)、第十一
(華道、盆石、盤景)の十一部より成る。

尙同會列品館は大正十年の竣工で平家
建、延坪五百二坪、同會主催展覽會に使
用する外は希望者の依頼に應じ貸館する
事がある。

〔總裁〕高松宮宣仁親王殿下〔會頭〕伯爵金子堅太郎〔副會頭〕中田敬義〔專務理事〕溝口禎次郎〔理事〕男爵東郷安山崎朝雲、香取秀貞、板谷波山、千葉胤明、大坪正義、今井爽邦〔監事〕杉山令吉〔主事〕日種義太郎、評議員二十四名

委員顧問七名、委員百五名、名譽會員二十五名、特別會員二名、通常會員一千五百十六名

日本文人畫協會(日) 東京市小石川區小日向臺町二ノ二九、渡邊雪峯方 電大塚六三三七

文人畫の振興を圖るを目的とし、臨時畫及詩文書等の研究會、講習會、展覽會等を開催す。昭和十一年上野公園日本美術協會に第一回公募展開催。

〔幹事〕中村不折、渡邊雪峯、中田雲暉 大久保楓閣、西丸小園、柚木玉郎〔評議員〕磯部羽州、伊藤紫雪、島田蝸亭、藤本翠園、辻香塲、松岡吳藍、海上龍子、本尾香園、木村棲雲、吉田苞竹、平原香雪、入澤華畦、寺山春龍、皆川桐蔭

日本壁畫會(日、洋、彫) 東京市澁谷區幡ヶ谷原町八〇〇、安田豊方

昭和十年結成。壁畫藝術の研究及作品發表、實際仕事の應需を目的とす。十六年第五回展開催。

〔會員〕鶴田吾郎、安田豊、布施信太郎 中村直人、島村三七雄、伊藤清永

日本漫畫會 東京市大森區南千束町四、小峰三四郎方

大正二、三年頃當時の都下新聞社在勤畫家の紙上藝術に飽き足らず、展覽會開

催を發企したのが同會結成の起原で、現在ではジャーナリスト以外の青年漫畫家を擁して年一回展覽會を開催する。

〔會員〕池田永一治、池部鈞、牛島一刀 江島初喜、岡本一平、小野佐世男、大森弓齋、帷子進、可東みの助、京屋金介、北澤樂天、寺内純一、小林克巳、小峰三四郎、近藤日出造、阪本牙城、清水勘一、志村和男、杉浦幸雄、杉田三太郎、田中比左良、田邊路平、名越國三郎、中村圭助、服部亮英、代田收一、細木原青起、前川千帆、水島爾保布、宮尾しげを、三宅當也、村上鐵太郎、森火山、森島直造、森山三郎、安本亮山、山本李兵衛、矢崎茂四、和田邦坊、富山まゐる、生澤朗、澁谷三止朗

日本民藝協會 東京市芝區今入町一五、玉屋ビル 電銀座七六三四一六

工藝の健全なる向上顯揚に寄與する目的を以て大正十五年に創立した。調査、出版、研究會、展覽會開催等を行ふ。昭和六年雜誌「工藝」發行。同十二年日本民藝館設立。同十四年雜誌「月刊民藝」發行。

〔會長〕柳宗悅〔副會長〕河井寛次郎、濱田庄司〔常務理事〕淺野長童、式場隆三郎、村田景夫〔理事〕芹澤銈介、柳悅孝、外村吉之介、武内潔眞、壽岳文章、吉田璋也、淺沼喜實

日本木彫會 東京市澁橋區諏訪町二三〇、内藤方

内藤伸の主唱により大正十三年設立された木彫研究會と其の姉妹會たる木生會

とを合併して昭和六年春結成。木彫藝術の研究、發表を目的とし、毎年東京乃至大阪に於て製作展を開く。

十五年五月正統木彫家協會の結成により二つに分裂す。同展は作品を公募せず會員にて互選の上陳列す。

〔幹部會務員〕内藤伸、佐々木大樹、中野桂樹、三國慶一〔會員〕森野圓象、山脇敏男、山口四郎、井口喜夫、大島胸藏、平澤信男、工藤敬三、西田明史、佐伯量良、外會友十三名、見學員二十名

日本輸出工藝聯合會 東京市麴町區丸ノ内二丁目九ビル二階 電丸ノ内五三七二、六〇八五、六〇八六

社團法人、昭和八年創立。日本工藝の傳統を表現して且つ海外の用に即せる工藝品の海外販路を開拓す。内外に工藝的商品に關する陳列會を開催し、隨時輸出工藝に關する圖書を發行する。

〔會長〕川久保修吉〔專務理事〕水野徳右衛門〔理事〕谷内治橋、山崎覺太郎、長島喜三、梨谷了祐、中山修三、小泉丞井澤新〔常任監事〕天井政四郎〔監事〕伊藤慶二、日野厚

人形藝術院 東京市品川區南品川三ノ一五一七 電高輪六四七〇

人形の藝術的向上を計るを目的とし、年一回公募展を開く。昭和十二年三月東京白木屋に第二回展開催。

〔同人〕建島大夢、有坂與太郎、會員は定めず。

人形すがた會 東京市杉並區松ノ木町一一六八

昭和十一年創立。人形の研究、製作を志す婦人に依つて組織、昭和十四年十月第四回展開催。

〔講師〕西田正秋〔顧問〕太田徳久、西澤笛畝、花柳壽美、藤懸靜也、山田徳兵衛

ねばつち社(彫) 東京市豊島區巢鴨一ノ二二、志田達三方 電大塚八六二

昭和九年度東美校彫刻科製造部出身者を以て組織。彫塑研究並發表をなす。

〔同人〕井上信道、盤若一郎、片山義郎、富岡泰、吉田寛治、横田文男、鷹巢照久、志田達三、上田薫、畝村直久、酒見恒、中村三郎、中村七十、淺岡重治、大間知龍之助、眞鍋忠行、富田武雄、松田一郎

〔贊助員〕北村西望、建島大夢 巴人社(洋) 東京市下谷區上野櫻木町五〇、中山正義方

洋畫の研究團體。毎春同人展を開催する。會員十五名

巴里東京新興美術同盟 東京市中野區江古田四ノ一五五四、齋藤五百枝方 電中野四四一四

昭和五年創立。巴里に於けるアヴァンガルド藝術を東京に招來し又東京の新興美術を巴里に紹介し一黨一派に偏せざる文化交流を行ふ。昭和七年第一回展開催

葉隠美術協會(綜合) 東京市目黒區原町一三五〇、江島信一方

昭和十一年五月創立。佐賀縣出身美術家により組織。年一回展覽會開催。

〔副會長〕田雜五郎〔幹事〕江島信一 白壁會(洋) 京都市東山區神宮道堀

池町、山内善三郎方 電上二二五五

昭利二年九月關西美術院關係の同志を以て結成。昭利十三年十一月第十六回展開催。

〔會員〕柴田又太郎、藤井義晴、水清公子、戸島孚雄、井上賢三、山内善三郎、伊谷賢藏、岩崎金雄、錦義一郎、飯田清

毅、伊庭傳治郎、尾崎悌之助、永井朔夫、松村綾子、津田周平、藤田輝世、中西倪太郎、竹内喜助、廣田延造、豊岡孝子

白御會(日) 京都市右京區嵯峨伊勢上町一〇 電嵯峨六七五

昭利十二年九月關西在住の日本美術院系作家に依り結成。毎月研究会を開き、春季に大阪、京都美術館に展覽會開催。

〔會員〕石丸大象、岩永蘇香、今井紫悦、彌川伸二、川本聰音、館岡栗山、中島菜刀、永友緣樓、上田英二、山田唐倦、山本大慈、佐野光穂、三宅順風、持田卓二、北澤映月、中島啓朝、栗田騎歌、津田榮子、濱孤嘯、高崎興、中河忠夫

白日會(洋、彫) 東京市下谷區清水町六、富田温一郎方

大正十三年春組織。毎春東京府美術館に公募展を開き昭利十六年第十八回展に及ぶ。

〔會員〕(繪畫部)中澤弘光、富田温一郎、大久保喜一、間部時雄、相田直彦、五島甚之介、篠原薫、伊藤清永、荻野康兒、永井武夫、小堀進、灰野管通、渡部菊二、長明、浮島弘行、川村精一郎、嶋川誠一、高畑正明、鈴木重成、島村三七雄、刑部人、廣本了、關口誠、山道榮助

吉川弘、島田四郎、松平齊光、松平康南、佐藤功、大河内信秀(彫刻部)吉田三郎、木村珪二、笹野惠三、田島龜彦、岩崎良平、星野直弘、兒島正典、富田匠美(客員)三浦忠軒、三井高維、香山蕃、富岡東四郎、金子日久連、高木背水、河津孝四

〔會友〕(繪畫部)渡邊柳次郎、柏木仁平、岡崎金藏、栗林文、小坂立夫、兒玉道夫、朝田進、鈴木民次郎、南登志、小泉馨二、山森茂、坂江重雄、飯島八郎、渡邊百合子、古川陽子、大石七風、萩原英一、青山龍水、川口榮、谷部正、山口敏夫、山内邦義、高橋忠彌、門脇耕、川島實、結田信、松岡次賀、木村武男、神田橋信夫、市原義夫、高橋隆比古、長澤昇、山岸富五郎、小島眞佐吉、古田芳雄

宮崎精一、草刈二郎、塩澤祥悟、丸樹長三郎、藤江志津、江口賢一、畔上貞雄、阿部七郎、西山閣二、金子富藏、前林章司(彫刻部)西田信、荒卷茂、竹内貞次郎、坂手讓

白閃社(日) 東京市杉並區永福町四七〇、渡部香堂方

昭利十一年十二月舊南畫院有志に依り結成。同人展を開く。

〔會員〕石原紫雲、大根田雄國、渡部香堂、田中蘭谷、田能村竹莊、村上得明、高士幽篁、江川武村、須藤悟雲、鈴木石鳴

白朝會(洋) 東京市淀橋區下落合一ノ五四〇、杉本貞一方 電大塚六七二六

昭利九年秋舊帝展第二部審査員級有志により組織、毎年秋二回東京及大阪に於て展覽會を開く。十四年三月銀座青樹社に第五回展開催。

〔同人〕金澤重治、金井文彦、吉村芳松、田邊至、大久保作次郎、安宅安五郎、柚木久太、杉本貞一

柏舟社(日) 京都市右京區御室小松野町二五 梅原藤坡方 電西陣五二二三

京都繪畫專門學校の同期出身者で、故土田麥僊に師事した者を以て組織す。會員は官展、他の團體展に出品せず。

〔會員〕伊藤仁三郎、梅原藤坡、要樹平、澤田石民、新見虛舟、林司馬

〔會友會(日、彫) (東京)下谷區谷中上三崎南町五二、日本美術院内(京都)右京區嵯峨伊勢ノ上町一〇、佐野光穂方

昭利十六年二月創立。日本美術院院友有志の組織する研究發表の會。尙從來の院友俱樂部は社交機關としてのみ存置する。

原町工藝研究會(工) 福島縣相馬郡原町、吉井樗家具製作所内

昭利五年創立。同地方の特産たる樗材による工藝品の改善、販路開拓を圖る。二年二回展覽會開催。

〔會長〕吉井佐吉、會員三十八名

汎美術協會(洋) 東京市麻布區霞町六、小林茂方 電赤坂四四二二

昭利八年創立。舊稱新興獨立美術協會「創作の自由と獨創」を尊重し、從來の有鑑査展制度を否定し、作品公募による無鑑査展を開催。

〔會員〕小林茂、丸野豊、鈴木清作、佐藤文彦、林静子、八木秀晃、築比地正司、津田昇宏、奥水瑠、牧島省三

阪神彫家協會 兵庫縣武庫郡本山村小路一三三、妹尾健太郎方 電御影五三一

昭利十一年創立。二科出品の彫家をして結成。展覽會を開催す。

〔顧問〕上田曉(會員)織田久馬一、唐木政一、山根顯一、木村敏一、水野美恵子、妹尾健太郎、山本博一、河合芳男、大西金次郎、河野清治、道下長七、辻合喜代太郎、西井龜治

斑丘社(工) 東京市下谷區上野元黒門町六、神戸屋内 電下谷九八一

昭利五年度東美校工藝科入學者を以て組織する。展覽會開催。

〔同人〕井尾敏雄、井上周平、石橋貞治、橋本欣三、長谷川八十吉、下暢等三十五名

萬華鏡社 東京市瀧野川區西ヶ原五四三、中邨蘭臺方

昭利五年創立。書、畫、篆刻、工藝等各作家の親睦團體。

〔會員〕一噌青水、鳥海鶴洞、鹿兒島二橋、竹原颯風、中邨蘭臺、山田正平、江川碧潭、相原大樹、西川謙盒、小澤天來、横山善信、竹越眞三夫、村雲大樸子、小泉繁、荒木柳城、澤田齋齋、北村明道

美校橫濱會 橫濱市神奈川區松ヶ丘四九、三森達夫方

昭利十年五月創立。橫濱在住若しくは出身の東美校卒業生、在校生、關係者を以て組織。親睦團體。展覽會を開催。

〔幹事〕三森達夫、會員九十二名

美術記者聯盟 東京府美術館内

昭和十四年三月美術雜誌記者が相互の連絡協力を目的として結成。

〔會員〕中川愛水、石川幸三郎、浦崎永

錫、湯山昇、芳川越、佐久間善三郎、中山貞夫、大山廣光、菊池芳一郎、高木紀重、猪木卓爾、藤森順三、齋田元次郎

〔幹事〕浦崎永錫、大山廣光

美術工藝大阪巧藝社 大阪市北區河内町一ノ二三、伊藤光秋方 電報川二六八三

大正十四年創立の精美會を昭和八年會員を増加して現稱に改む。年一回同人の工藝展開催。

〔顧問〕白川朋吉〔同人〕伊藤光秋、伊等鐵屋、今橋春齋、市川鎮琅等十五名

美術懇話會 東京市下谷區上野公園美術研究所内 電下谷三四八七

昭和六年十一月、美術研究所内に創立

「美術に關する趣味及理解を進め社會に於ける美術の健實なる發達に貢獻する」をもつて目的となす。事業として一、美術に關する懇話會の開催。二、展覽會講演會等の美術に關する研究的集會の開催。三、美術に關する出版等を行ふ。昭和七年一月より十二年六月まで美術研究所の編輯にかゝる月刊「美術研究」を發行したるほか、美術研究資料(計四冊)、美術懇話會叢書(計二冊)等を出版してゐる。

〔理事長〕藤原銀次郎〔理事〕二十五名〔常務理事〕五名〔會員〕百六十五名

美術創作家協會 東京市杉並區正保町一九三、荒井龍男方

昭和十二年創立の自由美術家協會を十五年七月現稱に改め従來の藝術的主張に一層努めることとなつた。公募展を開催

〔會員〕荒井龍男、濱口陽三、長谷川三郎、北尾淳一郎、小山昇、小松義雄、村井正誠、森芳雄、難波田龍起、中村眞、小野里利信、清野恒、植木茂、矢橋六郎

山口薫、山田光春

〔會友〕朝妻金治郎、馬場顯三、文學涿瑛九、平岡潤、吉見庄助、大橋城、劉永國、富岡宏資、谷澤秀晃、山口正城

美術新協(綜合) 東京市杉並區井萩町二ノ一

舊稱新興美術家協會。昭和十年七月ホクト社の玉村方久斗、笹川巴流夫、平川清藏、院展の大内青圃、故木村五郎、國畫會の清水多嘉示、大乘美術の大内青坡等の八名を發起者として創立。毎秋公募展を催す。

〔同人〕村井麗樹、榊原始更、玉村方久斗、五十嵐幸男、東宣正、井上秀雄、淺川藤治、杉本幸一郎、白井保春、圓山信一、小林良曹、野澤武美、山田稔、大久保實雄、關謙二

〔會友〕鈴木夢名子、菅野剛吉、村上柁夫、松竹正也、今井正、中靜杜六、森夜潮

美術團體聯盟 (假事務所)東京市杉並區和田本町八三二、木村莊八方 電中野四二四七

美術團體相互間の連絡を圖る目的を以

て左記九團體を役員團體として昭和十五年十一月創立した。尙其の後、別に七團體が加盟したが、國畫會のみは「組織を團體單位とせず作者個人單位とする」ことを主張、不参加となつた。

〔役員團體〕一水會、二科會、東光會、獨立美術協會、旺文社、太平洋畫會、光風會、春陽會、新制作派協會

〔加盟團體〕白日會、日本版畫協會、日本水彩畫會、第一美術協會、春臺美術會

美術創作家協會、美術文化協會

美術批評家協會 東京市麴町區麴町四丁目五、電九段一三五三

昭和十一年十月設立。美術各部門の學者、批評家を會員とし、美術批評の確立進歩的なる文化運動の實踐を目的とす。その計畫する事業は左の通りである。

(A)機關雜誌「美術批評」の發行、(B)美術圖書館設立、(C)美術行政に對する提案建築、(D)都市美術に對する美術的批評、(E)美術教育に對する指導機關の設立、(F)産業美術に對する指導機關の設立、(G)海外に於ける美術批評家團體との提携、(H)海外に於ける文化團體との資料の交換、(I)一般美術問題に關する講演、(J)美術著作權の制定、(K)國際的文化交換に對する批評、(L)美術コンクールの開催、(M)優秀作品の推薦

〔會長〕子爵吉川元光〔書記長〕柳亮

〔事務長〕外山卯三郎〔會員〕(東洋美術)小林剛、蓮實重康、土方定一(西洋美術)外山卯三郎、柳亮、今泉篤男(建築)佐藤武夫(工業美術)安田清(裝飾美術)

藏田周忠(商業美術)原弘(都市計畫美術)石原憲治(舞臺美術)圓池公功(舞踊)蘆原英了(映畫)岩崎昶、三雲祥之助(寫眞)仲田定之助、中原實(服飾)フランシス・フェロディ(裝幀)庄司淺水(ジャーナル・グラフィック)三浦逸雄

美術文化協會(綜合) 東京市本郷區動坂町三二七、福澤方

主として獨立、二科の所謂前衛派の前進が、さきに獨立を脱退した福澤一郎を中心に昭和十四年五月新に結成した。同會は繪畫、彫刻、寫眞、裝飾、圖案、文筆等各分野を網羅し、綜合的に前衛運動を爲さんとす。公募展を開催す。

〔同人〕絲園和三郎、今井滋、板坂勇、濱松小源太、長谷川宏、濱谷次郎、土井俊夫、小川原脩、大塚耕二、大口登、柿手春三、吉井忠、米倉壽仁、高松甚二郎

高橋迪章、鷹山宇一、土屋幸夫、瀧口綾子、横地康行、塚原清一、永井東三郎、梨本紀美夫、藪内正直、福澤一郎、古澤岩美、小牧源太郎、寺田政明、淺原清隆

阿部芳文、巖光、荒木剛、齋藤義重、三郎、安孫子眞人、佐田勝、齋藤義重、北脇昇、森堯之、杉全直

美術問題研究會 東京市澁橋區下落合四ノ二〇七一、尾川方

昭和十五年十二月美術に關する諸問題を検討する目的を以て設立す。現在美術評論にたゞさはる者により組織。

〔會員〕今泉篤男、蓮實重康、富永惣一

外山卯三郎、千澤植治、大口理夫、奥平英雄、尾川多計、嘉門安雄、横川毅一郎

四六

田中一松、瀨口修造、田近憲三、谷信一

田中信行、仲田勝之助、中井宗太郎、長

島喜三、仲田定之助、村田良策、内山義

郎、黒田鶴心、山際靖、山田智三郎、柳

亮、摩壽意善郎、小池新二、江川和彦、

相良徳三、荒波季夫、佐波甫、北川桃雄

金原省吾、水澤澄夫、三輪福松、土方定

一、森口多里、森田龜之助、鈴木進、鈴

木道夫、青柳正廣、新規矩雄、税所篤二

槍崎宗重、四宮潤一、鈴木仁一、坂崎坦

植村鷹千代、兒島喜久雄、何初彦、大島

隆一、勝原雅大

兵庫縣新美術聯盟(綜合) 神戸市神

戸區三宮町三ノ九二

昭和五年結成の兵庫縣美術家聯盟と大

正十一年創立せる兵庫縣美術協會を合同

し、昭和十七年一月同縣在住の美術家を

以て本會を組織した。國策に順應し、美

術文化の發展向上を計ると共に、地方文

化の創造發展に努むるを目的とし、展覧

會研究會其他美術文化に關する事業を行

ふ。

〔會長〕大政翼賛會同縣支部長知事坂千

秋〔委員〕飯塚周悅、伊川寛、大石輝一

小磯良平、杉浦三郎、鈴木清一、立脇泰

山、林重義、三木朋太郎、宮崎翠濤、元

川嘉津美、森月城、山下摩耶、山本廣洋

八島遙雲、會員一九〇名、賛助會員二〇

名

廣島縣工藝協會 廣島市猿樂町、縣

産業獎勵館内 電一八三八、二六三〇

昭和六年設立。工藝産業の調査、意匠

圖案の研究、販賣斡旋、展覽會開催等を

行ふ。

廣島縣美術協會(日、洋、工) 廣島

市猿樂町、縣産業獎勵館内、電一八三八

大正四年創立。美術及美術工藝の發達

を圖るを目的とす。公募展を開催す。

〔副會長〕原貫之助、長尾富太郎〔主事〕

堀修

備前燒陶業組合 岡山縣和氣郡伊部

町役場内

昭和九年伊部町の伊部燒業者を以て伊

部陶業協會を組織。伊部燒の發達を圖り

展示會開催、他展への出品斡旋、宣傳等

をなす。

〔組合理事長〕木村貫一、會員二十八名

伏虎美術協會(洋) 東京市澁谷區千

駄ヶ谷町五ノ九〇二、木下孝則方

昭和十一年設立。和歌山縣下の洋畫の

發達獎勵を目的とす。每春和歌山市に公

募展開催。十二年五月第二回展開催。

〔會長〕和歌山縣知事〔會員〕木下孝則

木下義謙、濱地清松、川口軌外、碓伊之

助、岡部邦香、村井正誠

福井縣漆藝會 福井縣今立郡河和田

村、小林作兵衛方

福井縣漆工藝の發達を目的とし、漆藝

の研究並發表を行ふ。

〔名譽顧問〕根尾謙兒、山崎覺太郎〔會

長〕小林作兵衛、會員七名

福井縣美術協會 福井市、福井縣商品

陳列所内

大正十五年創立。福井縣出身並在住の

美術家を以て組織。縣下美術及工藝の發

達を圖り、毎年展覽會、講習會、講演會

等開催の外他展への出品斡旋を行ふ。

〔會長〕根尾謙兒

福岡縣工藝協會 福岡市天神町、福

岡縣産業獎勵館内

昭和十一年設立。縣下工藝産業の發達

を圖り、工藝に關する調査、展覽會、講

習會の開催、工藝功勞者の表彰等を行

ふ。〔福岡縣工藝展覽會〕は同協會員が主

としてその中心となる。

〔會長〕福岡縣知事

福岡縣美術協會 福岡市天神町十七

(東京事務所)豊島區巢鴨町五ノ一四

一、吉村方

昭和十五年九月、福岡縣出身並に縣在

住の美術家及同好者等を以て組織す。每

年福岡市に於て日本畫、洋畫、彫塑、工

藝に互る作品展(招待出品)を開く。同

年十一月第一回展開催。

〔會長〕本間精〔副會長〕畑山四男美

〔第一回委員〕(第一部)阿部春峰、今

中素友、水上泰生、吉村忠夫(第二部)

兒島善三郎、坂本繁二郎、辻永、中村研

一、山喜多二郎太、吉田博、和田三造、

(第三部)津上昌平、富永朝堂、早川朝

洋、山崎朝雲、安永良徳(第四部)仰木

政資、岡部達男、豊田勝秋

福岡美術會(綜合) 福岡市因幡町

福岡市通俗博物館内 電一六七五

大正十二年創立。福岡縣出身並在住の

美術家を以て組織。美術の向上に資する

爲中央より二科、春陽、獨立等の諸美術

展の誘致開催に努め、又毎年會員の綜合

展を開催する。

〔會長〕(市長)畑山四男美〔幹事〕齋藤

鳴江、白石久三郎、安部勝三、富田賢四

郎

〔會員〕八十三名

福島美術協會(洋) 福島市、市役所

内

昭和五年設立。縣下美術の發達を目的

として年一回福島市に於て公募展開催の

他臨時講習會講演會等を開く。

〔總裁〕福島縣知事〔會長〕佐藤澤

福陽美術會(日) 東京市本郷區駒込

林町七六、角田磐谷方

大正八年、福島縣出身の日本畫家を以

て組織。東京及び郷土に於て展覽會を開

催す。

〔會長〕勝田蕉琴〔理事〕荻生天泉、太

田秋民、酒井三良〔幹事〕角田磐石、石

塚省三、渡邊浩年、酒井白澄、鴻巣一善

須田善二、湯上濤、猪卷清明

文展三部作家協會(彫) 東京市荒川

區日暮里町九ノ一〇九七、藤井浩祐方

舊文、帝展、文展に出品の彫塑家にし

て所屬團體を持たぬ人々が合同し昭和十

四年六月東京府美術館に第一回展を開催

した。會員五十名。

〔幹事〕藤井浩祐、吉田三郎、長谷川義

起、中川清、木村桂二、白井保春、長田

平次、小野田高節、中川爲延

壁畫藝術協會 東京市京橋區銀座一

丁目皆川ビル内、圖師建築事務所内

昭和十四年六月創立。「建築と建築裝

飾」主として壁畫上の綜合的研究並びに

制作」を目的とす。

〔會員〕今利次郎、岡田哲郎、佐藤次夫
圖師嘉彦、福田平八郎、本郷新、内田巖
嘉門安雄

邦畫一如會(日) 東京市品川區大井
康塚四七三八、鍋井克之方(假事務所)

昭利十五年十二月組織。同人展を開催
す。

〔會員〕津田青楓、小杉放庵、石井柏亭
藤田嗣治、石井鶴三、鍋井克之、牧野虎
雄、中川紀元、木村莊八、中川一政、東
郷青兒

邦畫教育研究会 東京市赤坂區新坂
町四七、大貫鏡心方

昭利十二年結成。東美校日本畫及び師
範科出身の美育家により組織。研究会を
開催す。

〔會長〕結城素明(評議員)川崎小虎、
矢澤弦月、小泉勝爾、山田廉、常岡文龜
多賀谷健吉、松田義之、松垣龜夫(幹事)
狩野探道、大貫鏡心、大島正記、白井剛
夫、石田粧秋、松垣龜夫、淺野秀一、下
田舜堂(會員)五十名

萌青會(日) 東京市小石川區小日向
臺町三ノ五三、長澤美枝方 電牛込二二
二二

女子美術専門學校の師範科高等科日本
畫部の昭利九年度卒業生有志を以て組織
十三年六月第四回展開催。會員九名

報道美術協會 東京市芝區西芝浦一
東京高等工藝學校内 電三田一一五六

昭利十四年設立。東京高等工藝學校卒
業生有志に依り組織。報導美術の研究並
に實踐及び會員の自覺向上を目的とす。

年一回以上展覽會開催、同十五年東京及
び大阪、京都、仙臺、京城に於て「國家
總力戰ホスター展」を、十六年春「戰ふ
獨伊壁新聞展」を開催す。年六回機關紙
「報道美術」發行。

〔會長〕宮下孝雄(顧問)鈴木京平、安
田祿造、鎌田彌壽治、伊東亮次(當任幹
事)片野一男、塚田敢、大塚均、松本虎
雄(幹事)大橋正、樋口渡、日置勝駿、
山上謙一(會員)八十四名

北海道美術協會(綜合) 札幌市北四
條西七丁目三

大正十四年創立。爾來每秋展覽會を開
催、昭利十六年第十七回展に至る。毎夏
講習會を開く。

〔會長〕北海道長官 戸塚九一郎(副
會長)北海道帝國大學總長今祐(理事)
荒瀧實、木下三四彦、小谷義雄、齋藤與
一郎、鬼川俊藏、崎崎貢、佐野四滿美、
竹内武夫

北信工藝協會 各縣廳内
長野、新潟、富山、石川、福井の五縣
を以て組織し、各縣廳内に事務所を置く
毎年各縣の交代で、商工省輸出工藝展の
出品を目的とする試作品展、一般工藝展
の開催、其他の事業を行ふ。

〔會員〕兼平英示、榊田誠一、三浦鮮治
中野五一、中村善策、澁谷政雄、谷吉二
郎、竹部武一、山崎省三

北陽會(綜合) 東京市麹町區大手町
二ノ二、日清ビル六二一號 電丸之内一
八七七

昭利八年創立。東美校卒の富山縣出身
在京美術家を以て組織。同人展開催。

〔會長〕伯爵前田利男(副會長)高廣三
郎(世話人)佐々木大樹、郷倉千毅、長
谷川義起、山崎覺太郎、中谷宏運、五島
甚之助、會員五十一名

墨雲社(日) 大阪市西區南堀江通三
ノ二二、赤松雲嶺方

大正十一年、赤松雲嶺門下に依り組
織。展覽會開催。

〔會員〕四十八名
墨人會俱樂部(日) 東京市世田谷區
三宿町七一 電世田谷三七〇九(呼)

昭利十二年二月創立。日本畫の團體で
臨時展覽會を開催す。

〔會員〕生田花朝、渡邊大虛、瀧秋方、
津田青楓、中川一政、草野蘆江、矢野橋
村、八百谷大樹、小杉放庵、小松均、菅
楯彦(代表者) 渡邊大虛

墨洋會(日) 下谷區谷中眞島町一、
太平洋畫會内 電下谷一七九二

太平洋畫會の會員で、日本畫を描く有
志を以て組織。展覽會を開く。

〔會員〕二十名。
三重縣工藝協會 三重縣津市中茶屋
町、三重縣廳商工課内

昭利九年創立。縣下の工藝品製造業者

販賣者並に工藝組合團體を以て組織。工
藝品の改善並に輸出増進を圖り、展覽會
講演會の開催、取引上の紹介斡旋等を行
ふ。

〔會長〕(三重縣經濟部長)西岡廣吉、會
員百七十名
明朗美術聯盟(日) 東京市板橋區練
馬南町一ノ三四八五、狩野晃行方

昭利九年一月青龍社舊同人落合朗風、
川口春波に依り結成。同秋第一回展開
催、同十二年盟首落合朗風逝去し、よつて
川口春波が主宰となつたが、退會した。
十六年第八回公募展開催。

〔同人〕狩野晃行、木和村創爾郎、渡邊
日向、東條光高(盟友)山下昌風、島田
晃州、松本晃養、吉田錦穂(盟員)城野
三藏、青柳定義、小川晃古、廣瀬大晃、
内田光胤、中野瑞草、稻田玉穗
木心舍(彫) 東京市荒川區日暮里渡
邊町一〇四〇、吉田白嶺方 電駒込二六
四〇

大正七年、吉田白嶺の指導により木心
舍研究所が設立された。昭利十一年第一
回展を開催、爾後毎年東京及び大阪に同
人展を開く。

〔會員〕吉田白嶺(逝去)、松村外次郎
林是、高山九羊、小林貞吾、中村竹男、
松原岳南、中村直人、長谷川豊雄、岡村
進、藤井隆義

八ツ手會(工) 東京市中野區鷺ノ宮
木村章平方

昭利十一年創立。彫刻家による工藝品
の製作並發表の團體。同年七月第一回展

開催す。

〔會員〕二十名。
三重縣工藝協會 三重縣津市中茶屋
町、三重縣廳商工課内

昭利九年創立。縣下の工藝品製造業者

販賣者並に工藝組合團體を以て組織。工
藝品の改善並に輸出増進を圖り、展覽會
講演會の開催、取引上の紹介斡旋等を行
ふ。

〔會長〕(三重縣經濟部長)西岡廣吉、會
員百七十名
明朗美術聯盟(日) 東京市板橋區練
馬南町一ノ三四八五、狩野晃行方

昭利九年一月青龍社舊同人落合朗風、
川口春波に依り結成。同秋第一回展開
催、同十二年盟首落合朗風逝去し、よつて
川口春波が主宰となつたが、退會した。
十六年第八回公募展開催。

〔同人〕狩野晃行、木和村創爾郎、渡邊
日向、東條光高(盟友)山下昌風、島田
晃州、松本晃養、吉田錦穂(盟員)城野
三藏、青柳定義、小川晃古、廣瀬大晃、
内田光胤、中野瑞草、稻田玉穗
木心舍(彫) 東京市荒川區日暮里渡
邊町一〇四〇、吉田白嶺方 電駒込二六
四〇

大正七年、吉田白嶺の指導により木心
舍研究所が設立された。昭利十一年第一
回展を開催、爾後毎年東京及び大阪に同
人展を開く。

〔會員〕吉田白嶺(逝去)、松村外次郎
林是、高山九羊、小林貞吾、中村竹男、
松原岳南、中村直人、長谷川豊雄、岡村
進、藤井隆義

八ツ手會(工) 東京市中野區鷺ノ宮
木村章平方

昭利十一年創立。彫刻家による工藝品
の製作並發表の團體。同年七月第一回展

開催。

〔同人〕林是、長谷川豊雄、岡村進、中村直人、黒田嘉治、三枝古都、松村外次郎、木村章平

八木橋文平あけび工藝指導所 弘前市山道町一二 電六一八

昭和七年設立。輸出向新あけび工藝品の研究、販路増大に努む。

〔所長〕八木橋文平、所員三百名

山梨美術協會(綜合) 東京市世田谷區赤堤町一ノ一五四、土屋義郎方 甲府市百石町 山梨日日新聞社内

昭和十一年結成。山梨縣出身並在住の美術關係者を以て組織。展覽會、講演會を開く。昭和十五年第四回展を甲府市に開催。

〔會長〕(山梨日々新聞社長) 野口二郎
〔會員〕六十一名

幽興會(日) 東京市淀橋區下落合二ノ六四〇、古川北華方

昭和十一年創立。古川北華を中心とする集で、同人展を開く。十二年六月上野松坂屋に第二回展開催。

〔會員〕橋本關雪、古川北華、正宗得三郎、牧野虎雄、錢鐵燾、近藤浩一路、中川紀元、藤田嗣治

羊和會(工) 東京市小石川區宮下町八、森田一靜方

昭和六年、舊帝展第四部入選者を以て組織。金工藝の發達を圖るを目的として毎年日本橋三越に同人展を開催す。

〔顧問〕磯崎美亞、伊藤正見、石田英一、桂光春、海野清、北原千鹿、清水龜藏、

鈴木美彦〔會員〕磯崎美夫、大關勝盛、大木秀春、長島正親、梅垣景山、山下春興、府川一信、小杉芳盛、有田利章、宮本猛、森田一靜、鈴木春盛、鶴飼康次

洋風版畫會 東京市澁野川區西ヶ原町三六一、渡邊光徳方

昭和四年十二月創立。主としてエッチング及石版畫の團體。展覽會を開催す。

〔會員〕田邊至、吉田久繼、織田一磨、中村研一、及川康雄、間部時雄、小磯良平、猪熊弦一郎、永坂春雄、大久保作次郎、寺崎武雄、渡邊光徳

横濱美術協會(日、洋、版) 横濱市中區弘明寺町三一〇、志村計介方 電長者町一二五七

昭和七年創立。横濱在住の日本畫家及洋畫家を以て組織。年一回日本畫、洋畫版畫の公募展を開く。十三年第七回展を開催した。

〔會長〕横濱市長〔會員〕五十九名〔無鑑査〕三名

洛案會(工) 京都市伏見區桃山宗和園

昭和四年創立。澤田宗山の指導を仰ぐ京郷陶磁器作家の團體。展覽會、研究會等を催す。

〔會長〕澤田宗山〔幹事〕松本石亭、鈴木則司、伊地知仁郎、横山瑞祥、堯部清里兩會(洋) 東京市中野區江古田二ノ九三一、鈴木良三方 電落合長崎二五六九(呼出)

昭和十一年結成。嘗て巴里に於て共に修學せる人々。隨時作品展開催。

ヤーリ

〔會員〕勝間田武夫、能勢龜太郎、大橋了介、鈴木良三、高林初作、田村憲、和田清

離騷社 東京市板橋區常盤臺一ノ二九、西澤笛吹方 電板橋一二〇一

大正九年創立。會員の親睦團體。

〔幹事〕西澤笛吹、金井紫雲、石川帛水、飛田周山、田口黃葵、會員三十七名

陸軍美術協會(日、洋、彫) 東京市麴町區麴町三ノ十二、電九段一一八七、八

昭和十四年四月創立。主として戰役、事變に陸軍省報道部指導の下に従事せる畫家及び彫刻家を以て組織す。會員の作品を通じ、軍事美術に關する獎勵普及を計り陸軍と協力して興亞國策に貢獻す

〔會長〕松井石根〔副會長〕藤島武二、〔總務〕石井柏亭、橋本關雪、中澤弘光

〔委員〕伊原宇三郎、栗原信、清水登之、中村研一、日名子實三、向井潤吉、吉岡堅二〔監事〕大野隆徳、鶴田吾郎〔幹事〕住喜代志〔會員〕松井石根、朝井剛右衛門、荒井陸男、荒木十畝、石井柏亭、一色五郎、伊原宇三郎、井上幸、今村嘉吉

江藤純平、榎倉省吾、大野隆徳、小野田元興、柏原覺太郎、鹿子木孟郎、川島理一郎、川崎小虎、川端龍子、熊岡美彦、栗原信、小磯良平、小早川秋聲、小林萬吾、五味清吉、佐々貴義雄、清水登之、清水良雄、眞道黎明、鈴木榮二郎、鈴木良三、關谷陽、高澤圭一、田中佐一郎、田村孝之介、高光一也、鶴田吾郎、手島貢、等々力巴吉、中澤弘光、長坂春雄、

永地秀太、中村研一、中村直人、碓伊之助、橋本關雪、橋本八百二、長谷川榮作、長谷川春子、日名子實三、福田豐四郎、藤島武二、深澤省三、福澤一郎、南薫造、南政善、宮島久七、宮本三郎、宮田重雄、三上知治、向井潤吉、矢野鐵山、吉岡堅二、横江嘉純、吉田三郎、吉田博、吉村忠夫、利田香苗、脇田和

柳美會(工) 京都市伏見區桃山、宗和園内

大正六年京都柳池校開校五十年記念に同校關係の工藝家を以て創立。毎年展覽會を催す。

〔理事長〕澤田宗山〔理事〕泰藏六、吉田長春、青木俊勝

聊娛會(洋) 東京市淀橋區下落合四ノ一六二三、大給近清方

大正八年創立。故黒田清輝子及南部利淳伯及び故小笠原長幹伯の發意に依り華族及び華族籍にありたる者を以て組織せる洋畫愛好者の團體で、毎年一回展覽會を開く。

〔代表者〕男爵徳川義恕〔幹事〕子爵織田信大、子爵松平定晴、大給近清、會員十九名、客員十五名

綠巷會(洋) 東京市杉並區東荻町六九、神津方 電荻窪二四四三

神津港人が主宰する會で、公募展を開く。

〔會員〕神津港人、村上誠、大澤佐一、佐藤利平、内堀一男、石黒義保、平井爲成、鳥羽宗雄、小林三郎、上田久之、小林剛、本間勘次

緑人社(彫) 東京市下谷區谷中上三

崎南町六〇、伊藤鉦次方。

昭和八年度東美校彫刻科彫造部卒業生を以て結成、毎年六月展覽會開催。

〔會員〕岩崎良平、伊藤鉦次、西田信、

星野宣、小田寛一、川口信彦、漆原馬須雄、宇佐見庄一、新井喜惣治、青柳利男

明田川孝、北青史

縁縁彫刻會(彫) 東京市豊島區千川

町一ノ三一七〇、中野昂方

舊稱大東彫塑會。大正十二年以降の東美校木彫部卒業生有志を以て組織。關野聖雲の彫刻界に於ける主張を翼賛せんとす。會員六十名

留加會(洋) 東京市目黒區下目黒四ノ一〇〇四、電大崎三五一四

昭和三年創立。文化學院美術部出身者有志を以て組織す。但し十六年三月會規を改め文化學院と絶縁した。展覽會を開催する。

〔會長〕石井柏亭〔總務〕岡見弟三〔會計〕鍋谷傳一郎

麗交會(工) 京都市中京區富小路四

條上ル、龍文堂安之介方

昭和十一年三月、東京及び京都の工藝界の中堅作家十九名により結成。相互の研鑽を目的とす。

〔會員〕各務鐵三、香取正彦、吉田醇一郎、高野松山、田村泰三、海野建夫、信田洋、山本自燼、北原三佳、富之原謙、

(以上東京)伊東陶山、井田宣秋、龍文堂安之介、小川文齋、加藤宗巖、楠部彌

式、淺見五郎助、道林俊正、平館會

歷程美術協會(日) 東京市世田谷區上馬町一ノ八六六、山岡良文方 京都市

東山區五條坂六丁目、山崎方 大阪市西區京町堀通五ノ三七、松本方

昭和十三年六月創立。新日本畫の創作を趣旨とす。公募展覽會を開く。

〔會員〕松本一穂、田口壯、山岡良文、江崎隆、村山東吳、蒔田皓成〔會友〕小

森龍太郎、小山浩子、佐々木勝磨、三ヶ尻正、丹生きみを、伊藤伸一、中林松太郎、中島進、福井日出夫、八木虛平、大

平四郎

連袖會(洋) 東京市牛込區市ヶ谷砂

土原町一ノ二、久野方

昭和十二年安井曾太郎の門下を以て組織。展覽會を開く。

〔會員〕奥田郁太郎、小野末、片多三吉金子博信、狩野壽一、高田誠、中村琢二

二宮雪夫、高見耿太郎、久野昌康、本郷惇、三浦俊輔、渡邊正太郎、渡邊宗一、

丸野豐司

朗峯畫塾(日) 東京市大森區池上本町一八六

初め深水畫塾と稱す。日本畫の指導達成を旨とし、月一回研究會を開く。

〔主宰〕伊藤深水〔顧問〕渡邊泰次、小林源太郎〔幹事〕遠藤燦可、塾員約百名

萬和會(工) 東京市杉並區堀之内一ノ一一三

昭和十五年三月創立。染織家を以て組織す。

〔顧問〕津田信夫〔賛助員〕廣川松五郎木村和一〔同人〕磯部陽、般若侑弘、長

安右衛門、渡邊春男、高久空木、大坪重周、山岸堅二、平野利太郎

六潮會(日、洋) 東京市目黒區大原

町一六二、横川毅一郎方

昭和五年創立。展覽會を開く。

〔會員〕中村岳陵、中川紀元、山口蓬春、牧野虎雄、木村莊八、福田平八郎、外狩

素心菴、横川毅一郎

六萌會(洋) 横濱市鶴見區東寺尾町一六〇七、鳥羽宗雄方

昭和八年度の美術學校出身者及び有志を以て組織。展覽會を開く。

〔會員〕鳥羽宗雄、橋原健三、中村新次郎、上田久之、小林三郎、小林剛、角浩

東山紗智子

和光會(工) 東京市下谷區谷中天王寺二七、津田信夫方

昭和九年設立。同人展を開く。

〔會員〕和田三造、津田信夫、沼田一雅、高村豐周、廣川松五郎、山崎覺太郎、河

村蜻山、岩田藤七、香取秀真、北原千鹿、富本憲吉

定期刊行物一覽 (五十音順)

現代美術關係

一 般

畫

論

舊「造型藝術」、月刊、藤本詔三編輯、造型藝術社發行、世田谷區世

田谷二ノ二〇七七、二圓

美術新報 國社發行、豊島區雜司谷町七ノ九四七、電牛込七四二七、三圓
舊「日本美術新聞」、旬刊、猪木卓爾編輯、日本美術新報社發行、麴町區九段一ノ一四、電九段一七一五、五十錢

美術文化新聞 舊「美術通信」、週刊、佐久間善三郎編輯、日本美術通信社發行、蒲田區蓮沼町一〇八、月一圓五十錢

エツチング 月刊、西田武雄編輯、日本エツチング研究所發行、麴町區麴町一ノ三、電九段五一四、二五錢

南畫鑑賞 月刊、石塚彰吾編輯、南畫鑑賞會發行、麴町區三番町七、電九段六二〇、四十錢

工藝 月刊、日本民藝協會編、同所發行、芝區今入町一五玉屋ビル、電銀座七六三四、五〇錢

工藝ニユース 月刊、商工省工藝指導所編輯、工業調査協會發行、神田區旅籠町三ノ四、三五錢

汎工藝 月刊、柴崎俊吉編輯、汎工藝社發行、大阪市住吉區住吉町一三〇〇年四圓

輸出工藝 隔月、池田美明編輯、日本輸出工藝聯合會發行、麴町區丸ノ内二丁目丸ビル内、電丸ノ内五三七二、六〇八五、六〇八六、三〇錢

建築雜誌 月刊、菅原肇編輯、建築學會發行、京橋區西銀座三ノ一、電京橋一三三二、一二三八、一圓

建築世界 月刊、鈴木增雄編輯、建築世界社發行、京橋區京橋二ノ二ノ四、電京橋一五七五、八〇錢

住宅 月刊、小林清編輯、住宅改良會發行、大阪市西區土佐堀船町八、電土佐堀二三二九、五〇錢

新建築 月刊、吉岡保五郎編輯、新建築社發行、京橋區寶町一ノ六、電京橋四七五二、八〇錢

日本建築士 月刊、小瀧文七編輯、日本建築士會發行、京橋區銀座西三ノ一建築會館内、電京橋六二〇、四〇錢

定期刊行物一覽

教育

圖畫工作 月刊、後藤福次郎編輯、圖畫工作研究所發行、淺草區三筋町二ノ一、電淺草五一九〇、三〇錢

造形教育 舊「教育美術」、「圖畫と工作」、「圖畫至通信」、月刊、河井博編輯、教育美術振興會發行、神田區一ツ橋二ノ九教育會館内、電九段一六一六、三〇錢

圖畫と手工 月刊、三浦直政編輯、錦巷會發行、世田谷區田園調布二ノ七〇九、三〇錢

美術報告書類 月刊、圖畫教育獎勵會編輯、晚成處發行、下谷區櫻木町二、二五錢

大日本窯業協會雜誌 月刊、大日本窯業協會編輯發行、京橋區銀座西四丁目銀座商館内、電京橋五五一九

東京美術 二回、高村豐周編輯、東京美術學校々友會發行、非賣

日本美術協會報告 年二回、日種義太郎編輯、日本美術協會發行、下谷區上野公園櫻ケ岡、非賣

博物館研究 月刊、棚橋源太郎編輯、日本博物館協會發行、下谷區上野公園東京科學博物館、電下谷八二〇〇、八二〇一

古美術關係

美術

以可留我 年四回、佐伯啓造編輯、鶴故郷舍發行、奈良縣法隆寺村法隆寺二六八、電法隆寺四、每卷一圓五〇錢平均

浮世繪界 月刊、檜崎宗重編輯、浮世繪同好會發行、日本橋區通三丁目五、一圓（一六年九月終刊）

瓜茄 不定、奧村伊九良編輯發行、京都市東山區今熊野南日吉町二三、一圓（休刊）

學叢 鶴田潔編輯、木曜會發行、牛込區二十騎町三二、非賣

畫說 月刊、脇本十九郎編輯、東京美術研究所發行、本郷區駒込千駄木町二三四、電駒込二四九五、五〇錢

京都美術青年會誌 中西勇太郎編輯、京都美術青年會發行、京都市御池寺町東入
藝術資料 月刊、金井紫雲編輯、芸艸堂發行、京都市中京區寺町二條南、一圓
五〇錢

建築史 隔月、建築史研究会編輯、吉川弘文館發行、京橋區京橋二ノ一、
六〇錢

國華 月刊、瀧精一監修、村山長學後援、名義人村山句吾、國華社發行、
麻布區市兵衛町二ノ一、電赤坂八五二、五圓

國寶 月刊、矢野國太郎編輯、國寶社發行、麴町區平河町二ノ一、電九
段一九、五〇錢

史蹟と古美術 十回、國史普及會編輯發行、京都市七條通堀川西入、田住昇、電下
一五七五(目下發行停止中)

史迹と美術 月刊、川勝政太郎編輯、スズカケ出版部發行、京都市中京區寺町九
太町南入、四〇錢

書道 月刊、鹽原光男編輯、泰東書道院出版部發行、日本橋區江戸橋三ノ
三、六〇錢

清閑 隔月發行、安谷茂彦編輯、清閑舎發行、大阪市東區道修町四丁目
月刊、遠藤敏夫編輯、寶雲舎發行、日本橋區江戸橋二ノ八松慶ビル
電日本橋二四五六、二〇八一、一圓

茶わん 隔月、東洋陶磁研究所編輯發行、日本橋區江戸橋二ノ八松慶ビル二
階、五〇錢

陶磁 隔月、鈴木榮之亮編輯、東京美術青年會發行、芝區新橋七ノ一二、
東京美術俱樂部內、非賣

東洋建築 月刊、相模書房發行、日本橋區通二丁目四日本橋ビル(休刊中)

東洋美術 四回、小川晴陽編輯、飛鳥園發行、奈良市奈良帝室博物館横、電八
七二、二圓(休刊)

な の か 不定、香取正彦編輯、七日會發行、瀧野川區田端五〇〇

寧樂 不定、栗原武平編輯、寧樂發行所發行、奈良市龍松院、二圓(休刊)

日本美術協會報告 四回、安井易市編輯、日本美術協會發行、下谷區上野公園櫻ヶ岡
非賣

美術研究 月刊、美術研究所編輯發行、下谷區上野公園美術研究所內、電下谷
三四八七、二圓五〇錢

佛教美術 不定、源豐宗編輯、佛教美術社發行、京都市左京區北白川伊織町四
五、電上二〇四七、(休刊)

瓶史 四回、西川一橋編輯、去風洞發行、京都市左京區淨土寺馬場町一五
七、七〇錢

寶雲 四回、森暢編輯、寶雲刊行所發行、京都市左京區岡崎真如堂前町二
三圓三〇錢

大和志 月刊、島本一編輯、大和國史會發行、奈良縣郡山柳町一九八、三〇
錢

夢殿 年二回、佐伯啓造編輯、鶴故郷舎發行、奈良縣生駒郡法隆寺村法隆
寺二六八、電法隆寺四、四圓平均

林泉 月刊、重森三玲編輯、京都林泉協會發行、京都市左京區吉田下大路
町四五、三〇錢

考古學及歷史關係 月刊、田中謙編輯、東洋貨幣協會發行、荏原區荏原一ノ二九一、七
五錢

考古學 東京考古學會編輯發行、大阪市住吉區阿倍野筋三ノ一〇坪井良平方
月刊、日本考古學會編輯、吉川弘文館發行、京橋區京橋二ノ一一、
五〇錢

國史 四回、國史學會編輯發行、澁谷區若木町九、國學院大學內、六〇錢

國史回顧會紀要 國史回顧會編輯發行、赤坂區青山南町六ノ一五大隈侯爵邸內

四天王寺 月刊、奧田慈應編輯、四天王寺事務局發行、大阪市天王寺區元町、
三〇錢

史苑 四回、立教大學史學會編輯發行、豐島區池袋三、七五錢

史學 四回、三田史學會編輯發行、芝區三田慶應義塾大學文學部研究室內
一圓

史學研究 四回、廣島史學研究会編輯、中文館書店發行、牛込區辨天町一七四
六〇錢

史學雜誌 月刊、史學會編輯、富山房發行、神田區神保町、五五錢

史觀 季刊、早稻田大學文學部岸畑久吉編輯、早稻田大學史學會發行、澁
橋區戸塚町、五〇錢

史蹟名勝天然紀念物 月刊、矢吹活禪編輯、史蹟名勝天然紀念物保存協會發行、麴町
區霞ヶ關三ノ四文部省宗教局保存課內

史潮 四回、大家史學會編輯、刀江書院發行、神田區駿河臺三ノ六、八〇
錢

史 林 四回、京都帝國大學文學部內史學研究會編輯、内外出版印刷株式會社發行、京都市西洞院通七條南入、九〇錢

東方學報 (東京)三回、東方文化學院編輯發行、小石川區大塚町五六ノ一五、二圓五十錢

(京都)年四回、東方文化研究所編輯、内外出版株式會社發行、京都市西洞院通七條南入、二圓

東洋學報 四回、東洋協會學術調查部編輯發行、麴町區內幸町二ノ一、電銀座四〇三九、一圓五〇錢

東洋史研究 六回、京都帝國大學文學部陳列館內東洋史研究會編輯、彙文堂發行
京都市中京區寺町通丸太町南入

鴨台史報 大正大學史學會編輯發行、豐島區西巢鴨四ノ五三〇大正大學史學研究室

立正史學 立正大學考古學研究會發行、品川區東大崎四丁目
龍谷史壇 龍谷大學史學、佛敎史學會編輯發行、京都市七條龍谷大學史學研究室

歷史學研究 月刊、歷史學研究會編輯發行、赤坂區青山北町六ノ四五

歷史 月刊、歷史文化研究會編輯發行、豐島區巢鴨七ノ一六九四

歷史地理 月刊、花見朔己編輯、日本歷史地理學會發行、神田區錦町三ノ二二四五錢

其 他

思想 月刊、和辻哲郎、谷川徹三、林達夫編輯、岩波書店發行、神田一ツ橋二ノ三、五〇錢

文化 月刊、大藏出版株式會社編輯發行、本郷區本郷三丁目、二〇錢

文 月刊、東北帝國大學文科會編輯、岩波書店發行、神田區一ツ橋二ノ三、五〇錢

美術家及美術關係者名簿

凡例

一、本名簿にのせた美術家及美術関係者の数は二二四六名である、わが國において美術家として社會的地位を有する人々を一定の標準に従つて採録した。未だ人選洩れもあるべく不備の點は次年度に補ひたい。

一、建築家は美術的見地から見た建築の設計家のみに限つて採録した。

一、本名簿は電話番号簿の如く、氏名の頭文字の發音により五十音順に記載した。發音の同じ場合は字畫の少いものを先にし、頭文字の同じものは二字目の發音によりその發音の同じ場合は字畫の少いものを先にした。但し同字は訓音の異なるものも可成一箇所に集めた。安宅、安達、安西、安藤等を同一箇所に掲げた如くである。

一、本名簿に用ひた略語は大體左の通りである。

(日)日本畫 (洋)西洋畫 (挿)挿畫 (版)版畫 (漫)漫畫 (彫)彫塑 (工)工藝
(漆)漆工藝 (陶)陶磁 (金)金工藝 (染)染色 (織)織物 (繡)刺繡 (木)木工
藝 (竹)竹工藝 (硝)硝子工藝 (圖)圖案 (建)建築 (學)學者 (文)文藝家

(批)美術批評家 (教)美術教育家 (記)美術記者 (帝院)帝國美術院 (帝院賞)

帝國美術院賞(舊帝展)舊帝國美術院美術展覽會及帝國美術院展覽會(舊文展)舊

文部省美術展覽會(文展)昭和十一年文部省美術展覽會・第一回以降文部省美術

展覽會(藝術院會員)帝國藝術院會員(學士院會員)帝國學士院會員(國寶委

員)國寶保存會委員(重要美術委員)重要美術品等調査委員會委員(史蹟名勝委

員)史蹟名勝天然紀念物調査委員會委員(朝鮮寶物委員)朝鮮總督府寶物古蹟名

勝天然紀念物保存會委員(東美校)東京美術學校(日美校)日本美術學校(女

美校)女子美術學校・女子美術專門學校(東京高工藝校)東京高緯工藝學校(東

京高工校)東京高等工業學校(美術院)日本美術院或は同研究所(美術協會)日

本美術協會(太平洋)太平洋畫會研究所或は太平洋美術學校(川端校)川端畫學

校(水彩畫會)日本水彩畫會或は同研究所(本郷研)本郷繪畫研究所(南畫院)

日本南畫院(葵橋研)葵橋研究所(京都美工校)京都市立美術工藝學校(京都

繪專校)京都市立繪畫專門學校(京都高工藝校)京都高等工藝學校(大阪美校)

大阪美術學校(信濃橋研)信濃橋洋畫研究所(自由畫壇)日本自由畫壇

一、住所中東京市のみは市名を略して區名を以て始めた。

一、舊帝展出品者で特選を得た人々についてはその旨を記したが、その人が無鑑査の

場合には特選のことは略した。

一、文展不参加の團體の作家については文展無鑑査のことは記さなかつた。

「美術家及美術関係者名簿」 ページ (57~112 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the list of Artists and Experts in Art (pp.57-112)

Cut for protection of the personal information

日本美術年鑑 昭和十六年版

昭和十七年三月二十五日印刷
昭和十七年三月三十日發行

定價六圓

著者權所有



著作發行者兼
美術研究所

東京市下谷區上野公園

印刷者
井上源之丞

東京市下谷區二長町一番地

印刷所
凸版印刷株式會社

東京市下谷區二長町一番地

發賣所
岩波書店

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

振替口座東京二六二四〇番